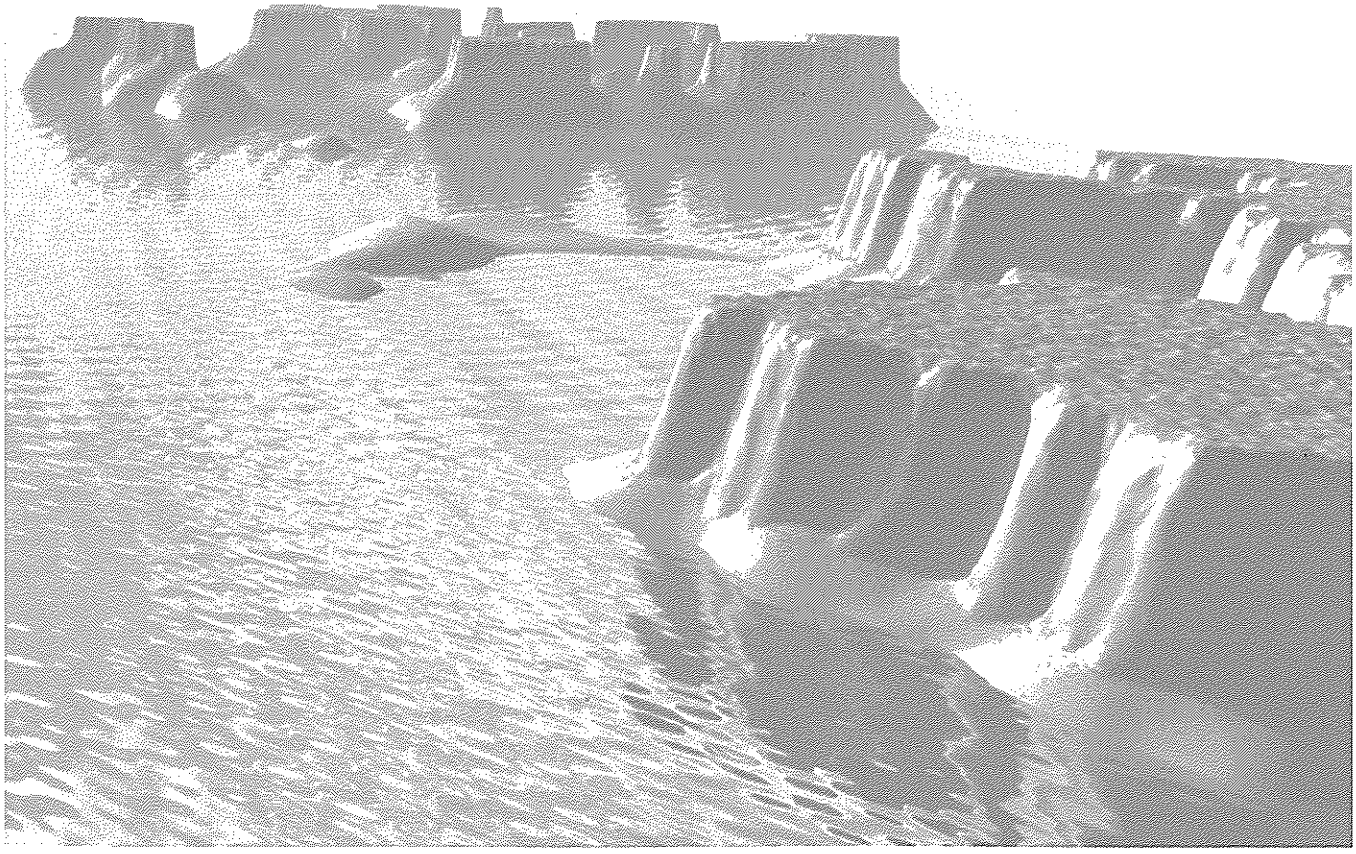
研究紀要 No.31

平成12年6月8・9日
教育研究会要録

豊かな人間の育成をめざす教育の創造

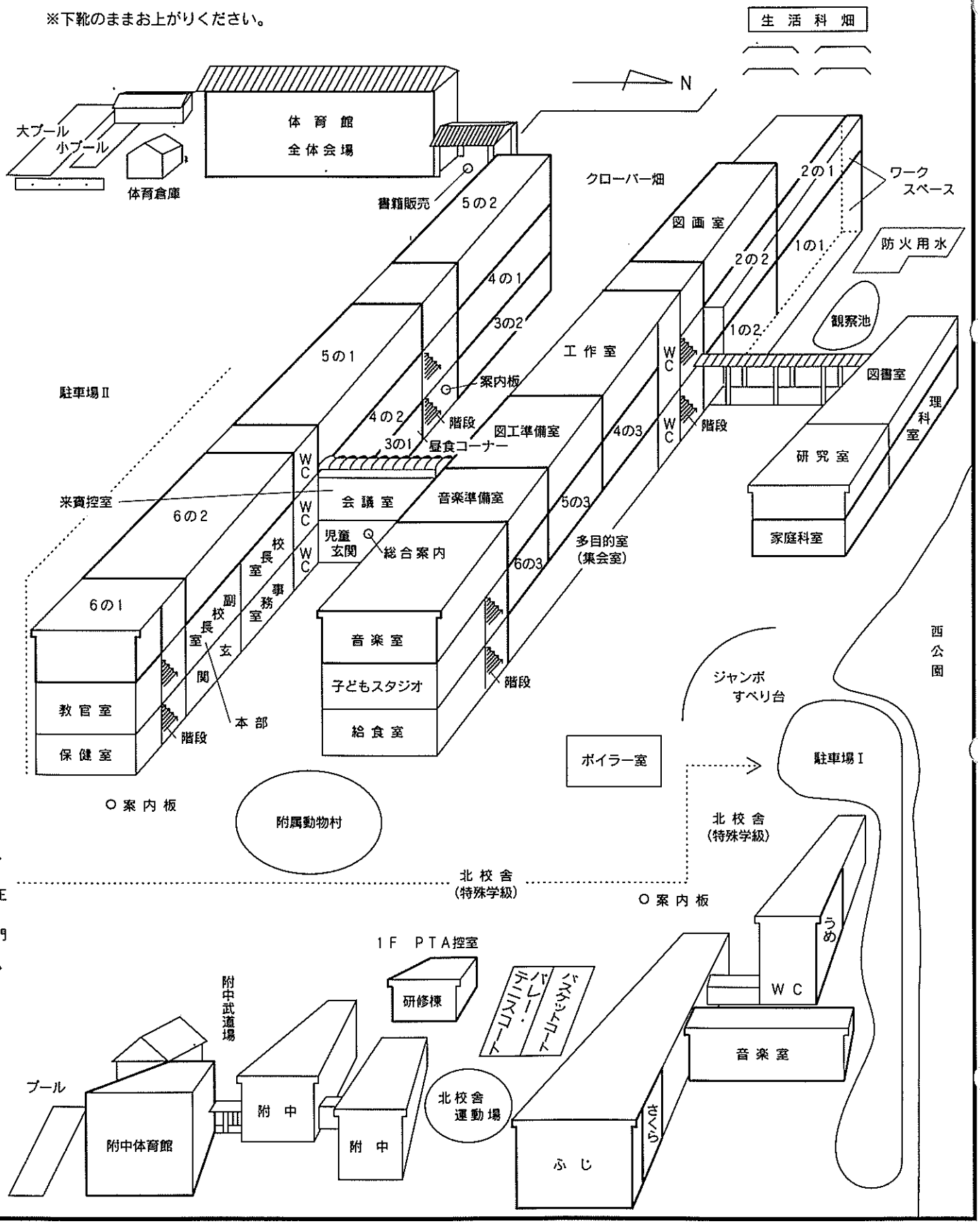
――知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開――



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学　学　長　　蕪　口　治

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の平成１２年度研究発表会の開催にあたりまして，ひとことごあいさつを申し上げます。

本年度の研究発表会は主題を「豊かな人間の育成をめざす教育の創造　－知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開－」と設定し，その研究成果を世に問うものであります。昨年度の副主題「－子供と創る教科・総合的学習の展開－」を発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

現在，各附属学校は，その役割についても，先行研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが何よりも大切なことの一つであると考えております。その取り組みが公立学校と隔たりがあっては，意味をもたないことは言うまでもありません。大学と連携した研究開発はますます必要であり，その成果がこの研究発表会を通してそれぞれの公立学校に還元されるものであることが最も求められています。

本年度の研究発表会では，附属教官による公開授業・大学教官と附属教官による共同授業・教科等の発表・他府県の公立，附属学校の先生方を招いての総合セレクトガーデン・学習指導協議会・全体講演と２日間にわたって，多彩な内容となっております。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず，わが国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。参会された皆様方のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが，ご多忙の中，ご講演をお引き受けくださいました奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また，司会者・指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にもお礼申し上げます。今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に，大学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと願っております。関係する皆様のより一層のご支援をお願い致しまして，ごあいさつと致します。

はじめに

現在，２１世紀を展望した教育改革が，国民的な課題として進められています。新学習指導要領においては，教育内容の厳選や「総合的な学習の時間」の創設などが盛り込まれてきました。

本校でも，これまでに平成６年度から３年間，文部省の研究開発学校の指定を受け，子供たちに「生きる喜びを生み出す」教育課程の創造をめざし，教科の再編，内容の改定を試みて参りました。

この結果，低学年に「表現科」，中学年に「生活環境科」，全学年に領域「人間」を設定して本校独自の教育課程の編成を行い，２１世紀の社会をよりよく生きる自立した子供を育てるべく実践に取り組んで参りました。この成果については，著書「２１世紀の教科・領域への挑戦『新時代の授業を創る』」（明治図書刊）として，現在発刊しているところです。

昨年度はこれらの研究をもとに，人間教育の在り方に目を向け，「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」という主題を掲げて研究に取り組んで参りました。

本年度はさらにこの研究を発展すべく，「知恵と心情を育てる教科・総合の調和的展開」を副主題に設定して，知識や技能のよりよい使い方としての知恵と，人間としての心情を併せて培う学習のあり方の究明に取り組んで参りました。特に，文化性の拡充を担う教科と，生活性の更新を担う総合的な学習とに，共通する学習方法原理を取り入れることで，相互補完的な展開を図っているところです。

また，各教科ごとの著書「学習創造」シリーズも３年目に入り，本年度は，国語科，体育科の２冊を発刊することになりました。

この研究発表がより多くの方々のご指導・ご支援のもとに展開できていることを深く感謝申し上げますとともに，今後も各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成１２年６月

校長　　藏　源一郎

目　　次

ごあいさつ …… 1

はじめに …… 2

目　　次 …… 3

日程と内容　（第１日目） …… 4

日程と内容　（第２日目） …… 6

本校研究のあゆみ …… 8

公開授業及び全体会の部

第１日目

学習指導案（午前） …… 9

全　体　会 …… ２８

学習指導案（午後） …… ３１

総合実践提案部会（総合セレクトガーデン） …… ５０

第２日目

学習指導案（午前） …… ５１

保健部実践提案協議会 …… ７８

学習指導協議会 …… ７９

全　体　会 …… ８０

学習指導案（午後） …… ８３

全体講演 …… １０１

研究紀要の部

研究紀要目次 …… １０４

研究紀要 …… １０６

おわりに …… ２８１

文化を拡充し生活を更新する近未来教育へ向けて

研究主題

豊かな人間の育成をめざす教育の創造
－知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開－

第１日目　６月８日（木）の日程

◇学習指導（９：３０～１０：１５）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年１組	音楽科	１の１音楽の森であそぼう	原　クミ	音楽室
３年１組	国語科	こちら３の１新聞社！	伊藤啓二	３年２組
４年２組	あらつ学習（総合）	長浜ラーメン紀行	高野誠一	家庭科室
５年１組	社会科	空へ！未来へ！伸びゆく福岡空港	猿楽隆司	６年１組
６年１組	あらつ学習（総合）	健康から見直そう！ぼくのわたしの附属小学校	稲津一徳	附属中学校体育館

大学教官との共同学習指導

５年２組	国語科	まんが研究発表会をしよう	松藤秀子・山元悦子助教授	５年２組
6年2･3組	理科	電気のパワーを活用しよう	野口信介・秋永正廣教授	理科室

障害児教育学習指導

さくら組	生活単元	みんなの広場をつくろう　～野菜さん，花さん，鳥さんがいっぱい～	谷崎和一郎	梅組前中庭
梅　組	国語科	コンピュータ絵本をつくろう	早川由洋	北校舎音楽室

◇あいさつ（１０：３０～１０：４５）

福岡教育大学学長　　菰口　治

本校学校長　　藏　源一郎

◇主題発表（１０：５０～１１：１０）

・豊かな人間の育成をめざす教育の創造

－知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開－　　研究主任　小森　晃

◇教科発表（１１：１０～１１：５０）

・豊かな言語活動を営む国語科学習

－言語意識の明確化を図った低学年音声言語活動の展開－　　国語科部　松藤秀子

・音楽とのかかわりを深める音楽科学習

－楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開－　　音楽科部　豊村雅義

◇音楽科学習児童発表（１１：５０～１２：００）

・「博多の唄を歌い継ごう！」

６年児童　　指導者　豊村雅義

◇学習指導（１３：３０～１４：１５）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年２組	学級活動	「なかよし しゅうかい」をつくろう	矢野俊次	1年ワークスペース
２年１組	算数科	雨の日に遊ぶパズルをつくろう（三角形と四角形）	加藤英也	２年１組
２年２組	体育科	２の２ジャンプパークであそぼう	岩城一磨	附属中学校体育館
３年２組	あらつ学習（総合）	博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう	石田耕一	音楽室と音楽広場
４年１組	道徳	おとしよりを大切に思う心（中２－（２），２－（４））	石硯昭雄	４年１組
５年１組	あらつ学習（総合）	発見！博多の心	豊村雅義	子供スタジオ
６年１組	理科	探ろう！生活の中の水よう液	手島宏樹	理科室
3~6年3組	帰国合同国際交流タイム	世界のかけ橋に	篠原裕子	５年２組

障害児教育学習指導

ふじ・さくら・梅組	合同生活単元	みんななかよしパーティーをしよう	舛元俊文・坂田佳美 早川由洋・谷崎和一郎	北校舎音楽室

◇総合実践提案部会　（１４：３０～１６：３０）

ようこそ，総合セレクトガーデンへ
「魅力ある総合的学習はこうしてつくる！」

	中学年総合部会	高学年総合部会
部会テーマ	子供の願いや求めを大切にした 総合的学習のあり方	自己の生き方を考える 総合的学習のあり方
会場	附属福岡中学校体育館	附属福岡小学校体育館
プレゼンター 14:40	○山口大学附属山口小学校 田中敬二	○大阪教育大学附属平野小学校 萩原憲二
15:00	○鹿児島大学附属小学校 池浦也寸志	○佐賀県鹿島市立明倫小学校 脇山英靖
15:20	○本校教諭 手島宏樹	○本校教諭 猿楽隆司
コーディネーター	本校教頭　伊藤啓二	本校教諭　石田耕一
コメンテーター	福岡教育大学 助教授　大坪靖直	福岡教育大学 助教授　堺正之

※各総合部会毎に解散

第２日目　６月９日（金）の日程

◇学習指導　（９：１５～１０：００）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
１年２組	図画工作科	ここはあらついきものランド	北田尚雄	図画室
２年１組	生活科	みんな大好き！福岡市総合図書館～手作り布絵本展示発表会を開こう～	石田耕一	1年ワークスペース
２年２組	国語科	つたえあおう！ぼく・わたしの町じまん	松藤秀子	２年２組
３年１組	社会科	守ろう！福岡名物室見川のしろうお漁	高野誠一	子供スタジオ
３年２組	道徳	生き物の声に耳をかたむけて　（中３－（１））	石硯昭雄	３年２組
４年１組	学級活動	４の１ガーデンをつくろう	矢野俊次	４年１組
4年2･3組	理科	ものの温まり方の違いを探ろう	野口信介	理科室
５年１組	算数科	天気予報を活用しよう	小森晃	５年２組
5年2･3組	体育科	心や体をほぐそう！ぼくのわたしのリラックス運動	稲津一徳	附属中学校体育館
６年１組	家庭科	めん料理をつくろう	篠原裕子	家庭科室
6年2･3組	音楽科	創り出そう！私たちの筑前今様	豊村雅義	音楽室

障害児教育学習指導

さくら組	国語科	ごっこ遊び「いらっしゃい，いらっしゃい」～おみせやさんより～	早川由洋	さくら組
梅組	算数科	ぼくのわたしのせいかつカレンダーをつくろう	坂田佳美	北校舎音楽室

◇保健養護部実践提案部会　（９：１５～１１：００）

・シンポジウム「**子供の心の健康を考える！**」

会場	提案者	司会者	指導助言者	
６年２組	志摩町立志摩中学校 養護教諭　今村由香	本校保健部 森田常子	福岡県立看護専門学校 講師　筑紫咏子	福岡教育大学 教授　照屋博行

◇学習指導協議会　（１０：１０～１１：００）

会場	教科領域等	司会者	指導助言者	
２年２組	国語科	春日市立春日南小学校 教諭　平島健二	八女市立八幡小学校 校長　橋本義徳	福岡教育大学 教授　前田眞證
子供スタジオ	社会科	大川市立宮前小学校 教諭　宮崎隆行	前原市立南風小学校 校長　家宇治正幸	福岡教育大学 助教授　小川亜弥子
５年２組	算数科	柳川市立矢留小学校 教諭　本田透	春日市立春日野小学校 校長　吉富修	福岡教育大学 助教授 飯田慎司 助教授 清水紀宏
理科室	理科	福岡市立博多小学校 教諭　今林康治	志免町立志免南小学校 校長　平石信敏	福岡教育大学 助教授　森藤義孝
１年２組	生活科	大川市立三又小学校 教諭　藤木寿美枝	瀬高町立南小学校 校長　堤直樹	福岡教育大学 助教授　寺岡聖豪
音楽室	音楽科	福岡市立月隈小学校 教諭　津本修一	古賀市立青柳小学校 校長　高橋秀喜	福岡教育大学 教授　岩﨑洋一
附属中学校体育館	体育科	福岡市立松島小学校 教諭　古賀良和	大野城市立大野北小学校 校長　大橋直徳	福岡教育大学 教授　池田修
工作室	図画工作科	福岡市立飯倉小学校 教諭　樺島穣	黒木町立黒木小学校 校長　栗原宏徳	福岡教育大学 教授　吉井宏
１年１組	家庭科	福岡市立舞松原小学校 教諭　脇本孝枝	福岡市立室見小学校 校長　田中光子	福岡教育大学 教授　柳昌子
３年２組	道徳	古賀市立千鳥小学校 教諭　堤一浩	久留米市立荘島小学校 校長　萩尾耕一	福岡教育大学 助教授　堺正之
４年１組	特別活動	粕屋町立粕屋中央小学校 教諭　野中慎治	嶺田町立嶺田小学校 校長　坂田紳一	福岡教育大学 教授　高田清
梅組	障害児教育	那珂川町立安徳小学校 教諭　落合純哉	教育振興部義務教育課障害児教育室 指導主事　谷口慎二	福岡教育大学 教授　鼻地勝人

◇あいさつ （１１：１０～１１：２０）

初等教育研究部委員長　　岩崎洋一

学　　校　　長　　藏　源一郎

◇主題発表 （１１：２０～１１：４０）

・豊かな人間の育成をめざす教育の創造

－知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開－　　研究副主任　　吉田正樹

◇教科発表（１１：４０～１２：００）

・共生社会を創る子供が育つ社会科学習

－郷土における社会的ジレンマ学習の展開－　　社会科部　　髙野誠一

◇障害児教育発表［平成１０・１１年度文部省指定 特殊教育教育課程研究］（１２：００～１２：２０）

・豊かな生活をめざす教育課程の編成

－指導の重点化を図った個別の指導計画作成を通して－　　障害児教育研究部　　坂田佳美

◇学習指導（１３：３０～１４：１５）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
3年1･3組	理科	集めて、くらべて、まとめよう！西公園もみじ谷植物図鑑	杉原賢太郎	西公園
３年２組	算数科	調べたことから生活を見直そう	野田真功	３年２組
４年１組	あらつ学習（総合）	ぼくは、わたしはあらつっ子	手島宏樹	子供ｽﾀｼﾞｵ
４年２組	算数科	読書調査をしよう	加藤英也	４年１組
５年２組	あらつ学習（総合）	探検！発見！ほっとけん！ぼくらの食のふるさと	猿楽隆司	6年1･2組
６年２組	あらつ学習（総合）	福岡小発！　「附属学校こだわり大全」!!	吉田正樹	ﾊﾟｿｺﾝ室

通常の学級と障害児学級の交流学習指導

１年１組 ふじ組	体育科	ネットスルードッジボールをしよう	岩城一磨 舛元俊文	附属中学校体育館

◇あらつ学習（総合）児童発表（１４：３０～１４：４５）

・こだわり発進！あらつ学習!!

６年児童　　指導者　　吉田正樹

◇全体講演（１５：００～１６：２０）

・演題　教科・総合の調和的展開「カリキュラムデザイン新世紀へ」

講師　国立教育研究所　主任研究官　**奈須正裕** 先生

◇あいさつ（１６：２０～１６：３０）

本校副校長　　久門　隆

本校研究のあゆみ

年度	
23	○学習効果判定の理論と実際
24	○カリキュラムの構成と実際
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導上の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察 －考えさせるために経験をどのように位置づけるか－
38	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －考える力を伸ばす学習過程の構造化－
39	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －学習過程における「くらべ活動」の検討とその指導－
40	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －学習の「かまえ」を育てる指導法の究明－
41	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －考える力を伸ばす学習過程の評価－ 「授業における思考訓練」（明治図書）
42	○教材の本質に立脚した学習指導法の考察 －教材の価値と指導内容の検討－ 「思考を伸ばす学習過程の評価」（明治図書）
44	○現代化をめざす指導法の究明 －教材の現代的価値と児童の実態と反応にもとづく指導内容の検討－
45	○現代化をめざす指導法の究明 －基本的内容にせまらせる学習の開発－
46	○現代化をめざす指導法の究明 －ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ－
47	○現代化をめざす指導法の究明 －学習の連帯化をはかる指導のしくみ－
48	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯性を育てる学習指導のしくみ－
49	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ－ 「学習を連帯化する指導法」（明治図書）
50	○現代化をめざす指導法の究明 －学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ－
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習の構造化－
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習指導の展開－
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －交流でよりよい操作を身につける学習指導－ 「自由活動の時間」（秀巧社）
54	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －教材の価値にせまらせる操作学習の評価－
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 －見直し活動を生かした操作学習の深化－
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －自己を見直し、考えを深める指導のしくみ－
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －自ら見直し活動に取り組み、自己を深める指導のしくみ－ 「学ぶ喜びを生みだす指導」（北大路書房）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －個が生きる課題づくり－
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 －学習実態の多様性に即応する学習指導－
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －子どもの個性が生きる指導－
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす指導法の開発－ （明治図書）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす学習過程－
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす授業の改造－ 「『学習の個性化』をめざす授業の開発」 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 （明治図書）
平成元年	○個が生きる授業の創造 －自己理解の学習過程－
2	○個が生きる授業の創造 －考えを確かにする活動構成－
3	○個が生きる授業の創造 －考えを深める自己吟味活動を通して－ 「個が生きる授業の創造」（北大路書房）
4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思い・願いをもって問い続ける活動づくり－
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開－
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －自分のよさを実感する表現活動の展開－
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －新しい教育課程における教科領域の学習の具体化－
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －子供主体の活動からみる教育課程の編成－
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －子供主体の活動からみる教育課程の編成－ 21世紀の教科・領域への挑戦「新時代の授業をつくる」 （明治図書）
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 －活動や体験を基盤にした学習の総合化－
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 －子供と創る教科・総合的学習の展開－
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 －知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開－

公開授業及び全体会の部

第１日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年１組　音楽科学習指導案

指導者　　原　　クミ

題　　材　　１の１音楽の森であそぼう（教材「朝のリズム」「森であそぼう」「あした天気になあれ」）

指　導　観

○　本題材は，音楽に合わせて楽しく遊ぶ身体表現や歌唱表現により，拍の流れやフレーズを感じ取り，自分の音楽の楽しみ方をつくり出すことをねらいとしている。「１の１音楽の森」は，「朝の様子」「森で遊ぶ」「森とお別れ」の３つの場面で構成されており，その中で，それぞれが音楽に対して感じたことを，身体表現や歌唱表現しながら動物になって，楽しく遊ぶ空想の世界をあらわしている、。本題材には，次のような内容がある。①音楽の森の教材について範唱を聴いて，歌うこと，②拍の流れやフレーズ及びリズムを感じ取って音楽の森で楽しく身体表現や歌唱表現すること，③お互いの表現の高まりを認め合い，音楽活動の楽しさを味わうことなどである。

○　本学級の子供たちは，これまでに遊び歌を用いた身体表現や歌唱表現，リズム遊びを経験してきている。その中で，拍を捉えて歌唱することや，４分音符と８分音符を交えた簡単なリズムうちができるようになってきている。また，友達の歌に合わせて手拍子をしたり，一緒に歌ったりなど音楽活動の楽しさを味わうことができるようになってきている。このような時期に，音楽に合わせて友だちと楽しく身体表現していく活動を展開させることは，拍の流れやフレーズ，リズムを感じ取ることができるようになるとともに，音楽活動そのものの楽しさや喜びを追究・感得する資質や能力の素地を養い，音楽とのかかわりを深めていく上で，意義深いと考える。

○　本題材の指導にあたっては，「音楽の森であそぼう」というめあてのもとに，身体表現や歌唱表現をし，友達と一緒に音楽の森で遊ぶ活動を通して，音楽活動の楽しさを味わわせていきたい。教材曲は，４分音符と８分音符が中心に構成されており，拍を感じ取ることが容易にできるものを用いている。であう段階では，３つの教材曲と「音楽の森」のストーリーに出合わせ，拡大歌詞や情景画の提示により，森の様子を豊かに想像させることで，表現への意欲と見通しをもたせる。ふかめる段階では，オリジナル曲の活用と拍に合わせたり，フレーズを感じ取ったりさせていくために，森の様子が想像できる情景画の提示や場の設定，森の動物になって，楽しく活動する遊び歌を用いた曲の構成，望ましい子供の姿を取りだしたモデル提示や交流などを行っていく。あじわう段階では，発表会を開いて，みんなで音楽活動をすることの快さを味わわせていく。

目　　標

１．音楽の森で楽しく遊ぶ活動を通して，拍の流れやフレーズを感じ取って身体表現したり歌唱表現したりすることができる。

２．友だちと音楽の森で楽しく身体表現したり歌唱表現したりすることで，友だちとともに音楽活動をすることの快さを味わうことができる。

計　　画（約６時間）

段階	で　あ　う（2時間）	ふ　か　め　る（3時間）	あじわう（1時間）
活動と内容	１．教材曲と「音楽の森であそぼう」のストーリーに出合い，題材全体のめあてをつかむ。 ○　楽曲の気分の感受 ○　これからの活動への意欲と見通し	２．ストーリーにそって，拍の流れやフレーズを感じ取り，音楽の森で楽し　く遊ぶ。 (1)　「朝のリズム」を手拍子や足踏みを用いて遊ぶ。① (2)　「森であそぼう」の表現の工夫をする。（本時）　① (3)　「あした天気になあれ」の表現の工夫をして，ストーリーの全体を仕上げる。　① ○　拍の流れやフレーズを感じ取って身体表現や歌唱表現をすること ○　拍を感じている友達の表現に気づくこと	３．「音楽の森」発表会を開いて，楽しかったことや，やってよかったと思うことを発表し合う。 ○　活動に対する満足感を味わうこと
手だて	※　拡大歌詞や情景画の提示	※　拍の流れやフレーズを感じ取るオリジナル曲の活用 ※　互いの表現のよさを認め合う交流とモデル提示 ※　森の様子を想像できる場の設定	※　発表会の場の設定と肯定的評価の活用

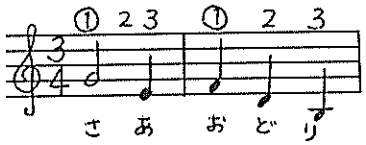
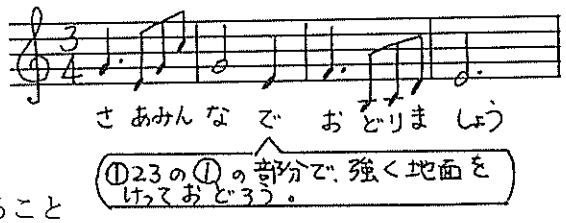
本時の目標

(1) 「森であそぼう」の拍の流れやリズムを感じ取って遊び歌で遊んだり，身体表現や歌唱表現をしたりして音楽活動の楽しさを味わうことができる。

(2) それぞれの動物にあった歌唱表現や身体表現を工夫することができる。

準　　備　拡大絵譜，いいところ発見カード，場の構成のための情景画や木　動物のお面

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．「朝のリズム」を身体表現しながら歌い，本時学習のめあてをつかむ。 ○　前時学習で，楽しく活動できたことを想起すること ○「森であそぼう」の表現を工夫しようとする意欲 ※　前時の学習活動で音楽に合わせて表現する楽しさを味わったことを学習の流れ図やいいところ発見カードで想起させる。 めあて おんがくのもりで　たのしく　あそぼう 2．「森であそぼう」において，拍やリズムを感じ取って身体表現を工夫する。 (1) 仲良くなりたい動物になって「森であそぼう」で遊ぶ。 ○　拍の流れやリズムを感じ取りながら，身体表現すること ※　ストーリーを提示すると共に，子供たちの身体表現と拡大絵譜上の拍の流れを照らし合わせる。 (2) 音楽に合わせて，楽しく遊ぶための表現の工夫をする。 ○　表現を工夫する楽しさを感受すること ※　拍やリズムを感じ取って表現している子供の表現をモデル提示し，足の動きや手の動きに着目させ，その動きが拡大絵譜上の拍と一致していることを提示する。 (3) 自分が仲良くなりたい動物になりきり，拍の流れやリズムを感じ取って，表現を工夫する。 ○　拍の流れやリズムを感じ取って，身体表現すること  3．拍の流れやリズムに合わせて身体表現していた友達の表現を認め合い，次時の学習について聞く。 ○　本時学習の活動に対する満足感と次時への意欲をもつこと ※　友だちのよさを見つけたことや楽しく活動できたことについて賞賛する。	○　「朝のリズム」では，手拍子や足踏みをして，楽しかったな。それに，ちゃんと音楽に合わせることができて，よかったよ。 ○　この前の時間は，□□さんが，音楽に合わせて楽しそうに遊んでいたよ。 ○　今日は，森であそぼうをやっていくんだな。みんながどんな動きをするのか楽しみだなあ。 ○　音楽に合わせて楽しく遊ぶには，身体の動きを工夫したり，歌い方を工夫したりすればいいんだな。□□さんは，小鳥さんだから，歩くとき，飛び跳ねた感じになっているんだな。 ○　私は，うさぎになるから歩く部分では，ぴょんと跳んで前に進む感じで歌うようにするよ。 ○　「森であそぼう」の中には，「けんけんぱ」がはいっていたね。小鳥の□□ちゃんと一緒にけんけんぱををしよう。 ○　□□さんが，けんけんぱをするときに，音楽に合っていたよ。 ○　□□ちゃんと一緒に音楽に合わせて楽しく遊べてよかったね。

第３学年１組　国語科学習指導案

指導者　　伊　藤　啓　二

単　　元　　こちら３の１新聞社

指　導　観

○　本単元は，学級の様々な情報を身近な人に学級新聞として情報発信していくための総合的な言語能力（知恵）と，新聞を生活や学習に生かそうとする思い（向上的心情）を育てることをねらいとしている。具体的には，①新聞記事に興味をもってかかわり，伝えたい内容を正確に読み取るとともに，新聞記事の特徴となる叙述の仕方を感じ取ること，②伝えたい事柄に関連した情報を，相手の話の中から聞き取り，話の要点や相手の感じたことと自分の感想を分けてまとめること，③伝えたい事柄に対して，必要な情報を選び，見出しや書きたいことに合わせて段落をつくり，新聞記事形式に再構成することが内容である。

○　本学級の子供たちは，日常生活の中で新聞を活用し，情報としての新聞の価値を感じている。しかし，その活用の状況は，表や図，写真による情報が多く，新聞情報の一部分に過ぎない。そこで，もっと文字情報を読み，新聞を活用する楽しさやよさを味わわせていきたい。また，子供たちは，家族や学校の友達に対して，自分たちの学級生活の中での楽しさや驚きなどを伝えたいという気持ちをもっているが，話す機会も少なく，十分に伝えられていない。そこで，身の回りの出来事や学習の様子などを学級新聞形式で伝えていけば，自分たちの様子や考えなどの情報を発信することができるという経験を，本単元を通して感じさせていきたい。

○　本単元の指導にあたっては，新聞記者の目になって学級での生活を見つめ，伝えたい事柄の吟味や学級新聞作成という総合的な言語活動が意欲的に展開できるように構成していきたい。そのためには，目的把握の段階で，学級での出来事や学習の様子などを，家族や友達に伝える価値に気づき，学級新聞発行への意欲をもてるようにしたい。情報収集・創造の段階では，日常の新聞や子供新聞，ＰＴＡ新聞等を読んで記事の内容や叙述形式などを吟味する活動，学級新聞に載せる事柄やその内容を吟味する活動，試しの記事作成の活動を子供の求めに応じて仕組むようにしたい。その際，実際に新聞作成に携わっている人からの情報収集や評価などを位置づけるようにする。情報発信の段階では，学級や他学年の友達などに新聞を出し，その評価をもとに今後の継続や新聞内容の発展を計画し，子供自身が生活の中で役立てていけるように方向づけをしていきたい。

目　　標

１．学級新聞の働きや価値を理解し，身近な人々に学級の様々な情報を伝えるための言語活動に意欲的に取り組み，生活や学習の中に新聞を生かそうとする態度を養う。

２．伝えたい事柄に関連した情報を取捨選択し，伝えたいことの中心が明確になるように段落を意識して学級新聞の記事を書くことができる。

計　　画（約９時間）

階	目的把握（２時間）	情報収集・創造　（４時間）	情報発信（３時間）
活動と内容	１．新聞の働きと生活とのつながりを考え，学級新聞作りの計画を立てる。 ○　生活の中での新聞の働きと価値の理解 ○　学級新聞作成の目的意識の明確化と計画立案	２．学級新聞にして発信したい事柄について情報を収集し，書き方を話し合いながら新聞を作る。　（本時３／４） (1) 新聞にしたい事柄を選び，必要な情報を収集する。② ○　伝えたい事柄の中心とそれを支える情報の選択・整理 (2) 叙述の仕方を話し合い，試しの新聞記事を作る。　② ○　新聞の特徴を生かした記事の作成と吟味 ※　(1)と(2)の活動は，子供の意識の流れに応じて変更する。	３．学級新聞を作成し，家庭や友達に配布する。　② ○　伝えたいことの中心が明確な記事の作成 ４．今後の学級新聞作成のための計画を立てる。　① ○　新聞の生活への活用
手だて	※　生活の中にある新聞（日常の新聞，ＰＴＡ新聞など）の提示	※　書き方のヒントとなる新聞記事 ※　伝えたい事柄を思い出す映像資料や調査資料 ※　新聞記事の書き方について相談できるＧＴの招聘	※　家庭や縦割班の友達への配布と評価アンケートの活用 ※　今後の計画に対する話し合い

本時の目標

○　記事として伝えたい事柄に合わせて，目的にあった叙述の仕方を工夫したり，書く必要のある情報収集を充実させたり，中心や段落の関係を考えて記者カードから記事へと構成を工夫したりして個々に活動を進めることができる。

準　　備　児童：記者カード，取材資料　　教師：記事比較資料，映像資料，学習ノート

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　　動　　と　　内　　容</th><th>子供の思考の流れ</th></tr>
<tr><td colspan="2">1．学級新聞の記事として取り上げていきたい事柄を確認し，本時の活動予定をもとにめあてを立てる。
○　活動計画をもとにした本時めあての設定
めあてA
新聞記事から書き方のくふうを読み取って自分の記事に生かそう。
めあてB
記事にしたいことにあわせて学級のみんなからじょうほうを集めよう。
めあてC
記者カードを記事にする順番にならべて，ためしの記事を作ってみよう。
※　活動のめあては，個々の活動予定に従って本時どのように進めていくか選択できるようにしておく。
2．めあてに合わせて活動場所を選択し，ＧＴのアドバイスなどを受けながら情報収集や情報整理，試しの叙述などの活動を個々に行う。</td><td>○　記者カードを書くことができているので，今日は試しの記事を書く予定だ。
○　新聞記者の方から，記者カードをどうやって記事にしていくか聞いて，自分の記事に生かしていこう。</td></tr>
<tr><td>(1) いくつかの新聞記事を比べた資料を読み，記事の書き方が似ている点を探す。
○　記事の中心となる事柄の読み取り
○　見出しの特徴や見たことと聞いたことの書きぶりの違いなど表現の吟味
(2) 読みとったことをもとにして，自分の伝えたい事柄に合った見出しを考えたり，記事カードの表現を書き換えたりする。
○　伝えたい事柄の中心の取り出しと適切な表現の吟味
※　資料コーナーを準備して活用の状況に合わせて支援を加えていく。</td><td>(1) 学級新聞の記事にしたいことに合わせて，映像資料や友達への聞き取りなどから必要な情報を収集する。
○　映像資料から伝える必要のある事柄の取り出し
○　伝えたいことの中心にあったインタビューによる情報の取り出し
(2) 取材した情報の中から必要なものを選択して，記者カードにまとめる。
○　伝えたい事柄に合った情報の選択・整理
○　情報を簡単な文章にしてカードに表現すること
※　映像資料コーナーを設置し，自由に振り返りながら活動できるようにする。</td><td>(1) 新聞記者の方から取材したことを記事にするまでのレクチャーを受ける。
○　ＧＴの話から記事構成の観点を聞き取ること
○　伝えたいことの中心となる事柄の取り出し
(2) レクチャーしてもらったことをもとにして，記者カードを見直し，記事の順番に並べ替えて試しの記事を作る。
○　中心の明確化と段落相互の関係の把握
○　カードをもとにした適切な表現での叙述
※　ＧＴ（新聞作成に携わっている人）から構成にあたっての留意点を話していただく場を設定しておく。</td></tr>
<tr><td colspan="2">3．めあてに応じて，活動してきたことの報告をしあい，次の時間の自分の活動の予定を立てる。
○　活動の成果の自己評価と他者の活動状況の把握
○　次時の活動の見通しの設定
※　お互いの報告をもとに次時の計画を立てるように促す。</td><td>○　記事の構成は，中心をはっきりさせてつなげることができた。でも，もっと調べたいこともでてきたので，次はめあてＢだな。</td></tr>
</table>

第４学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　髙　野　誠　一

単　　元　　長浜ラーメン紀行～長浜ラーメンフェスタをひらこう～

単元の構想

○　本学級の子供たちは，第３学年の社会科において，辛子明太子や室見川のしろうお漁など地域の産業の固有性をとらえ，郷土への誇りやそれを守ろうとする向上的心情を感じている。また，あらつ学習「西公園こだわり調べ隊」において，西公園の自然や伝統などへの愛着を感じる調和的心情も育ちつつある。本単元で取り上げる長浜ラーメンについては，家の近くや長浜のラーメン店で食べた経験をすべての子供がもち，大好きな料理の一つとして挙げている。この身近な地域の名物から，人々の生き方や伝統を大切にしようとする向上的心情，そのよさに愛着を感じる調和的心情を育み，長浜ラーメンがある福博の歴史を受け継ぐ知恵を身に付けることができると考える。

○　本単元は，長浜ラーメンとの出合いから長浜ラーメンについて追究したい課題を設定し，追究することを通して，長浜や博多という地域とラーメンとの関係に気付き，郷土を大切にしようとする知恵や心情を育む総合的な学習である。本単元では，追究対象によって，①「長浜ラーメンづくりの秘密」で，ラーメンづくりに携わる人々の固有性に努力する生き方など，②「全国ラーメン研究」で，全国各地の特色や日本人に共通するラーメンへの趣向など，③「長浜ラーメンの起源」で，中国との交流や博多の歴史など，④「長浜ラーメンの人気」で，全国に誇る長浜ラーメンの特色などといった学習内容を自分のこだわりで追究し，生み出すことができると考える。

○　本単元の展開においては，長浜ラーメンから出発した課題を追究し，長浜ラーメンフェスタ in 附属小を開催することを通して，郷土への誇りや愛着を育てたい。そこで，まず導入においては，長浜ラーメンの食べ歩きなどを通して追究の方向性にこだわりをもち，ラーメンフェスタ久留米を知り，自分たちのフェスタ開催の見通しをもたせる。こだわり別の追究においては，自分の課題について調べたり，体験したりしながら，長浜ラーメンの歴史や携わる人々の生き方，長浜という地域の特色などを感じ取らせたい。最後に，長浜ラーメンフェスタでは，調べ活動でお世話になった方や発表会参会者を招き，調べたラーメンについて展示・試食したり，課題について発表したりして，『長浜ラーメンフェスタ』を開く。

目　　標

１．長浜ラーメンから出発した課題を調べ，長浜や博多の歴史やラーメンづくりにかけてきた人々の生き方，外国との交流の歴史などをとらえ，長浜や博多のよさを受け継ごうとすることができる。

２．長浜にラーメンという全国に誇る料理があることを実感し，長浜や博多といった地域をこれからも大切にしていこうと愛着をもつことができる。

計　　画（約１７時間）

	生活吟味 ----→	自己追究・内容創造 ----→	生活更新 ----→
予想される活動と内容	１．長浜ラーメンを食べ歩き，追究課題をつくる。 (1) 長浜ラーメンを食べ歩いたり，マップにまとめたりする③ ○　長浜ラーメンとの感動的出合い (2) ラーメンフェスタ久留米を調べる　② ○　追究課題の設定 長浜ラーメンフェスタをひらこう	２．自分の課題で長浜ラーメンについて調べる。 (1) 自分の課題について調べる。　④ ○　長浜ラーメンの歴史やつくり方，全国の特色などの追究 予想される課題別グループ ・歴史　・全国　・美味店　・作り方など (2) フェスタ実行委員会を開く　① ○　相互交流でのよさ・方法の見直し (3) よさを見直す視点からの再取材　③ ○　長浜ラーメンのよさについての把握 (4) 調べたことを表現物にまとめる。　② ○　追究のまとめについての自分が得意な表現の発揮	３．調べ活動にかかわっていただいた方を招き，「長浜ラーメンフェスタ」を開く。本時 1/2　② ○　長浜ラーメンにかかわる人々の生き方や博多の歴史，全国の特色や日本人とラーメンのつながりなどに気づき受け継ごうとする応え ○　長浜ラーメンや博多への愛着を感じ，大切にしようとする心情の高まり
手だて	※　食べ歩きの活動 ※　研究会の原さん ※　フェスタテーマ	※　各種の図書資料，インターネット ※　見学場所の支援　※　まとめ方の例示 ※　それぞれの課題に応じたゲストの招聘	※　報告する相手としてのゲストの招聘 ※　交流できる場の設定

本時の目標

1．長浜ラーメンフェスタを開く活動を通して，ラーメンに携わる人々の生き方や長浜・博多の歴史外国との交流などに気づき，長浜や博多のよさを受け継ごうとすることができる。

2．地域に長浜ラーメンという自慢があることを実感し，長浜や博多という身近な地域に対する愛着をもつことができる。

準　　備

大型テント，移動黒板，ラーメン屋台，長浜ラーメン，全国のラーメン，長浜ラーメンマップ

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．開会宣言をする。 ○　長浜ラーメンのよさを表現するめあての確認 めあて 自分が感じた長浜ラーメンのよさを伝える『長浜ラーメンフェスタ』をひらこう。 2．長浜ラーメンフェスタを開催する。 ○　自分が決めて，調べてきた課題についてお世話になったゲストの方や参会者の先生方に伝えること ○　歴史や生き方への気づきと長浜や博多への愛着 ※　あらつ学習ガイドを活用させ，内容と追究過程を発表させる。	○　長浜ラーメンについて自分たちが調べてきたことを発表して，自慢の秘密を伝えよう。 ○　遠くから来ている人にも，本場，元祖の長浜ラーメンについて知ってもらいたいな。 ○　ぼくは，長浜ラーメンがおいしいのは，作り方に秘密があると思ったので，つくり方をずっと見せてもらうようにした。 ○　私は，博多ラーメンと長浜ラーメンは，どうちがうのか調べていった。 ○　長浜ラーメンを食べに来るたくさんの人に人気の秘密をインタビューして調べたよ。 ○　長浜ラーメンには，長浜や博多という場所と関係がある歴史があることがわかった。 ○　みんな長浜ラーメンが好きだし，何か自分のこだわりがあることがわかった。 ○　日本人みんながラーメンを大好きなようでそれぞれに大好きな味があります。 ○　身近な長浜や博多のよさを感じた。

【全体での活動構成】

長浜ラーメンフェスタ in 附属小
プログラム
1　開会宣言
2　お客様の言葉
　九州ラーメン研究会
　長浜ラーメン代表
　久留米ラーメン代表
3　各発表ブースのPRタイム
4　各ブースでの発表
5　お客様から
6　閉会宣言

【場と追究課題別活動構成】

【課題別の予想される活動】

長浜ラーメンの作り方	長浜ラーメンの歴史	長浜ラーメンの人気のひみつ	全国ラーメン調べ
・道具や材料の展示やレシピの公開 ・作り方の説明	・研究会やラーメン店の方からの情報 ・紙芝居での説明	・客や店などでのインタビュー ・統計的な処理での発表	・福岡にある全国的なラーメンの店 ・特色の説明
それぞれの店で味を追究し，特別な工夫が長浜ラーメンを支えているのです。	古くは中国，アイヌ地方などとの関係や久留米，博多などとの交流によって生まれたのです。	全国でも有名な長浜や博多ラーメンのふるさとに生活していて，とても自慢に感じました。	地方によって特色があるのは，その地域の歴史や人々の願いと関係があるのです。

3．これまでお世話になった方からの話を聞く。

○　九州ラーメン研究会の方や長浜ラーメン店の方などの話によるラーメンと日本人との関係や長浜・博多のよさの再確認

ラーメンには日本人を熱中させる魅力があります。

第５学年１組　社会科学習指導案

指導者　　猿　樂　隆　司

小　単　元　　空へ！未来へ！伸びゆく福岡空港

指　導　観

○　本小単元のねらいは，IC 産業と航空輸送の関係をとらえながら，航空輸送のあり方を多面的に考えたり，航空輸送と自分との生活の関係を見直したりできるようにすることである。なお，この小単元は「暮らしを支える工業製品」，「産業の米！ IC 産業」の後に位置付く。具体的には次の内容がある。①福岡空港における航空輸送が伸びた背景には，貨物の受託から搬出という仕組みや交通網の整備に伴い，半導体製品のアジア諸国への企業輸出が容易になったこと，②２１世紀における航空需要の超過の問題をとらえ，問題の解決に向かい空港事業に携わる人々の対策を調べ，国際協調や環境保護の面から望ましい対応策を考えること，③福岡空港の貨物需要の超過という問題の解決に当事者意識をもって進んでかかわり，これらの解決において諸外国との調和的な関係や環境への一層の配慮をもつことが大切と感じること。

○　本学級の子供たちは，学習対象となる福岡空港については，空港の面積や仕組み，飛行機の機種や構造及び費用，利用者数，発着数，国内外の路線，空港の歴史，輸出入の関係や航空事業にかかわる人々の願いや悩みなど興味・関心は多岐にわたり，潜在的な事象へのかかわりの求めは高い。また，知恵に関する内容については，追究対象を選択し，情報収集力や観察・調査力，表現力などを駆使して課題解決に向かうことができるようになってきている。心情にかかわる内容については，人々の願いと自分の願いを重ねあわせ，地域の環境をよりよくしようという向上的な心情や地域とかかわっていきたいという調和的な心情をもちつつある。

○　本小単元の指導に当たっては，望ましい我が国の航空輸送のあり方を当事者意識をもって多面的に考える力を養いたい。「つかむ」段階では，福岡空港の写真や利用体験をもとに，観察・調査の視点をつくり，空港の利用状況や施設の様子を観察・調査させる。次に，離発着数の限界を示すグラフを提示し，生活に及ぼす影響を調べさせ，追究課題をつくらせる。「つくる」段階では，需要超過に伴う空港の努力を調査させ，需要超過に伴い，高速脱出誘導路の建設や新福岡空港の建設などの対策があることをとらえさせる。次に，需要超過に伴う主な対策の是非を必要性，実現性，有効性の面から検討する。「生かす」段階では，環境保護の面やアジアとの協調を基盤とした具体案の吟味をさせる。そして，航空輸送のよさや今後の空港のあり方を広める発表会を行わせ，航空輸送と自分の生活の関係を振り返らせ，将来にわたっての航空輸送へのかかわり方を自覚させる。

目　　標

１．福岡空港における航空輸送が伸びた背景には，輸出入の蔵置場の整備があることをとらえ，需要超過に伴う福岡空港の問題の解決に対して，望ましいあり方を考えることができる。

２．これらの需要超過に伴う航空輸送における問題の解決において進んで考えようとするとともに，諸外国との調和的な関係や環境への一層の配慮を大切にする心情をもつことができる。

計　　画（約１６時間）

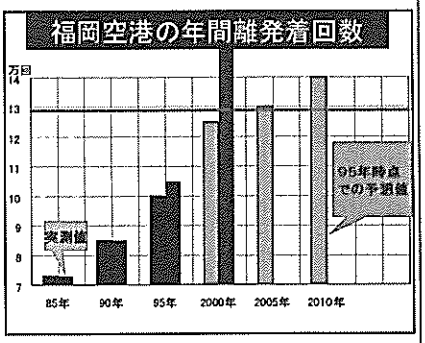
段階	つ　か　む（７時間）	つ　く　る（６時間）	生　か　す（３時間）
活動と内容	１．航空輸送と生活とのかかわりを調べ，追究課題を話し合う。 (1) 航空輸送と自分の生活とのかかわりを調べたり，施設を観察・調査したりする。　⑤ ○　輸出入の仕組みや航空輸送と生活や産業との関係の把握 (2) 離発着数の限界が生活に及ぼす影響を調べ，追究課題について話し合う。　(本時2/2)② ○　離発着数の限界が生活へ及ぼす影響の把握と危機感の感受	２．これからの航空輸送のあり方を調べ，話し合う。 (1) 需要超過に伴う空港当局の対策を調査する。　③ ○　輸送手段の連携，誘導路建設や新空港建設の対策の把握 (2) 対策を対応策Ｉとして書き表し，アジアの玄関口としての機能を生かした対策を話し合う。③ ○　アジアの玄関口を生かした対策や新空港建設の立証 ○　新東京や関西などの事例調査	３．これからの航空輸送のあり方やかかわり方をまとめる。 (1) 航空輸送と自分の生活の関係を振り返り，これからの将来にわたっての航空輸送とのかかわり方を考え，シンポジウムを行う。　③ ○　福岡空港の機能の充実発展や環境保護の面やアジアとの関係を基盤とした吟味 ○　航空輸送にかかわる喜びの感受
主な手だて	※　貨物輸送の割合や伸びを示すグラフ提示 ※　空港の観察・調査の位置づけ ※　離発着数の限界を示すグラフ ※　生活への影響の調査	※　空港当局の対策の調査 ※　空港当局の榊さんらを招いたリサーチ活動 ※　新東京国際空港や関西国際空港など他地域の事例調査	※　航空輸送を振り返る活動の位置づけ ※　当事者を招き，肯定的な評価を得るシンポジウムの場の構成

本時の目標

○　離陸回数が福岡空港の限界の１３万回に近づいていることを示すグラフの読みとりを通して，これからの福岡空港における航空輸送のあり方を探る追究課題をもつことができる。

準　　備　乗降客数や貨物取扱量を示すグラフ，離着陸回数が容量の限界に近づいているグラフ

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　離発着の限界値を示す状況が生活や産業へ及ぼす影響を吟味すること ※　昨年限界値を超えた事実提示や２分 33 秒に１回の離着陸数は，日本一という資料提示と新聞記事をもとにめあてを確かめさせる。 めあて 福岡空港の離発着数の限界は，生活にどのような影響を与えるかを話し合おう。	
２．福岡空港の離発着数の限界を示す資料から，生活への影響を調べ，考えたことを話し合う。 (1) 福岡空港の離着陸回数が容量の限界に近づいているグラフをもとに，旅客や貨物に及ぼす影響を出し合う。 ○　航空機能の限界による問題状況の危機感から，運行時間の遅れや輸送経路の変更などの事実を取り出すこと	○　交通網の整備や輸送システムとしての役割が強まって，乗降客や貨物量が伸びてきたけど，これから限界になるとどんな影響があるのかな。
＜旅客面＞ ・　国内の地方路線の廃止 ・　国内新規路線の開設が困難 ・　運行時間（離発着）の遅れ ←限界値→ ＜貨物面＞ ・　アジアの窓口としての機能の低下 ・　運行の遅れに伴う品目や経路変更 ・　収益が低下する企業の増大	
(2) 資料で調べたり，聞き取った事実をもとに，空港の容量の限界に伴う生活への影響を話し合う。 ○　問題状況が及ぼす貨物や旅客への影響とそれらが与える生活への関係をとらえること ・　国内外の飛行機の予約が取れなくなること ・　地方路線廃止による目的地運行が困難になること ・　運行時間の遅れによる計画的移動が困難になること ・　価格の安定供給が妨げられること ※　貨物や旅客に及ぼす影響と生活との関係を示した表現物をもとに，交流させる。 ※　福岡空港税関支署の榊さんや福岡空港エアーカーゴターミナルの川崎さんへの聞き取りや資料収集などの再追究の場を位置づけ，新たに取り出した事実を関係づけさせる。	○　福岡空港は，IC をはじめ，私たちの生活に必要な電気製品や生鮮食料品や花を速く，安全に，正確に運んでくれる大切な場所なのに，物資が届かないかもしれない。 ○　ひょっとすると，これからも遅れが出るかもしれない。 ○　輸送経路が変わることも考えられる。 ○　輸送コストが増えて品物の値段に影響が出るかもしれない。 ○　目的地に行けないかもしれない。
３．榊さんらの話を聞いて，考えたことを話し合う。 ○　問題状況の危機感による追究課題をつくること ※　Ｇ・Ｔに生活への影響の事実を具体化して頂いた後に，これからの航空輸送について考えたいことを話し合わせる。	○　これからの福岡空港はどうあればよいのだろう。
追究課題 これからの福岡空港の航空輸送は，どのようにあればよいかを調べ，考えよう。	

第６学年１組　あらつ学習指導案

指導者　　稲　津　一　徳

単　　元　健康から見直そう！ぼくの・わたしの附属福岡小学校

単元の構想

○　本学級の子供たちは，第５学年のあらつ学習において，健康なお年寄りについて憧れを抱き，その健康を支える様々なひみつについて課題追究を行ってきている。そして，健康を多面的に捉え，自己の生活を見直すと共に，課題追究を通して自分なりに創造した健康づくりのための行い方を日常実践し，そのよさを実感してきている。また，そのなかで，健康を総合的・科学的にとらえる知恵や心情が高まってきている。そこで，これから迎える中学生活などの様々な生活環境の変化に対応し，健康づくりへの意識や実践がさらに必要となるこの期に，共に学ぶ附属小学校の児童の健康について調査し，健康づくりについて考える活動を通して，生涯にわたって自己の健康を実現していく知恵や健康を強く志向する心情を育む本単元は価値がある。

○　本単元は，本校に通う児童の健康状態調査から，本校児童の生活現実や健康を実現していく具体的な生活の仕方について調べたり，考えたり，実践したりしたことを全校児童や保護者に向けて発信していく総合的な学習である。本校児童の健康づくりについて追究することによって，①本校児童の健康状態を調べ，健康な生活に向けた追究課題を捉えること，②本校児童の健康状態や健康づくりに必要な情報を収集・整理したり，健康づくりの行い方を工夫したりすること，③追究を通して，健康を取り巻く様々な現代的な課題に気付くこと，④追究してきた本校児童の健康状態や健康づくりの行い方を全校の児童や保護者に向けて情報発信したり，「附属福岡小健康白書」にまとめたりすること，といった学習内容を子供たち自らが生み出して学習を展開できると考える。

○　本単元の展開においては，子供たちが，本校児童の健康づくりについてこだわりをもって追究すると共に，全校児童や保護者に向けて意欲的に情報発信することができるように支援する。導入においては，本校児童の運動能力テストの結果から健康を意識し，健康状態を調査するなかで，本校児童の生活現実に気付かせ，追究課題を見出せるようにする。こだわり別グループの追究においては，全校への情報発信に向けて，価値ある健康づくりのための情報収集や行い方づくりと効果的な表現方法といった面から，あらつ健康ガイドやあらつ健康人材バンクを作成し，子供の求めに応じて提示していく。全校への情報発信では，全校朝会での発表や学校新聞形式での発表，さらには，休み時間などを使った健康教室の開設など多様な発表の機会を準備できるようにする。

目　　標

１．運動・栄養・休養の視点から総合的・科学的に本校児童の健康状態を調査すると共に，健康づくりの情報を収集したり，行い方を工夫したりしながら，追究を整理し情報発信することができる。

２．本校児童の健康な生活を高めようとする向上的な心情や本校児童の健康状態や生活環境に応じて健康づくりの考え方や行い方を取り入れようとする調和的な心情を高めることができる。

計　　画　（約２４時間）

	生活吟味 ---------->	自己追究・内容創造 ---------->	生活更新
予想される活動と内容	１．附属小学校の児童の健康状態を調べ，追究課題をつくる。　（４時間） (1) 本校の運動能力テストの結果を話し合う。　① ○ 本校児童の健康状態への問いの喚起 (2) 本校児童の健康状態を調べ，話し合う。　③ ○ 追究課題や視点の設定	２．こだわりグループで，健康を実現するための課題追究を行い，交流する。　（１８時間） (1) 追究課題について調べ，まとめる。課外＋⑩ ○ 健康づくりに向けた情報収集・行い方の工夫 ○ 健康を取り巻く現代的課題についての気付き ○ 情報発信に向けた効果的な表現方法の工夫 (2) 中間報告会を行う。　（本時）① ○ 追究内容・表現方法の見直しと相互評価 (3) 再追究し実践をもとにまとめる。　課外＋⑦ ○ 追究内容の付加・修正と実践的自己評価	３．追究した課題について，全校児童や保護者に情報発信する。　（２時間） ○ 健康を実現する生活改善に向けた知恵の高まりの実感 ○ 健康を志向する心情の高まりの実感
支援	※　本校児童の運動能力テストの結果の提示 ※　本校児童の健康状態を調べる場の設定	※　課題追究に応じたあらつガイド・人材バンクの作成と活用の促し ※　追究→相互交流・評価→実践の活動の流れ ※　効果的な表現方法の提示	※　情報発信の多様な場の設定 ※　Ｇ・Ｔからの肯定的な評価の場の設定

本時の目標

○　運動・栄養・休養の視点から健康づくりについて追究してきたことを，体験的に交流・相互評価し，追究内容・表現方法を見直したり，追究の価値を実感したりすると共に，より確かなものとして情報発信していこうとする意欲をもつことができる。

準　　備

発表内容をまとめた表現物，Ｇ・Ｔへの協力依頼，評価カード，学習ノートなど

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
１．これまでの追究を振り返り，本時の活動について話し合う。 ○　中間報告会の目的意識の明確化 ※　発表資料から追究した内容を振り返り，情報発信に向けて，相互評価の視点（重要性・伝達性・現実性）を出し合わせる。 ※　追究過程でかかわりのあった方をゲストとして招聘し，必要に応じて相互評価の視点についても助言して頂く。 めあて 全校への情報発信に向けて，重要性・伝達性・現実性の視点から，互いの発表をよりよいものに見直そう。	○　これまで栄養の面から健康づくりについて調べてきたけど，今日の発表を友達やゲストの先生方に聞いて頂いて，さらにいい発表にしたい。 ○　発表していることの重要さや発表のわかりやすさ，そして，実際に発表内容が生活のなかで実践できるかを見ていけばいいのだな。
２．ゲストの先生方や友達に，本校児童の健康状態・生活現実，今の生活が健康に及ぼす影響，健康づくりの具体的な方法について発表する。 ○　健康づくりの知恵や心情の広がりと高まり ○　健康を取り巻く現代的課題への気付き ○　追究内容・表現方法についての相互評価（重要性・伝達性・実現性） ○　追究内容・表現方法の付加・修正への意欲の喚起 ※　相互評価については評価カードを用いて，重要性・伝達性・現実性の３つの視点から交流させていく。 （予想される追究活動の内容・表現方法例）	○　Ｃ君の発表は，本校児童の運動不足の実態が学年ごとにグラフで表してありよくわかった。また，運動不足が健康に及ぼす影響についてはとても重要性なことだと思った。

運動生活（運動）	食生活（栄養）	生活のゆとり（休養）
○　家庭での遊びや運動をする時間が少ない実態 ↓ ○　運動不足は，児童・生徒の体力・運動能力，心臓の機能の低下につながること ○　ニコニコペースで行うウォーキングのすすめ	○　野菜の好き嫌いやスナック菓子などの間食が多い実態 ↓ ○　栄養の偏りやお菓子などの間食は，肥満や高血圧，糖尿病につながること ○　発表！わたしの選んだ体によいおやつベスト２０	○　塾や習い事などで，睡眠時間が少ない実態 ↓ ○　睡眠不足や日常の負のストレスは，心身症や生活習慣病につながること ○　疲労を防ぐリラックス法 ○　効果的睡眠法のすすめ

○　模造紙による発表
○　プレゼンテーションによる発表
○　新聞形式による発表
○　ワークショップ形式による発表　等

３．互いの追究内容や表現方法のよさを出し合ったり，ゲストの先生方の評価を聞いたりして，今後の追究の方向性について話し合う。 ○　追究のよさの実感　○　再追究・生活試行への意欲の喚起 ※　ゲストの先生方には，重要性・現実性から肯定的な評価をして頂き，今後の追究への見通しと意欲をもたせる。	○　情報発信に向けて，好き嫌いの実態をグラフで表したり，子供の肥満や高血圧などの実態を調べさらに重要性について，追究していきたい。

第５学年２組　国語科学習指導案

指導者　　松　藤　秀　子
支援者　大学教官助教授　　山　元　悦　子

単　　元　　まんが文化研究会をひらこう

指　導　観

○　本単元は，漫画と文章を読み比べ，文化としての漫画の価値について調べ，漫画文化に対する考えを根拠を明らかにして伝え合い，漫画文化とのよりよいかかわりを見出していくことがねらいである。具体的には，①自分と漫画とのかかわりから漫画文化研究会を開く目的をもち，文章と漫画を比較しながら読むこと，②漫画のよさに気付き，文化としての漫画について調べること，③調べたことをもとに漫画文化に対する自分の考えを明らかにして話し合うこと，④漫画文化についての自分の考えをまとめ，これからよりよいつきあい方をしていこうとすること，が主な学習内容である。これらは，言葉を通して他者とよりよくかかわろうとする心情をはぐくむとともに，漫画文化とのよりよいかかわりを見出し，生活を更新していこうとする態度を育てる上から価値がある。

○　本学級の子供たちは，物語文や説明文の学習でことばを根拠にして考えたことや想像したことを筋道を立てて話したり，相手が何を伝えようとしているか注意して聞き感想をもったりすることができるようになっている。また，話題に沿って互いに考えを比べながら話し合うことができている。しかし，自分の立場をはっきりさせて組立てを工夫して話したり，相手の意図を考えながら聞いたりすることは十分にできていない。したがって，この期の子供たちには，生活のなかから興味・関心のある話題を設定して，目的に応じて伝え合いを繰り返していくような学習が必要である。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちに親しみのある漫画を話題として取り上げ，漫画がもつ文化としての価値について伝え合う活動が展開できるように単元を構成する。そのために，つかむ段階では，体験をもとに漫画の善し悪しについて話し合わせ，漫画文化とのよりよいつきあい方について考えていくという目的をもたせる。ふかめる段階では，「注文の多い料理店」を漫画と文章で比較して読ませることでそれぞれのよさについて調べ，漫画文化研究会を開き，漫画がもっている内容性・表現性に気付かせる。いかす段階では，自分が好きな漫画の文化性について調べたことを友達や大学教官と話し合う。そして，話し合いを通して漫画文化に対する考えを深め，漫画とのつきあい方について自分の考えをまとめるとともに，よりよい話し合いの仕方を身につけていく。

目　　標

１．文章で書かれた作品と漫画で描かれて同じ作品を同じ作品を会話文，解説文，オノマトペなどの違いや，言葉や絵から受けるイメージの違いから読み比べ，それぞれのよさに気付くことができる。

２．漫画がもつ内容性・表現性や漫画とのつきあい方について，相手の考えに触発されて自分の考えを深めていく話し合いをすることができる。

計　　画（約１０時間）

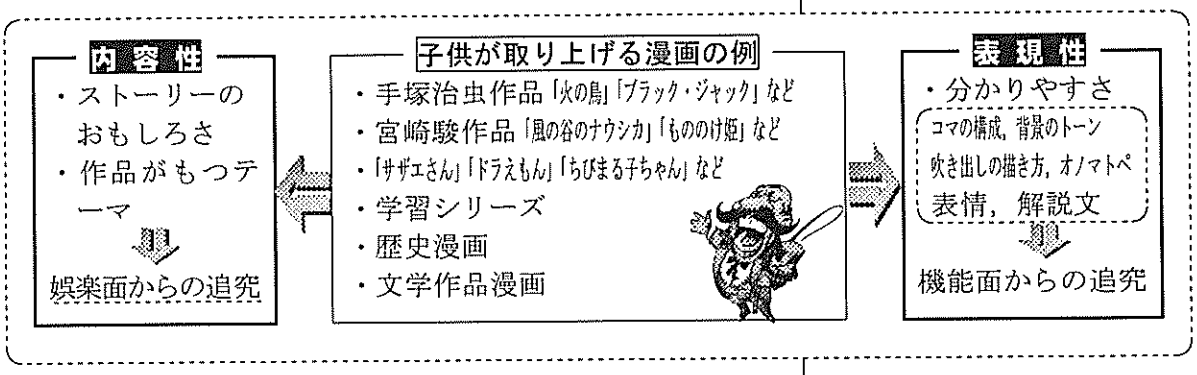
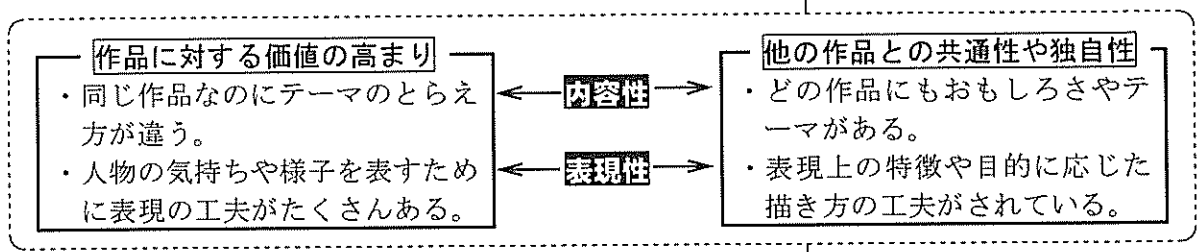
段階	つかむ段階（２時間）	ふかめる段階（４時間）	いかす段階（４時間）
活動と内容	１．好きな漫画や漫画の善し悪しについて話し合い，学習計画を立てる。 (1) 自分と漫画のかかわりについて話し合う。　① ○　根拠を明らかにして話し合うこと (2) 漫画文化について話し合う計画を立てる。　① ○　目的の明確化と課題把握	２．宮澤賢治作「注文の多い料理店」の漫画と文章を読み比べる。 (1) 漫画と文章を読み比べ，それぞれのよさや効果的な表現について調べる。　② ○　漫画と文章の違いや，それぞれのよさについてまとめること (2) 「注文の多い料理店」について漫画文化研究会を開く。　② ○　自分の考えや根拠をはっきりさせて話し合い，調べる観点を明確にすること	３．自分の好きな漫画について調べ，研究会を開く。 (1) 好きな漫画を読み，文化性について調べる。② ○　漫画文化について調べたことをまとめること (2) 漫画文化研究会を開く。（本時１／２）② ○　漫画文化とのよりよいかかわりを見出すこと
手だて	※　漫画コーナーの設置 ※　漫画とのかかわりの振り返り	※　確かに伝えるためのお話メモの作成 ※　話し合いのモデルの提示 ※　ＶＴＲでの振り返り，振り返りカード	※　主張を明確にするためのお話メモの操作 ※　大学教官とのＴ．Ｔ．

本時の目標

○　漫画の内容性や表現性について調べたことをもとに，自分が選んだ作品がもっている文化としての主張や根拠を明らかにして話し合い，漫画とのよりよいつきあい方について考えることができる。

準　　備　　児童：お話カード，子供が作成した資料，子供が選んだ漫画　教師：学習の流れ図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．漫画について話し合う観点を確認し，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　本時学習のめあての把握と活動の見通しをもつこと めあて 自分が選んだ作品をもとにまんが文化研究会を開いて，まんがとどうつき合っていけばよいのか考えよう。 ※　「注文の多い料理店」についての話し合いを想起し，自分の考えを深めていく話し合いの仕方について確認させる。 2．各自が選んだ作品がもつ漫画の文化性について話し合う。 (1) 漫画がもつ文化性やつきあい方について提案する。 ○　漫画の内容性や表現性について調べたことや自分の考え根拠をあげて論理的に話すこと	○　「注文の多い料理店」を文章と漫画で読み比べたら，それぞれによさがあったな。文章だと，自分でいろいろ想像しながら読む楽しさがあったけど難しいところもあった。漫画だと，絵や吹き出しによってとても分かりやすく読むことができた。 ○　他の漫画にも，文化としてのよさがあるのかな。みんなで話し合っていこう。
	
※　事前につくっているお話メモを活用したり，相手を納得させるために作成した資料を提示しながら話を進めさせる。 (2) 友達の提案をもとに，漫画文化について話し合う。 ○　自分が調べたことを関連づけて発表すること ○　内容性と表現性から漫画文化について考えを深めること	○　確かに文章だと難しくて分かりにくい作品でも，漫画で描かれていると，読みやすくて作品のなかに入り込むことができるな。
	
※　子供たちの話し合いが滞ったときや話し合いの方向を変えたいときには，大学教官から質問をしていただく。 3．漫画文化や漫画とのつきあい方についてまとめる。 ○　文化としての漫画について考えをまとめて話すこと ※　漫画文化に対する自他の考え方の違いに気付かせたり，本時の話し合いを振り返ったりして，次の話し合いへとつなぐ。	○　漫画ばかり読んでいてもいけないと思う。目的に応じて文章を選んだり漫画を選んだりする必要がある。 ○　次の時間は，他の作品をもとにもっと話し合おう。

第６学年２・３組　理科学習指導案

指導者　　野　口　信　介
支援者　大学教官教授　　秋　永　正　廣

単　　元　　電気のパワーを活用しよう

指　導　観

○　本単元は，日常生活で得られた電流の働きについての見方や考え方を問題解決活動により科学的な見方や考え方へと高めていく知恵と，得られた結果を生活に生かしていこうとする向上的な心情や電気のもつ働きの素晴らしさを感じる調和的な心情を育むことをねらいとしている。

ここでの主な学習内容は，①電流の流れている巻き線は，鉄心を磁化する働きがあること②電流の向きが変わると電磁石の極が変わること③電磁石の強さは，電流の強さや導線の巻き数によって変わることなどである。このような電磁石の性質と電流の働きの関係をとらえることは，電流の働きを自分の生活に有効に活用する上で大切な素地となるものと考える。

○　本学級の子供たちは、身の回りには電気を使った製品が数多くあり電気エネルギーが光や音をつくり出したり，ものを動かす力に変わったりといった見方や考え方をもっている。また，電気の量によって光の強さやモーターの回転数が増していくことについても理解している。そして，私たちの生活において電気エネルギーは欠かせないものであるという認識ももっている。しかし，導線に電気を流すことで磁力が発生し電磁石ができることや電磁石の性質が私たちの身の回りのいろいろな場面で活用されているといった，電流と電磁石の関係に気づいている子供は少ない。

○　本単元の指導にあたっては、電磁石に電流を流し電磁石の性質を調べる活動から，電磁石は電流の向きや量を変えることで極性や強さを自由に変えることができ，そのことを生かすことで生活を豊かにするものがつくれるといった電流の働きに対する見方や考え方を深めていく。

そこで,「見出す」段階では，電流の働きを利用した電気製品を持ち寄り，その仕組みを調べたり，製品に利用されている電磁石を使った試行活動を行ったりしながら電磁石の性質に関わる追究課題を設定する。「調べる」段階では，電流の強さやコイルの巻き数，及び電流の向きの変化と電磁石の磁力や極性の変化を関係づけながら調べ，電流の働きに対する認識を深めていく。「振り返る」段階では，得られた考えから生活を振り返るとともに，ものづくりを通して電流の働きを見直していく。

目　　標

１．電磁石の性質と電流の働きを関係づけることで電流に対する見方や考え方をもつことができる。
２．電流の働きを有効に活用することで，私たちの生活が便利になることに気づくことができる。

計　　画（約１０時間）

段階	第１次　見出す（２時間）	第２次　調べる（５時間）	第３次　振り返る（３時間）
活動と内容	１．身の回りにある電流の働きを活用しているものを調べ，電磁石を用いた試行活動を行い追究課題を設定する。 (1) 身の回りにある電気製品が電流のどのような働きを活用しているのか話し合う。　① ○　電流の働きについて (2) 電磁石に電流を流す活動を行い，電磁石の強さを変える要因ついて追究課題を設定する。① ○　電流と電磁石の関係について	２．電磁石の強さを変える要因について自分の見通しに沿って調べ，話し合う。（本時３／３）③ ○　電流量と電磁石の強さの関係 ○　コイルの巻き数と電磁石の強さの関係 ○　電磁石をより強くするための方法について ３．電磁石の極性を変える方法について調べ，話し合う。　② ○　電流の向きと極性の変化の関係について	４．身の回りにある電気製品に対し，電磁石の活用のされ方について話し合い，電流の有効利用について考える。 (1) 身の回りの電磁石を利用している物に対し，どのような性質を活用しているのか調べる。① ○　電気製品の働きと電流の働きを関係付けること (2) 電磁石を活用したものづくり活動をおこなう。　② ○　電磁石の活用について
手だて	※　電気製品についての資料と電磁石の提示 ※　電磁石に電気を流す試行実験	※　実験方法に対する助言 ※　追究目的別のグループ構成 ※　大学教官による専門的な支援	※　身のまわりの電磁石を活用したものを調べていく活動 ※　製作物に対するモデルの提示

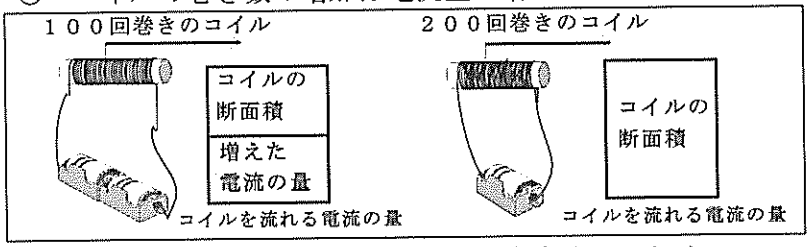
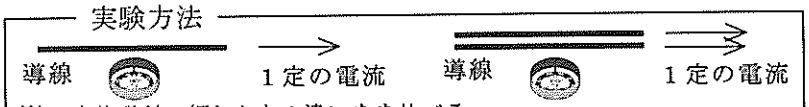
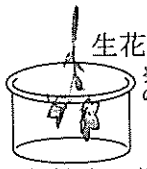
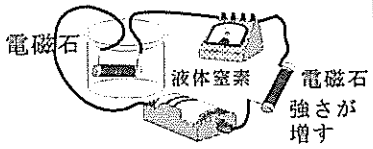
本時の目標

(1) これまでに追究してきた電磁石を強くする要因について交流し，電流の量と電磁石の強さの関係をとらえることができる。

(2) 電磁石をより強くするために超伝導磁石が開発されリニアモーターカーなどの生活を豊かにするものに活用されていることを知り，科学の素晴らしさを実感することができる。

準　　備　電磁石，豆電球，乾電池，電流計，液体窒素，草花，風船，発泡スチロールの容器，学習の流れ図，パソコン，プロジェクター

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．これまでの学習を振り返り，本時のめあてをつかむ。 ○ 電磁石を強くする要因として鉄芯の大きさやコイルの巻き数や電流の量を考え，追究してきたこと めあて 電磁石を強くする方法の違いと共通点を考えよう。 2．電磁石の磁力を強くするための方法について，大学教官と一緒に話し合い，実験によって確かめる。 (1) 電磁石を強くする要因について確認する。 ○ コイルの巻き数や電流の量を変えると磁力が変わること (2) コイルの巻き数を変えることと電流の量を変えることの共通点について話し合い，確かめる。 ○ コイルの巻き数の増加は電流量の増加と同じであること  ※ パソコンを用いて，視覚的にとらえやすくしておく。 実験方法  ※ 方位磁針の振れかたの違いをを比べる。 ※ 大学教官（秋永先生）に確かめる方法を助言していただく。 3．電磁石の力を強くする方法についてまとめ，電磁石を活用するために現在研究されていることについて体験する。 電磁力の強さを変える方法はどれも電流の量に関係する。 ○ 限られた電流の量で強い磁力を発生させる方法について (1) 液体窒素に花や風船を入れ低温の体験を行う。  (2) 液体窒素を用い，コイルを冷やすと電流の量と磁力が増えることを確かめる。  ※大学教官の指示により安全に留意して行うようにさせる。 ※ リニアモーターカーを紹介し，極性の変化へとつなぐ。	○ 今日は，前の時間に調べてきたことについてクラスで話し合って，電磁石を強くするための方法についてはっきりさせていこう。 ○ 僕はコイルの巻き数が大切だと思っていたけれど，確かにコイルの巻き数も変化があったけど，電池の数も関係がありそうだ。 ○ 電流の量が増えると，電磁石のパワーが増すことはわかるけど，巻き数を増やすとどうして電磁石のパワーが増えるのかな。 ○ コイルに電流が流れると磁石の力が生まれるんだから巻き数が増えると電流が多く流れることになるね。 ○ 電池の数を増すことは，それだけたくさんの電流を流すことになるんだね。 ○ 電磁石を強くすることは電流の量に関係あるけど，少ない電流で強くできないのかな。 ○ コイルを冷やしていくと電磁石につくクリップの数が増えるよ。 ○ 冷やしていくことで，電流の流れがよくなるんだ。 ○ こうしてリニアモーターカーは浮くんだ。でも，どうやって前に進むのかな。

第３・４学年さくら組　生活単元学習指導案

指導者　　谷　崎　和一郎

単　　元　　みんなの広場をつくろう　～野菜さん，花さん，鳥さんがいっぱい～

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から７歳程度の３年生２名，４年生３名の計５名で構成されている。子供たちは，これまでに一人一鉢栽培で花の苗を植えて育てたり，野菜畑でさつまいもの栽培をしたりするなど，自然とかかわってきており，花や野菜などの植物や昆虫，鳥などの生きものに対する興味・関心を高めてきている。その中で，身近な人と協働しながら，目的意識をもって個の課題を解決しようとする姿が見られるようになってきた。このような実態を生かして，自然や人と触れ合うことのできる空間を子供たち自身が創り出していくようにしたい。

○　本単元のねらいは，みんなが楽しめるような広場を作ろうという目的意識をもって，野菜や花を栽培したり，バードフィーダーを製作したりして，身近な自然や人と触れ合いながら楽しく活動することである。具体的な学習内容は，①花や野菜，鳥などの自然に働きかけていく目的や意欲をもつこと，②課題を解決するために，必要な情報を収集したり，収集した情報を活用したりすること，③花や野菜の苗を植えたり，バードフィーダーを作ったりすることなどである。これらの内容を学習することは，課題解決の力や生活に必要な知識・技能を身につけ，生活をよりよく更新していくことになるとともに，子供たちの将来における生活の質の向上を考える上でも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，意欲的に花や野菜の苗を植えたり，バードフィーダーを作ったりすることができるように，目的意識をもって活動に取り組むための活動構成，苗を植えたりバードフィーダーを作ったりする場の設定，活動の見通しをもったり，振り返ったりするための個に応じた手順表の提示などの支援を工夫する。具体的には，①身近にある花や野菜，野鳥などに出会う活動→花，野菜，鳥に詳しい方々と一緒に広場に花や野菜の苗を植えたり，鳥をよぶために必要なものを設置したりする活動→作り上げた広場で遊ぶといった一連の活動構成，②花，野菜，鳥に詳しい方々に苗の植え方や育て方，バードフィーダーの作り方を教えてもらう場の設定，③花や野菜の苗を植えたり，バードフィーダーを作ったりする手順を，個に応じて写真や文字，文などで示した手順表の提示などの支援を行う。

目　　標

○　みんなが楽しく遊べる広場を作ろうという目的意識をもって，花や野菜を育てたり，バードフィーダーを作ったりして，自然や人と触れ合いながら楽しく活動することができる。

計　　画（約 12 時間＋課外）

齟	であう　（３時間）	ふかめる　（７時間＋課外）	いかす（２時間＋課外）
活動と内容	１．中学校の畑や西公園などに出かけ，みんなの広場を作ることについて話し合う。 ○　身近な自然として花，野菜，鳥を意識すること ○　自分たちの近くにみんなの広場を作ろうという目的意識をもつこと	２．友達や地域の方と一緒にみんなの広場を作る。 (1) 野菜の苗を植える。　②＋課外 ○　野菜の苗の植え方や育て方を身につけること (2) 花の苗を植える。　②＋課外 ○　花の苗の植え方や育て方を身につけること (3) 野鳥に詳しい湯浅さんと餌台や水場などを作る。 ③＋課外（本時３／３） ○　鳥をよぶために必要なことを意識すること ○　バードフィーダーの作り方や餌の用意の仕方を身につけること ○　鳥が来ることに期待感をもつこと	３．友達や地域の方とみんなの広場で遊ぶ。 ○　花や野菜の世話をしたり，成長を意識したりすること ○　鳥の様子を観察したり，餌を用意したりすること ○　生きもの広場を作ることができた喜びを味わうこと
手だて	※　花や野菜，鳥などに出会う直接体験の場の設定	※　活動をイメージできる実物やビデオなどの提示 ※　個に応じた手順表の提示 ※　地域の方へのかかわりを促す声かけやモデル演示	※　友達や地域の方とみんなの広場で遊ぶ場の設定

本時の目標

○　手順表をもとに，友達や野鳥に詳しい湯浅さんとかかわりながら，バードフィーダーを作り，鳥が食べに来ることに期待感をもつことができる。

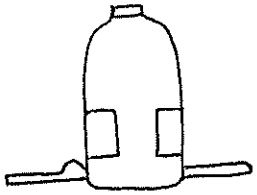
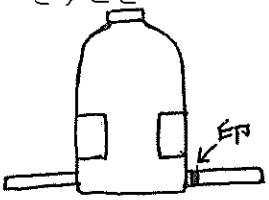
Ａグループ：写真のある手順表を見て，バードフィーダーに枝をさしたり，色づけしたりする。

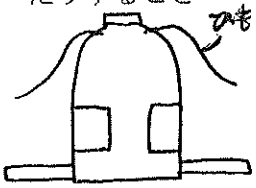
Ｂグループ：写真や文字のある手順表を見て，バードフィーダーに枝をさしたり，色づけしたりする。

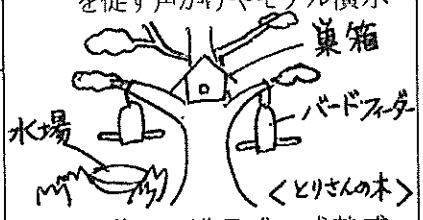
Ｃグループ：絵や文のある手順表を見て，バードフィーダーに枝やひもをつけたり，色づけしたりする。

準　　備　　個に応じた手順表，西公園に住む鳥の写真やビデオ，ペットボトル，ペンキ　など

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　　動　　と　　内　　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td>
1．計画表を見たり，湯浅さんと中庭の木に巣箱をかけたりして，本時学習について話し合う。
○　中庭の木を鳥たちの木として意識すること
○　鳥の木や近くの木に鳥の食べものを用意しようという目的意識をもつこと
めあて
とりさんがたべにくる　レストランをつくろう。
2．手順表を見たり，湯浅さんに尋ねたりしながら，バードフィーダーを作る。
(1) バードフィーダーの作り方について知る。
○　手順表をもとに作り方を大まかにとらえること
(2) 湯浅さんと一緒にバードフィーダーを作る。
<table>
<tr><th>Ａグループ</th><th>Ｂグループ</th><th>Ｃグループ</th></tr>
<tr><td>○　木の枝のふしの部分まで穴にさすこと
 
○　モデル演示を見て模倣的に湯浅さんに尋ねたり投げかけに応じたりすること</td><td>○　木の枝の印の付いた部分まで穴にさすこと
 

○　かかわり方の手順を見て，自分で湯浅さんに尋ねたり，手助けを要求したりすること</td><td>○　穴に木の枝をさしたりひもを通したりすること
 

○　必要に応じて湯浅さんに自分から尋ねたり，湯浅さんに鳥への思いを伝えたりすること</td></tr>
</table>
(3) バードフィーダーに飾りをつけ，鳥の木に吊す。
○　木の葉を付けたり，色をつけたりすること
○　鳥が来そうな位置を尋ねて吊すこと
3．本時の活動を振り返り，学習のまとめをする。
○ みんなの広場に鳥たちのためのバードフィーダーを作ることができた満足感や充実感を味わうこと
○ 鳥たちが来ることに期待感をもつこと
</td><td>
1．本時学習への目的意識を明確化する支援
○　今までのみんなの広場作りの様子の写真や広場の全体図の提示
○　鳥をよぶために必要なものを意識できる場の図の提示と現在の環境との比較
○　バードフィーダーから餌を食べる鳥の様子を撮したビデオや写真の提示
2．バードフィーダー作りに意欲的に取り組ませる支援
○　湯浅さんからの作り方の説明を聞く場の設定
○　個に応じた手順表の提示
Ａグループ：行為を表す写真があるもの
Ｂグループ：行為を表す写真と文字があるもの
Ｃグループ：行為を説明する文とポイントを示す写真があるもの
○　湯浅さんへのかかわりを促す声かけやモデル演示


3．活動への満足感，成就感を味わわせる支援
○　バードフィーダーを作ることができたことへの賞賛
</td></tr>
</table>

第５・６学年梅組　国語科学習指導案

指導者　　早　川　由　洋

単　　元　　コンピュータえほんをつくろう「お月さまってどんなあじ？」

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から８歳程度の５年生４名と６年生３名の計７名で構成されている。子供たちは，挿し絵を見ながらことばと意味を結びつける段階の子供から，文章を読んで場面の様子を理解する段階の子供まで幅広いが，総じて本を読むことを好んでおり，ことばのもつイメージを膨らませて読むことに対して関心が高まってきている。現在，本を読む中で，生活に身近なことばの意味を理解し，そのことばを自分の意志を伝えていくことに役立てていく段階にある。また，パソコンを活用した文字の読み書きに興味をもって取り組むこともでき，パソコンの活用の幅をひろげている。

○　本題材のねらいは，子供たちが生活の中で出会う，行為や様子を表すことばを読み，行動化や形象化を通して意味を理解していくことである。具体的な活動としては，①教材文を読むこと，②ことばの意味を具体物を操作してイメージしたり，映像を視覚的にとらえたりすることで理解すること，③パソコンを活用した絵本作りを通して，ことばと絵図を整合させ，自己評価を行いながらことばの意味を確かめること，④パソコンによるアニメーション絵本の完成を喜ぶことなどである。これらの内容を学習することは，物語を読む楽しさを感じるとともに，会話文や行為から生活に生きることばを獲得する上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，「コンピュータで動く絵本を作ろう。」という目的のもと，教材文を読んで，行為や様子を表すことばの意味をとらえ，絵本を作成していく活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，ペープサートを使った物語の読み聞かせを行い，視覚的に動きをとらえながら話を聞く楽しさに出会わせる。その上で，パソコンを使ったもっと楽しい絵本作りをすることに興味・関心や目的意識をもたせるようにする。ふかめる段階では，各場面ごとに行為や会話から場面の様子を具体的にし，ことばの意味や登場人物の気持ちをとらえることができるようにする。具体的には，個に応じた教材文を読み行動化して意味理解したことを，コンピュータを活用して絵本を作成していくことで確かめていくようにする。いかす段階では，完成したアニメーション絵本を活用して発表会を開くことで，活動に対する達成感を味わえるようにするとともに，ことばを読んだことが絵本作りに役だったことを実感できるようにする。

目　　標

１．語句や文を読み，実際の行動や絵本作りを通して，ことばの意味を理解することができる。

２．コンピュータを活用した動く絵本作りをすることに興味・関心をもって取り組み，ことばのおもしろさや有用性を味わうことができる。

計　　画（約５時間）

段階	第１次　であう（１時間）	第２次　ふかめる（３時間）	第３次　いかす（１時間）
活動と内容	１．ペープサート劇を見て，教材文に出会い，コンピュータ絵本について話し合う。 ○　活動への目的意識をもち，手順や方法等について理解	２．コンピュータを活用した動く絵本作りをする。　③（本時３／３） ○　ことばの意味や登場人物の気持ちを理解すること 語句や文を読む　⇒具体物を使って⇒コンピュータ絵本を行動化する　　作る	３．作ったコンピュータ絵本を使って発表会をする。 ○　活動に対する達成感やことばのもつおもしろさ有用性を味わうこと
手だて	※　視覚的に動きの楽しさをとらえることのできるペープサート劇の提示	※　音声化されたことばを具体物や行動につなぐヒントカードの活用 ※　繰り返し活動をする中で，絵図や吹き出しを貼り付けて絵本を作るコンピュータの活用	※　作成したコンピュータ絵本の発表会をする場の設定 ※　活動に対する賞賛

本時の目標

1．教材文を読み，絵や吹き出しを選んだり書き込んだりして絵本を作り，ことばの意味を理解することができる。

2．語句や文を読んでコンピュータ絵本を作り，ことばのおもしろさや有用性を味わうことができる。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
文字を正しく読み，事物名称と「のる」行為を理解して，絵本を作ることができる。	動物の様子を表すことばと「よぶ」「のる」といった行為を理解して，絵本を作ることができる。	動物の気持ちや月との関係を表すことばを理解して，絵本を作ることができる。

準　　備　ペープサート劇のビデオ，手順図，ランゲージカード，パソコン，ヒントカード，動物のモデル，月のモデル

学習指導の過程

<table>
<tr><th colspan="3">活　動　と　内　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td colspan="3">1．前時までに作ったコンピュータ絵本を読み，ペープサート劇を見て，本時の活動について話し合う。
○　絵本作りの楽しさを想起し，活動への意欲をもつこと
○　活動の手順や方法に見通しをもつこと
めあて
つきをかじるシーンの絵本を作ろう。
2．語句や文を読んでコンピュータ絵本を作る。</td><td rowspan="8">1．活動への目的意識や見通しをもたせる支援
○　前時までに行った絵本作りを想起させること
○　話の大体をつかむペープサート劇のビデオの提示
2．個の活動を促す支援
Aグループ
・文字の読みを聴覚的にとらえるランゲージカードの活用
・語句の意味を理解するヒントカードの活用
・絵図を貼り付けて事物名称をとらえるコンピュータ絵本の活用
Bグループ
・仲間を呼んで，乗せていく様子を行動化できる場の設定
・動物の特徴によって絵図を選択し，呼ばれることや乗ることの意味を視覚的にとらえるコンピュータ絵本の活用
Cグループ
・動物と月との関係を行動化してつかむ場の設定
・気持ちや月との関係を読んでふきだしや絵図と整合するコンピュータ絵本の活用
3．達成感を味わわせる支援
○　プロジェクターを活用した読みの発表会の場の設定</td></tr>
<tr><td>Aグループ</td><td>Bグループ</td><td>Cグループ</td></tr>
<tr><td colspan="3">(1) 教材文を読んでことばや文を意識する。</td></tr>
<tr><td>○　語句を中心とした教材文の文字を正しく読み，事物名称を意識すること</td><td>○　単文で構成された教材文を読み，動物の様子を表すことばを意識すること</td><td>○　教材文を読み，動物と月との関係を表すことばを意識すること</td></tr>
<tr><td colspan="3">(2) 教材文の場面の様子に合わせて行動化する。</td></tr>
<tr><td>登場する動物に合わせて，モデルを実際に乗せて動作する。
○　聴覚的にとらえた事物名称と事物を結びつけること</td><td>登場する動物の役になって，呼んだり乗ったりする。
○　行為を表すことばの意味を理解すること</td><td>行為を動作する中で，場面の様子にあったことばを話す。
○　様子や気持ちを表すことばの意味を理解すること</td></tr>
<tr><td colspan="3">(3) 行動化したことをもとにコンピュータ絵本を作る。</td></tr>
<tr><td>登場人物の絵図を貼り付けて，「のる」行為を視覚的にとらえる。
○　事物名称と乗る行為を確かめること</td><td>登場人物の特徴をとらえて絵図を貼り付けて絵本を作る。
○　呼ぶ，乗るといった行為の意味を視覚的にとらえ確かめること</td><td>登場人物の言ったことや考えたことを貼り付けて絵本を作る。
○　動物たちの行為や気持ちを視覚的にとらえ確かめること</td></tr>
<tr><td colspan="3">3．できたコンピュータ絵本を発表し合う。
○　ことばを読んで絵本ができた達成感を味わうこと</td></tr>
</table>

全体会（１日目）

○　あいさつ

学　　長　　菰口　治
学　校　長　　藏　源一郎

◇　**主題発表**

「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」
―知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開―

研究主任　　小森　晃

◇　教科等発表

○　国語科

「豊かな言語活動を営む国語科学習」

―言語意識の明確化を図った低学年音声言語活動の展開―

国語科部　　松藤　秀子

○　音楽科

「音楽とのかかわりを深める音楽科学習」

―楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開―

音楽科部　　豊村　雅義

○　音楽科学習児童発表

「博多の唄を歌い継ごう！」６年生児童

指導者　　豊村　雅義

◇　メ　モ

第１日目　午後の部

公開授業指導案

第１学年２組　学級活動学習指導案

指導者　　矢　野　俊　次

題　　材　　「なかよし　しゅうかい」をつくろう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，学校生活にもある程度慣れ，新しい友達と交流を深めながらしだいに活発さを帯び始めてきている。それに伴い，入学当初は友達に遠慮がちに接していた子供たちも，自分の主張を通し始め，友達に対して強い口調で接してみたり，自分の主張が通らないと乱暴なことをしてみたりと，友達間のトラブルも多くなり自己中心的な行動が多くなってきている。そこで，遊びながら友達とかかわりを深めることができる活動に取り組み，友達と一緒に活動する楽しさや，友達が存在するよさを味わわせ，仲間としてのつながりをもたせていきたい。

○　本題材のねらいは，「なかよし　しゅうかい」を実践していく知恵と，仲間と一緒に活動する楽しさや友達が存在するよさを味わうといった心情を育むことである。具体的な内容としては，①実際の遊びの中から問題を見つけ出し，みんなが楽しめる集会をつくっていこうとすること，②なかよし集会の目標や計画を話し合い，役割を分担して集会を実践すること，③友達とかかわりながら楽しい集会を行い，友達と一緒に活動するよさに気づくことである。このことは今後，楽しい学級生活を自分たちでつくっていこうとする自主的，実践的な態度を育て，豊かな仲間意識を育てる上からも価値ある題材である。

○　本題材の指導にあたっては，「なかよし　しゅうかい」づくりをある程度自主的に取り組ませながら，学級の仲間との関係を強めていきたい。そのためには，まず，つかむ段階では，実際にみんなで遊び，その問題点をもとに集会の目標を設定する(目標の共有)。次に，つくる段階では，アイディアを出し合って集会の計画を立て，役割を分担する。そして，いかす段階では，「なかよし　しゅうかい」を行い，友達と一緒に活動する楽しさや友達が存在するよさを味わい(活動の共有・価値の共有)，今後の学級生活をより楽しいものにしていこうとする態度を育んでいく。

目　　標

１．「みんなで楽しく遊びたい。」という思いをもとに，集会づくりの活動を立ち上げ，共通の目標を設定して，役割を分担しながら楽しく「なかよし　しゅうかい」を行うことができる。

２．「なかよし　しゅうかい」づくりの活動を通して，仲間と一緒に活動することの楽しさや友達が存在することのよさを味わうことができる。

計　　画（約３時間＋課外）

段階	つかむ（１時間）	つくる（１時間＋課外）	いかす（１時間）本時
活動と内容	１．遊びの中から問題を取り出し，集会活動を立ち上げる。 (1) みんなで集団遊びを行い，問題点を明らかにする。 ○　遊びの中の問題点に気づくこと (2) なかよし集会の活動を立ち上げる。 ○　集会の実施を決めること ○　集会の目標を決めること	２．集会の計画を立てる。 (1) なかよし集会の計画について話し合い，決定する。 ○　集会の内容を決めること ○　役割分担を決めること (2) 役割分担に沿って，集会の準備を行う。 ○　各係ごとに，協力して準備を行うこと ○　責任をもって活動すること	３．「なかよし　しゅうかい」を行い，活動を振り返る。 (1) 集会の計画に沿って，「なかよし　しゅうかい」を行う。 ○　自分の役割分担の仕事をすること ○　仲良く集会を行うこと (2) 集会を振り返る。 ○　友達のよさを感じること
手だて	※　子供主体の遊びの実施 ※　目標を設定する際の，子供の思いを引き出す支援	※　集会の活動例の紹介 ※　話し合い方の助言 ※　具体的な準備の援助	※　集会の進める際の助言 ※　言動の賞賛による評価の観点の明確化

本時の目標

○　「なかよし　しゅうかい」を計画に沿って楽しく行うことができるとともに，集会を振り返って友達と一緒に活動したよさや友達が存在するよさを味わうことができる。

準　　備　　集会のプログラム，つくる段階で話し合った約束の資料，ゲームのやり方の絵図

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	子供の思考の流れ
1．本時活動のめあてについて話し合う。 ○　めあてを把握すること めあて みんなでかんがえた「なかよし　しゅうかい」をしよう。 ※　つかむ段階の遊びの問題場面を想起させ，集会のめあてを明らかにする。 2．「なかよし　しゅうかい」を計画に沿って行う。 (1) ゲームⅠを行う。 【予想されるプログラム例】 ①　はじめの言葉（はじめ係さんの楽しい集会にしようという気持ちを込めた言葉） ②　遊び方の説明（教え係さんによるゲームの説明） ③　ゲームⅠ（遊び係さんによるゲームの進行） ・例　じゃんけんじんとり ※　集会の進行やゲームの説明など，子供たちの役割分担に応じた助言を行う。 (2) 先生の話を聞き，ゲームⅠを振り返る。 ○　仲良くゲームを行うための観点に気づくこと ・声の賭け合いや応援 ※　よかったところ，次に気をつけることなどを話し，評価の観点に気づかせるようにする。 (3) ゲームⅡを行う。 ④　ゲームⅡ（遊び係さんによるゲームの進行） ・例　お助け機関車 ⑤　終わりの言葉（終わり係さんの，みんなの気持ちを代表した終わりの言葉） 3．「なかよし　しゅうかい」を振り返る。 (1) 集会の活動を振り返る。 ○　一緒に活動する楽しさや友達が存在するよさを味わうこと ※　子供同士の具体的なかかわりの場面を通して，集会活動を振り返らせるようにする。 (2) 教師の話を聞き，本時活動をまとめる。 ○　今後の活動に対する期待をもつこと	○　やっと集会ができるぞ。どんな集会になるのか楽しみだな。 ○　今までは，すぐにけんかになったりしたけど，今日はみんなと仲良く集会を楽しむぞ。 ○　話し合ったように，ちゃんとルールを守ろう。 ○　いよいよ仲良し集会の始まりだ。何だかどきどきするな。 ○　前に遊んだときよりも，みんなルールを守っているな。 ○　○○さんは，ちゃんとルールを守っていたんだな。 ○　○○君は，やさしく友達に声をかけていたんだな。 ○　ゲームⅡでは，自分も味方を応援したり，励ましたりしよう。 ○　□□さんがんばって。 ○　△△君，次はきっと大丈夫だよ。 ○　もう終わりなの。もっとやりたいな。 ○　楽しかったな。 ○　みんながぼくのために，がんばってくれてうれしかったな。 ○　友達がいるって，いいな。 ○　これからもみんなで楽しい活動をしていきたいな。

第２学年１組　算数科学習指導案

指導者　加　藤　英　也

単　　元　雨の日に遊ぶパズルを作ろう（三角形と四角形）

指　導　観

○　本単元は，三角形や四角形の構成・分解などの活動を通して，図形についての理解の基礎となる経験を豊かにし，生活のなかから図形を取り出したり見立てたりすることができる知恵と心情を育てることをねらいとしている。具体的には，①３本や４本の直線で囲んでいろいろな大きさや形の三角形，四角形を意欲的に構成できること，②三角定規を使って，点と点を結び直線を引くこと，③三角形や四角形を直線で分解して２つの図形にできること，④三角形や四角形を組み合わせて形を作り，身の回りのものの形に見立てることである。

○　本学級の子供たちは，生活の中で三角形や四角形で構成された様々なものがあることには気づいている。また，「さんかく」や「しかく」という表現によって三角形や四角形の大まかな概念をもっている。しかし，それは，観察による全体的な考察によるものであって，かどの丸いおにぎりのような形も「さんかく」と表現するなど図形としての見方は十分ではない。そこで，様々な構成活動によって大きさや位置，色を捨象し，三角形や四角形の概念をとらえたり，生活の中の事物から図形を取り出したり，生活の中の事物に見立てたりすることができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，図形パズル遊びを通して，三角形や四角形の概念を身につけるとともに図形に対する興味関心をもち，身の回りの事物を図形としてとらえる経験をもたせたい。そのためには，つかむ段階で，雨の日の遊びとしてタングラムなどの図形パズルを提示し，形を作る活動をしながら三角形や四角形の特徴をとらえさせるとともに，自分だけのパズルを作るという追究課題を設定する。次にしらべる段階では，いくつもの点を打った長方形のパズルカードに直線を引きながら三角形や四角形に分割しピースを作り，三角形や四角形を構成するパズル遊びやひごで三角形や四角形を囲みながら取り出す陣取りパズル遊びを行う。最後にまとめる段階では，作ったピースを組み合わせて形を作り，パズルをしながら，身の回りのものに見立てる活動を行う。

目　　標

１．三角形や四角形の意味を知り，それらを構成したり，分解したり，形に見立てたりする活動経験を豊かにもつことができる。

２．三角形，四角形に興味をもち，いろいろな形や大きさの三角形や四角形を意欲的に取り出そうとすることができる。

計　　画（約６時間）

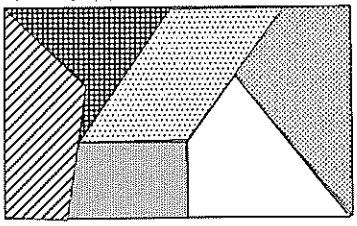
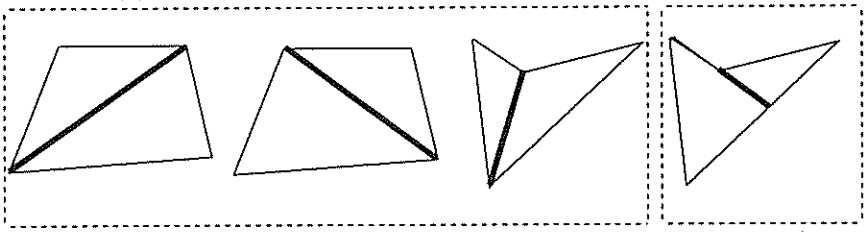
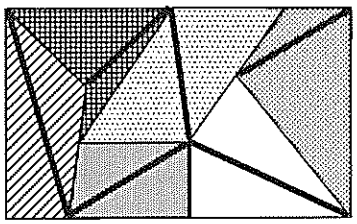
段階	つかむ段階（２時間）	しらべる段階（３時間）	まとめる段階（１時間）
活動と内容	１．雨天時の遊びとしてのパズル遊びについて話し合う。 (1) タングラムで遊ぶ。 ○　三角形，四角形の意味を知ること (2) パズルづくりについて話し合う。 ○　三角形や四角形のパズルを作ること	２．パズルのピースを作ってパズル遊びをする。 (1) 四角形のピースを作って遊ぶ。 ○　いろいろな四角形の取り出し (2) 三角形のピースを作って遊ぶ。(本時) ○　四角形を三角形に分割すること (3) 三角形のパズルを陣取りパズルにして遊ぶ。 ○　ひごでパズルの三角形，四角形を囲んで構成し，取り出すこと	３．今まで作ったピースを使って，形遊びをするパズル大会をする。 ○　ピースを組み合わせて作った形を身の回りのものの形に見立てること
手だて	※　タングラムの提示 ※　パズルづくりについて話し合う場の設定	※　点を打ったパズル作成用の台紙の提示 ※　三角定規の提示	※　作った形の外形を写し取り，パズル遊びをする場の設定

本時の目標

○　前時に作った四角形のパズルのピースを直線で切って三角形のピースを構成することができるとともに，それらを組み合わせて形遊びを楽しむことができる。

準　　備　前時に作った四角形ピースのパズル，三角定規，はさみ

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時に作った四角形のパズルで再度遊び，もっと面白いパズルにするための方法について話し合い，本時学習のめあてをもつ。 (1) 前時に作った四角形のピースのパズルで遊び，感想を話し合う。 ○　ピースの数が少ないからすぐできること  (2) ピースの数を増やすために四角形のピースを分割するという見通しをもち三角形のパズルに作り替えるめあてをもつ。 ※　タングラムの２つの三角形でできた四角形を提示し，四角形から２つの三角形への作り替え方の見通しをもたせる。 めあて 四角形のピースを三角形に作りかえて，もっとおもしろいパズルにしよう。 2．四角形のパズルを三角形のパズルに作り替える。 (1) 四角形から三角形にピースを作り替える。 ○　四角形は２つの三角形に分割できることをとらえること  ・向かい合う頂点を結んで切る　・隣り合う頂点を結んで切る。 ※　実際に切る前に，三角定規をおいて見通しをもたせ，直線を引いてから切るようにさせる。 (2) 三角形のピースの作り方について，話し合う。 ○　頂点と頂点を結ぶ直線で切ると２つの三角形ができること  ※　頂点同士を結ばずに切って，三角形と四角形や２つの四角形に分割している例があれば，取り上げ，切り方の違いによってできる形の違いを交流させる。 3．作った三角形のパズルで遊び，学習をまとめる。 ○　切ってできた２つの三角形を組み合わせてもとの四角形を構成したり，別の三角形でできる四角形を取り出したりすること ※　色の違いを利用して，パズルの中に現れた新しい四角形や三角形を取り出させる。	○　この前作った四角形のパズルで遊んでみよう。 ○　すぐできるから，簡単すぎておもしろくないなあ。 ○　もっとおもしろいパズルにできないかな。 ○　ピースの数が多ければ，もっと難しくなっておもしろくなるかもしれない。 ○　タングラムのように三角形も入ったパズルにするといい。 ○　四角形を三角形にするにはどうすればいいのかな。 ○　こんなふうに切ったらどうかな。だめだ，四角形と三角形になった。 ○　かどとかどを結んで切ったら，うまくいったよ。 ○　他の四角形もうまくいくかな。これもできた。 ○　こんな四角形（凹四角形）もできるかな。 ○　三角形だけのパズルができた。 ○　同じ四角形でも，切り方がいろいろあるんだな。 ○　よし，このパズルで遊んでみよう。 ○　前よりも難しくなったけどおもしろくなったよ。 ○　あれ，別の三角形を組み合わせると新しい四角形が見つかったよ。

第２学年２組　体育科学習指導案

指導者　　岩　城　一　磨

単　　元　　２の２ジャンプパークであそぼう（基本の運動　走・跳の運動遊び）

指　導　観

○　本単元２の２ジャンプパークは，調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ，高く跳ぶ，片足や両足で踏み切ってリズミカルに連続して跳ぶ（ａ－イ）コースを自己選択して走り，得点となる宝を集めることで自己評価を行う走・跳の運動遊びである。

また，本単元のねらいは，２の２ジャンプパークで楽しく遊ぶ中で，跳の動きを広げたり高めたりする知恵や，運動に親しみ楽しく明るい生活を営もうとする向上的心情を育てることである。具体的には，①跳の動きを課題とするコースで調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ，高く跳ぶ，片足や両足でリズミカルに連続して跳ぶ巧みな動きを広げ高めること，②友達と活動を工夫したり，跳ぶ動きへのアドバイスをし合う協力をしたりして楽しく安全に遊び，運動経験を豊かにすることである。

○　本学級の子供たちは，休み時間にクローバー園の飛石を競って跳んだり，固定施設で遊んだりする姿から運動遊びへの関心・意欲が高い。また，その内容は，活動する楽しさ，ゲームで相手に勝ちたいという競争意識が強い。さらに，速く走りたい，遠くへ跳びたい，運動が上手にできるようになりたいと願っている子供が多い。そこで，跳の動きの確かな広がり高まりの体験を十分にさせる中で，子供一人一人の運動生活へのかかわり方を更新させたい。

○　本単元の指導にあたっては，ジャンプパークで楽しく遊ぶ活動の工夫を通して，巧みな跳の動きを広げ高めさせたい。そのためにはまず，みとおす段階で，リズミカルに，遠く，高く跳ぶ全ての動きがあるジャンプパークを行い，全ての跳の運動遊びの動きを十分に味わわせる。次に，ためす・つくりかえる段階では，毎時，順にリズミカルに，遠く，高く跳ぶコースを提示することで動きの広がり高まりを目指す。その中でまず，自分のもっている跳ぶ動きを十分に発揮させる。次に交流をもとに，もっと楽しくなるように活動の工夫をさせることで，新たな動きに挑戦して自分の動きを広げ，運動の楽しみ方を獲得していく。最後にたかめる段階では，全ての跳ぶ動きのジャンプパーク大会を開き，自らの動きの広がり高まりを発揮させ，味わわせていきたい。

目　　標

１．２の２ジャンプパークで楽しく遊びながら，調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ，高く跳ぶ，片足や両足で踏み切ってリズミカルに連続して跳ぶ巧みな動きを広げ高めることができる。

２．競争や運動の仕方を知り，友達と協力し活動を工夫することができる。

計　　画（約５時間）

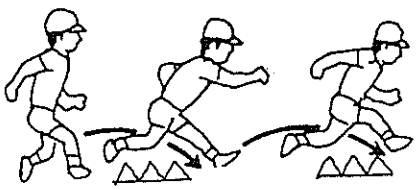
階	みとおす（１時間）	ためす・つくりかえる（３時間）	たかめる（１時間）
活動と内容	１．跳の運動遊びに出会い，遊びづくりの視点を捉えさせる。 ○　巧みに跳ぶ動きについての運動課題をつかむこと ○　友達と協力して，自分たちでジャンプパークが楽しくなるように活動の工夫をすること	２．課題コースのジャンプパークで楽しく遊ぶ。 ○　各種の跳ぶ動きの発揮と活動の工夫 (1) リズミカルに跳び遊ぶ。　① (2) 遠くへ跳び遊ぶ。　（本時）① (3) 高く跳び遊ぶ。　①	３．ジャンプパーク大会を開き，自分の跳の動きの広がり高まりを捉える。 ○　確かな跳の動きの広がり高まりの発揮 ○　友達との協力や場のつくりかえなどの活動の工夫の実感
手だて	※　跳の運動遊びに関する全ての動きの実態把握をするジャンプパークの提示	※　ジャンプパークのコース提示 ※　①リズム跳び遊び，②幅跳び遊び，③高跳び遊びの提示	※　リズム跳び，幅跳び，高跳び全ての運動課題があるジャンプパーク大会の設定

本時の目標

○　２の２ジャンプパークで楽しく遊び，友達と協力して行う活動の工夫をしながら，調子よく踏み切り体を操作して遠くへ跳ぶ，巧みな動きを広げたり，高めたりすることができる。

準　　備　ゴム，マット，得点の宝，場の図，評価ボード，動きの支援ボード，材料コーナー

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．前時のジャンプパークについて想起し，本時めあてをもつ。 (1) 前時のジャンプパークについて話し合う。 ○　活動の楽しさや身についたリズミカルに跳ぶ動きの提示 ※　流れ図で，活動の楽しさの意識づけをする。 (2) 本時のめあてをつかむ。 ○　遠くへ跳ぶ動きでジャンプパークを行うことの把握 ※　新たな場の図を提示し，跳ぶ動きへの見通しをもたせる。 めあて とおくへとぶ２の２ジャンプパークでたのしくあそぼう。	○　今日のジャンプパークは，遠くへ跳ぶコースだな。 ○　新しいコースだからめあてをもって跳ばなければならないぞ，おもしろくなりそうだ。 ○　楽しい遊びを考えよう。 
２．幅跳びコースのジャンプパークを楽しむ。 (1) 今できる跳ぶ動きを発揮し，楽しさを捉える活動をする。 ○　３つのコースを味わい自分なりに跳ぶ，楽しさの体験 ※　跳の動きの支援ボードやアドバイスで動きへの支援を行う。 (2) 楽しさを広げる交流の活動をする。 ○　もっとジャンプパークが楽しくなる活動の工夫と各自の跳ぶ動きの交流による意識化 ・場のつくりかえや友達との協力などの活動の工夫 ・調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ動き ※　交流を行い，動きの支援ボードで動きの価値づけをする。 (3) 交流で気づいた友達との協力などの活動の工夫や遠くへ跳ぶ動きを生かした楽しさを高める活動をする。 ○　各自の活動の工夫や遠くへ跳ぶ動きの確かめ ・交流で気がついた友達との協力の仕方などの活動の工夫や遠くへ跳ぶ動きでもう一度ジャンプパークをやってみる。 ※　グループ間指導を行い，調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ動きや友達との協力などの活動の工夫に対する賞賛を行う。	○　いよいよ新しいジャンプパークが始まるぞ，今日はたくさん宝が取れるかな。 ○　こんな動きや活動の工夫でするときっとおもしろいよ。 ○　コースが変わったので，跳び方やコースの選び方が変わったぞ。 ○　遠くへ跳ぶめあてを達成する動きがわかったぞ。 ○　今度はもっと遠くへ跳ぶ跳び方に挑戦しよう。 ○　みんなで協力してジャンプパークを楽しもう。 ○　友達と協力して，こんなジャンプパークにしました。
３．本時学習をまとめ，次回のジャンプパークの予告をする。 (1) 今日の学習で，新たな運動の工夫や楽しさを発表する。 ○　新しい活動の楽しさや遠くへ跳ぶ運動の仕方の把握 ・場のつくりかえ（遠くへ跳ぶことにかかわる）や協力 ・遠くへ跳ぶ運動の仕方（助走，踏み切り，フォーム） ※　交流により活動の工夫や動きに対する自己評価をさせる。 (2) 学習のまとめをし，次時の活動の予告をする。 ○　動きや活動の工夫の実感と次時の活動への期待 ※　学習をまとめ，次時の予告をし，見通しをもたせる。	○　今日，ぼくは（わたしは），こんな遠くへ跳ぶ跳び方ができるようになったよ。 ○　◎◎君は（さんは），こんな跳び方ができていました。 ○　遠くへ跳ぶジャンプパークで，こんな動きや友達との協力ができるようになったよ。 ○　次は高跳びパークだな。

第３学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　石　田　耕　一

単　　元　　博多のおもしろ外国人さんとふれ合おう

単元の構想

○　本学級の子供たちは，外国や外国語に関する興味・関心が高く，様々なメディアを通じて異文化の事柄や語彙に触れてきている。また，日常生活においても直接的に異文化の人々や外国語とふれ合う機会が増えてきている。そして，保護者も将来，子供たちが異文化の人々との交流を進んで行ったり，実践的に外国語を使いこなしたりすることができるようになってほしいという願いをもっている。このような実態をもとに，異文化の人々とのコミュニケーションを求めて，聞くことや話すことを中心に外国語を活用・実践していく知恵や，異文化や外国語に慣れ親しみながら生活をより潤いのあるものにしていこうとする心情の素地を培い，国際理解や英語教育の視点からのあらつ学習の出発点とし，今後の学習へと発展させていきたい。

○　本単元は，子供一人一人の異文化や外国語とのかかわりの実態を出発点とし，子供たちと異文化の人々が一緒に歌や遊びなど楽しい活動を創り出しながら，異文化交流を進めていく総合的な学習である。「博多のおもしろ外国人さん」とのふれ合いを通して，①異文化の人々への親しみをもち，異文化の人との交流に意欲や課題をもつこと，②異文化の人々とのふれ合いにおける課題を克服するために，異文化について調べたり，外国語を使った歌や遊びなどを工夫したりすること，③いろいろな国の人と英語を通じてコミュニケーションできることに気付き，挨拶や遊びづくりに活用すること，④友達や家族，異文化の人々と一緒に「おもしろ外国フェスティバル」を開くこと，といった学習内容を，子供たち自らが生み出して学習を展開していくことができると考える。

○　本単元の展開においては，子供たちが異文化の人々と楽しく交流をすることができるように支援を工夫する。導入においては，博多在住で博多に愛着をもたれている「博多のおもしろ外国人さん」との出会いの場を設け，自分自身の異文化や外国語とのかかわりを見直し，かかわりへの意欲や課題をもてるようにする。ふれ合いの段階においては，外国の文化や生活の様子が分かる資料や音声言語活動につながる歌遊びやゲームなどを必要に応じて提供しながら，博多のおもしろ外国人さんたちとの継続的なふれ合いの場を設けていく。そして，「おもしろ外国フェスティバル」においては，実践的なコミュニケーション能力や博多のおもしろ外国人さんたちと打ち解けてかかわる態度の発揮を大いに認め励まし，日常生活における継続的なかかわりを図っていきたい。

目　　標

1．博多のおもしろ外国人さんと楽しくふれ合うために，異文化について調べたり，外国語を使った歌や遊びを工夫したりして，「おもしろ外国フェスティバル」を開くことができる。

2．外国と博多の文化や生活の特徴についての理解を深めながら，外国語を用いて異文化の人々と交流することの楽しさを味わい，今後もふれ合っていきたいという心情を高めることができる。

計　　画（約１１時間）

予想される活動と内容	生活吟味 ----------→	自己追究・内容創造 ----------→	生活更新
	1．異文化の人とのふれ合い体験や外国語にかかわる経験について振り返り，話し合う。（1時間） ○　異文化とのかかわりの意識化 2．博多のおもしろ外国人の方々と出会い，ふれ合う。（2時間） ○　異文化の人とのかかわりへの意欲，課題の把握 ○　外国語を使うことの楽しさ	3．外国の文化や生活について調べたり，外国の遊びを工夫したりしながら，博多のおもしろ外国人さんとふれ合う。（6時間） (1) より楽しくふれ合うための工夫をする。 ○　異文化への理解の深まり　④&課外 (2) 工夫したことをもとにおもしろ外国人さんたちとふれ合う。本時(3/6) ② ○　異文化の人への積極的な働きかけ ※　(1)と(2)を相互に繰り返し時間設定する。	4．「おもしろ外国フェスティバル」を開く。（3時間） (1) フェスタの準備をする。 ○　計画や役割分担　① (2) 「おもしろ外国フェスティバル」を開く。② ○　その国の言葉や英語を使って異文化の人々とふれ合う楽しさ ○　継続的なかかわりへの意欲
支援	※　「博多のおもしろ外国人」の方々との交流の場の設定	※　面白外国人の方々とのふれ合いの場の設定 ※　外国の歌や遊びについての資料提供	※　活動に対するおもしろ外国人の方々からの肯定的な評価

本時の目標

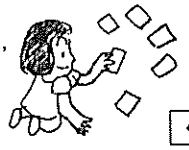
1．異文化の人々とのふれ合いの楽しさを実感し，異文化交流への意欲を高めることができる。

2．博多のおもしろ外国人さんの国について調べたことを伝えたり，楽しくふれ合うために工夫した遊びをしたりして，博多のおもしろ外国人さんたちと進んでふれ合うことができる。

準　　備　児童：博多のおもしろ外国人さんと楽しくふれ合うための遊び道具や場，あらつ学習ノート

教師：前時までの流れ図，博多のおもしろ外国人さんたちへの協力依頼，外国の遊び道具

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．これまでの博多のおもしろ外国人さんたちとのふれ合いを振り返り，本時のめあてについて話し合う。 ○　異文化の人々や外国語についての親しみの深まり	○　博多のおもしろ外国人さんが，外国の楽しい遊びを教えてくれました。
Hello! Mr. (Mrs.)○○ ○　外国語を使いながら会話することの楽しさ ※　挨拶の後，これまで行ってきた遊びを楽しむ時間を設定しリラックスしてふれ合うことのできる雰囲気作りをした後，子供たちが工夫してきた遊びを紹介する場を設ける。	Let's Play [Hello! How are you?] ・Hello! How are you? I'm (fine), and you?
○　博多のおもしろ外国人さんたちとの交流への期待感や意欲 めあて 博多のおもしろ外国人さんたちと一緒に楽しく遊ぼう。	○　ぼくたちが工夫したゲームで，一緒に楽しく遊べるといいな。
2．博多のおもしろ外国人さんと一緒に遊ぶ。 (1) 自分たちが工夫した遊びを紹介して，一緒に遊ぶ。 ○　博多のおもしろ外国人さんたちに積極的に働きかけること ○　外国語や身体表現を用いながら自分と相手の意志や心を通わすことの楽しさや喜び ○　外国と博多の生活や文化の共通点や相違点への気付き	○　博多の名物カードを使ってゲームを楽しく工夫したよ。英語で博多のことを伝えたいな。 ○　おもしろ外国人さんたちも博多が好きなんだ。
【子供たちが工夫した遊びの例】 ◇ Word Cards ・外国や博多の様子を表したカードを使った神経衰弱だよ。カードは，自分たちで作ったよ。  ◇ Touch color ・色つき鬼と似ています。色の言い方を調べました。 ◇ Bamboo Dance ・気持ちを合わせて踊ります。 ◇ スイット　◇ キクリー ◇ Kids On Stage ・ジェスチャーすごろくゲームです。おもしろ外国人さんたちの国の言葉を使って，いろいろな気持ちを表します。 ※　博多のおもしろ外国人さんたちとの往復的なコミュニケーションが必然的に生まれる活動の内容設定とグループ構成や場の工夫を行う。 ※　おもしろ外国人さんたちに進んで話しかけたり遊びに誘ったりする姿を認め励ます。	
(2) おもしろ外国人さんと遊んだ感想をあらつカードに書く。 ○　おもしろ外国人さんたちとのふれ合いの楽しさ，喜び	○　ゲームは楽しくできたし，仲良くなれたよ。
3．本時の活動を振り返り，次の活動への見通しをもつ。 (1) 博多のおもしろ外国人さんたちと遊んだ感想を発表する。 ○　一緒に遊んだ楽しさや親しみの深まり，外国語への親しみ ※　博多のおもしろ外国人さんたちに感想を発表して頂く。 (2) 次時の活動について話し合う。 ○　博多のおもしろ外国人さんとの継続的なかかわりへの意欲	○　外国の言葉を話せるようになって，おもしろ外国人さんといっぱいお話ができるようになりたいな。そして，もっと外国のことが知りたいよ。

第４学年１組　道徳学習指導案

指導者　　石　硯　昭　雄

主　　題　　おとしよりを大切に思う心　－ドクターマジックに学ぼう．おとしよりとのふれあい－

【中２－(2)　相手のことを思いやり，親切にする。　２－(4)　生活を支えている人や高齢者に，尊敬と感謝の気持ちをもって接する。】

指　導　観

○　本主題は，「笑い」を通して高齢者福祉に取り組んである Dr. マジックこと伊藤先生の生き方との出会いをもとに，伊藤先生やおとしよりの心情を推し量り，自分もおとしよりを大切にしてふれあいたいという願いをもって，本当の思いやりとは何か，自分はおとしよりに，どうかかわっていくべきかという知恵を身につけていくことがねらいである。本学習には，①思いやりを実現している人への素朴な共感や憧れをもとに，追究を行うことや，②おとしよりとのかかわり方を見つめ，自らの心や行いを見直すことができる，といった価値がある。

○　本学級の子供たちは，身体に障害をもつ人とのふれあいを通して，真心をもって他者にかかわることの大切さを味わう経験をもっている。また，デイ・ケア・センターでのふれあいの中で，真摯に生きているおとしよりの素晴らしさを感じたり，自分が相手に必要とされることの喜びを感じたりしてきている。本学習を通して，同情を越えて相手のありのままを受容し，相手の人格を大切したり相手に学んだりしながら思いやりを実践していくことの大切さを感得させていきたい。

○　本主題の指導にあたっては，あらつ学習でのおとしよりとのふれあい体験を生かし，伊藤先生の生き方と照らして，自分の心や行いについて見つめさせていく。具体的には，①ふれあいの中から思いやりの大切さに気づいていった伊藤先生の心情への同質的追究，②相手への尊敬に根ざしたふれあいを大事にしている伊藤先生への異質的追究，③ふれあいの中で得た自らのよさの自覚と，課題の広がりへの気づきといった３段階の学習を設定し，価値の自覚を図っていくようにする。

目　　標

○　おとしよりを大切にするとはどういうことなのか考え，相手への尊敬に根ざして思いやり，かかわっていくことの大切さを理解し，そのためにはどうすればよいか判断することができる。

○　伊藤先生やおとしよりの心情を共感的に推し量り，相手の心や体を思いやることのできるかかわりをつくっていきたいという願いをもつことができる。

計　　画　（道徳３時間，あらつ学習１２時間）

道徳の時間

	感じる（課題把握と自己受容）①	求める（価値理解の深化）（本時）①	見つめる（価値の自覚）①
学習活動と内容	1　ふれあいの喜びと，葛藤を想起する。 2　資料をもとにして，伊藤先生の心情や行いを話し合う。 ○　喜びや悩みへの共感 ○　思いやりへの感動 3　見直したい心を話し合う。	1　ふれあいの中で得た，新たな喜びと葛藤を想起する。 2　資料をもとに，おとしよりや伊藤先生の気持ちや考えを話し合う。 3　伊藤先生と対話し，考えを知る。 4　自分たちのふれあいについて見直したい心を明らかにする。	1　自らの心や行いの変容について話し合う。 2　資料をもとに，伊藤先生の悩みについて話し合う。 3　伊藤先生の評価を受け，自分の課題の広がりや継続の仕方を考える。
てだて	○　資料「ドクターマジックたんじょう」（自作）の活用 ○　伊藤先生の姿のビデオ提示	○　資料「おとしよりに教えられたこと」（自作）の活用 ○　伊藤先生との対話の場の設定	○　資料「ドクターマジックの新たなちょうせん」（自作） ○　伊藤先生からの評価

あらつ

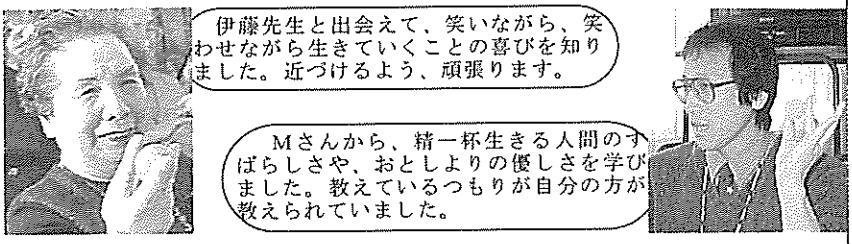
	見出す（生活吟味）５時間	追究する（自己追究・内容創造）４時間	生かす（生活更新）３時間
学習活動	1　ふくふくプラザを見学し、高齢者疑似体験を行う。 2　デイケアセンターを訪問する。 3　よりよいふれあいの仕方について課題を話し合う。	4　ふれあいの計画・準備を行う。 5　２回目のセンター訪問を行う。 6　新たな疑問や課題を話し合う。 7　情報収集を行ったり，関係者と話し合ったりして計画を見直す。	8　３回目のセンター訪問を行いふれあいを実践する。 9　ポートフォリオをもとに自己の変容を振り返り，追究結果をまとめる。

本時の目標

○　おとしよりのありのままを受け入れたり，尊敬の気持ちに根ざしたりしてふれあうことの大切さについて，考えることができるようにする。

準　　備　資料「おとしよりに教えられたこと」（自作），伊藤先生やMさんとの対話の場の設定，ふれあいの様子（写真・ＶＴＲ）

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．ふれあいの中での喜びや葛藤を想起し，めあてを話し合う。 (1)　ふれあい方を戸惑った場面について，話し合う。 ○　自分たちのふれあいの中にひそむ問題を確認すること (2)　伊藤先生も似た体験をもつことを知り，めあてをつかむ。 ○　伊藤先生と話し合う本時の活動を確認すること めあて おとしよりとふれあうときの気持ちや，せっし方について，伊藤先生といっしょにみつめよう。	○　おとしよりに喜んでもらえてうれしいけれど，してあげるばかりで，本当によかったのかな。 ○　伊藤先生でも，同じような悩みを感じることがあるんだな。 ○　伊藤先生は，どんなふれあいがいいと考えているのだろう。
2．資料「おとしよりに教えられたこと」をもとに，話し合う。 (1)　マジックリハビリを通してふれあった時の，伊藤先生とＭさんの心情について話し合う。 ○　伊藤先生の心情の推し量りによる共感 ※　リハビリの模擬体験をし，その大変さを克服したＭさんの心情を推し量らせ，感動をもたせる。 (2)　伊藤先生とＭさんが，このふれあいから，お互いにどんな気持ちを抱くことができたのかを考え，話を聞く。 ○　相手を受容すること，尊敬することの大切さに気づくこと  ※　お互いに学び合う関係になり得たことを，二人の話と板書による関係付けでとらえさせる。 (3)　伊藤先生とＭさんのふれあいの中で，いいなと思ったところについて話し合い，自分の体験を振り返る。 ○　伊藤先生の，価値につながる生き方に感動をもつこと ※　似たような体験や，気持ちを感じたことはなかったか，伊藤先生からの問いかけをもとに振り返らせる。 3．自分たちのふれあい方の見直しについて意欲をもつ。 ○　新たに取り入れた見方・考え方を明らかにすること ○　おとしよりへのかかわり方の見直しを明らかにすること ※　ノートに記述させて明らかにさせる。	○　Ｍさんに，なんとしても治って欲しかったけれど，見ていてつらかったろう。 ○　こんな大変なリハビリを何ヶ月もかけて乗り越えたＭさんはすごいな。 ○　Ｍさんは，伊藤先生を信じているから，つらいリハビリも乗り切れたんだな。 ○　伊藤先生は，相手にしてあげるばかりでなくて，相手から学ぶことが大切だと思ったんだな。 ○　その人の素晴らしいところに学ぼうとする気持ちがあれば，信頼ができ，いいふれあいができるんだな。 ○　私たちも，センターでたくさんおとしよりの素晴らしいところを見つけたり，感じたりしたよ。 ○　相手に学ぶ気持ちをもって，もう一度ふれあい方を考え直してみよう。

第５学年１組　あらつ学習指導案

指導者　豊村雅義

単　　元　　発見！ 博多の心　～博多どんたく・博多祇園山笠こだわり調査隊～

単元の構想

○　本学級の子供たちは，第４学年あらつ学習「ぼくは，私はあらつっ子」において，あらつの自慢探しの活動を行い，郷土への愛着を深めてきている。また，第５学年音楽科「歌い継ごう！博多の心」の学習で，唄に込められた先人の郷土への思いや，博多の歴史や伝統への関心を高めている。この，郷土を見る目や，郷土から学習対象を見出しこだわりをもって追究する学びを生かし，調べる空間や時間軸を広げ，博多の祭りを追究の窓口に，商業都市として栄えてきた博多の歴史や人々の願いなどを調べていく活動を通して，郷土に誇りを持っている人々の生き方や，多くの人と交流しながら発展してきた博多の歴史などに気付かせ，地域での自分の生活を見直させていきたい。

○　本単元は，郷土に受け継がれている祭り・「博多どんたく」（５月）「博多祇園山笠」（７月）について，各自のこだわりを生かして追究することを通して，商業都市・国際交流都市として発展してきた博多の人々の生き方を自分なりに見出していくことをねらいとしている。本単元で子供が創り出す内容を次のように考える。①市民の祭り「博多どんたく」や伝統的な「博多山笠」の歴史や意味を調べること，②祭りに使われる唄や踊り，しきたり，服装などについて資料収集やインタビューなどを行って調べること，③博多の祭にかかわっている人々とふれ合ったり，歌や踊りなどを体験したりすること，④博多の祭のよさを発信する方法を考え紹介していくこと，等である。

○　本単元の展開においては，博多どんたくや博多祇園山笠について，生活経験をもとに振り返り，こだわりをもって意欲的に調べ，祭に対する人々の生き方や郷土への誇りが感じ取れるように支援する。導入においては，どんたくや山笠についての参加の経験や知っていることを出し合う中に，資料提示や祭にかかわっている人々との出会いを設定し，追究課題を明らかにさせ，テーマごとにグループ編成を行う。こだわり別の追究においては，資料の紹介や子供の求めに応じた人材との交流の場の設定などの支援を行う。また，祭の運営や歴史に関する調査活動や体験活動がスムースに進められるようにＴ．Ｔ．や保護者への協力依頼を行う。さらに，博多の祭と自分の生活とのこれからのかかわりを話し合わせる。また，博多の祭のよさを紹介したいという求めが生じたときは，情報誌への投稿やインターネットの活用などによって情報を発信できるよう支援していきたい。

目　　標

１．「博多どんたく」「博多祇園山笠」の歴史やしきたり，服装，音楽や踊りなどについて，こだわりをもって調べ，生活とのかかわりを考えながら，自分なりに意味を見出していくことができる。

２．商業都市・国際交流都市として発展した博多のまちや人々の生き方や伝統に関心をもち，祭と自分の生活について振り返り，郷土への愛着を深めることができる。

計　　画　（約１５時間）

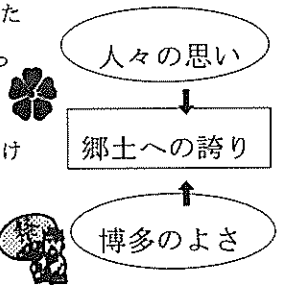
予想される活動と内容	生活吟味 ---------->	自己追究・内容創造 ---------->	生活更新
	１．博多どんたく・博多祇園山笠」の経験を振り返り，その比較から興味あることを話し合う。（3時間） ○　博多の祭についての生活経験の振り返り ○ それぞれの祭の比較をもとにした追究課題の焦点化と追究方法の把握	２．課題別のグループごとに課題解決にむけて追究する。　（１０時間） (1) どんたくについて課題別（歴史・服・音楽・踊り等）に追究する。　⑤＋課外 ○　どんたくのよさや人々の生き方の感受 (2) 博多祇園山笠について課題別（歴史・しきたり・服等）に追究する 。⑤＋課外 ○　祭にかける人々の情熱や思いを自分なりにとらえること　本時３／５	３．博多の祭のよさの発表会を行い，祭への参加の仕方等これからの生活の在り方や情報発信について話し合う。　（２時間） ○　博多の祭とのこれからのかかわり方について考えていくこと ○　博多の祭のよさの発信
支援	※ 写真やＶＴＲ等の提示 ※ 祭にかかわる人々との出会いの場の設定	※ 課題追究の方法の提示（あらつガイド） ※ グループ活動のためのＴ．Ｔや保護者への協力依頼や地域の人材の交流の場の設定	※ 祭とのかかわりを話し合う場 ※ 発信の仕方への助言

本時の目標

○　博多の祭「博多祇園山笠」の歴史や伝統について，こだわりをもって調べたり体験したりしてきたことについての中間発表会の活動を通して，博多の人々の生き方を見出したり，お互いの追究のよさを捉えたりして，今後の追究の意欲を高めるとともに郷土への誇りを感じ取ることができる。

準　　備　学習の流れ図，発表に使用する子供がつくった表現物（OHP，プロジェクター等）

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．今までの自分たちの追究を振り返り，本時の活動（山笠を中心とした祭についての発表会）の趣旨を話し合う。 ○　各自がこだわった課題の追究結果の交流による発表会のめあての確認 めあて 「博多祇園山笠」こだわり発表会を開いて，博多の祭のよさを発見しよう。 ※　子供の求めに応じて，追究段階でお世話になった地域の方や郷土史家などをゲストとして招聘する。 2．博多山笠のよさについて，調べたこと・体験したことをもとに発表・交流する。 (1) 発表会で捉えたいよさについて話し合う。 ○　博多の祭のよさを見出すための観点の明確化 ※　どんたくについて追究したことを振り返らせる。 (2) 「博多山笠」こだわり発表会を行う。 ○　博多山笠の特徴についての理解の広がりと深まり ○　博多山笠にかかわる人々の心や生き方への共感 【予想される各グループの発表の例】	○　山笠について調べてきたけど，それぞれのグループが追究したことを交流して，山笠のよさを見つけよう。 ○　私は山笠の飾りの意味や込められた願いを調べたよ。 ○　山笠の時は，いろいろなしきたりがあるそうだけど，どんなものかな。友達の発表を聞いてみたいな。 ○　追究の時にお世話になった博多の歴史や山笠に詳しい方にも自分の考えを聞いてほしいな。 ○　山笠には古い歴史と伝統があって，博多の人の情熱や生き方が伝わってくるぞ。どんたくととっても似ているな。
・山笠の起源は７００年以上にさかのぼり，博多に流行った病気を追い払うために始められました。幸せな生活を祈って力を合わせてきたことがすばらしいと思います。 ・山笠のしきたりでは，食べ物や行動の仕方が厳しくなるけど，それでみんなの心が一つになると思いました。 ・山笠の服装は，それぞれの流れで模様が違っていて，地域の人々の誇りとまとまりを表しています。  〈どんたくとの比較〉 差異点 祭の荒々しさや期間，歌われる歌，祭への参加の仕方 共通点 古くから続く受け継がれた伝統や人々の思いや願い	
※　ワークショップ形式で交流するように場を設定し，発表を前半・後半に分けて交流させる。 ※　事実だけでなく，自分なりに捉えた博多の祭のよさを考えることができるように，あらつガイドを活用させたり発表内容や自分の意見を書いたカードを交換させたりする。 3．自分なりに捉えた博多山笠のよさを発表し，今後のかかわり方など，生活で見直していくことを話し合う。 ○　郷土への誇りの実感や祭のよさの感受 ※　ゲストから肯定的評価をいただき，満足感を味わわせるとともに，これからの祭へのかかわり方を考えさせる。	○　昔から多くの人たちがエネルギーをつぎ込んできた祭なんだね。ぼくたちも受け継いで，積極的に参加したり，ＰＲしたりしたいな。 ○　山笠がある博多はすばらしいな。ふるさとのよさとして大切に守っていくようにしていきたいな。

第６学年１組　理科学習指導案

指導者　　手　島　宏　樹

単　　元　　探ろう！生活の中の水よう液

指　導　観

○　本単元は，日常生活で見られる水溶液の性質や働きを多面的に追究し科学的な見方や考え方へと高めていく知恵と，得られた結果から日頃使っている水溶液を見直しよりよく生活に生かしていこうとする心情を育てることをねらいとしている。ここでの主な内容は，①水溶液には金属を変化させるものがあること，②水溶液には酸性，アルカリ性及び中性のものがあること，③水溶液には気体が溶けている物があること，などである。このような水溶液の性質と水溶液の働きを生活事象と関係づけて自分なりに意味づけてとらえていくことは，日常生活で見られる水溶液を見直していく態度を育てることにつながる。

○　本学級の子供たちは，酸性雨が建造物を溶かしていること見聞きしたり，市販されている洗剤を使うと汚れがよく落ちることなどを経験したりしている。しかし，トイレ用洗剤には塩酸などが溶け込んでいてそれがものを溶かしているという見方はしていない。そのため，洗浄剤もその用途によって使い分けられていることには気づいているが，使い分けの理由を水溶液の性質や働きと関係づけてとらえるには至っていない。

○　本単元の指導にあたっては，生活の中で使われている水溶液の使用目的や意図によって使いわけされることを水溶液の性質や働きと関係づけながら自分なりに意味づけができるように単元を構成する。そのために「見出す」段階では，前単元で使用した石灰水が蒸発・凝固したビーカーの汚れを落とす体験を位置づける。洗剤のラベルについている使用目的から金属や石灰石を加えての実験を行う。そしてその反応の違いから塩酸や水酸化ナトリウム水溶液の性質や働きについての追究課題を設定する。「調べる」段階では，塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と物との反応を調べたり，指示薬を変化させる働きを調べたりなど多面的に水溶液の性質や働きを調べさせる。「生かす」段階では，生活で使われている水溶液の性質や働きを用途に応じた使われ方や水溶液の入っている容器との関係で多面的・総合的に調べさせる。

目　　標

１．水溶液に金属や指示薬を入れたりして多面的に追究し，日常生活で見られる水溶液の性質や働きについての考えをもつことができる。

２．日頃使っている水溶液を見直し，よりよく生活に生かしていこうとする心情を育むことができる。

計　　画（約１１時間）

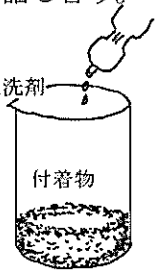
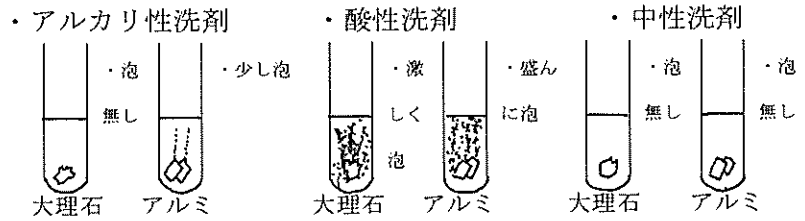
段階	見出す（２時間）	調　べ　る（６時間）	生かす（３時間）
活動と内容	１．トイレ用洗剤での汚れ落とし体験を通して塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の働きや性質についての追究課題を話し合う。（本時２／２）②	２．水溶液の働きや性質を調べる。 (1) 溶かす物を変えたり濃さを変えたりして，塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の性質や働きを洗剤の働きと関係付けながら調べる。④ ○　目的に応じて物を溶かす水溶液の働き ○　濃さを変えて物を溶かす水溶液の働きの違い ○　水溶液に溶けた物の質的変化 (2) 酸性，アルカリ性の液性から水溶液の性質や働きを調べる。② ○　指示薬の色を変える水溶液の働き ○　気体や固体が溶けている水溶液	３．生活で使われている水溶液を溶かす物による変化・指示薬の変化・溶けている物など多面的に調べる。③ ○　用途に応じた水溶液の使い方 ○　性質に応じた容器の使われ方
手だて	※　「混ぜるな危険」の理由の説明 ※　前単元で使用した石灰水が凝固したビーカーと３種類の洗剤の準備	※　洗剤のラベルをもとにした材料の準備 ※　塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と洗剤とをつなげる発問や助言 ※　リトマス紙，紫キャベツ液等の指示薬の準備・提供 ※　気体が溶けている水溶液の準備・提供	※　生活場面で様様に使われている水溶液の準備 ※　水溶液の容器による分類

本時の目標

○　洗剤の取り扱い上の注意点から，洗剤に金属や大理石を入れた実験を考え，その結果から追究課題を設定することができる。

準　　備　酸性洗剤，アルカリ性洗剤，中性洗剤，アルミニウム片，大理石

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　酸性の洗剤をつけると石灰水が蒸発・凝固した物が泡を立てて溶けたこと ○　洗剤のラベルに「金属や大理石には使用しない」という注意書きが書かれていること ○　取り扱い注意書きに書かれていることとを関係づけた考えの表出  めあて 注意書きに書かれているが，洗剤が金属や大理石を溶かすかどうかを調べ，追究課題を話し合おう。 ※　前時学習の演示実験を行い，洗剤のラベルを提示する。 2．アルカリ性や酸性，中性の洗剤に金属や大理石を入れたり，金属や大理石に洗剤をつけたりして変化の様子を調べる。 ○　洗剤の種類によって金属や大理石の反応が異なること  ※　3種類の洗剤を提示し表示内容や生活経験から予想させる。 ※　洗剤の水溶液は少量（目印まで）入れることを指示する。また，アルミニウム板や大理石（石灰石）に洗剤をつけるときは混ざらないように表示をつけておく。 3．実験結果をまとめ，追究課題について話し合う。 (1) 実験結果から注意書きの意味について話し合う。 ○　酸性の洗剤には塩酸，アルカリ性の洗剤には水酸化ナトリウムが入っていることと反応の違い ○　塩酸9.5%，水酸化ナトリウム１%という濃さの違いによる溶け方の違い ※　酸性の洗剤には塩酸が9.5%，アルカリ性の洗剤には水酸化ナトリウム水溶液が１%入っていることを知らせ，実験結果と関係づけさせる。 (2) 本時結果から追究課題について話し合う。 ○　塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の性質や働きの課題設定 ・変化させる物の違いや濃さによる物の変化への追究課題 ・酸性，中性，アルカリ性の性質の違いへの追究課題	○　酸性の洗剤をつけると石灰水の固まりが泡を出して溶けた。 ○　洗剤のラベルに書いているけど，金属や大理石を溶かすのだろう。 ○　注意書きに書かれていることを確かめたい。 ○　金属や大理石にかかると溶けるから使わないように書いているのだろう。 ○　酸性の洗剤を入れるとアルミニウムや大理石が激しく泡を出して溶けた。 ○　アルカリ性の洗剤を入れると，アルミニウムからは少し泡がでるが大理石は変化がない。 ○　中性洗剤は変化無し。 ○　洗剤の中の何がアルミや大理石を溶かすのかな。 ○　酸性洗剤には塩酸が9.5%も入っている。この塩酸が金属や大理石を溶かしているのだろう。 ○　アルカリ性洗剤は水酸化ナトリウム水溶液が１%しか入っていない。溶かす力が弱いのかな。 ○　塩酸や水酸化ナトリウム水溶液にはどんな物が溶けるか調べたい。 ○　濃さの違いによる変化を調べたい。 ○　酸性や中性，アルカリ性って何のことかな。

第３・４・５・６学年３組　国際交流タイム学習指導案

指導者　篠原裕子

単　　元　　世界のかけ橋に―世界の米文化研究会―

指　導　観

○　本単元は，日本や自分の住んでいた国に伝わる米や米料理を調べたり食べたりすることを通して，文化の独自性や共通性をとらえるとともに，滞在していた国に対する愛着と誇りをもたせることをねらいとしている。ここでの具体的な内容は，３学年から６学年までの実態に応じて①自分の滞在していた国の米や米料理について，その種類や歴史的背景，食べるときの作法などを知り，住んでいた国に一層愛着と誇りをもつこと，②各国の米や米料理についての交流を通して，それぞれの国の食文化の独自性に気づいたり，共通性を見出したりすること，③米文化を調べること通して，在日外国人の方や外国文化に詳しい方との交流を行い，身につけている語学力や表現力を生かして今後も交流を進めていこうとすること，などである。

○　本学級の子供たちは，アメリカ，カナダ，イギリス，スペイン，フランス，スイス，オランダ，マレーシア，フィリピン，シンガポール，中国，ミャンマーでの生活を通して，英語，フランス語，スペイン語，中国語などを身につけたり，その国の生活習慣や遊びなどの文化に慣れ親しんだりするなどの貴重な体験をもっている。帰国後も，外国での体験を忘れないようにしたい，外国の方と交流することができる力を生かしてみたいという願いを持もっている。しかし，日常の生活では，外国の方と交流したり，滞在国の文化に触れる場面は少ない。

○　本単元の指導にあたっては，滞在国の米や米料理を調べ，交流しようという目的意識のもと，主体的に課題追究をすることを通して外国の人とのかかわりも実感できるように，活動構成とかかわり方に応じた教師の働きかけの面から支援を工夫する。活動構成については，①身近に住んでいる外国の方と出会わせ，滞在していた国の米や米料理について知っていることを聞き取ったり，調べていきたいことを見出すことができる活動の設定，②外国の方や他の国の友達と交流し，比較しながら自分の調べている国の文化をさぐる活動の設定，③追究してきた米や米料理について友達や保護者の方々に伝える活動の設定という流れである。各学年のかかわり方に応じた教師の働きかけについては，世界を３つの地域（アジア圏，アメリカ圏，ヨーロッパ圏）に分け，異学年グループ活動をさせることと，身近に住んでいる外国の方で，子供のたちの滞在していた地域の文化について情報をもっていて子供の求めに応じることができるような人材バンクづくりを行っていく。

目　　標

１．日本や滞在していた国の米や米料理について調べたり食べたりして，滞在国への愛着と誇りをもち，今後も文化の共通性や独自性について調べていこうという意欲を高めることができる。

２．米文化について身近な外国の方と一緒に調べる活動をすることで，身につけた語学力や表現力を生かしたり，今後も交流を継続しようという意欲を高めたりすることができる。

計　　画　（約１０時間）

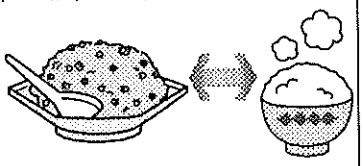
段階	見出す（２時間）	追究する（６時間）	生かす（２時間）
活動と内容	１．マレーシアや台湾など各国の米料理を体験する。　① ○　米料理の違いにふれること ２．滞在していた国の米や米料理について話し合う。　① ○　各国にも多様な米や米料理があることの気づきと，調べていく内容と方法の見通しをもつこと	２．自分の滞在していた国の米や米料理について調べる。 (1) 滞在していた国の米や米料理を調べたり食べたりする。　④ ○　米や米料理について調べることとＧ・Ｔの方との交流 (2) 調べたことやそれに対する自分の思いをまとめる。　② ○　各国の米文化に対する思いや考え	３．「世界の米料理発表会」を開く。 (1) 発表会を開く。(本時)① ○　各国の米料理について比較すること (2) 校内発表をする。　① ○　帰国子女としての個性の伸長と滞在国への愛着と誇りをもつこと
手だて	※　外国の米と米料理の直接比較や試食体験活動の場の設定 ※　Ｇ・Ｔを紹介すること	※　図書館やインターネットの活用と場の設定 ※　Ｇ・Ｔとの共同活動の場の設定	※　保護者や外国の方からの肯定的評価 ※　校内発表の場の設定

本時の目標

○　滞在国の米文化について調べてきたことを他の国を調べた友達や外国の方，保護者の方と交流し，独自性と共通性に気づいて滞在国の文化に愛着と誇りをもつことができる。

準　　備　　米や米料理について調べたことが分かる表現物

学習指導の過程

学　習　活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．米や米料理について追究してきた様子を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　滞在国の米や米料理について調べてきたことの想起 ○　発表会の目的の明確化 めあて 友達や保護者の方，外国の方に自分たちが調べてきた米や米料理について交流しよう。 ※　外国の方や保護者の方に，子供たちの追究の話を聞く期待感をお話していただく場を設定する。 2．これまで取り組んできた追究について発表し合う。 (1) 自分たちが取り組んできた米や米料理について発表する。 ○　調べたことを紹介することと他の国との比較をして，独自性と共通性を見出すこと 〔品種〕・ジャポニカ種，インディカ種，ジャバニカ種など 〔米料理の例〕 中国：炒飯，天津飯，粽など ミャンマー：コーボウ アメリカ：ジャンバラヤ スペイン：パエリア　など  世界の米文化発表会プログラム 1. はじめのことば 2. 前半の発表 3. 後半の発表 4. ゲストの方の感想 5. おわりのことば ○　外国の方と解決に向けてかかわってきたことの満足感 ○　友達，保護者の方，他の外国の方への積極的な表現 ※　アジア圏，アメリカ圏，ヨーロッパ圏ごとにまとめた表現物や試食を通して発表させる。 ※　交流カードに，保護者や外国の方からの意見や質問を書いていただき，交流させる。 (2) 保護者の方や外国の方から感想を話していただく。 ○　保護者の方や外国の方からの賞賛による達成感 ※　調べた米や米料理の種類，歴史的背景，作法を詳しく調べたことへの肯定的評価をしていただく。 3．米文化の共通性について話し合う。 ○　米や米料理の種類，作法などは多様にあるが，どの国も米を作りおいしく食べようとする知恵は同じであること	○　外国での経験を生かして，滞在国の米や米文化について外国の方たちと一緒に調べてきたことを紹介したいと思っています。 ○　保護者の方から，私たちの国際交流について感想をいただき，これからどのように進めていけばいいのかを考えてみたいと思います。 ○　いろいろな国の米や米料理について発表を聞いたり，食べたりしたけど，それぞれの国に特徴があり，自分たちが住んでいた国と違うところや似ているところが見つかりました。 ○　ゲストや友達に調べたことを紹介をし，質問に答えていく中で，自分たちが調べてきたことについて自信をもちました。 ○　自分の住んでいた国と友達の住んでいた国のことを比べながら聞くことは楽しいと思いました。 ○　自分たちが住んでいた国の人たちも，他の国の人たちと同様に気候や風土に合わせて一生懸命に米を作ったり，おいしい料理を創り出そうとする知恵をもっていたことに改めて気づき，すばらしいと思いました。

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　舛元俊文　坂田佳美
早川由洋　谷崎和一郎

単　　元　みんな　なかよしパーティーをしよう

指　導　観

○　本校特殊学級の子供たちは，低学年ふじ組５名，中学年さくら組５名，高学年梅組７名の計１７名で構成されている。４月からの学校生活を通して，低学年の子供たちは，少しずつ他のクラスの友達に対して仲間意識をもち始めており，中・高学年の子供たちは，下学年の友達を意識した行動をとることができつつある。特に，学芸会の劇作りを通して仲間意識が高まり，低学年の子供は，高学年の子供からの働きかけに応じて行動し，中・高学年の子供は，自分の役割をきちんとやり遂げようとしたり，低学年の友達に教えたりすることができるようになってきている。

○　本単元のねらいは，４月に入学した１年生２名と転入してきた５年生１名を含めて，さらにみんなと仲良しになろうという目的意識をもって，仲良しパーティーを計画，実践しながら，子供たちどうしの仲間意識を高めたり，生活へのやる気や安心感をもったりすることである。主な学習内容は，①パーティーの計画や準備，実際のパーティーを通して，友達とのかかわりを深め，仲間意識を高めること，②パーティーの計画を立てること，③パーティーに必要な飾りや道具の準備にかかわる知識・技能を身につけること，④自分の役割を意識して，進んでパーティーに参加することなどである。これらの内容を学習することは，課題解決の力や生活に必要な知識・技能を身に付け，生活をよりよく更新していくとともに，子供たちの将来における生活の質の向上を考える上でも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，意欲的に仲良しパーティーを行うことができるように，目的意識をもって活動に取り組むための活動構成，パーティーに必要な準備をする場の設定，活動の見通しをもったり，振り返ったりするための個に応じたノートの提示や声かけ，モデル演示などの観点から支援を工夫する。具体的には，①みんなが仲良しになれるような楽しいパーティーをしようという目的意識をもつ活動→歌やゲーム，調理などの練習や飾り作りといったパーティーの準備をする活動→実際にパーティーを行う，といった一連の仲間意識を高める活動構成，②低・中・高学年の子供で構成したグループでパーティーの準備に取り組む場の設定，③歌い方やゲームの仕方，ケーキの作り方などをとらえるための個に応じた手順表や声かけなどの支援を行う。

目　　標

１．　「みんな仲良しパーティーをしよう。」という目的意識をもって，意欲的に計画，準備に取り組み，みんなといっしょに楽しいパーティーをすることができる。

２．　パーティーでする歌やゲーム，調理などを通して，友達とのかかわりを深めたり，仲間意識を高めたりすることができる。

計　　画（約 11 時間）

段階	であう（２時間）	ふかめる（７時間）	いかす（２時間）
活動と内容	１．１学期にみんなでする活動について話し合う。 ○　みんなと仲良しになるパーティーをするという目的意識をもつこと。 ○　高学年を中心にパーティの中身を決めること	２．パーティーをするために必要な準備をする。 (1) パーティーの歌やゲームを決めてやってみる。②（本時２／２） ○　歌い方をとらえて歌うこと ○　グループの仲間と協力しながらゲームをすること (2) 試しのケーキ作りをする。④ ○　ケーキ作りに必要なものを意識すること ○　友達と協力しながら，ケーキを作ること (3) 飾りやプログラムを作る。① ○　自分の役割を意識すること	３．準備してきたことを生かしてパーティーをする。 ○　友達とのかかわりを深め，仲間意識を高めること ○　自分の活動に満足感をもち，これからの生活への意欲をもつこと
手だて	※　昨年の学芸会やこれからの行事のビデオや写真の提示	※　歌やゲーム，調理を試しにする場の設定 ※　お互いのかかわりを深めるグルーピング ※　活動の見通しがもてる個に応じたノートの提示	※　活動やかかわりの高まりへの賞賛・励まし

本時の目標

○　友達とかかわりながら，パーティーの歌を歌ったりゲームをしたりすることができる。

	低学年	中学年	高学年
学年目標	中学年や高学年の友達の働きかけを受けながら活動することができる。	低学年に働きかけるとともに，高学年の働きかけを受け入れて活動することができる。	低学年や中学年の友達に働きかけながら，協力して活動することができる。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
課題解決	模倣的に歌ったり，相手からの投げかけに応じて握手をしたりする。	自分から友達に握手や挨拶を求めたり，パズルのパーツを渡したりする。	低学年や中学年に握手やジャンケンを促したり，パズルのパーツの場所を教えたりする。

準　　備　　拡大歌詞パネル，握手や挨拶をする絵図，拡大絵合わせパズルなど

学習指導の過程　（個の活動を促す支援の※はティームティーチングの教師の動き）

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1．前時の学習を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　パーティーの歌を歌ったりゲームをしたりすることを意識すること めあて パーティーのうたをうたったり，ゲームをしたりしよう。	1．本時学習への目的意識を明確化する支援 ○　パーティーの計画表の提示 ○　みんなで歌う歌の拡大歌詞パネルの提示 ○　拡大絵合わせパズルの提示 ※　T1が説明，T2～T4は注意を促す。
2．モデル演示やノートをもとに，歌ったり，ゲームをしたりする。 (1) 代表児のモデル演示やノートを見る。 ○　歌いながら握手や挨拶をすることをとらえること (2) 「握手でこんにちは」を歌う。 ○　歌い方をとらえて，友達とかかわること	2．みんなが仲良くなる歌作りに取り組むための支援 ○　児童による歌い方や動き方のモデル演示 ○　歌い方やゲームの仕方をとらえさせる個に応じたノートの提示 Aグループ：場面の写真と行動の写真を対応づけるノート Bグループ：文字入りの行動の写真を順番に対応づけるノート Cグループ：行動の順番に文カードを対応づけるノート

Aグループ	Bグループ	Cグループ
○　相手からの働きかけに応じて握手や挨拶をすること	○　自分から友達に握手やジャンケンを求めていくこと	○　低学年や中学年に握手やジャンケンを促すこと
(3) 拡大絵合わせパズルをする。		
○　友達の投げかけに応じてパズルのピースを渡したり，当てはめたりすること	○　自分からパズルのピースを探したり，ピースの絵から場所を考えて当てはめたりすること	○　パズルの状況から必要なピースを要求したり，友達に場所を教えたりすること

3．がんばったことを発表することにより，本時学習のまとめをする。 ○　自分の活動への満足感や充実感をもつこと ○　パーティへのやる気や自信をもつこと	○　低・中・高学年の児童がそれぞれに入ったグループの設定 ○　ティームティーチングによる個に応じた声かけ，モデル演示，動作援助 ※　T1は全体的に支援を行う。T2～T4は，それぞれに3つの活動の場について支援を行う。 3．活動への満足感，成就感を味わわせる支援 ○　歌い方や友達とのかかわり方への賞賛と次時の活動への意欲づけ

◇　総合実践提案部会

◆　ようこそ，総合セレクトガーデンへ
「魅力ある総合的学習はこうしてつくる！」

○　中学年部会テーマ
「子供の願いや求めを大切にした総合的学習のあり方」

本校実践紹介

提案者　手島　宏樹

山口大学附属山口小学校実践紹介

提案者　田中　敬二

鹿児島大学附属小学校実践紹介

提案者　池浦也寸志

コーディネーター　教頭　伊藤　啓二
コメンテーター　福岡教育大学　教授　大坪　靖直

○　高学年部会テーマ
「自己の生き方を考える総合的学習のあり方」

本校実践紹介

提案者　猿樂　隆司

大阪教育大学附属平野小学校実践紹介

提案者　萩原　憲二

佐賀県鹿島市立明倫小学校実践紹介

提案者　脇山　英靖

コーディネーター　本校教諭　石田　耕一
コメンテーター　福岡教育大学　助教授　堺　正之

第２日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年２組　図画工作科学習指導案

指導者　　北　田　尚　雄

題　材　名　　ここはあらついきものランド（絵に表す）

指　導　観

○　本題材は，子供たちが西公園にこんな生き物がいたらいいなという生き物を発想し，身近な材料の色や形を生かして自分の思いを楽しく表現していくことで，造形活動を生活に生かそうとする知恵と，材料をもとに進んで想像的な内面世界を広げながら，ともにつくりだす喜びを味わうことをねらいとしている。本題材の主な学習内容は，①粘土絵の具で描いた色や形を生き物に見立てて遊ぶ楽しさを味わう，②粘土絵の具で描いた色や形から生き物を見立て発想・構想する，③粘土絵の具やパスなどの描画材の効果を生かして表現する，④自分や友達の表現のよさを見つけ合うである。以上のことから，造形感覚や創造活動の基礎的な能力を養うことができる。

○　本学級の子供たちは，身近な生活体験をもとに，パスやカラーペンを使って自分が好きなものを描いたり，自分の顔を描いたりして，自分の思いを絵に表現する楽しさを味わってきている。子供たちは，自分が思いついたことがあると積極的にかいていこうとする傾向が見られ，その活動自体を楽しむ様子も見られる。また，表現していくに従って，想像がふくらんだり変化したりする傾向もあり，その変わる楽しさを味わうところも見られる。さらに，色の美しさや形のおもしろさにも関心があり，それらを自分の思いに従って，いろいろなものに見立てていくことに興味をもっている。友達の表現にも関心をもち，そのよさなどを自分の表現に生かそうとするところも見られる。

○　本題材の指導にあたっては，子供たち一人一人の思いを大切にし，その思いを十分に表現できるようにするとともに，粘土絵の具やパスなどの描画材に慣れ，自分の表現に合わせて選択，活用できるようにしたい。そのためにまず，思いつく段階では，西公園の散策から生き物ランドづくりの動機を抱かせ，想像した生き物を粘土絵の具で表現する。次に表す段階では，想像したものをくわしく表すためにパスや身近な材料を用いて付加表現させる。この時，パスの表し方や表現方法の選択について支援する。最後に，あたためる段階では，作品を持ち寄り“あらついきものランド”を完成させ，自分や友達の表現のよさについて共感的に交流していく。

目　　標

○　西公園にいたらいいなという生き物を想像し，粘土絵の具などの身近な材料を用いながら，色や形から想像を広げ楽しく表現するとともに，友達と共感的に交流する喜びを味わう。

計　　画（約６時間）

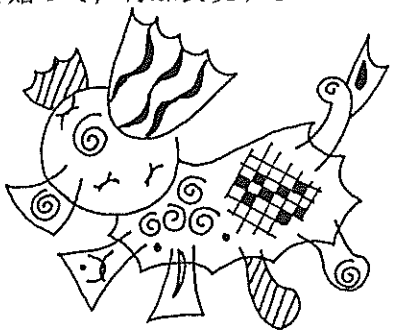
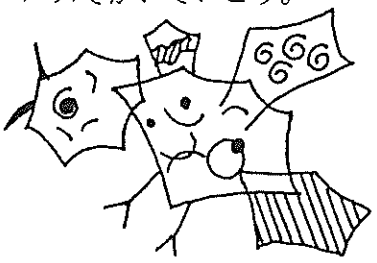
階	思いつく段階（３時間）	表す段階（２時間）	あたためる段階（１時間）
活動と内容	１．自分の生き物を想像する。 (1) 西公園を散策し，生き物ランドをつくるめあてをもつ。　① ○　散策体験から発想すること (2) 粘土絵の具で描いた色や形から，生き物を想像する。　② ○　材料の色形から発想すること	２．想像した生き物を表現する。②（本時１／２） ○　表したいことを進んで見付け好きな色や表現方法を選んで，思いのままに表現すること ○　表したいことに合わせて，パスや身近な材料で表現すること	３．自分が描いた生き物を友達と持ち寄り“あらついきものランド”をつくり相互に作品を鑑賞する。 ○　自分や友達の作品を見ることに関心をもち，共感的に交流
手だて	※　西公園での散策体験から生き物ランドをつくる提案 ※　粘土絵の具の材料提供	※　ゆめノートによる，思いや表す目的の明確化 ※　線描材の表現方法の資料提示	※　海や山などあらつという地域の空間をつくり，そこに作品を展示

本時の目標

○　粘土絵の具で描いた色や形から，いろいろな生き物を想像し，表現の方法や材料を選びながら，絵に表して表現することを楽しむことができる。

準　　備　パス，のり，身近な材料，ゆめノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの造形活動を振り返り，本時のめあてについて話し合い，活動の見通しをもつ。 (1) 粘土絵の具で描いた，色や形から想像した生き物について振り返る。 ○　粘土絵の具で描いた色や形から発想する楽しさの感受 (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○　想像した生き物をくわしくかくために，パスを使ったり，色紙など身近な材料を使ったりして付加表現していくこと ※　自分の思いが，よく表れるように描画材を使っての表現方法について資料提示を行い，想像的な生き物が描けるようにする。	○　前の時間は，粘土絵の具を使って，生き物をかいてきたな。 ○　西公園には，不思議な生き物がたくさんいそうだ。 ○　ぼくが描いた形から，ぞうさんに見えたぞ。 ○　今日は，想像した生き物がもっとわかるようにくわしくかいていこう。
めあて じぶんのいきものが　たのしくなるように　もっとくわしく　かいていきましょう。	
2．粘土絵の具の作品から想像した生き物を，自分の思いにしたがって付加表現していく。 ○　表したいことを進んで見付け，好きな色を選んだり，いろいろな形を描いて楽しんだりしながら，思いのままにあらわしていくこと ○　想像した生き物の特徴を明確にするため，パスや紙などの身近な材料で付加表現すること ・パスで効果的に線描したり着色したりして表現すること ・色紙などの身近な材料を貼って，付加表現すること ※　パスの表現方法の工夫についての資料を提示し，いろいろな表現方法を試していけるようにする。 ※　のりづけの方法の資料を提示し，のり下紙を用意しておく。  3．本時の活動を振り返り，次時の活動について知る。 ○　自分の付加表現の意味や，表し方の工夫について振り返り，表現のあたためをすること ○　友達の表現のよさを関心をもってみること ※　友達の作品のよさを共感的に受け止められるようにする。	○　ぼくは，細かいところをパスでかいていこう。  ○　粘土絵の具で描いたところに，この色のパスで描くとおもしろいぞ。 ○　ここは，パスのこの色を使ってかいていこう。 ○　ぞうさんの鼻は，色紙をくしゃくしゃにして，それをはって表そう。 ○　パスで描いたことで，生き物が動いているように見えてくるよ。 ○　友達の作品も，よく見るとおもしろいな。

第２学年１組　生活科学習指導案

指導者　　石　田　耕　一

単　　元　　みんな大好き！福岡市総合図書館　～手作り布絵本展示発表会を開こう～

指　導　観

○　本学級の子供たちは，１年「西公園で遊ぼう」や２年「あらつの町探検」の学習を通して，身近なあらつのもの・人・ことへの親しみをもち，さらなるかかわりへの意欲を高めている。また，福岡市総合図書館については，半数以上の子供たちが利用した経験をもっている。なかでも子供図書館は人気があり，保護者も子供たちが進んで総合図書館を利用できるようになってほしいという願いをもっている。このような実態から，公共施設としての正しい利用の仕方や総合図書館の活用を通して自分の生活をより楽しいものにしていこうとする態度を育てていきたい。

○　本単元は，福岡市総合図書館を利用する地域の人々への親しみを深めながら，地域の人々と共に総合図書館を利用する楽しさを味わうとともに，図書館の正しい利用の仕方や新しい活用の仕方としての知恵や地域の公共施設の利用を通して自分自身のよりよい生活をつくり出していこうとする心情を育むことをねらいとしている。ここでの学習内容は，①福岡市総合図書館の楽しさを感じ取り，福岡市総合図書館の利用を通して自分たちの生活を潤いのあるものにしていこうとする意欲をもつこと，②手作り布絵本の会の方々と一緒に，布絵本を作ったり展示発表会を開いたりすること，③手作り布絵本の会の方々の思いや製作における工夫について考え，使いやすく楽しい布絵本作りの工夫に気付くこと，④福岡市総合図書館はみんなのものであることが分かり，マナーを守って正しく利用したり活用したりすることである。

○　本単元の指導にあたっては，地域との新たな絆を創り出す活動の内容設定と活動構成から支援を工夫する。まず，活動の内容については，福岡市総合図書館見学(探検・調査・実際の利用)や福岡市総合図書館手作り布絵本の会の方々との協同活動の積み上げを実感できる内容があり一緒に楽しくふれ合いながら活動することができる布絵本作りや布絵本展示発表会の設定を行う。次に，活動構成については，①手作り布絵本展示発表会を開こうという思いを膨らませる福岡市総合図書館見学・利用 → ②布絵本作りを通して継続的に総合図書館とかかわる活動（㋐自分たちの布絵本の計画を立てる。→㋑江口さんたち布絵本の会の方々と一緒に布絵本を作る。→㋒図書館に展示し，問題点や工夫点について調べる。→㋓布絵本を作り変える。)→ ③江口さんたちと一緒に力を合わせて行う「手作り布絵本展示発表会」のように行うものとする。

目　　標

１．福岡市総合図書館の正しい利用の仕方や手作り布絵本を通した新しい活用の仕方を身に付けながら，地域の公共施設の利用を通してよりよい生活を創り出すことができる。

２．布絵本を作ったり展示発表会を開いたりする活動を通して，福岡市総合図書館や手作り布絵本の会の方々への愛着を深めながら，継続的に総合図書館を利用することができる。

計　　画（約１４時間）

段階	であう段階　（３時間）	ひたる段階　（８時間）	いかす段階　（３時間）
活動と内容	１．福岡市総合図書館を見学したり，利用したりする。 (1) 町探検について話し合う。 ① (2) 福岡市総合図書館を見学し，布絵本を読む。 ② ○　総合図書館や布絵本の楽しさ ○　継続的なかかわりへの意欲	２．布絵本の会の方々と一緒に自分たちの布絵本を作ったり，作り変えたりする。 ⑧ 本時4/8 ○「楽しく布絵本を読んでもらいたい」という思いからの布絵本作りの工夫，協同活動の積み上げ ○　総合図書館への親しみの深まり	３．手作り布絵本展示発表会を開く。 (1) 展示発表会の準備をする。 ① ○　プログラム作り，役割分担 (2) 展示発表会を開く。 ② ○　福岡市総合図書館を利用する楽しさ，親しみの深まり ○　継続的な利用への思いの膨らみ
手だて	※　あらつの町の絵地図の提示 ※　福岡市総合図書館見学の設定 ※　手作り布絵本の会の江口清美さんとの出会いの場の設定	※　協同活動の積み上げを実感できる場や作り変えの場の設定 ※　図書館を利用する人たちとふれ合いながら工夫点を見直す調査活動の設定	※　子供たちの手による自主的・自治的な展示会の企画・運営 ※　日常生活における継続的な図書館利用への促し・励まし

本時の目標

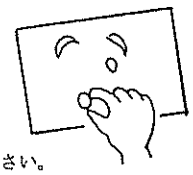
1．福岡市総合図書館手作り布絵本の会の方々と力を合わせて布絵本を作る楽しさを味わいながら，江口さんたちへの親しみを深め，展示発表会への思いを膨らませることができる。

2．自分から進んで手作り布絵本の会の方々に働きかけ，使いやすく楽しい布絵本になるよう工夫しながら布絵本を作り上げることができる。

準　　備　　児童 ― グループごとの絵本の下がき，布絵本作りに必要な材料や道具

教師 ― 前時までの流れ図，江口さんら手作り布絵本の会の方々への協力依頼，

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．福岡市総合図書館見学における手作り布絵本との出会いを振り返り，本時めあてについて話し合う。 ○　自分たちの手作り布絵本作りについての意欲の高まり ○　江口さんたちと一緒に布絵本を作ることへの期待感 ※　自分たちが作りたい布絵本を紹介し合いながら，本時への思いを表現する場の設定や江口さんに布絵本作りへの期待感を話していただく場の設定 めあて 江口さんたち布絵本の会の方々や友だちと力を合わせて，自分たちの布絵本を作ろう。 2．江口さんたち手作り布絵本の会の方々や友達と一緒に自分たちの布絵本を作る。 ○　手作り布絵本の会の方々に積極的に働きかけること ○　手作り布絵本の会の方々や友達と一緒に力を合わせて布絵本を作る楽しさ	○　この前は，江口さんたちと一緒に下絵をかいたり，材料の準備をしたりしたよ。早く布絵本を作りたいな。 ○　わたしたちは，福笑い布絵本を作ります。どんな絵ができるかとても楽しみです。 ○　役割を決めてみんなで作ります。困ったことがあったら，江口さんたちに尋ねたいと思います。江口さんよろしくお願いします。
【子供たちの布絵本】 ◇ジャンケン布絵本 ・私たちは，手袋を使って自由にジャンケンのできる布絵本を作ります。 ◇福笑い布絵本 ・楽しい福笑い布絵本にするよ。部品を入れるポケットを作るよ。目かくしをして遊んで下さい。  ◇ 文字当て布絵本 ・文字の部分は，毛糸を使って工夫します。遊び方の説明も書きます。 ◇絵合わせ布絵本　◇なぞなぞ布絵本　◇すごろく布絵本　◇しりとり布絵本　◇間違いさがし布絵本 ※　布絵本の会の方々や友達との協同活動が生まれるグループ化や場，製作のきまりの設定 ※　布絵本作りに対する思いを実現するための新たな材料や道具，モデルの提示を行う。 ※　布絵本の会の方々に進んで働きかけたり，一緒に力を合わせて作ったりする姿を認める。	
3．本時の活動を振り返り，次の活動への見通しをもつ。 (1) 江口さんたち手作り布絵本の会の方々や友達と一緒に布絵本作りをした感想を発表する。 ○　手作り布絵本の方々や友達と一緒に布絵本作りをした楽しさや親しみの深まり ※　江口さんに布絵本作りの感想を発表してもらう場の設定 (2) 次時の活動について話し合う。 ○　布絵本完成や展示発表会に向けた意欲の高まり ○　江口さんたちとの継続的なかかわりへの意欲	○　江口さんたちのおかげで，みんなの布絵本ができ上がったよ。とても楽しい布絵本だよ。早くたくさんの人に読んでもらいたいな。 ○　わたちたちは，あと少しで完成します。早く仕上げたいです。

第２学年２組　国語科学習指導案

指導者　　松　藤　秀　子

単　　元　　つたえあおう！ぼく・わたしの町じまん

指　導　観

○　本単元は，子供たちが住んでいる町のなかから友達に伝えたいことを取材し，話題に沿って相手に分かりやすく伝え合い，それぞれの町の様子や学校以外の友達のことを分かり合うことをねらいとしている。具体的には，①自分の町の自慢したいもの・人・ことを取材し，友達に伝える事柄を選択して，お話カードに簡単に書くこと，②友達に分かってもらうために紹介する順序を考えて話すこと，③友達の話を受けて，話題に沿って自分の生活と似ていることや違うことを伝え合うこと，④伝え合うことで，それぞれの町での友達の生活について分かり合うこと，が主な学習内容である。これらは，相手や目的に応じて適切に伝え合う力を育てることができるとともに，互いの考えを大切にしながら他者とかかわろうとする心情をはぐくむことができる価値ある内容である。

○　本学級の子供たちは，体験したことを時間的な順序や行動した順序に沿って話したり，想像したことを詳しく話したりすることができるようになってきている。また，相手の話を聞いて分からないことを質問したり，相手が伝えようとしていることを推察しながら聞いたりすることも少しずつできるようになってきている。しかし，目的に応じて伝えたいことを取材・選材して相手に分かりやすく伝えたり，相手に話を自分と比べながら聞いて共通点や相違点を伝え合うことはできていない。したがって，この期の子供たちには，生活のなかから興味・関心のある話題を見出し，相手や目的を明確に意識して伝え合いを繰り返していく本単元のような学習が必要である。

○　本単元の指導にあたっては，自分の町の自慢を取材・選材し，話題に沿って確かに伝え合うことができるように，子供たちの目的意識を明確にして伝え合いを発展させていく。つかむ段階では，絵地図をもとに通学方法や家の周囲のことを紹介することによって，家での友達のことをもっと知り合いたいという目的をもたせ，学習課題を設定する。ふかめる段階では，体験から自分の町の自慢を見つけて友達と伝え合い，自慢となる対象や伝え合う観点を明確にさせる。さらに友達のことを分かり合うために紹介する対象を取材・選材し，お話カードを操作しながら伝える順序を考えて話したり話題に沿って伝え合ったりする。いかす段階では，学級の友達について知り合うために学級全体で町での自分発表会を行い，学校以外での友達のことを分かり合うことができるようにする。

目　　標

１．友達が住んでいる町のことや家での友達のことを分かり合いたいという目的をもって，自分とのかかわりから伝えたい対象を取材・選材し，お話カードに書きまとめることができる。

２．友達と分かり合うために，順序を考えて話したり話題に沿って伝え合ったりすることができる。

計　　画（約８時間＋課外）

段階	つかむ段階（１時間）	ふかめる段階（４時間＋課外）	いかす段階（３時間）
活動と内容	１．それぞれが住んでいる場所や学校に来る方法について教え合い，学習課題をつくる。① ○　通学の方法を順序よく話すこと ○　家の近くにある大好きな場所や人について話すこと ○　課題と計画の把握 ○　伝え合う相手と目的を明確にもつこと	２．自分の町の自慢について取材し，グループの友達と伝え合う。 (1) 家の近くの自慢についていちばん伝えたいことを伝え合う。　② ○　自慢することを詳しく話したり，興味をもって聞いたりすること ○　自慢する対象や観点を明確にすること (2) 新たな観点で取材し，自分の町の自慢を伝え合う。　（本時２／２）②＋課外 ○　観点に沿ってお話メモを作成すること ○　伝えたい順序を考えて話したり，事柄の順序を考えて聞いたりすること	３．１組の友達や家の人を招待して，学級全体で「町での自分発表会」を行う。 (1) お話メモを付加修正する。① ○　友達が知りたいことをもとにカードを付加修正すること (2) 町での自分発表会を行う。② ○　相手や場に応じて適切な言葉遣いで話すこと ○　自分の生活と比べて聞くこと ○　学校以外での友達の生活について分かり合うこと
手だて	※　各自の家や交通機関を記した絵地図の提示 ※　主な施設の写真	※　お話カードの作成と操作 ※　写真や絵の準備，　※　グループ構成 ※　伝え合いのＶＴＲ，モデルの提示	※　友達からの質問の振り返り ※　保護者や友達からの評価 ※　ＶＴＲによる自己評価

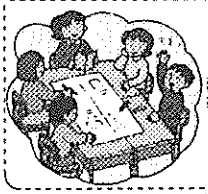
本時の目標

1．自分が暮らしている町をとおして自分の生活（もの・人・こととのかかわり）について取材・選材したことを友達によく伝わるように順序を考えて話すことができる。

2．話題に沿って自分の生活と比べて伝え合い，家での友達の生活について分かり合うことができる。

準　　備　児童：お話カード，自慢するものの写真や絵など　教師：学習の流れ図，絵地図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．自分の住んでいる町自慢について伝え合う観点を確認し，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　本時学習のめあての把握と活動の見通しをもつこと めあて じぶんの町のじまんについてじゅんじょを考えて話しあい，町でのともだちのことについてわかりあおう。 ※　伝え合い活動1のＶＴＲを視聴させて伝え合う目的を明確にしたり，前時までに作成したお話カードを振り返り自分が伝えたいことを明らかにさせたりする。	○　私の家の近くある公園に行って，みんなに教えたいことを調べてきました。 ○　友達の家の周りには，どんな自慢があるのかな。町でどんなことをしているのかな。もっと知りたいな。 ○　友達に教えたいことが3つあるから，分かるように順序を考えて話そう。
2．自分が住んでいる町の自慢をグループの友達と伝え合う。 (1) 自分の町の自慢について順序よく紹介する。 ○　友達に分かりやすく伝える順序を考えながら話すこと ○　友達が紹介している順序や話題に気をつけて聞くこと	○　友達の話を聞いて，自分のことをつけ加えていくと，互いに分かり合えるな。
題材 もの―公園などの施設や自然 人―お巡りさんなど こと―祭りなどの行事 **話す・聞く内容** ・自慢するものの説明（話題提示） ・自分にとってのかかわり（体験） ・自慢だと思ったわけ（選材理由） **話す・聞く順序** 〈友達によく分かってもらう順序で〉 （例）・よくかかわっている順序 ・楽しいと思っている順序 ・話題，体験，選材理由の順序	
※　事前につくっているお話カードを活用したり，紹介する対象の写真や絵などを見せながら話を進めるようにする。 (2) 友達の紹介を聞いて，話題に沿って思ったことや自分の町のことについて伝え合う。 ○　友達の話を聞き，自分のことを付加して話すこと ○　家での友達の生活について分かり合うこと	○　友達は，近くの公園でよく遊んでいると言ったけど，私も家の近くの公園によく行きます。私は，砂場で遊ぶのが好きだけど，友達は，どんな遊びをしているかな。
 **付加する内容** ・自分の生活と似ているところ ・自分の生活と違うところ ・友達の話を聞いての感想 ⇒ **友達理解** ・町で友達はどんな遊びをしているか ・町で友達はどんな人とかかわっているか ・町で友達はどんな活動をしているか	
※　伝え合う対象が違う子供同士でグループ編成をしておく。 ※　話題に沿って伝え合っているグループを取り上げ，友達の発言を受けて話し合いをつなげていく方法に気づかせる。 3．本時学習を振り返り，自己評価をする。 ○　伝え合うことの大切さや価値に気づくこと ○　相手と分かり合うための伝え合いの方法を見出すこと ※　観点を示した振り返りカードを準備したり，伝え合いの問題場面を振り返り，改善策を話し合わたりする。	○　友達の話を自分のことと比べて聞いて，自分のことをつけ加えて話していったから，今まで知らなかった友達のことがよく分かりました。今度は，学級のみんなのことをもっと知りたいです。

第３学年１組　社会科学習指導案

指導者　　髙　野　誠　一

小　単　元　　守ろう!福岡名物　室見川のしろうお漁

指　導　観

○　本小単元は，室見川でのしろうお漁の様子や漁獲量減少について調べ，自然環境を生かし，伝統的な漁法や守る努力をしていること，出荷などをとおした他地域とのかかわりをとらえ，しろうお漁の大切さを感じたり，組合の方や市民，生物などの立場を考えたりすることをねらいとしている。具体的な内容は，①水質や川底の土壌などの自然環境を生かし，福岡名物として他地域からも親しまれていることへの理解や漁獲量減少の対策について多面的に判断すること，②福岡名物の産業を守ろうとすること，③しろうお組合の人に共感したり，市民の立場や他の生物のことを考えたりすることなどである。このような室見川のしろうお漁の問題について考えることは，郷土における社会的ジレンマを味わわせ，共生社会を創る知恵と心情を併せ育むうえで価値があると考える。

○　本学級の子供たちは，第３学年の社会科において，福岡市の土地の様子として，室見川や御笠川などいくつかの河川が福岡市のなかを流れていることに気付いている。また，室見川については，学校行事である遠行会や家庭での余暇利用などでのかかわりが深い。この身近な室見川での歴史あるしろうお漁だからこそ，子供がこだわりをもちやすいと考える。子供たちは，福岡市の明太子工場の学習においても，味を追究してきた努力と福岡の自慢として位置付いていることをとらえ，大切にしようとする向上的心情の育ちが見られている。そこで，福岡市という生活基盤への空間的認識が高まる時期に，本小単元を設定し，地域への理解と愛情を育むようにしたい。

○　本小単元の指導にあたっては，しろうおの漁獲量減少問題について調べ，対策をめぐる葛藤を味わわせ，多面的な判断を促すように単元を構成する。具体的には，つかむ段階で，福岡名物としての室見川のしろうお漁について，名物としての意味づけを図るとともに，減少傾向に気付く。つくる段階で，しろうお減少の原因や対策を調べるとともに，自分なりに漁獲量向上の方法について考え，解決策が行われない現状から疑問や矛盾を感じ取らせる。次に，当事者の人と話し合い，市民生活や生物への影響から価値葛藤を味わわせ，市民や生物，組合の人々の立場での多面的な判断を考える。いかす段階では，「室見川しろうおシンポジウム」を組合の人や市民とともに行う。

目　　標

１．福岡名物のしろうお漁が室見川の自然環境を生かし，伝統的な漁法が工夫されていることや他地域とのかかわりをとらえ，しろうお減少の問題について多面的に判断する知恵を身に付ける。

２．福岡名物のしろうお漁を守ろうとする向上的心情やしろうお組合の人々に共感し，福岡市民や室見川の生物と協調する調和的心情を育む。

計　　画（約１５時間）

段階	つかむ　（５時間）	つくる　（７時間）	いかす　（３時間）
活動と内容	１．室見川のしろうお漁について調べる。 (1) 室見川での体験やしろうおについて話し合う。　① ○　しろうおと出合い (2) 福岡名物のわけを調べる。　③ ○　自然環境や伝統的漁法の理解 (3)漁獲量を調べる。 ○　減少への不安　①	２．しろうおの減少の原因や対策について調べ，自分なりの解決策を考える。 (1)原因や対策について調べる。　② ○　水量不足や環境の変化などの理解 (2)対策について話し合う。　① ○　放流や他機関との連携，整備工事の理解 (3)これからの解決策と現状を比較する。　① ○　現状との差異から感覚的ジレンマの感受 (4)解決策について考えたことを話し合う。　① ○　他の立場との価値的ジレンマの感受　本時 (5)他への影響を調べ，最終的な判断をする。 ○　他の立場からの多面的な判断　②	３.室見川しろうおシンポジウムを開く。　③ ○　福岡市民やしろうお組合の人々の立場や心情の理解 ○　室見川のしろうお問題について地域の人と話し合うことによる郷土の一員としての自覚 ○　川の環境保護や水使用の面からの生活更新への意欲
手だて	※　しろうおおどりぐい体験 ※　しろうお漁調べ ※　漁獲量の推移	※　九州大学助教授，松井先生からの原因調査 ※　室見川しろうお組合への聞き取りや福岡市水産振興課の方との話し合い ※　室見川流域での聞き取り	※　福岡市民や松井先生，しろうお組合の方の招聘 ※　最終的な判断を表す表現物などの作成

本時の目標

○　室見川のしろうおの減少問題に対する自分なりの解決策について，当事者である室見川しろうお組合の方や松井先生，福岡市水産振興課の方と交流し，他の立場への影響があることに気付き，多面的な判断の必要性に気付くことができる。

準　　備

学習の流れ図，子供たちの解決策についての表現物

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてを確認する。 ○　自分の解決策が実現できるかといった視点での交流をするめあての確認 めあて 室見川のしろうおの漁かく量をふやしていくために，どうしたらよいか話し合おう。 2．しろうおの漁かく量をふやすためにどうしたらよいか話し合う。 (1) 自分が考える解決策について調べた結果を話し合う。 ○　減少の原因から考えた解決策を表すこと 【予想される解決策】 ・産卵場整備工事　・放流数を増やす　・室見川の取水削減 (2) 自分が交流したい相手を選択して，交流する。 ○　解決策が進められない当事者としてのジレンマを共有し，他の立場の存在に気付く価値的ジレンマを感受すること 【予想される交流と場の図】 〈放流〉 九州大学農学部助教授 松井誠一　先生 C　子供 G　ゲスト 〈整備工事〉 〈取水制限〉 C　放流する数を増やして，たくさんの卵を産ませ，親魚を増やそう。 G　室見川に放流するには，萩など他の地域からもってこないと。 室見川しろうお組合 吉安久雄さん C　室見川からの取水を減らすように話し合いをしよう。 C　1984 年のように，大きな工事で，産卵場を整備しよう。 G　室見川からの水を減らすと，福岡市の水は足りなくなるのです。 G　1997 年には小さな工事をしています。川は，みんなの場所です。 整備工事担当の方 福岡市水産振興課 3．自分の解決策を話し合って思ったことを話し合う。 (1) 自分の解決策についての交流結果を出し合う。 ○　他の立場の存在に気付き，価値的ジレンマを感じること (2) 他のグループの結果について話し合う。 ○　三つの方法に，問題が生じていることに気付くこと 産卵場として整備←整備工事→水鳥や水生生物，住民への影響 室見川の流量増加←取水制限→福岡市民の飲料水の５分の１ 産卵量の増加　←放流数増→萩や糸島，唐津のしろうお	○　室見川のしろうおをふやそう。名物がなくなってしまうと，楽しみにしている人が困る。 ○　ぼくは，室見川からの取水を減らそうと考えたけど，室見川からの取水は増える一方です。どうしてだろう。 ○　1984 年と 1997 年の工事を比べると，しろうおは減っているのに，工事の範囲などは，小さくなっている。どうしてなのだろう。 ○　放流をするということは，萩市などのしろうおを減らすことになります。 ○　整備工事が小さくなったのは，効率を上げるためだし，他の生き物の住処を守るためなんだ。 ○　放流するための親魚は，山口県や糸島などから仕入れないといけない。 ○　室見川の水質は，他の地域と比べてよいが，取水を削減しないと，ヘドロなど様々な問題が出てくる。 ○　どの解決策でも他の立場からすると，簡単にはできない。どう考えればよいのだろう。

第３学年２組　道徳学習指導案

指導者　　石　硯　昭　雄

主　　題　　生き物の声に耳をかたむけて　－動物たちのいのちの大切さを江頭さんと考えよう－

【中３－(1)　自然のすばらしさや不思議さに感動し，自然や動植物を大切にする。　】

指　導　観

○　本主題は，動物の命を守る活動に取り組まれている，「福岡動物里親の会」の代表である江頭さんの生き方との出会いをもとに，江頭さんや動物の心情を推し量り，自分も動物を大切にしたいという願いをもって，自然や動植物を大切にするために自分はどうすべきかという知恵を身につけていくことがねらいである。本学習には，①動物に温かい心でかかわり，人と動物の共生を実現しようとしている人間の姿に直接触れることや，②自らの動物へのかかわり方を見つめ，自分の心や行いを見直すことができる，といった価値がある。

○　本学級の子供たちは，４月以来協力して学校のウサギの飼育に取り組んでおり，また，大半の子供が家庭でペットを飼った経験がある。その中で生命のもつ温かさや素晴らしさに触れたり，時にはペットの死に出会う悲しみを体験しながら，生き物を愛しく思い，かかわりを深めてきている。しかしそこでの愛情は，ともすれば自分の都合や気分に左右され，自分本位なものになりがちである。好き嫌いや身勝手さを乗り越えた温かい心で動植物にかかわる実践力を培っていきたい。

○　本主題の指導にあたっては，日常の動物飼育体験や学級活動での体験を生かし，道徳の時間との関連を意図した学習を計画する。このなかで道徳の時間においては，①人間に見捨てられた動物たちと暮らす江頭さんの心情への同質的追究，②預かった命への愛情と責任をもち，里親探しに取り組む江頭さんの信念への異質的追究，③共働で得た自らのよさの自覚と，課題の広がりへの気づきといった３段階の学習を設定し，価値の自覚を図っていくようにする。

目　　標

○　人と動物のふれあいのよさについて考え，身勝手さを乗り越えた温かい心で動物とかかわっていくことの大切を理解し，そのためにはどうすればよいか判断することができる。

○　江頭さんや動物の心情を共感的に推し量り，自らも自然や動物を大切にする気持ちをもってかかわりをつくっていきたいという願いをもつことができる。

計　　画　（道徳３時間，学級活動５時間＋課外）

道徳の時間

	感じる（課題把握と自己受容）①	求める（価値理解の深化）（本時）①	みつめる（価値の自覚）①
学習活動と内容	１　動物への接し方の問題を想起する。 ２　資料をもとにして，江頭さんの心情や行いを話し合う。 ○　喜びや心の痛みへの共感 ○　動物への思いやりへの感動 ３　見直したい心を話し合う。	１　自分たちのウサギの世話の体験から見えてきた課題を想起する。 ２　資料をもとに江頭さんの気持ちや考えを話し合う。 ３　江頭さんと対話し，考えを知る。 ４　自分の動物へのかかわりについて見直したい心を明らかにする。	１　取り組みの価値を話し合い，明らかにする ２　自らの心や行いの変容について話し合う。 ３　江頭さんの評価を受け自分の課題の広がりや継続の仕方を考える。
てだて	○　資料「５０頭の動物たちとくらすこと」（自作）の活用 ○　江頭さんの姿のビデオ提示	○　資料「２７００頭のお母さんをさがして」（自作）の活用 ○　江頭さんとの対話の場の設定	○　うさぎの里親や飼育委員会からのメッセージ ○　江頭さんからの評価

学級活動

	生活吟味（１時間）	自己追究・内容創造（２時間＋課外）	生活更新（２時間）
学習活動	１　学校のウサギへの接し方の問題点について話し合う。 ○　存在の大切さについての確認 ○　自分たちの身勝手さへの気づき ○　ふれあい方の検討	２　ウサギの出産や増加の問題，飼育方法の改善について話し合う。 ○　動物を大切にする実践行為 ３　飼育小屋の改良や飼育方法の改善，里親さがし等の活動を行う。	４　飼育委員会やウサギの里親との交流をする。 ５　ウサギとのふれあいを見直し，学級の高まりを話し合う。

本時の目標

○　自分の都合や身勝手さを乗り越えて動物の命を思いやり，温かい心でかかわることの大切さについて考えることができるようにする。

準　　備　資料「２７００頭のお母さんをさがして」，江頭さんとの対話の場の設定，お面，里親探しの写真

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．飼育体験を想起し，学習のめあてについて話し合う。 (1)　飼育体験の中での葛藤や迷いを明らかにする。 ○　飼育における問題状況と，現段階での判断を想起すること (2)　江頭さんからの問いかけを聞き，めあてを確認する。 ※　子ウサギの里親探しや飼育に対する，子供たちの意識の不十分さを問いかけにより明らかにする。 めあて 動物のおせわをする時に，大切にしたい心について，江頭さんといっしょに考えよう。	○　一生懸命お世話してきてウサギが可愛くてたまらないけれど，このまま自分たちだけでお世話を続けていけるか，ちょっと心配だな。 ○　ウサギを大切にしたいのだけれど，どうすることがいいことなんだろう。 ○　江頭さんは，どう思っているのかな。 ○　よく，たくさんの里親を見つけられたな。どんな気持ちでしたのだろう。
2．資料「２７００頭のお母さんをさがして」をもとに話し合う。 (1)　大型犬の里親に申し込んでくれた人を断ったときの，江頭さんの心情を話し合う。 ○　江頭さんの心情の推し量りによる異質性への気づき ○　今まで飼っていたから，別れるのが辛かったんじゃないかな。でもそれでいいのかな。 ○　その犬の健康のことや，もらわれた後の犬の気持ちを考えたからではないかな。 ○　幸せになれなかったら犬がかわいそう。大変でも自分で飼いたいと思ったのでは？ ※　江頭さんの話や，写真提示から状況をとらえさせ，役割演技によりその心情を推しはからせる。	○　江頭さんは，自分がきつくても，本当にその犬が幸せになるにはどうすればいいのか考えているんだな。
(2)　江頭さんがどんな気持ちで里親探しをしているかを聞く。 ○　人間の身勝手さを克服したかかわり方への視点をもつこと 一度自分が預かった動物たちだから、もう二度と不幸な目に遭って欲しくないのです。だから、楽になるからという理由で誰にでもあげるのではなく，本当にこの犬を幸せにしてくれる人にもらって欲しいし，そういう人が見つかるまではあげたくない。それまでは大変であっても，自分で世話をしたいのです。 ※　江頭さんが里親を選ぶ際に基準を設けていることや，里親との連絡をとり続けていることを明らかにする。	○　自分の都合だけで考えてはいけないんだな。もっと動物の気持ちや命のことを考えなくてはいけないな。 ○　動物の気持ちや，どうすれば動物が幸せになるか考えているのがやさしいな。
(3)　江頭さんの考えや行いの中で，いいなと感じたところについて話し合う。 ○　江頭さんの，価値につながる生き方に感動をもつこと	○　どうすれば飼いやすいかは考えていたけれど，ウサギがそれで幸せになれるかを考えきれてなかったな。
3．自分の姿を見直し，判断の見直しについての意欲をもつ。 ○　新たに取り入れた見方・考え方を明らかにすること ○　動物とのかかわりについて見直す心を明らかにすること ※　ノートに記述させて明らかにさせる。	○　もう一度お世話の仕方や飼い方を考え直そう。

第４学年１組　学級活動学習指導案

指導者　　矢　野　俊　次

題　　材　　４の１ガーデンをつくろう（年間題材「われら，４の１農園活動隊」）

指　導　観

○　本学級の子供たちは，第３学年からの持ち上がりの学級である。そのため，第３学年でのさまざまな活動を通して，自分たちで活動目標や活動計画を立て実践していく経験を積み，学級生活を楽しいものにしていこうとする知恵や心情は高まってきている。また，４月の藤見学芸会では，実行委員を中心に自分たちで練習計画を立て劇づくりに取り組み，みんなで劇を成功させた喜びを味わってきている。そこで，協同で行う創造的な活動に取り組み，友達と共に活動する楽しさや，喜びを味わわせ，仲間としてのつながりを強めていきたい。

○　年間題材「われら，４の１農園活動隊」は，４の１農園での栽培活動をベースに，学級目標達成に向けて自主的活動を行っていこうとするものである。その中で本題材「４の１ガーデンをつくろう」は，動物村をガーデニングすることを通して，自主的に活動をつくり上げる知恵や，仲間としてのつながりを強めていこうとする心情を育むことをねらいとしている。具体的には，①４の１農園で育てた花苗を使って動物村に，４の１のシンボルとなる花壇を自分たちの力でつくっていくこと，②問題を解決しながら友達と協同でガーデニングを行っていくこと，③４の１ガーデンを協力してつくり上げたよさを喜び合うことである。

○　本題材の指導にあたっては，動物村のガーデニングに自主的に取り組ませながら，協同性，援助性，受容性を深め，学級の仲間との関係や学級のまとまりを強めていきたい。そのためには，目標を共有化，活動の共有化，価値の共有化の３つの活動で題材を構成する。つかむ段階では，子供たちのガーデニングへの思いを明確化するための資料を準備し，目標を共有化する。つくる段階では，子供たちが植栽プランを立てガーデニングを行う過程において，話し合い活動と実践活動を往復的に行い，活動の共有化を図る。いかす段階では，協同での活動の様子が見とれる写真やＶＴＲの提示を行い，みんなで目標に向かって協同して取り組んだ価値の共有化を行う。これらの活動を通して，子供たちに自分たちの力でやり遂げた喜びを味わわせ，友達とのつながりや学級のまとまりを強めさせていく。

目　　標

１．「４の１のシンボルをつくりたい。」という思いをもとに，旧動物広場のガーデニングの活動を立ち上げ，共通の活動目標を設定して，自分たちの力で４の１ガーデンをつくることができる。

２．旧動物広場のガーデニングを通して，仲間と協力してつくり上げる喜びを味わい友達とのつながりや学級のまとまりを強めるとともに，今後の活動に対する期待と意欲を高める。

計　　画（約６時間＋課外）

段階	つかむ（１時間）	つくる（４時間＋課外）	いかす（１時間）
活動と内容	１．旧動物広場をガーデニングする意義や活動目標について話し合う。　① ○　共通の活動目標を設定すること ○　活動づくりの視点を設定すること	２．ガーデニングの植栽プランを立て，協同でガーデニングを行う。 (1) ガーデニングの計画を話し合う。　① ○　植栽プランを決めること (2) 計画に沿ってガーデニングを行う。　③ ○　友達と協同で創造活動を行うこと ○　新たな問題を解決すること　（本時２/３）	３．ガーデニングの活動を振り返り，今後の活動について話し合う。　① ○　協同で活動するよさを感得すること ○　今後の活動に期待をもつこと
手だて	※　学級のシンボルとなるガーデニングへの思いを明らかにする資料の提示	※　ガーデニングの資料提示 ※　材料や用具の援助 ※　問題を解決する話し合い活動の設定	※　活動時の様子がわかる写真やＶＴＲの提示

本時の目標

○　ガーデニング中に生じた問題に対してどのように対処していくか，みんなで話し合いその対処法を決定し，４の１ガーデン完成に向けて意欲をもつことができる。

準　　備　　ガーデニングをしている写真，問題場面の資料，学級活動ノート

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	子供の思考の流れ
１．本時話し合いのめあてについて確認する。 ○　本時話し合いのめあてと話し合う観点を明確化すること ＜予想される問題＞ ・４の１ガーデンに入られている ・なんで４の１だけが花壇づくりをしているのか疑問に思っている人がいる めあて ４の１ガーデンのことを学校のみんなに知ってもらうにはどうしたらよいか，みんなで話し合おう。 ※　ガーデン作りの過程で生じた問題を明確にとらえられるように，具体的な資料を通して提案理由の説明をさせる。 ２．問題解決に向けて学級で取り組む具体的な方策について，話し合う。 (1) どうやったら問題を解決できるのか，それぞれのアイデアを出し合う。 ○　アイデアを表出すること ・かん板で呼びかける　　・ポスターで呼びかける ・全校に放送で呼びかける　　など ※　事前に，それぞれのアイデアのモデルをつくらせておき，それをもとに発表させるようにする。 (2) 出されたアイデアを話し合いの観点から吟味し決定する。 ○　どんな内容の言葉を入れていくか決定すること ・４の１の思いが伝わる言葉 ・４の１ガーデンにこめられた夢や願い ※　話し合いの観点がそれてきた場合には，方向性を示唆する助言を行う。 ３．教師の話を聞き，本時の活動をまとめる。 ○　本時活動の自己評価と今後の活動への意欲を高めること ※　友達の考えを認め合えたことへの賞賛や，目標達成に向けて自分たちで協力して問題を解決しようとしていることへの賞賛の言葉かけを行う。	○　ガーデンづくりをしていると「何しているの。」と聞かれる。 ○　他の学級の人は，ぼくたちが何をしているのかわかっていない。 ○　私たちがやっていることを全校のみんなに知らせていきたいな。 ○　どうやったら，４の１ガーデンのことを全校のみんなに知ってもらえるかな。 ○　各学級を回って，４の１ガーデンのことを知らせるというのもいいな。 ○　どれもよい方法だね。でも，その方法で本当にぼくたちの思いが伝わるかな。 ○　何のために４の１ガーデンをつくっているのか，知ってもらわないといけないと思うよ。 ○　どんなことを伝えていったらいいだろうか。 ○　みんなで協力して一生懸命つくっているという事を伝えたらどうかな。 ○　４の１農園で花の苗を育てていることも伝えたらどうかな。 ○　そうだね。分担して呼びかけていこうよ。 ○　よーし。協力して４の１ガーデンを完成させるぞ。

第４学年２・３組　理科学習指導案

指導者　　野　口　信　介

小　単　元　　ものの温まり方の違いを探ろう

指　導　観

○　本小単元は，生活場面に見られる様々なものの温まり方を自分たちの能力を発揮しながら探り，多面的・総合的にとらえていく知恵と，自分の考えを客観性のあるものへと高め，生活に生かしたいという向上的な心情や，物質の状態によるものの温まり方の違いを追究していくことで，そのきまりから熱の有効利用を行っていきたいという調和的な心情を育むことをねらいとしている。主な学習内容は，①金属や氷などの固体は熱せられた部分から熱だけが移動して順に温まることをとらえること②水や空気などの液体や気体は熱せられた物質と熱が移動して全体が温まることをとらえることである。このことは，生活場面において熱を有効に活用していく上で素地となるものである。

○　本学級の子供たちは，普段の生活の中で熱源がものを温めることは知っている。またそのことを活用しながら生活をしてきている。しかし，普段の生活の様子を見てみると，ストーブが部屋を暖めるというよりも，ストーブ（熱源）の近くに行って暖をとるといった様子がうかがわれる。このことの理由として，フライパンの取っ手が熱くなる（伝導）などの生活経験から熱は火の近くから放射状に広がっていくという考えをもっていることがあげられる。このように，空気や水の温まり方（対流）の認識は十分でなく，ものの温まり方を生活に活用していく上では十分とはいえない。

○　本小単元の指導にあたっては，子供のものの温まり方に対する日常的な考え方を科学的な考え方に高めていきながら，ものの温まり方の違いを生活に活用できるようになることをねらっている。

そこで，「見出す」段階では，生活で見られるものを温める場面を設定し，水，空気，金属の温まり方に対するイメージ図を描き比較することで，その違いからものの温まり方に対する追究課題を設定する。「調べる」段階では，まず，考えが多岐にわたると予想される水の温まり方，次に，金属の温まり方について同質グループでの追究活動１，異質グループでの追究活動２を行い，物質の状態と温まり方の違いについての認識を深めていく。「振り返る」段階では，得られた考えを空気の温まり方に適応していくとともに，生活場面におけるものの温まり方の活用について考えていく。

目　　標

１．物質の状態の違いと温まり方の違いの関係を実験や交流を通してとらえることができる。

２．生活事象に対して対流や伝導の考え方を適応し，熱の有効な活用の仕方に気づくことができる。

計　　画（約１２時間）

段階	第１次　見出す（２時間）	第２次　調べる（６時間）	第３次　振り返る（４時間）
活動と内容	１．身の回りの事象から，水，空気，金属の温まり方について話し合い，追究課題を設定する。 (1) 水，空気，金属の温まり方に関わる生活場面を想定した試行活動を行い，それぞれの温まり方をイメージ図に表す。　① ○　日常的な考え方の顕在化 (2) 考え方の違いについて話し合い，ものの温まり方に対する追究課題を設定する。　① ○　追究課題の設定	２．水の温まり方について調べる。 (1) 同質グループで追究する。① ○　見通しのある観察・実験 (2) 異質グループで追究する。② ○　多面的な追究による水の温まり方（対流）の理解 ３．金属の温まり方を調べる。 (1) 同質グループで追究する。① ○　見通しのある観察・実験 (2) 異質グループで追究する。② （本時２／２） ○　金属の温まり方(伝導)の理解	４．これまでの考えから，空気の温まり方について調べる。 (1) 同質グループで追究する。② ○　水の温まり方（対流）と金属の温まり方（伝導）の考え方の適応 (2) 空気の対流を生かした熱気球づくりを行う。　① ○　空気の温まり方の活用 (3) 概念地図を作り，これまでの学習での変容を振り返る。　① ○　概念形成の振り返り
手だて	※　ものの温まり方に関する生活場面を想起できるモデルの提示 ※　イメージ図を用いた交流	※　同質グループの編成 ※　異質グループの編成 ※　追究方法に対する助言	※　同質グループの編成 ※　考え方を振り返るものづくり ※　概念地図の活用

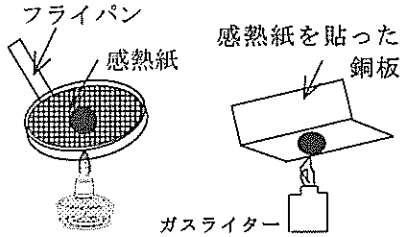
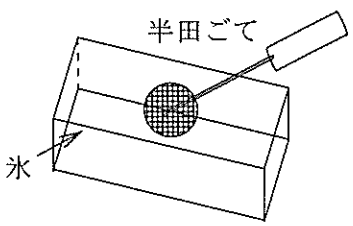
本時の目標

(1) 対流と伝導の違いを，温める対象が動く場合と動かない場合といった状態の違いと関係づけてとらえることができる。

(2) 金属の温まり方についての追究の視点を明確にもち，自分たちの考えた方法で意欲的に追究することができる。

準　　備　フライパン，銅板，感熱紙，半田ごて，ガスライター，鉄製スタンド，ガスバーナー，アルコールランプ，氷，学習プリント，学習の流れ図，既有の考え方を記した掲示物

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．これまでの学習を振り返り，本時のめあてについて話し合う。 ○　これまでで不明確な点を再実験で確かめること めあて 金属の温まり方を条件をそろえた実験によって確かめよう。	○　今日は違う考え方のグループで，不確かなところについて実験で確かめよう。
2．グループごとに焦点化された実験方法で再実験を行い，結果の考察を行う。 (1) 自分たちで考えた実験方法で金属の温まり方を調べる。 ○　多面的な視点を含んだ実験による金属の温まり方の追究 (1) フライパンや金属板に感熱紙を貼り，色の変化で熱の伝わり方を調べる。 (2) 熱源の位置を下・中・上・横と動かして，温まり方の違いを調べる。  ※　実験の準備は，学習前の時間で行わせておく。	○　どのグループも条件をそろえながら行っていこう。 ○　感熱紙の黒い色の広がりを見ていくと，金属の温まり方がわかるよ。 ○　上から熱しても熱は下の方に広がっているよ。 ○　下から熱しても熱は上の方に広がっているよ。 ○　横を熱しても，熱は横の方に広がっているよ。 ○　真ん中を熱していくと，熱は円を描くように広がっている。
(2) グループごとに，実験結果に対する考察を話し合う。 ○　金属は広がりながら温まっていくこと ○　実験結果を客観的にとらえる異質グループでの交流	○　どうして水の時とは違う結果になったのかな。
3．金属の温まり方について全体で話し合い，まとめる。 (1) クラスで，金属に対する実験結果について話し合う。 ○　金属は熱源から広がりながら温まっていくこと（伝導） 金属は水とは違い熱だけしか動かないので，熱源から広がるように温まっていく。このことを伝導という。	○　水は，熱と水が動いたけど，金属の場合は熱しか移動しないからこのような結果になったと言えるよ。
(2) 氷を温める実験を行い，物の状態の違いによる温まり方の違いについて話し合う。 ○　液体や固体といった物の状態による温まり方の違いについての把握  (1) 氷を半田ごてで温めて，熱の伝わり方を調べる。 (2) 液体である水の場合と固体である氷の場合とで，熱の伝わり方の違いを比較する。	○　氷は水だから対流するのではないかな。 ○　氷は固体だから金属と同じように伝導すると思う。 ○　半田ごてを中心にしてきれいな円を描くように穴があいているよ。 ○　熱の伝わり方は物によって決まるのではなくて，物の状態によって決まるといえるんだね。

第５学年１組　算数科学習指導案

指導者　小　森　　晃

単　　元　　天気予報を活用しよう

指　導　観

○　本単元のねらいは子供たちの登下校や学校での生活のほか，家庭や地域での生活にも大きな影響をもっている天気について，それを事前に知ることによって自分たちの生活をより快適にしていこうとする心情と，確定的な事象や不確定な事象を百分率で表した降水確率や的中率の意味をとらえて活用できる知恵を身につけることである。ここで取り扱う降水確率，的中率などの百分率については次のような内容がある。①割合としての百分率の意味や用いられ方を知り，確定的な事象だけでなく不確定な事象をも数を使って表現すること，②天気予報の情報を活用して自然の変化を知り，それに対応するよりよい生活をおくることである。

○　本学級の子供たちは天気が通学時間に大きな影響を及ぼすことから，雨天の場合には早めに家を出るなどの工夫を行っている。そのため日頃から天気予報については興味が高く，降水確率についても見聞きした経験をもっている。そこで本単元では天気予報の情報をどのように活用していくかを調べていくめあてをもとに，天気予報の各々の情報のもつ意味に迫っていく過程で割合としての的中率や降水確率の意味を調べていく。そして自分たちの生活に天気予報のどんな情報をどのように活用していくのかを考えるようにしていく。このことは身の回りの生活に算数的活動によって処理された数量が使われていることを知り，それを活用していくことにつながる。

○　本単元においては天気予報の活用の不十分さを解決していく過程で算数的活動を十分に行いながら百分率の意味と用い方を理解できるようにしていく。そのために，まずつかむ段階では１学期の学習で調べてきた通学時間に関する資料を見直して，通学時間と天気の関係について話し合う中で，天気予報を活用する大切さを感じ取らせ，単元のめあてをもたせる。次に調べる段階では実生活の中で収集してきた資料を整理する中で，どれくらい天気予報が当たっているか的中率を求めていく。さらに天気予報の降水確率について調べていく過程で不確定な事象に割合が使われていることや読みとり方を調べる。最後にまとめる段階では降水確率を自分の生活に活用するために，その割合ごとの的中率を資料から算出して天気予報をこれからの生活に生かしていくようにする。

目　　標

１．天気を予報する各々の情報の意味を知って，予報を自分の生活に活用することができる。

２．雨天になる割合（百分率）を求めたり，天気予報の当たる割合（百分率）を求めたりして，それらを目的に応じてグラフに表すことができる。

計　　画（約８時間）

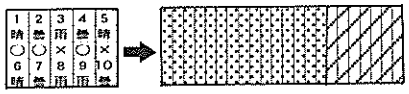
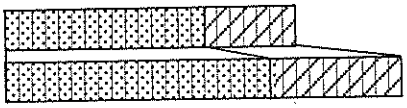
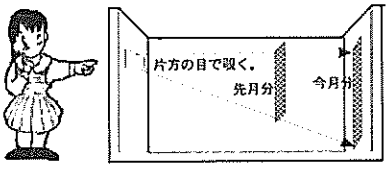
段階	つ　か　む(1時間)	し　ら　べ　る(5時間)	ま　と　め　る(2時間)
活動と内容	１．自分たちの生活を見直して天気予報を活用していくめあてをつかむ。 ○　日頃の生活の中では，天気予報の情報を十分に活用しきっていない点を取り出すこと	２．降水確率の意味を調べ，活用の仕方を考える。 (1) 的中率を調べる。(本時1/2)② ○　割合の意味を知ること (2) 降水確率を調べる。　③ ○　不確定な事象の起こりうる割合を求めること	３．雨になるかどうかの判断をする際の基準となるグラフをつくって，天気予報を活用する。 ○　降水確率と雨天の関係をグラフ化すること ○　判断基準をつくること
手だて	※　これまでに収集した通学時間と天気の資料から予報活用を見直させる。	※　日数ごとの天候の様子を帯図や分数，小数に表して的中率や降水確率を求めさせる。	※　帯図をもとに降水確率の段階ごとの的中率を求めて判断基準をもたせる。

本時の目標

(1) これまでに天気予報が当たった日数をもとに，今後予報が当たるであろう日数を調べながら，全体の日数に対する当たった日数の割合を求めることができる。

(2) 天気予報の的中率から，天気予報を登下校の際の雨具の準備など生活に活用する心情を伸ばす。

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．自分たちの生活に欠かせない天気予報がどれくらい当たるのかを調べるめあてをつかむ。 (1) 毎日の天候に備えるための方法を話し合う。 ○ 自分たちの生活に天気予報を利用していること (2) これまでに調べてきた天気予報と実際の天気の資料をもとに天気予報の的中した日数を調べるめあてをつかむ。 ○ 天気予報が当たった日数の資料を整理して，予報が当たる日数の予想をして本時のめあてをつかむこと  めあて どれくらい天気予報が当たるか調べて生活に生かそう。	○ 雨の時は早めに家を出ないといけないから，いつもより早起きをするようにしているよ。 ○ いつも前の日のうちに次の日の天気予報を見ておくと，前もって準備ができるからいいよ。 ○ 天気予報は全部当たったんじゃないのか。 ○ カードに整理してみると全体の中でどれくらいの日数当たったか，はずれたかが見やすくなる。 ○ 今月の予報が当たったりはずれたりしそうな日を調べるためにもこれまでの当たった日を整理しないといけないな。 ○ ２５日の内で当たったのが２０日だから４／５になってるんだ。だから今月も４／５になるとしたらだいたい２４日くらいかな。 ○ 全体の中でどれくらいの部分があるかを分数や小数にすると数字で表せるんだ。 ○ 天気予報は絶対当たる訳じゃないから，夜ふって朝だけふってなくても傘をもっていくようにしよう。
2．これまでの資料から今月の天気予報が当たる日を予想する。 (1) 天気予報と実際の天気を記した資料を整理する。 ○ 全体量の中の当たった日の数量を調べること ※ 帯状のカードを使って天気予報と実際の天気の資料を整理させ全体の中でどれくらい当たったかを読み取らせる。 (2) 今月雨がふるであろう日数をこれまでの割合から求める。 ○ これまで調べた日数に占める予報の的中した日数から，これから的中するであろう日数を調べること  ※ 帯状カードに雨天と晴天を記して比較させる。 ・分数で割合を求めてから今月分を予想する。 ・小数で割合を求めてから今月分を予想する。 ※ 全体の日数の違う２つの帯状のカードを並べて，割合が同じになっているかどうかを確かめながら同じ割合になる日数を調べさせる。 	
3．調べたことから，天気予報を自分たちの生活にどう生かしていくか話し合い学習をまとめる。 ○ （これまで予報の当たった日数）÷（資料全体の日数）によって予報の的中率を求めること ○ 天気予報をよりよく生活に生かす方法を決めること ※ 天気予報は確実なものではないことから，曇りなどの予報でも雨具を準備するなどよりよい工夫を各自に決めさせる。	

第５学年２・３組　体育科学習指導案

指導者　　稲　津　一　徳

単　　元　心や体をほぐそう！ぼくの・わたしのリラックス運動（体ほぐし）

指　導　観

○　本単元は，手軽な運動や律動的な運動の行い方を工夫して，自己の心や体の状態に気付き，調子を整えたり，仲間と交流したりできるようにする知恵と，運動とのかかわり方を日常生活に広げようとする向上的心情や仲間と共に運動の心地よさを味わおうとする調和的心情をもつことをねらいとしている。具体的には，①心や体に心地よい手軽な運動や律動的な運動を体験し，自己の心や体の状態に気付くこと，②体験した運動の行い方を工夫し，日常生活での身のこなしや体の調子を整えることができると共に，運動を通して仲間と支え合うかかわりを楽しむことができること，③工夫した行い方を学習や日常生活において，仲間と協力して試したりよりよいものに作り変えたりしていくことができること。この３つが本単元で学習できる内容である。

○　本学級の子供たちは，日常の体育学習において，課題解決の方法を工夫し，めあてとする動きに意欲的に挑戦する子供が多い。また，休み時間など数人のグループをつくり，外で元気に友達とかかわりながら遊ぶ姿も見られる。そのなかで，運動を通して心や体を解放したり，日常生活における身のこなしや仲間とのかかわり方を体験的に身につけたりしており，運動のもつ様々な心地よさを感じてきている。そこで，自己の心や体と運動とのかかわりを客観的に見つめることができ始めるこの期に，本単元を設定し，具体的な運動体験を通して運動のもつ心・体・仲間とのかかわりに与える心地よさを味わうことは，運動とのかかわりを日常化すると共に，運動を通して自己をコントロールする力を高めるうえで意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，主体的に運動の行い方を工夫するなかで，自己の心や体への気付きと共に，体の調整や仲間との豊かな交流を生み出し，運動の心地よさを味わわせたい。そのために，見つめる段階では，仲間とのかかわりを中心に心や体に与える心地よさの視点から運動を教材化し，体験させるなかで，運動の心地よさを整理すると共に，目的や課題を捉えられるようにする。また，味わいたい運動の心地よさから，かかわる運動を選択できるようにする。うみだす段階では，味わいたい運動の心地よさが明確になる比較体験活動を設定し，運動の行い方を工夫する視点がもてるようにする。さらに，最後の交流を意識させ，行い方を日常生活で友達と実践していけるようにする。あじわう段階では，体験的に相互の運動の行い方のよさを評価できるワークショップ形式の交流会を設定し，自己の運動の行い方を日常生活に活用していく意欲が高まるようにする。

目　　標

１．運動の心地よさを味わう行い方を工夫し，実践するなかで，自己の心や体の状態に気付き，体の調子を整えることができると共に，運動を通した仲間とのかかわりを楽しむことができる。

２．工夫した運動の行い方を日常生活にも活用したり，運動を通して仲間と主体的にかかわりをもったりしながら，運動の心地よさを味わおうとする意欲をもつことができる。

計　　画　（約７時間）

段階	見つめる（２時間）	うみだす（４時間）	あじわう（１時間）
活動と内容	１．多様な運動の心地よさを感じ，運動する目的や課題を捉える。 ○　心地よさの感得・整理 ○　運動の目的・課題把握 （目　的） ・もっと運動の心地よさを味わおう。 （課　題） ・みんなが心地よさを味わえる行い方を工夫しよう。 ○　かかわる運動の選択	２．課題解決の方法を自己決定し，工夫しながら目的を達成する。 (1) 自己の目的に応じた運動の行い方を比較体験する。　① ○　運動の行い方の視点設定 (2) 比較体験をもとに，目的に応じた運動の行い方を決定し，付加・修正する。（本時２／３）③ ○　運動の行い方の工夫・創造 ↑↓繰り返し (3) 運動の行い方を日常実践する。 ○　運動の心地よさの相互評価	３．運動の行い方を体験的に交流し，学習の成果を評価する。 ○　運動の心地よさの実感 ○　自己の運動の行い方に対する相互評価 ○　日常生活へ運動の行い方を活用していく意欲の強化
手だて	※　仲間とのかかわりを中心に心・体への心地よさが期待できる運動の教材化 ※　心地よさを整理する活動	※　目的に応じた運動の行い方を比較体験する場の設定 ※　行い方の視点づくり⇔行い方の付加・修正⇔行い方の日常実践の活動構成	※　ワークショップ形式で行い方について体験的に相互評価できる場の設定

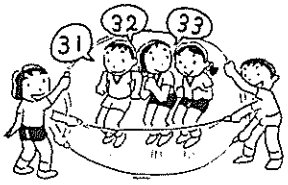
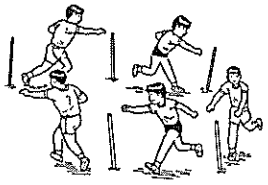
本時の目標

○　心・体・仲間とのかかわりがほぐれる運動の行い方づくりに向けて，意欲的にルール・場・用具を付加・修正しながら，運動に応じた身のこなしや動きを通した仲間との一体感を楽しむことができる。

準　　備　風船，体操用棒，長縄，カラー布ガム，ケンステップ，運動の行い方ボードなど

学習指導の過程

<table>
<tr><th colspan="3">活　　動　　と　　内　　容</th><th>子供の思考の流れ</th></tr>
<tr><td colspan="3">1．本時までの学習について想起し，本時のめあてを話し合う。
○　本時までの運動の行い方づくりを想起すること
○　本時課題を把握すること
※　運動の行い方ボードをもとに，本時までの行い方を振り返らせ，本時の見通しを話し合うなかでめあてをつかませる。
めあて
さらに心・体・仲間とのかかわりがほぐれる運動の行い方を，ルール・場・用具を工夫して楽しもう。
2．本時までにつくった運動の行い方を，グループでさらに工夫しながら，楽しく運動する。
(1)　グループで，行い方づくりの視点に応じた運動を工夫する。
○　運動に応じた身のこなしの発揮　○　仲間との一体感の感受
○　視点（場・ルール・用具）に応じた行い方の工夫
※　運動の行い方ボードに示した工夫の視点（ルール・場・用具）をもとに，行い方を工夫させる。
※　各グループを巡視しながら，広げたい工夫の視点については，モデルとして取り上げ，紹介していく。
【予想される工夫の視点と活動の例】</td><td rowspan="5">手つなぎ風船ラリーの例
○　前は風船の数を２つから３つに増やして，始めはうまくいかなかったけど，だんだんみんなの気持ちや動きが一つになって，たくさん風船を打てたので楽しかったな。
○　今日は，もっとみんなの気持ちや動きが一つになるように，場を工夫していきたいな。
○　今日は，棒取りグループがしていたように，動ける場所を決めてしてみよう。
○　ラリーをする場所を区切ると，隣の友達の動きも考えて，線からはみ出さないようにしないといけないので，気持ちも一つになるね。
○　あのグループがしているように，目かくしをすると，動きや気持ちを合わせるのは難しそうだな。
○　制限区域や目かくしがあっても，みんなの動きが合って，回数が増えてきたぞ。
○　制限区域をつくったり，目かくしですると，動きを合わせてラリーを続けることは難しくなったけど，うまく続いた時は，心も体も仲間とのかかわりもすっきりしたのでよい工夫だと思う。</td></tr>
<tr><td>手つなぎ風船ラリー</td><td>チャレンジ長縄</td><td>ドキドキ棒取り</td></tr>
<tr><td colspan="3">◆　みんなの協力が高まり，心や体がほぐれていく運動の行い方を工夫しよう。（目的）</td></tr>
<tr><td>◇用具・場を工夫し回数に挑戦する。

・制限区域を決める。
・目かくしで打つ。</td><td>◇ルールを工夫し回数に挑戦する。
 
・入る人数を増やす。
・目かくしで跳ぶ。</td><td>◇場・ルールを工夫し回数に挑戦する。
 
・人数を増やす。
・場を広げる。</td></tr>
<tr><td colspan="3">(2)　工夫した運動の行い方の高まりについて，グループ内で話し合う。
○　心・体・仲間とのかかわりから見た行い方の相互評価
※　運動の行い方ボードをもとに，心・体・仲間とのかかわりの面から工夫した行い方をグループ内で相互評価させる。
3．本時学習について話し合い，まとめる。
○　運動の行い方の高まりの実感
○　身のこなしや仲間との一体感の高まりの実感
※　グループでの相互評価をもとに，行い方の工夫と身のこなしや仲間との一体感の高まりについて出し合わせる。</td></tr>
</table>

第６学年１組　家庭科学習指導案

指導者　　篠　原　裕　子

題　　材　　めん料理をつくろう

指　導　観

○　本題材は，めん料理に野菜や加工食品などの食材を加えることを通して，よりよい１食分の食事を整える知恵と，食生活の創り手としてのかかわりを見いだし進んでつくろうとする向上的心情，家族のために進んではたらこうとする調和的心情をもつことをねらいとしている。めん料理には，主にラーメンをとりあげる。ここでの具体的な内容は，①めんをお湯からゆでたり，合わせて入れる食材をいためたりして計画的に調理をすること，②加工食品のよさや問題点を知り，栄養や経済性，効率などを考えながら，自分に合うように選ぶこと，③手軽にできる１食を家族のために応用して家庭実践をすること，である。この学習を通して，家族の健康や好みに応じて日常食をつくることができると考える。

○　本学級の子供たちは，第５学年で「水からゆでる」「いためる」技能と，健康や家族の好みを考えて食材の組み合わせや切り方，味付けなどを工夫していくことを学んできている。また，獲得した技能や知識を活用して家庭実践を行い，家族から喜ばれて心が満たされる体験もしてきている。そこで，本題材では，めん料理を取り上げて，複数の技能を必要とする調理をすること，日常生活の中でよく利用される加工食品の活用の仕方を身につけるようにする。

○　本題材では主にラーメンに他の食材を加える調理をする過程で，家庭からの情報収集や学校での実践的・体験的活動，家庭での調理実践などの活動を意欲的に繰り返すようにする。そのために，つかむ段階では自分の食生活へのかかわりを見直して食材選びなどの課題をもたせるために，課題発見実習を行う。さぐる段階では，各自の課題に応じた学習計画にそって，食材選び，ゆでたり計画的に調理したりする課題解決実習や家庭実践活動を行う。その際に友達やＧ・Ｔから情報収集活動を行ったり，家族から評価をしてもらったりしながら改善を進めていく。つくる段階では，家族からの評価を交流させることで新たな課題をもち，発展実習，家庭実践を継続できるようにしたい。

目　　標

１．日常食としてめんを好みの硬さにゆでたりいためたりする技能や，具として手軽な加工食品を栄養面，経済性などを考えて選ぶなどの知識を自分の課題にあわせて獲得し，活用することができる。

２．自分や家族の思いを生かしながら，めんのゆで方や具の選び方を応用発展させ，家庭実践を継続していこうとすることができる。

計　　画　（約１０時間＋課外）

段階	つかむ（４時間＋課外）	さぐる（３時間＋課外）	つくる（３時間＋課外）
活動と内容	１．めん料理について話し合い，課題をもつ。 (1) めん料理や加工食品をつくったり食べたりした経験について話し合う。　② ○　自分のかかわりの実態把握 (2) めん料理をつくる。　② ○　追究の見通し	２．自分の課題にあうように加工食品を利用しためん料理の作り方を追究する。 (1) 食材選びの課題解決する。　① ○　栄養を考えた食材選びをすること (2) 実習を通して解決し，家庭でも実践をする。　（本時１／２）② ○　課題の技能を獲得すること	３．家族の思いを取り入れて，継続実践をする。 (1) 家族の思いから新たな課題を見いだし，実習をする。　② ○　家族のための知恵獲得 (2) 家庭実践を紹介する。① ○　継続実践への意欲喚起
手だて	※　加工食品を利用しためん料理作りに関する事前調査と課題が明確になる実習の場づくり（食材，加熱時間，思い）	※　課題別に家族，友達，文献から知恵を集めた情報コーナーづくり及びＧ・Ｔの招聘 ※　家族からの感想	※　ビデオや写真など家庭実践の様子と家族の反応がわかる表現物の準備

本時の目標

○　作りたいラーメンのゆで加減とスープの濃さについて実験的実習を行うことを通して自分の課題を解決することができる。

準　　備　事前の情報収集プリント，各自の課題解決に必要な実習の食材・器具，エプロン

学習指導の過程

<table>
<tr><th>学　習　活　動　と　内　容</th><th>子供の思考の流れ</th></tr>
<tr><td>
1．前時に調べたゆで方やスープの濃さについて想起し，本時のめあてをつかむ。
○　自分の課題（めんの種類とゆで加減，スープの濃さと塩分の関係に関すること）の想起
めあて
作りたいラーメンのゆで加減とスープの濃さについての自分の課題を解決しよう。
※　流れ図と学習ノートで，課題発見活動を振り返ることができるようにする。
2．実習を行い，課題を解決する。
(1) ゆで加減やスープの濃さについて課題解決実習を行う。
○　自分の好みや健康を考えて，ゆで加減（計時），スープの濃さ（計量）などを考えて調理することができること
<table>
<tr><th>課　　題</th><th>実験的実習の例</th></tr>
<tr><td>①　めんの硬さ
※　めんの種類別（固形，生など）にグループを分ける。</td><td>・１分，１分半，２分，２分半とそれぞれをゆでて，同じ濃さのスープに入れ，試食をする。
・できあがっためんを試食し，めんの種類と好みの硬さを決定する。</td></tr>
<tr><td>②　スープの濃さ
※　スープの種類（しょうゆ，みそ，豚骨など）別にグループを分ける。</td><td>・好みの味のスープを，規定の量とその量より薄めるお湯の量をかえたスープをつくり，スープの粉の量とお湯の量の割合を計算する。
・めんを入れて食べたときの濃さで確かめる。</td></tr>
</table>
※　主な課題別グループで実習を行わせる。
(2) 作ったラーメンを試食し，課題解決の結果について学習プリントに記入する。
○　ゆでためんとスープを合わせたときの食感や塩分を考えたうすめ方について，食べた結果をまとめること
3．本時のまとめと次時の学習の確認をする。
○　食材選び，ゆで方とスープの濃さについて本時までに解決したことを生かして，次時は１食のラーメンを計画的に調理すること
</td><td>
○　ラーメンのゆで方やスープの塩分について，Ｇ・Ｔや家庭から情報収集をしてきたから，今日の実習でそれを確かめてみたいな。
○　自分はかためんが好きなのだけど，１回目の実習では柔かったので，ゆで時間を１分と１分半と２分で試そう。
○　食べた感じは，１回目の時よりめんが硬くて，おいしい。自分の好みの硬さにするためには，１分半がちょうどよいようだ。情報収集したことがうまくできるようになった。
○　スープを薄めるお湯の量をいくつか調整して飲んでみよう。
○　缶詰の塩分も考えた味付けをしたから，塩味が控えめになってうまくいっているな。
○　スープだけだとちょうどよいと思っていたけど，麺を加えると少し薄くなるのだな。
○　めんのゆで方とスープのうすめ方がよくわかったから，今度は，他の食品も加えて，自分のつくりたかったラーメンを完成させたいな。
○　他の食品を加えるときは，計画的に調理をしなければ，めんが伸びたり，スープが薄くなったりしたので，今度の実習は，計画を立てて望もう。
</td></tr>
</table>

第６学年２・３組　音楽科学習指導案

指導者　　豊　村　雅　義

題　　材　創り出そう！私たちの筑前今様　（教材　日本古謡「越天楽今様」「筑前今様」，雅楽「越天楽」）

指　導　観

○　本題材は，「越天楽今様」「筑前今様」をもとに自分たちで創った今様を合唱奏する活動を通して，音の重なりやふしの特徴を生かして表現を工夫する知恵を身に付け，音色感・旋律感を育て，音楽で生活に潤いを与えてきた先人の心に共感し音楽を愛好する心情を育むことをねらいとしている。「越天楽今様」は，雅楽「越天楽」の旋律に先人が歌詞をつけたものである。各地の今様で現存するのは福岡の「筑前今様」のみで，民謡「黒田節」の源流である。これらは，合唱奏にアレンジし易く，郷土文化に誇りを感じながら伝統音楽を感受・表現することに適している。具体的な学習内容は，①旋律や音の重なりの美しさを感じ取り，意欲的に鑑賞・表現すること，②歌詞の内容を生かして表現を工夫すること，③音色に気を付けて旋律楽器や打楽器を演奏すること，である。

○　本学級の子供たちは，歌詞や曲想を生かして表現を工夫したり，音色の特徴に気を付けて鑑賞したりできるようになってきている。日本のふしに関しては，第５学年「歌い継ごう！博多の心」の学習において，生活の中から生まれ地域に受け継がれた音楽のよさを感じ取っている。そこで，雅楽やそれをもとにした今様と出合わせることで，雅楽の楽曲に歌詞をつけ音楽を生活に取り入れてきた先人の心に共感することができると考える。このように，郷土の音楽への関心が高まっているこの期に本題材を設定することは，子供と音楽とのかかわりを深める上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，地域で雅楽を継承している箱崎伶人座の方や博多古謡の研究家等を交えた音楽活動を設定し，音楽で生活に潤いを与えてきた先人の心を感じ取らせたい。であう段階では，様々な今様と元歌である雅楽に出合わせ，生の演奏や歌を鑑賞する場を設定し，雅楽をもとに先人が今様を歌ってきたことを捉えさせ，今様を表現したいという意欲と見通しをもたせる。ふかめる段階では「越天楽今様」の合唱奏や自分たちの思いを歌詞に表して新たな今様を創り出す活動を通して，独特の音の重なりを表す楽器の選択や奏法，歌詞の内容に合った歌い方など，表現を工夫させる。そのために，古謡研究家との交流を行い，今様を楽しんでいた先人の心に共感させる。あじわう段階では，発表会を行い満足感を味わわせ，伝統音楽への関心を更に高めていく。

目　　標

１．雅楽や「越天楽今様」「筑前今様」の特徴（音の重なり，音色，旋律等）を感じ取り，楽器の選択や奏法，発声や唱法を工夫しながら自分たちの「今様」を表現することができる。

２．雅楽や今様への関心を高め，主体的に鑑賞したり合唱奏したりして，先人が音楽を通して生活を潤いのあるものにしてきたよさを感じ取ることができる。

計　　画　（約７時間）

階	であう（３時間）	ふかめる（３時間，課外）	あじわう（１時間）
活動と内容	１．「越天楽」「越天楽今様」「筑前今様」と出合い，よさを捉え，表現への意欲と見通しをもつ。 ○　音の重なりや音色，旋律や歌詞の感受・把握 ○　今様の歴史の把握と関心	２．古謡研究家と交流しながら「筑前今様」「越天楽今様」を表現し，自分たちの「今様」を創り表現を工夫する。（本時２／３） ○　音色を考えた楽器の選択・奏法の工夫 ○　五七調で歌詞をつくること ○　歌詞の内容を生かした発声や唱法 ○　音の重なりを感じての合唱奏	３．「今様」の合唱奏の発表会を行い，更に調べたいことを話し合う。 ○　発表による音楽活動の満足感の感受 ・思いを伝える音楽のよさ ・伝統への誇り
手だて	※　今様や雅楽の生演奏の鑑賞と意見交流の場 ※　筑前今様の歴史についての資料提示	※　様々な歌い方や五七調の歌詞の例示 ※　合奏へのアレンジと楽器を選択する場 ※　古謡研究家をむかえての心をさぐる活動や表現の仕方を追究する活動の場	※　箱崎伶人座の方々等とともに発表していく場 ※　新しい雅楽曲の提示や発展課題を話し合う場

本時の目標

○　博多古謡研究家の方と交流しながら合唱奏する活動を通して，自分たちが創った「今様」の気持ちが伝わるように，歌い方（唱法，強弱，発声 等）を工夫することができる。

準　　備　「筑前今様」の拡大楽譜と情景画（雅楽の写真等），書き込み用の楽譜，学習ノート，楽器（雅楽の楽器，アコーディオン，鍵盤ハーモニカ，シンセサイザー等）

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの活動を振り返り、本時のめあてを話し合う。 (1)「筑前今様」を合唱奏して，よさを話し合う。 ○ 音色（音の重なり）や歌い方（歌唱） (2) 自分たちが創った「今様」を表現してみて，工夫したいことを出し合う。 ○ 気持ちが伝わる表現の工夫への気付き ※　博多古謡研究家の方を招いて，一緒に表現していただいたり意見を交換したりして本時のめあてをつかませる。 めあて 気持ちが伝わるような歌い方を工夫して６の２・３流「今様」を合唱奏しよう。 2．歌詞の内容に伝えたい地声による力強い発声や歌詞の内容を生かした歌い方など，古謡研究の方と交流しながら表現を練り上げる。 (1) グループごとに課題を確認し，自分たちなりに工夫しながら表現する。 ○　歌詞の内容に合った歌い方（唱法，強弱，発声 等） はっきりと　力強く あらつにー　そーびえる　まなびやに　響かせて ※　教師や古謡研究家の方による範奏・範唱をもとに話し合わせ，唱法や強弱，発声等の工夫の観点をとらえさせる。 ※　工夫したいことをカードに書かせて，グループ内やグループ同士で聴き合いを行わせ，相互評価や古謡研究家との交流などで，思いを伝えていく表現の仕方を考えさせる。 (2) お互いの「今様」の表現の工夫を振り返る。 ○　今様に込められた人々の心への共感 ※　古謡研究家に，今様ができた頃の時代背景や先人の心について説明していただき，誇り高く，歌で自己表現していた先人の心を捉えさせ，自分たちの今様で最も伝えたいことを強調した表現の仕方を考えさせる。 3．自分たちの「今様」の合唱奏の発表を行い，本時学習をまとめる。 ○ 自分たちの心を伝えていく音楽のよさの感受 ※ 古謡研究家の方から肯定的な評価をしていただく。	○　「筑前今様」は雅楽「越天楽」に黒田藩の武士が今の気持ちで歌詞をつけてきたものだったね。 ○　日本独特の感じがするように楽器で演奏してみたね。 ○　私たちの今の気持ちを伝える今様の歌詞もつくったよ。うまく気持ちが伝わるように表現したいな。 ○　地声ではっきり歌うと雰囲気が出るかな。 ○　古謡研究家の歌を聴くと，西洋音楽と歌い方が違うみたいだね。 ○　自分たちが創った今様だから，伝えたい事がうまく伝わる表現をしたいな。 ○　ぼくたちは，学校のことを歌詞に表したから，学校の楽しさや伝統への誇りが伝わるように表現したいな。 ○　昔「筑前今様」を歌ってきた人々はどんな気持ちを込めて，どんな歌い方をしていたのかな。 ○　雅楽のふしに合わせて，武士の誇りを力強く歌い上げたんだね。 ○　つくった歌詞で一番誇りにしたいところを強調したいところが盛り上がるように力強く歌ってみよう。 ○　音楽で自分たちの心を表す「今様」はすばらしいな。

第３・４学年さくら組　国語科学習指導案

指導者　　早　川　由　洋

題　　材　　ごっこあそび「いらっしゃい　いらっしゃい」　～おみせやさんより～

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から７歳程度の３年生２名と４年生３名の計５名で構成されている。子供たちは，読み聞かせや自ら簡単な本を選んで読むことを好んでおり，お話を劇化して遊ぶことに意欲的に取り組むことができる。現在，読むことを通して，事物名称や行為を表すことばの意味を理解する段階にあるが，それらのことばの意味を理解し，生活に生かしていくことが，自分の意志を的確に表現したり，他者のことを理解したりする素地になると考える。それと同時に，意味を理解したことばを活用できるような，会話文の読みを通した話形の拡充を図ることが重要な時期でもある。

○　本題材のねらいは，子供たちが生活の中で出会う事物や行為を表すことばを読み，行動化を通して意味を理解していくことである。具体的な活動としては，①意識化するために教材文を読むこと，②ことばの意味を行動化し理解すること，③理解したことばをごっこ遊びの中で活用し，ことばの意味を確かめること，④目的達成の喜びを味わうことなどである。これらの内容を学習することは，読む楽しさを感じるとともに，生活に生きることばを獲得する上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，「楽しくお店屋さんごっこ遊びをしよう。」という目的のもと，語句や文章による会話文を読んで，事物や行為を表すことばの意味をとらえる活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，おみせやさんごっこと出会わせ，買い方についての不十分さを実感させる。その上で，教材文を提示し，もっと楽しくお店屋さんごっこをすることに興味・関心や目的意識をもたせる。ふかめる段階では，各場面ごとに尋ねたり，要求したりすることばを配列し行為を具体的にすることで，ことばの意味をとらえ意志伝達ができるようにする。まず，教材文の通りに行動化することによって，ことばの意味を理解したり，場面の様子をとらえたりさせる。次に学習段階に応じた試行文にそって，理解したことばを使いながらごっこ遊びをすることで，ことばの意味を確かめるようにする。いかす段階では，楽しく買い物ごっこをすることで，ことばの有用性を感じとらせるとともに，活動に対する達成感を味わえるようにする。

目　　標

１．語句や文を読んで，読んだ通りに行動してことばの意味を理解することができる。

２．買い物ごっこをすることに興味・関心をもって取り組み，読むことによって目的を達成することができたことばの有用性を味わうことができる。

計　　画（約５時間）

段階	第１次　であう（１時間）	第２次　ふかめる（３時間）	第３次　いかす（１時間）
活動と内容	１．買い物ごっこに出会い，教材文を通して，さらに楽しいごっこ遊びにすることを話し合う。 ○　活動への目的意識をもち，手順や方法等について理解すること	２．教材文や買い物カードをもとにごっこ遊びをする。 （１）品物の値段を尋ねて買う。　① （２）品物の有無を尋ねて買う。　① （３）品物の場所を尋ねて買う。（本時）① 語句や文を読む ⇒ 行動化する ⇒ ごっこ遊びをする ○ ことばを意識すること　○ ことばの意味をつかむこと　○ ことばの意味を確かめること	３．教材文「いらっしゃいいらっしゃい」をまとめ，お店屋さんごっこをして遊ぶ。 ○　活動に対する達成感や成就感を味わうこと ○　ことばのもつおもしろさや有用性を味わうこと
手だて	※　課題をつかむごっこ遊びの場の設定 ※　ペープサート劇の提示	※　音声化されたことばを具体物や行動につなぐヒントカードの活用 ※　繰り返し活動をする中で，既習内容を使って言葉の意味を獲得していく支援の削減と場の中での読みによる評価活動	※　獲得した要求することばを使うごっこ遊びの場の設定 ※　活動に対する賞賛

本時の目標

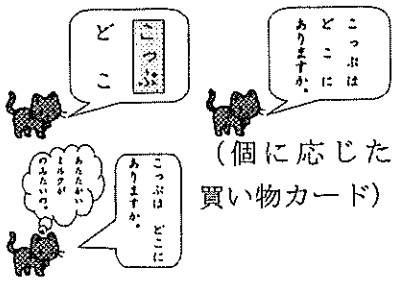
1．「○○はどこですか。」と買い物をするために必要なことばを読み，行動化する中で事物名称や行為を表すことばの意味をとらえ，ごっこ遊びで活用することができる。

2．語句や文を読むことで，場所を尋ねることができたことばの有用さを味わうことができる。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・ 教材文にそって，品物を探し「○○どこ。」と尋ねて買い物をする中で，事物名称や行為の意味を理解し，ごっこ遊びをすることができる。	・ 教材文にそって，品物を探し「○○はどこですか。」と尋ねて買い物をする中で，行為の意味や買い物の簡単な理由を理解し，ごっこ遊びをすることができる。	・ 教材文にそって，買い手の尋ねに応対することで，行為の意味や買い物の理由を理解し，ごっこ遊びをすることができる。

準　　備　ペープサート劇のビデオ，手順図，ランゲージカード，買い物カード，案内カード（ヒントカード），ごっこ遊びの場となるお店と具体物

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　動　と　内　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td>1．前時に行った品物を買うごっこ遊びをし，ペープサート劇を見て，本時の活動について話し合う。
○　遊びの楽しさを想起し，活動への意欲をもつこと
○　活動の手順や方法に見通しをもつこと
めあて
かいたいものをさがして　かいものごっこをしよう。
2．語句や文を読んで，ごっこ遊びをする。
<table>
<tr><th>Aグループ</th><th>Bグループ</th><th>Cグループ</th></tr>
<tr><td colspan="3">(1) 教材文を読んで場面の中からことばを意識する。</td></tr>
<tr><td>○ 語句を中心とした教材文の文字を正しく読み，事物名称や行為を意識すること</td><td>○ 単文で構成された教材文を読み，場所を尋ねることばを意識すること</td><td>○ 教材文を読み，場所の尋ねに応対することばを意識すること</td></tr>
<tr><td colspan="3">(2) 教材文の場面の様子に合わせて行動化する。</td></tr>
<tr><td>① 品物の有無を店員に尋ねる。
② 品物を探してみた後に品物のある場所を店員に尋ねる。
③ 品物の値段を店員に尋ねて買い物をする。
○ 事物名称や行為の意味を理解すること</td><td>① 品物の有無を店員に尋ねる。
② 品物を探したり，場所を店員に尋ねたりする。
③ 品物の値段を店員に尋ねて買い物をする。
④ 店員の話に，応答する。
○ 行為を表すことばの意味を理解すること</td><td>① お客を店内に迎える。
② 案内カードを読み，尋ねに答えて場所を教える。
③ 買い物カードから，買い物の理由を読んで，お客に活用の仕方を伝える。
○ 行為やその理由を理解し応答すること</td></tr>
<tr><td colspan="3">(3) 品物の場所を探してごっこ遊びをする。</td></tr>
<tr><td>買う品物の対象を変えてごっこ遊びをする。
○ 「○○ある。どこ。いくら。」を活用すること</td><td>買う品物の対象を変えてごっこ遊びする。
○ 「○○はありますか。どこですか。いくらですか。」を活用すること</td><td>買う品物の対象を変えてごっこ遊びをしたり，客の尋ねに答えたりする。
○ 場所や活用の仕方を伝えること</td></tr>
</table>
3．ごっこ遊びでできたことや頑張ったことを発表し合う。
○　ことばを使ってごっこ遊びをした成就感を味わうこと</td><td>1．活動へ目的意識や見通しをもたせる支援
○　前時まで行ってきたごっこ遊びをする場の設定
○　話の大体をつかむペープサート劇ビデオの提示
○　個に応じた教材文の提示
2．個の活動を促す支援
Aグループ
・文字の読みを聴覚的にとらえるランゲージカードの活用
・絵図による案内カードの提示
Bグループ
・絵図とことばによる案内カードの提示
・場の中における確かめの読み
Cグループ
・尋ねに応対する案内カードの活用
・買い物の理由を読みとる買い物カードの活用
 

（個に応じた買い物カード）
3．成就感を味わわせる支援
○　遊びを発表しあう場の設定</td></tr>
</table>

第５・６学年梅組　算数科学習指導案

指導者　　坂　田　佳　美

題　　材　ぼくのわたしのせいかつカレンダーをつくろう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から７歳程度の５年生４名，６年生３名の計７名で構成されている。子供たちはこれまでの学習を通して，数える・合成分解・計算・金銭処理などの数量を処理する力を身に付け，それらの力を使って，個数を数えてのおやつの配膳，買い物，材料を数えてのプレゼント作りなどを経験してきている。具体的な学習段階は，10までの数対象を１つずつ数えている段階，５や10をまとめて50までの数対象を数えている段階，100までの数をとらえて加法・減法に取り組んでいる段階などがあり，個人差が大きい。暦については，どの子供も昨日・今日・明日などの言葉を使ったり日付や曜日を読んだりして，生活場面を通して親しんできている。

○　本題材のねらいは，一人一人の実生活に基づいた１学期の生活カレンダー作りを通して，数字で日付や曜日を表したり，日数を数えたり，簡単な日数計算をしたりして，暦を理解し利用する数量の力を高めていくことである。生活カレンダー作りを通して，自分の生活を暦という数量的な視点から見直していく本題材には，次のような内容がある。①日付や曜日を読んだり書いたりすること，②七曜表のしくみをとらえること，③日数を数えたり計算したりすること，④暦を使って計画的な見通しをもった生活をすることである。このような学習で子供たちは，暦の理解や利用という生活上の数量的課題に取り組む力を培いながら，自分の生活を見直し計画的に過ごしていく態度も身に付けていくことができ，将来の自立した豊かな生活を考える上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，子供たち自らが，「自分のせいかつカレンダーを作ろう」という意識のもとに，カレンダー作りに繰り返し目的をもって取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，１学期の学校行事や個人の予定を話し合い，カレンダー作りへの興味・関心や目的意識をもたせ，作り方についての個別の操作方法を確認する。つくる段階では，カレンダー作りを通して，①数字を日付や曜日と対応させて順に並べてカレンダーを作る，②日付と出来事を対応させて，したことや予定していることの日数を数えたり計算したりする，③自分の生活を振り返ったり今後の計画を立てたりする，という一連の操作活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。いかす段階では，できあがった生活カレンダーを発表し合い，今後の活動への取り組みに生かし，活動を達成した成就感や数量のよさを味わえるようにしていく。

目　　標

○　日付や曜日を読み書きしたり（Aグループ），日数を数えたり（Bグループ），日数を計算したり（Cグループ）しながら生活カレンダーを作り，自分の生活を振り返ったり予定を立てたりする。

計　　画（約５時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（1時間）</th><th colspan="3">つくる（３時間）</th><th>いかす（１時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．１学期の活動について話し合いカレンダー作りを計画する。
○　活動への目的意識や興味・関心をもつこと</td><td>２．１学期の出来事を示した自分の生活カレンダーを作る。
(1)　４月の生活カレンダーを作る。
○　日付と曜日を対応させる横型の暦の作成と理解</td><td>(2)　５月の生活カレンダーを作る。(特)
○　週と日付・曜日を対応させる七曜表の暦の作成と理解</td><td>(3)　６月・７月の生活カレンダーを作る。
○　七曜表の暦の作成・理解と利用の仕方をとらえること</td><td>３．１学期の生活カレンダーを発表し合い生活の計画を立てる。
○　活動を達成した成就感や数量のよさの感得</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　計画表の提示
※　生活カレンダーの見本の提示</td><td colspan="3">※　生活カレンダー作りの場の設定
※　個に応じた教材・教具（取り外しのできる数字・曜日カード・写真・数字表・曜日表）の準備，個に応じた声かけ・補助</td><td>※　実生活での利用について話し合う場の設定</td></tr>
</table>

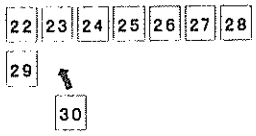
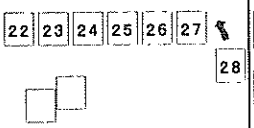
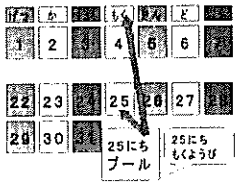
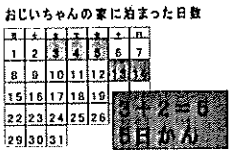
本時の目標

○　数字で日付や曜日を表したり（Aグループ），日数を数えたり（Bグループ），簡単な日数計算をしたり（Cグループ）して５月の生活カレンダーを作り，自分の生活を振り返る。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・　数字を順に並べたり日付を曜日と対応させて読んだりして，したことと日付や曜日を対応付ける。	・　数字を１日ずつ順に並べたり，日数を数えたりして，したこととかかった日数を対応付ける。	・　数字を７日ずつ順に並べたり日数を計算したりして，したこととかかった日数を対応付ける。

準　　備　　生活カレンダー（数字カード・曜日カード・写真），個人別活動表，計画表，手順絵

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	個の活動を促す支援
１．４月の生活カレンダーを見合い，５月の生活カレンダー作りについて話し合う。 ○　活動への意欲をもち，個別の課題を確認すること めあて たのしかったことやがんばったことがわかる，５月のせいかつカレンダーをつくろう。	１．活動への目的意識や見通しをもたせる支援 ○　前時までのカレンダーの提示と計画表の提示 ○　手順絵とモデル演示の提示 ○　５月の個人別活動表と活動様子がわかる写真の提示
２．生活カレンダーを作り５月の生活を調べる。	２．個の操作活動を促す支援
Aグループ / Bグループ / Cグループ	Aグループ ・数字と曜日を対応付けて強調するカレンダーの準備 ・数字表の準備
(1) 数字を順に並べて５月のカレンダーを作る。	
○　数字カードを取り出し順に並べること  	○　数字を１つずつ書き順に並べること  	○　数字を７つずつ書き順に並べること
(2) 出来事と日付を対応付けたり日数を調べたりする。	
○　出来事を日付や曜日と対応付けること  	○　出来事にかかった日数を数えること 	○　同種の出来事ごとの日数を計算すること 
(3) 日付や日数と対応づけて生活を振り返る。 ○　暦を通して自分の生活を見直すこと	
※　(1)～(3)の活動を繰り返し，間違った場合やわかりにくい場合には，数字表や曜日表の使用を促す。	Bグループ ・数字と曜日を対応付けて強調するカレンダーの準備 ・曜日表の準備
３．出来上がった生活カレンダーをもとに，一人一人の５月の生活について発表し合う。 ○　生活カレンダーを作り上げた達成感や，暦を利用していく態度を培うこと	Cグループ ・七曜をまとめたカレンダーの準備 ・日数の計算ができる学習ノートの準備 ３．活動を成し遂げた達成感や数量のよさを味わわせる支援 ○　一人一人のカレンダーを発表し合う場の設定

◇　保健部実践提案協議会

○　シンポジウム「子供の心の健康を考える」

実践提案

	志摩町立志摩中学校	今村　由香
司会者	本校保健部	森田　常子
指導助言者	福岡教育大学教授	照屋　博行
	福岡県立看護学校講師	筑紫　咏子

◇　学習指導協議会

全体会（２日目）

○　あいさつ

初等教育研究部委員長　　岩﨑　洋一
学　校　長　　藏　源一郎

◇　主題発表

「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」
―知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開―

研究副主任　　吉田　正樹

◇　教科等発表

○　社会科

「共生社会を創る子供が育つ社会科学習」

―郷土における社会的ジレンマ学習の展開―

社会科部　　髙野　誠一

○　障害児教育（平成10・11年度文部省指定　特殊教育課程研究）

「豊かな生活をめざす教育課程の編成」

―指導の重点化を図った個別の指導計画作成を通して―

障害児教育研究部　　坂田　佳美

◇　メ　モ

第２日目　午後の部

公開授業指導案

第３学年１・３組　理科学習指導案

指導者　　杉　原　賢太郎

単　　元　　集めて，くらべて，まとめよう！西公園もみじ谷植物図鑑

指　導　観

○　本単元は，身の回りの植物の観察をする活動を通して，体のつくりを比べ，植物の特徴をとらえていく知恵を養うとともに，多くの植物に興味・関心をもって接し，大切に育てていこうとする心情を育てることをねらいとしている。主な学習内容は，①ヒマワリとオシロイバナの育ち方の順序には，葉の数の増加や草丈の伸びなど，双葉や本葉の出現後の成長に伴う形態の変化があること，②植物には，根，茎，葉という共通したつくりや葉のつき方の違いといった特徴があること，などである。このような視点で身の回りの植物を観察することは，子供たちが植物を本当に身近なものとしてとらえ，興味・関心をもってかかわりを深めていく態度を育てることにつながる。

○　本学級の子供たちは，第１，２学年の生活科の学習を通して，植物の種子をまいたり，苗を植えたりして，花や野菜を育ててきている。また，草花を摘んで遊んだり，木の実を拾っておもちゃを作ったりした経験があり，植物に親しみを感じている子供は多い。しかし，草花の体のつくりを比べたり，成長の変化を見たりしながら接していこうとする子供の姿はあまり見ることはできない。また，子供たちが，もっとも意識している部分は花であり，根，茎，葉に対する意識はあっても，その共通点や差異点といった特徴をとらえるまでには至っていない。

○　本単元の指導にあたっては，植物には，根，茎，葉といったきまった体のつくりがあることや種類によっては葉や葉のつき方，根の形が違うという見方や考え方を養うことをねらっている。そのために，まず，つかむ段階では，ヒマワリとオシロイバナの根，茎，葉の比較観察を行い，形状の違いから他の植物へと視点を広げ，追究課題を設定する。次に，さぐる段階では，西公園の野草の根，茎，葉などを採集し，葉の形，葉のつき方，根の形による分類操作をしながら植物図鑑を作り，植物の体のつくりの共通点や差異点をとらえていく。最後に，まとめる段階では，西公園もみじ谷植物図鑑をまとめ，それを活用したネイチャーゲームを行い，植物に対する認識を深めていく。

目　　標

１．身近な植物の成長や体の様子に興味・関心をもち，いろいろな植物を比較しながら，体のつくりが根，茎，葉からできているという考えをもつことができる。

２．ヒマワリ，オシロイバナの栽培活動や西公園での多様な植物の比較活動を通して，身近な植物に興味・関心をもって，大切に扱おうとすることができる。

計　　画　（約８時間）

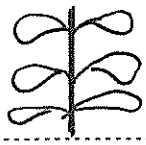
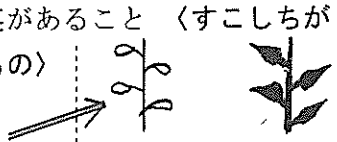
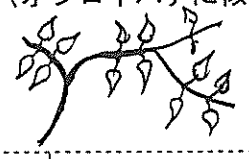
段階	第１次　つかむ段階（2時間）	第２次　さぐる段階（3時間）	第３次　まとめる段階（3時間）
活動と内容	１．自分たちが育ててきたヒマワリやオシロイバナを観察し，追究課題について話し合う。　②	２．西公園の植物を観察したり，採集したりする。　（本時2/3）③	３．西公園もみじ谷植物図鑑を作り，それを生かした活動を行うようにする。　②
	○　ヒマワリとオシロイバナの体のつくりの共通点と差異点の堀り出し	○　ヒマワリやオシロイバナに似た葉，葉と茎のつき方，根の視点での植物の観察及び分類整理	(1) 収集した葉，茎，根を整理したり，画用紙に貼ったりする。
	○　他の植物との関係付け	○　植物は種類によって，根，茎，葉の形が違うこと	○　類似した形による分類
	○　植物図鑑作りへの意欲化		(2) ネイチャーゲームをする。①
			○　図鑑活用への意欲化
手だて	※　観察用紙の準備とこれまでの観察との比較	※　葉の形や葉と茎のつき方，根の形による植物の比較観察と分類操作	※　図鑑を整理するための分類操作とゲームを取り入れた図鑑の活用
	※　他の植物への観察のうながし		

本時の目標

○　ヒマワリ，オシロイバナの葉のつき方の視点で，西公園の植物を観察して，葉のつき方や，茎の形にはそれぞれ特徴があるという考えをもち，西公園もみじ谷植物図鑑（葉のつき方編）をつくることができる。

準　　備　ハサミ，ビニール袋，学習ノート，筆記用具，「葉の形編」の図鑑，厚紙，テープ

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　西公園にはヒマワリとオシロイバナと似た葉があること ○　本時学習のめあての把握 めあて ヒマワリやオシロイバナににた葉のつき方の植物を集めて「葉のつき方へん」を作ろう。 ※　前時の西公園もみじ谷植物図鑑の「葉の形編」を提示し，前時の想起をする。 2．ヒマワリやオシロイバナに似た葉のつき方をした植物を採集し，比較観察した特徴について話し合う。 (1) 植物の採集の視点を話し合う。 ○　ヒマワリの葉のつき方　○　オシロイバナの葉のつき方 ※茎は１本・葉は交互 ※複数の茎・葉は交互 ※　ヒマワリとオシロイバナのシルエットを提示して本時の葉のつき方に視点を当てる。 (2) 茎と葉のつき方を視点に，西公園の植物を採集する。 ○　ヒマワリやオシロイバナに似た植物の採集 ※　グループ単位で，シルエットの図を持ち採集するようにする。 (3) 集めてきた植物をグループで分類操作し，特徴を話し合う。 ○　ヒマワリやオシロイバナに似た葉のつき方の植物があること ○　葉の形は違っても，葉のつき方が同じものがあること ○　すべての植物に茎があること　〈すこしちがうもの〉 〈ヒマワリに似たもの〉   ※ 葉のつき方がたがいちがいになっているもの 〈オシロイバナに似たもの〉  ※　オシロイバナ，ヒマワリの葉のつき方で分類操作させ，それと違う葉のつき方の植物がなかったら，具体物を提示する。 3．本時学習で分かったことについて話し合い，図鑑にまとめる。 ○　ヒマワリやオシロイバナに似た葉のつき方の植物がたくさんあること ○　ヒマワリやオシロイバナとは違い，葉のつき方が互い違いの植物もあること ○　西公園もみじ谷植物図鑑（葉のつき方編）を作ること	○　たくさんの葉の形を集めた「葉の形図鑑」を作ったよ。 ○　今日は，ヒマワリとオシロイバナに似た葉のつき方をした植物を集めるのだな。 ○　ヒマワリやオシロイバナのような葉のつき方をした植物はどこにあるのかな。 ○　ヒマワリに似た植物があったよ。１本の茎で，いくつかの葉がついているよ。 ○　オシロイバナの葉の形とは違うけれど，葉のつき方はそっくりだから，採集しよう。 ○　あれっ！よく見るとなんだか，葉のつき方が違うものが混じっているぞ。 ○　ヒマワリやオシロイバナに似ているけれど，互い違いに葉がついている植物もあるんだね。それも，ぼくたちの西公園もみじ谷植物図鑑に加えてみよう。

第３学年２組　算数科学習指導案

指導者　　野　田　真　功

単　　元　　調べたことから生活を見直そう（表とグラフ）

指　導　観

○　本単元は，自分の起床時刻や就寝時刻について調べ，その結果について整理していくことを通して，統計的な処理を生活に生かす知恵と，規則正しい生活をおくろうとしていく心情を身につけることをねらいとしている。ここでの具体的な内容は，①自分が決めた起床・就寝時刻が守れたかどうか調べていくこと，②調べた結果を知りたい内容にそって整理し，表やグラフに分かりやすく表したり，よんだりできること，③自分の生活習慣を振り返り，より規則正しい生活をおくろうとしていくことである。

○　本学級の子供たちは，学級の友だちの誕生日について各月ごとの人数の資料を収集したり，簡単な考察を行うなど，統計的な処理の素地となる活動を行ってきている。そこで本単元では，自分の起床時刻や就寝時刻について調べながら，資料を積極的に収集し，分かりやすく整理したり，棒グラフに表してよみとったりする統計的な処理を生活に生かす経験を豊かにしていく。

○　本単元の指導にあたっては，自分の起床時刻や就寝時刻について調べ，整理していく活動を通して自分の生活を振り返り，家での時間の使い方について見直していこうとする態度を育てていきたい。そのために，つかむ段階では，自分の生活時間について話し合い，早寝早起きができているかについて調べていく追究課題を設定する。次に調べる段階では，一人一人が調べてきた結果を一つの表にまとめ，よく守れているのはいつか，誰なのか，などの観点から学級全体の様子について整理・考察を行っていく。そこでは，棒グラフのかき方を知り，それをもとに学級の傾向をよみとっていく。最後にまとめる段階では，曜日ごとの人数を目的にあった最小目盛りのとり方に気をつけて棒グラフに表しながら，早寝早起きを実践していこうとする意欲を高める。

目　　標

１．自分の起床・就寝時刻について調べ，その結果を目的に応じて分類整理し，表やグラフに表したりよんだりすることができる。

２．毎日の起床時刻や就寝時刻を調べる活動を継続的に行い，自分の生活習慣について改善していこうとすることができる。

計　　画（約７時間）

段階	つかむ段階（1時間）	調べる段階（4時間）	まとめる段階（2時間）
活動と内容	１．最近の家での生活時間について話し合い，追究課題をつかむ。 ○　自分の起床時刻や就寝時刻について調べていくという追究課題をつかむこと	２．学級全員の就寝時刻や起床時刻について表やグラフに整理していく。 (1) 資料を表に整理する。　② ○　縦軸，横軸のとり方や項目の並べ方を工夫すること (2) 棒グラフに表してよみとる。　② ○　棒グラフのよさを味わうこと	３．曜日ごとの達成状況について整理し，自分の生活を見直す。（本時２／２） ○　最小目盛りのとり方を工夫し，棒グラフに表すこと ○　起床時刻や就寝時刻を見直し，早寝早起きをする意欲をもつこと
手だて	※　子供の家庭生活に関するアンケート結果の提示（起床時刻，就寝時刻，食生活など）	※　学級全員分の就寝時刻や起床時刻の達成結果を示した表の提示 ※　項目の入れ換えがしやすくなるようなカードの準備	※　棒グラフに表す際に，１目盛りの数を見直す必要性が生じるような場の設定

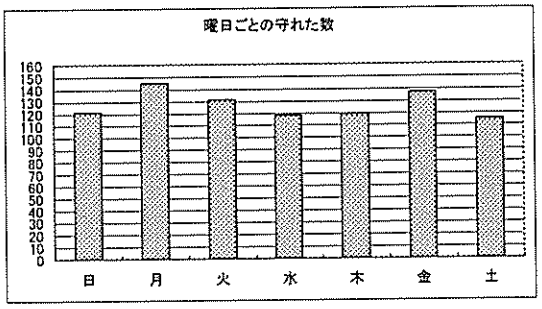
本時の目標

(1) 資料の最大値が入るように，目盛りの大きさを適切な数値に変えた棒グラフをかくことができる。

(2) 棒グラフから早寝早起きが守れたかよみとり，規則正しい生活をする心情を高めることができる。

準　　備　起床・就寝時刻を守れたかどうかの一覧表，グラフ用紙

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．曜日ごとに起床時刻，就寝時刻について整理したことを振り返り，本時学習のめあてを確かめる。 ○　前時調べた結果を用いて，棒グラフに表すこと ※　前時，各曜日ごとの達成状況について集計した表を提示し，本時は棒グラフに表すことを確かめる。 めあて よう日ごとのちがいが分かりやすいぼうグラフをかこう。	○　この前は曜日ごとにできた数を数えたところまで終わらせていたな。 ○　今度も棒グラフにして調べれば，曜日ごとの違いが分かりやすくなるだろうな。 ○　曜日ごとの人数がとても多いけど，グラフ用紙にうまく入るんだろうか。
2．曜日ごとの起床時刻，就寝時刻を守ることができた回数を，目盛りのとり方を工夫しながら棒グラフに表す。 (1) 曜日ごとの起床時刻・就寝時刻を守ることができた回数について調べた結果を，棒グラフに表す。 ○　1項目あたりの人数の増加による1目盛りの大きさを見直すこと ※　目盛りの大きさが異なるグラフ用紙を数種類準備しておき，子供が必要に応じて選択することができるようにしておく。  	○　数が大きいのでグラフ用紙に入りきれないぞ。どうすればいいんだろう。 ○　目盛りの多いグラフ用紙なら入るかもしれない。 ○　目盛りの線が15あるので，1目盛りを10にすればグラフをかくことができそうだ。 ○　1目盛りの数をもっと増やしてみたらどうだろう。 ○　1目盛りを50にすると，曜日ごとの違いがあまり分からないグラフになるな。 ○　1目盛りを大きくすれば，数が大きくなってもグラフはかけるんだ。
(2) 曜日ごとに起床時刻，就寝時刻を守ることができた回数を棒グラフに表すために，1目盛りのとりかたを工夫していく。 ○　最大値に気をつけながら適切な1目盛りの大きさを決定し，棒グラフに表していくこと ※　同じ用紙の大きさで1目盛りを1にしたグラフ用紙を提示し，10を1目盛りにとることに気づかせる。 ※　1目盛りを10や20にすれば最大値がかきこめるグラフ用紙を準備しておく。	○　グラフにすると，よくできている曜日とそうでない曜日のちがいが一目で分かるな。 ○　棒グラフをかくときは，一番大きな数のことを考えて目盛りをつけていくことが大事なんだな。
3．本時作成したグラフについて振り返り，学習をまとめる。 ○　グラフの目盛りを決めていくときには，一番大きな値が入るように1目盛りの大きさを決めていくこと ○　あまり守れていないことの多かった曜日についても，実践していこうとする意欲を高めること	○　今度からは，今あまり守れていない□曜日も守れるようにしていこう。

第４学年１組　あらつ学習指導案

指導者　　手　島　宏　樹

単　　元　　ぼくは，わたしはあらつっ子　～探検！発見！あらつの魅力，あらつのはてな～

単元の構想

○　本学級の子供たちは，登下校の際に出会うもの・人・ことに興味・関心を抱いている。例えば，黒門通りにある黒門飴って古そうなお店だなあなど意識したり，河童の石像がどうしてここにあるのだろうと疑問を感じたりしている子供がいる。また，学習の積み上げのなかで，情報収集の仕方やまとめ方などの学びの姿も高まってきている。そこで，このような子供の意識や疑問，学びを土台に，あらつの魅力やはてな探しの活動を設定することで，調査や現場体験などをしながら，郷土や歴史・伝統，人の生き方について考える知恵とあらつのよさを実感し大切にしていこうとする心情を育てていきたい。

○　本単元は，あらつのもの・人・ことに対する子供の疑問や興味からの求めを基盤にし，あらつの魅力やあらつのはてなを探り，他に情報発信したり自分の地域の魅力探しの活動を実践したりする総合的な学習である。あらつのもの・人・ことを学習対象として取り上げることで，①あらつには昔から受け継がれてきたものがたくさんあり，それらを一体としてとらえあらつのよさを実感すること，②現場体験や繰り返しの調査活動をしながらあらつのもの・人・ことに愛着をもつこと，③あらつの歴史や伝統，人の生き方について考えをもつこと，などの内容を子供自らが生み出し学習を展開していくことができると考える。

○　本単元の展開においては，子供がこだわりを発揮しながら主体的に追究していく体験を豊かにすることができるように，次のような支援を考える。導入においては，昨年実施した児童によるあらつ自慢探しの内容紹介と追体験を行いあらつの魅力を意識化させる。そして，はてな探しウォークラリーを通して出会ったもの・人・ことに対する驚きや疑問を話し合うなかで，自分がこだわって調べたい追究課題を明らかにさせる。次に，こだわり別の自己追究においては，課題別グループを編成し，あらつの魅力やはてな探し隊を組織する。そして，子供が体験を豊かにし内容を創造できるように，①ゲストへの現場体験の協力や講師としての招聘を依頼する。②あらつガイドやあらつマップ，人材バンク，施設バンクなどの資料を準備し提供する。③Ｔ・Ｔや保護者との協力体制をつくる。さらに，実践においては，子供が見出した応えから生き方を創り出せるように，子供主体の実践活動を保障する場を設定する。

目　　標

１．あらつのもの・人・ことから進んで情報を収集したり，地域の方への聞き取り調査や現場体験をしたりしながら，あらつの魅力・はてな探しの活動に意欲的に取り組み，郷土の歴史や伝統，人の生き方についての考えをもつことができるようにする。

２．あらつのもの・人・ことへの愛着を深めたり，ものに込められた人の思いや願い・生き方に共感したりして，あらつの魅力を一体的に実感することができる。

計　　画（約１６時間）

	生活吟味 ------>	自己追究・内容創造 ------>	生活更新
予想される活動と内容	１．あらつを探索し，出会った対象への驚きや疑問から課題を話し合う。（5時間） ○　あらつの魅力の意識化 ○　あらつのはてなの表出 ○　追究対象や内容の明確化	２．こだわりグループで課題を追究する。（8時間） (1) 課題グループ別にあらつの魅力やはてな探しの活動を行う。⑤ ○　追究対象に応じた自己追究と内容創造 ・受け継がれてきたものの理解と愛着の深まり ・あらつを大切に思う人の生き方への共感 (2) 魅力探しの結果を表現し，報告会を行う。③ ○　あらつの街の一体的なよさの実感（本時3/3）	３．これからの活動の方向について話し合い実践する。（3時間＋課外） ○　新たな魅力とはてな探し ○　ぼくの街の魅力探し ○　あらつのよさの情報発信
支援	※　昨年追究した自慢探しの内容紹介と追体験 ※　あらつのはてな探しウォークラリーの場の設定	※　ＧＴへの現場体験協力と講師招聘依頼 ※　ＴＴや保護者への自慢探し協力依頼 ※　あらつガイド，あらつマップ，人材・施設バンクの準備と提供	※　生活更新の方法の決定と実践の場の確保 ※　情報発信等に関するお店の方への許可承諾

本時の目標

○　あらつには，昔からの伝統を守り受け継がれてきたものがあることを一体的にとらえ，それらを守り受け継いでいこうとする人の生き方に共感することができる。

準　　備　あらつの魅力・はてな探しの表現物，あらつ学習ノート，拡大あらつ床図

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　あらつの魅力やはてな探しの報告会を行い，あらつの魅力やはてなを伝えあうこと めあて 報告会で，自分たちが見つけた魅力やはてなを伝え合い，あらつの魅力について話し合おう。 ※　子供たちが学習対象として追究したものにかかわるゲストの方などを子供の求めに応じて招聘し，協力していただく。また，子供にゲストの先生方の紹介を行わせる。 2．自分たちが見つけたあらつの魅力やはてなを発表し合う。 (1) あらつの魅力・はてな探し報告会の準備をする。 ○　あらつの魅力探し報告会をすることへの意欲をもつこと ※　予め，ポスターセッションやワークショップ形式での自慢報告会であることを促しておき，発表内容や方法について感想や意見を参観者の先生方や保護者の方に頂けるようお願いする。 (2) 自分たちが見出したあらつの魅力やはてなを発表し合う。 ○　あらつの魅力の多面的・総合的把握と感受 【予想される歴史や伝統に関する学習対象と発表内容例】 ＜五代畳店＞：・畳の歴史／・日本の畳と住居／・あらつの藺と畳 ＜黒門飴＞：・黒門飴の栄養／・黒門飴と他の飴／・長く続く秘密 ＜安恒染め物＞：・手染め体験記／・博多染めの歴史／・福岡の染物 ※　発表を前後半１０分ずつとし，発表内容や方法のよさをあらつ学習ノートに書かせる。内容や方法についてはゲストの方や保護者，参観者の先生方に随時的・肯定的な評価をいただく。 3．あらつの魅力について話し合う。 ○　あらつのもの・人・ことの独自の魅力の理解の広がり ・五代畳店／・中村豆腐店／・黒門飴 独自の魅力：・対象に対する価値把握 あらつの魅力 共通の魅力：・歴史・伝統・人の生き方 ・安恒博多染め物店／・荒津窯 ○　あらつの共通する魅力の一体的理解と人の生き方への共感 ・あらつには伝統を守り受け継いでいるものがあること ・伝統を守り受け継いでいこうとする人がいること ※　対象独自の魅力から共通する魅力へと整理しながら板書する。 ※　ゲストの先生に発表・交流活動の意味づけをして頂き，情報発信や地域の魅力探しといった生活更新への意欲づけを図る。	○　今日は，ぼくが発見したあらつ魅力をみんなに知ってもらおう。 ○　五代畳店は６０年以上も続いている。あらつもマンションが多くなり畳が減っているが，日本の住文化を守っていきたいと思って続けている。 ○　伊崎の中村豆腐店は，製造の７行程を真心込めて行い，地域の人に愛される豆腐ができるようになったんだ。苦難の 10 年があったんだ。 ○　安恒染め物の安恒さんは博多の伝統文化である博多染めを復活させ，後世に伝えるため日々勉強している。博多織のよさを分かってもらうために展示会などもしている。 ○　自分が調べたことや友達の発表を聞いているとそれぞれに魅力がある。 ○　あらつの魅力は，長年大切に守り受け継がれてきたものがあることだ。 ○　そして，それを大切に受け継いでいこうとする人がいることだ。 ○　人と人とがつながり合っていることもあらつの魅力になると思う。 ○　あらつの魅力をみんなに広めたい。 ○　ぼくの地域の魅力調べをしよう。

第４学年２組　算数科学習指導案

指導者　　加　藤　英　也

単　　元　　読書調査をしよう（資料の整理，折れ線グラフ）

指　導　観

○　本単元は，自分たちの読書生活についての情報を収集しながら，それらを整理したり，収集した情報の推移を見取ったりして，自分たちの読書生活の特徴や傾向をとらえることができる知恵と，それらを改善していく向上的心情を育てることをねらいとしている。具体的には，①読書のジャンル，男女の読書嗜好，教科の好みなどの関係を２次元の表に整理して表すこと，②個人並びに学級全体の読書量の推移を折れ線グラフに表し，変化の様子や全体の傾向や特徴をとらえたりすること，③これらの活動をもとに自分の読書生活をよりよいものにしていこうとすることである。

○　本学級の子供たちは，１次元の表に表して資料を集計する統計的な見方や，それをわかりやすく表現するために，目盛りの大きさを工夫して棒グラフに表すことができるようになっている。また，知的好奇心が強く，自分が知りたいことを図書室の本で調べたり，雨の日の休み時間などには，物語などを中心として読書をする姿が見られる。しかし，その読書の傾向には，物語しか読まなかったり，自分の趣味に関する本しか読まなかったりするのが現状である。また，貸し出しの頻度も子供によって差があり，よく読書している子とそうでない子に二分される。そこで，自分たちの読書の傾向や特徴を見直し，いろいろな読書の楽しみ方，利用の仕方ができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，自分たちの読書の実態に関する情報を収集しながら，様々な観点からそれらを分析し，読書の質と量の変化を表や折れ線グラフに表して考察できる統計的な見方をのばしたい。そのためにはまず，つかむ段階で読書の価値と自分たちの実態について話し合い，読書調査をして自分の読書の傾向を知り，見直そうという追究課題を設定する。次にしらべる段階では，継続的に資料を収集しながら，読書の種類や好みの傾向をとらえるために２次元表に表したり，貸し出し数の変化を折れ線グラフに表したりする中で，起こった変化が自分の生活のどこに要因があるのかを関連づけながらとらえる。最後にまとめる段階で，読書量の推移をグラフをもとに予測して，実際の読書量と比較することによって，自分の読書生活の変化を感じ取る活動を行う。

目　　標

１．読書に関する資料を２次元の表や折れ線グラフに表し，その傾向や特徴をとらえることができる。

２．自分の読書生活を統計的に処理しながら，よりよいものへ変えていこうとする態度を育てるとともに，統計的な処理が自分の生活を振り返るのに有用であることを味わうことができる。

計　　画（約７時間）

段階	つかむ段階　（２時間）	しらべる段階　（４時間）	まとめる段階（１時間）
活動と内容	１．読書の価値について話し合い，自分の読書生活に関する情報を収集して追究課題をつかむ。 ○　好きな本の傾向があること ○　読書量の不足	２．資料を収集しながら，その傾向や特徴をとらえる。 (1) ジャンルと男女，教科の関係などについて調べる。②　(本時 2/2) ○　２次元表に表すこと (2) 読書量の変化について調べる。② ○　折れ線グラフに表すこと	３．２次元表や折れ線グラフをもとに自分の読書生活の傾向を振り返り，変化の様子や要因を話し合う。 ○　読書生活の変化の自覚
手だて	※　読書の必要性を話し合う場の設定 ※　十進分類による１次元の表の提示	※　ジャンルの偏りの原因を予測する場の設定 ※　折れ線グラフの提示 ※　読書調査ノートへの記入	※　はじめと現在の２次元表の比較 ※　折れ線グラフによる近い将来の予想

本時の目標

○　学級全体の中での自分の読書の傾向をとらえるために借りた図書のジャンルや男女の別，教科の好み，読書する時間帯などの関係を２次元表に表してとらえることができる。

準　　備　読書調査ノート，十進分類表，２次元表，各自の読書記録を１次元表にしたもの

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．これまでの読書に関して収集した資料を基に，自分の読書の仕方の傾向について話し合い，本時学習のめあてをもつ。 (1) 自分の読書の傾向について話し合う。 ○　自分が読んでいる本の種類の傾向は男女の違いによって起こるのか調べないとわからないこと ○　自分の読書の傾向は，教科の好みに関係しているか調べないとわからないこと ※　自分の読書の傾向についてつかませ，その原因がどこにあるか予想を立てさせ，２次元表の観点を取り出させる。 (2) 見通しをもち，めあてをつかむ。 ○　本の種類と男女の違いなどが同時にわかる２次元表の表し方を知ること ※　前時に作った個人の１次元表を数枚横に並べ，２次元表の書き方を提示する。 めあて 自分の読書の傾向が教科の好みや男女の違いなどによって起こっているのかを２次元表に表して調べよう。 ２．読書調査ノートを使って２次元表を作り，読書の傾向の原因について話し合う。 (1) 自分が知りたい項目について２次元表を作る。 ○　ジャンルと男女別の２次元表 ○　ジャンルと教科別の２次元表 ※　２次元表の台紙を数種類準備しておく。 (2) ２次元表から読みとったことについて話し合い，自分の読書の傾向の原因をつかむ。 ○　読んだ本のジャンルと男女別の関係 ○　好きな教科と読む本のジャンルの関係 ※　学級全体の傾向から自分の読書の傾向を裏付けさせる。 ３．本時学習についてまとめる。 ○　２次元表のよさを味わうこと ※　１次元表と２次元表とを比較することで読みとれる内容の違いをとらえさせる。	○　私が読んだ本はいろいろあるけど，物語の本が多かった。他の友達も同じなのかな。 ○　Ａくんは，物語よりも科学読み物が多いみたいだな。 ○　人によって読む本の種類が違うけど，それはどうしてなのかな。 ○　男子と女子では，好きな本が違うのかもしれない。 ○　私は国語が好きだから物語をたくさん読むけど，好きな教科が違うと読む本の種類は違うのかな。 ○　１次元表では，読んだ本の多少はわかるけど…… ○　なるほど，２次元の表を使うと表せるかもしれない。 ○　私は好きな教科と読んだ本の関係を調べてみよう。 ○　Ａ君は理科が好きだから，科学読み物が多いな。Ｂさんは社会が好きなのか，だから歴史の本が多い。何か関係がありそうだな。 ○　調べてみてわかったことは，読む本の種類はその人の好きな教科に関係がありそうだということが，２次元表の中からも読みとれるということだ。 ○　男女と読む本の違いも何となく関係があるようだな。 ○　１次元表ではわからなかったことが２次元表ではわかるようになった。他のことにも使えそう。

	男子	女子	合計
文学	２８	５２	８０
科学	３０	８	３８
社会	５	１０	１５
歴史	１６	１２	２８
合計	128	143	272

	国語	理科	社会	計
文学	２５	１８	３２	80
科学	３	２５	６	38
社会	２	３	８	15
歴史	７	１	１８	28
合計	５３	４２	７２	

第５学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　猿　樂　隆　司

単　　元　　探検！発見！ほっとけん！ぼくらの食のふるさと

単元の構想

○　本学級の子供たちは，西公園の自然の素晴らしさやあらつ地域の自然・社会事象のよさを自分の生活とのかかわりで追究し，それらを保護・創造する活動を経験してきている。その結果，あらつという地域への誇りや愛情，さらには地域の環境に配慮した心構えなどをもち始めている。さらに，これまでの追究活動を通して，課題を把握し，情報収集力や観察・調査力，表現力などを駆使して課題解決に向かうことができるようになってきている。また，これまでの生活・学習経験により，食と自分とのかかわりにおける興味・関心も高く，製作体験，産地や流通の関係，安全や環境に配慮した生産者のこだわりなどに関する追究活動への求めをもち始めている。

○　本単元は，給食の食材の産地や流通の関係などを調べることをきっかけにして，一食が成り立つまでにかかわる様々な人々の営みに対する感謝の念や安全や環境に配慮した食材選択や栄養摂取の大切さなどを感じ取っていく総合的な学習である。給食の食材の生産・流通を主な学習対象とすることで，①一食が成り立つための，あらつを始めとする様々な人々の願いや生産・流通のシステムを自分の生活とのかかわりにおいて調べること，②食品添加物の問題や国による農作物における農薬の法制度や安全基準の問題，遺伝子組み替え作物の問題に関心をもち，問題解決に向けた望ましいあり方を調べること，③追究結果をもとに，自分と食とのかかわり方を見直したり，全校に発信したりすること，などの内容を創ることができると考える。

○　本単元の展開においては，これまでの食に対するかかわり方を見直すとともに，食への新たなかかわり方を実践できるようにしたい。そのために，導入の段階では，給食の献立を提示したり，素材搬入先への聞き取りや校内搬入の観察などの活動を位置づけ，食材の生産・流通に関心をもたせる。そして，卸元のＫ製麺所，Ｙ食品などを概観する活動を位置づける。次に，主に生産・流通にかかわる疑問を焦点化し，追究課題をつくることを促す。追究する段階では，卸元別の観察・調査や製作体験を位置づける。ここでは，添加物等の存在に気付かせ，追究の深化を促す。その後，追究内容を表現物にまとめ，ワークショップ的な交流を位置づける。終末段階では，健康や安全に心がけた食へのかかわり方を付加した表現物をまとめ，校内で実践発表を行うように促す。

目　　標

１．食材の追究を通して，農薬や添加物の問題に気付き，望ましいあり方を考えるとともに，食とのかかわり方を見直し，健康や安全に配慮した食へのかかわり方を考え，実践することができる。

２．食材の観察・調査や製作体験を通して，食材に対する慈しみの心や生産・流通にかかわる人々への感謝の念を抱くことができる。

計　　画（約２０時間）

予想される活動と内容	生活吟味 ------→ 自己追究・内容創造		------→ 生活更新
	１．食材の卸元を概観し，追究課題を話し合う。（5時間） (1) 給食の献立を見て食材について話し合う。① ○　生産・流通への疑問 (2) あらつ地域の卸元を概観し，課題を話し合う。④ ○　食材を支える人々の存在の把握と疑問の表出	２．課題追究を行う。（11時間） (1) 対象別グループで調べる。⑥ ○　追究対象に応じた内容の創造 ・　原料確保や食料政策の変遷 ・　生産・流通にかかわる経路 ・　健康や安全への配慮　等 (2) 結果を表現・交流する（本時4/5）⑤ ○　生産・流通にかかわる安全性重視など様々な配慮の実感	３．校内発表会に向けて話し合い，実践発表を行う。（４時間） (1) 課題別グループごとに再調査し発表会を行う。③ ○　望ましいかかわり方の吟味・体験コーナー・食ルートマップ (2) 食のかかわり方を実践する。① ○　食とのかかわり方の見直しと実践への意欲をもつこと
支援	※　給食の献立の提示と給食室訪問や栄養士の招聘 ※　食材搬入の観察・調査活動の位置づけ ※　あらつ地域を中心とした卸元先や生産地の概観	※　麺や蒲鉾などの製作体験 ※　生産にかかわる観察・調査 ※　調査結果の交流をワークショップ形式で行うことの促し ※　ゲストの招聘 ※　校内発表会への活動提案	※　内容を付加・強化する再調査 ※　生産者や栄養士、調理員の方々の招聘 ※　素材ルートマップの作成 ※　給食とのかかわり方を考える全校児童を対象とした実践発表会

本時の目標

○　食材の生産・流通や安全性にかかわる課題を調べ，考え，書きまとめた発表会を通して，食材を支える様々な人々への感謝の念を抱いたり，健康や安全に配慮した食生活を送る心構えをもったりするとともに，追究内容を全校に広げようとする意欲をもつことができる。

準　　備　子供が作成した表現物，ＯＨＰ，プロジェクター，パソコン，スクリーン

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　給食の食材との出会いをもとに設定した課題に対する追究活動の振り返りと本時めあてを確認すること ※　代表児がＫ製麺所などのゲストの方を紹介し，協力のお礼と活動の経緯，本時の活動の流れを述べるように促す。 めあて 自分の追究結果を紹介しあい，これからの「食」へのかかわり方を話し合おう。	○　これまで生産や流通の様子や食の安全性について調べ，書きまとめてきたな。 ○　これからの自分が食生活で大切にしたいと思ったことを友達やゲストの方々に聞いてもらいたいな。 ○　他の友達は，どんなことを調べ，考えてきたのか知りたいな。
2．自分が選択し，追究してきた給食の食材の生産地や生産方法や流通経路について発表し合う。 (1) 自分がお世話になったゲストの方や友達に対して，追究活動の動機やそこでの体験，健康や安全を心がけた食へのかかわり方の順に発表する。 ○　健康や安全を心がけた食材選定や栄養摂取への自覚 (2) ゲストの方から評価カードに記入して頂いたり，賞賛の声をかけて頂いたりする。 ○　活動の成就感の感受と実践への意欲をもつこと ※　(1)(2)の活動については発表・評価を一体的に行う。	○　給食においては，安全性に心がけ，添加物を控えているが，販売用にはやむを得ず使用している場合もあるようだ。 ○　しかし，どの食材においても，添加物や農薬にかかわる問題があって，それが，現在では人体に悪影響をもたらしている。 ○　これは便利さを求める生活に原因があるかもしれない。
3．これからの食へのかかわり方や今後の活動を話し合う。 (1) 追究内容の交流をもとに，これからの食へのかかわり方を話し合う。 ○　食を支える人々や生命への感謝と健康・安全への配慮 (2) ゲストから追究内容についての肯定的な評価を聞き，感想を出し合うとともに，今後の活動について話し合う。 ○　追究内容を広げることへの意欲をもつこと	○　これからは，食べ物を作ったり，育てたり，運んだりする人たちの願いや工夫，命のことを考えるとともに，自分たちの健康や安全のことを考えて，食材を選んでいくことが大切だ。 ○　是非，全校に考えを広げたい。

〈予想される追究対象と具体的な追究内容の例〉

○　パン（博多区Ｋ食品）
・　原料確保の変遷
・　遺伝子組み替えの是非

○　麺類（唐人町Ｋ製麺所）
・　食品添加物の是非
・　天然にがりの価値

○　野菜類（西公園Ｔ屋）
・　食材選定の条件
・　有機農家との契約

○　蒲鉾類（港町Ｙ食品）
・　原料変遷と原因
・　食品添加物の是非

かかわり方の吟味

第６学年２組　　あらつ学習指導案

指導者　　吉　田　正　樹

単　　元　　福岡小発！「附属学校こだわり大全」　－附属学校ネットワーク・プロジェクトⅠ－

単元の構想

○　本学級の子供たちは，先輩が創ってきた「わが校のこだわりホームページ」を継承・更新する活動に取り組むなかで，自校の特色や伝統についての理解を深めるとともに，他附属学校への興味・関心と交流への願いを強めている。また，これまでの学習の積み上げのなかで，情報を収集・活用しながら課題解決する力を高めるとともにテキスト処理や図形処理などのコンピュータ・リテラシーも獲得してきている。そこで，こうした子供の願いや育ちを土台に，情報通信ネットワークを媒介に他附属学校にかかわっていく情報活動を設定することで，目的的・総合的に情報や情報手段を活用・実践していく知恵と自他校を尊重し合いよりよいかかわり方を求める心情を育てていきたい。

○　本単元は，附属学校の特色や伝統について，自他校を比較しながら追究し，調べ考えたことを他校に発信して交流を求めていく総合的な学習である。附属学校を追究対象とすることで，①自分がこだわる対象を決定(課題把握)し，ホームページや文献資料を閲覧・収集・活用しながら自他校を比較追究すること，②情報モラルやマナー，情報責任について理解しながら，電子メールやテレビ会議で交信追究すること，③テキスト処理・イメージ処理・図形処理などを組み合わせ活用しながら，調べ考えたことを表現物にまとめデータベース化すること，④附属学校のよさを相互に発信・交信しかかわりを強めていく計画（附属ネットワーク・プロジェクト）を企画立案し実践すること，といった学習内容を，子供たちが自ら生み出して学習を展開していくことができると考える。

○　本単元の展開においては，子供たちが情報通信ネットワークを主体的に活用し，附属学校のよさを追究するとともに，他校とのかかわりへの実践意欲に繋がっていくよう支援する。導入においては，他校のホームページのリンク集や他附属学校の紹介資料に出会わせることで，自他校の共通性や独自性に気づかせ，追究課題を見出せるようにする。こだわり別の追究においては，子供の求めに応じた情報手段活用の技術的な支援を徹底する。特に電子メールやテレビ会議システムを活用して他校に直接かかわれる情報環境を設定し，情報モラルや情報に対する責任といった点を十分に理解させながら積極的活用を促す。ネットワークづくりの実践では，子供たちが求める人(大学・他附属の先生方など)を招聘した意見交流の場を設定し，助言や援助を頂きながら実践の継続・発展を図っていく。

目　　標

１．自分に必要な情報手段の操作技能や情報倫理(モラルやマナー)を身につけ活用しながら，附属学校の独自なよさ・共通のよさを追究し，他校とのかかわり方を考え実践することができる。

２．自他校のよさを受けとめ，ネットワークを通じて仲間と高まろうとする向上的な心情と，自分の情報に対する責任と相手への思いやりを大切にした情報発信・交信を行う調和的な心情を高める。

計　　画（約１３時間）

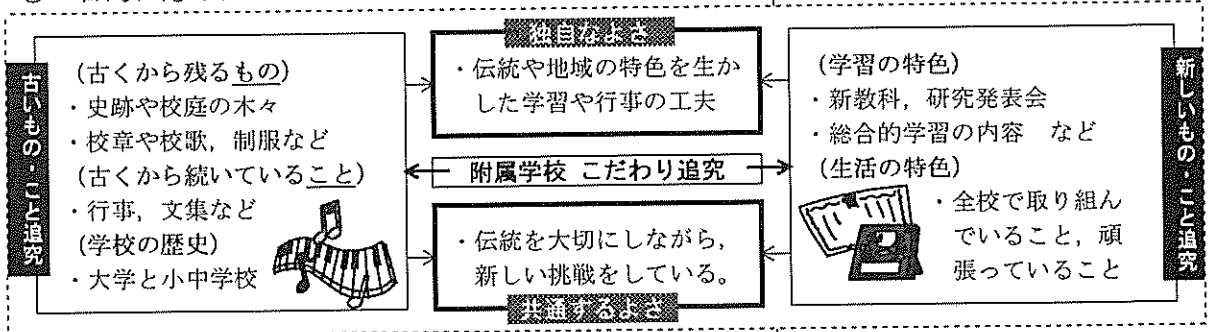
	生活吟味 ------>	自己追究・内容創造 ------>	生活更新 ------>
予想される活動と内容	１．全国の附属学校地図や紹介資料を閲覧しながら自他校との違いや類似点について話し合う。(3時間) ○　附属学校の独自性や共通性への気づき ○　附属学校のよさについて考える追究課題の焦点化と追究方法の明確化	２．こだわりグループで課題追究する。(7時間) (1) 情報通信ネットワーク（ホームページ閲覧とメール交信，テレビ会議など）を活用しながら，課題について調べる。④＋課外 ○　目的に応じた情報手段活用と課題追究 ○　情報社会参画における情報倫理の理解 (2) 調べたこと・考えたことを，表現物(附属学校こだわり大全)にまとめる。　③ ○　メディアミックスによる効果的な表現	３．「附属学校ネットワークプロジェクト」を企画実践する。（３時間） (1) 追究を交流し附属学校のよさと今後のかかわり方について話し合う。　本時① ○　附属学校への愛着の深化 (2) 他校に働きかけ，ネットワークづくりを実践する。②+課外 ○　追究の実践化・日常化
支援	※　附属学校に関するリンク集の教材化 ※　附属学校地図の提示	※　子供の求めに応じた技術支援（あらつ学習ガイドの作成） ※　情報管理センターとの連携指導	※　ゲストを招聘しての交流会の場の設定 ※　継続化を促す環境設定

本時の目標

○　附属小学校の特色や伝統について調べ考えてきたことを交流しながら，各校の独自なよさや共通するよさについての自分なりの応えをまとめるとともに，附属学校生であることへの誇りを確かめたり，附属学校のすばらしさを伝え合ったりする実践活動への意欲や見通しをもつことができる。

準　　備　児童；課題追究したことを「附属学校こだわり大全」としてまとめた表現物，収集活用した資料など
教師；ＬＡＮ接続のコンピュータ23台，ビデオプロジェクター，テレビ会議システム(CU-SEE-ME)
ＯＳ(NT,98)，ＷＥＢブラウザ(MSIE５)，学習の流れ図　など

学習指導の過程

予想される活動と内容	子供の思考の流れ
1．本時の活動（交流会）の趣旨について話し合う。 ○　追究活動の振り返りと本時活動目的の確認 めあて 追究した附属学校のよさを交流し，大学や他校の先生・友達と，今後の附属学校の「かかわり方」（ネットワーク・プロジェクト）を話し合おう。 「附属学校こだわり大全」交流会を開こう！ ※　子供の求めに応じて，大学情報管理センターや他附属学部の先生方，他附属学校の先生方・友達を招聘する。	○　附属学校のよさについて，それぞれのグループが追究したことを交流しながら考えよう。 ○　これからの他校とのかかわり方について，ゲストの先生方や先輩・友達と話し合おう。 ○　学習や生活の様子など，それぞれの学校に，それぞれの楽しさ・面白さがある。でも，どの学校にも共通するよさがある。 ○　古いもの・ことにもよいところがあるし，新しいもの・ことにも，よいところがある。 ○　附属学校は，伝統や歴史など古いものも大切にしながら新しいことに挑戦している学校だ。
2．追究してきた附属学校のよさについて発表・交流する。 (1) 代表グループの発表をもとに交流の観点を話し合う。 ○　「よさ」を比較検討していくための観点の明確化 ※　コンピュータでの交流方法(ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ)を確認させる。 (2) ＬＡＮを介して，各自の「こだわり大全」を交流する。 ○　附属学校のよさについての理解の広がりと深まり ○　追究内容と方法，表現方法の工夫についての認め合い ○　目的に応じたコンピュータ操作技能の駆使運用	
※　交流カードやﾎﾟｯﾌﾟｱｯﾌﾟｻｰﾋﾞｽでの交流方法を設定する。 ※　ゲストの先生方からも随時，質問や意見を行って頂く。 3．友達や先生方との交流をもとに，附属学校のよさへの新たな思いを発表し，今後のかかわり方について話し合う。 ○　附属学校の素晴らしさの実感と交流活動（ネットワーク・プロジェクト）への意欲向上	○　全国に同じ思いや願いをもって頑張っている仲間がいるなんてすばらしいことだ。もっと情報を交換したり，いろんなことを話し合っていきたい。
(学校はそれぞれ違っても) ・学校の伝統を大切に受け継いでいる。 ・新しい取り組みを工夫し挑戦している。 ・全国に同じ思いや願いをもつ多くの仲間がいる。 もっと交流を広げたい ←・大学も応援します。 もっと交流を深めたい ←・情報管理センターも協力するよ。 ←・附属小は，より力を合わせよう。 ←・附属中の先輩とも連携して	
※　ゲストの先生方には，それぞれの立場から，子供たちの追究と今後の交流活動への助言と意味づけをして頂く。	○　附属学校ネットワーク・プロジェクトを成功させよう。

第１学年１組　体育科学習指導案

（１・２年ふじ組との交流学習）

指導者　岩城一磨(T2)　舛元俊文(T1)

単　　元　「ネットスルー　ドッジボール」をしよう（ゲーム）

指　導　観

○　本単元「ネットスルードッジボール」は，２つのチームに分かれ，ころがす側と避ける側の間にネットを張り，ネットの下を通して相手に当て，時間内にたくさん当てた方が勝ちという攻守分離型のゲームである。ねらいとしては，ふじ組（特殊学級低学年）とのゲームを通したふれあいを行う中で，動きを広げゲームの中で生かす知恵や規則を守り，相手チームと楽しくゲームを進める調和的心情，協力して当てたり避けたりする向上的心情をもつことである。具体的な学習内容は，①ころがす，当てる，避ける，捕らえるといった動きを多様に広げること，②規則を守り勝敗を素直に認めること，③役割分担をしながら友達に働きかけることである。このことは，子供たちの日常的な運動生活や他のクラスの友達とのかかわりなどを広げることができ，生涯体育の基礎を培う上で意義深い。

○　本学級の子供たちはこれまでに，幼稚園や保育所などでの遊びを通して，ボールをついたり，ころがしたりする遊びを経験してきている。その中で，ボールを相手に向かって当てようとしたり，ボールを避けたりすることに対する興味・関心が高まってきている。また，就学前の遊びの経験の違いからボール操作の仕方やゲームの楽しみ方も広がってきている。さらに，特殊学級の友達との交流は，日常的な遊びや行事を通してお互いの名前を呼び合いながら遊ぼうとする姿が見られつつある。そこで，調整力が発達し活発な運動を好むこの期に本単元を取り上げ，ふじ組の友達と一緒に運動する楽しさを味わう中で，ボールを操作する動きを多様に発揮すると共に，動きを教え合ったり，攻守の役割を分担したりして，お互いのかかわりも広げていきたい。

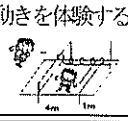
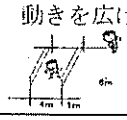
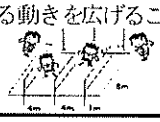
○　本単元の指導にあたっては，友達とのかかわりや，ころがす，避ける，捕らえるといった動きを多様に広げながらネットスルードッジボールを楽しくすることができるようにしたい。そのために，つかむ段階では，ころがす，避けるといった動きやルール，勝ち負けなどの規則を知り見通しをもつ。ひろげる段階では，変化した場に出会いボールをころがして相手に当てるという動きを多様に発揮するゲーム１をする。その後で動きを交流し，交流した動きを生かすゲーム２を行うという一連の活動を繰り返し，友達とのかかわりやころがす，避けるといった動きを広げる。いかす段階では，今まで身につけた動きを生かしながらゲーム大会を行い集団でゲームをする楽しさを味わわせる。

目　　標

１．場が変化していく中で，ころがす，当てる，避ける，捕らえるといった動きを多様に広げることができる。

２．友達と一緒に楽しくゲームをするなかで，人とのかかわりを広げることができる。

計　　画（約７時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（２時間）</th><th colspan="3">ひろげる（３時間）</th><th>いかす（２時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td>１．新しいゲームを体験する。
○　ルールや勝ち負けのきまりを知ること
○　ころがしてあてるという動きを知ること</td><td colspan="3">２．みんなで楽しくネットスルードッジボールをする。</td><td>３．学習してきたことを生かしてゲーム大会をする。
○　できるようになった動きや人とのかかわり方をそれぞれの場で生かすこと</td></tr>
<tr><td>(1) 中当てゲームをする。①
○　新たなころがす避ける動きを体験すること
  </td><td>(2) 広がった場でゲームをする。①
○　ころがす避ける動きを広げること
 
(本時)</td><td>(3) ネットが３つの場でゲームをする。
○　ころがす避ける捕らえる動きを広げること
  </td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　ネットスルードッジボールの提示
※　ころがしかたのモデル演示</td><td colspan="3">ゲーム１ 動きを発揮する　→　動きの交流 繰り返し　→　ゲーム２ 動きを広げる
※　簡単な規則をもとに，動きやかかわりを広げる変化した場の設定及び動きを広げるようなモデル演示
※　人とのかかわりが広がるような当て方や避け方への働きかけ</td><td>※　今まで体験してきた場の設定
※　動きへの賞賛励ましの声かけ</td></tr>
</table>

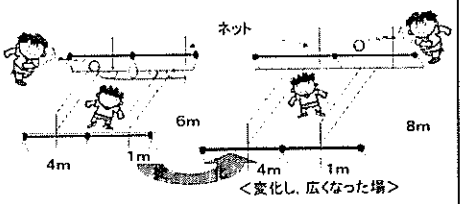
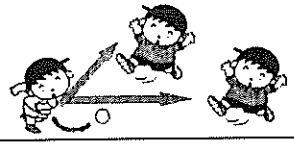
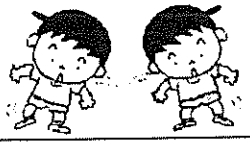
本時の目標

1．ふじ組の友達と一緒にゲームをしながら，ころがってくるボールを素早く避けたり，相手の動きに応じてねらって素早くころがしたり，左右に移動してころがしたりしながら，楽しくネットスルードッジボールをすることができる。

2．規則や方法を守り，当て方避け方を教え合いながらみんなで楽しくゲームをすることができる。

準　　備　ボール，得点板，ネット，三角コーン，コーンバーなど

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．変化した場に出会い，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　規則や方法，動きを想起すること ○　ころがし方や避け方など，ゲームについての見通しをもつこと ※　前時のゲームをもとに動きについて発表させ，変化した場での動きの違いを意識させてめあてをつかませる。 めあて ころがしかたやよけかたをかんがえて　とくてんをたくさんとって　みんなでたのしくネットスルードッジボールをしよう。	○　この前は，ころがってくるボールを避けながらゲームをしたな。 ○　ころがってくるボールをとんで避けたよ。  <変化し，広くなった場>
2．変化した場で楽しくドッジボールをする。 (1) ゲーム1をする。 ○　広がった場でのころがし方や避け方など，今までとの動きの違いをゲームをする中で体験すること ※　ゲーム1終了後，広がった動きの良さをとらえたり，ふじ組の友達へのかかわり方を取り出して意識させたりする。 <取り出す動きの例> 腕を大きく振ってころがす 移動してころがす 相手をねらってころがす  左右に素早く移動して避ける  (2) チームを変えてゲームをする。 ○　交流した動きを意識しながら，ゲームをすること ※　広がった動きに対する賞賛の声かけや，動きの良さを意識させるための動きの取り出しを行う。 3．本時学習のまとめをする。 ○　得点板で，ゲームを振り返ること ※　ゲームをして楽しかったことや，できるようになった動き，友達とのかかわりを発表する場の設定を行う。	○　今日はコートの大きさが広くなったぞ。 ○　ようしあてられないようにすばやくにげるぞ。 ○　場所が広くなったので，よくねらわないといけないな。 ○　広くなったから避けやすくなったぞ。 ○　腕を大きく振ったら速いボールが転がせるんだ。 ○　ななめにころがすと当てやすいよ。 ○　ボールを持って移動すると近くから当てられるんだ。 ○　ボールをよく見て素早く移動しないといけないな。 ○　ふじ組の友達にボールがきたことを教えてあげよう。 ○　ようし，相手をよくねらってたくさん当てよう。 ○　今度は勝つぞ。 ○　友達に声をかけたらみんなうまく避けられたよ。 ○　早いボールを投げたら当てられたよ。

第１・２学年ふじ組　体育科学習指導案

（１年１組との交流学習）

指導者　舛元俊文(T1)　岩城一磨(T2)

題　　材　「ネットスルー　ドッジボール」をしよう　（ゲーム）

指　導　観

○　本学級の子供たちは精神年齢３歳から５歳程度の１年生(男子２名)，２年生(男子１名・女子２名)の計５名で構成されている。子供たちはこれまでに，基本の運動を中心に，固定施設やマットを使ったり，折り返しリレー遊びをしたりしながら多様な運動経験をしてきている。ゲームについては，「鬼遊び」やボールを投げたりころがしたりしながらの的当てなど，簡単な攻守を交替してのゲームを通して，ゲームを楽しむ上で必要なきまりや役割分担などを経験してきている。しかし，その遊び方は，投げたりころがしたりといった，ものに働きかけながら楽しむ子供から，勝ち負けのきまりを意識しながら楽しむ子供とその楽しみ方は様々である。

○　本題材「ネットスルードッジボール」は，ころがす側と避ける側の間にネットを張り，ネットの下を通して相手に当て，時間内にたくさん当てた方が勝ちという攻守分離型のゲームである。ねらいとしては，１年生とのゲームを通したふれあいを行うことにより，小集団の中で相手やボールを意識できるような動作補助や声かけを受け入れたり，人とのかかわりを広げたりしながら，ころがす避けるという動きを広げ，必要なきまりを守りながら，友達と一緒に楽しく運動することである。具体的な学習内容は，①小集団での行動に慣れ親しみ協調的にかかわること，②教師や友達の働きかけを受け入れること，③ころがす，避ける，捕らえるといった多様な運動経験をすること，④手順や方法，勝ち負けのきまりなどを守ってゲームをすることである。以上のことは，子供たちの日常的な運動経験や他のクラスの友達とのかかわりを広げることになり生涯体育の基礎を培い人とのかかわりを広げる上で意義深い。

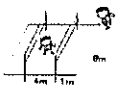
○　本題材の支援としては，①子供たちが視覚的にも分かりやすく，意識できるような手順や方法，勝ち負けなどのきまりを提示すること，②変化した場に出会い，友達とふれあい場に馴れる試しのゲームをする。→試しのゲームの中でできるようになった動きを取り出し交流する。→そこで交流した動きを次のゲームを行う中で生かしていく。このような一連の活動を繰り返し，最後にゲーム大会を行うといった活動を構成すること，③実態に応じて子供の要求を代弁するなど，教師が媒介となり子供のかかわりをつなぐ働きかけをするなどの支援を行う。このように，教材，活動構成，教師の働きかけという３点から支援の工夫を行っていく。

目　　標

１．１組の友達と一緒に楽しくゲームをするなかで，人とのかかわりを広げることができる。

２．場が変化していく中で，ころがす，避ける，捕らえるといった動きを広げることができる。

計　　画（約７時間）

<table>
<tr><th>階</th><th>であう（２時間）</th><th colspan="3">ひろげる（３時間）</th><th>いかす（２時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td>１．新しいゲームを体験する。
○　手順や方法勝ち負けのきまりを知ること
○　ころがしてあてるという動きを知ること</td><td colspan="3">２．みんなで楽しくネットスルードッジボールをする。</td><td rowspan="2">３．学習してきたことを生かしてゲーム大会をする。
○　できるようになった動きや人とのかかわり方をそれぞれの場で生かすこと</td></tr>
<tr><td>(1) 中当てゲームをする。　①
○　ころがす避ける動きを体験すること
 </td><td>(2) 広がった場でゲームをする。①
○　ころがす避ける動きを広げること
 
（本時）</td><td>(3) ネットが3つの場でゲームをする　①
○　ころがす避ける捕らえる動きを広げること
 </td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　ネットを張った場の設定
※　ころがし方の動作補助</td><td colspan="3">ためしのゲーム　変化した場に馴れる　→　動きの交流　繰り返し　→　交流後のゲーム　動きを広げる
※　ねらってころがす，避ける，とめるなどの身につけさせたい動きを引き出せるような変化した場の設定及び声かけ，動作補助
※　人とのかかわりが広がるような働きかけ</td><td>※　今まで体験してきた場の設定
※　動きへの賞賛励ましの声かけ</td></tr>
</table>

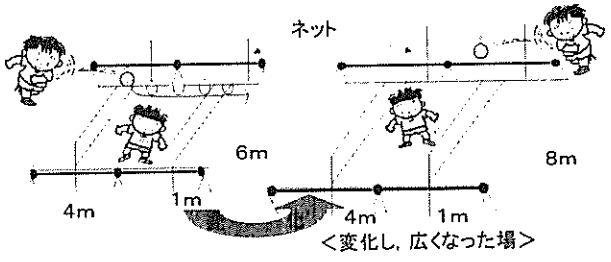
本時の目標

○　ころがってくるボールを避けたり，友達とかかわったり，相手をねらってころがしたり，移動してころがしたりしながら，楽しくネットスルードッジボールをすることができる。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
動き	相手コートにころがしたり，ころがってくるボールを避けたりすることができる。	相手を意識してボールをころがしたり，ころがってくるボールを避けたりすることができる。	相手を意識し，ねらってころがしたり，ころがってくるボールを素早く避けたりすることができる。
人とのかかわり	ボールを意識できるような動作補助を受け入れて，移動することができる。	方向を示す声かけを受け入れて移動したり，ころがしたりすることができる。	相手の動きを意識したり，声かけを受け入れて移動したり，ボールを受け取ってころがしたりすることができる。

準　　備　　ボール，得点板，ネット，三角コーン，コーンバーなど

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　前時行った中当てゲームを想起し，手順や方法，きまりや動きを想起すること ○　変化した場に出会い，本時学習のめあてについて話し合い見通しをもつこと めあて ころがってくるボールをよけながら　みんなでたのしくネットスルードッジボールをしよう。 ○　目的意識をもつこと	1．ゲームへの意欲を引き出す支援 ○　前時活動を想起できる場の設定 ○　きまりやゲームのやり方が意識できるモデル演示 ○　変化し，広くなった場の設定  <変化し，広くなった場>
2．変化した場で楽しくドッジボールをする。 (1) 試しのゲームをする。 ○　ころがってくるボールを避けること	2．友達とかかわりながらゲームをする個に応じた支援 ○　個に応じた教師の働きかけ Aグループ：教師が子供の働きかけを回りの友達に伝えたり，回りの友達からの働きかけを伝えたりする。動きの声かけの仕方や，動きが広がるように手を引いての動作補助など，友達の働きかけを受け入れるような声かけをする。 Bグループ：回りの友達からの働きかけを受け入れるような声かけをする。避け方を教えるモデル演示や，動きが広がるようにねらってころがすモデル演示や，動作補助を行う。 Cグループ：相手を意識したり，周りの友達に働きかけるような促す声かけをする。自分でボールを避けたり，相手をねらってころがすような声かけを行う。また，教師が子供の様子を見ながら代弁者となってかかわりが広がるようにする。

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・教師の動作補助を受けながらころがってくるボールを避けようとすること	・教師の声かけを受けながらころがってくるボールを避けること	・ボールを意識し，ころがってくるボールを避けること

(2) チームを変えてゲームをする。

○　集団対集団の意識をもつこと

Aグループ	Bグループ	Cグループ
・声かけを受けてボールを意識し，移動したり，相手コートにボールをころがしたりすること	・転がってくるボールを意識して避けたり，相手を意識してボールをころがしたりすること	・相手を意識し，ころがってくるボールを避けたり，相手をねらってころがしたりすること

3．本時学習のまとめをする。 ○　得点板で，ゲームを振り返ること ・ゲームをして楽しかったことや教えてもらったことを発表する。	3．学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○　得点板や発表の場の設定 ○　友達と一緒にできた動きに対する賞賛

○　あらつ学習児童発表

「こだわり発信！あらつ学習」６年生児童

指　導　者　　吉田　正樹

◇　全体講演

演　題　教科・総合の調和的展開
「カリキュラムデザイン新世紀へ」

講　師　奈須　正裕　先生
国立教育研究所　教育方法研究室　室長

◇　メ　モ

研究紀要の部

豊かな人間の育成をめざす教育の創造

—知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開—

研究紀要目次

ページ

豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ---------- 106
—知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開—
教　　頭　伊藤啓二
研究主任　小森　晃
研究副主任　吉田正樹

共生社会を創る子供が育つ社会科学習 ---------- 115
—郷土における社会的ジレンマ学習の展開—
社会科部　髙野誠一
—社会を拓く課題づくりを重視した産業学習の展開—
社会科部　猿楽隆司

数理活用力を豊かにする算数科学習---------- 130
—自ら数理を生活に活用していく学習の展開—
算数科部　小森　晃

日常的な見方や考え方が科学的に高まる理科学習 ---------- 138
—科学性のある追究活動を重視した学習の展開—
理科部　野口信介

心豊かな生活者が育つ生活科学習 ---------- 146
—身近な地域との新たな絆を創り出す学習の展開—
生活科部　石田耕一

音楽とのかかわりを深める音楽科学習 ---------- 154
—楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開—
音楽科部　豊村雅義
—自己の音楽的実態を生かした発展的音楽活動の展開—
音楽科部　津本修一

多様で創造的な表現をともにつくりだす図画工作科学習 ---------- 169
—表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業制作展の連続展開—
図画工作科部　樺島　穣

豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習 ---------- 177
—食生活の創り手としてかかわりを見出す学習の展開—
家庭科部　篠原裕子

ページ

未来を拓く実践力をもった子供が育つ道徳教育 ---------- 185
—生き方との出会いを位置づけた体験関連型学習の展開—
道　徳　部　石硯昭雄

豊かな仲間意識を育てる特別活動 ---------- 193
—心のネットワークを強める学級活動の展開—
特別活動部　矢野俊次

自ら生活を更新する「あらつ学習」 ---------- 201
総合学習部　手島宏樹

健やかな心を求め続ける子供を育てる保健指導 ---------- 237
—心と体で実感するストレスマネジメントスキル—
保　健　部　今村由香

豊かな生活をめざす教育課程の編成 ---------- 243
—指導の重点化を図った個別の指導計画作成を通して—
障害児教育研究部　舛元俊文
坂田佳美
早川由洋
谷崎和一郎

生活にいきることばを豊かにする国語科学習 ---------- 250
障害児教育研究部(国語科)　早川由洋

数量にかかわり生活を広げる算数科学習 ---------- 260
障害児教育研究部(算数科)　坂田佳美

人とかかわりながらよりよい生活を創り出す生活単元学習 ---------- 270
障害児教育研究部(生活単元)　谷崎和一郎

※　国語科部，体育科部については，教科著書「学習創造」No.７，８をご参照ください。

研究主題

豊かな人間の育成をめざす教育の創造

― 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開 ―

1．主題設定の理由

(1) 21世紀の社会に望まれること

子供たちを取り巻く今日までの状況は，受験競争の過熱化，いじめや不登校の問題，学校外での社会体験の不足など，豊かな人間性をはぐくむべき時期の教育に様々な課題が投げかけられている。２１世紀に向けて，我が国の社会は，国際化，情報化，科学技術の発展，環境問題，高齢化・少子化等の様々な面で今以上に加速化する激しい変化に直面していることであろう。中央教育審議会を受けて提言された教育課程審議会におけるねらいは〔生きる力〕を育成することである。具体的には，

① 豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚
② 自ら学び，自ら考える力の育成
③ ゆとりある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着と個性を生かす教育の充実
④ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育，特色ある学校づくりを進めること

などが示された。このねらいを突き詰めていくと，「人間が，よりよく生きるとはどういうことか？」という根源的な問いに突き当たることに気づく。私たち教師はこの問いについてこれまで以上に深く吟味する必要がある。なぜなら，この問いに対する応えを探ることによって，これまでの唯一絶対的な正解を学ぶ学校教育から，一人一人の子供たちが自分の問いを見いだし，知識や技能を総合化し，自分の文化性の拡充や生活性の更新をしていきながら，今現在の“応え”を創る学校教育への質的な転換の糸口が見つかると思われるからである。

(2) 問われる学校教育責任

これからの学校は，それぞれの立地する地域の環境やそこに生きる人々と協力して，その学校独自の特色ある教育活動を展開していかなければならない。そこでは一つ一つの学校が独自のカリキュラムを作成し，実施していくことが求められている。

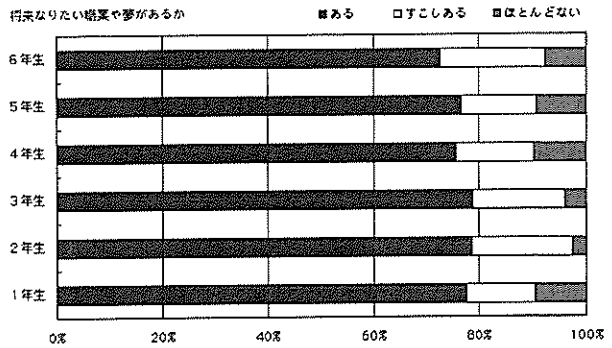
これまでのように日本全国横並びの画一的なカリキュラムではなく，それぞれの学校が独自のカリキュラムを作成，実施していくためには，一つ一つの学校が自らの教育活動に対する明確な理念をもち，その実施のためのカリキュラムをデザインしていかなければならない。つまり学校の教師にこれまで以上にカリキュラムデザイナーとしての力量が問われているといえる。

本校ではこれまで豊かな人間の育成を教育目標として掲げ，その実現のための方途を探ってきた。豊かな人間の育成は単独の教科や領域において実現できるものではない。それぞれの教科や総合の学習が豊かな人間育成のための役割を分担し，実施していくことが必要である。

教科と総合の役割を分担するといっても，教科が知識を注入し総合は自由に活動させるといった相反するものとしてカリキュラムをデザインしていたのでは豊かな人間育成という同一の目標に向かうことはできない。そこで本校では教科の学習と総合の学習を同一の理念に基づいて調和的に展開するカリキュラムをデザインすることを目指して，実践を重ねながら教科と総合を調和的に展開するカリキュラムがどうであったかの評価を行ってきた。

(3) 自己の生き方を創り，夢を育てる学校に

今，学校の存在意義として，学校教育が子供たちにとって一生涯続く学びと実践の営みの最初の一歩となることが求められている。そこで本校では，教科の学習も総合の学習も子供たちにとって，生活現実との切実な接点をもたない架空の閉ざされた学びとならないように細心の注意を払ってきた。そこでは子供たち一人一人の生き方のよりどころとなるような学習となるよう教科と総合のカリキュラムをデザインし学習を展開してきた。



	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
ほとんどない	7	2	3	7	7	5
すこしある	10	15	13	11	11	13
ある	59	63	60	56	59	48

【本校のアカウンタビリティーの資料】

このような本校のこれまでの教育実践の結果を評価し説明するアカウンタビリティーの一つとして行った調査結果が右上のグラフである。「将来なりたいものや夢がある」と応えた子供たちは全体の８割近くに達しており，「多少なりとも夢がある」という子供まで含めると実に９割を越える結果が得られた。低学年のころにもっていた夢の内容が高学年へと成長するにつれて変わることはある。たとえ夢の内容がその子供の成長につれて変わっていったとしても，自分なりの夢をもち続けることを大切にしなければならない。

(4) 本校を取り巻く状況と子供たちの実態

本校が所在する地区は，昔から「荒津の丘」と呼ばれ，国際文化を受け入れてきた玄関として様々な歴史的文化性をもっている。博多湾，室見川，西公園，大濠公園など開発化された自然環境をはじめ，福岡ドーム，総合図書館，博物館，福祉プラザなど社会的文化施設も充実している。本校はこれまで，自分の生活や身近な環境とのかかわりを中心に活動や体験を基盤とした学習展開を大切にし，知識を生きて働くものとして実践に活用し，心と体も共に高めていく子供の育成をめざしてきた。その結果，これまでに育ちつつある子供の姿として，家庭の中にある小さな環境破壊にこだわるようになったり，自分の家の近くにある福祉施設やボランティア活動に参加したり，韓国などの文化に触れ，共通性や独自性を学びながら共に生きることへの希望を語ることもできつつある。しかし，その一方で，本校の特質として，放課後の余暇時間の少なさ，地域での子供の友達関係の問題などもあり，学校で学んだ見方や考え方を生活に十分生かすことができていないという現状もある。また，進学・受験に対する保護者の願いが強く，学校を終えた後は，塾通いをし，効率的な知識の獲得を優先にした学習に追われているなど，二極化した学習を強いられている。このような生活実態の中で，本校の子供たちや保護者は，これまで以上に知恵や心情を働かせて切実感のある問題を解決していく学習に期待感をもっている。本研究主題は，このような実態を踏まえ，子供たちにとって価値ある活動や体験を教科と総合で充実し，調和的で豊かな人間の育成をめざしていく。

【豊かな自然環境と近未来的社会環境】

(5) これまでの本校研究の経過

本校では，平成６年度からの３年間，文部省研究開発の指定を受け，生活現実の中から，子供がかかわる学習対象を取り出し，感動体験を大切にすることで，子供の生き方にせまる総合的な学習の様相をもった「表現科」「生活環境科」領域「人間」という新しい教科領域を含む教育課程を編成し，子供たちが，生きる喜びを生み出す姿を実証成果として公開してきた。この研究を通して，子供たちの知的で強い追究の意欲を大切にすると，その追究の方向や方法は子供一人一人によって異なり様々に多様化していくことが実践的に証明された。

【野鳥ってとってもかわいいね。】

平成９年度から，豊かな人間像とは，「精神的なやさしさ」「知的なかしこさ」「身体的なたくましさ」などを調和的にもち得ている人間であるととらえ，これらを総合的に発揮して，社会や自然などにかかわり，自分の生き方を創ることができる子供たちをめざしてきた。そして，新しい教科・領域の実践から明らかになった豊かな心を育てるための学習の構想を，全ての教科学習にも生かしていくという考えのもと，研究主題を「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」と題し，教科本来のねらいを達成しながら体験から得た豊かな心も育てる「学習の総合化」を行ってきた。この「学習の総合化」によって，豊かな心を育てる学習内容の人間化を図る道筋が明らかになった。

【特別養護老人ホームの方とかかわる】

そして，平成１０年度は，副主題を「子供と創る教科・総合的学習の展開」と題し，豊かな人間の育成をめざすために，教科と総合を子供とともに創るという視点から学習展開を図ってきた。その研究の成果として，豊かな人間の育成をめざす教科と総合の学習や相互補完的な立場が明らかになってきたことや，子供の姿として，自分なりの今現在の生き方を創り，夢をもつ子供たちが多く見受けられるようになってきたことなどがあげられる。

【私が育てたカブト虫，かわいいでしょう】

そこで，本年度は豊かな人間とはどういう存在なのかという人間存在の原理をもとにして，その育成のためにはどのようにすればよいのかを探ってきた。具体的には知恵と心情をはぐくむ学習を大切にして，子供の文化性を拡充する教科の本質的価値や役割と生活性を更新する総合の学習像，それらの調和的展開はどうあればよいのかを実践事例をもとに明らかにしていく。

2. 主題の意味

(1)「豊かな人間」とは

本校が求める豊かな人間

社会や自然などの環境に進んでかかわり，自分の生き方を創るために自らの資質や能力を総合的に発揮して学習を進めながら，精神的なやさしさ，身体的なたくましさ，知的なかしこさを調和的にそなえていく人間のことである。

本校では平成６年度から，学校教育を人間教育の枠組みでとらえ，社会や自然などの環境に進んでかかわったり，周りの人々と協力してよりよく暮らす生き方を探ったりする人間の育成を重視してきた。

人間は社会や自然，周りの人々とは無縁では生きることはできない。社会や自然と何らかのかかわりをもつことによってはじめて生きることができる。しかし，ただ生きることだけを目指していたのでは自己本位の生き方に陥ってしまう。そこで本校では単に生きることのできる子供の育成を目指すのでなく豊かに生きることのできる子供の育成を目指してきた。

豊かに生きるとは，自分を取り巻く自然や社会，人々とよりよく調和して生きることである。

自分と社会，自分と自然とのよりよい関係を築きながら，さらに心の充足をもとめてかかわりかけ続ける人間こそ豊かな人間としてのあるべき姿である。目指すべき豊かな人間をこのような他との調和と自らのあくなき向上を求めていく人間であるとの考えに立ち，これを「人間存在の原理」として，子供の姿や学習をとらえていく指標としてきている。この本校が考える人間が人間らしく生きる，豊かな人間として生きるための原理は次の通りである。

本校が考える人間存在の原理

○　人間は，自然と共に生きる存在である。
　自然と共に生きるということは，自然の恵みを受け，生命のつながりを感じながら，自然と調和して生きることである。

○　人間は，社会の中で生きる存在である。
　社会の中で生きるとは，集団や社会の仕組みの中で，協調し連帯しながら人とかかわって生きることである。

○　人間は，価値を求めて生きる存在である。
　価値を求めて生きるということは，心の充足を求めて，創造的に自己表現しながら生きていくことである。

人間性を豊かにする教育活動について教育課程審議会答申では，改善のねらいの最初に「豊かな人間性を育む」という表現で示している。つまり豊かな人間を育成する教育は，これまで以上に重視しなければならない目標である。また，新旧両方の学習指導要領の「総則」の冒頭にある「児童の人間としての調和のとれた育成」「児童に生きる力をはぐくむこと」は，この現在の学校教育が抱える重大な課題に対する取り組みの方向性を示したものであるといえる。

いじめや校内暴力，不登校，経営の困難な学級の出現など多様な現在の教育課題を目の当たりにしたとき，もう一度，豊かな人間性育成のために「人間が人間として生きるとはどういうことか，私たちはこれからいかに生きるべきか。」という人間としての根本的な問いに立ち返って，この問題を自分のこととして考え追究していく学習を展開することが大切であると考えている。

(2)「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」とは

本年度は先に掲げた３つの人間存在の原理を踏まえ，２１世紀の社会に望まれる豊かな人間育成のための教育の創造に取り組んできた。そこでは次のようなことを大切にしてきた。

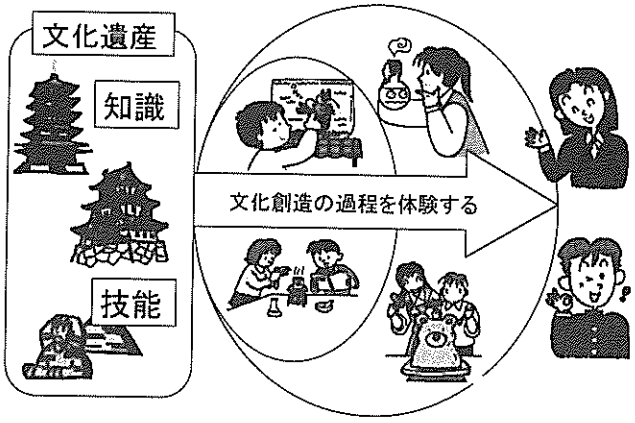
> 豊かな人間の育成のための教育では，まず教科の学習においては子供の文化性の拡充を，総合の学習においては子供の生活性の更新を目指すこと

① 文化性を拡充する「教科」の学習

教育の本来的な役割は，これからの社会を創っていくよりよい文化の担い手を育てることである。その意味において先人たちが築いてきた多くの文化遺産を継承し，それを未来に向かって発展させていく学習はこれからも大切にされなければならないことはいうまでもない。

芸術であっても科学であっても，人間が創り出してきた文化遺産のほとんどは，それを教育する際には，細かく分析された知識や技能として提示される。この過程を経なければ先人たちの文化遺産を正確に受け継ぐことはできない。しかし，知識や技能のみを覚えることや技能に習熟することにのみ目がいってしまうところにこれまでの教育の課題が潜んでいる。よりよい文化の担い手として，先人たちの築いてきた文化を継承し発展させるためには，先人たちが新たな文化を創造してきた過程での豊かな発想や粘り強い探究心，よりよいものを求めてやまない意欲を身につけなければいけない。つまり，できあがった完成品を再生産するのではなく，それを創り出す過程でのダイナミックな見方，感じ方，考え方を受け継ぐことが教科の学習の役割である。

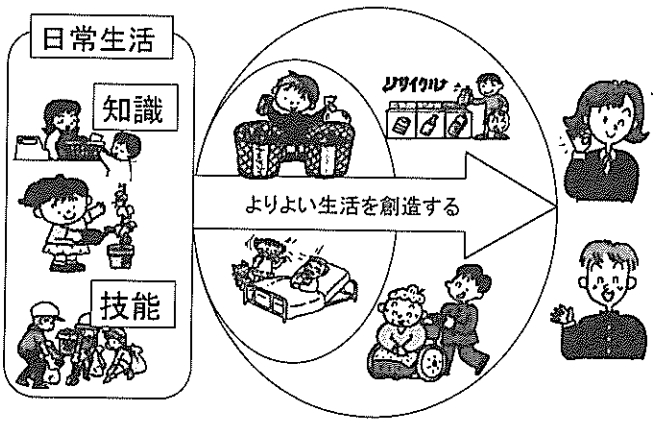
【文化創造の過程を体験する教科の学習】



② 生活性を更新する「総合」の学習

子供たちの日常生活の基盤となる社会環境は科学技術の進歩によって日々変化している。この社会の変化と子供の学習が遠い関係として行われていくとき，子供の生活現実と離れた学校での学びは，生活に生かされることの少ない学校知として子供の中に構成されてしまうのである。総合的な学習の時間の創設は，このような社会現実の変化に対し，主体的に追究し，批判的吟味を経て創造に至る学習が必要であったからである。つまり，子供が自分を取り巻く環境にかかわりながら資質や能力を総合的に発揮して豊かな人間として育ちゆくためには，学習内容を生活現実の吟味・拡充や文化の拡充といった視点から具体化することが大切なのである。これによって子供と学習対象とのかかわりはより強まり，知恵と心情を働かせた問題解決を通して生活性が更新される。

【よりよい生活を目指す総合の学習】



3. 副主題の意味

(1)「知恵と心情」について

① 現実社会への主体的な対応能力としての「知恵」

「知恵」とは社会や自然といった人間を取り巻く環境への主体的な対応能力ととらえている。

具体的には，出会った問題場面や状況を把握し，自分の知識を生きて働くものへ再構成しながら文化性や生活性を高めるために活用できる能力である。変化し続ける現実社会の中で子供たちが主体的に判断し，問題を解決していくためには，自分の生活とかけ離れた場面の中で獲得する知識だけでなく，その知識を自分はどう使っていくかといった知識の使い方まで含めた認識が必要となる。いつ，どんなときに使える知識なのか。どのくらい確かな知識なのか。そのようなことを実体験を通して知ることが生きて働く知識（知恵）を身につけることである。

つまり，子供が様々な問題場面や状況に出会ったとき，生き方を方向づける心情に支えられ，これまでの知識を自分にとって生きて働くものとして再構成して活用することができる認識力であり，現実社会への主体的な対応能力である。

知　恵

問題場面や状況を把握し，自分の知識を生きて働くものとして再構成したり，自分にとって必要な知識を獲得したりして活用できる主体的な対応能力

② 人間の生き方を方向づける「心情」

「心情」とは人間の生き方を方向づけるものであり，主体的な対応能力が高まることへの強い期待感ととらえている。具体的には自分の文化性や生活性をよりよく拡充・更新することを願ったり（向上的な心情），自分を取り巻く環境や他者と共によりよく生きようと願ったりする（調和的な心情）心の在り方である。豊かな人間として育ちゆくためには，その生き方を方向づける心のあり方が大切であると考える。もしも，人としてどう生きていくかといった生き方を方向づける心情が，利己的で独善的な方向へ向かえば，社会や自然などの身近な環境や他者との関係の中で価値を求めて豊かな生き方を創ることはできない。問題を解決するための知識を理解するだけでなく，自己の内面を常に見つめ直しながら行動化し，よりよく生きようとする態度まで高めるためには心の在り方（心情）の育ちを大切にする必要がある。

つまり，現実社会で自分の生き方を創るための確かな「自己」の存在感と自分がかかわる環境や他者と「共生」することが生き方の基盤である心情として据えなければならない。

心　情

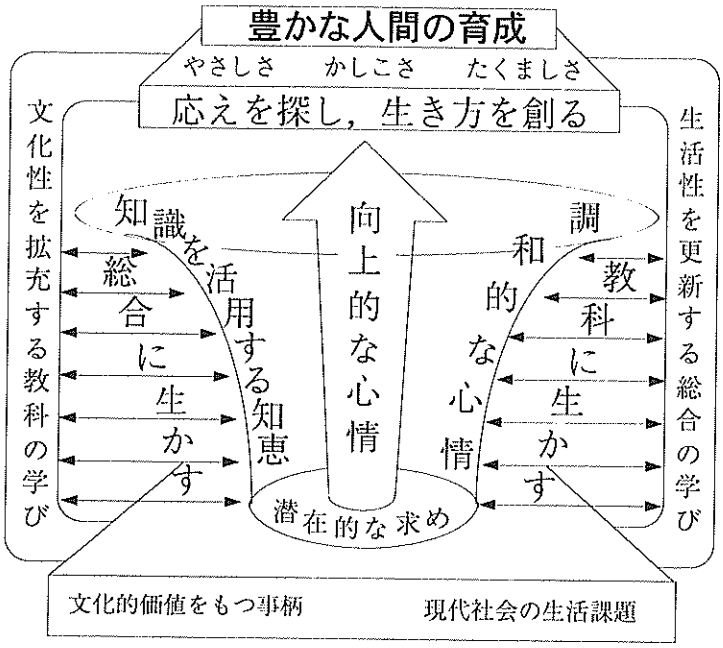
進んで自分の文化性を拡充，生活性を更新しようとしたり（向上），自分を取り巻く環境や他者と共によりよく生きようとしたり（調和）する意欲や態度

社会や自然といった自分を取り巻く環境への主体的な対応能力としての知恵も，人間の生き方を方向づける心情も，ともに自分と学習対象とのかかわりを深める中で強まり伸びていく。このかかわりの深まりの過程では一人一人の子供の独自性（こだわり）が発揮され，その子なりの旺盛な活動が展開されていく。そこでは自分が身につけてきた知識が活用できるかどうか試行されたり，自分の在り方や行い方がよりよいものであるかどうかが吟味されたりしていく。そこで本校では各教科・領域と総合的な学習の時間における高めたい資質や能力を知恵と心情の２つの面からとらえて，それらを培うための学習の原理を定めて授業を展開している。

(2)「知恵と心情をはぐくむ教科，総合の調和的展開」とは

① 学習内容からみた教科と総合

【教科と総合，知恵と心情の関係】



教科の学習は受け継ぐ文化としての学習内容がある。総合の学習は子供の興味や関心に支えられた生活更新のなかで子供自身が内容を創り出していく。このように学習内容の面から考えると，これら２つの学習はそれぞれ文化性の拡充と生活性の更新といった，子供が豊かな人間として知恵と心情を高めながら育ちゆく上で相互に補完し合う関係であって，教育課程の中で両者の境をなくして融合するべきものではないことは明かである。具体的には教科の学習の時間と総合の学習の時間が相まって１つの単元として構成するようなことは，教科と総合の担うべき役割の面からみると両者ともに望ましい結果は得られないといえる。このようなことから本校では教科の学習，総合の学習それぞれが知恵と心情をはぐくむために最適な，各々独立した単元として構成されるべきであり，教育課程にも教科と総合の学習はそれぞれが独立した２つの課程として位置づくと考えている。

② 学習方法からみた教科と総合

学習内容の面からは独立２課程となるべき教科の学習と総合の学習ではあるが，どちらの学習も子供にとっては自分の経験を揺さぶり，これまでの生き方を見つめ直してよりよいものに創り変えていく過程でなければならない。つまり知恵と心情をはぐくむ学習では，子供は先人が築き上げてきた文化財や自分が日常的にかかわるもの，人，こととのかかわりを深める過程を通して，自分の生き方そのものと向かい合い，慣習に流されることなくその意味を吟味したり，よりよい生き方を求めて工夫や試行を繰り返していく。そこで，本校では子供たちが自分と学習対象とのかかわりを深めながら知恵と心情を強め伸ばしていく問題解決過程について，大きく次の４つの段階を経ると考えている。

○ 自然体験，社会体験を振り返って見直しながら課題をもつこと	（生活吟味）
○ 課題解決に向けて一人一人がこだわりを発揮して追究すること	（自己追究）
○ 自分の知識や在り方・行い方を吟味して活用できるようつくりかえること	（内容創造）
○ 生活現実の中で，自分なりの「応え」を探し，生き方を創り出すこと	（生活更新）

子供が自分の生き方を見つめ更新し続ける知恵と心情の育ちを教育の目標に掲げる時，教科と総合の学習の進め方は必然的に共通の過程を経ることになる。これが本校が求める教科の学習と総合の学習を，学習活動や学習内容が相互に補完し合い，促進し合う関係として教育課程に位置づけ調和的に展開することである。

(3) 教科と総合の学習を調和的に展開するために

教科と総合の学習で目標とする知恵や心情を規定する条件をあげると次のようになる。

知　恵

○ 教科で身に付く知恵…単一の知識ではなく系統的なものとして，他の知識と関連づけられたり一般性をもったりできること

○ 総合で身に付く知恵…組織化こそされていないが子供の追究の方向に焦点化されているために子供一人一人がそれについて確信をもっていること

心　情

○ 教科で育つ心情…それぞれの教科に固有の内容（文化）に親しみ，それを自分も創造していこうとすること

○ 総合で育つ心情…生活の中にある問題を解決し，周りの人々とともによりよい暮らしを実現しようと努力し続けること

このような違いは教科が文化財をかかわりの対象としており，文化の継承がなされやすいように細分化され段階をおった活動によって構成されているのに対して，総合は子供の求めによって内容も順序も決定されていくためである。また，教科と総合それぞれの学習を構想する際には，次の点に留意していく。

① 教科の本質的価値を追究し，豊かな人間の育成につながる学習をめざすこと

教科のねらいは，その時空を超えて変わらぬ文化性の継承・発展にあると言われている。しかし，その教科の学習が，大人の文化の表層的な伝達や一つの答えを教え込むことであっては，子供の内なる文化性は拡充されていくことはできない。子供にとって意味ある活動からはじめ，納得・実感し，教科の本質的な価値に迫らせると共に，内なる文化性を拡充していくようにする必要がある。さらに，文化とは，現実生活の中に生きてこそ文化として成立する。この段階に至るまでを教科学習の中で大切にする。

② 教科で学んだ知識や技能を総合の学習で子供自身が総合化し，生活創造をめざすこと

教科において学習活動の過程で学んだ生きて働く知識や技能を子供自身が関連づけ，総合化できるように教科と総合の学習の教材配列や時期を検討するようにする。その際，単元・題材や活動面での関連と共に，知識や技能を含む能力面の関連を重視しながら検討する。総合において，子供が生活現実から切実な問題に出会い，心情や知恵を働かせて納得・実感し，豊かな人間の育成につながる現代社会の課題に対して自分なりの応えを探し，内なる生活性を更新していくことができるようする。

③ 現実生活を更新する総合の学び方を教科の主体的追究に生かすこと

総合で学んだ主体的追究によって，さらに教科に立ち戻って追究していく場合も予測化する必要がある。また，総合によって学び方として身につけた課題発見力，多面的・総合的な見方や考え方，情報活用能力，自己決定力，問題解決力，自己評価力，生きて働く知識や技能などを教科の学習場面に効果的に生かしていくことも大切にする。

④ 教科と総合の学習活動，内容の類似点を生かす題材配列を工夫し効果的に指導すること

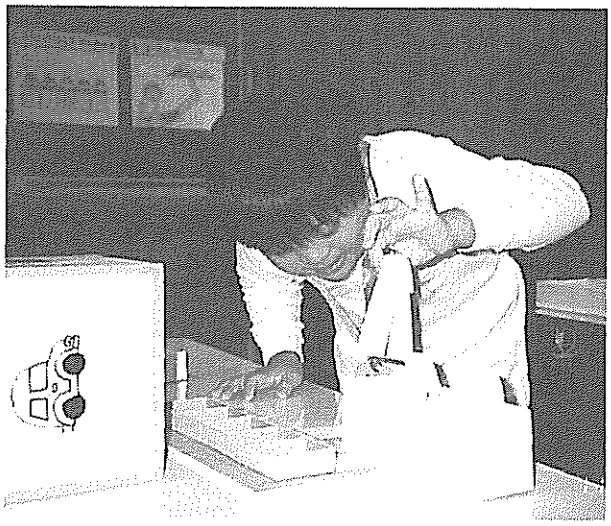
教科の学びと総合の学びが相互に関連しやすいように，活動の類似性や発展性を考慮して，それぞれの学習時期や配列を入れ替えるなど柔軟な運用を行う。

4. 障害児教育研究部，帰国子女教育研究部の研究

本校は，特殊学級を３学級，帰国子女教育の学級を３学級設置している。全体研究主題にあげている豊かな人間の育成をめざしながら，各部の立場で研究を進めている。具体的には以下のような点から研究を焦点化して，子供たち一人一人のもつ能力に応じた学習を展開している。

(1) 障害児教育研究部

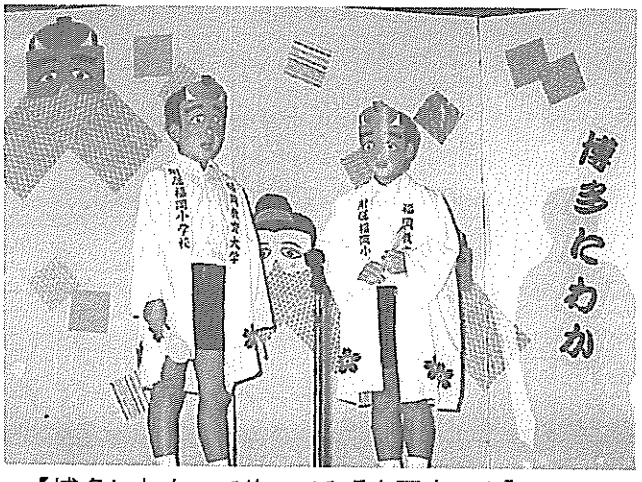
障害児教育研究部では，平成１０年度・１１年度，文部省特殊教育教育課程研究指定を受けながら，「豊かな生活をめざす教育課程の編成」を研究主題として設定し，指導の重点化を図った個別の指導計画作成を通して，生活力を培う研究を進めてきている。特に本年度は，子供たちの生活学習課題に応じて個人の目標を設定し，教育課程の各教科・教科等を合わせた指導の中で，個人の目標が達成できそうな内容を重点化し，個別の指導計画を明らかにしてきている。この研究を通して子供たち一人一人のもつ特性に照らして教育内容を精選し，豊かな生活をめざすことのできる教育課程を編成してきている。



【自動車をかぞえたらわかったよ！】

(2) 帰国子女教育研究部

帰国子女教育研究部では，海外生活で得た語学力，国際感覚を生かし，その特性を伸ばしていく特性伸長の面と，日本の教育課程に照らして，学習状況が不十分である点を補う適応指導の面との２つの柱で研究を進めている。特性伸長の面では，「国際交流タイム」を設定し，海外体験を生かした活動を行い，国際理解教育の具現化を進めている。適応指導の面では，個別の指導計画と個の実態に応じた支援体制を行い，教科指導を中心として学習の適応が図れるようにすることを目指している。特に本年度は，教科学習と国際交流タイムの調和的展開を明らかにし，情報メディア教育などを取り入れながら支援体制をより充実させ，適応指導と個性伸長の相互促進的な教育課程の修正改善を重点的に研究してきている。



【博多にわかってやってみると面白いよ】

《参考文献》

文部省「小学校学習指導要領解説総則編」東京書籍　１９９９年
奈須正裕　編著「“実践に学ぶ”特色ある学校づくりNo.６」教育開発研究所　平成１２年３月１日
永井順國　著「学校をつくりかえる」小学館　１９９９年８月１日

共生社会を創る子供が育つ社会科学習

社会科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために社会科に求められていること

急激に変化する現代社会。そこには，国家間の紛争の多発，高齢者や障害者の蔑視，地球規模の自然破壊の軽視など解決すべき問題が山積している。これらの原因は，利潤追求に価値を置くがあまり，自分が他の人々や自然，文化などとかかわり合って生きていることを忘れ，自己中心的な生き方を求めすぎた結果と考える。一方，過度な「私第一主義」も社会問題となって久しい。そこには，社会科の究極的なねらいである「公民的資質」が十分に育たぬまま，「私」ばかりを優先する風潮がある。したがって，これからの社会科においては，①自分を取り巻く人々や自然，文化などとのかかわりの大切さを感じ取ったり，地域社会や国家・社会の形成者としてその発展に尽くそうとしたりする心構えをもつこと，②社会生活の様々な場面で課題をとらえ，観察・資料活用・表現を駆使して，望ましいあり方を多面的に考えること，などの力を中核に据えた子供の育成が求められると考える。

○　共生社会を創る子供が育つ社会科学習とは

自分が，人々や自然，文化と相互にかかわりをもちながら生活を営んでいることを実感したり，地域社会や国家・社会の発展に貢献したりするための知恵や心情を一体的に育むことをねらう学習である。

共生社会とは，自分と他の人々や自然，文化などと相互のかかわりを大切にする生き方が求められる社会の総称である。具体的には，多様な価値観を尊重し合う多文化型社会，高齢者や障害者と相互に協調し合う福祉型社会，健全な生態系や自然の循環を保護したり，創造したりする資源循環型社会などを意味する。共生社会を創るとは，自分が他の人々や自然，文化などと相互にかかわりをもちながら生活を営んでいることに気付き，社会生活に適応しながら，社会の発展に向けて貢献するための知恵や心情をもつことである。ここでいう知恵とは，社会生活の様々な場面で考えたり，公正に判断したりする力である。また，心情とは，社会生活をよりよくしようとする心のあり方である。この心情には，社会的義務や責任を果たそうとする向上的な心情と自分を取り巻く人々や自然，文化などとのかかわりを大切にしようとする調和的な心情の二つがある。

○　共生社会を創る子供とは

具体的には以下のよう子供を意味する。

○　社会生活の様々な場面で課題をとらえ，観察・資料活用・表現を駆使して，社会生活や国土と歴史に対する理解を深めながら，社会のあり方を多面的・公正的に判断する子供　（知恵）
○　地域社会や国家・社会の形成者として，その発展に尽くそうとする子供　（向上的な心情）
○　自分を取り巻く人々や自然，文化などとのかかわりを大切にして生活を営もうとする子供　（調和的な心情）

子供は，将来，個人として消費者，生産者，労働者，納税者，住民，国民，人類など様々な立場に立って，社会生活を送ることが予想される。ここで大切なのは，自分が現在の社会とどのようにかかわっているのかという相互依存的な関係を理解したり，社会を構成する様々な人々の立場に立ってどのような行動の選択・判断をすればよいのかを考えることである。そこで，共生社会を創る子供が育つ社会科学習の具体的な展開としては次のように考える。地域学習を主題とした中学年では，地域社会の創造をめざす様々な立場の人間の営みや願いに着目し，郷土への愛着や誇りの高まりを重視した学習を展開する。また，国土・産業学習を主題とした第５学年や歴史，政治・国際学習を主題とした第６学年では，人間の社会的な営みへの共感的な理解をもとに，当事者の立場に立った社会問題の解決を図る判断力の育成を重視した学習を展開する。

郷土における社会的ジレンマ学習の展開

社会科部　髙　野　誠　一

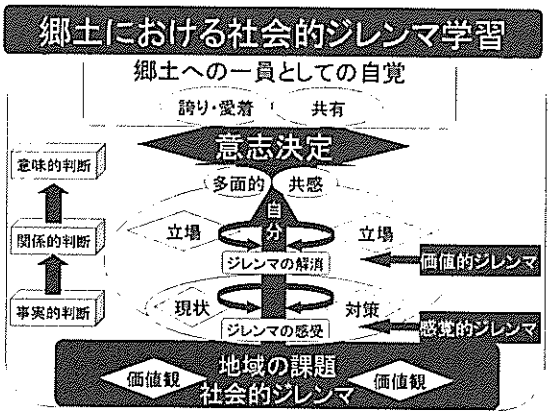
1．主題の意味

(1)　郷土における社会的ジレンマ学習とは

ここでいう郷土とは，子供が地域にかかわり，よさに気づき，そこで生きる誇りと愛情が生まれたときの地域の固有性に心的な愛着を抱く場所となることである。中学年の社会科学習では，「地域」が主題であり，具体的な活動や体験を通して，地域の特色をとらえ，地域の一員としての理解や愛情の育成が望まれる。しかし，この地域でも，現代的課題が山積している。しかも，その解決に，ただ一つの答えは存在しない。社会的ジレンマとは，このような地域の課題に対する葛藤が起こる状態を言う。現代社会においては，その葛藤が，単純な正-反での構造ではなく，異なる立場がそれぞれの価値実現のために存在し，共同体価値よりも相対的，公共的価値につながるものが多い。このような社会的ジレンマをもった地域の社会的事象を取り上げることで，子供自身の中に，葛藤状態を形成し，その解消のための多面的な判断をおこなわせることができると考える。中学年の子供たちは，課題解決において，一面的，短絡的になりやすい傾向がある。そこで，社会的ジレンマを持つ事象に出合わせることで，多様な立場の存在に気づき，自分の価値観を一方的に主張する矛盾を感じ取らせ，それぞれの立場への理解や共感能力を高めることができる。このことは，共生社会を創る子供を育てる上で，社会のあり方を多面的に判断する知恵と地域の発展に尽くそうとする向上的心情，自分を取り巻く人々や自然などとのかかわりを大切にする調和的心情をあわせて育むことができると考える。

(2)　郷土における社会的ジレンマ学習の展開とは

地域の課題に対する社会的判断を高めていく過程に２段階の感覚的，価値的な葛藤を位置づけることである。課題に対する社会的判断は，①地域が抱えている課題と自分とのかかわりの意識化（事実的判断）②よりよい社会生活をつくるための認識と地域の課題についての多面的な見方（関係的判断）③課題解決のための協調性（多様な考え方への共感的理解）や郷土像・自分の策定（意味的判断）と高められる。この過程に感覚的ジレンマから価値的ジレンマという２つの葛藤を位置づける。感覚的ジレンマは，課題解決のために自分なりに判断した対策が進められない状況に出合い，自分が考える解決の姿や対策と相反する状況との間に矛盾や疑問を感じ，社会的ジレンマの存在に気づくことである。このような感覚的ジレンマをもたせることは，子供たち自身に，自分のこととして課題解決を考える主体意識をもたせることにつながる。価値的ジレンマは，解決についての選択肢を考え，自分なりの立場を持った上で多様な立場にふれ，それらの妥当性を理解し，共感することである。このことで，恣意的・一面的な判断から多面的な判断へと高めることができると考える。



(3)　本研究で期待する子供の姿

- ○　地域の社会的事象の固有性や自分とのかかわりに気づき，課題をとらえる。（生活吟味）
- ○　自分なりの課題解決の姿を描き，観察，情報活用，表現をおこなう。（自己追究）
- ○　自分が考える解決の立場と他の立場を比較・共感し，多面的に判断する。（内容創造）
- ○　多面的な判断をもとに意志決定を図り，郷土の一員としての自覚を図る。（生活更新）

2． 学習の具体的構想

(1) 郷土における社会的ジレンマをもつ中学年社会科学習の事象選定

中学年社会科は，「地域」を主題とし，具体的な体験や活動をしながら自分の生活基盤を学ぶ。そのなかで，地域への誇りや愛着，郷土を創造する主体としての意識を高めるためには，歴史性に裏付けられた地域固有のよさと現代的な課題との間での問題について多面的な判断を要求される学習が必要である。そこで，次の三つの視点から教材となる事象を選び出す必要があると考える。

○ 地域を郷土として感じ得るための地域固有の産業や歴史，生活を取り上げること。このことで，地域で培われてきた伝統や受け継いできた人々の願いを感じ，郷土としての思いを深めることができる。(固有性)

○ 子供たちや子供たちを取り巻く家庭や地域での生活との関係が深く，精神的・物理的ともに身近なものであること。このことで，社会的な意味をとらえ，解決欲求を旺盛に働かせることができる。(生活性)

○ 地域が抱えている課題が現代的な課題に伴ったものであり，解決のための立場や考え方が多様に存在している事象であること。このことで，社会的ジレンマを感じ，立場への共感や多面的な判断が要求される。(課題性)

地域の社会的課題のなかに，どのような価値の対立があり，社会的ジレンマを形成しているのかを吟味していく必要がある。その構成要素について，次のような視点が考えられる。

○ 自然環境や資源を大切にしようとする価値(自然)
○ 受け継がれてきた伝統・文化を大切にしようとする価値(文化)
○ 人間の生活を維持，発展させようとする価値(生活)
○ 産業の効率や生産性を高めようとする価値(産業)

(2) 社会的ジレンマに対する意志決定を図る学習過程と活動の工夫

社会的ジレンマをもつ事象について課題解決を図る学習過程を「つかむ」段階，「つくる」段階，「いかす」段階の３段階として設定し，それぞれの段階において，次のような活動を工夫する。

【社会的ジレンマ学習を位置づけた学習過程】

段階	つ か む	つ く る	い か す
活動と内容	1．社会的ジレンマをもった課題と出合い，学習問題を設定する。 (1) 自分と社会的事象とのかかわりを取り出す。 ○ かかわり・よさの把握 (2) 課題と対策から学習問題を設定する。 ○ ジレンマへの気づき ○ 学習問題の把握	2．課題解決に向けた解決策について情報収集し，自分の立場を決めて話し合う。 (1) 社会的事象について多面的な視点からの観察・調査 ○多面的な情報収集 (2)自分の考えをつくる。 ○立場の設定 (3)自分の立場での提案を行う。 ○効果や根拠，立場の理解	3．社会的ジレンマをもつ課題解決の意志決定を図る。 (1)立場への共感から自分の考えを最終的に表す。 ○ 自分の考えの自己決定 (2)考えたことを他者(課題の当事者など)とシンポジウムをおこなう。 ○ 地域とかかわる実感 ○ 地域への自分の誇り，愛着
ジレンマの過程	切実な不安 → 感覚的ジレンマ 自分とのかかわりや課題に気づき，解決の方向と現状の間での矛盾からジレンマに気付く。	価値的ジレンマ 課題解決のための自分が選択として考えた立場と他の立場の違いにジレンマを感じる。	意志決定 多様な考え方への共感をもとに，多面的に考え，自分のこだわりをもって意志決定を図る。
活動の工夫	事象のよさ(固有性)を感じる体験的活動から課題を身近に感じさせ，対策と現状との違いからジレンマに気付かせる。	解決のための対策や考え方の根拠とする資料や提案する対象を位置づけ，かかわる人々の願いを推し量る。	対策ごとの共通性を認識し，課題にかかわる人々の願いをもとに，地域の一員としての判断をつくる場を設定する。

3．指導の実際と考察

(1) 小単元名　　第３学年　守ろう　福岡名物「室見川のしろうお漁」

(2) 本小単元の考え方

本小単元は，福岡の春の風物詩，しろうお漁がわたしたちの生活とかかわり，福岡名物として意味を持っていることやしろうお漁が室見川の水質や塩分濃度，川底の状態など自然環境を生かして営まれ，やな漁という伝統的な漁法を工夫していることを理解するとともに，しろうおの出荷などを通して広く国内の他地域とかかわっていることに気付くことをねらいとしている。具体的には，①福岡名物としてのしろうお漁が自然環境の変化等によって減少してきていることに対して，自然と産業の結びつきを考えたり，減少問題を克服しようとする工夫をとらえたりすること(知恵)②福岡のしろうお漁が福岡名物として受け継がれてきた伝統を知り，その維持・発展を願うことができること(向上的心情)③しろうおが産卵し，数を増やしていくことができる自然環境を守り，福岡市民や他地域の人々と協力しようとすること(調和的心情)などである。このような知恵と心情とを併せて育んでいくためには，室見川のしろうお漁が近年，その漁獲量を減少させ続けていることを取り上げ，教材化していくことが必要であると考える。それは，地域の固有性をもった事象に対しての子供たちの将来への不安から考えた自分の解決策と現状との矛盾(感覚的ジレンマ)，解決のための様々な考え方での葛藤(価値的ジレンマ)に出合わせることができ，社会的ジレンマを通しながら，地域の未来を伝統とこれらの発展に基づいて，多面的に判断し，自分なりの応えを形成することができるからである。

本小単元の指導にあたっては，近年続いているしろうおの漁獲量の減少に対して，しろうお漁を維持・発展させようとする願いと問題解決のために他の立場に与える影響などを考える必要に迫られるという立場での教材化を図る。その上で，①福岡名物として親しまれ，受け継がれてきた室見川のしろうお漁の衰退への不安②漁獲量の減少を解決するための様々な努力をとらえたり，しろうおを守ることを中心に考えることで他の社会事象への影響がでてくることへの価値的ジレンマへと社会的ジレンマを深めていく。これらのことを通して，多面的な共感・判断をおこない，室見川のしろうお漁の伝統を守るために，しろうお組合の人々を中心に，県や他機関と協力しながら努力していることをとらえるとともに，自分自身も身近な室見川の水を守るための行動を考える必要があるという応えをつくらせていきたい。そのために，まず「つかむ」段階では，子供たちの室見川での遠足や家庭での余暇などの体験を掘り起こし，河畔がしろうお料理でにぎわっている様子の写真を提示して，室見川のしろうおに関心をもたせる。そして，しろうおについての家の人への聞き取りやしろうおを食べる体験，東京でのテレビ番組視聴などを位置づけ，「室見川のしろうおは，どうして福岡名物なのか」という調べる方向性をもたせる。そのなかで，伝統や室見川の環境，漁法の特徴，他地域とのかかわりを視点として追究させ，伝統や自然環境，漁法の工夫からしろうお漁の名物としての意味をとらえさせる。その上で，近年の漁獲量減少の様子を調べさせ，衰退への不安を感じ取らせる。次に，「つくる」段階では，漁獲量減少の原因やしろうお組合の方の取り組みなどについて調べ，自分なりに漁獲量を増やす解決策をつくり，現状と比べ矛盾を感じる。(感覚的ジレンマ)そのなかで，漁場整備や放流数の増加，室見川の取水制限などを考え，交流を図る。しかし，それらが水鳥との関係や予算や他の地域のしろうお漁との関係，生活用水などで難しいことを感じる価値的ジレンマを感じさせる。そして，「室見川のしろうお漁をあきらめてよいのか」ということでの判断の場面で，自分なりの判断としての室見川水系を守り，自分自身の川での行動や水の利用を見直していくようにする。最後に，「いかす」段階では，「室見川しろうおシンポジウム」を保護者やしろうお組合の方などを招聘して行い，福岡の一員としてともに解決していこうとする願いを共有させたい。

(3) 目　標

① 室見川のしろうお漁が室見川の水質や塩分濃度，川底の状態などの自然環境を生かして営まれ，やな漁という伝統的な漁法を工夫していることを理解するとともに，しろうおの出荷や道具などを通して他地域とかかわっていることに気付くことができる。

② 近年のしろうお漁の漁獲量減少の問題に対して，しろうお漁の伝統を守るために，しろうお組合の人々が環境整備や放流などの努力をしたり，県や関係機関と協力したりしている努力に共感し，(向上的心情)漁獲量を増やすためには環境や地域の人々と協力する必要があることをとらえることができる。(調和的心情)

(4) 計　画(１５時間)

段階	学習活動と内容	社会的ジレンマと支援	配時
つかむ	1．室見川のしろうお漁の様子について調べる。 (1) 室見川での体験やしろうおについて話し合う ○ 室見川のしろうおへの関心 (2) しろうおを食べたり，家での聞き取りをしたりしたことをもとに話し合う。 ○ しろうおが福岡名物であることへの関心 ・ 室見川のしろうおは，どうして福岡名物なのだろうか。 (3) 室見川の環境や漁法，しろうお漁の歴史，他地域とのかかわりなどについて調べる。 ○ 福岡名物としての意味づけ (4) しろうおの漁獲量の減少について調べる。 ○ 名物の衰退による**切実な不安** 福岡名物の室見川のしろうお漁を続けるためにどうしたらよいのだろうか。 ・ 減少の原因　・ 対策	※ 室見川の身近さやしろうおへの関心をもたせるために，室見川での体験の掘り起こしや家庭での聞き取りを位置づける。 ※ しろうおを福岡名物として意味づけるために，食べる体験や報道資料，しろうお漁の見学を位置づける。 ※ しろうおの漁獲量減少の様子を福岡の需要量と比較したグラフで提示する。	5 ① 課外 ① ② ① 7
つくる	2．室見川のしろうお漁の漁獲量減少の原因や対策について調べ，自分なりの解決策をつくる。 (1) 原因や対策について調べる。 ○ 室見川のしろうおの産卵場としての役目，水量などの面で減少してきていることの理解 ○ しろうお組合の人々の努力や他機関との協力の理解 ・ 調査や他地域からの成魚の放流　・県との協力 ・ 九州大学との連携 (2) 原因や現状での対策，しろうお組合の人々の願いについて話し合う。 ○ しろうお組合の人々の伝統を守る願いへの共感と他機関との協力の理解 (3) 自分なりの解決策と現状を比べる。**感覚的ジレンマ** ○ 放流によって増やす，産卵場整備，取水制限などの原因を解消する解決策の推進 (4) 解決策について調べたことを話し合う。 ○ それぞれの対策について，推進するためには何らかの犠牲をともなうこととの葛藤　**価値的ジレンマ** (5) 他への影響を調べ，自分なりの判断をつくる。 ○ しろうお漁の今後についての自分なりの判断	※ しろうおの漁獲量減少の原因について，しろうお組合の方や九州大学松井助教授の資料をもとに調べさせる。 ※ 九州大学との連携や県との協力の様子，他地域からの成魚の放流といったしろうお組合の努力に気付かせる。 ※ 原因やこれまでの対策をふまえて，これからの対策について，自分なりの解決策にまとめさせる。 ※ 解決策をしろうお組合の方に提案し，他の立場での影響があることを示唆していただくようにする。	② ① ② ① ① ①
いかす	3．「室見川しろうおシンポジウム」を開く。 ○ 室見川のしろうおの減少問題を地域の人と話し合うことでの郷土の一員としての自覚と**意志決定** ○ 川の環境や水使用の面からの生活更新への意欲	※ 福岡市民の立場としての保護者やしろうお組合の方を招聘して，シンポジウムを開く。	3

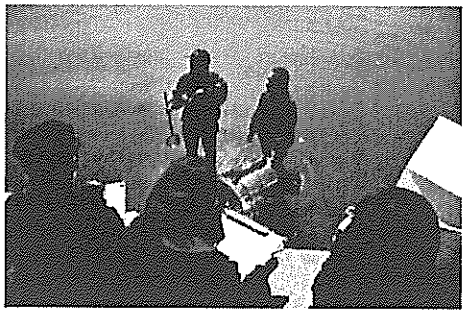
(5) 指導の実際

① 福岡の室見川が抱えるしろうお漁獲量減少の問題をつかむ段階 （1～5/15時間）

ここでのねらいは，室見川のしろうお漁が人々に親しまれ，自然環境を生かした伝統ある産業であることをとらえ，近年の漁獲量減少から名物衰退の不安を感じ取らせることである。

まず，室見川での体験を掘り起こし，しろうお料理で賑わう河畔の写真から，身近な室見川でのしろうおに関心をもたせた。子供たちは，「白い魚かな。」「食べてみたいな。」「家の人だったら食べたことがあるかな。」と言い出した。家の人に尋ねた子供たちは，全員が知っていることに驚き，しろうおは，福岡名物なのかと問いをもった。そこで，教室内にしろうおを持ち込んだ。子供たちは，楽しそうに水槽に近寄ったり，教室内に位置づけた道具やテレビ番組の VTR，しろうお料理のコーナーで調べたりして，「どうして福岡名物なのか」予想していった。子供たちは，「昔から行われているから。」（伝統）や「取り方に工夫があるから。」（漁法），「室見川しか取れないから。」（自然環境），「福岡の観光名物だから。」他地域）と調べる視点をつくっていった。

【写真①しろうおのおどり食い】



【写真②しろうお漁の見学】

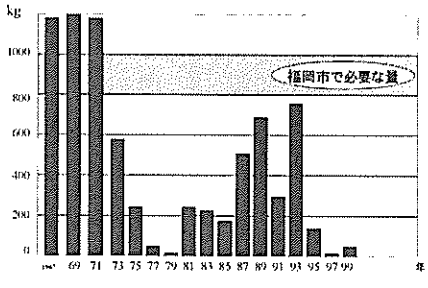
そこで，室見川しろうお組合の吉安さんや料理店などに見学に出かけた。（写真①）子供たちは，吉安さんから，やな漁の方法やしろうおの性質と室見川の水質，しろうお漁の歴史について調べ，室見川のしろうおが福岡名物となっているわけについて交流し，室見川の自然環境を生かし，食べに来る人を通した他地域とのつながりに気付いていった。（資料①福岡名物のわけ）その上で，資料②のしろうお漁獲量の減少のグラフを提示し思ったことを話し合わせた。

> しろうおは，福岡名物だなあと思いました。吉安さんに聞いてみると，なんと 300 年くらい前からあるそうです。昔は，多々良川などでもとれたそうですが，今では，水がきれいな室見川でしかとれないということでした。室見川は他の川と比べてよごれも少なく，海水と川の水がちょうどよいところだそうです。室見川だからとれるわけがわかりました。取り方も昔からのやな漁をしています。しろうおが上ってくるのをうまくつかまえられます。しろうお料理の店では東京や大阪のお客さんもいました。

【資料①しろうおを調べたＡ児】

考察①

子供たちは，資料③の波線部のように，福岡名物のしろうおが減ってきていることに危機感を感じ，身近な室見川自慢の産業が衰退してきていることに不安を感じている。このことは地域の課題への主体意識につながる。子供たちに室見川という身近な地域の産業の固有性に気付かせたことやしろうおに関しての食べる体験や道具や報道関係資料などの資料提示が有効であったと考えられる。



【資料②しろうお漁獲量減少】

② 漁獲量の減少や対策について調べ，自分なりの判断をつくる段階 （6～12/15時）

ここでのねらいは，漁獲量減少の原因や伝統を守る願いに共感し，自分なりの解決策をつくることを通して，それぞれの限界から感覚的ジレンマを感じ，伝統と市民生活，他地域との関係での価値的ジレンマを感じさせることである。

> たくさんとれたときの 10 分の 1 もとれていません。吉安さんたちはどうするのだろう。ぼくたちも食べられないし。せっかくの福岡名物の室見川のしろうお漁はなくなってしまうのだろうか。どうしたらいいのだろう。

【資料③漁獲量を調べたＡ児】

まず，子供たちは，漁獲量の減少について，九州大学農学部松井助教授の資料や話などで調べた。子供たちは，流量の減少と室見川からの生活用水，工業用水の取水との関係や産卵場としての環境の悪化をとらえていった。さらに，松井助教授や吉安さんに現在までの対策を聞き取りを通して調べることにした。(写真③)しろうお組合の方からは，毎年の成魚の放流で産卵する量を増やすようにしてきたことや川の清掃活動，松井助教授との調査，水産振興課の古栃さんからは，地図をもとに組合と国，県，市が協力した産卵場整備などをとらえてきた。そこで，「吉安さんたちはどうして，こんなにして守ろうとしているか。」と吉安さんたちの気持ちを考えさせた。A 児は資料④のように，代々受け継がれてきた伝統を守ることや楽しみにしている人々のためであることを再認識した。しかしそれでも，減り続ける漁獲量をどうしたらよいか解決策を考えることになった。原因や過去の対策から，「産卵場整備」「放流」「取水制限」と大きく三つに分かれて解決策を考えていった。室見川の川底の様子に疑問を感じていたA児は，産卵場整備について，1997年の2回目の整備工事について調べ，1984 年よりも漁獲量が減っているのに,工事の規模は縮小されていることに矛盾を感じだした。(資料⑤)放流のグループも放流数が増えていない現状，取水制限では，室見川水系からの取水が年々増えていることに気付いてきた。そこで，各グループの追究結果を交流する際に，それぞれの解決策の方向に合うゲストの方に来ていただくことになった。(資料⑥)

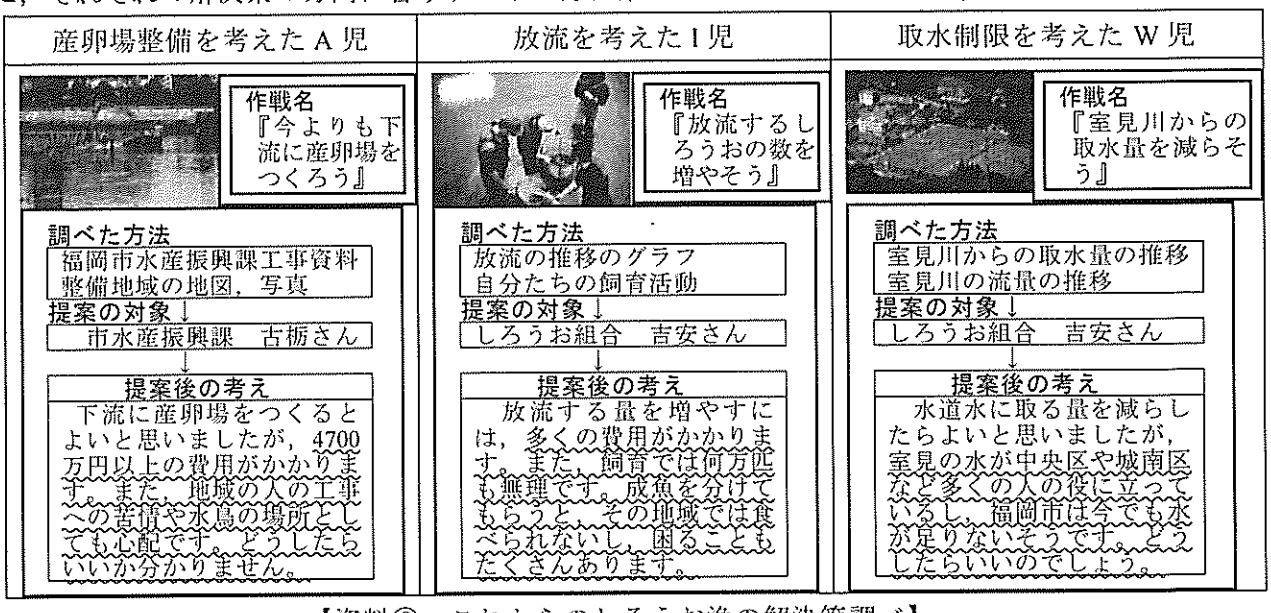
【写真③吉安さんへの聞き取り】

しろうお漁が続けられてきたのは，吉安さんたちの昔からのしろうお漁を守ろうという気持ちや観光客の人などしろうおを楽しみにしている人にこたえたいという気持ちだと思います。毎年，来年のために放流をしたり，川のゴミをとったり大変だったと思います。そして，九州大学の松井先生といっしょに何年もかけて研究したり，福岡市役所の人などと話し合ってしろうおを守るさんらん場所の工事もされました。みんなしろうお漁が続いてほしいのだと思います。

【資料④児の吉安さんの気持ち】

1984 年に行ったような産卵場整備をすると，今，どろがたくさんたまって，産卵しにくくなっていることを解決できるし，産卵する漁を増やせると思いました。でも，1997 年におこなわれた２回目の整備工事を見ると，広さなどでも，半分くらいの工事になっています。1984 年のころよりも漁獲量が減っているのに，どうして工事が小さくなったのかなと思います。工事の費用とか問題があるのかなと思います。

【資料⑤ A 児の感覚的ジレンマ】



【資料⑥　これからのしろうお漁の解決策調べ】

各グループでの追究結果や提案対象の方との交流をするなかで，産卵場整備，放流，取水制限それぞれに，しろうおのためには効果的でも，他の立場からは問題があることに気付いてきた。そこで，もう一度，吉安さんや松井先生，古栃さんから再追究を行い，最終的な判断を行った。(資料⑦)

考察②

資料⑤の下線部は，感覚的ジレンマ，資料⑥の波線部は，A 児，I 児，W 児が，自分なりの解決策を提案していく過程で，漁獲量をふやすことと他の人の立場でのジレンマ(価値的ジレンマ)を感じとっている姿である。これは，子供たちが調べてきた対策には，必ず，他の立場との対立が生まれる関係をもつものであったことや産卵場整備に関しては福岡市役所水産振興課の古栃さん，放流や取水制限に関してはしろうお組合の吉安さんという提案の相手を位置づけ，人々の悩みにも共感し，人々の価値的なジレンマからの強化を図ることができたためであると考える。また，K 児は，資料⑥の段階で，しろうお組合の人々の願いを中心にした考えであったが，資料⑥の下線部のように，最終的な判断では，水鳥や予算などの条件を考え，多面的に判断しようとしていることが分かる。これは，解決策の傾向ごとにグループ編成をした交流が有効であったと考える。そして，自分も他のグループも問題にぶつかり，多様な立場の存在を知り，それぞれの立場の大切さが感じられた上で，最終的な判断を迫られる場面設定をしたことが有効に働いたものと考える。

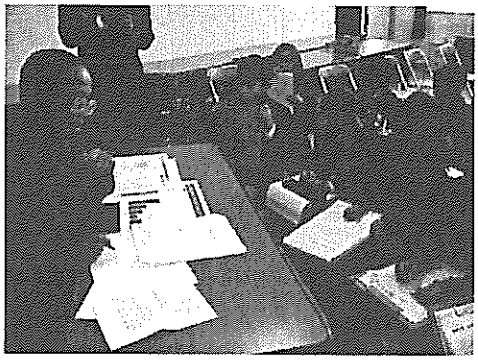
ぼくは，しろうお量の漁獲高を増やすために，さんらんする場所を新しくつくることを考えました。でも，たくさんのお金や水鳥が生活することを考えると，かんたんにそうはいかないと思いました。でも，しろうおには，300 年も前から続けてきた漁師さんたちのねがいがあります。日本全国から楽しみにしている人もいます。ぼくは，なんとか水を増やしたり，川底の小石があるかんきょうを守るには，自分たちの協力も必要だと思いました。室見川のごみ拾いでもいいし，室見川の水がへらないように，自分たちで水を大切にすることも考えられます。ぼくは，しろうお漁の伝とうを守りたいと思います。

【資料⑦　A 児の最終的な判断】

③　自分の判断を郷土にいかす段階（１３～１５/１５時）

ここでのねらいは，自分の判断を郷土に生きる人々と話し合うことで，郷土の一員としての自覚を深めることである。

子供たちは，学習の経緯を松井助教授や吉安さん，福岡市民に説明していた。福岡市民の方からは，福岡の自慢として守ってほしいという感想や吉安さんからの終わらせたくないという強い願いを聞き，「自分たちもこれから見守りたい。」「水の節約，ごみ拾いなど，自分ができることで，解決に協力したい。」と発言していた。



【写真④　シンポジウムの様子】

考察③

資料⑧下線部のように，松井先生や市民，吉安さんと話し合い，福岡名物室見川のしろうお漁の減少の問題を共有し，願いを考えさせることができた。また，ゴミ拾いなど自分にできそうなことで，地域に役立とうとする意欲が見受けられた。これは，身近な地域での問題を取り上げ，GT のしろうおに対する思いを感じ取らせたためであると考える。

しろうお漁は，とても珍しくて，楽しかったです。自分がおどり食いをしてみて，珍しいので，たくさんの人がやってくるんだと思いました。取り方も，しろうおの特徴に合わせて工夫されているし，24 時間天気の悪いときでも漁を休むこともできないと分かりました。

今しろうおがへってきて困っています。ぼくたちも解決の方法を考えたけれど，難しいことがたくさんありました。工事をすると，しろうおはいいけれど，ハゼやユリカモメには，害になるかもしれません。放流をすると，お金や持ってくる山口県の人たちにもめいわくです。取水量を減らすのも，福岡市の水の量や福岡市民の生活を考えるとむずかしいです。でも，あきらめたくはありません。松井先生や吉安さんたちも同じだと分かりました。ごみを拾うとか，水を大切にするという小さなことの積み重ねをしていこうと思います。しろうおは，室見川からもらった宝物です。

【資料⑧　学習を終えて A 児】

4．　全体考察

地域が抱える問題を教材化することで，感覚的から価値的へとジレンマを深め，現代社会の課題にふれながら多面的な考え方へと高めるとともに，地域の人物の生き方から郷土への誇りを感じさせることができた。しろうお漁が中学年社会科として，地域の固有性をよさとして感じることができる子供の生活空間のなかでの事象であったことが誇りや愛着の中にジレンマを感じさせることにつながったと考える。今後，同様な観点から事象選定と中学年年間計画の作成を進めたい。

社会を拓く課題づくりを重視した産業学習の展開

社会科部　猿　樂　隆　司

1．主題の意味

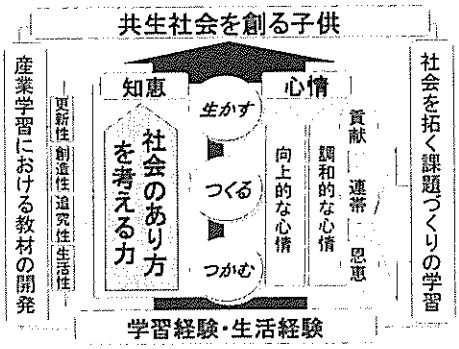
(1) 社会を拓く課題づくりを重視するとは

社会を拓くとは，我が国の食料生産や工業生産や運輸，通信などと国民生活の関連を対象とする産業学習において，産業が国民生活を支える重要な役割を果たしていることを実感をもってとらえ，産業が抱く問題の原因や解決の仕方を追究し，望ましい産業発展のあり方を多面的に考え，働きかけることである。社会を拓く課題づくりとは，子供が，産業における問題点が生活へ及ぼす影響をとらえたことをもとにして，望ましい産業のあり方を考える目的的な課題設定を行うことである。社会を拓く課題づくりを重視するとは，子供が産業の問題点に出会い，その原因や影響を調べ，自分の生活とのかかわりにおいて，何とかしなければと感じる状況から課題を把握することできるように，子供の求めを大切にした活動構成を図ることである。

(2) 社会を拓く課題づくりを重視した産業学習の展開とは

我が国の産業が抱く問題点と出会い，その原因や生活への影響を調べ，問題点の状況を実感するという過程を踏まえた追究課題を設定することを通して，子供が，我が国の望ましい産業発展のあり方を多面的に考え，その方途を社会に働きかけようとする主体的な活動を行うことである。

【主題の構想】



産業を取り巻く状況は，情報の多様化・国際化や情報網・交通網の発達に伴う運輸・貿易の迅速化・広域化など，日々変化している。また，貿易摩擦や環境問題も山積し，産業は諸外国との関係や環境への配慮を考えることなしには成立しない。そこで，これからの産業学習においては，外国とのかかわりを意識した経済問題や環境に配慮した産業構造の変化への対応などを重視した教材化や，産業が抱える問題点の解決を目指した追究課題の設定が大切となる。特に，追究課題の設定においては，産業の問題点が及ぼす生活への影響を調べる活動を位置づけ，問題点を解決せざるを得ないという切実感をもたせることで，課題をとらえさせる。このことで，従来，恣意的になりがちであった問題点の対応策を避けることができるだけでなく，これからの経済問題や産業構造の変化に対応する新たな内容（見方・考え方・感じ方・行い方）を創造することができると考える。

また，この課題設定により，知恵としての社会的な判断力が育つとともに，①自分の生活は産業の発展によって支えられていることへの実感（恩恵感），②産業に従事する人々と我が国の産業の問題点の解決に向けて協調する大切さへの実感（連帯感），③産業の発展に向け，国際協調の精神や環境への配慮を大切にしつつ，社会の役に立つ喜びへの実感（貢献感）などの調和的な心情や産業の発展を願う向上的な心情が育つのである。これらは，共生社会を創る子供が育つ上で大切な要素となる。

(3) 本研究で期待する子供の姿

学習過程での子供像を次のように考える。

① 産業を構成する人々の社会的営みを共感的にとらえるとともに，産業における問題点の解決を目指す人々の願いから追究課題をつかむことができる子供　（生活吟味）

② 社会的営みを行う人々と協力する大切さを感じながら，望ましい産業のあり方の考えを多面的につくることができる子供　（自己追究・内容創造）

③ 外国との調和や環境への配慮などを目指した産業の実現に向けた判断をもとに，自分も社会的行為を行ったり，自分の考えを生活に生かしたりして学習の喜びを味わう子供　（生活創造）

2．学習の具体的構想

(1) 社会を拓く課題づくりの条件

＜内容条件＞	＜方法条件＞
○　人物の営みへの恩恵が基盤としていること ○　問題点が及ぼす生活への影響を考え，生活への危機感をもつこと ○　産業の発展に寄与するために当事者と協力する連帯感を感じ取っていること	○　産業と生活とのかかわりを実感させた後に問題点に出会わせること ○　問題点が及ぼす生活への影響や原因を調べさせること ○　当事者による解決への求めや応答があること

(2) 産業学習における教材の条件

○　産業が空間的，精神的に身近であり，社会的な機能や働きを生み出す人々の願いや工夫や努力が共感的にとらえることができること　（生活吟味の面から）

○　産業上の問題点が内包され，解決に向けて外国との調和的な関係や環境への配慮が求められていること　（自己追究・内容創造の面から）

○　問題点に対する対応策を提言する場や当事者からの応答の場があること（生活更新の面から）

(3) 社会を拓く課題づくりを重視した活動構成の工夫

学習過程を「つかむ」「つくる」「生かす」の３段階で構成する。

「つかむ」段階とは，子供が産業の発展に努める人々の営みについて調べることで，産業がかかえる問題点に出会い，その影響を調べたり，人々の解決への求めを聞いたりして，追究課題をつかむことをねらう段階である。ここでは，課題づくりのために次の２つの活動の手続きを大切にする。

①　産業と自分の生活とのかかわりをとらえる観察・調査活動

②　産業の抱える問題点の原因やそれらが将来，生活に及ぼす影響をとらえる観察・調査活動

このことによって，産業における本質的な問題を自分の課題としてつかむことができると考える。

「つくる」段階とは，問題点の解決を経済性や国際性，環境保護などの視点から追究したり，他の地域の事例を調べたりして，問題の解決に向けた自分の考えをつくることをねらう段階である。

「生かす」段階とは，つくった考えをもとに，産業への働きかけを行ったり，産業に対するかかわり方を見直したりして，学習で得た考えを生活に生かすことをねらう段階である。

【基　本　的　な　指　導　の　仕　組　み】

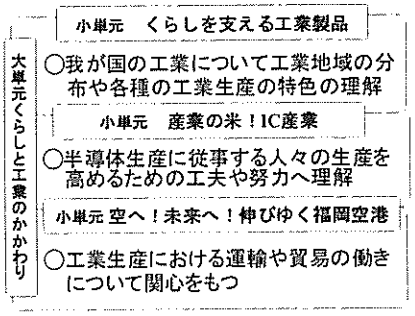
段階	つかむ段階 事実認識（恩恵感）	つくる段階 関係認識（連帯感）	生かす段階 価値判断（貢献感）
活動と内容	１．産業と自分の生活との関係について調べる。 (1) 産業の仕組みや働きについての個の問いを出し合い，観察・調査における視点について話し合う。 ○ 地域の産業への関心と追究意欲をもつこと (2) 産業の仕組みや働きを観察・調査する。 ○ 産業の仕組みや働きにおける問いの解決 (3) 産業と自分の生活のかかわりにおける追究結果を書きまとめ，発表する。 ○　産業と自分の生活におけるかかわりの把握とそれらを支える営みへの共感（恩恵感） (4) 産業のもつ問題点に出会い，問題が生活に及ぼす影響を調べ，追究課題について話し合う。 ○ 問題の及ぼす生活への影響をもとにした危機感感や使命感の感じ取り ○ 問題の対策を調べ，産業のあり方を考える追究課題の把握	２．産業を構成する人々や消費者の立場に立った課題解決をする。 (1) 問題の対策を調べる。 ○ 問題状況の把握と願いの連帯感の感受 (2) 望ましい対応策を出し合い，実効性の面から話し合う。 ○ 当事者や消費者からの付加・修正 (3) 望ましい対応策を焦点化する。 ○　他の事例による多面的な吟味	３．産業の発展を願う望ましい対応策について話し合う。 (1) 産業従事者を招き，望ましい対応策の具体的な内容を提言する。 ○　社会への貢献感の感受 (2) これからの自分が大切にしたい見方・考え方を出し合う。 ○ これからの社会生活で自分が大切にしたい見方・考え方・感じ方・行い方の自覚
手だて	※　個の問いの追究を保障する調査の位置づけ ※　観察・調査結果をもとに産業と生活とのかかわりを意識化する多様な表現活動の促し ※　産業と生活のかかわりを支える人々の願いを聞き取る活動の位置づけ ※　問題点のグラフ提示と影響の調査の促し	※　原因や対策の調査の促し ※　複数の対策を焦点化する観点（必要性・有効性・実効性）の提示 ※　シンポジウムの提案	※　当事者を招いた焦点化された対策の具体案の検討や提言と応答の場の設定 ※　かかわりを意識化する表現の促し

3．指導の実際と考察

(1) 小単元名　　第５学年　空へ！未来へ！伸びゆく福岡空港

(2) 本小単元の考え方

本小単元のねらいは，福岡空港の航空輸送における旅客や貨物を運ぶ機能を生活とのかかわりで調べたり，将来における空港の機能の限界という問題の原因や解決の糸口を調べたりする活動を通して，これからの航空輸送のあり方を多面的に考えたり，航空輸送と自分との生活の関係を見直したりできるようにすることである。



また，本小単元の位置づけを左の表のように考える。　　【本小単元の位置づけ】

次に，福岡空港における航空輸送を取り扱う価値としては，以下の点が挙げられる。

① 福岡空港は，九州・山口の拠点空港であり，旅客や貨物の輸送の面でかかわりが深く，国際線旅客・総合貨物ターミナルにおける貨物の蔵置，通関，搬出などの輸出入品の取り扱いの様子や税関での見学が可能で，その営みを共感的にとらえやすいこと　（生活吟味の面から）

② 離着陸回数が限界に近づいている状況から旅客や貨物などの航空需要にかかわる問題をとらえ高速脱出誘導路４本（長さ 300 メートル，幅 30 メートル）の建設や 2025 年開港を目指した新空港建設などの対応策を調べることが可能なこと　（自己追究・内容創造の面から）

③ 新空港建設は，地元経済界や行政が中心となって構成されている福岡空港将来構想検討委員会（通称 CONFA）が取り組んでおり，公聴制度を設けていること　（生活更新の面から）

さらに，本小単元における学習内容は次のとおりである。

○ ２１世紀における航空需要の超過の問題をとらえ，問題の解決の事業に携わる人々の取り組みを調べ，国際協調や環境保護の面から望ましい対応策を考えること　（知恵）

・ 航空輸送が伸びてきた背景には，貨物の受託，蔵置，税関への報告，積み上げ，搬出という仕組みや輸出入の蔵置場の整備・充実を図っていることに加え，交通網の整備に伴い，シリコンアイランドとよばれる九州の IC のアジア諸国への企業輸出が容易になったこと

・ 対策には，高速脱出路，大型貨物機の導入，滑走路の拡大，新北九州空港(2005 年開港)との併用などの現空港を生かす側面と新空港建設という現状の大幅な改革の側面があること

○ 福岡空港の貨物需要の超過という問題の解決に当事者意識をもって進んでかかわろうとする心情をもつこと　（向上的心情）

○ 諸外国との調和的な関係や環境への一層の配慮をもちながら，問題の解決にかかわろうとする心情をもつこと　（調和的心情）

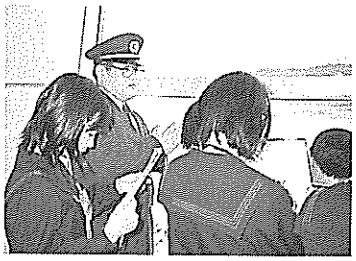
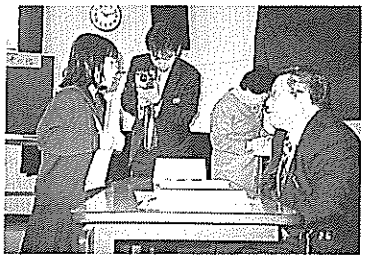
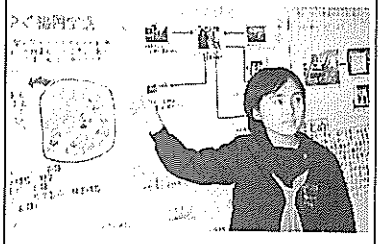
具体的には，つかむ段階において，IC などの工業製品や他の生活物資と航空輸送や貿易の関係を調べる活動を位置づけた後に，空港の輸送機能が限界にきている状況から生活に及ぼす影響を調べ，課題をつかむ活動を位置づける。つくる段階において，福岡空港における航空輸送のあり方を国際的な視点や環境にかかわる視点をもとに，消費者や当事者の立場で考える活動を位置づける。生かす段階では，これからの工業製品と航空輸送の関係を提言したり，見直したりする活動を位置づける。これらの課題づくりを重視した活動を位置づけることで，共生社会を創る子供が育つと考える。

(3) 目　標

① 福岡空港における需要超過の問題に対して，それらが生活に及ぼす影響を調べたり，運輸省や福岡県の対策を調べたりして，望ましい航空輸送のあり方を多面的に考えることができる。

② 福岡空港における航空輸送が他の産業や生活に果たす役割の理解をもとに，航空輸送の発展を願い，航空輸送と生活とのかかわりを見直そうとする態度を養う。

(4) 計　画　（１６時間）

段階	学　習　活　動　と　内　容	主　な　手　だ　て	配時
つかむ	1．福岡空港における航空輸送と自分との生活とのかかわりを調べ，追究課題について話し合う。 (1) 福岡空港の写真や利用体験の想起をもとに，航空輸送と自分の生活とのかかわりについて調べる。 ○　空港の利用目的，空港の役割についての把握 (2) 九州に占める福岡空港の貨物輸送量の割合や旅客や貨物輸送の伸びから，個の問いについて話し合う。 ○　空港の発着数やターミナルの仕組みへの着目 (3) 飛行機の離発着の様子や空港の施設及び「エアーカーゴターミナル」の様子を観察・調査する。 ○　空港の利用状況や輸出入品目の構成等や施設の把握 (4) 福岡空港における航空輸送が自分の生活や他の産業へ果たしている役割について話し合う。 ○　航空輸送により自分の生活や産業が潤っていること (5) 離発着数の限界を示すグラフの読みとりをもとに生活への影響を調べ，追究課題について話し合う。 ○　離発着数の限界が生活へ及ぼす影響の把握 追究課題 空港施設の限界に対して，どのような対策が必要かを調べ，これからの空港のあり方を考えよう。	 ※　輸入物資の提示やあらつ上空を飛ぶ飛行機の写真やＶＴＲの提示 ※　福岡空港の九州に占めるシェアを示すグラフや貨物量を示すグラフ提示 ※　空港ターミナルの川崎さんとの出会い ※　対応量限界のグラフの提示	7 ① ① ② ① ②
つくる	2．これからの航空輸送のあり方を調べ，話し合う。 (1) 需要超過の対策を考えたり、当局の対策を調査する。 ○　高速脱出誘導路や新空港の建設の対策があること (2) 需要超過に伴う２つの主な対策の是非を表現物に対応策Ⅰとして書き表す。 ○　現状の微調整か，新空港の需要緩和への効果の吟味 (3) 将来の需要超過に伴う問題を対応策Ⅰをもとに，新空港建設の対策の是非を問うシンポジウムⅠを行う。 ○　将来の需要超過に伴う施設の限界の影響に基づく新空港建設や現状のシステムの微調整という対策の立証 (4) 新空港実現に向けての具体案を調べ，対応策Ⅱとして表現物に書きまとめ，シンポジウムⅡを行う。 ○　新東京国際空港や関西国際空港の事例をもとにした望ましい空港建設の対策の吟味	※　対策について調査   ※　シンポジウムの場の構成	6 ② ① ① ②
生かす	3．これからの航空輸送のあり方やかかわり方をまとめる。 (1) 対応策Ⅲをもとに，シンポジウムⅢを行う。 ○　環境保護の面やアジアとの関係を基盤とした吟味 (2) 航空輸送と自分の生活の関係を振り返り，これからの将来にわたってのかかわり方を書き表す。	※　CONFA の新宮さんらの招聘 	3 ② ①

(5) 指導の実際

① つかむ段階（１～７時間）

この段階のねらいは福岡空港における航空輸送と自分との生活とのかかわりを調べ，航空機の離発着数が限界値に来ている事実からその影響を調べ，追究課題をつかむことである。

まず，ICが運ばれている空港の写真やＶＴＲを提示し，航空輸送とICの関係や航空輸送の役割について話し合わせた。子供は，輸送の役割として，遠くの目的地に速く，安全に，確実に，到着できることなどを挙げた。

次に，航空輸送に対して興味を抱き始めた子供に，過去10年間の旅客数や貿易額の伸びを示すグラフを提示した。子供は，「なぜ，貿易額が急に伸びたのか」という疑問を抱き（資料①），航空輸送の働きと輸出入の関係に関心をもちながら，飛行機の離発着の様子や空港の国内線や国際線の施設及び貨物ターミナルの様子を進んで観察・調査した。

ここでは，外国や他の地域から空輸される品物の種類や量，アジア向けの半導体チップの量や金額の多さをターミナルの榊さんや川崎さんからの説明して頂いたり，空港発展への願いを聞き取る場を設けた。O児は航空輸送が農業や工業そして，自分の生活を結びつける働きを共感的にとらえた（資料②）。そこで，航空輸送の発展を願っている子供に，飛行機の離発着数の限界を示すグラフを提示した（資料③）。子供は，平成11年に限界値の13万回を越えること，２分33秒に一機の離発着は新東京，関西両空港を凌ぐ短い時間であることに驚きを示し，「生活にどんな影響があるのか」という新たな問いをもった。ここで，追究の場を与え，離発着数の限界による生活への影響を調べ，考えさせた。

そして，「離発着数の限界に対して，どのような対策が必要かを調べ，これからの空港のあり方を考えよう。」を追究課題として設定した。

考察①

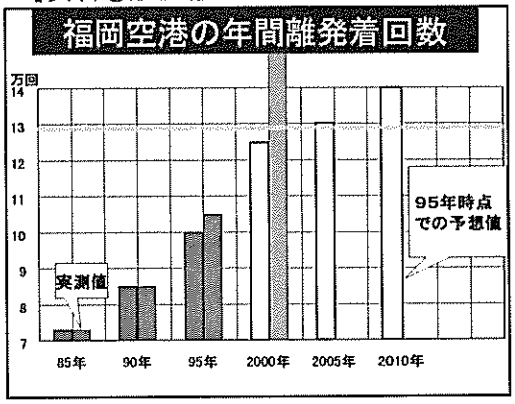
資料④から，O児が空港の離発着数の問題点に危機感を抱きくとともに，問題点を当事者と協力して解決したいとする連帯感が読みとれる。これは産業の発展に向けて進んでかかわろうとする向上的心情の芽生えと考える。O児のように，問題点を何とかして解決したいという思いを抱く姿が生まれたのは，大きく次の二点が挙げられる。一つは，資料①のように，個の問いを中心にして，航空輸送が生活に果たす役割や機能をとらえさせる観察・調査活動とを位置づけるとともに，榊さんや川崎さんに航空輸送と生活との結びつきを強めたいという願いを語っていただいたことである。このことで，資料②に見られるように，航空輸送の役割を恩恵をもって感じとり，空港の発展への願いを生み出すことができた。その二つは，航空輸送の限界値を示すグラフを提示して，その問題点が生活へ及ぼす影響を探り，話し合う活動を位置づけたことである。このことで「自分の生活にどんなことが起きるのか」という新たな問いが生まれ，自分たちの生活が将来困る状況にあることを実感をもってとらえ，空港建設のあり方について当事者と共に考えたいという意識を生むことができたと考える。

- ○ ICなどの物を運ぶ仕組み
- ○ 税関やターミナル施設の種類や働き
- ○ 貨物の量や種類や金額の内訳
- ○ 貿易が伸びてきている理由
- ○ 貿易額を伸ばした人々の努力
- ○ 飛行機や国内線や国際線の種類

【資料①　子供の問いの分類】

私は，IC と輸出入の関係について調べてみると，IC 以外に生活にかかわりの深い品物が飛行機で速く，確実に届くことがわかりました。福岡空港で私が見たものは，私が知らなかった空港の働きでした。私たちの生活の中にある新鮮な魚介類や野菜，IC などの工業製品がたくさんの人の働きによって速く，安全に，確実に届けられることも知りました。空港の機能は一日でもストップしてしまうと工業や農業に大きなえいきょうを与えてしまうこともしりました。空港という施設が２４時間休むことなく，働くことにより，私たちの生活が支えられているのだということがわかりました。みんなが快適に利用できるように施設にもいろいろな工夫がされ，たくさんの人が日本の各地と九州，世界の各地を行き来し，もっともっと福岡空港が九州の玄関として発展してほしいです。

【資料②航空輸送の恩恵を感じるO児】



【資料③離発着数の限界を示すグラフ】

福岡空港の限界を知ったとき、本当に驚きました。離発着数が増えると大変なことになるということがわかりました。まず、飛行機がこれ以上物を運べなくなると、価格が上がる恐れがあります。また、予定時刻に到着できないこともあります。今でも10分～20分の遅れが必ずあるそうです。また、予約も取りにくくなるそうです。こうして考えてみると、このままの空港のどこかを改めるかしていかなければなりません。対策をみんなで話し合い、ぜひ、福岡空港のこれからを考えていきたいです。

【資料④　O児の追究課題】

② つくる段階Ⅰ「生活への影響を調査し，対策について話し合うシンポジウムⅠ」(8～11時間)

この段階のねらいは，需要超過に伴う福岡空港の問題の対策を調査し，望ましい対応策を多面的に考えることができるようにすることである。

追究課題をつかんだO児は，当初，生活とのかかわりから航空・海上の併用を考えた（資料⑤）。その後，需要超過に伴う問題の対策を榊さんや川崎さんから聞き取ったり，資料で調べたりした。そして，望ましい対応策を話し合う中で，新空港の建設が有効であると判断した（資料⑥）。さらに，O児は，対応策を学級で話し合う場を求めた。そこで，シンポジウムⅠと題し，「新空港をつくる場合」，「現空港を生かす場合」に分かれ，福岡空港の将来像について話し合うことにした（資料⑦）。

これからの輸送の方法を次のように代えてはどうかと思う。それは，輸出入品を衣類や大型の機械類のように，長時間でも形が変わらない安い品物と，短時間で運ばないといけないICや魚介類など，小さくて高い物や腐りやすいものなどに分け，それぞれ船と飛行機で分ける。

これは，すぐに実行できるというよさと，輸送料が安くつくというよさがある。つまり，今まで以上に陸・海・空の協力を求めるのだ。

【資料⑤ O児の考え】

＜対策＞
◯海上による新空港の建設
◯現空港の機能を活かす。
・大型旅客機を導入する。
・貨物輸送機を増やす。
・高速脱出路を増やす。
・現在の一本の滑走路に加え新たな滑走路を建設する。
・新北九州空港との貨物の併用
・輸出入の仕方の船舶との併用
↓
※ 新空港をつくればよい
【有効性】
・流通物資の安定・供給
・外国とのつながりの強化

【資料⑥ O児の対応策Ⅰ】

C１：今の空港に滑走路を増やせばいいと思う。
C２：私の家は空港の近くにあるので、反対です。
O 児：新空港の建設がいいと思う。それは、滑走路が増え、今の問題を解決できるからです。
C４：空港を造るのには賛成ですが、建設するには莫大な費用や土地はどうすればいいのですか。
O 児：費用の面はまだよく調べてませんが、問題が解消できるから、いいと思います。また、海の上に造れば騒音は防げると思います。
C５：海の生物に影響はでませんか。
O 児：確かに言うとおりだと思います。でも、これからの生活のことを考えたとき、どんな方法があるかと考えた末の策なのです。
C６：騒音問題についてはどうですか。
O 児：A さんの近くの空港よりよくなると思います。

【資料⑦ 新空港建設をめぐるシンポジウムⅠ】

考察②

資料⑦より，O児が新空港の建設を対応策Ⅰとして掲げ，O児がその有効性をもとに，新空港の建設を進んで述べる姿が見とれる。これは，当事者の願いをもとに問題解決を図ろうとしている姿である。これは，つかむ段階での課題把握によって，子供の解決したいという願いが強まり，その求めに応じて，調査・表現，そして将来に向けた有効性を問うシンポジウムの場を位置づけたことが有効に働いている。しかし，ここでは対応策が環境面や費用の面で実現性に欠くことが他の子供から指摘されている。そこで，生活がどのように便利になるのか（有効性），実現するのか（実現性），という観点をもとに，追究するように再度活動を促した。

③ つくる段階Ⅱ「対策について焦点化するシンポジウムⅡ」(12～13時間)

シンポジウムⅠの後，O児らの求めにより，川崎さんやCONFAの招聘や関西国際空港など他の空港の事例の情報収集の場を位置づけた。O児は，進んで情報収集し，根拠を付加した対応策Ⅱを作成し（資料⑧），シンポジウムⅡに臨んだ（資料⑨）。

【有効性】
◯ 玄海東の海上24時間空港
◯ 3500m級の滑走路の増設
↓
◯ アジアの玄関としての外国との結びつきが強くなり、もっと旅行や輸出入がしやすくなる。
◯ 今の騒音問題も解決
◯ 労働人口も増える
【実現性】
◯ 交通網では、福岡都市高速に橋をつなぐ。
◯ 関西国際空港や中部国際空港でも実現している。

【資料⑧ O児の対応策Ⅱ】

C１：もし新福岡空港を造るとしたら、２４時間になるので、外国とのつながりがよくなる。
O 児：新空港を造ると広くなり、お客さんが利用しやすく、離発着が遅れるという心配はなくなる。
C２：漁獲量が減るという心配はあるので余計負担がかかるのではないか。
O 児：それは、確かにある。でも、今ある高速道路に橋をつなぐことで物や人の動きが可能になる。
C３：陸の上に造るより、海上は時間がかかるので、今ある空港をどうすればよいかということが先決でないか。
O 児：パンク寸前の空港をどう生かすのか、15年後のことを考えるとこの案がいいと思います。
新宮さん：どれも良い考えですね。是非、この問題を一緒に考えたい。そして、案を出してほしい。

【資料⑨ 対応策を焦点化するシンポジウムⅡ】

考察③

資料⑤⑥⑧を比べると，O児の対応策は，新空港建設案に基づき，有効性や実現性の面でより具体的になっていることが分かる。また，資料⑨のシンポジウムⅡでは，この対応策Ⅱを踏まえ，海上交通の面を中心に進んで意見を述べ，新空港建設に関する考えがより多面的になっていることが読みとれる。これは，O児の自己追究をもとにした，内容創造の姿である。この背景には，観点を与え，O児らの求めに応じ，関西国際空港や新東京国際空港などの事例調査や川崎さんや新宮さんらの聞き取りの場の設定，新宮さんらを交えたシンポジウムⅡを位置づけたことが有効に働いたと考えられる。

④　生かす段階（14～16時間）

この段階でのねらいは，付加・修正した対応策を専門家から価値づけて頂くことで，社会に貢献する喜びを味わうことである。

０児らの求めに応じ，付加・修正した対応策Ⅲをもとに，榊さんや川崎さんやCONFAの新宮さんらを交え，シンポジウムⅢを行い，対応策Ⅲについての評価をして頂く場を位置づけた。０児らは，現状の空港を生かす案と新福岡空港の具体案に分かれて提言した（資料⑩）。このとき，CONFAの広報誌に０児らの対応策が将来の検討事項に加わることを知って喜びを表現した。その後，航空輸送と自分の生活の関係を振り返り，これからのかかわり方を書き表すことを促した（資料⑪）。

＜場　所＞玄界灘東海域（新宮・津屋崎沖）の建設が妥当
＜働　き＞２４時間空港としての開港が望ましい。
＜大きさ＞３５００ｍ級の滑走路を２本つくる必要がある。
＜費　用＞約８０００億円の経費がかかる。
＜交通網＞※　ＪＲ、地下鉄、西鉄宮路岳線を利用、道路では、九州縦貫自動車道と福岡都市高速道の利用
＜環境面＞※　人工島の建設のように、汚濁防止マットを敷く
【有効性】
○　飛行機の騒音問題による時間の制限がなくなる。
※　国内線とアジアを中心とした国際線が結びつく。
※　２４時間空港によって外国の旅客や貨物が自由に行き来できる。
※　空港と博多港と高速道が結びつき、物流の働きが充実する。
【実現性】
※　費用の面は、中部国際空港建設のように官民一体方式

【資料⑩ 0児の新福岡空港構想（※印は新たに付加した項目）】

考察④

資料⑪の０児の対応策Ⅲには，シンポジウムⅡによって明らかになった環境保護への対策や費用の具体案が掲載されている。また，交通網の充実も盛り込まれている。さらに，資料⑫では，０児が空港問題に対して見出した対応策は，当初一面的であったものが次第に，新たな観点が加わるにつれ，多面的になっている姿や，様々な面で配慮が必要なことにとまどいを生じながらも，対応策を検討課題にして頂くことに喜んだり，将来にわたっての航空輸送へのかかわり方を考えたりする姿がある。このよ　うな子供の姿は，空港の将来構想を当事者とともに考え，評価していただく活動が有効に働いたと考える。

私は、この学習をして福岡空港がどんどん伸びていってほしいと思っていました。それは見学してみて空港がわたしたちの生活を支える大切な役割を果たしていることを知ったからです。でも、ちょっと気になっていることもありました。それは、あんなに飛行機が飛んできて大丈夫かということでした。実際、空港がパンク状態にあるということを知ったとき、本当にびっくりしました。最初は単純に新しい空港をつくればよいと考えればよいと思っていました。それは、空港のよさをもっと伸ばすことができると思ったからです。でも、実際に調べたり、みんなと話し合っていくうちに、建設にかかる莫大な費用の面、騒音や海水などの環境の面も真剣に考えないといけないことが分かりました。それは、お金を出す人や海で生活する人々や生き物にも影響がでるからです。こう考えると現在の空港をどう生かしていくのか、ということも考えながら空港の建設も考えないといけません。ただ、空港建設のよさを述べていたけど、建設予定のこれからの１５年間は、関西国際空港や外国で海上空港を建設したときにどのような解決をしてきたかをもっと参考にして、近くにできる新北九州空港との併用や高速脱出路を４本に増やすことで今のままでも利用しやすくなると思いました（中略）。いろいろ考えたけど、やっぱり空港の建設はやむを得ないことだと思います。わたしたちの空港計画を実際に話し合ってくれると聞いたときは、本当にうれしかったです。
将来的にやっぱり新しい空港が必要だと考えられるよう今からも、色々と考えていきたいです。

【　資料⑪　　空港とのかかわりを見直す0児　】

４．全体考察

成果として，福岡空港における航空輸送と自分との生活との関係を実感的にとらえる姿がみられた（考察①）。また，子供が福岡空港における航空輸送のよりよい発展を願いながら，将来構想を環境保護や貿易の面から考える姿が見られた（考察②③④）。こうした姿は，産業の発展を願う向上的心情や福岡空港における航空輸送とかかわりを深めていこうとする調和的な心情に支えられ，空港の需要超過に伴う問題において，そのあり方を多面的に考える力を知恵として発揮し，新たに内容を創り出している姿であり，まさに共生社会を創る子供の姿と言える。このような姿を生み出したのは，①福岡空港における航空輸送のあり方を教材化するにあたって，生活吟味，自己追究・内容創造・生活更新の面から行ったこと，②空港における航空輸送の意味や働きを探る問いをもたせ，事実をとらえさせた後に，本質的な課題に迫らせるといった課題把握の段階を重視したこと，③当事者の立場に立った問題解決の過程を設定したことが有効に働いたと考える。

今後は，さらに年間における産業学習の単元配列の考え方を検討していきたい。

数理活用力を豊かにする算数科学習

算数科部主題についての説明

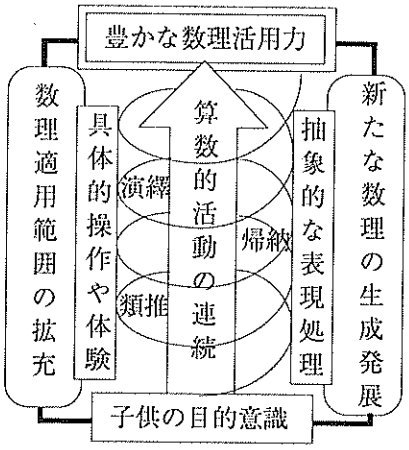
○　豊かな人間の育成のために算数科に求められること

算数科の学習において子供たちは身の回りのもの，ことにかかわりながら数量や図形を抽象したり，自分たちの内面に数理を構成したりしていく。そこでは身の回りのもの，ことの外的な側面にとらわれることなく，その本質や関係といったものに目を向け，客観的で一般性のある原理や原則を子供自身がうち立てることが大切になってくる。このことは既成の概念や先入観にとらわれず自分の目で物事の本質を見極めようとする主体性，自主性と深くかかわっている。

豊かな人間として大切なこれらの資質は，子供自身が身の回りのもの，ことから数理を創造し活用していく過程で育成されていく。そのためには与えられた数量や図形にいかに巧く操作を施すかといった形式的な側面を強調するのではなく，自分にとって必要な数量や図形を取り出して操作し自分なりの応えを得るといった合目的的な数理活用の経験を充実させていかなければならない。また，子供たちが主体的にかかわる目的は自分の生活や学習の中から子供自身が発見してくるものである。生活や学習上の問題と算数科学習の結びつきを強めることで主体性，自主性といった豊かな人間としての資質を高めていくことができる。

○　数理活用力を豊かにする算数科学習とは

数理活用力とは子供が身につけてきた数理をその子自身の手で身の回りのもの，ことの処理に用いることによって，新たな数理へと拡充したり生活への適用性を高めたりしていく知恵と心情である。ここでいう数理の活用には２つの方向がある。１つは既習の数理をもとにした新たな数理の創造であり，もう１つは日常の生活のなかにある身の回りの問題解決への数理の応用である。



この新たな数理の創造は既習の数理をより抽象化，一般化する働きであり，身の回りの問題解決への応用は既習の数理を具体化，特殊化する働きである。そのため数理活用力を豊かにする算数科学習ではこれら抽象化，一般化と具体化，特殊化の双方を柔軟に行き来しながら類推，帰納，演繹といった思考を十分に働かせるようにしなければならない。そこでは具体的な操作や体験と抽象的な表現処理を算数的活動によって往復的に連続させる必要がある。つまり

> 数理活用力を豊かにする算数科学習とは実験や実測など事象からの数量の取り出し，数量の大小や関係の表現，処理された結果の具体物を使った吟味などの算数的活動を繰り返していきながら新たな数理創造と生活の改善向上という２つの方向での処理の経験を豊かにすることである。

これらの経験を重ねることで数理や数学的考え方は子供にとって生きて働く知恵や心情となる。

○　数理活用力を豊かにする子供とは

数理活用力を豊かにする具体的な子供の姿については次の３点と考えている。

○　既習の数理を変形したり対象を変化させたりして，新たな問題解決の方法を生み出したり，生み出した方法をいつでもつかえる方法へ高める子供　（知恵）
○　自分の納得のいく解決に至るまで，働きかけを何度でも行い続ける子供　（向上的な心情）
○　もの，人，ことへのよりよいかかわり方を求めて数理を活用する子供　（調和的な心情）

自ら数理を生活に活用していく学習の展開

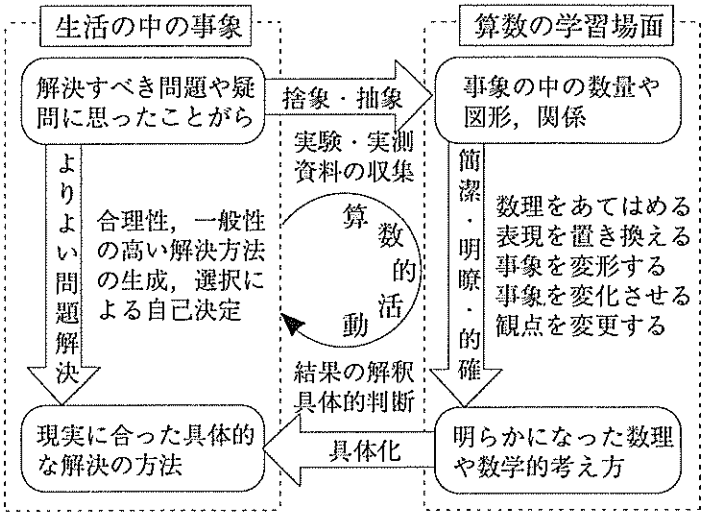
算数科部　　小　森　　晃

1．主題の意味

(1) 自ら数理を生活に活用するとは

子供たちは身の回りのもの，ことに対して自分なりのかかわりをもっている。その中で新たな目的を見いだすとかかわり方を修正したり改善したりしているが，これは生活をよりよいものに更新している姿である。自ら数理を生活に活用する算数科学習では，子供が身の回りのもの，こととのかかわりの中で新たな目的をつかむことから学習がはじまる。自分やまわりの人々が困るような切実感のある事態に出会い目的をもつ。その目的に照らして方法を選択する中で数量や図形を抽象してくる。数量化，絵図化しても解決に至らないとき，観点を変えたり表現を変えたり事象を変形・変化させたりして目的にあった処理を施していく。そうして得られた結果をもとにもう一度，事態の解決にあてはめていく。この過程で身につけた数理や数学的な考え方は子供たちの実生活における様々な事象との関連をもち，子供がよりよく生きるために生きて働くものとなる。

【数理を生活に活用していく学習の過程】



(2) 自ら数理を生活に活用する学習の展開とは

数理を生活に活用する算数科学習では，子供の生活のなかにある切実な問題を解決するといった目的が必要になる。子供の生活は家庭での日常生活，地域での社会生活，学校での集団生活など多様な側面をもっている。それらの中で子供は常にもっとよくしたいとかもっと便利であればいいのになどといった生活を改善し向上させようとする思いや願いをもっている。これら一人一人の思いや願いを実現することを目的にするとき，子供の活動は主体的で粘り強いものとなる。そこで自ら数理を生活に活用する算数科学習では，子供の生活のなかにある思いや願いを探り，それらを教材化していく。具体的には子供の生活を次の３点から見つめて，素材を選択して教材化をはかり単元に位置づける。

①　子供たちが日常的に改善しようと考えたり不便さを感じたりしていることがら	（日常性）
②　子供たちの具体的な行為として働きかけたり変化させることのできることがら	（具体性）
③　数量化して比較したり関係づけたりすることに実生活上の意味のあることがら	（数理性）

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　自分の生活の中にあることがらを数量化して，その中から問題を取り出したり解決への見通しを生み出したりする子供　（生活吟味）

○　これまでに身につけてきた数理をそのままあてはめたり，かたちを変えてあてはめたりしながら対象に働きかけて問題を解決し数理を生成・発展させる子供　（自己追究・内容創造）

○　数理を生活の中に活用することのよさを感じ取って，積極的に数理を生活の中に活用していこうとする子供　（生活創造）

２．学習の具体的構想

(1) 数量関係領域を中心にした単元を設定する。

算数科の学習では子供たちは身近な事象に潜む数，量，図形を対象にしてかかわりを深めていく。これら算数科でかかわる３つの対象はそれらを構成する要素や構成の原理といった内容的な側面とそれらの対象がどのような働きをもつかといった機能的な側面の２つの面からとらえることができる。

対象	内容や構成の原理（各領域を中心に）	活用できる機能（数量関係領域を中心に）
数	十進位取りの原理に基づいて構成され，それを利用した四則が定められている。	ものの大小，順序を表したり計算処理することができる。
量	比較性，連続性，等分可能性をもつものを測定の原理によって数値化する。	量はものの大小を視覚的に表したり置き換えたりすることができる。
図形	点，面，線などの要素の組み合わせや一定の位置関係によって構成されている。	図形は重なる，敷き詰められる，転がるなどがある。

生活に生かす基礎的・基本的な内容　　どのように生かすかといった手続き的内容

生活に活用するといった視点から算数科の教材を見てみるとこの機能的な側面が中心となっている。そこで生活に数理を生活に活用する算数科学習を実施する際には，これらの機能を取り扱う数量関係領域に記された教材を中心に単元を構成していく。

(2) 継続的な取り組みのできる単元のめあてにもとづいて単元の配列をする。

子供の生活の改善向上のためには継続的な取り組みが必要である。そこで同一のめあてに基づく単元を適当な期間をおいて配列する。このことで子供たちは生活の改善の方法を繰り返したり，工夫したりしていきながら，よりよい方向へ高まっていく自分や数理のよさを実感する。

○　単元配列の例

＜３年　時刻と時間＞	生活の中での実践的追究	＜３年　棒グラフ＞
自分の時間の使い方を見直して，工夫や改善する方法の見通しをもつ。	生活の中で実践し資料を集める。 ↑↓ 生活を向上させる上での工夫の継続	これまでの実践を振りかえり，自己評価しながら改善への意欲をもつ。

(3) 子供の生活から生まれた問題を解決する過程を重視する。

つ か む段階	子供の生活を数量化して問題点を取り出したり，その問題点の起こる原因はどのようにすれば明らかになるのかを話し合って単元のめあてをつかむ。
しらべる段階	追究主題に沿って数量化された自分たちの行為を観点を変えてみたり，表現方法を変えてみたりしながら，生活の様子を明らかにする。
まとめる段階	これまでに調べてきたことがらをもとに，さらに対象を広げて調べたり観点を変えて調べたりして生活をよりよくする方法を自己決定する。

(4) 数量の大小，構造の複雑さ，子供が接する機会の多少の３つの視点から対象を配列する。

子供がかかわる対象の配列は，数量の大小や構造の複雑さだけでなく子供が接する機会の多少，子供との心理的な隔たりの大小といった視点から見てより子供がかかわりやすいものから配列する。

(5) 数・量・図形を柔軟に行き来できるような教材，教具を工夫する。

数の大小は長さなどの量に置き換えることで視覚的にとらえやすくなる。また数量の関係も図的に表現することで整理しやすくなる。このような数量関係領域に多く含まれる手法を学習活動に積極的に取り入れることで，生活の中からとりだした数，量，図形の処理をしやすくする。

3．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第５学年　登校の仕方を見直そうⅠ…平均，Ⅱ…割合

(2) 本単元の考え方

本単元は【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】と【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】の２つによって構成している。まず【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】では，子供たちが月曜日から土曜日までの１週間のなかで登校するのにかかる時間の平均を調べて，時間に余裕をもって登校できるようにすることをねらいとしている。ここではいくつかの数量をならしていく平均の考え方や処理の仕方を自分の生活に役立つ知恵として身につけるために，一人一人の登校時間を教材化している。それによって自分自身の毎日の行動でありながらどれくらいかがはっきりしない登校時間をはっきりさせる目的のもとに平均の処理を行うことになり，一人一人が平均の数理の価値を感じるようにしている。さらに，この学習を通して，各曜日ごとの交通渋滞や天候の影響を受ける登校時の様子を考えて，始業時刻に遅れないように早めに行動しようといった生活を高めようとする向上的な心情を培うようにしている。また，求めた自分の登校時間の特徴や傾向をもとに登校時間調べの調査を継続的に行うようにする。【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】では継続してきた登校時間調べの資料を見直して，登下校に大きな影響を及ぼす要因として天気を取り上げていく。ここでは，身の回りにある降水確率など確定的な事象や不確定な事象の割合を表す百分率の意味や用いられ方をとらえたり，将来のことがらの予想を数量化できるよさを感じることをねらいとしている。百分率の意味や用いられ方を自分の生活に役立つ知恵として身につけていくために，天気予報の活用の仕方を教材化していく。その中で予報の的中率を調べたり降水確率の意味を調べたりする活動が生み出され，確定的な事象の割合や不確定な事象の割合を示す百分率のよさを感じるようにしている。さらに，この学習を通して天気予報の中にある情報を活用して雨天に備えるなどの生活の工夫をしていく向上的な心情を培うようにしている。

本単元の指導にあたっては，子供たちが日常的に改善しようと考えたり不便さを感じたりしている日常性のある事象，子供たちの具体的な行為として働きかけたり変化させたりすることのできる具体性のある事象，数量化して比較したり関係づけたりすることに生活上の意味のある数理性のある事象といった教材化の観点から「登校時間調べ」や「登校に関わる天気予報調べ」を教材として選定している。このことによって，子供一人一人が自分の生活上の改善しなければならない問題としての実感を持って問題解決に取り組むようになる。また，数理の機能的な側面を取り扱う「平均」と「割合」の２つの内容を中心にして単元を構成することで，数，量，図形に関する数理を総合的に生活に活用していくようにしている。平均で主に取り上げるのは加法と除法であり，ならす具体的な操作には帯図の長さの処理を用いる。割合では主に取り上げるのは除法であり，それをグラフ化する際には帯図の長さや扇形の角度による処理を行う。そのため教材，教具は数量の関係が視覚的にとらえやすく操作しやすいような長さや角度などに置き換えたものを活用する。これらの数理を組み合わせて，数量をならしたり同種の２量の関係を表したりといった既習の数理の機能に着目して生活に活用していくようにしている。また２つの内容を，それぞれ【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】～【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】として，同一のめあてのもとに２つの単元の間には子供たちが生活の中で登校時間を守ろうと取り組む期間をもうけている。同一のめあてのもとに適当な期間をあけて２つの単元を位置づけることによって，子供たちは登校時間を守って生活していこうといった生活改善の取り組みを継続的に行うことができる。また，その取り組みがどうであったかを日記のかたちで残すことによって後の単元まで意識を継続したり，子供たち一人一人の生活実態の資料となる。

(3) 目　標

【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】

① 月曜日から土曜日まで登校にかかる時間をならして１日あたりの登校時間を求めたり，曜日や天候の違いによる登校時間のズレを明らかにしたりする知恵を働かせることができる。

② 自分のライフサイクルに合わせた登校の仕方を工夫しようとする心情を高めることができる。

【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】

① 面積や時間，日数などを基準として雨天の百分率を求めたり，天気予報の的中率を求めたりしてそれらを目的に応じてグラフに表し登校の仕方をよりよくする知恵を働かせることができる。

② 天気予報の降水確率のよさを味わい予報を生活に活用する心情を高めることができる。

(4) 計　画（１２時間）

【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】（４時間）

段階	活　動　と　内　容	手　だ　て
つかむ／しらべる／まとめる	１．始業時刻に遅れた経験を想起し，自分の登校時間がどれくらいかかっているのか調べるめあてをつかむ。 ○ 登校時間を明らかにする単元のめあてをつかむこと ・自分の登校にはどれくらいの時間がかかっているのか。 ２．子供一人一人が調べてきたこれまでの登校時間の資料をもとに，毎日少しずつ異なっている登校時間をならして１日あたりの登校時間を調べる。 ○ 異なる数値をならして平均を求めること ３．自分たちの登校時間について月曜日～土曜日までの曜日ごとや雨天と晴天など天候の違いによる登校時間のズレを調べ，登校の仕方をまとめる。 ○ 曜日ごとや雨天，晴天など天候の観点で平均して登校の際気をつけることをまとめること	※ 学校の始業時刻に遅れたり，遅れそうになったりした経験を記録した資料を提示する。 ※ 家を出た時刻と学校に着いた時刻を記したタイムテーブル(帯図)を使って帯の長さをならして均一にさせる。 ※ 天候や曜日を記入した資料を提示して，一人一人の登校時間の資料と対応させる。

【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】（８時間）

段階	活　動　と　内　容	手　だ　て
つかむ／しらべる／まとめる	１．平均の学習で天気によって通学時間が大きく異なった経験を想起し，天気予報を活用するめあてをつかむ。 ○ 天気予報情報から自分たちなりの問題点を取り出すこと ・降水確率とは何か。・天気予報はどれくらい当たるのか。 ２．天気予報で示される情報から百分率の意味をとらえて降水確率に関する情報の活用の仕方を考える。 ○ 収集してきた資料から天気予報の的中率を調べること ○ 百分率で表現された降水確率の意味をとらえ，不確定な事象の起こりうる確からしさを表す割合を読み取ること ３．雨になるかどうか判断に迷う降水確率の雨天的中率を求めたりグラフ化したりして，自分が生活に生かす目安をつくる。 ○ 雨，曇りのち雨，曇り時々雨や降水確率50%，60%，70%など段階ごとの的中率についてグラフに表現していくこと	※ これまでに収集した通学時間と天気の資料から通学時間と天気の関係を調べさせる。 ※ １１月の的中率を帯図に表し１２月の日数から１２月に的中する日数を求めさせる。 ※ 生活に影響の出る降水確率や予報の的中率をグラフにして天気予報の活用の仕方をまとめさせる。

(5) 指導の実際

【登校の仕方を見直そうⅠ…平均】

① 登校時間をしらべていくめあてをつかむ段階（１／４時間）

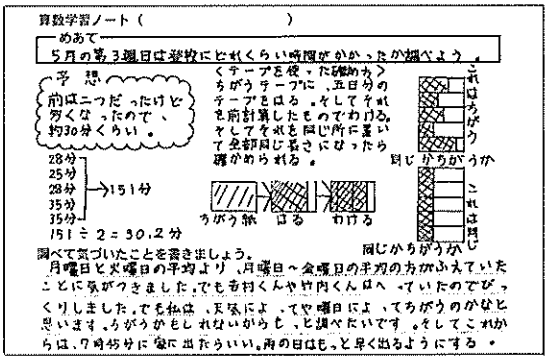
ここでは毎日の生活の中で学校に登校してくるのにどれくらい時間がかかっているかを調べていく単元のめあてをつくることをねらいとしている。そのために遅刻をしそうになって急いできている友達の写真（資料１）や出席簿から取り出した一人一人の遅刻をした記録を表にしたものを提示して，遅刻をした経験を想起させた。

考察①

この提示によって子供たちはこれまでに自分が遅刻をしたり遅刻しそうになったりした経験を想起し，自分たちが登校にどれくらい時間がかかっているのかを知らないことに気づいて単元のめあてをつかむことができた。このことから一人一人の生活実態を示す資料を提示したことは，登校時間を自分の問題としてとらえて調べていこうといった強い目的意識を一人一人にもたせる上で有効であったと考える。

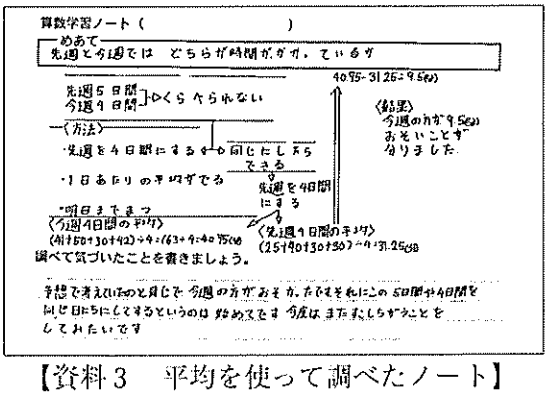
② 自分の登校時間をしらべる段階（２～３／４時間）

ここでは登校時間を調べるめあてのもとに収集してきたの登校時間の資料から，各々の数値をならして平均した登校時間をもとめることをねらいとしていた。そのために，２日分の資料から登校時間を求める活動から１週間分の登校時間調べへと範囲を広げていった。そこでは資料２のノートに見られるように，それぞれの日の登校時間を帯図にしたものを活用して登校時間の違いをならしていく考えをつくりだすことができた。



【資料２　時間をならす考えを書いたノート】

さらに第３時では各自の調べてきた資料の中で休日を除いた日数が４日だった週と５日だった週を取り上げて登校時間の比較をする場を設定した。子供たちは，この２つの週のそれぞれの日の登校時間を帯図にしたもので比較する中で，１日あたりの登校時間をならしてもとめていく考え方をつくりだしていった（資料３）。さらにこの考えをもとに計算による処理の仕方を交流する中で登校時間全体の和を各々の日数で割るといった計算の仕方へと高めることができた。



【資料３　平均を使って調べたノート】

考察②

子供たちが自分たちの登校時間について，それらをならして代表値を求めていく考えをつくり出すことができたのは，時間を視覚的に表す帯図を使って比較させたことが有効であったと考えている。また最初に２日分の資料から登校時間を求める活動を行った後に１週間分の資料から登校時間を求める活動へと次第に範囲を広げることによって，ならしていく考えを使いながら平均の処理へと高めていくことができていた。このことから子供がかかわる対象としての数量を小さいものから大きなものへ配列していったことが子供の平均の考え（数理）を自ら発展させる上で有効であったと考える。

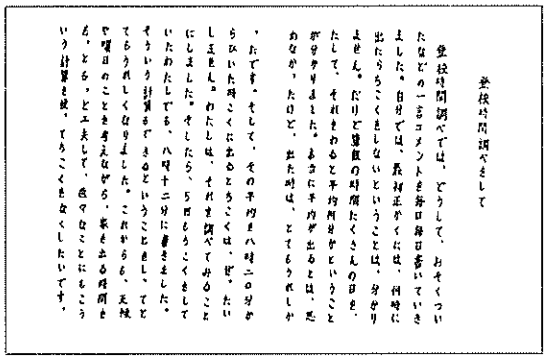
③　登校の仕方をまとめる段階（４／４時）

ここでは平均の求め方を活用して登校時間に影響があると思われる雨天，晴天や曜日の違いを調べて自分なりの登校の仕方の工夫をまとめることをねらいとしていた。そのために登校時間の資料と天候や曜日の資料を提示して対比させた。子供たちは自分たちの経験から「月曜日が遅くなるだろう」とか「雨天の日は遅くなるだろう」といった予想を立てて平均の求め方を活用しながら調べていった。

考察③

曜日ごとや天候による登校時間の違いを調べさせたことで，資料４の作文のように自分たちの生活の一部である登校についての考えをまとめることができた。

このことから一人一人の生活実態である登校時間を教材化して，算数的活動がしやすいように帯図を使って調べさせたことによって子供たちは平均の数理を生活実態を明らかにするために活用しながら，遅刻をしないようにしようといった生活を高めていく心情を培うことができたと考える。また，登校調べは継続していった。

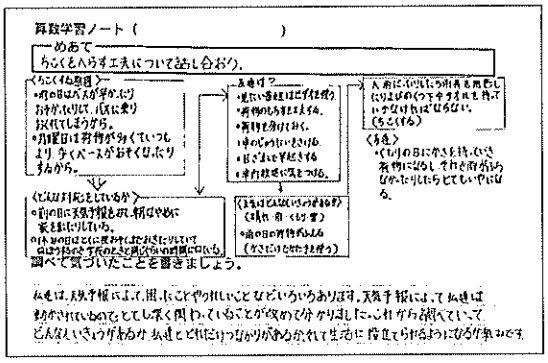

登校時間調べまして

【資料４　登校についての考えをまとめた作文】

【登校の仕方を見直そうⅡ…割合】

①　登校時間と天候を見直してめあてをつかむ段階（１～２／８時間）

ここではこれまで継続してきた登校調べの資料から，自分たちの天候に対する準備が十分でないことや天気予報を活用しきっていないことに気づかせることをねらいとしていた。そのためにこれまで継続してきた登校調べの資料から自分たちの工夫がどれくらい有効に働いているかを見直させた。子供たちは資料５のノートから分かるように曜日についての対応はできていても，天候に対する対応の不十分さや自分の生活と天候のかかわりの深さと天気予報の活用の大切さに気づいていった。


算数学習ノート（　　）

めあて

ちらくをへらす工夫について話し合おう。

【資料５　登校と天候の関係を書いたノート】

考察①

【登校の仕方を見直そうⅠ】の単元終了後も継続的に登校時間やその日の天候を調べて記録してきたために子供たちは自分の登校時間についての興味が持続していた。このことから２つの単元を同一のめあてで構成したことは，子供たちの生活向上への意識を持続させる上で有効であったと考える。

②　天気予報と実際の天候との関係をしらべる段階（３～６／８時間）

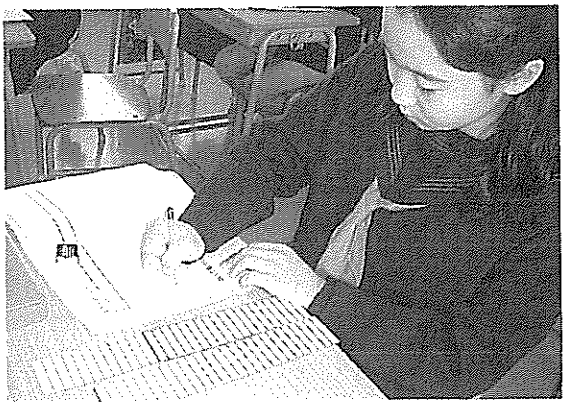
ここでは天気予報の的中率を調べてみたり，天気予報の情報の中にある降水確率の意味を調べたりして割合としての百分率の表し方や読みとり方をとらえるようにすることをねらいとしていた。そのために第３時では遅れたりしないように登校する工夫として，実際に毎日天気予報を見ながら登校してみてどれくらい天気予報が役に立つかを自分なりに検証してみるようにした。子供たちは資料６のような記録をつけながら天気予報が必ずしも当たらないこともあることに気づいていった。

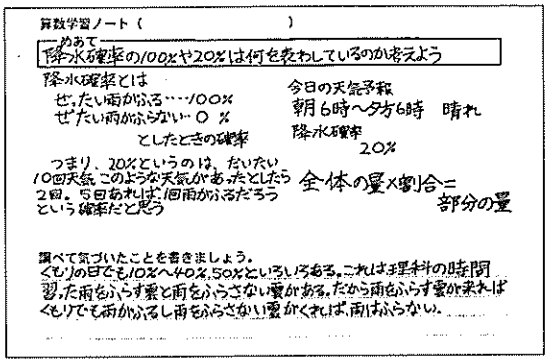
１１月の天気記録　◎平正丁　○正正正

1	月		11	木	晴れ ×	21	日	晴れ○
2	火		12	金	雨のち晴れ○	22	月	晴れ×
3	水		13	土	晴れ ○	23	火	雨のちくもり○
4	木	くもりの晴れ	14	日	晴れ○	24	水	晴れのちくもり×
5	金	晴れ ×	15	月	雨のちくもり×	25	木	くもり ○
6	土	晴れ ×	16	火	雨 ×	26	金	くもりの雨 ×
7	日	晴れ ○	17	水	くもりの雨 ×	27	土	晴れのち雨 ×
8	月	くもり ×	18	木	晴れのくもり○	28	日	くもりのち雨 ○
9	火	晴れ ×	19	金	晴れ ○	29	月	くもりのち晴れ○
10	水	晴れ ○	20	土	くもりの雨 ×	30	火	晴れ ×

【資料６　予報の当たりはずれを調べたノート】

第４～５時では確定した事象である１１月の天気予報当たりぐあいを調べていった。子供たちは２７日分の１１月の予報の記録を当たった日と当たらなかった日の２つに分けて帯図に示していった（資料７）。そして「12/27当たっている」とか「約0.44当たっている」といった割合の考えをつくり出した。さらにこの割合（12/27，0.44など）をもとにして不確定な事象である来月の１２月の天気予報の当たる日数を調べていった。ここでは全体量が３１日ある場合の日数を求めて帯図に表し，それを比較して計算の仕方を確かめていった。第６時では天気予報の的中率が低いのは雨，晴，曇といった大まかな絵記号だけを見ているからで降水確率を見るといいのではないかといった話し合いから降水確率について調べていった。ここでは福岡県の面積を１００とする割合，２４時間を１００とする割合，必ず雨がふる時を１００とする考えが出され交流する中で，資料９のノートのように降水確率の数学的な意味に気づくことができた。





【資料８　降水確率の意味を交流したノート】

考察②

子供たちは帯図を使いながら１１月の的中率を既習の小数や分数を用いて表したり，１２月の予報が当たる日数を予想することができた。このことから数量の関係を視覚的にとらえやすくする帯図を用いたり確定的な事象から不確定な事象へと調べる範囲を広げていったことが有効であったと考える。

③　**天気予報の活用の仕方をまとめる段階**(7~8/8時間)

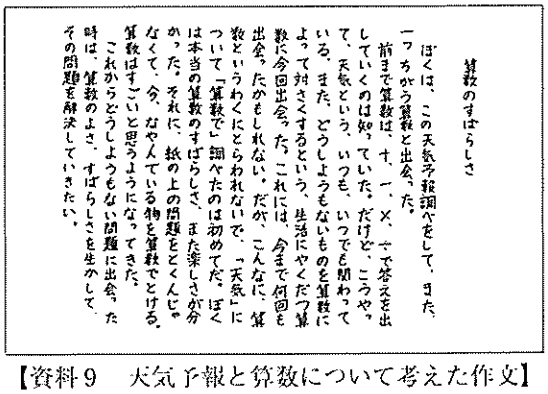
ここでは降水確率が４０%，５０%，６０%など雨天になるかどうか判断に迷う数値の時の実際に雨のふった割合を調べてグラフに表して比較し，自分なりの判断の基準をつくることをねらいとしていた。そのために帯グラフや円グラフ用紙から選択させて調べさせた。子供たちはそれぞれの降水確率ごとの雨のふった割合をグラフに表しながら，割合を比較して自分なりの基準をつくっていった。

考察③

子供たちは帯グラフと円グラフを比較することで，別々の割合を比較するためには帯グラフが，部分どうしの割合を比較するためには円グラフが見やすいことをまとめていった。また資料９の作文のように数理のよさを感じ取ることができていた。このことから子供たちの生活にかかわりの深い天気予報を教材化したことは数理を活用して生活をよりよくする工夫を行う上で有効であったと考える。

４．全体考察

平均と割合の２つの単元を期間をあけて同一のめあてのもとに構成して学習を進めてきた。そのために子供の生活に身近な登校時間や天気予報を教材化してきたが，その結果，子供たちは資料４や資料９の作文にあるように数理を知恵として活用して自分の登校時間という生活実態を明らかにしながら遅刻をしないようにしようといった向上的な心情を高めることができた。また数理を活用することのよさを感じ取っていくこともできた。



算数のすばらしさ

ぼくは、この天気予報調べをして、また一つ算数のすばらしさを知った。

前まで算数は、＋、－、×、÷で答えを出していくのは知っていた。だけど、こうやって天気という、いつも、いつでも関わっている、また、どうしようもないものを算数によって対さくするという、生活にやくだつ算数に今回出会った。これには、今まで何回も出会ったかもしれない。だが、こんなに、算数というわくにとらわれないで、「天気」について「算数で」調べたのは初めてだ。ぼくは本当の算数のすばらしさ、また楽しさが分かった。それに、紙の上の問題をとくんじゃなくて、今、なやんでいる物を算数でとける。算数はすごいと思うようになってきた。

これからどうしようもない問題に出会った時は、算数のよさ、すばらしさを生かして、その問題を解決していきたい。

【資料９　天気予報と算数について考えた作文】

日常的な見方や考え方が科学的に高まる理科学習

理科部主題についての説明

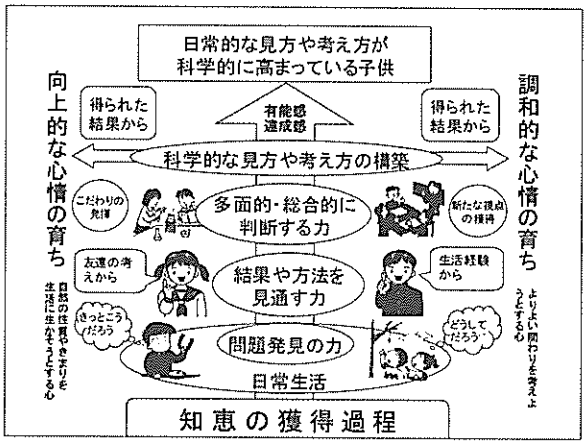
○　豊かな人間育成のために理科に求められていること

私たちは，これまで自分たちの生活をよりよくしていくために，自然事象を追究することで科学技術の振興に力を注いできた。その結果，高度の経済成長を遂げ，私たちの周りには生活を豊かにするものがあふれている。それに伴い知識偏重の傾向が見られるようになり，子供たちの知的水準も高くなってきている。しかし，現在の子供たちを見ていると，自然事象の持つ性質やきまりといった自然のもつ素晴らしさや偉大さは先人が見出している知識として捉え，単に暗記すべきものとして考えられているように感じる。故に，自分の手で自然に対する知識を創造していく喜びを味わうことや，知識の獲得過程で培われる知恵とも言える問題解決の能力と生活向上を目指す心や自然との共生を図る調和的な心といった心情面においては十分な高まりが見られなくなってきている。また，新指導要領にも，見通しをもった観察，実験，栽培，飼育の重視②自然事象にかかわることで見出した問題を解決していく能力の育成③日常生活との関連を図ることでより主体的な問題解決活動の展開といった３点があげられ，自然とのかかわりの中で自ら科学的な見方や考え方を構築していくことをより重視している。これらのことから，これからの理科学習では，子供たちが身近な自然事象に対して感じ，考え，実感しながら自然を愛する心情や問題解決の能力の育成を図ると共に，自らが自然に対する科学的な見方や考え方を構築していく過程を大切にしていく理科学習が望まれている。

○　日常的な見方や考え方が科学的に高まる理科学習とは

日常的な見方や考え方が科学的に高まるとは，子供たちが普段の生活経験から捉えている一面的な事象の性質やきまりを，多面的・総合的な視点で捉えられるようになることである。

子供たちは自然事象に対して主体的にかかわることで，問題を発見し，結果や方法を見通し，自然事象の性質やきまりを多面的・総合的に判断するといった問題解決の能力（知恵）を身につけていく。そして，その過程や結果から，自分は自然の恵みを受けながら自然と共に生活をしているという思い（調和的な心情）や，自分の生活をより豊かにしていきたいという願い（向上的な心情）をもつようになるのである。このような学びを振り返るとき，自然事象にかかわることで変容した自分の姿に気づき，自然とかかわることに価値を感じることができる子供の姿が見られると考える。これが，日常的な見方や考え方が科学的に高まっている子供の姿である。そのためには，自ら自然に対する見方や考え方を創造していく意識を培い，子供たちが行う主体的な問題解決活動の過程を重視していくことが大切であると考える。



【日常的な見方や考え方が科学的に高まる子供の姿】

○　日常的な見方や考え方が科学的に高まっている子供とは

自然とのかかわりの中で知恵を獲得しながら向上的・調和的な心情を培っている子供の姿である。

○　自然事象の中から見出した問題を様々な視点をもって追究し，得られた自然事象の性質やきまりを意味づけたり価値づけたりする子供（知恵）
○　自分で問題を解決したいと願い，得られた結果を生活に活用しようとする子供（向上的な心情）
○　自然や生命を大切にし，自然と自分とのかかわり方を考えようとする子供（調和的な心情）

科学性のある追究活動を重視した学習の展開

理科部　野口信介

1．主題の意味

(1) 科学性のある追究活動とは

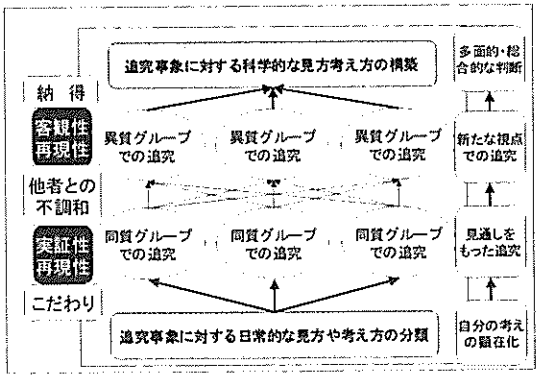
自分の考えを見通しをもって実証的に追究していく再現性のある活動や，他者の考えを受容し多様な視点で客観的に追究していく再現性のある活動を取り込んでいく追究活動のことである

子供たちは，日常の生活場面での知覚的・身体的経験，つまり生活経験から直接的に構築されてきた事象に対する一面的（主観的）な見方や考え方（日常知）をもっており，その日常知をもとに事象の解釈を試みようとする。そのような日常知に対して科学性を高めていくためには，子供たちの日常知が，①実証性②再現性③客観性という３つの条件を含む追究過程によって多くの人に承認される見方や考え方へ構築されていくことが必要である。そのためには，自分の日常知を他者との比較から自覚し，自分の立場を明確にするためのこだわりをもった追究の段階，事象の解釈の可能性（多面的・総合的に捉えるための視点）を探りながら客観的に追究していく段階を位置づけるとともに，主体的な追究活動を行いやすくするための小グループの編成が必要になってくるものと考える。

(2) 科学性のある追究活動を重視した学習の展開とは

日常知を根拠にした見通しのある追究（同質グループでの追究）と他者の考えを受容しながら行う追究（異質グループでの追究）の過程を重視し，子供たちが自ら自然事象に対して新たな視点で意味づけたり価値づけたりするようになる学習である。

このような学習を行うためには，子供たちがもつ日常知をもとに同質・異質グループを編成し，他者とかかわりながら行う追究活動が必要である。同質グループでの追究は，同じ考えの集団のために自信がない子供でも方法の見通しがもて，主体的で実証的な追究が可能になることである。しかし，実証的であるがゆえに自分の考えにこだわる傾向が見られ，他のグループとの不調和が生じてくる。そこで，他の考えを含んだ追究の必然性が生じてくる。異質グループでの追究は違う考えの集団のために様々な視点での追究になり，客観的な追究と解釈によって納得いく考えの構築が可能になる。そして，いずれも小集団で結果を吟味するために，再現性のある観察・実験の意識化が図れると考える。



【同質・異質グループによる追究活動】

また，科学的な概念の拡張を効果的に行うために追究事象の配列も大切である。まず，日常知に強く働きかけ概念的な葛藤を生み出しやすい事象と出会わせることで追究意欲を高め，新たな概念の枠組みを構築させていく。次に，学習前の日常知で違和感なく解釈できる事象について得られた概念を含んだ枠組みで再解釈させていき，状況の違いで枠組みを使い分けていく必要があることをつかませていく。さらに，ここまでに得られた概念を適応できる事象と出会わせ，構築した見方や考え方を強化していく。これらの追究事象に対して，同質グループや異質グループを効果的に編成しながら追究させていくのである。そして，子供たちがこだわりを発揮する姿や納得していく姿を目指すのである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

本研究で期待する子供の姿を学習過程にそって考えると，以下のような姿が考えられる。

日常的な見方や考え方を表出し，その解釈の違いを捉えている子供（生活吟味）
見通しにそった追究過程と結果を多視点で吟味し，新たな考えを構築している子供（自己追究・内容創造）
新たな考えを別の対象に適応すると共に，生活事象に対する考えを見直している子供（生活更新）

2．学習の具体的構想

(1) 科学性のある追究活動を行うための教材化の視点

日常生活で得られる見方や考え方を引き出しやすく，追究の方法が明確になるように生活場面で容易に見ることができる対象を選定し，教材化を図る。

① 日常的な見方や考え方の事前調査から概念形成に関わる阻害要因が割り出せ，そのことをもとに出会わせる自然事象に順序性（追究事象１→２→３）をもたせることができること。
追究事象１：子供の日常的な見方や考え方による解釈がいくつかに類型化できるもの
追究事象２：追究事象１の解釈に影響を与え，普段の生活で当たり前のように解釈できるもの
追究事象３：追究事象１と追究事象２で得られた見方や考え方を適応して解釈できるもの
② 日常的な見方や考え方を導入し解釈を図るときに葛藤が生じやすいこと。
③ 生活場面を想起することで観察・実験の方法が考えやすいこと。
④ 対象に対する概念を拡張することで，生活に対しての有用感が得られること。

(2) 科学性のある追究活動を重視した調べる段階・振り返る段階の活動構成について

自然事象に対して科学性のある追究を行うために，調べる段階で追究事象１・２に対して追究活動１・２を行い，振り返る段階では追究事象３に対して調べる段階で得られた考えの適応を図る。

	追究活動１（同質グループによる追究活動）	追究活動２（異質グループによる追究活動）
活動内容	事象に対する見方や考え方が同じ子供たちで小グループを構成し，自分たちの考えに確証するための観察・実験の方法を生活経験をもとに考え，実証的に追究していく活動	事象に対する見方や考え方が異なる子供たちで小グループを編成し，追究活動１の結果を様々視点で吟味し，焦点化された観察・実験で客観的な再追究を行う活動
活動の違い	○ 共通の考えのため，見出した問題に対し方法と結果の見通しをもつことができる。 ○ 事象に対する自分の考えにこだわりをもち，自分の立場を明確にできる。 ○ 結果の交流がまとまりやすい。	○ 違う考えのため，それぞれの考えのもつよさや不十分な点を交流できる。 ○ 互いの考えに確証・反証する追究のため観察・実験の方法が焦点化される。 ○ 得られた結果が多面的・総合的になる。

子供たちの既有の考え方を類型化し，同質グループ，異質グループの編成を行っていく。しかし，子供の考え方の傾向が同じ場合には，追究活動１による確証系の追究活動による結果の吟味を行う。

(3) 科学性のある追究活動を重視した学習過程と支援について

科学性のある追究活動を重視した学習を展開していくために３つの学習段階を設定する。

	見出す段階	調べる段階	振り返る段階
主な活動と内容	生活場面にある自然事象の現象面を取り出し，その解釈の比較を行う。 ○比較による問題の焦点化 ○事象に対する解釈の違いの把握	生活場面に内包されている自然の原理・法則について，既有の考えもとに追究し，結果について話し合う。 追究事象１ 追究活動１ 追究活動２ → 追究対象１の考えを支える対象の捉え直し → 追究事象２ 追究活動１ 追究活動２ ○自分の考えに確証する観察・実験（追究活動１） ○新たな視点で対象を捉える観察・実験(追究活動２) ○追究対象１・２に対する考えを高める追究活動	得られた考え他の場面に適応し，これまでの考えの構築を振り返る。 追究事象３ 追究活動１ ※適応場面としての追究 → 概念地図の見直し ○追究対象３に対する考えの適応と強化
支援	○生活事象から自然事象を取り出すための体験の場の設定。 ○追究の見通しがもてるように，考え方が同じ子供同士で構成したグループ編成を行う。	○観察・実験の方法が仮説検証になっているか，比較する対象の選別，仮説を裏付ける要因の抽出，比較する際の条件の統一の観点から助言を行う。 ○追究活動１で得られた結果を違う観点で考察できるように，違う考えによるグループの再編成を行う。 ○交流活動の際，方法・結果・考察を明示する表現物の作成と，具体物の活用を促す。 ○追究活動の過程を肯定的に評価していく	○得られた科学的な見方や考え方を適応していく生活場面を設定する。 ○生活に生かせることを実感する体験の場やものづくりの場を設定する。 ○日常知を支える生活経験を振り返る場面の設定。

3．指導の実際と考察

(1) 小単元名　　ものの温まり方の違いを探ろう

(2) 本小単元の考え方

本小単元は，金属，水及び空気などの温まり方の様子を調べ，固体，液体，気体の性質についての考えを持つようにすることをねらっている。具体的には，①金属や氷などの固体は熱せられた部分から熱だけが移動し，順に温まることを捉えること②水や空気などの液体や気体は熱せられた物質と熱が移動して全体が温まることを捉えること③ものの温まり方を調べる方法を，熱源の位置などの条件に着目して考えることができること④ものの温まり方の違いを，ものの状態と関係づけながら自分なりの考えとして持つことができること⑤ものの温まり方について，自分なりの見通しを持って進んで調べられることであると考える。そして，子供たちがもつものの温まり方に対する素朴な概念を集団に認められる科学的な概念へと構築していきながら，次のような知恵や心情を育てていく。

知恵	：ものの温まり方を自分たちの能力を発揮しながら解明していく力
向上的な心情	：自分の考えを他に認められる客観性のあるものへと高め，生活に生かしたいという思い
調和的な心情	：友達と協力して自然の原理や法則を解明していくことの素晴らしさや熱の有効な利用を行っていきたいという願い

また，ものの温まり方は大きく伝導と対流に分けられ，それはものの状態（気体・液体・固体）に依存している。このことは，ものの状態の違いによる物質の移動と熱の移動の違いなどを着目すべき要因として取り出し，熱源の位置を工夫しながら演繹的に追究することが可能になる。ゆえに，子供たち自身の追究によって概念形成が行いやすいという点においても価値があるといえる。

本小単元の指導にあたっては，追究事象を以下のように配列し，水の温まり方に対する子供たちの素朴な考え方の違いから追究問題を設定し，追究活動１・２・３を行いながら概念の構築を図る。

水・金属：見通しをもつために同質グループで行う追究活動1→客観的に判断するために異質グループで行う追究活動2　空気：新たな見方や考え方を強化するための追究活動3
追究事象１：追究事象を視覚的に捉えやすく，見方や考え方の違いから概念葛藤を生じやすい水
追究事象２：生活上の経験と結びつけやすい金属
追究事象３：物質の状態に留意することで，対流の考え方を適応できる空気

まず，見出す段階では，斜めにした試験管の中間部を火で温めるという事象提示を行い，水の温まり方に対する考えを類型化しすることで，追究の視点を設定していく。次に，調べる段階では，調べる見通しを持たせるために同じ考え方のグループを編成し，グループごとに決定した方法で追究活動１を行う。次に，新たな視点で事象を見ることができるようにするために，違う考えの子供同士でグループの再編成を行い，追究の視点と方法を明確にした上で追究活動２（再追究）を行う。そして，追究活動２で得られた結果をまとめていく中でパソコンを活用し，それぞれの考え方が対流の一部分を指していることに気づかせていくことで，日常的な見方が事象の一部分を強調して見ていることを捉えさせていきたい。その後，この対流の考え方で伝導の考え方を支えていた生活経験を振り返らせ，金属の温まり方に疑問を抱かせていく。そして，金属についても，追究活動１・２をおこない，さらに，氷を溶かす活動を行うことで伝導と対流の違いを物質の状態（固体・液体・気体）と関係付けていく。最後に，振り返る段階では，教室にストーブを置く場面を設定し，対流と伝導の考えを適応しながら空気の温まり方について追究していく。このことで，ものの温まり方に対する概念を確実なものにしたいと考える。このような学習を行うことは，普段何気なく見ている事象を改めて見直していくことにつながり，日常生活で生じた諸問題に対しても，これまでの自分の生活経験を根拠に解決していくことができるという実感を持たせることができるという点で価値あるものと考えている。

(3)目　　標

1．金属は熱せられた部分から順に熱が移動する事で温まり，水や空気は熱せられた物質と熱が移動して全体が温まることを，自分なりの見通しに沿った実験や交流を通して捉えることができる。

2．温める対象によって温まり方に違いがあることに気付くと共に，普段見ている生活場面の様々な事象に対して対流や伝導の考え方を適応することができる。

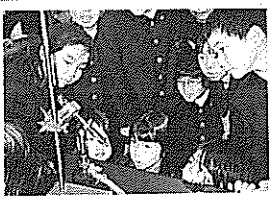
(4) 計　　画（１４時間）

段階	活　動　と　内　容	手だて	配時
見出す	1．生活場面での熱源の位置について話し合い，追求問題を設定する。 (1) 斜めにした試験管を温める事象を見て気がついたことを話し合う。 ○　水を温める際の熱の伝わり方の違いについて (2) 熱の伝わり方に対する考え方の違いについて話し合い，追究問題を設定する。 ○　水の温まり方に対する考え方の比較 ○　既有の考え方の相違点からの追求問題の設定 水の温まり方がどのようになっているのか，これまでの自分の考えと比較しながら調べよう。 (4) 同じ考え方でグループをつくり，今後の見通しについて話し合う。 ○　水の温まり方に対する考え方の整理	○　斜めにした試験管の中間部を温め，上部が沸騰しているのに下部は手で触れることができることに気づかせる。 ○　各自が考えた水の温まり方について生活経験をもとにしたイメージ図で表現させる。 ○　ＫＪ法を用い，考えを大まかに分類し，考え方の違いを明確にする。 ○　水の温まり方についての同じ考え方で，グループ編成を行い，これからの学習の見通しを持たせる。	2 ① ① 4
調べる	2．水の温まり方について観察・実験を行い調べる。 (1) 同じ考え方のグループで検証実験を行い，結果について話し合う。**（追究活動１）** ○　各グループの見通しに立った追究方法による観察・実験（確証） (2) 考え方の異なるグループで再実験を行い，結果について話し合う。**（追究活動２）** ○　追究の視点を絞った観察・実験（確証・反証） ○　水の対流についての理解（対流は熱の移動と物質の移動があること） 3．金属の温まり方について観察・実験を行い調べる。 (1) 同じ考え方のグループで検証実験を行い，結果について話し合う。**（追究活動１）** ○　各グループの見通しに立った追究方法による観察・実験（確証） (2) 考え方の異なるグループで再実験を行い，結果について話し合う。**（追究活動２）** ○　追究の視点を絞った観察・実験（確証・反証） ○　金属の伝導についての理解（伝導は，物質の移動がない場合の熱の伝わり方であること）	○　自分たちの考えに確証していくための実験方法を交流させる。 ○　考えた実験に対する助言や材料等の支援を行う。 ○　異質グループを編成し，考えの相違点を追究していくための方法に対して助言する。 ○　対流をパソコンでシュミレーションし，視覚的にまとめやすくする。 ○　生活に多く見られる伝導について，対流の見方で解釈ができるか考える場を設定する ○　対流と伝導の違いがどうして起きるのか，移動する物に着目した話し合いを行う。 ○　氷を溶かさせ，水（液体）と氷（固体）の熱の伝わり方を比較させていく	4 ② ② 4 ② ② 4
振り返る	4．これまでの考え方を生かしながら空気の温まり方について調べる。 (1) 同じ考え方のグループで検証実験を行い，結果について話し合う。**（追究活動１）** ○　対流と伝導の適応場面の把握 ○　熱の移動と物質の移動の２つの視点の把握 (3) 空気の対流を生かした熱気球づくりを行う。 ○　空気の対流に対する再認識 (4) 概念地図や確信度の遷移に対して自己評価する。 ○　ポートフォリオを活用した，ものの温まり方に対する概念形成の振り返り	○　教室にストーブを持ち込み教室のどこに置くとよいか考えさせる場を設定する。 ○　空気は熱の移動と物質の移動がどちらもあることをもとに熱の伝わり方を考えさせる ○　熱気球のＶＴＲを見せ，興味を持たせる。 ○　考え方の変容を学習プリントの確信度と概念地図の遷移から捉えさせていく。	4 ② ① ① 4

(5) 指導の実際

① 日常的な見方や考え方の違いから問題を見出す段階（１～２／２時間）

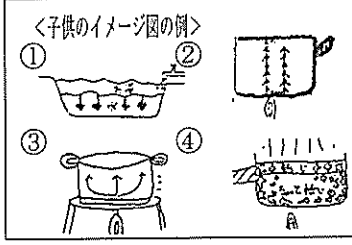
ここでのねらいは，水の温まり方に対する日常的な見方や考え方を表出し，その違いから水の温まり方に対して問題意識を持たせることである。そこで，まず，斜めにした試験管の中間部を火で温めるという事象提示を行った（写真①）。このことで，試験管の上部から水蒸気がでてきても下部は手で触れられることに疑問を感じ，「熱は下には行かないんだ。」というような自分なりの理由付けを行う声が聞かれ始めた（資料①）。その後，水の温まり方に対する考え方をイメージ図に表現し，類型化していった（資料②）。このことで，子供たちは自分の立場を明確にし，「実際の熱の伝わり方はどうなっているのだろう。」「自分の考え方は正しいのだろうか。」という問題意識をもつことができた。



【写真①事象提示の様子】

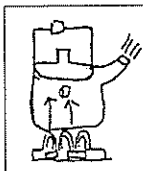
○ 熱は下から上に行くので，試験管の下は冷たいと思う。
○ 温める時間が短いから，下の方まで熱が広がっていないと思う。しばらくすると下も沸騰するよ。

【資料① 事象提示における子供の反応】



〈水の温まり方に対する子供の考え〉
① 水は上から下に温まっていく。(6名)
② 水は下から上へ温まっていく。(16名)
③ 水は熱源から四方八方に広がりながら温まる。(12名)
④ 水は，温まると上に行き，上の方の水は下にいくので，回りながら温まる。(6名)

【資料② 子供たちの水の温まり方に対する経験の例と考え方】



私は，水の温まり方は，下から上に広がっていくと思います。それは，やかんでお湯を沸かしたりしたときに，やかんの口から温かくなった水蒸気がどんどん上に出ていったから，熱は上の方に伝わっていくのではないかなと思ったからです。

【資料③ Y児の水の温まり方に対する解釈】

考察①

資料②のように水の温まり方に対して４つの考えを表現できた。このことは，事象提示が日常的な見方や考え方を引き出す上で有効であったことを表している。また，イメージ図を用いて表現し比較していったことは，Y児が熱は下から上に行くということを生活経験から表現しているように（資料③），自分の考え方や立場を明確にし，その違いから問題意識をもたせる上で有効であったと考える。

② 物の状態における温まり方の違いを調べる段階１＜水（液体）＞（３～４／１４時間）

ここでのねらいは，水の温まり方に対する自分の考えを確かめるために，見通しをもって観察・実験を行い自分の考え方を見直すことである。そのために，見出す段階の４つの考え方で同質のグループを編成し追究活動１を行っていった。ここでは，自分たちの考えを確証していくための実験方法を考え，それぞれのグループごとに実験結果から得られる結果に対しての交流を行っていったが，どのグループも温度計を用いた実験を行っているにも関わらず考えは変わらなかった。それは，それぞれが着目している部分が自分たちの考えにとって都合がよいところに偏っていたからであった。そこで，結果の相違の理由について考えると，「違う考えの人と同じ実験をして，そこで考えないとまた同じになる。」という発言が出され，異質グループを構成して再追究していくことになった。

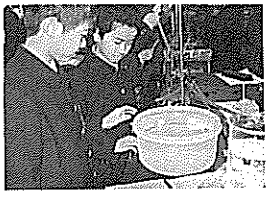
＜下から上に温まると考えるグループ＞
＜追究方法＞
① ビーカーを温めて，上部と下部の温度を調べる。
② 色の付いたお湯を水に入れて，お湯の広がり方を観察する。

【写真② 実験の様子】

＜実験結果の解釈＞
① どこから熱しても，下から上に温かくなっていたから熱は下から上に広がる。
② 色を付けたお湯は上にたまったから，熱は下から上に行く。

【資料④ 下から上に温まるY児のグループの実験】

＜上から下に温まると考えるグループ＞
＜追究方法＞
① お湯を入れた風船と水を入れた風船でどちらが上に行くか調べる。
② ビーカーを温めて，上部と下部の温度を調べる。

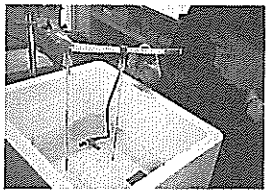


【写真③ 実験の様子】

＜実験結果の解釈＞
① お湯を入れた風船が上に上がり，しばらくすると下に下がっていったから，熱は上に瞬間的に上がり，じわじわと下を温めていく。
② 下より上の方が温まっている。

【資料⑤ 上から下に温まるグループの実験】

＜熱源から広がりながら温まると考えるグループ＞
＜追究方法＞
① 熱源の位置を変えながら，水の温度の変化を調べる。
② ビーカーを温めて，上部と中部と下部の温度の違いを調べる。


【写真④ 実験の様子】

＜実験結果の解釈＞
① 熱源の近くから，だんだんと温かくなっている。から，広がりながら温かくなっている。
② 中→下→上の順に温かくなっていたので，回っているのかもしれない。

【資料⑥ 広がりながら温まるグループの実験】

＜回りながら温まると考えるグループ＞
＜追究方法＞
① 試験管にサーモテープを貼り，熱源の位置を変えて温度変化を調べる。
② ビーカーにビーズを入れて，温度の変化とビーズの動き方を調べる。

【写真⑤ 実験の様子】

＜実験結果の解釈＞
① 下から温めると，下から上に温かくなり，上から温めると上から下に温かくなったから，回ってないかもしれない。
② ビーズが動いたから，回りながら温まる。

【資料⑦ 回りながら温まるグループの実験】

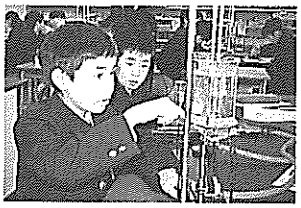
考察②

資料④，⑤，⑥，⑦にあげているように，子供たちはそれぞれの追究方法で自分の考えを確かめることができた。ここでは，同質グループで追究を行っていったために，自分たちの考えから実験（㉒,㉓,㉙,㉚）を計画するのが容易になり，見通しをもって実証的に行えたと考える。また，資料④，⑤，⑥，⑦にあるように，Y児や多くの子供たちの実験結果の解釈はもとの考えに準拠している。このことは，実験の結果を客観的に解釈していくことの難しさを示している。そして，それぞれの考えのこだわりを交流したことが波線部のように追究活動２を行う必然性へとつながっていったと考える。

③ 物の状態における温まり方の違いを調べる段階２＜水（液体）＞（５～６／１４時間）

ここでのねらいは，異質グループの中で自分たちの結果の妥当性や相手の結果の不十分さを検討させ，新たな視点をもって再追究（追究活動２）し，多面的・総合的に判断していくことである。Y児は初め自分の考えにこだわり，変えようとはしなかったが，対流の意識を持っている子供と話し合う中で「水は温めると熱の移動と水そのものの移動があるのではないか。」という可能性に気づき，水の移動を調べていくための方法として木くずを用いた方法，熱の移動を調べていくためにビーカーの４カ所の温度を測定する方法といった２つの観点から実験方法を考え（資料⑧），再追究（追究活動２）を行っていった（写真⑥）。そして，水の動きと熱の動きの結果を重ねていくと，どちらも同じ動きをしていることから対流の考え方を導き出していった（資料⑧）。その後，全体で話し合いを行っていく際に，パソコンを用いてシュミレーション的に整理していった（写真⑦）。この中で，Y児は，初めにもっていたそれぞれの考え方が，水の対流の一部分を説明していたことに気づき，水の場合の対流という熱の伝わり方の概念を熱の動きと物質の動きという２つの動きをもとに構築することができた（資料⑨）。

＜追究方法＞
① ビーカーに水と木くずを入れた物を温め，水の動きを調べる。
② ４カ所（熱源の上部２カ所，熱源から離れたところ２カ所）の温度を測り，熱の動きを調べる。


【写真⑥ 実験の様子】

＜実験結果の解釈＞
① 木くずは熱源の上で上昇し，一時して降りてくる。
② 温度は，熱源の上→横→下という順序で温まる。
③ ①と②を合わせると，熱の移動と水の移動が一致する。

【資料⑧ 追究活動２における実験と解釈】

【写真⑦ まとめの様子】

私は，初めの実験で火の上の部分に温度計を２本おいて調べると「下から上に熱が広がる」という結果がでて，自身が高まって「ほかの考えは絶対違う。」と思っていました。けれど，今度の実験で木くずが回っているのを見て，調べるところが他のグループの人と違っていたことに気がつきました。真ん中（火の上）だと「下から上」という結果がでるのに，端の方だと「上から下」という考え方もあてはまります。また，火の所では広がっているようです。だから「広がる」という考え方も間違ってはいません。まとめると，「くるくる回りながら温まる。」という考え方になります。そのことでみんなの考えが正しいんだと思いました。

【資料⑨ 追究活動２を終えてのY児の感想】

考察③

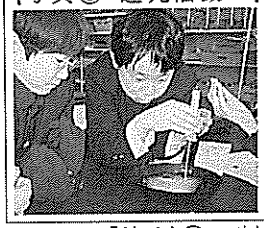
Y児は，追究活動２によって自分の考えを振り返り，多面的・総合的に再構築することができていった。（資料⑨）このことは，違う考え方の子供との交流によって，他の考え方の可能性に気づき，追究の視点と方法が明確になったことが要因であると考える。また，Y児は，資料⑨波線部のように

日常知が自然事象を一面的に捉えている見方や考え方であることに気づくことができた。これは，パソコンを用いた視覚的なまとめが有効であったものと考える。この活動を通して，子供たちは水の温まり方に対する日常的な見方や考え方を科学的に高めていくことができたと考えている。

④　物の状態における温まり方の違いを調べる段階＜金属（固体）＞（７～１０／１４時間）

ここでのねらいは，物質の状態の違いによる温まり方の違いを認識させることである。そこで，水の温まり方の考えの根拠とした生活場面を振り返らせていった。すると，金属の温まり方に対流の考え方が適応できるかが問題となった。そして，水と同様に追究活動１・２（写真⑧）を行い，金属の場合は物質の移動がないことを根拠に，伝導という熱の伝わり方を捉えていった。また，氷を溶かす実験では，「ほら，同じ水でも固体と液体では熱の伝わり方が違う。」という声が聞かれた(写真⑨)(資料⑩)。

【写真⑧　追究活動２】


【写真⑨　氷を溶かす実験】

今日行った実験で言えることは，金属は熱が広がるという考え方でした。それはフライパンは固体で自分で動けないので，水の場合の対流はあてはまらないということです。そのことを氷で試したら，金属と同じ広がり方をしていたので，そのこと（固体は動けないから広がる）は絶対にあてはまると思いました。

【資料⑩　追究活動２を終えてのＹ児の感想】

考察④

Ｙ児は，資料⑩のように動くものの違いを意識することで伝導という概念を構築していった。このことは，水から金属への追究事象の配列が有効であったと考える。また，氷を溶かす実験は，資料⑩の波線部にあるように物質の状態による温まり方の違いを明確にする上で有効であったと考える。

⑤　物の温まり方についての考え方を振り返る段階＜空気（気体）＞（１１～１４／１４時間）

ここでのねらいは，考えの適応による強化である。そこで，ストーブを置く場所がどこがいいか考える場面を設定した。Ｙ児は，空気が動くことを根拠に，「水と同じはずだ。」という見通しのもと追究していった。そして，綿毛をストーブに近づけたり教室の温度差を調べ，「やっぱり空気は動くから対流するんだ。」という考え方を強化していた。また，これまでの生活事象で気づかなかったことがわかり，おばあちゃんの知恵に対して「昔の人たちもこのことを知っていたんだ。」と驚きを表現していた。（資料⑪）

【写真⑩実験の様子】

空気の温まり方は，水と同じ対流でした。この実験を通して，自分で動ける物，つまり，熱とそのものが動いていると対流で，自分で動けずに熱だけ動いていると伝導だということがはっきりしました。　（中略）

また，おばあちゃんが部屋の高いところに洗濯物を干している理由がわかり，昔の人も，空気の温まり方を生活に生かしていたんだなと感じ，私も生活に活用したいと思いました。

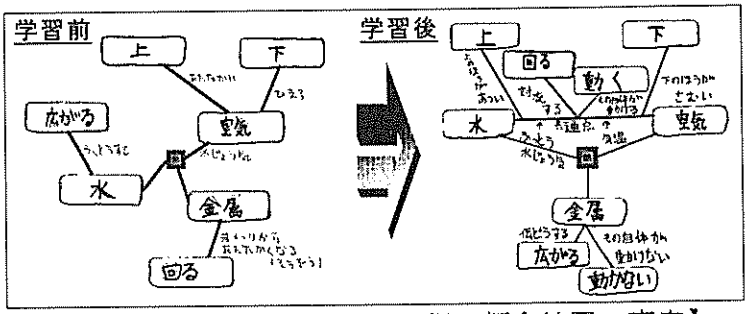
【資料⑪　追究活動後のＹ児のノート】

考察⑤

Ｙ児は，空気が移動することを根拠に見通しをもって追究し結果を導き出していった。このことは，適応場面を位置づけた追究対象の配列と，これまでの概念構築の過程が有効であったと考える。

４．全体考察

Ｙ児はものの温まり方を物質の状態と関係づけ，熱ともの自体の動きという観点で整理し，新たな概念を構築していった（水・空気・金属のつなぎ方の変化）（資料⑫）。これは，日常的な見方や考え方の相違点から追究内容を決定し，自分の考えに確証していく追究活動１と追究内容や追究方法を絞り込んだ追究活動２が有効であったからだと考える。また，追究対象の配列によって，温める対象の違いを明確にすることができ，科学性を高めるために有効であったと考えている。



【資料⑫　学習前後におけるＹ児の概念地図の変容】

心豊かな生活者が育つ生活科学習

生活科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために生活科に求められていること

現代社会においては，少子化や高齢化，地域社会の喪失などの状況が子供たちを取り巻いている。さらには，自然体験や勤労体験，人とふれ合う体験など様々な体験不足が指摘されている。子供たちの元来在るべき「生活」そのものが失われつつある今こそ，自分の生活を切り拓き，やる気をもってたくましく生きていく生活者としての子供の育成が求められていると言える。しかし，人間はひとりでは生きられるものではない。自然を含めたあらゆる他者と共に生きようとするよりよい感性が，その中核になければならない。ただがむしゃらに生活を切り拓いていくのではなく，身近な環境に心をくばりながら他者とのかかわりにおいて自分自身や自分の生活を見直していくようなやる気とやさしさを兼ね備えた生活者の育成が必要なのである。また，生活科は，３年生以降の総合的な学習の礎となる教科として，体験的な活動をより重視しながら問題解決的な学びの力を育んでいくとともに，環境，国際理解・協力，福祉といった現代社会の課題を視野に入れた活動内容を考慮していくことが，より一層重要になると考える。

○　心豊かな生活者が育つとは

心豊かなとは，やる気(向上的な心情)とやさしい感性(調和的な心情)に満ち溢れた心の状態である。

豊かな心	やる気	環境との出会いにおけるよさの感じ取りをもとにした内発性の発動
	やさしい感性	自然を含めた全ての他者へのやさしさや共に生きようとする心

生活者とは，思いの実現に向け，試行錯誤しながら課題解決していく力を備えた子供のことである。

ここでは，学校や地域の特色や子供の実態を十分に踏まえ，子供の生活現実における切実な課題を取り上げ，生活に始まり生活にかえるという子供たちにとって必然性があり意味のある学習が重要となる。そこで獲得される工夫や気付きが知恵として生活に生き，生活更新へと向かうのである。

心豊かな生活者が育つとは，子供たちが自分の生活において環境(身近な人々，社会及び自然)に適応するのではなく，自他の思いを尊重し合い，環境に心をくばりながら，自ら環境とのかかわり方を創造するという生活の主体者としての個を確立していくことである。つまり，具体的な活動や体験における気付きや行動の仕方を，生活の主体者として，自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりにおいて活用する能力(知恵)とともに，自分自身や自分の生活についての思いや願いを実現させようとする向上的な心情と身近な人々，社会及び自然に愛着をもち，あらゆる他者へのやさしさを発揮しながら活動しようとする調和的な心情を高めていくことである。

このような知恵と心情を育むことこそ，子供たちの生きる力を伸ばし，豊かな人間としての自立の基礎を培うことにつながるのである。また，このような資質や能力は，３年生以降の「あらつ学習」(総合的な学習の時間)における学びの素地となる。

○　心豊かな生活者としての子供とは

心豊かな生活者としての子供像を育みたい知恵と心情から次のように考える。

○　具体的な活動や体験における気付きや行動の仕方を，生活の主体者として自分と身近な人々社会及び自然とのかかわりにおいて活用することのできる子供(知恵)

○　諸感覚を通して対象に敏感に反応し，自分の感じ取りをもとに働きかけの意欲をもったり，自分の思いの実現に向け試行錯誤しながら追究したりしていく子供(向上的な心情)

○　身近な人々，社会及び自然に愛着をもち，あらゆる他者へのやさしさを発揮しながら活動しようとする子供(調和的な心情)

身近な地域との新たな絆を創り出す学習の展開

生活科部　　石　田　耕　一

1．主題の意味

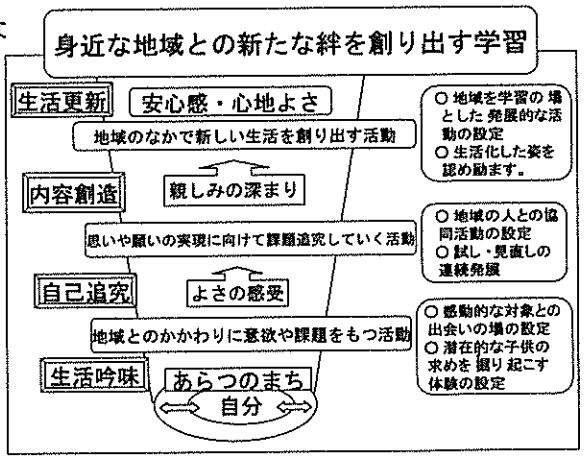
(1) 身近な地域との新たな絆を創り出すとは

今日，密集と混住，職住分離，生活の私事化など地域社会は変貌し，「元来そこに存在するもの」としての地域から「既にあるものとしてではなく，創り出すもの」としての地域に変化している。その一方では，このような地域社会のなかでたくましく生き抜いていく力が子供たちに求められている。

そこで，子供自らが主体的に地域に働きかけ，新たな絆を創り出していく地域とのかかわり方を大切にし，地域のなかで心豊かにたくましく生き抜く生活者としての力の素地を培いたいと考える。

本研究における身近な地域とは，子供の生活空間としての場や子供を取り巻く人間関係のことである。ここでは，子供たちがより一層多様な活動や体験ができるように，「あらつ」地域の特色を十分に生かし，あらつのもの・人・ことを一体的に取り扱っていく。新たな絆を創り出すとは，子供たちがかかわる対象を愛する心や態度，つまり愛着をもつことである。そして，地域への愛着を深めていく過程を「地域のよさを感じる」→「地域への親しみを深める」→「地域における安心感をもつ・心地よさを感じる」ととらえ，学習の展開に位置づけていく。そこで，身近な地域との新たな絆を創り出すとは，子供が身近な地域への積極的な働きかけとそのよさの感受という双方向性のある活動を展開していくなかで，地域生活のなかでの自分なりの応えを探し，対象への愛着を深めていく過程を踏まえながら地域生活における生き方を創り出すことである。

(2) 身近な地域との新たな絆を創り出す学習の展開とは



身近な地域との新たな絆を創り出す学習の展開とは，「①地域のもの・人・ことの感動的な出会いをもとに地域とのかかわりに意欲や課題をもつ活動(生活吟味)，②地域とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて課題追究していく活動(自己追究，内容創造)，③地域における学びを生活に生かしたり，地域のなかで新しい生活を創り出したりする活動(生活更新)」をそれぞれの単元に位置づけることにより，２年間を通じて，地域とのかかわりのなかで生きていく力を高めていくことである。

このことにより，子供たちは地域を思いやり精一杯のやさしさを発揮したり，能動性を大いに発揮して働きかけたりし，生活者としての知恵や「やる気」(向上的な心情)と「やさしい感性」(調和的な心情)を身に付けながら，心豊かな生活者として自立していくことができるのである。

また，このような学習は，①身近な地域とふれ合うという視点からの体験的活動の充実を図ることができる，②身近な地域との新たな絆を創り出していく過程において問題解決的な学びを豊かに経験することができる，③取り上げる地域のもの・人・ことの範囲の広がりにより，結果として環境や福祉，国際理解・協力といった現代社会の課題についてふれることができるという価値がある。

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　地域のよさを素直な心で受け止め，地域とのかかわりに意欲や課題をもつ子供(生活吟味)
○　地域とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて，課題追究していく子供(自己追究)
○　課題追究における気付きや行動の仕方を地域との新しいかかわり方に生かす子供(内容創造)
○　地域における学びを生活に生かしたり，新しい地域生活を創り出す子供(生活更新)

2．学習の具体的構想

(1) 教材化について

① 地域環境の価値吟味

「あらつ」地域やその周辺の地域の特色を踏まえ，子供たちがより一層多様な活動や体験ができるよう対象の設定を考慮する。そこで，具体的な場としては公園や公民館，図書館，福祉施設，博物館，幼稚園，インターナショナルスクールを，人としては障害のある人や高齢者，幼児，異文化の人，地域の伝統を守り続けたりボランティア活動をしたりしている方々を新たに取り上げ，次のような視点を考慮しながら一体的に取り扱っていく。

○ 日常生活における何らかのかかわりや対象に対する潜在的な求めがあること（生活性）
○ 活動における楽しさや素晴らしさなど，子供を揺さぶる内面的価値があること（感動性）
○ 子供と対象との継続的なかかわりや応答的なふれ合いが可能であること(継続性，応答性)

② 地域との新たな絆を広げ深めていく出会う対象の配列例

子供たちにとって精神的・物理的に身近な対象から始まり，しだいに対象の範囲を広げていけるようにする。但し，子供たちの興味・関心や生活における課題など子供たちの求めに応じて地域とのかかわりを広げていくことができるように単元の柔軟な組み替えや新単元の設置を行っていく。

学年	1年［学校やその周辺を中心としたあらつ地域］				2年［あらつ地域全体］	
場	学校・百道福祉プラザ	西公園	汀幼稚園	当仁公民館	唐人町商店街・総合図書館	インターナショナルスクール
人	学級や藤組の友達	友達	幼児	高齢者	地域の様々な人々	異文化の人

(2) 身近な地域との新たな絆を創り出す活動の視点

① 身近な地域との新たな絆を創り出す活動の内容

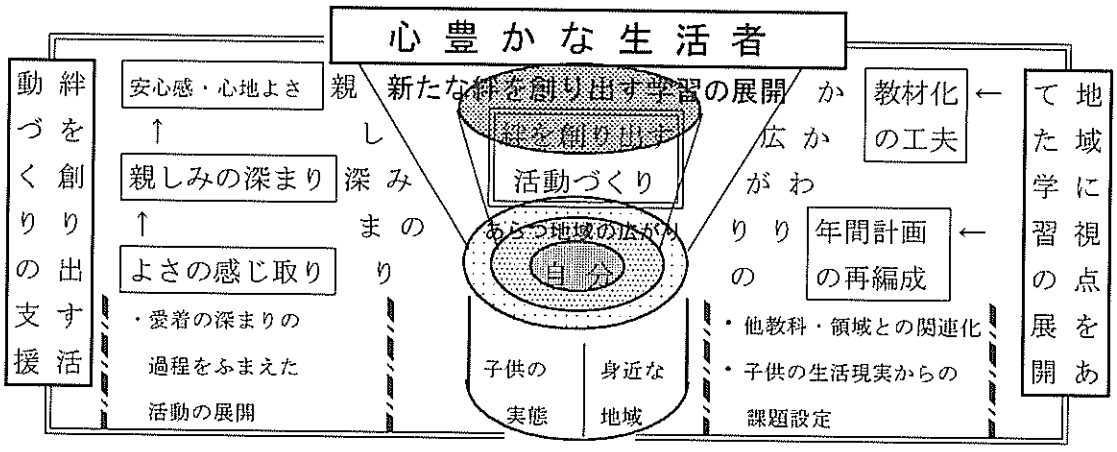
具体的な活動内容としては，年齢や性別，生活習慣，文化など様々な違いを越えて子供が地域におけるもの・人・ことと楽しくふれ合うことのできる遊びや探検，飼育・栽培，製作などである。

○ 諸感覚を通して地域のもの・人・ことと直接的に触れ合うことができる。
○ 地域の人と力を合わせることの楽しさや活動づくりの満足感を味わうことができる。
○ 繰り返し対象に働きかけることができ，地域への愛着を深めることができる。

② 身近な地域との新たな絆を創り出す活動づくりのための支援

「であう」段階（生活吟味）	「ひたる」段階(自己追究・内容創造)	「いかす」段階（生活更新）
○ 身近な地域との感動的な出会いの場や体験の設定 ○ 潜在的な子供の求めを掘り起こす体験の設定 ・ 地域の特色，子供の実態把握	○ 継続的に身近な地域とかかわることのできる場の設定 ・ 地域の人との協同活動の設定 ・ 「試し活動」⇔「見直し活動」の連続発展的な設定	○ 生活に結び付ける活動の促しや励まし ・ 地域を学習の場とした発表会など発展的な活動の設定 ・ 生活化した姿を認め励ます。

(3) 研究構想図



3．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第２学年　みんな大好き！福岡市総合図書館～手作り布絵本展示発表会を開こう～

(2) 本単元の考え方

【子供の実態，子供の求め】

○　西公園や唐人町商店街への愛着をもとに，あらつ地域へのかかわりに意欲をもっている。
○　39名中28名の子供たちが福岡市総合図書館の利用経験がある。
○　子供図書館に親しみをもっている。

【地域環境の価値吟味】（福岡市総合図書館）

○　手作り布絵本を取り上げることで，地域の図書館利用における知恵と心情をはぐくむ上から，価値ある活動を設定することができる。
○　積極的に利用できるようになってほしいという保護者の願いがある。

↓

【本単元のねらい】

○　福岡市総合図書館を利用する地域の人々への親しみを深めながら，地域の人々と共に総合図書館を利用する楽しさを味わうとともに(調和的な心情)，図書館の正しい利用の仕方や新しい活用の仕方を身に付けながら(知恵)，地域の公共施設の利用を通して自分自身のよりよい生活をつくり出していく(向上的な心情)ことができる。

子供たちの実態や育みたい知恵と心情の面から，子供たちにとって必然性があり意味のあるここでの学習内容は，①福岡市総合図書館の楽しさを感じ取り，福岡市総合図書館の利用を通して自分たちの生活を潤いのあるものにしていこうとする意欲をもつこと，②手作り布絵本の会の方々と一緒に，布絵本を作ったり展示発表会を開いたりすること，③手作り布絵本の会の方々の思いや製作における工夫について考え，使いやすく楽しい布絵本作りの工夫に気付くこと，④福岡市総合図書館はみんなのものであることが分かり，マナーを守って正しく利用することである。本単元で取り上げる「福岡市総合図書館手作り布絵本の会」は，江口清美さんが，指の力が弱くてページをめくることができなかったり，絵本をいためたりしてしまう子供との出会いをきっかけに始められたボランティアサークルである。そして，現在では「すべての子供たちに楽しい絵本を読んでもらいたい。」という願いのもと活動を行っている。布は暖かく指になじみ，子供たちが楽しく読んだり遊んだりすることができる。また，ボタン付けの技能があれば誰でも簡単に作ることができ，布にかくクレヨンや素材の工夫により低学年の児童の巧緻性や製作技能にも対応できる製作物である。

○　本単元における地域との新たな絆を創り出す活動の内容設定と活動構成

まず，活動の内容設定については，○福岡市総合図書館見学（探検・調査・実際の利用）や総合図書館における布絵本展示発表会の設定，○福岡市総合図書館手作り布絵本の会の方々との協同活動の積み上げを実感できる内容があり一緒に楽しくふれ合いながら活動することができる布絵本作りや布絵本展示発表会の設定を行う。次に，活動構成については，①手作り布絵本展示発表会を開こうという思いを膨らませる福岡市総合図書館見学・利用 → ②布絵本作りを通して継続的に総合図書館とかかわる活動（ア自分たちの布絵本の計画を立てる。→布絵本を作る。→図書館に展示し，問題点や工夫点について調べる。→布絵本を作り変える。）→ ③江口さんたちと一緒に力を合わせて行う「手作り布絵本展示発表会」のように行うものとする。

(3) 目　標

1．手作り布絵本の会の方々や友達と力を合わせて協同製作活動を繰り返しながら自分たちの手作り布絵本を作り上げ，「手作り布絵本展示発表会」を開くことができる。（向上的な心情）
2．布絵本を作ったり展示発表会を開いたりする活動を通して，福岡市総合図書館や手作り布絵本の会の方々への愛着を深めながら，継続的に総合図書館を利用することができる。（調和的な心情）
3．福岡市総合図書館はみんなの図書館であることが分かり，マナーを守って正しく利用することができる。（知恵）

(4) 計　画（約１４時間）

段階	活　動　と　内　容	支　　援	配時
で あ う	1，福岡市総合図書館を見学したり利用したりする。 (1) １学期の唐人町商店街探検や福岡市総合図書館利用の経験について話し合う。 ○ 荒津の町探検の楽しさ，荒津の町への気付き ○ 福岡市総合図書館利用の経験 (2) 福岡市総合図書館を見学し，手作り布絵本を読む。 ○ 福岡市総合図書館の楽しさ ○ 公共施設の正しい利用の仕方への気付き ○ 手作り布絵本の楽しさ，布絵本作りへの興味・関心 ○ 江口さんたち福岡市総合図書館手作り布絵本の会の方々の布絵本に対する思いの感受 ・とても楽しい手作り布絵本がたくさんあるよ。江口さんたちは思いを込めて布絵本を作っているんだ。ぼくたちも江口さんたちと一緒に布絵本を作って，展示発表会をしたいな。	◇ 福岡市総合図書館や布絵本作りへの関心・意欲を高める支援 ※　福岡市総合図書館利用の経験を想起させる。 ※　荒津の町の絵地図の提示 ※　福岡市総合図書館見学の設定（図書館の方々とのふれ合いの場の設定，利用体験） ※　手作り布絵本の会の江口さんとの出会いの場の設定 ・手作り布絵本への思いを江口さんから聞く。 ・手作り布絵本を読む。 ・展示発表会への促し。	3 ① ②

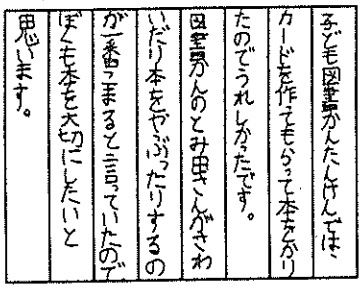
(5) 指導の実際

① 福岡市総合図書館の楽しさを感じ取り，継続的な利用への意欲をもつ段階（1～3/14時間）

この段階は，福岡市総合図書館を見学し，手作り布絵本の楽しさを肌で感じ取るなかで，総合図書館との継続的なかかわりへの意欲をもつことをねらいとしている。そのために，子供図書館探検や本の貸し出し体験などを通して，図書館のいろいろな楽しさを味わうことができるようにした。また，子供図書館探検においては，子供図書館の案楽さんや手作り布絵本の会の江口さんから手作り布絵本の意味や布絵本の会の方々のことについて話していただき，子供たちでも楽しく作ることができることや作った布絵本を子供図書館に展示することができることを紹介していただいた。

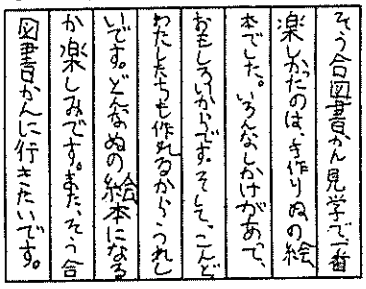
○ 第２，３時 福岡市総合図書館を探検し，手作り布絵本を読んで遊ぶ。 2,3/3時

［写真① 子供図書館で布絵本を楽しく読む子供たち］



子ども図書館かんたんけんでは、カードを作ってもらって本をかりたのでうれしかったです。図書館のとみ田さんがさわいだり本をやぶったりするのが一番こまると言っていたのでぼくも本を大切にしたいと思います。

［資料① 利用の仕方への気付き］



そう合図書かん見学で一番楽しかったのは、手作りぬの絵本でした。いろんなしかけがあって、おもしろいからです。そして、こんどわたしたちも作れるからうれしいです。どんなぬの絵本になるか楽しみです。また、そう合図書かんに行きたいです。

［資料② 手作り布絵本への思い］

考察①

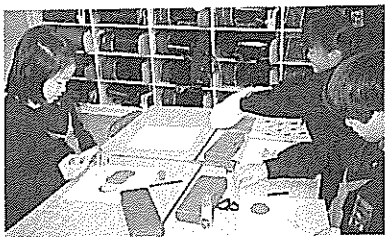
子供図書館を中心とした探検や本の貸し出し体験などを通して，福岡市総合図書館を利用する楽しさを味わったり，利用におけるきまりやマナーに気付いたりすることができた。（資料①）また，手作り布絵本との出会いにおいては，実際に布絵本を読んで遊ぶ活動（写真①）や子供図書館の案楽さんに布絵本を作って展示できることを話していただく場を設けたことにより，手作り布絵本の楽しさを実感し，自分たちの布絵本を作って子供図書館に展示したいという思いをもとに総合図書館とのかかわりへの意欲をもつ子供たちの姿（資料②）が見られた。

② 布絵本を作ったり作り変えたりしながら，図書館とのかかわりを深める段階（4～11/14時間）

この段階は，「自分たちの布絵本を作って総合図書館で展示発表会をしよう。」という思いをもって，自分たちの布絵本作りを繰り返していくなかで，総合図書館とのかかわりを深めていくことをねらいとしている。具体的には，手作り布絵本の会の方々と一緒に「自分たちの布絵本の計画を立てる」→「布絵本を作る」→「総合図書館に展示し，問題点やさらなる工夫について調べる」→「布絵本を作り変える」という一連の活動を踏まえることで，布絵本作りを通して，布絵本の会の方々や図書館の職員の方々，図書館を利用する地域の方々，図書館という場とのかかわりが一体的に深まるようにしていった。

○ 第１，２時 自分たちの作りたい布絵本の計画を立て，準備をする。 1,2/８時

ここでは，手作り布絵本の会の江口清美さんが製作した数々の布絵本を参考にしながら自分の作りたい布絵本を考えていった。布絵本のテーマの条件としては，布絵本を読むことで楽しく遊ぶことができるもの，小さな子供たちも楽しむことのできるものとした。そして，同じテーマの友達同士で製作グループを決定し，図柄の構成や材料の準備を進めていった。



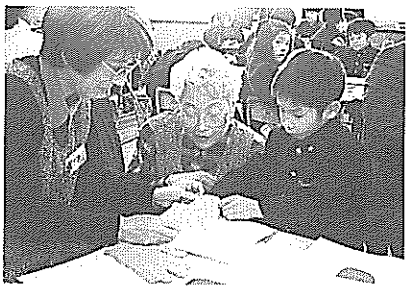
［写真② 下絵作りをするＹ児たち］

〈子供たちが考えた布絵本のテーマ〉

・絵合わせ布絵本　・文字当て布絵本　・福わらい布絵本　・まちがいさがし布絵本
・すごろく布絵本　・しりとり布絵本　・ジャンケン布絵本　・なぞなぞ布絵本

○　3，4時　江口さんら手作り布絵本の会の方々と一緒に布絵本を作る。　3,4/８時

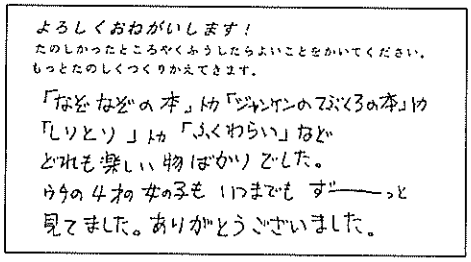
子供たちは，友達と協力したり，分からないところは布絵本の会の方々に進んで尋ねたりしながら，意欲的に製作活動を行っていった。

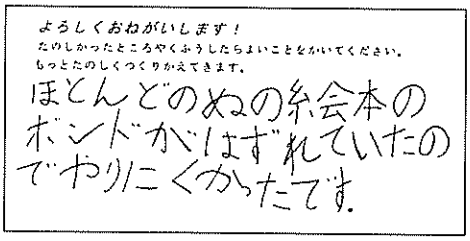


［写真③ 布絵本の会の方との協同製作の様子］［写真④ 分からないところを尋ねるＹ児］［写真⑤できたページを紹介する子供］

○　5，6時　自分たちの布絵本を総合図書館に展示して，問題点や工夫点を調べる。　5,6/８時

ここでは，でき上がった布絵本を一定期間展示させてもらい本当に自分たちの布絵本が楽しんでもらえているかどうかを調べていくことにした。具体的には，利用状況の調査や案楽さんら子供図書館の職員の方々への聞き取り調査，感想カードの設置などを行った。また，Ｙ児たちは，休みの日も総合図書館に足を運び，利用状況の調査や利用して下さっている地域の方々への説明や感想の聞き取りを積極的に行っていった。このような調査活動を通して，子供たちは，自分たちの布絵本がたくさんの小さな子供たちやお母さん方に楽しく読まれていることに喜びを感じるとともに，遊び方が分かりにくいところがあることや布が取れて傷ついているなどの問題点があることにも気付いていった。


よろしくおねがいします！
たのしかったところやくふうしたらよいことをかいてください。
もっとたのしくつくりかえてきます。
「なぞなぞの本」より「ジャンケンのでぶくろの本」や
「しりとり」より「ふくわらい」など
どれも楽しい物ばかりでした。
うちの4才の女の子もいつまでもずーーーっと
見てました。ありがとうございました。


よろしくおねがいします！
たのしかったところやくふうしたらよいことをかいてください。
もっとたのしくつくりかえてきます。
ほとんどのぬの絵本のボンドがはずれていたのでやりにくかったです。

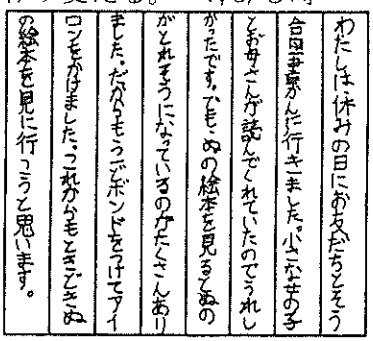
［資料③　感想カードの例］

○　7，8時　調査活動を通しての問題点や工夫点をもとに，布絵本を作り変える。　7,8/８時

子供たちは，調査活動における気付きをもとに，自分たちの布絵本を改良していった。例えば，資料③の感想カードにもあるように，たくさんの人に読んでもらうなかで部品がどんどん取れてしまうという共通した問題点がでてきた。Ｙ児はボンドで再度補強しアイロンをかけたり，ジャンケン布絵本グループの子供たちは保護者の方に縫い止めの仕方を教わったりして改良していった。

［写真⑥ アイロンをかけるＹ児］

［写真⑦ 縫い方を教わる子供］


わたしは休みの日にお友だちとそろって合同庁舎がんに行きました。小さな子どもがお母さんが読んでくれていたのでうれしかったです。でもこの絵本を見るとぬのがとれそうになっているのがたくさんありました。だからもうでボンドをつけてアイロンをかけました。これからもときどきぬの絵本を見に行こうと思います。

［資料④ 改良を終えたＹ児の感想］

考察②

「であう」段階において，福岡市総合図書館との継続的なかかわりへの意欲をもった子供たちは，積極的に布絵本作りに取り組むとともに(写真③，④)，江口さんたちや友達と力を合わせて布絵本を作り上げる喜びを表現する姿が多く見られた(写真⑤)。これは，○５枚の布絵本をグループの友達で協力・分担して作る，○最終ページは製作年月日や協同製作者を記入する，○各グループに布絵本の会の方１名入っていただくという支援が有効であったためと考える。

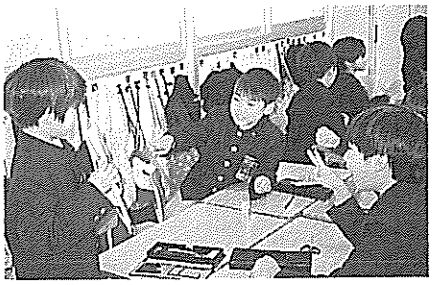
また，布絵本の工夫の高まりとともに，布絵本の会の方々や総合図書館の職員の方々，図書館を利用する地域の方々への親しみが深まっていく子供の姿を引き出すことができた。(資料④)。これは，「早くいろいろな人に読んでもらいたいな。でも本当に楽しんでもらえるかな。」という思いをもとに「布絵本を作る(写真③～⑤)」→「総合図書館に展示し，問題点や工夫点を調べる(資料③)」→「布絵本を作り変える(写真⑥，⑦)」という一連の活動構成が有効であったためと考える。

③「手作り布絵本展示発表会」を開き，図書館の利用に心地よさを感じる段階(12～14/14時間)

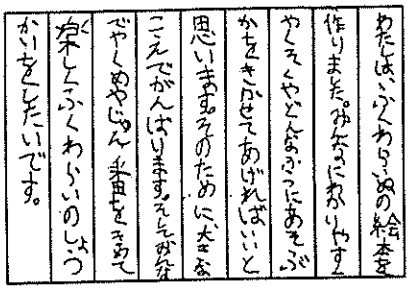
○　第１時　「手作り布絵本展示発表会」の準備をする。　1/3時

① はじめの言葉
② 布絵本の紹介
③ 布絵本を読んで遊ぼう
④ 布絵本贈呈式
⑤ みんなの感想
⑥ おわりの言葉

［資料⑤ 子供たちが考えたプログラム］



［写真⑧ 紹介の練習をする子供たち］



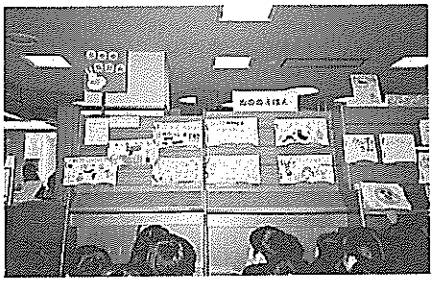
［資料⑥ 展示発表会への思い］

○　第２，３時　「手作り布絵本展示発表会」を開く。　2,3/3時

ここでは，江口さんら手作り布絵本の会の方々と力を合わせて布絵本を作り上げた喜びや，手作り布絵本を通して図書館の職員の方々や利用する地域の方々とふれ合う心地よさを味わい，福岡市総合図書館への愛着を深めることをねらいとしている。子供たちは，自分たちの考えたプログラムに沿って，布絵本の紹介や利用する方々との交流会，贈呈式など意欲的に展示発表会を行っていった。

［写真⑨ 布絵本を紹介する子供たち］

［写真⑩ 布絵本贈呈式］



［写真⑪ 展示された子供たちの布絵本］

わたしは，うれしかったことが二つあります。二日は，江口さんが，すばらしいせかいでたった一つの絵本がもらえるものをもってきてすごい，と言ってくれたことです。

二つ目は，ふくおかじょうの人たちが，わたしは冬休みに，その絵本を見てくれることです。かんに行きたいと思います。

［資料⑦ 展示会後のＹ児の感想］

この間は，子供図書館に布絵本を持ってきてくれてありがとう。８冊の布絵本は，毎日たくさんの子供たちが読んでいますよ。読んだ子供たちは，みなさんが作ったことを知って，すごいな，面白いなと言ってくれています。（中略）もうすぐ冬休みですが，子供図書館にもぜひ遊びに来て下さい。

［資料⑧ 楽楽さんからのお手紙］

〈２月の展示〉

こどもとしょかんの布の絵本コーナーで福岡教育大学附属福岡小学校の２年２組のみなさんがつくられた布の絵本をみることができます。

［資料⑨ 子供図書館ニュースより］

考察③

子供たちは，「自分たちの布絵本をたくさんの人に楽しんでもらおう。」という思いのもと，プログラム作りや布絵本の仕上げ，紹介発表練習など進んで展示発表会の準備を行い(写真⑧)，展示発表会への期待感を膨らませていった(資料⑥)。そして，展示発表会当日は，一生懸命に自分たちの布絵本の楽しさを紹介する姿(写真⑨)や職員の方々や利用する地域の方々と楽しくふれ合う姿が見られた。これは，○展示発表会における子供たちの主体的で自治的な活動を保障したこと，○布絵本の会の方々などこれまでふれ合ってきた方々に参加していただいたことが有効であったためと考える。

４．全体考察

この学習を終えた後も継続的に布絵本の点検を行いながら図書館を利用する子供たちの姿が見られ，福岡市総合図書館への愛着を深め，日常生活のなかで継続的にかかわっていこうとする心や態度を育むことができた(資料⑦)。そして，本研究を通して，①子供の実態に即した公共施設を取り上げるなかで，布絵本作りや展示発表会という地域の方々との協同活動を設定したことが有効であったこと，②「手作り布絵本展示発表会を開こう」という思いを膨らます→布絵本作りを繰り返し継続的に総合図書館とかかわる→手作り布絵本展示発表会を開くという地域の人とともに新しい絆を創り出す活動構成が有効であったことの２点が明らかになった。

音楽とのかかわりを深める音楽科学習

音楽科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために音楽科に求められていること

２１世紀を目の当たりにした近年，子供の心の荒廃が大きな社会問題として顕在化し，物質的な豊かさは必ずしも心の豊かさにつながるものではないことを改めて実感させられる。また，一見恵まれたように見える多様化・情報化された音楽的環境のなかにある子供たちであるが，残念ながら自分から進んで音楽活動に取り組み，音楽のよさを味わおうとする態度が不足していることが指摘されている。本来，音楽は私たちの生活と切っても切り離せない時間芸術であり，人格の形成上，非常に重要な働きをもつものである。特に心の教育の重要性が説かれている現代社会においては，とりわけ重視される教科として位置付けられるべきであると考える。したがって，これからの音楽科は，直接的に子供たちに音楽性を身につけさせることを目的とするのではなく，子供自ら主体的に音楽とかかわり，自分にとっての音楽の楽しみ方を創造していく基礎的な能力や態度を育て，豊かな情操を養っていくという視点に立つことが大切であると考え，本主題を設定した。

○　「音楽とのかかわりを深める」音楽科学習とは

「音楽とのかかわりを深める」とは，子供自ら主体的に音楽活動に取り組み，音楽のよさを追究・感得し，日常的・継続的に音楽を楽しもうとする資質や態度を自己形成していくことを意味する。

平成１１年５月告示の新小学校学習指導要領解説音楽編の音楽科改訂の趣旨には，「児童が楽しい音楽活動を通して，表現や鑑賞の能力を高めるとともに音楽活動の喜びを味わい，生涯にわたって音楽に親しむ態度や意欲を育成することを重視する」と述べられている。ここには，これからの音楽科の学習指導は，単に音楽的な諸能力を育成するという結果的な学力だけに目を向けるのでなく，生涯音楽を見据えた過程的な学力を一層大切にしていこうという方向性がうかがえる。このことからも，本研究で，①主体的な音楽活動，②音楽のよさの追究・感得，③日常的・継続的な音楽生活の自己形成という過程のあり方を究明していくことは，今後の音楽科学習指導の改善への道筋を明らかにしていくうえで価値があるものと考える。そして，子供が「音楽とのかかわりを深める」ことそのものが，自分が音楽を楽しむために必要な音楽に対する感性や音楽活動の基礎的な能力を獲得しながら，よりよい音楽活動を創り出していく力を「知恵」として主体的に身に付け，音楽に対する興味・関心や音楽活動に対する意欲といった「向上的な心情」や，仲間と音楽活動を楽しんだり，音楽を日常生活に生かして生活を潤いのあるものにしていこうとする態度といった「調和的な心情」を育むことにつながるものであると考える。

○　「音楽とのかかわりを深める」子供とは

本研究で目指す子供の姿は，子供が日常的・継続的な音楽活動のなかで，次のような「知恵」を身につけたり，心情を育んだりしながら，自分なりの音楽の楽しみ方を身につけていく子供である。

【本研究で目指す子供像】

○　様々な音楽活動を通して，音楽特有の芸術的特性としての音楽美（旋律美・音色美・和声美構成美など）や音楽活動そのものの楽しさや喜びを追究・感得していく資質・能力をもった子供　**（音楽科における知恵）**

○　音楽に対する興味・関心を高め，主体的に音楽活動に取り組む子供　**（向上的な心情）**

○　仲間と共同表現を楽しんだり，音楽を自分なりの方法で生活の中に取り入れ，生活をより潤いのある豊かなものにしていこうとする子供　**（調和的な心情）**

楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開

音楽科部　豊村雅義

１．主題の意味

(1) 楽曲に込められた心を追究するとは

音楽作品としての楽曲には，作曲者・作詞者の創作意図やそれを歌ったり演奏したりしている人々の思いや願いが込められている。だからこそ，楽曲を聴いたり演奏したりする場合には，その楽曲がもつ固有のイメージや雰囲気が感じられる。楽曲に込められた心とは，そのように楽曲に込められた作曲者の創作意図や演奏者の思いや願いである。この心は，楽曲の表情としての曲想に表れるとともに，共に演奏する人と感動の共有をもたらす。楽曲に込められた心を追究するとは，楽曲の鑑賞・表現を通じ，言葉の違いや時間をこえて，その楽曲の作曲者や演奏者の心にふれ合い，共感することができる音楽のよさを味わうことである。このことに関してマーセルは，音楽の教育的価値として，「音楽は国際語である。」「音楽は先人の心にふれあう媒介物である。」と述べている。これは，共に演奏することで感動が共有され，音楽が言葉の違いをこえて通じ合うよさがあることや，音楽が文化遺産として継承され，時間を超えて昔の人の心を伝えていくことができるよさがあることを示している。この音楽の価値をより強く実感させるために，子供が生活している地域と関連する楽曲を学習対象とし，生活と音楽の結びつきを考えながら楽曲に込められた心を追究させていくことが大切である。

楽曲に込められた心	音楽のよさ	中心となる学習内容	学習対象となる楽曲
歌ったり演奏したりする人の思いや願い 楽曲をつくったり伝えたりする人の創作意図	○ 言葉の違いをこえて感動を共有できるよさ ○ 先人の心にふれ合うことができるよさ	心をうまく伝えるための**構成要素**（歌詞，メロディ，リズム，音の重なり）の把握とそれを生かす**表現要素**（強弱，音色，奏唱法等）の工夫	子供の生活に根ざした郷土（福岡）の文化に関連した楽曲 （関係が深い国の楽曲・伝統音楽）

(2) 楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開とは

楽曲に込められた心を追究する音楽活動とは，楽曲の曲想を鋭く感じ取り，そこに込められている心の感受をもとに表現が工夫され，さらに深く心を感じ取っていく活動である。ここでは，楽曲にどんな心が込められているかをさぐりながら，何度も鑑賞したり表現したりして，その心をどの様に表すとよいか考え，自分らしい表現を創り出していく。この音楽活動は，歌詞や旋律などを手がかりにしながら，楽曲に込められた心をさぐる活動と，楽曲の音楽的諸要素を捉え，表現を練り上げていく活動の二つの側面をもつ。楽曲に込められた心を追究する音楽活動の展開とは，この活動をそれぞれの学習段階で往復的に進め，音楽のよさが味わえるように活動を連続・発展させていくことである。

であう段階	曲想の感受と楽曲に込められた心への関心⟺特徴的な要素を取り出しての試しの表現
ふかめる段階	楽曲に込められた心や背景の理解　⟺音楽的諸要素を捉えた表現の工夫
あじわう段階	楽曲に込められた心への共感，感動の共有⟺ 練り上げた表現の発表，満足感の感受

(3) 本研究で期待する子供像

心への共感と音楽的要素を捉えた表現・鑑賞を共に深める子供を目指す。その中で，音楽のよさを味わい意欲的に音楽活動に取り組む「知恵」「心情」が育ち，音楽とのかかわりが深まっていく。

○　出合った楽曲と自分とのかかわりを見つめ直し，楽曲が醸し出す表情を感じ取り，そこに込められた心に関心をもつ子供　**（生活吟味）**

○　楽曲に込められた心に共感し，それを音楽的要素と結びつけ，自分の納得いく表現を創り出そうとする子供　**（自己追究・内容創造）**

○　心を伝えていく音楽のよさを実感し，そのよさを生活に生かそうとする子供　**（生活更新）**

２．学習の具体的構想

(1) 郷土の文化に関連する楽曲の教材化

子供が表現したいと意欲を高め，①国際語としての音楽，②先人の心にふれ合う音楽，というよさが味わえるように，子供の生活と関連が深い郷土（福岡）の文化に関連し，興味・関心を持ちやすいものであると同時に，子供の発達段階から，捉えやすい音楽的諸要素をもつ楽曲を取り上げる。

① 共通点・差異点が明確な日本の楽曲と外国の楽曲を取り上げる。（言葉をこえた演奏者との感動の共有）

※ 楽曲と出合わせる際は，子供の生活圏である福岡と関わりの深い外国の楽曲を取り上げる。その際，日本の楽曲と比較しながら鑑賞させる等，子供の関心が高まるように出合わせる。

② 子供の身近な行事や地域で歌われる郷土の音楽を取り上げる。（楽曲をつくったり伝えたりした人々の心への共感）

※ 楽曲と出合わせる際は，子供が地域の行事などで耳にしている楽曲を中心にして，郷土の音楽を伝承されている地域の方の生演奏に出合わせる等，子供の関心を高めるようにする。

各学年段階を考慮し，心の追究が深まるように，以下の点に留意しながら教材化を図る。

低学年……心の追究の素地となるように，曲想や楽曲の気分を豊かに感じ取る経験を積み重ねる。
中学年……旋律に重点をおいた楽曲を中心とする。旋律の特徴は地域によって異なることが多く，その共通点・差異点の追究ができるようにする。そして，ふしの特徴をとらえやすい国・地域の楽曲を取り上げ，国際語としての音楽のよさを中心に題材構成を行う。
高学年……音の重なりを含んだ楽曲も取り上げる。発達段階として，楽曲の背景となる人々の生活の変遷やその背景が理解できる時間認識が発達してきている時期であるので，先人の心を伝える音楽のよさを中心に題材を構成し，味わい深い音楽活動が行えるようにする。

楽曲を教材化するときは次の点に留意し，子供が楽しく音楽活動に取り組めるようにする。

○ 子供の表現の広がり・深まりなどに対応するために，必要に応じてアレンジを行う。
○ 楽譜がない伝承音楽は，採譜を行い，子供に音楽的要素を捉えやすくする。

(2) 音楽活動における人材活用と支援

心の追究が深まるように，子供が鑑賞する楽曲を演奏して下さったり，子供の共同表現者として交流して下さる人材（① 子供たちと交流してくださる外国の方，② 郷土の音楽を受け継いでいる地域の方）を活用したりした音楽活動の場を設定し，子供たちが主体的に活動できるように支援を行う。人材との音楽活動は，鑑賞，表現，楽曲に関する取材，共同発表など，各段階に幅広く位置付ける。

また， 楽曲への興味・関心を高めたり，問題意識の広がりなどの子供の求めに対応したりするために，他教科やあらつ学習との関連を含めた体験活動を設定し，幅広い音楽活動を行わせる。その際，まずあらつ学習・他教科との関連ありきという考え方ではなく，それぞれの学びや興味・関心がお互いに生かされ合って，あらつ学習・他教科と音楽科の学習が共に深まるように留意する。

学習段階	であう段階	ふかめる段階	あじわう段階
主な学習活動	○ 楽曲の全体的な鑑賞 ○ 楽曲に関しての思いや疑問の出し合い ○ 表現のめあての設定	○ 自分達なりの表現の工夫 ○ 楽曲に込められた心を ↓↑ さぐる活動 ○ 表現の練り直し	○ 音楽交流や発表・発信 （○ 発展的な課題設定）
人材活用の方法	○生の歌や演奏を鑑賞したり，疑問を尋ねたりする。	○楽曲への思いや背景を取材する。 ○共に表現を練り上げる。	○音楽を通じて交流する。 ○共に表現を発表・発信する。
心を捉えさせる支援	※曲想や歌詞についての討論 ※資料や情景画の提示	※ＧＴとの交流，体験活動の場 ※資料や参考楽曲の提示	※ＧＴや他者からの評価
音楽的要素を捉えさせる支援	※観点を示しての比較鑑賞 ※特徴的な部分の表現の場	※観点を明確にした聴き合い活動の場（自己評価・相互評価）	※自他の音楽的成長を振り返る自己評価，相互評価カード

３．指導の実際と考察

(1) 題材名　第４学年　（題材１）日本のふしと韓国のふし　※共に演奏する人との感動の共有……国際語としての音楽

第５学年　（題材２）歌い継ごう！博多の心　※楽曲をつくった人々の心への共感……先人の心を伝える音楽

(2) 本題材の考え方

題材１は，日本のふしと韓国のふしを比較し，その表現を追究していく中で，日本のふしの特徴を感じ取らせるとともに，強弱を工夫することで旋律の美しさをよりよく表現できることを捉えさせることをねらっている。心の追究の面では，韓国総合教育院の友達との音楽を通した交流により，言葉の違いをこえた国際語としての音楽のよさを捉えさせていく。具体的には，①日本と韓国のふしの共通点・差異点を追究する中で，日本のふしの特徴を感じ取ること，②強弱を工夫して旋律の美しさを表現すること，等が主な学習内容である。韓国は，福岡の隣国で歴史的にも地理的にも関わりの深い国である。韓国の童謡は日本古謡と比較し易く，日本のふしの理解を深めることに適している。そこで，あらつ学習「おとなりの国・韓国調べ隊」の学習で高まった福岡と韓国の関係の深さの理解や韓国への興味・関心を生かしながら，交流相手である韓国総合教育院の人とともに表現し，言葉の違いをこえた感動の共有を実感させる。教材として，旋律が特徴的な日韓両国の楽曲を取り上げる。

「さくらさくら」……日本の国花・桜が歌われ，日本的な音階による旋律の美しさを捉えやすい。
桜の名所・西公園を目にしている子供たちには情景を思い浮かべ易い。
「ウリナラコ」……韓国の国花ムクゲを歌った歌で，「さくらさくら」と比較・追究し易い。
「半月」……韓国で国民的に愛唱されている童謡。情緒的で美しい旋律をもち，強弱を工夫して表現するよさを味わわせることができる。器楽合奏へのアレンジも容易である。

これらの楽曲を歌唱・器楽で表現していく中に，韓国の方との交流を位置付ける。まず，「さくらさくら」と「ウリナラコ」を比較させ，同じ国花を歌った曲でも，違いがあることで日本のふしの特徴（音階構成等）を明らかにするとともに，国花の美しさを表現しようとする心が共通することを感じ取らせ，それを表現するための音楽的要素を捉えさせる。そして，教科書教材にある「半月」に出合わせ，韓国の方と共に表現し音楽交流をさせる中で，国際語としての音楽のよさを味わわせていく。

題材２は，郷土・博多の古謡にこめられた先人の思いや願いを探り，それを音楽的要素と結びつけながら表現を工夫していくことを通して，日本のふしについて親しませるとともに，生活から生まれ，人々の心を受け継いでいく音楽のよさを感じ取らせていくことをねらっている。具体的には，①日本古謡としての博多の唄の特徴をとらえ，関心を高めること，②人とコミュニケーションを深めていく座敷唄としての博多の唄の特徴をとらえ，歌詞の内容を生かした歌唱表現をすること，③即興的にリズム伴奏をつくり楽しむこと，等が主な学習内容である。博多の唄は，聴き手と演奏者のお互いが楽しめるような，太鼓などのリズム楽器と旋律の重なりが特徴的である。そこで，題材１で心を追究した経験を生かして，時間認識が発達する高学年の教材として，次の三曲の唄を取り上げる。

「ドンガラガン」……学校のすぐ裏にある西公園が歌われており，歌詞の内容から強弱や唱法を工夫して表現し易く，昔の生活の様子を捉えることに適している。
「しょうさいさんの思いつき」……楽しい歌詞で福岡の名所が紹介され，コミュニケーションを深めていく表現の工夫（リズム，唱法等）がし易く，楽しく歌うことができる
「ぼんちかわいや」……博多どんたくで馴染みがあり，唱法やリズムを工夫して楽しく表現できるとともに，楽しい生活をつくろうとしてきた昔の人の心が感じられる。

本題材では，博多の古謡を歌い継いでおられる「博多那能津会」の方と共に表現していく活動を設定し，音楽活動の楽しさを味わわせるとともに，博多の伝統を調べるあらつ学習への発展が考えられ，郷土の祖先の生活や願いが唄に託されて受け継がれていく音楽のよさを実感させていく。

(3) 目　標

第４学年　（題材１）　日本のふしと韓国のふし

① 日本のふしと韓国のふしの共通点・差異点を追究する表現・鑑賞の活動を通して，日本のふしの特徴を感じ取るとともに，強弱を工夫して旋律の美しさを表現できるようにする。

② 韓国総合教育院の人たちとの音楽交流を通じて，言葉を越えて感動が共有できる音楽のよさを実感することができる。

第５学年　（題材２）　歌い継ごう！ 博多の心

① 郷土・博多の古謡のふしに親しみ，歌詞の内容を生かした歌い方を工夫したり，音の重なりを感じて即興的にリズム伴奏をつくったりして，自分なりの表現を創り出していくことができる。

② 博多の古謡を受け継ぐ博多那能津会の方と共に，博多の唄の表現を深めていく中で，博多の唄を歌い継いでいきたいという心情を高めながら，昔の人々が唄で生活の様子や博多のよさを伝えていることを捉え，先人の心と共感できる音楽のよさを実感することができる。

(4) 計　画

第４学年　（題材１）　日本のふしと韓国のふし　（７時間）

活　動　と　内　容	主な手だて	配時
あらつ学習「おとなりの国・韓国調べ隊」による韓国の人との出会い，韓国への興味・関心の高まり	※ 楽譜の提示と共通点・差異点の話し合い	3
１．「ウリナラコ」「さくらさくら」を比較鑑賞し，それぞれのふしの共通点・差異点を探る。	※ 韓国総合教育院の慎先生に質問に答えていただく場	
○ 日本のふしの特徴の感受　○ 韓国の楽曲への関心の高まり	※ 「半月」の器楽アンサンブルへのアレンジ	3
○ 日韓両国の歌の共通点・差異点の把握	※ 慎先生と共に表現の工夫を考える場	
・共通点……国花の美しさを讃える心　・差異点……拍子，唱法	※ 韓国総合教育院の子供との音楽交流の場	1
２．韓国総合教育院の子供との音楽交流の計画を立て「半月」の表現を韓国総合教育院の慎先生と共に練り上げる。		
○ 流れるような曲想を生かす強弱表現の工夫		
３．韓国総合教育院の子供たちと音楽交流を行う。		
○ 言葉の違いをこえた感動の共有ができる音楽のよさ		

第５学年　（題材２）　歌い継ごう！ 博多の心　（８時間）

活　動　と　内　容	主な手だて	配時
１．博多の唄の生演奏を鑑賞し，博多の唄発表会の計画を立て，表現のめあてを話し合う。	※ 博多那能津会の方に演奏していただく場	3
○ 和楽器の音色と博多の唄のふしの特徴の感受	※ 博多那能津会の方の演奏に合わせて即興表現をしてみる場	
○ 博多の唄への関心の高まりと表現のめあての設定	※ 書きこみ楽譜（採譜）をもとにしたグループ活動による聴き合い	4
２．博多那能津会の方とともに，博多の唄に込められた人々の心を探りながら，表現を練り上げる。	※ 博多那能津会の方への取材活動とともに表現する場	
○ 歌詞の内容を生かした表現の工夫（唱法，強弱，リズム伴奏）	※ 博多の唄のよさを伝える発表会の場	1
○ 博多の唄に込められた昔の人々の心の追究		
・博多のよさや生活の様子を伝えていこうとする心		
・座敷唄として，多くの人と唄を通して仲良くしてきたこと		
あらつ学習「調べよう博多のまち・博多の心」への発展による，昔の博多の人々の生活や願いへの共感の深まり		
３．博多那能津会とともに「博多の唄発表会」を行う。		
○ 先人の思いや願いに共感できる音楽のよさ		

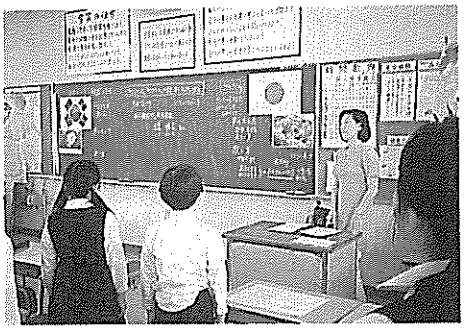
(5) 指導の実際

第４学年　（題材１）　日本のふしと韓国のふし

①　であう段階（１～３／７時間）

日韓両国のふしに出合い，日本のふしの特徴を感じ取り，韓国の楽曲への関心をもつ。

韓国の文化を調べるあらつ学習でかかわっている韓国総合教育院の慎先生から，韓国の国花ムクゲを歌った「ウリナラコ」を紹介していただいた。そこで，日本の国花である桜を歌った「さくらさくら」と比べることで，「似ているところや違うところがありそうだ。」「歌い方を考えて比べてみたい。」という発言が出された。そこで，楽譜に書きこみをしたり，お互いに聴き合いながら「ウリナラコ」「さくらさくら」の歌い方を追究した。そして慎先生を迎え歌を聴いていただいたり，慎先生の歌を聴いたりして，疑問やこれから学習したいことについて話し合った。（写真①）この中では，あらつ学習で日韓両国の文化の共通点・差異点を追究していることから，２つの国の歌の共通点・差異点という観点で意見が出された。（資料①）この後，ふしの違いを生かした表現の仕方が表現上の課題となり，「さくらさくら」はレガート唱，「ウリナラコ」はマルカート唱で歌っていった。歌う中で，「あらつ学習の韓国との交流会で両国の歌を発表したり一緒に歌ったりしたい。」という音楽交流を求める意見が出された。



【写真①　２曲の歌い方の追究】

Ｃ１　「ウリナラコ」は少しはずんだ歌い方が合うけれど，「さくらさくら」はなめらかに歌った方がぴったりな感じがします。
Ｃ２　「ウリナラコ」は３拍子で浮かんだり沈んだりする感じだけど，「さくらさくら」は４拍子でなめらかで静かな感じです。
Ｃ３　雰囲気は違うけど，２曲とも自分の国の国の花を美しいと思う気持ちを込めて歌うところは同じだと思います。
Ｃ４　だから，両方ともきれいな声で歌っていきたいと思います。
Ｃ５　もっと韓国の歌を調べて歌ってみたいです。

【資料①　２曲の共通点・差異点についての話し合い】

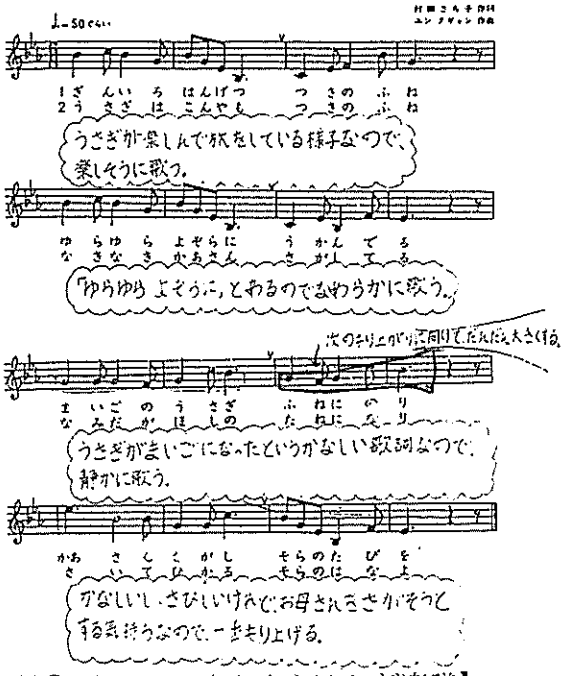
②　深める段階（４～６／７時間）

音楽交流の計画を立て，教科書にある韓国の楽曲「半月」の歌唱・器楽表現を深める。

「韓国の友達と一緒に歌ったり演奏したりしたい。」という求めを持ち，韓国の楽曲への関心を高めた子供たちは，教科書から韓国の曲「半月」を見つけた。次に，「半月」の歌唱や器楽での表現を，聴き合いをしながら意見交換をしたり，楽譜への書きこみをしたりした。（資料②）そのなかで，「本当に韓国の友達が喜んでくれる表現になっているか心配。」という意見が出され，慎先生をＧＴに表現の仕方を考える活動を仕組んだ。（写真②）子供たちは慎先生に，韓国の人が歌に込める思いを尋ねたり，慎先生の歌声に合わせて演奏したりして，より気持ちが伝わる表現の仕方を考えた。そこで，原語の歌詞の意味をもとに強弱をつけたり，音色や発声を考えたり，慎先生と話し合いながら表現を工夫した。（資料③）

【写真②　慎先生とともに表現】

Ｃ６　韓国の人は，月に母親への気持ちを込めているから，美しい声や音を出したい。
Ｃ７　慎先生の韓国語の歌に合わせて３フレーズ目をだんだん強くすると，意味は分からなくてもじーんとした。

【資料③　子供の発言】

【資料②　表現の工夫を書き込んだ楽譜】

③　味わう段階（７／７時間）

韓国総合教育院の友達や慎先生と音楽交流を行い，言葉の違いを越える音楽のよさを味わう。

韓国総合教育院の子供たちや慎先生を招き，音楽交流を行った。「半月」の器楽アンサンブルに合わせて韓国の友達が歌っている姿から，「言葉は分からないけど，音楽を通じて仲良くなることができた。」という感想が出された。

【写真③ 日韓音楽交流会】

音楽ってすごい

『音楽には国境がない。どの国の人とも分かりあえる，楽しめる』

今日の韓国の友達との交流会で，私はそう思った。それは，私たちが日本語で歌っていても，合奏をしていても，体をゆらしながら聞いている人，目をつぶってゆったりと聞いている人，さまざまだが，楽しんでくれていたからだ。そして交流会の最後に，韓国総合教育院の友達が，

「日本と韓国が一つになったような気がした。」

と言ってくれたではないか。

この言葉を聞いて，音楽をやってきてよかったと思った。こんなに楽しんでもらったら，これからの交流も音楽もますますやる気が出てくる。

【資料④ まとめの子供の作文】

考察１

であう段階では「日韓の歌に込められた心は同じでは？」という心への関心を高め，旋律の流れなどの音楽的な特徴を捉えられた。（資料①）あらつ学習での学びを生かしての比較鑑賞が有効であった。ふかめる段階では，韓国の人が「半月」に込めた心にせまる強弱表現の工夫ができた。（資料②③）「半月」を表現する韓国の人の心と表現要素の工夫の双方をＧ.Ｔとの交流で追究させていく活動構成が有効であったと考える。あじわう段階では，国際語としての音楽のよさを味わい，これからも音楽を生かしていこうとする姿が見られた。（資料④）韓国の方との音楽交流の場の設定が有効であったと考える。福岡と文化的な関わりが深い韓国の楽曲と日本古謡の教材化により，ふしの特徴を生かして表現を工夫することで感動が共有される，国際語としてのよさを味わわせることができた。

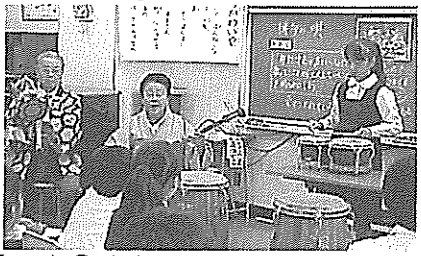
第５学年　（題材２）　歌い継ごう！ 博多の心

④　であう段階（１～３／８時間）

博多の古謡や民謡に出合い，関心を高め，歌詞やリズム等に着目した表現のめあてをつくる。

郷土の唄を知らないことから，「聴いてみたい。」との求めが出され，博多那能津会の方の演奏にに出合わせた。（写真④）子供たちは，和楽器の音色や歌詞の語感の面白さから興味を示した。そこで，博多那能津会の方の演奏に合わせて即興的にリズム表現をし（写真⑤），色々なリズムや音色で即興表現を楽しんだ後に，博多那能津会の方から「博多の唄は,その時々の気持ちで表現が変わる。」という話をしていただいた。子供たちは「自分たちの気持ちをもとに，附属小の５年生流の博多の唄を表現したい。」という課題を設定した。（資料⑤）

【写真④博多那能津会の方々】



【写真⑤演奏に合わせて即興表現】

・歌詞が何を歌っているのか調べて，それに合った歌い方をしたい。
・楽器やリズムを工夫して伴奏をつけたい。
・発声を研究したい。

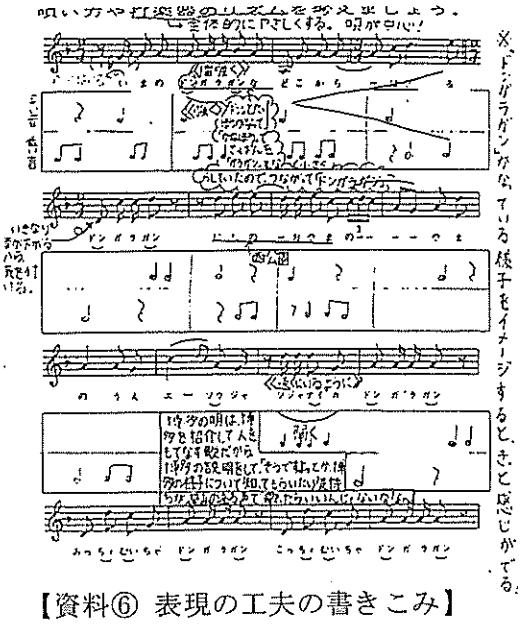
【資料⑤子供の課題の例】

⑤　深める段階（４～７／８時間）

博多那能津会の方と共に活動し，博多の唄の特徴をとらえ，自分らしい表現を創り出す。

子供たちは，自分たちの興味・関心に応じて鑑賞した楽曲の中から選択し，歌詞の内容にあった歌い方やリズム伴奏のリズム形や音色をグループごとに追究していった。教師とともに採譜した楽譜への書きこみや，博多那能津会の方の演奏テープを参考にして表現を工夫していったが，歌詞の意味が

難しいことから，博多那能津会の方に取材して，歌詞の意味や時代背景をさぐった。取材を進めるうちに，「博多那能津会の方の演奏や話を聴いていると，情熱が伝わってくる。韓国との音楽交流の時のように，表現するときの気持ちを考えることでよりよい表現ができるのではないか。」という意見が出され，さらに歌うときの気持ちを博多那能津会の方に取材した。（写真⑥⑦）そこでは博多の昔の様子を唄に託し，誇りにしてきたことや昔の博多商人が唄で様々な人と仲良くなろうとした心意気など，博多の唄に込められた心をさぐった。博多の唄に込められた心を感じた子供たちは，さらに表現を見直し，歌詞を生かした深みのある歌い方や，明るい気持ちを伝えるための音高差のある音色でのリズム表現を工夫していった。（資料⑥）さらに，「もっと博多の昔の様子を知りたい。」という子供の求めから，博多の伝統を調べるあらつ学習へと発展していった。



【資料⑥ 表現の工夫の書きこみ】

【写真⑥ 博多那能津会の方への取材や表現の練り上げ】

【写真⑦ 発表会の様子】

⑥ **味わう段階**（８／８時間）

博多那能津会の方と共に、全校に博多の唄のよさを発表し，満足感を味わう。

博多那能津会の方と共に，全校に演奏発表を行った。（写真⑦）その際，演奏発表だけでなく，歌詞や唄に込められた心の説明も行い，博多の心を歌い継ぐ大切さを全校児童に呼び掛けた。（資料⑦）

考察２

であう段階では，音色や歌詞に着目させて関心や表現への意欲をもたせることができた。（資料⑤）Ｇ.Ｔの生演奏が有効と考える。ふかめる段階では，題材１の経験から，楽曲に込められた心に気付き，博多那能津会の方との交流でそれを捉えた。そして，歌詞を生かした唱法やリズムの音高などを工夫するよさを捉えていった。（資料⑥）Ｇ.Ｔとの交流による心をさぐる活動と表現の練り上げの往復的な活動が有効であったと考える。あじわう段階では，博多の唄をこれからの生活において歌い継ごうとする心情の高まりが見られた。（資料⑦）題材１の経験を生かした活動で，歌詞や音の重なりを生かした表現の工夫を創り出すことができた。

博多の唄は，楽しむ唄で，商人が，お客さんと仲良くなるために歌ってきた唄です。昔の西公園の様子も分かります。唄を通して色々なことが伝えられているのです。２０００年の歴史をもつ博多に受け継がれている唄を、私たちが伝えていこうと思います。

【資料⑦ 発表会での子供の発言】

４．全体考察

題材１では，旋律の流れを捉えた強弱の工夫により，言葉の違いを越える音楽のよさを実感させることができた。題材２では，題材１での経験を生かし，先人の心をさぐる活動がなされ，唱法や打楽器の音色を工夫することで，先人の心をより深く伝えることを捉え，時間をこえる音楽のよさを味わわせることができた。これは，心を伝えるために表現を工夫する知恵と，音楽のよさを味わう心情を培っている姿であると考える。郷土（福岡）の文化に関連する楽曲の教材化と，人材の活用，あらつ学習を含む体験活動を位置付けた，心と表現の双方を追究する活動が有効であったと考える。

自己の音楽的実態を生かした発展的音楽活動の展開

音楽科部　津　本　修　一

1．主題の意味

(1) 自己の音楽的実態を生かすとは

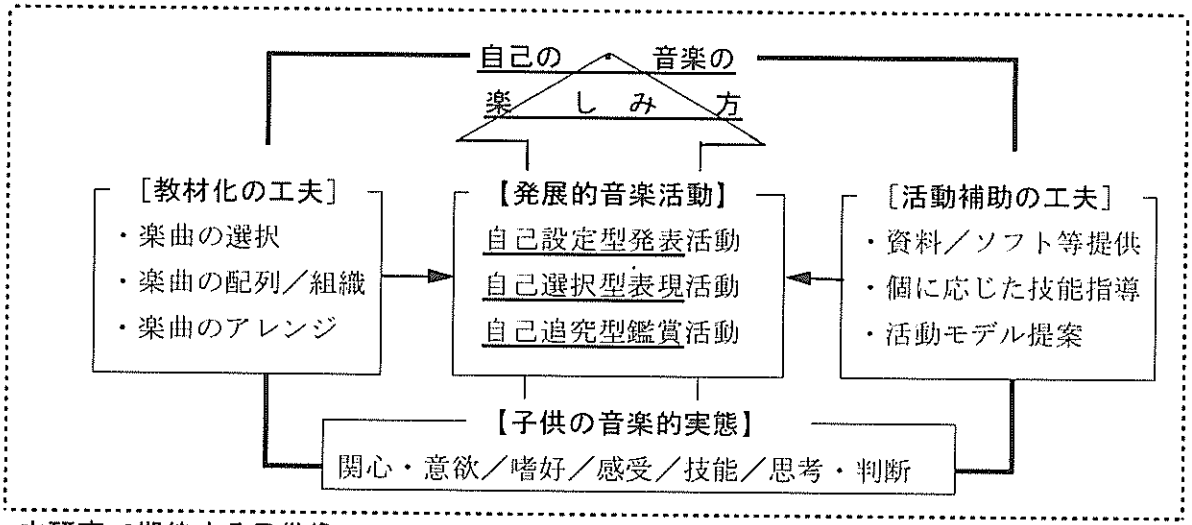
音楽科でめざす「知恵」や「心情」を培っていくためには，それらを支えている子供の音楽的実態を明らかにしていくことが必要である。ここでいう自己の音楽的実態とは，具体的には音楽に対する関心・意欲，音楽的嗜好性，音楽的感受力，音楽的技能，音楽的思考・判断力などについての個別的な現状である。自己の音楽的実態を生かすとは，子供自ら自己の音楽的実態をふまえながら自分に合った内容や方法で音楽活動に浸ることである。新指導要領解説音楽編の内容の改善の方向性として，児童一人一人が自らの感性を豊かに働かせながら様々な音楽にかかわり，楽しい音楽経験を得ることができることを重視するという基本的な姿勢が述べられている。このことは，とりもなおさず子供一人一人の音楽的実態が生かされるように，個に応じた適切な指導が求められていることを示しており，この課題を究明し，これからの音楽科の方向性を明らかにするうえで本主題は重要な意味をもつものであると考える。

(2) 自己の音楽的実態を生かした発展的音楽活動の展開とは

自己の音楽的実態を生かした発展的音楽活動の展開とは，子供一人一人が自分の音楽的実態をふまえた独自の表現及び鑑賞の活動を計画・実行していくことである。具体的には，①自己追究型鑑賞活動，②自己選択型表現活動，③自己設定型発表活動といった一連の活動を指導題材に位置づけ，それぞれの活動を教材化と活動補助の工夫の２面から支えていくものである。

このことは，子供が主体的に音楽活動に取り組み，音楽のよさを追究・感得し，日常的・継続的に音楽を楽しもうとする態度を自己形成させていくことをねらうことからも意義深いものである。

【自己の音楽的実態を生かした発展的音楽活動の展開】



(3) 本研究で期待する子供像

本研究では，このような子供一人一人の音楽的実態を生かした活動構成とその展開により，次のような音楽とのかかわりを深めていく子供の姿を期待している。

【期待する具体的な子供像】

○	活動への意欲や見通しをもって，主体的に音楽活動に取り組む子供	（生活吟味）
○	自分なりに音楽活動の内容・手段・方法を自己判断・自己選択できる子供	（自己追究）
○	音楽活動にひたりながら，よりよい音楽表現をつくりだしていく子供	（内容創造）
○	自分の音楽経験を生活に生かし，日常的に音楽を楽しむ態度をもった子供	（生活更新）

2．学習の具体的構想

(1) 発展的音楽活動の題材への位置づけ

子供一人一人が自分なりの音楽の楽しみ方を創りだしていくことができるように，各学期の学習のまとめに発展的音楽活動を位置づけた題材を設定し，その流れを自己追究型鑑賞活動→自己選択型表現活動→自己設定型発表活動という一連の活動として組み立て，題材に位置づけていくようにする。

① 自己追究型鑑賞活動の設定

いくつかの楽曲を全体的に鑑賞したあと，子供がそれぞれ選択した楽曲別に自分なりの追究視点をもって楽譜，関連図書，音楽ソフトなどを利用しながらその楽曲のよさを味わっていく個別的な鑑賞活動を設定するようにする。

② 自己選択型表現活動の設定

自己追究型鑑賞活動で選択した楽曲について，表現媒体，演奏形態などを子供に自己選択させることにより自分の音楽的実態に合った表現活動を保証していくようにする。

＊表現媒体 ―――――― 歌声，リコーダー，鍵盤楽器，打楽器など
＊演奏形態 ―――――― 独唱，重唱，合唱，独奏，小編成アンサンブルなど

③ 自己設定型発表活動の設定

自己選択型表現活動でつくりあげてきた表現をどのようなスタイルで発表するかを自己設定させることにより，自分らしい音楽表現の発表方法を具現化させていくようにする。

＊リサイタル　＊録音放送　＊訪問演奏　＊家庭内発表

(2) 発展的音楽活動を活性化させるための支援の工夫

発展的音楽活動を活性化させるための支援の工夫については，教材化および活動補助の２点から次のような指導の工夫を行っていくようにする。

【教材化の工夫】

・子供の音楽的実態を考慮した普遍的な音楽的価値のある楽曲の選択
・子供の音楽的実態を考慮した楽曲の配列及び組織（音楽的内容の重点化，難易度の考慮）
・子供の自己選択型表現活動の方向性や個々の音楽的技能に応じた楽曲のアレンジ

【活動補助の工夫】

・子供の音楽活動への意欲をもたせる楽曲への出会わせ方の工夫（過去の音楽経験との関連づけ）
・子供の課題や活動に応じた資料の提供（楽譜・関連図書・音楽鑑賞ソフト・伴奏テープなど）
・子供の音楽的実態に応じた技能指導や基本事項の掲示資料の提供（運指表・鍵盤図・楽典資料）
・子供の自己設定型発表活動を方向づける活動モデル例示と助言（発表方法例示・企画実行支援）

(3) 指導の基本的な仕組み

段階	で　あ　う	ふ　か　め　る	あ　じ　わ　う
主な学習活動	１．自己追究型鑑賞活動 (1)テーマに出会う (2)楽曲の全体的な鑑賞 (3)楽曲の選択および，楽譜，音楽ソフトの収集 (4)鑑賞ノートの交流	２．自己選択型表現活動 (1)表現媒体／演奏形態の選択 (2)ためしの表現活動 (3)資料，楽譜，音楽ソフトの収集と課題別表現活動 (4)聴き合い活動による表現の練り上げ	３．自己設定型表現活動 (1)発表会の企画・準備 (2)発表会の実行 表現の自己／相互評価
主な支援	・音楽ソフト／楽譜などの資料提供	・個別課題に応じた楽曲のアレンジ ・個に応じた技能指導　・場の設定	・発表についての助言 ・自己／相互評価の設定

3．指導の実際と考察

(1) 題材名　なんたってシューベルト！

(2) 本題材の考え方

本題材は，シューベルトの歌曲をテーマ教材として，表現と鑑賞の関連を図った総合的な活動を通して，音楽作品へのアプローチのしかたや自分なりの楽しみ方を探ることにより，音楽を日常生活に生かしていく態度を形成していくことを主なねらいとしている。具体的な音楽科の内容としては，①範唱や範奏を聴いて演奏すること，②歌詞の内容や楽曲の構成を理解して，それらを生かした表現の仕方を工夫すること，③拍の流れやフレーズ，音の重なりや和声の響きを感じ取って演奏すること，④曲想を全体的に味わって聴くこと，楽器の音色及び人の声の特徴に気をつけて聴くことなどである。題材の中心的な活動としては，シューベルトの歌曲のなかから，特に親しまれている作品（具体的には，下記に列記）に出会い，全体的な鑑賞→個人的な鑑賞といったルートをもつ自己追究型鑑賞活動を行うこと，鑑賞活動をもとに選択した作品の表現媒体や表現形態を自己選択しながら表現する自己設定型表現活動を行うこと，表現の発表方法を個人あるいはグループで企画・実行していくという自己設定型発表活動を行うことである。このことは，音楽の学習を日常生活に生かしていったり，自分の音楽的成長を実感したりするといった「生涯音楽」につながる資質や態度を育てるという意味で重要であると考える。

楽曲としては，シューベルトの歌曲のなかから次のような楽曲を提示，選択的に用いるようにさせる。

・「子守歌」	変イ長調，４分の４拍子，ａ－ａ’－ｂ－ａ’の典型的な２部形式。
・「野ばら」	ヘ長調，４分の２拍子，３節からなる有節歌曲。
・「ます」	変ニ長調，４分の２拍子，Ａ－Ａ－Ｂ－Ａ’といった変則的な有節歌曲。
・「セレナード」	ニ短調，４分の３拍子，Ａ－Ａ－Ｂ－Ａ’といった変則的な有節歌曲。
・「至福」	ホ長調，８分の３拍子，大きくＡ－Ｂの２部からなる３節からなる有節歌曲。

本題材の指導にあたっては，「であう段階」では，テーマ作曲者であるシューベルトについて，知っていることやこれまで鑑賞してきた楽曲などに関することを話し合い，題材への関心をもたせる。次に，教材として取り扱う歌曲の全体的な鑑賞を行い，そのなかから気に入った曲について資料や音楽ソフトを用いて自己追究型鑑賞活動を行うようにする。「ふかめる段階」では，シューベルトの歌曲のなかから，好きな楽曲について表現媒体と演奏形態を自己選択させる自己選択型表現活動を行っていく。ここでは，まず，ためしの表現活動として，「ます」をモデル曲として取り上げ，子供たちに表現媒体と演奏形態を自己選択させたうえで，とりあえず表現活動させてみる。そのなかから感じ取った技能上，活動上の問題点を出し合わせ，移調や運指法，アレンジ譜などの必要性に迫らせ，必要な資料・楽譜等を収集・活用させながら課題の解決にあたっていくようにさせる。次に，ためしの活動を生かして，それぞれ選択した楽曲について自己選択型表現活動を展開させていく。ここでは，子供の音楽的嗜好性や音楽的技能に応じて，表現媒体と演奏形態についてのアドバイスを行ったり，子供の実態に応じてアレンジを行った楽譜を提供するなどの支援を行っていくようにする。「あじわう」段階では，これまでつくりあげてきた表現の発表方法を自己設定し，企画・実行する自己設定型発表活動を行う。ここでは，録音放送発表，リサイタル形式発表，訪問巡回発表などといった例を紹介し，自分の表現の発表の形式の参考させたり，自分にとってのシューベルトの歌曲についての思いや表現の意図などを何らかの表現方法で加えるなどの示唆を行い，音楽を生活に生かす楽しさを味わわせ，一連の音楽活動の成就感・満足感を味わえるようにしたいと考える。

(3) 目　標

1．シューベルトの歌曲に親しむとともに，自分なりの楽しみ方を創りだす態度を育てることができる。

2．シューベルトの歌曲を追究方法を工夫して鑑賞したり，表現媒体や演奏形態を選択して表現することができる。

(4) 計　画（約８時間）

活　動　と　内　容	教　師　の　支　援	配　時
1．自己追究型鑑賞活動を行う。	※　シューベルトの作品の中で，これまで鑑賞してきた楽曲を想起させ，テーマ作曲家についての関心をもたせる。	３時間
(1)　シューベルトについて話し合う		（１）
○　シューベルトの作品・生涯について		
(2)　シューベルトの歌曲を鑑賞する。		（１）
・「ます」　・「野ばら」　・「セレナード」	※　シューベルトの歌曲の全体的な鑑賞にあたっては，おおまかな曲想をとらえさせる。	
・「子守歌」　・「至福」		
○　全体的な曲想や特徴をとらえて聴くこと		
(3)　追究したい曲を選択，資料収集を行い，鑑賞する。	※　全体的な鑑賞のあと，疑問に思ったことやもっと調べてみたいことをなどについて話し合わせ，個別課題をもたせる。	課　外
○　図書，音楽ソフトなどの収集		
○　個別課題によるくりかえし鑑賞		（１）
(4)　鑑賞ノートに感想をまとめ，交流し合う。	※　資料収集活動にあたっては，テープ，ＣＤなどの音楽ソフトや鑑賞活動に必要と思われる関連図書などの資料を提供する。	
○　楽曲についての把握事項と感想		
○　選択曲別グループ内での発表交流		
2．自己選択型表現活動を行う。		４時間
(1)　表現媒体と表現形態を選択する。	※　自己選択型表現活動にあたっては各自の音楽的実態に合った選択を促すようにする。	課　外
○　表現媒体の選択（声・リコーダー・鍵盤楽器）		
○　演奏形態の選択（独唱・独奏・アンサンブル）		
(2)　ためしの表現活動をする。	※　ためしの表現活動では，音楽的，技能的な問題を出し合わせて，それに応じた解決例を示すことにより，自己にあった表現方法を選択させるようにする。	（１）
○　活動の問題点についての話し合い		
○　ためしの演奏や話し合いをもとにした資料や楽譜などの収集		
(3)　自己選択した楽曲の表現活動を行う。	※　表現活動においては，聴き合い活動を採り入れながら表現を練り上げさせていく。	（２）
○　部分練習／パート練習		
○　全体練習／アンサンブル練習		
(4)　表現を練り上げる。	※　自己設定型発表活動においては，モデルを提示し，自分の希望する発表方法を決定させる。	（１）
○　聴き合い活動と曲想表現の工夫		
3．自己設定型発表活動を行う。		１時間
(1)　表現の発表方法について話し合う。	※　発表までの企画・宣伝・実行については，個に応じた助言を行い，成就感・達成感を味わえる場を支援する。	（１）
○　発表方法のモデルについての検討と決定		
・リサイタル　・録音発表　・訪問演奏		
(2)　表現の発表を行う。		課　外
○　表現の発表と感想ノートの記述		

(5) 指導の実際

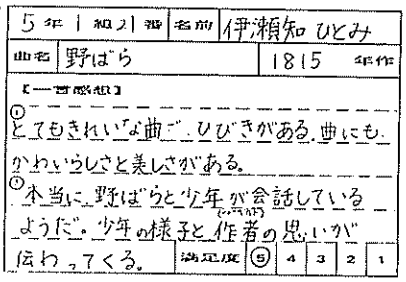
であう段階（第１時～第２時＋課外）

ここでは，テーマ作曲家であるシューベルトについてその作品や生涯に関心をもち，彼の代表的な歌曲を聴き味わうことができることをねらいとしている。そこで，第１時～第２時では，まず，２学期に鑑賞した「ピアノ五重奏曲『ます』第４楽章」を聴き，想起したことを話し合った。子供たちは，「あっ。『ます』だ。」とか「シューベルトの曲だ。」などと曲名や作曲者シューベルトのことを思い出した。その後，彼の作品や生涯について知っていることを尋ねたり，彼の生涯の略年表を提示したところ，子供たちから次のような意見が出された。

T：「シューベルトについて知っていることや，年表を見て思ったことなどを発表してみましょう。」
C：「本で読んだんだけど，シューベルトは『歌曲の王』ってよばれています。」
C：「家にシューベルトの『未完成』という曲のＣＤがあります。」
C：「年表を見ると，３１才でなくなっているので短かい人生だったと思います。」
T：「その短い生涯の中で，シューベルトは６００曲もの歌曲を作曲しています。」
C：「すごい。どんな曲をつくったのか聴いてみたいな。」

〈写真①〉話し合い活動の様子

このような話し合いのなかで，子供たちはシューベルトやその作品について，関心をもちはじめた。そこで，次に彼の代表的な歌曲として，『ます』『野ばら』『子守歌』『セレナーデ』『至福』の５曲を聴かせていった。子供たちは，シューベルトの歌曲に出会い，資料①のような感想をもったようであった。（資料①）


５年１組２番　名前　伊瀬知 ひとみ
曲名　野ばら　1815　年作
【一言感想】
①とてもきれいな曲だ。ひびきがある。曲にもかわいらしさと美しさがある。
②本当に野ばらと少年が会話しているようだ。少年の様子と作者の思いが伝わってくる。
満足度　⑤ 4 3 2 1

〈資料①〉曲の出会いの感想

そして，全体的な鑑賞のあと，自分が気に入った曲についてもっと調べてみたいことについて話し合い，自己追究型鑑賞活動へとつなげていった。以下は，話し合いで出された子供の意見の一部である。

C：「『ます』は，ピアノ五重奏曲と歌曲のどちらが先に作曲されたのか疑問です。」
C：「ぼくは，『至福』という曲が気に入ったので，歌詞の意味を知りたいです。」
C：「私は，『セレナーデ』の伴奏が気に入ったので，楽譜を見て聴きたいです。」

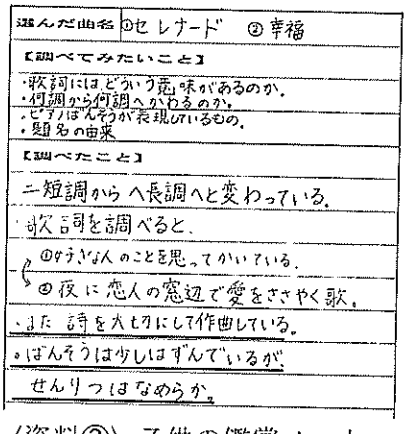
自己追究型鑑賞活動では，子供たちが自分が好きな曲を選択し，その曲に対する疑問や調べてみたいことに応じて，音楽ソフトや関連資料などを収集・活用してより深く聴き味わうようにした。このことは，自分の音楽鑑賞の楽しみ方を身に付けていくことをねらっている。

明るく澄んだ小川で
すばやく、楽しげに
自由気ままなますが
勢いよく泳ぎまわっていた。
ぼくは岸辺に立って、
うっとりとした気持ちで
澄んだ小川で生き生きと
泳ぎまわっているますを眺めていた。

〈資料②〉歌詞対訳資料

ここでは，個別に選択した曲のテープの配布，楽譜・楽曲解説や歌詞対訳などの資料・シューベルトの略年表などを準備と提供といった支援を行い（資料②），子供たちの鑑賞活動が深まるように配慮した。

子供たちは，それぞれ深く聴いてみたい楽曲を選択し，それぞれ自宅で自分の好きな時間に鑑賞活動を展開していった。第３時では，鑑賞ノートに気づいたことや感想をまとめ，選択曲別グループで交流し合っていった。資料③は，子供の鑑賞ノートの一例である。


選んだ曲名　①セレナード　②幸福
【調べてみたいこと】
・歌詞にはどういう意味があるのか。
・何調から何調へかわるのか。
・ピアノばんそうが表現しているもの。
・題名の由来
【調べたこと】
・短調から長調へと変わっている。
・歌詞を調べると、
①好きな人のことを思ってかいている。
②夜に恋人の窓辺で愛をささやく歌。
・また詩を大切にして作曲している。
・ばんそうは少しはずんでいるが
せんりつはなめらか。

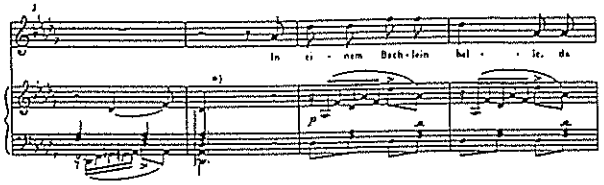
〈資料③〉子供の鑑賞ノート

考察①

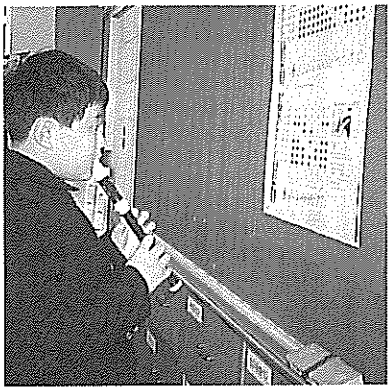
ここでは，子供の反応や資料からもうかがえるようにシューベルトの代表的な歌曲を教材曲として自己追究型鑑賞活動を行ったことによ

って，子供たち一人一人が自分なりのこだわりをもって主体的な鑑賞活動を展開することができた。このことは，これらの歌曲の旋律が単純明快で親しみやすいこと，「自己追究型」による楽曲の自己選択，追究内容の自己設定といった活動方法が有効にはたらいたと思われる。また，資料③の子供の鑑賞ノートから，シューベルトの歌曲を代表とするドイツリート特有の歌詞と音楽との融合性，歌声部とピアノ伴奏部の相互補完性といった音楽的内容に触れるような記述（下線部）も見られる。このことから，自己追究型鑑賞活動が単に意欲だけではなく，鑑賞そのものの深まりを促していることがうかがえる。

ふかめる段階（第４時～第７時＋課外）

ここでは，「であう段階」で選択したシューベルトの歌曲を自分の演奏してみたい曲を自分のやりたい方法で表現できることをねらいとしている。

〈楽譜①〉『ます』（原調＝変二長調）

まず，子供たちはそれぞれ選択した楽曲をどのような表現媒体を用いてどのような演奏形態で表現してみたいか自己選択を行った。そして，第４時では，自己選択型表現活動のためしの活動を行っていった。ためしの活動では，『ます』（楽譜①）を共通のモデル教材として，子供たちが自己選択した表現媒体と演奏形態をもとに，とりあえず表現活動に取り組ませてみた。子供たちは，そのなかで，次にあげるような様々な活動上の問題点を感じ取っていった。

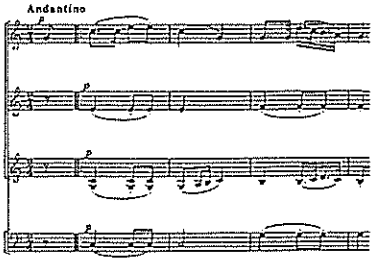


〈写真②〉資料収集の様子

> Ｃ：「♭（フラット）が多くて，むずかしい。」
> Ｃ：「ドイツ語がわからないので，日本語の歌詞がほしい。」
> Ｃ：「高い音のところが，苦しくて歌いづらい。」

そこで，気づいた問題点について出し合い，その解決策について話し合う場を設け，移調楽譜，アンサンブル用アレンジ楽譜，リコーダー運指表，邦訳歌詞，ドイツ語仮名歌詞，移調伴奏テープなどといった活動補助資料の紹介を行った。（資料④・⑤）子供たちは，自分の感じた問題点を解決するために必要な資料を収集・活用し，再び表現活動を行った。資料⑥は，ためしの活動を終えての子供の感想である。

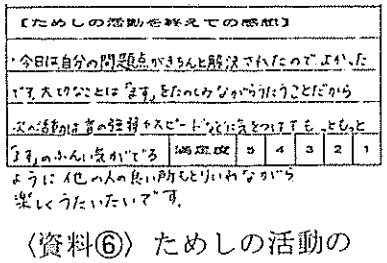
〈資料④〉移調楽譜（ハ長調）



〈資料⑤〉アンサンブル楽譜

第５時～第６時では，ためしの活動を生かし，それぞれが選択した曲を，自己選択した表現媒体，演奏形態で，必要な楽譜・資料を選択・収集しながら表現活動を行っていった。次は，子供が選択した楽曲および表現媒体・演奏形態の一覧である。（学級全員＝３９名）

『ます』	歌唱（日本語１名，ドイツ語１名） リコーダー独奏４名，アンサンブル６名
『野ばら』	鍵盤ハーモ２名，リコーダー独奏１名，アンサンブル２名
『セレナーデ』	日本語歌唱１名，リコーダー１名
『子守歌』	アンサンブル２名
『至福』	リコーダー独奏３名，アンサンブル９名／６名



【ためしの活動を終えての感想】

・今日は自分の問題点がきちんと解決されたのでよかったです。大切なことは「ます」をたのしみながらうたうことだから次の活動は音の強弱やスピードなどに気をつけてもっともっと「ます」のふんい気がでる　満足度　5　4　3　2　1

ようにほかの人の良い所もとりいれながら楽しくうたいたいです。

〈資料⑥〉ためしの活動の感想

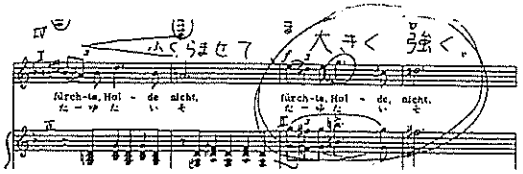
ここでは，ためしの活動と同様に，子供の実態をもとに楽譜・資料などを準備・提供したり，個別的に技能指導を行うなど，自己選択型表現活動への支援を行っていった。

第７時では，それぞれの選択楽曲グループ内で，聴き合い活動を採り入れ，お互いに表現へのアドバイスを行い，表現を練り上げていった。子どもたちは，聴き合い活動でとらえた表現上の問題点をもとに，その部分をどのように表現を工夫して演奏していくかを話し合い，強弱，速度，奏唱法などを工夫しながら表現を練り上げていった。資料⑦は，その曲想表現の工夫を記した楽譜の書き込みである。

〈写真③〉グループ練習の様子

考察②

ここでは，自己選択型表現活動を採り入れたことにより，子供たちは自分なりのこだわりをもって主体的に表現活動に取り組むことができたようである。このことは，子供一人一人が自己追究してきた楽曲をもとに表現媒体・演奏形態を自己選択できたことが音楽活動への意欲につながったものと考える。また，資料⑥の子供の感想にみられるように，ためしの活動により，表現上の課題解決の方法や見通しをもつことができたことや教師の子供の実態に応じた支援が有効にはたらいたことがうかがえる。



〈資料⑦〉書き込み楽譜

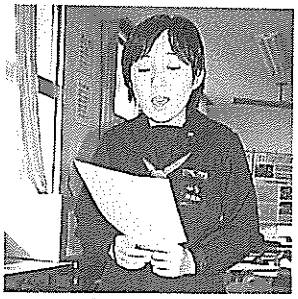
あじわう段階（第８時／課外）

ここでは，これまでの音楽活動の成就感，達成感を味わわせ，自己の音楽的成長を実感させることをねらいとしている。そこで，この段階では，つくりあげてきた表現の発表方法や発表の日時，場所などを自分で企画・実行していくという自己設定型発表活動を行った。子供たちは，資料⑧のような発表計画表を作成し，以下のような発表方法で自分の表現の発表を行っていった。

2月16日 水曜日 3校時	
【発表方法】	①演奏会（録音する）
	②家庭内発表
	（放送できたらする）
【発表会場日】	
日 時	2月25日
場 所	音楽室か子供スタジオ
必要な物など	CD（ばんそう）
【練習計画】	
期 日	内 容
2月23日まで	練習
2月25日まで	最終チェック

〈資料⑧〉発表計画表

【発表方法の実例】
- リサイタル（音楽室）　・録音放送（給食時間に放送）
- 訪問演奏（低学年の教室）　・家庭内発表（各家庭）



〈写真④〉録音の様子

考察③

題材のまとめとして，自己設定型発表活動を設定したことは，資料⑨の子供の題材の学習の感想からもうかがえるように，自分で発表の方法を企画しそれを実現できた喜びとともに，自分なりにシューベルトの歌曲の鑑賞や表現の楽しみ方を身につけることができたという満足感を感得させることができたと考える。

４．全体考察

資料⑨の本題材の子供の感想文からうかがえるように，題材を通して子供たちはシューベルトの歌曲の美しさに触れ，自分なりのこだわりを発揮しながら，主体的に音楽活動に浸ることができたようである。このことは，題材を通して自己追究型鑑賞活動→自己選択型表現活動→自己設定型発表活動といった一連の発展的音楽活動の活動構成が，子供たちの自己の音楽的実態を生かした音楽活動を生み出していくうえで有効にはたらいたものであると考える。このことは，将来，子供たちが自己の音楽の楽しみ方を自己形成していくうえでの一つのステップとなり，音楽とのかかわりをさらに深めていくことにつながっていくと思われる。

【学習全体の感想】

シューベルトは世界の音楽家の中でも，特に自分の気持ちを豊かに表しています。「のばら」「魔王」「幸福」など有名な曲はたくさんありますが私は「セレナーデ」を独唱しようと思いました。恋人への気持ちをすなおに表しているふんいきが，この曲にはありました。練習を通していって音の強弱，スピード工夫することはたくさんありました。CDにあわせて自分なりにうたいました。私は，学習を通してシューベルトのように自分の気持ちを大切にして，これからもうたっていこうと思いました。

満足度 ◎ 4 3 2 1

〈資料⑨〉本題材学習の感想

多様で創造的な表現をともにつくりだす図画工作科学習

図画工作科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために図画工作科に求められていること

子供たちを取り巻く現代社会は，国際化問題，環境問題，情報化の波など，まさに唯一絶対的な答えのない状況である。自分に迫り来る様々な問題に対し，自分らしい価値ある生き方が求められている。主体的，創造的に自分の生き方を創り，心豊かな人間に育ちゆくための図画工作科が担うべき役割は，子供が本来，根源的にもっている表現の欲求を満たしながら，もてる力を主体的，創造的に働かせてつくりだす喜びを味わうことによって，豊かな心をはぐくむとともに心身の調和的な発達を促すことである。子供が自由にものや人にかかわり，一人一人のよさや可能性を生かして自己を実現する喜びは，まさに生きる力であり，生涯にわたって文化を創造していく豊かな人間の育成につながるものである。本校では，豊かな人間像を自分を取り巻く環境と進んでかかわり，自らの資質や能力を総合的に発揮して生き方を創り，「精神的なやさしさ」「知的なかしこさ」「身体的なたくましさ」を調和的にもった人間であるととらえている。そのためには，子供が学ぶ造形対象や学習内容が遠い存在としてあるのではなく，子供の潜在的な求めによってこそ表現活動を意味あるものとする必要がある。また，自己の生き方を方向づけ共生の精神につながる「心情」や，現実への主体的な対応能力としての「知恵」が発揮されてこそ豊かな人間の育成が図られると考える。

○　多様で創造的な表現をともにつくりだす図画工作科学習とは

「多様で創造的な表現」とは，子供自身が造形的な価値に気づく力や，造形表現に向かうための思いや材料活用の価値ある違いのことであり，造形集団内における個々の感じ方や表し方の独創性の総体のことである。豊かな自分づくりのための自己表現の過程と結果をもとに，友達や周りの人と自分の思いを伝え合うことは，自分の内面世界の広がりと個性的な存在を確認していくことにつながる。

「ともにつくりだす」とは，子供がものにかかわる表現の欲求を満たしながら，友達や周りの人との作品鑑賞を通した人間的な交流を行うことで自分の存在を感じ，新しいものや未知なる世界へ向かい内面的な文化性を拡充することであり，自己実現的な生きる力である。また，つくりだす喜びは，友達や身近な社会とのかかわりによってこそ一層満足できるものになる。作品交流や発表の方法としては，学級学年内・校内・校外における作品展などがあげられる。造形集団内において発揮した自分の個性を周りの人と共感的に交流していくことは，これから近未来を生きるための調和的な精神の育成につながるとともに生きる勇気となると考える。

○　多様で創造的な表現をともにつくりだす子供とは

図画工作科部では，子供が次のような「向上的な心情」「知恵」「調和的な心情」を身につけ高めていく姿をめざしている。

○　鑑賞作品や材料をもとに，進んで想像的な内面世界を広げながら，ともにつくりだす喜びを味わうことができる子供　（向上的な心情）
○　材料や表したいことをもとに，想像力や構想力，創造的な技能を発揮し，生活への生かし方を考えながら表現することができる子供　（知恵）
○　友達の表現の意図をとらえ，感じ方を深め合ったり，自分の表現を周りの人に伝え合ったりすることができる子供　（調和的な心情）

表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業製作展の連続展開

図画工作科部　樺島　穣

1．主題の意味

(1) 表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業製作展の連続展開とは

①　「表現や鑑賞とのかかわりを深める」とは

表現と鑑賞は，お互いに一体的に補い合ってこそ創造表現の能力は高まる。根源的な表現欲求を満たすことは，自分を取り巻く環境との切実感のある結び付きによってより強い意欲となる。また，高学年の子供たちは，自分の作品を人に見せることに慎重になる精神的発達の側面があると同時に，自分の内面世界の広がりや深まりを他の人に理解してほしいとする潜在的な求めももっている。

つまり，表現や鑑賞とのかかわりを深めるとは，自分の価値ある成長を求めて創造的に自分の夢を表現するとともに，作品表現の過程と結果の鑑賞を通して，より作品との関係を意味あるものとして近づけ，友達や周りの人と共感的に思いを伝え合い，発表展示によって作品を通した周りの人との交流の輪を広げることである。自分の作品を発表展示し，作品ガイドなどの活動を通して伝え合うことは，子供が，自分を創造的に表現をすることの満足感に止まらず，つくりだした自分の作品とのかかわりを友達や周りの人との関係においてより深めていくことになり，さらに，発表展示を通して新しい人との交流が広がるという効力感まで味わわせることができる。このことにより，人間としてともに感じ，ともに認め合い，ともにつくりだしていくという全人性を育てることができる。

②　「卒業製作展の連続展開」とは

卒業学年の年間を通して，各学期毎に内容の関連化・一体化を図る題材設定を行い，子供の主体的な計画運営によって，各学期毎計３回の卒業製作展を連続的に開くことである。

今までの作品発表は，教師の意図性や行事としての制限性があり，子供自身が計画や運営に関して創意工夫できる幅が少ない面も見受けられた。また，卒業製作も，卒業時に共同製作として，その部分を分担したり，個人の趣味的な作品表現で止まったりすることも多く見受けられてきた。

そこで，この各学期毎計３回の卒業製作展の連続展開によって，既習の表現経験を総合的に生かしながら創造表現の能力を高めることになり，卒業製作展を計画運営していくための自主運営力も育てることができる。さらに，他学年，保護者，教師などの周りの人たちとも交流鑑賞を行うことによって，造形活動を通したより新しい交流を広げていくことにもなり，自分の生活をより一層楽しく豊かにしていくことにつながる。

(2) 本研究で期待する子供の姿

本研究では，表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業製作展の連続展開を図ることで，多様で創造的な表現をともにつくりだしていく子供の表現過程の姿として，次のように期待している。

○　卒業製作展や生活への生かし方を考えながら進んで鑑賞作品や材料にかかわろうとしたり，周りの人とともにつくりだす喜びを味わおうとしたりしている子供　（生活吟味）

○　卒業製作展や生活への生かし方を目的とし，身近な材料や表したいことをもとに，自分のもてる想像力や構想力，創造的な技能などを発揮しつつ，多様で創造的な表現をともにつくりだそうとしている子供　（自己追究・内容創造）

○　卒業製作展によってかかわりを深めた創造表現の思いを，友達や周りの人に伝え合ったりしながらお互いの内面世界を交流し，生活をより豊かにしようとしている子供　（生活更新）

２．学習の具体的構想

(1) 表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業製作展の題材開発

多様な想像性を誘発できる題材設定を，総合的な創造表現の能力を育成する上から設定する。造形活動の内容と方法を，造形遊び，絵や立体，工作の内容分野を一層関連付けたり，一体的に扱ったりして，平面的表現，半立体的表現，立体的表現へと幅広くとらえる題材を卒業学年の１年間を見通して各学期毎１題材ずつ開発する。

(2) 卒業製作展の連続展開の年間題材計画

１学期には，平面的・半立体的・立体的表現を中心に，自由な彩色表現なども可能なベニヤ材をもとにした多様で創造的な表現ができるようにし，２学期以降の内容的な発展へつながる題材設定を行う。２学期には，自然材や人工材などの材料操作をもとに，立体的表現や共同的な空間表現へと発展させる。３学期には，１学期の彩色表現を版画や描画などをもとにした自由な表現へ発展させるとともに，１・２学期の分割・再構成をもとにした内容を平面的表現に生かした題材を設定する。

卒業製作展の名称と時期	題材の関連的・一体的内容と新指導要領の内容項目
ベニヤドリーム展 （１学期）	ベニヤ材をもとにした分割・再構成による平面的・半立体的・立体的表現［A(1)ア，(2)アイ，B(1)アイ］
メッセージオブジェ展 （２学期）	身近な自然材や人工材をもとにした材料操作による立体的表現・共同的な空間表現［A(1)アイ，(2)アイ，B(1)アイ］
パッサージュアート展 （３学期）	版画，描画をもとにした自由な線と面の分割・再構成による平面的表現［A(1)ア，(2)アイ，B(1)アイ］

(3) 発表展示による交流鑑賞や作品を生活へ生かすことのできる活動設定

卒業学年の子供たちが，美術館の鑑賞体験などをもとに，卒業製作展を自主的に計画運営することができるようにする。作品鑑賞を通して，多様な表現のよさとその違いを実際に伝え合い，共感的な鑑賞力を育成するとともに，人間的な交流の広がりが期待できる交流鑑賞を工夫する。

また，子供自身が，展示場所の選定・展示内容の打ち合わせ，ポスターの作製などの情報宣伝活動や作品の搬出入の計画と実施，鑑賞者への返信計画など，発表展示を行う充実感を味わうことができる活動を設定する。さらに，発表展示した作品を自分たちの生活に生かす計画も立てさせ，より生活を楽しく豊かにできるように促す。

(4) 卒業製作展の連続展開による「向上的な心情」「知恵」「調和的な心情」の高まりについて

各学期毎３回の卒業製作展の連続展開により，「向上的な心情」「知恵」「調和的な心情」の高まりを教師が積極的に見守るとともに，子供に累積的，肯定的な自己評価を促すようにする。

また，卒業製作展へ向けて，多様で創造的な表現をともにつくりだそうとする自分の内面世界の現時点での自覚と自分なりの生活への生かし方（応え）によって生活をより楽しく豊かにできるように促すようにする。

○　卒業製作展へ向けて鑑賞作品や材料をもとに，進んで想像的な内面世界を広げながら平面的・立体的につくりだす喜び(関心，意欲，態度)を味わおうとする心情。　（向上的な心情）

○　材料や表したいことをもとに，想像力や構想力，創造的な技能を発揮し(表現の資質や能力)卒業製作展や生活への生かし方を考えながら平面的・立体的に表現する能力。　（知恵）

○　友達の表現の意図や特徴をとらえ，感じ方を深め合ったり(鑑賞の資質や能力)，卒業製作展へ向けて自分の平面的・立体的表現を友達，他学年，保護者などに伝え合ったりする心情。　（調和的な心情）

3．指導の実際と考察

(1) 年間題材名　　第６学年　卒業製作展へ向けて

ベニヤドリーム展(1学期)・メッセージオブジェ展(2学期)・パッサージュアート展(3学期)

(2) 本年間題材の考え方

本年間題材は，卒業学年の各学期毎に内容の関連化・一体化を図る題材設定を行い，表現や鑑賞とのかかわりを深める卒業製作展を連続展開することで，多様で創造的な表現をともにつくりだすことをねらいとしている。

具体的には，各学期毎の卒業製作展の連続展開を通して，①　卒業製作展へ向けて鑑賞作品や材料をもとに，進んで想像的な内面世界を広げながら平面的・立体的につくりだす喜び（関心，意欲，態度）を味わおうとすること〔向上的な心情〕，②材料や表したいことをもとに，想像力や構想力，創造的な技能など（表現の資質や能力）とともに，卒業製作展や生活への生かし方を考えながら平面的・立体的に表現する能力を発揮すること〔知恵〕，③友達の表現の意図や特徴をとらえ，感じ方を深め合ったり（鑑賞の資質や能力），卒業製作展へ向けて自分の平面的・立体的表現を友達，他学年，保護者などに伝え合ったりすること〔調和的な心情〕，などを高めていくことである。各学期毎の卒業製作展へ向けての題材計画と主な支援は，次の通りである。

１学期には，福岡市美術館での鑑賞体験をもとに，年間を通した卒業製作展への内容と方法について見通しをもたせる。自由な彩色表現も可能なベニヤ材をもとにした分割・再構成による平面的・半立体的・立体的表現をめざすベニヤドリーム展を計画運営できるようにする。また，製作過程や結果において，友達や他学年との共感的な鑑賞ができる作品ガイドなどの交流鑑賞の場を工夫する。

２学期には，身近な自然材や人工材などの材料操作をもとにした分割・再構成による立体的表現や共同的な空間表現へと発展させるメッセージオブジェ展を計画運営できるようにする。また，友達や他学年とともに保護者などとも共感的な鑑賞ができる交流鑑賞を工夫する。

３学期には，１学期のベニヤドリームで表現した平面的な彩色表現を版画や描画などに発展させるとともに，１・２学期の分割・再構成の内容を自由な線と面による平面的表現へと生かすパッサージュアート展を計画運営できるようにする。また，各学期毎３回の卒業製作展を振り返り，友達や周りの人たちとの人間的な交流の広がりや多様な表現をともにつくりだす喜びを味わうことができるようにする。

このように，各学期毎の卒業製作展の連続展開を行うことは，表現や鑑賞とのかかわりを自分のためにより一層深めていくことになり，向上的な心情，知恵，調和的な心情の高まり期待することができる。さらに，多様で創造的な表現をともにつくりだそうとする自分の内面世界の現時点での自覚と自分なりの生活への生かし方〔応え〕ができる上で意義があると考える。

(3) 年間題材目標

①　材料や表したいことをもとに，想像力や構想力，創造的な技能など（表現の資質や能力）とともに，卒業製作展や生活への生かし方を考えながら平面的・立体的に表現する能力を発揮することができる〔知恵〕。

②　卒業製作展へ向けて鑑賞作品や材料をもとに，進んで想像的な内面世界を広げながら平面的・立体的につくりだす喜び（関心、意欲、態度）を味わうことができる〔向上的な心情〕とともに，友達の表現の意図や特徴をとらえ，感じ方を深め合ったり（鑑賞の資質や能力），卒業製作展へ向けて自分の平面的・立体的表現を友達，他学年，保護者などに伝え合ったりすることができる〔調和的な心情〕。

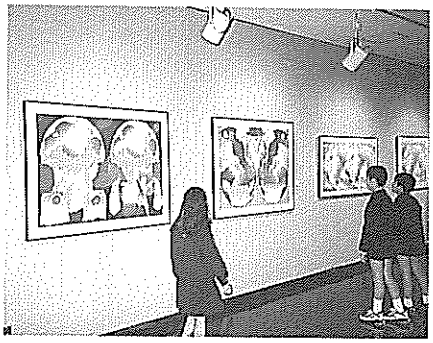
(4) 計　画（１学期１０時間＋課外、２学期１０時間＋課外、３学期８時間＋課外）

名称	学習活動と内容	主な支援	配時
ベニヤドリーム展	１．鑑賞体験をもとに卒業製作展の見通しについて話し合う。 (1) 福岡市美術館の美術作品を鑑賞する。 ○ 美術作品の表現技法や作家の思いを感じ取ること ○ 鑑賞のための展示方法やガイドについて取材すること (2) 卒業製作展の年間の見通しについて話し合う。 ○ 各学期毎に行う題材内容や計画運営の仕方について ２．ベニヤドリーム展へ向けて，表現と鑑賞を行う。 (1) ベニヤの分割・再構成をもとに，創造的な表現をする。 ○ マーブリングから想像的な形を分割し彩色すること ○ 分割したベニヤを平面的・立体的に再構成すること ○ 形や色から想像的な夢の世界を物語化すること (2) ベニヤドリーム展を行い，鑑賞し合う。 ○ 友達、他学年などと交流鑑賞をすること ○ 作品ガイドを行い，想像的な世界を伝え合うこと	○ 福岡市美術館での鑑賞体験の場の設定 ○ 美術館に作品説明の鑑賞ガイドの依頼 ○ 年間題材計画やテーマについての助言 ○ マーブリングを生かした分割・再構成の活動提案 ○ ベニヤの平面的・立体的表現のための参考資料の提示 ○ 卒業製作展の計画運営についての助言	10 ② ① ⑥ ① 課外
メッセージオブジェ展	３．メッセージオブジェ展へ向けて，表現と鑑賞を行う。 (1) 自然材や人工材の操作をもとに，創造的な表現をする。 ○ 自然材や人工材の操作から立体的な形を発想すること ○ 試作をもとに，立体的に再構成すること ○ 作品を置く，つるすなどの生かし方を考えること ○ 友達の作品と共同的な空間表現をすること ○ 共同的な空間表現による新たな構成に気づくこと (2) メッセージオブジェ展を行い，鑑賞し合う。 ○ 友達，他学年，保護者などと交流鑑賞をすること ○ 材料特性から想像的な物語を作品ガイドすること ○ 交流を学校生活に生かし卒業への思いを高めること	○ 身近な自然材や人工材の収集と吟味 ○ 視点変更や試作と本製作の関係を示す資料提示 ○ 共同的な空間表現による環境構成の活動提案 ○ 作品ガイドによる他学年や保護者との交流鑑賞の促し	10 ⑧ ② 課外
パッサージュアート展	４．パッサージュアート展へ向けて，表現と鑑賞を行う。 (1) 版画や描画をもとに，創造的な表現をする。 ○ 分割版画の多色刷から想像的な色面を発想すること ○ 絵の具やカラーペンなどで描画表現をすること ○ 自由な線と面による想像的な再表現をすること (2) パッサージュアート展を行い，鑑賞し合う。 ○ 友達，他学年，保護者などと交流鑑賞をすること ○ 自由な線と面による想像的な世界をガイドすること ５．卒業製作展の作品や経験を生活に生かす。 ○ 作品を家庭に飾り，生活を楽しくすること ○ 作品をホームページに紹介し，交流を広げること ○ 美術展などを鑑賞し，美術に個性的にかかわること	○ 版画や描画をもとに自由な線と面の表現を促す活動提案 ○ パッサージュアートの参考資料の提示 ○ 作品ガイドによる他学年や保護者との交流の促し ○ 作品を生活に生かすための助言 ○ 鑑賞活動としての美術展などの紹介	8 ⑦ ① 課外 課外

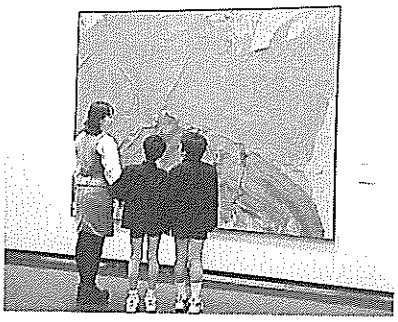
(5) 指導の実際

① ベニヤドリーム展(1学期) (10時間+課外)

本題材のねらいは，福岡市美術館での鑑賞体験をもとに，卒業製作展への年間の見通しをもち，ベニヤの分割・再構成を通して，創造的な表現をするとともに，ベニヤドリーム展を計画運営し，友達や他学年と鑑賞し合うことができるようにすることである。



【写真①市美術館での鑑賞】



【写真②鑑賞ガイドの説明】

ぼくは，見る人によっていろいろな感じがする表し方が心に残りました。ガイドの人に作家の考えや工夫を説明してもらい作品に親しみを感じました。自分も心の世界を作品を通して周りの人達へ伝えてみたいです。

【資料①N児の鑑賞体験の感想】

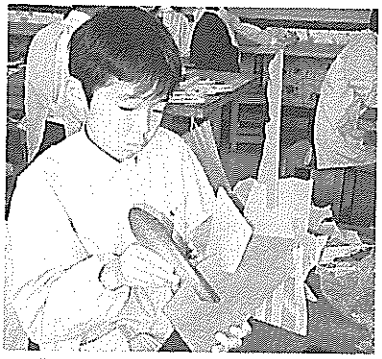
子供たちは，美術館の美術作品から，多様な表現方法や作家の題名化の工夫を感じ取っていった。また，展示の方法の工夫や鑑賞ガイドによる作家の思いや意図に触れる体験もし，自分たちの卒業製作展へも生かしていきたいと期待感を高めていった。

【写真③形から発想するK児】

【写真④平面的な再構成の試行】

【写真⑤彩色の再表現の工夫】

マーブリングから偶然できた形をベニヤに写し，糸のこぎりで切ることそのものを楽しみながら分割していった。次に，平面的・立体的な再構成を試しながら行い，絵の具，スプレーなどで再表現を行いながら想像的な題名を物語にし，他学年と自分たちの夢の世界を交流していった。



【写真⑥立体的な再構成】

【写真⑦他学年との交流鑑賞】

ルルラ夢の国へ

「お花がいっぱいあったらいいな」と私が夢の国で叫んでいると，辺り一面にきれいなお花が咲き始めた。「ようこそみんなおいでよ。私が願っているルルラ夢の国へ。」

【資料②T児の夢の物語】

考察①

マーブリングの形を生かしてベニヤを分割する活動を提案したことで，偶然に生まれた形や色から多様に発想し，平面的・立体的に創造的な技能を発揮しながらベニヤを再構成することができた（知恵)。また，ベニヤドリーム展へ向けて，夢のある物語を考えながらつくりだす喜びを味わい（向上的な心情)，他学年との交流鑑賞により自分の思いを伝え合うことができた（調和的な心情)。

② メッセージオブジェ展（２学期）（１０時間＋課外）

本題材のねらいは，自然材や人工材の操作をもとに，創造的な表現をするとともに，メッセージオブジェ展を計画運営し，友達，他学年，保護者と鑑賞し合うことができるようにすることである。

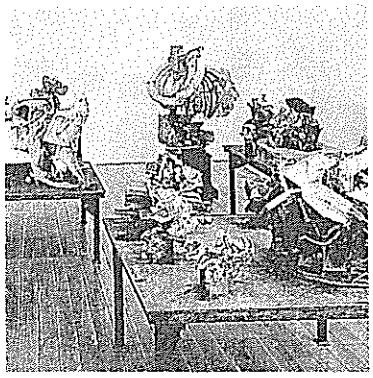
【資料③視点変更の資料】

【写真⑧材料操作からの発想】

透明材料を複雑に切ることで「光のアスレチック」になり，ホースを組み合わせると「生きる命の源」になりました。次に伸びたスチロールから「透明タワー」になり，最後は，「天へのぼる小さな島の伝説」という題名を思いついていきました。

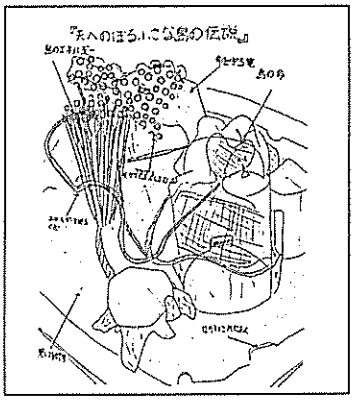
【資料④Ｕ児の発想の広がり】

デュシャンの「泉」（資料②）から，子供たちは，材料の可変性，柔軟性，剛直性，透過性などを生かして操作を繰り返しながら多様な発想を広げ，できた想像的な形の題名化を楽しんでいった。



【資料⑤試作と製作の資料】

【写真⑨試作を生かした製作】

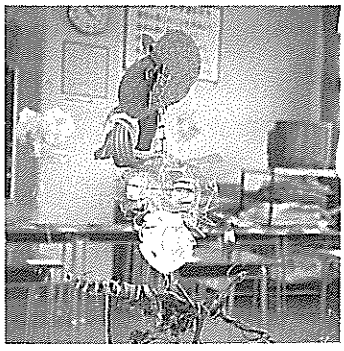


【資料⑥Ｕ児の製作ノート】

ステラの試作と製作のオブジェ（資料⑤）を参考に，材料を多様に操作し立体的な試作を行い，製作への見通しをより確かにしながら自分のメッセージをオブジェとしてつくりだしていった。

【写真⑩共同的な空間表現】

【写真⑪保護者との交流鑑賞】



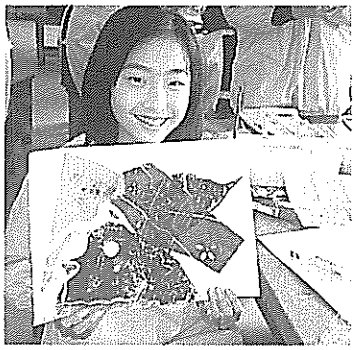
【写真⑫Ｈ児の天空の時計台】

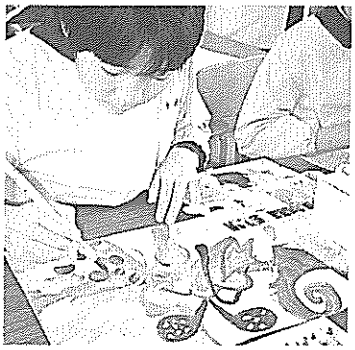
考察②

視点変更や試作拡大の資料をもとに，自然材や人工材の操作から多様な発想や試作を行わせたことにより，表現経験を総合的に生かして創造的な技能を発揮し，立体的な表現を工夫すること（知恵）ができた。また，共同的な空間表現を友達とともにつくりだす喜びを味わい（向上的な心情），他学年や保護者との交流鑑賞によって，オブジェ作品を通した自分たちのメッセージを伝え合う（調和的な心情）ことができたと考える。他学年との交流によって学校生活に新たな話題が生じ，卒業への自覚につながっていった。また，家庭でも保護者と６年間の成長について振り返る機会となった。

③　パッサージュアート展（３学期）　（８時間＋課外）

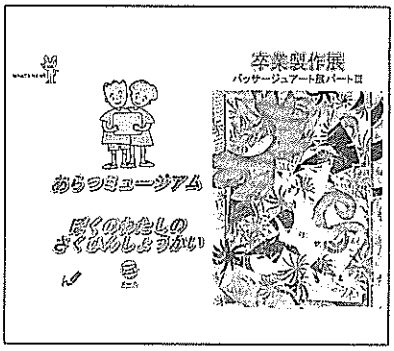
本題材のねらいは，版画や描画をもとに，創造的な表現をするとともに，パッサージュアート展を計画運営し，友達，他学年，保護者と鑑賞し合うことができるようにすることである。


【写真⑬版画による表現】

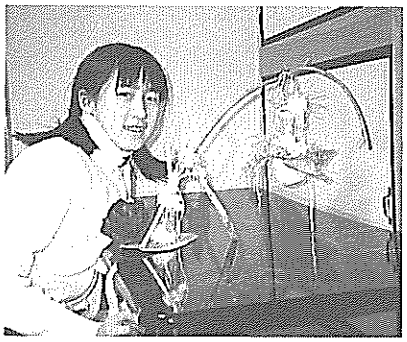

【写真⑭描画による表現】

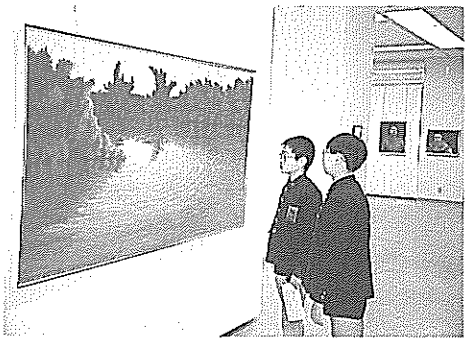
【写真⑮自由な線と面の表現】

子供たちは，これまでの表現経験を生かして分割版画の多色刷から想像的な色面を発想したり，絵の具などで描画表現をしたりしながら自由な線と面による平面的表現をつくりだしていった。



【資料⑦ホームページの活用】


【写真⑯作品を家に飾るＫ児】


【写真⑰大学の卒業製作展の鑑賞】

卒業製作展の作品を家に飾って生活を楽しくしたり，大学生の卒業製作展を鑑賞したり，ホームページ「あらつミュージアム」を活用したりするなど表現や鑑賞とのかかわりをより深めていった。

考察③

版画や描画をもとに，自由な線と面による平面的表現の可能性を創造的な技能を発揮して広げることができた（知恵）。また，想像的な世界をつくりだす喜び（向上的な心情）とともに，様々な人との継続的な交流鑑賞によって，パッサージュアートの楽しさを伝え合い（調和的な心情），３回の卒業製作展を通した表現や鑑賞とのかかわりをより個性的に深めることができたと考える。

４．全体考察

卒業学年の各学期毎に内容の関連化・一体化を図った題材によって，表現や鑑賞とのかかわりをより深める卒業製作展を連続的に展開したことは，多様で創造的な表現をともにつくりだすことにつながったと考える。材料をもとに，創造的な技能を発揮し（知恵），次への卒業製作展への期待感を高め（向上的な心情），様々な人との内面世界を交流鑑賞する喜び（調和的な心情）が，３回の卒業製作展の中で高まっていく姿が見られた（資料⑧）。

今後の課題として，本題材と連動した年間題材計画の再検討と知恵と心情が育ちゆく継続的な評価活動の在り方を明らかにすることなどがあげられる。

卒業製作展を振り返って

私は，３回の卒業製作展で，材料を切って組み合わせるうちに，新しい表し方や題名に気づいていきました。他の学年やお家の人に作品をほめてもらうと自信がついて次が楽しみになっていきました。作品ガイドをしたことで仲良くなった人もいます。３つの作品を家に飾って小学生の思い出として，みんなを明るく楽しい気持ちにしてあげたいです。

【資料⑧卒業製作展のＡ児の感想】

豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習

家庭科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために家庭科に求められること

現在，家庭における生活は，科学技術の進歩や社会の変化により，豊富な物資に囲まれ，家事も簡便になっている。このような生活環境の中では，子供たちは具体的な活動や体験を通して生活に必要な技能を身につける機会も少なくなっている。また，日常生活の中で人と人とのふれあいや人のために行動する場も減っており，人と人との関係を大切にしようとする感性も稀薄になってきているといわれている。このような子供たちを取り巻く状況を受けて，新指導要領では改善の方向として，実践的・体験的な活動を通して家庭生活への関心を高めること，家庭生活に必要な基礎的な知識と技能を身につけること，自分と家族のかかわりを考えて家庭生活をよりよくしようとする態度を育てることがあげられた。つまり，これからの家庭科学習では，家族の中の自分を自覚させ，家族とかかわるなかで生活的な自立の基礎となる資質や能力を育成しながら，楽しくよりよい生活を工夫することができる実践的な態度を育むことが求められている。

○　豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習とは

ここで対象としている家庭生活とは，子供を取り巻く一番身近な集団の単位である家族が日常の生活を営む場であり，健康でかつ充実した生活を営む上での家庭の仕事，生活時間，ものの購入などと，それらにかかわる食べること（食生活）や着ること（衣生活），住まうこと（住生活）に関することを指している。豊かさとは，物質的（経済的，社会的）に満たされることだけではなく，心が満たされることである。家庭生活において子供たちの心が満たされるのは，①家族が自分のためにしてくれていることを実感したとき，②自分が自分や家族のためになすべきことを理解できたとき，③自分が家族のために何かできるようになったとき，④その自分がしたことに対して家族が喜んでくれたときである。つまり，家族とのかかわりの中でこそ子供たちは心の豊かさを実感するのである。このような豊かさを求め，家庭生活をつくりだすとは，家庭生活を営む上での基礎的・基本的技能を獲得し，かつ活用することであり，家族との温かい人間関係を築き，家族の一員としての生活観や家庭観をもつことであり，さらに家族のために家庭生活の充実・向上を図ろうとする心情的な側面をもつことである。このような子供が育つためにめざす家庭科学習は，次の２点を大切にしなければならない。

・　基礎的・基本的知識や技能をめあてをもって学びとるために，個々の子供の生活の中から実感的にとらえた生活課題を学習すること
・　獲得する知識・技能が他の生活場面で活用できるものとなるために，家族などの人とのかかわりを積極的に図った実践的・体験的活動を大切にしていくこと

○　豊かな家庭生活をつくりだす子供とは

具体的には，以下のような知恵や心情を発揮する子供像として考える。

○　食べること，着ること，住まうことなどに関する実習や観察，実験などを通して，自分の生活課題の解決に必要な基礎的・基本的な知識や技能を獲得し，それを活用できる子供　（知恵）
○　家庭生活をおくる上で，自分の家庭の見方，考え方，行い方のよさや自分の個性を生かしながら主体的に生活しようとする子供　（向上的心情）
○　家族の一員としての自覚をもって，家族や周りの人々と協力してよりよい生活をしようとする子供　（調和的心情）

食生活の創り手としてかかわりを見出す学習の展開

家庭科部　篠原裕子

１．主題の意味

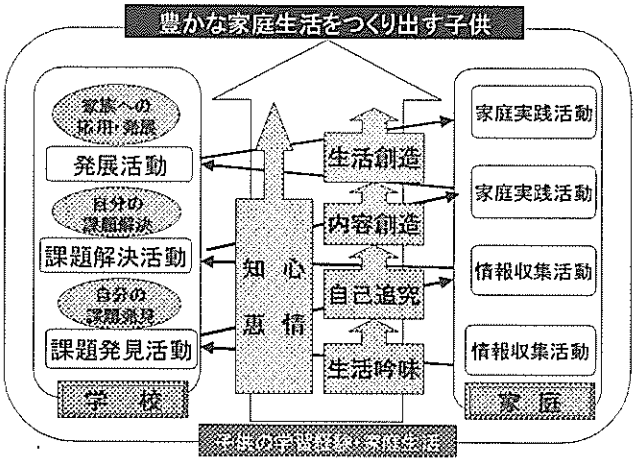
(1) 食生活の創り手としてかかわりを見出すとは

食生活とは，食べることに関する自分や家族の家庭生活における営みである。今日，社会的課題となっている孤食，個食の増加は，家族関係の希薄さを生み，子供たちの食生活の自立の妨げになっている。豊かな家庭生活をつくりだす子供をめざす本研究においては，食生活においても，自分も家族の一員であることを自覚し，これまで家族が食生活を工夫して創ってきていたことを実感し，自分も家族の食生活の豊かさのために工夫し行動する主体者として自立することをめざす。そこで，食生活の創り手としてかかわりを見出すとは，①自分の食生活を見つめ，課題を発見する，②自分の食生活の改善のために必要となる知識・技能を獲得し，活用する，③家族の食生活にも獲得した知識や技能を応用し，活用するような家庭科学習の展開である。この過程において，家族とかかわりながら家族が積み上げてきた工夫や思いを，自分の課題解決のために主体的に活用することで自分の知恵とすることができる。このことは，食生活を創ることを通して豊かな家庭生活をつくる知恵と調和的，向上的心情を備えた子供を育むことにつながる。

(2) 食生活の創り手としてかかわりを見出す学習の展開とは

食生活の創り手としてかかわりを見出すとは，具体的には次のような３段階の実践的・体験的活動である。①自分の食生活を見つめ課題を発見する活動（家庭からの情報収集と技能の不十分さや他者とのこだわりのちがいなど課題を発見するための調理実習）②自分の課題を解決し，知識や技能を獲得・活用する活動（家庭からの工夫の情報収集と課題を解決するための調理実習）③家族のために獲得した知恵を応用・発展する活動（家族の評価をもらい，自己有用感や新たな課題をもつ家庭実践活動と発展の調理実習）。この学習は，出発点において個々の学習経験や家庭生活から課題を見いだすことを大切にしている。そして，この３段階の活動が，学校だけでなく家庭を結びながらスパイラルに展開する。これは，子供自身の食生活を改善していくことにつながり，その過程で必然的に基礎的な知識や技能を身につけ，かつ自分の生活に合わせて実用的なものになる（知恵）。また，家族の食生活に関する思いや工夫してきたことを情報収集したり，学校での学習の成果を評価していただくことで，さらに工夫して食生活をよりよくしようとする向上的心情や，家族とのかかわりが深まり，家族の一員としての調和的心情が育まれていく。

【食生活の創り手としてかかわりを見出す学習の展開】



(3) 本研究で期待する子供の姿

○	「○○を作りたい」という自分の食生活における課題意識をもつ子供	（生活吟味）
○	食に関する自分の課題を家族の工夫を取り入れながら解決しようとする子供	（自己追究）
○	よりよい食生活をめざして自分に必要とする新たな知識や技能を活用する子供	（内容創造）
○	進んで応用・発展しながら家庭実践を行い，新しい食生活を創りだしている子供	（生活更新）

2．学習の具体的構想

(1) 食生活の創り手としてかかわりを見出すことができる教材化

① 食生活の創り手としてかかわりを見出す観点

- 自分や家族の健康を維持・増進しようという観点（**健康**）
- 家事を合理的に，効率的に運営しようという観点（**効率**）
- 消費者の立場から経済性・安全性を大切にしようという観点（**消費者**）
- 自他の心の安定をはかったり，互いの人間関係を円滑に運ぼうという観点（**人間関係**）
- 家庭や地域に受け継がれてきた伝統や文化を大切にしようという観点（**伝統・文化**）

② 題材の内容条件

このような観点がでてくるように，下記のような題材の内容条件を考える。

○ 子供自身や家族にとって食材または調理品，調理方法が身近で，かつ子供が日常的に調理実践可能なもの
○ 食材及び調理品の種類が多様で，応用・発展ができ，家族の好みや価値観を反映できるもの
○ 現在，日本の食文化として位置付いており，かつ今後も文化として受け継がれていくと予想されるもの

(2) 食生活にかかわる題材配列の考え方

○ ２年間を通して１食分の食事が整えられるように食材数，調理過程，皿数などを段階的に配列すること。（１品→複数品，１技能→複数技能，１皿→複数皿）

○ 加熱操作としての「ゆでる」「いためる」が，材料を変えたり（切る技能の発展），調理法を組み合わせたりなどして繰り返し学習できるようにする。

〔題材配列及び教材の例〕

	5 年 生（単品の食材または調理品）			6 年 生（複数の調理技能または調理品）		
内容	焼く	ゆでる（水から，お湯から）	いためる	ゆでていためる，焼く	２品作る	１食分作る
教材	・ホットケーキ ・お好み焼き	・ゆで卵と温野菜サラダ，スープ	・焼きめし ・焼きそば	・めん料理 ・グラタン	・ごはんとみそ汁	・お弁当 ・会食

(3) 活動構成の工夫について

段階	つかむ段階	さぐる段階		つくる段階
ねらい	自分の食生活の課題をつかむ	食生活に関する自分の課題を解決する		家族への応用・発展をして食生活の創り手となる
家庭で	**情報収集活動** ・１週間で食べたもの調べ（調理品，食材，購入の観点，調理法，食事場面の様子など） ・家族の思い，願いなど 観察，聞き取り	**情報収集活動** ・自分の課題解決のために家族が日常食に込めた思い，願い，工夫 観察，聞き取り	**家庭実践活動** ・自分が獲得した知恵について実践し，家族からの評価をいただくこと 調理実践	**家庭実践活動** ・家族のために発展・継続実践をして，家族からの評価をいただくこと 調理実践
学校で	**課題発見活動** ・買い物，試食，実習，食事場面の再現などで家庭生活を比較すること	**課題解決活動** ・資料，家族，Ｇ・Ｔからの情報収集と，それを確かめるために実習すること		**発展活動** ・家族のために，我が家流になどの目的を変えて実習すること
	※ 学習前の食生活実態調査をもとに導入すること ※ 各自の食生活を想起できる具体物や具体場面の設定した課題発見調理実習の場作り	※ Ｇ・Ｔからの情報収集活動を促す人材バンクづくり ※ 工夫を確かめたり，課題を解決する実験・調理実習を含む個 別追究の場づくり		※ 調理実習中の交流による相互評価ができるグループ作り ※ 家庭実践継続報告の場づくり

３．指導の実際と考察

(1) 題材名　　第５学年　いためる料理で１食のレパートリーを増やそう！

(2) 本題材の考え方

本題材は，１食を単品で整えることができる調理に目を向け，野菜・魚や肉の加工品・ごはんやめんを合わせていためる料理をとりあげる。家庭生活の中で個人としての生活的な自立の基礎を培うことを目指している新指導要領の目標に沿って，５年生最終段階で１食を整える力を付けることは大切なことである。この追究で次のような基礎的な知識や技能を学習することができる。

① 熱や力のもとになるごはんの栄養（炭水化物や脂肪）に，体の調子を整える野菜や体をつくるもとになる魚や肉の加工品などを加えて栄養バランスのよい１食をつくることができる。
② 材料の分量，切り方，火加減などにこつがあることを理解して，ごはんや他の食材を一緒に強火で手早くいためる加熱調理ができる。

栄養で見ると，淡色野菜に含まれているビタミンは熱に弱いといわれるが，いためる調理法では，２３０度ほどの温度で２分３０秒程度加熱するため，８０％が残存する。また，緑黄色野菜の含まれるカロチンは油に溶けやすい性質をもっているので，油と一緒に調理することが好ましいとされ，よく使われるにんじんやピーマンをとることは非常に効率がよいこととなる。したがって，組み合わせる食材によって栄養も手軽にとれる健康食となる。そして，栄養を損なわずにおいしく作るための加熱技能が必要になるのである。この学習で育まれる知恵と心情を次のように考える。

（知恵）栄養バランスから組み合わせられる食材や調味料は，家族の好みや健康，経済性や効率などを考慮し，家庭によって異なること，その作り方も栄養を損なわないように且つ味や食感を重視するわが家流調理をして１食を整えることができるようになること
（調和的心情）家庭の食文化を意識し，日常実践してくれている家族への思い
（向上的心情）家庭の工夫を活用したり自分なりに工夫したりして日常食の在り方を考えること

本学級の子供たちは，１食を整えた経験を多くもっているが，既製のものに頼ったり，栄養を考えて組み合わせたりするまでには至っていない。また，活用できる加熱技能も「ゆでる，焼く」である。

本題材の指導にあたっては、現在まで自分が整えてきた１食を見つめることから問題点気づかせること，栄養面の知識やいためる技能を家庭からの情報収集や学校での体験的・実践的活動をスパイラルに行うことによって獲得し，自分流のいためる料理をつくり食生活にかかわっていくことができるようにしたい。そこで，まず「つかむ」段階では，自分の１食を作りたいという目的意識をもたせる。そのために，**家族からの聞き取り調査**や，食べた経験を想起したり，栄養表と照らし合わせたりする。そして，実際に作ってみて（**課題発見実習**），うまくいかないことから追究課題を決め，調理技能に関する課題や栄養を考えて組み合わせる食材について，情報収集の観点を見出す。次に，「さぐる」段階では，見出した課題を解決するために**家族からの情報収集**や栄養面で専門家の方をお呼びして栄養バランスを考えたレシピを作り，実験実習（**課題解決実習**）で，いためる技能を習得する。そして，獲得した知識や技能をもとに**家庭実践**を行うようにする。さらに，「つくる」段階では，この家庭実践の結果をもち寄らせ，家族の思いや，経済性，効率などの新たな課題を追究していく。この際，お母さんやおばあちゃんの思いを話していただき，日常食を整えてくださっている方の知恵を実感させ，各家庭からもち寄った食材をその場で選択し，再度実習を行う。（**発展実習**）。このことで，獲得した知識を日常生活に生かす技能の習得ができるようにしたい。また，この後**家庭実践**を行うことで，自己有用感や達成感を味わったり，継続していきたいという意欲をもたせることができると考える。このことは，自ら食生活に参画していこうとする態度の育成にとって価値がある。

(3) 目　標

① いためる調理について栄養を考えた食材の選び方，加熱調理法（いためる）などの基礎的な知識や技能を身に付けるとともに，さらに自分の家庭にあう工夫（経済，好みなど）を考えて調理をすることができる（知恵）。　〔新指（4）（5）ウ〕

② 1食を整えるいためる調理に関して家族の好みやこだわりなどを調査したり，調理する活動を通して，日常食にこめられた願いに関心をもつことができる（調和的心情）とともに，自分なりのかかわりを見出して，実践しようすることができる（向上的心情）。

(4) 計　画（10時間＋課外）

段階	活　動　と　内　容	主　な　手　だ　て	配時
つかむ	1．1食を整えることの問題を話し合う。 (1)　1食を自分で整えた経験について話し合う。 ○　1食を整えることについて関心をもち，いためる料理をつくることへの意欲をもつこと (2)　いためる料理について想起しレシピを作る。 ○　家庭の食材や味付けにを気づかせること (3)　試し作りをして，追究課題を話し合う。 ○　課題を整理すること ・共通課題：いためる技能の不十分さ，栄養 ・個別の課題：家族の好み，効率，経済性 1食を自分で整えたい～いためる1品料理を作ることができるようになろう～	**情報収集活動** ※　自分がこれまで整えた1食を事前に調べさせること ※　家庭からの取材をもとに食材と作り方を整理すること **課題発見実習（個人実習）** ※　学習プリントに火力，加熱時間を記録させ，火力の課題に気づかせること	4 ① ② ①
さぐる	2．共通課題を探る。 (1)　1品の栄養を話し合い，レシピを作る。 ○　栄養面でレシピを見直し，バランスのよい具を整えることができること ・炭水化物（ごはん，麺），脂肪（油）に加えて緑黄色野菜とタンパク質（魚や肉の加工品と卵など）の摂取をすること (2)　いため方について火力・油の量と栄養の関連を実験実習で確かめる。 ○　いためる技能（強火で短時間に）が食感，見た目，栄養に影響することを体感できること (3)　家庭実践をする。 ○　技能の定着と達成感を味わうとともに，家庭実践をする問題点に気づくこと ・家に材料がなくて，わざわざ買ったこと ・材料がなく，家にあるものでつくったこと	**情報収集活動** ※　家庭での選び方の聞き取り **課題解決実習（グループ実習）** ※　栄養士の先生のアドバイスを受けながらグループでレシピをつくり栄養バランス表で3つに分類させること ※　火力の差による結果を予想して比較実習をさせること ※　カロチン溶出実験で油いためのよさを提示すること **家庭実践活動** ※　食生活への参加をしたことへの賞賛，家族の好み，経済性を考えた食材の組み合わせについての感想をもらうこと	3 ① ② 課外
つくる	3．家庭実践を振り返り，さらに個別の課題をさぐる。 (1)　個別の課題や家庭実践の結果を話し合い，これからの追究課題をつかむ。 ○　いためもののもつ家にあるもので手軽にできることのよさ（経済性）に気づき，家にあるものを見つめて作りたいという課題をもつこと (2)　わが家流いためる料理を作り，交流会をする。 ○　いためる技能の上達と多様な食材をその場に応じて用いることができるよさを実感すること (3)　家庭実践を行い，紹介し合う。 ○　食生活への参加による自己有用感の感受と今後の継続実践への意欲の高まり	※　家族からの感想をもとに問題点に気づかせること ※　節約調理を長年実践してある中原さんから，残り物や保存食の利用についての話を聞くこと **発展実習（個人実習）** ※　各自の家にあるものをもち寄らせ，そこから具の組み合わせを考えさせること **家庭実践活動** ※　家庭実践を写真や家族からのメッセージを添えること	3 ① ② 課外

(5) 指導の実際

① いためる料理の栄養や調理法について課題をつかむ段階（１～４／10時間）

ここでは，これまで自分で１食をどのように整えているかを見つめ，自分でもいためる料理で１食を整えることができるようになりたいという目的意識と自分の課題をもつことをねらいとしている。そのために，まずこれまで１食を整えた経験の調査を行った。お母さんが作ることができないとき，すぐ食べたいとき，時間があるときなどに，９７％の子供が経験はあるものの，調理をするのは半数以下であった。そのデータをもとに話し合い，単品が手軽で，簡単につくることができてよいこと，インスタントや買ったものは，量や味の調節ができないこと，栄養にも問題がありそうであることなどに気づいた。そして，焼きめしや焼きそばなどをつくった経験のある子供たちの話や栄養表を参考に調べた結果，『いためることができるようになれば栄養もとれて，好みの食事が作れそうだ』という目的意識をもった。そこで，自分の家のいためる料理を取材し，１回目の調理実習（課題発見実習）を行った。レシピづくりでは家庭からの情報収集より食材の組み合わせや調味料，火力，加熱時間，見かけや食感について詳しく記入させ（資料①），実習，試食会においてもその観点で観察記録を行った。実習で取り組んだ献立は，焼きめし，焼きそば，焼きうどん，オムライスであった。実習後の交流では，「思ったより難しかった」という感想が多く聞かれ，この実習を通して，他者との比較により，食材や切り方，味，見た目，食感について，火力，加熱時間などの技能についての不十分さに気づいた（写真①）。そして，下記のような課題がだされた。この課題を，クラスのほとんどの課題である共通課題と少人数のこだわりの個人課題ごとに整理し，学習計画を立てた。

〔材料〕卵，にんじん，ハム
〔切り方〕ハムはにんじんと同じくらいの大きさ
〔味〕ブイヨン，塩こしょう，しょうゆ
〔見た目〕ぽろぽろ
〔火力〕油を熱したフライパンで強火
【資料①　母から聞き取り，課題発見実習でつくった0児の焼きめしレシピの１部】

【写真①　課題解決実習で少し焦げてしまったＯ児の焼きめし】

共通課題：（技能面で）・焦げてしまった。強火にしたのが原因ではないか。（火力）
・べたっとしているのでもっと長くいためなければいけないのか。（加熱時間）
・食べた感じが違うけど，油の量はどのくらいだろう。
・卵を入れる順番が違うけど，材料を入れる順番を知りたい。
（栄養面で）・友達の具とは違うし，味も違った。栄養を考えるとどのような具や調味料がよいのか。
個人の課題（抜粋）・ぼくは急いでつくって食べたいけど，どんな具にすればいいのか。（効率）
・味付けに我が家のこだわりをさぐりマスターしたい。

※～～部は，Ｏ児がもった課題

考察①

１食を整えた経験（家庭からの情報収集）を想起，交流させ，その際に栄養表を照らし合わせたことで，好みの傾向が似ていること，既習の技能を生かせば栄養面を補った１食が自分でも整えられることに気づかせることができ，さらに新たな課題として「いためる料理をつくりたい」という目的意識をもたせる上で有効であった。また，課題発見実習を行ったことで，「いためる」ための基礎的な技能である火力と加熱時間に気づかせること，またその後に試食会を設け，各家庭でつくられるものを視覚，味覚で比較をさせることで具の選び方にも課題をもたせることができた。

② 栄養の組み合わせやいためる技能に関する課題をさぐる段階（５～７／10時間）

ここでは，栄養面と技能面での課題を解決して，栄養バランスのよい焼きめし，焼きそばを考え，いためる技能を獲得し，活用できるようなることをねらいとしている。まず，共通課題の栄養バランスがよい具を，おもに熱や力のもとになるもの，おもに体をつくるもの，おもに体の調子を整えるも

のの３つがどれもはいるようにレシピをつくった（資料②）。

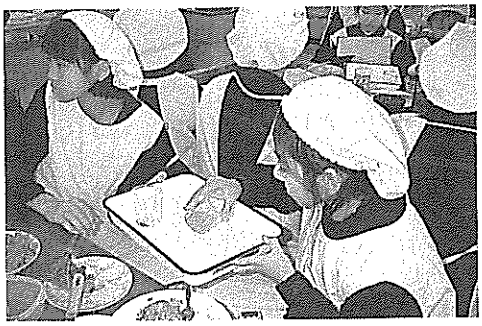
〈熱や力のもと〉ご飯，油，コーン …… 黄色
〈体をつくる〉卵，ハム，のり …… 赤，黄色
〈体の調子を整える〉にんじん，ピーマン …… 緑，赤
〔めあて〕
前回は強火で焦げたけど，今回は強火で手早くしてぽろぽろをつくる。弱火ではべちゃっとなるはずだから，比べてみる。

【資料②　0児が栄養を考えたレシピ】

【写真②　栄養士の先生から栄養バランスのアドバイスを受けている様子】

その際に，Ｇ・Ｔの栄養士の先生からバランスについてわかりやすくアドバイスをいただいた。０児は，レシピに「３色が入るように」と，下ごしらえが簡単で火が早く通るものというアドバイスで「ハム，にんじん，卵」という具に「ピーマン，コーン」を加えて「野菜のたっぷりはいった焼きめし」を考えた（資料②）。次においしく「いためる」ために，各グループで課題別に比較実習し（写真③），試食を行った。０児の班では加熱に要した時間や出来上がりを比較して「強火の方早くできたし，ぽろぽろしておいしい。」「野菜の色がきれい」という感想をもった。他の班では，「前回の実習で強火で焦げたので油をたっぷり（５％）いれ，よく熱してからいためることを家の人から聞いてきてやってみたらおいしくできた」という解決もできた。「家の人が早くいためた方が栄養が逃げないといっていた」という疑問に対しては，水と油のカロチン溶出実験（写真④）とカロチンの減り方の比較グラフを提示した。この実習の結果，子供たちは課題を解決したことに自信をもち，家庭実践に取り組んだ。家庭実践を終えて０児は「家族からも喜ばれた。」という感想とともに「家にピーマンがなかったし，同じ栄養で色のきれいなグリンピースにしたらいいといわれて具を変えた。」という結果を紹介した。このように「計画をした具がなかった」という声や，「家族の好みの味・具とはちがう」などの改善点が見つかった。

【写真③　火力と見た目や食感をの関係をさぐっている0児の様子】



【写真④　油とカロチンの関係をさぐっている様子】

ぼくは，今までお母さんのお料理をお手伝いしたり，前回の調理実習のとき，なぜこうするのかわからないことが時々ありました。でも，今回の学習でそのなぞを解決することができました。１つは，強火でいためると弱火でいためたときより味も食感もいいということです。だから，お母さんは強火で手早くいためていたんだなと思いました。２つ目は，強火でいためると栄養も逃げないでよいということです。油にカロチンが溶けて吸収しやすくなることがビーカーの実験でよくわかったし，グラフを見ると手早くすることのよさがよくわかりました。お母さんが教えてくれた作り方がこんなにすごいことが分かり，おどろきました。栄養がとれるレシピもできたし，いため方もわかったので家でつくってみたいです。

【資料③　課題解決実習を終えての0児の感想】

考察②

課題解決実習を受けて共通課題であった栄養面を解決するために体内の働きによる３つのグループに分けさせたことと，栄養士の先生からレシピへのアドバイスをいただいたことで０児のようにレシピを修正し，栄養バランスを考えて１食を整えることができるようになった。また，技能面は，課題別に比較実習をさせたことで，見た目と食感をおいしくつくるためには強火でなければならないことを実感できた。さらに，おいしさだけではなく栄養の関係も実験を通した体験的活動でつかむことができた。この段階の活動を通して，家族からの聞き取りが確かめられ，基礎的な知識と技能を習得することにもつながり，知恵として家庭実践する意欲が高まったと考える（資料③）。しかし，家庭実践を行う中で新たな課題をもつことができ，次の段階の追究へと発展することになった。

③　家族の工夫を生かしながら自分流いためる料理をつくる段階（８～10／10時間）

ここでは，家庭実践を受けて家族の工夫として具の応用，家族の好みなどに気づかせ，自分なりに食材やつくる対象となる人を変えていためる料理をつくり家庭実践を続けていくことができるようになることをねらいとしている。そこで，まず家庭実践の結果気づいたことや家族からの感想を話し合った。その結果，家庭にある具を応用することをもっと知りたいということでそこで，Ｇ・Ｔに上手な買い物や保存で節約を考えた家庭料理を作り続けている中原さんをお呼びして，アドバイスをもらった（写真⑤）。そして，家庭にあるものをもち寄り，その場でどんな具にするかを決めて実習することになった。実習日にもち寄った具を紹介しあい，これまで学習した栄養のことを考えながら具の種類と量を決定した。Ｏ児は，「ハムの代わりにちりめんをもらおう。栄養の組み合わせを考えると無機質がそろうぞ。」と決め，実習を行った。さらに，実習を受けて家庭で応用実践を行っていった。（写真⑥）家庭実践では，おじいちゃんのために，時間がないときに，など，つくる対象やその目的に応じて調理内容を変えて，実践が継続していった。

【写真⑤　Ｇ・Ｔの中原さんからアドバイスを受けている様子】

〔めあて〕家族がみんなの栄養を考えて，６つの栄養バランスがとれ，塩分を控えめにしたい。家にある具をたくさん入れて，早くできて見かけも喜んでもらえるようにしたい。
〔料理名〕栄養ばつぐん，ミラクルチャーハン

【資料④　発展実習における0児のレシピの考え方】

卵料理とお漬け物に続き，焼きめし，焼きそばとレパートリーが増えましたね。野菜の切り方も上手になりました。栄養を考えながら，見かけもよくして食欲をそそるようにしてくれるなんてあなたらしい調理ですね。なにより，家にあるものを使って，１食全部を任せられることがお母さんはうれしいです。これからも休みの日はみんなのためにいろいろ作ってくれることを楽しみにしています。

【資料⑤　0児の家庭で応用実践に対する家族のコメント】

【写真⑥　0児の家庭実践の様子】

考察③

家庭実践を受けての話し合いをもつことで，学習したことを活用する際に，家族の好みや家庭にあるものなどを考えた食材の応用が必要になることに気づかせることができた。そして，長年家族のことを思って家事をしてこられているＧ・Ｔの話を聞かせることで自分の家族への感謝の気もちをもつとともに，応用調理への意欲を高めることができた。さらに，家庭からもち寄った食材の中から目的にあわせ即興で選んで調理をする活動を行うことで，これまでの栄養の学習，いためる技能の学習が繰り返され，子供たちの家庭生活のさまざまな場面で使いこなす知恵となることができたと思われる。

４．全体考察

Ｏ児は焼きめしを通して１食を整えるための栄養的な知識やいためる技能を獲得し，家庭生活で応用実践を行って家族から喜ばれ，そのことに喜びを見いだす姿が見られるようになった（資料⑤）。これは子供の家庭生活の中から１食を整えたいという目的をもたせ，自分の課題を明確にして解決したこと，解決の過程でも家庭とかかわりながら体験的な活動を仕組んだことが有効であったと考える。さらに，子供たちにとって身近でかつ今後の家庭の食生活に自らかかわっていくことができるを教材をさぐっていきたい。

ぼくは始め焼きめしぐらい簡単に作れると思っていた。でもつくってみると全然おいしくできなかった。だからお母さんはどうしているのかを聞いたり，Ｇ・Ｔの先生たちにアドバイスをもらったりして強火のこととか栄養のことを勉強してだいぶ上手にできるようになった。この学習をしてから，家でおじいちゃんやお兄ちゃんにつくってあげたら喜ばれてうれしかった。おじいちゃんには野菜多めで薄味，お兄ちゃんはスタミナ満点の肉を入れて工夫してみた。それと，焼きめしだけではなくて，オムライスとか，焼きそばもつくってみた。これからもいためることを生かしてどんどん応用してつくっていきたいと思った。そして，自分の食事を整えたり，家族のために工夫してつくって，もっと喜ばれたりしたい。

【資料⑥　学習を終えての0児の感想】

未来を拓く実践力をもった子供が育つ道徳教育

道徳部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために道徳教育にもとめられること

現代の物質優先の社会の中で，人々は自分の利益を追究することのみに追われ，他者とのかかわりの中で支えたり支えられたりして生きている自分の存在を見失いがちである。そのために，子供たちはよりよく生きることの価値や意味を見いだせず，虚しさや無力感を感じ，一瞬一瞬をみずみずしく生きることが困難になっている。このような子供を取り巻く社会の課題を受けて，新学習指導要領では改善の基本方針として，①体験活動等を生かした心に響く道徳教育の実施②家庭や地域の人々の協力による道徳教育の充実③未来へ向けて自らが課題に取り組み，共に考える道徳教育の推進の３点があげられた。つまり，これからの道徳教育では，子供が心揺さぶられるもの・人・こととのかかわりを通して内面を見つめ，直面する課題や悩みに主体的に取り組み，未来に向けて夢や希望をもって人生や社会を切り拓く強い道徳的実践力を育むことが求められている。

○　未来を拓く実践力をもった子供が育つ道徳教育のために

未来を拓く実践力とは，迫り来る課題に対して，自他共によりよく生きたいという心情を発揮し，そのための適切な行為を判断し，実践することができるような内面的資質のことである。具体的にはまず，対象となるもの・人・ことの心情を共感的に推し量って理解し，かかわりをつくろうとする調和的心情や，人間としての生き方の大切さやよさを感じ取り，自分もそのように生きたいと願う向上的心情が挙げられる。さらに，よりよく生きるにはどうすればよいかについて考え，自分なりの課題への対処の仕方を道徳的に判断し，実践することで得られる道徳的価値への理解（知恵）がある。この知恵と心情が相まって子供は道徳的実践への意欲や態度を高めていくのである。このような資質は，子供自身が，直面する課題に対して実際に対処していく過程でこそ高められる。自分で，あるいは他者と協力して道徳的実践を行う中で，価値を追究することの喜びや，その結果について責任をもつことの大切さを感じ取ることができるからである。そこで，未来を拓く実践力を培うためには，道徳的実践と道徳的実践力が相互に響き合い，子供自身に自分のもっている力をほとばしらせて生きることの喜びや，人と支え合って生きることの喜びをもたせること，そこから自分のもつよさや可能性を感じ取らせていくことが必要となるのである。そのために以下のような学習が構想される必要がある。

- 具体的な行為や実践を通して，自分自身や自分と相手とのかかわりを見つめる学習
- 各教科・特別活動・総合的な学習の時間等での体験をも関連させ，道徳の時間において具体的な実践への構えをつくったり，実践をもとに自らの姿を振り返ったりすることができる学習
- 上記を可能にするために，子供にとって魅力的で感動ある教材を開発し活用した学習

○　未来を拓く実践力をもった子供とは

○　相手や自分がおかれている状況，問題が生じている原因・背景について把握して，自分はどうすべきか判断し，人間として生きるために必要な道徳的価値への理解を深めることができる子供　（知恵）

○　自分の体験をもとに，対象となるもの・人・ことの心情を共感的に推しはかったり，対象からの求めに応じて，自らかかわりをもとうとしたりできる子供　（調和的心情）

○　人間として真摯で誠実な生き方の大切さやよさを感じ取り，自分もそのようなよさを取り入れたり，伸ばしたりして生きたいという思いや願いをもつことができる子供　（向上的心情）

生き方との出会いを位置づけた体験関連型学習の展開

道徳部　石硯昭雄

1．主題の意味

(1) 生き方との出会いを位置づける意義

ここでいう生き方とは，かけがえのない自分や他者を大切にしてよく生きようとしている具体的な姿のことであり，その人が自らの生において願い実現している思想や言動，振る舞い，あるいはそれらが蓄積された人生の歩みのことである。本研究では，子供に出会わせたい価値的な生き方を，人間の生きる意味につながる以下の３つの価値領域から取り上げる。

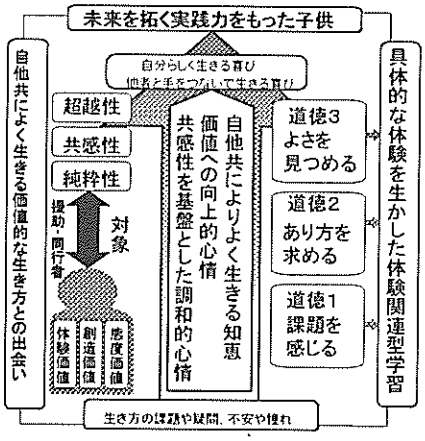
○　自分を必要としているもの・人・こととの交わりを大切にしている人の生き方　（体験価値）
○　自分になされるのを待っている仕事を実現しようとしている人の生き方　（創造価値）
○　変えようのない状況を前に，取りうる態度で生を実現しようとする人の生き方　（態度価値）

これらは，いずれも直面する課題に対して前向きに，ひたむきに対処している姿であり，未来を拓くべき子供たちにとって，自己の生き方を追究していく上でのモデルや指針となり得るものである。

生き方との出会いを位置づけることで，子供の中に，その生き方に対して「ああ，いいな」と直感的に感じたり（純粋性），自分との同質性に照らして寄り添ったり（共感性），異質性に照らして驚きや疑問をもったり（超越性）するといった感動が生まれる。このような生き方への共感や憧れをもとに，子供は自分のこれまでの見方・考え方・感じ方・行い方を見直し，取り入れたいよさや，伸ばしたいよさを明らかにしながら，実践へと向かう構えをつくっていくことができる。

(2) 生き方との出会いを位置づけた体験関連型学習の展開とは

【主題の構想】



体験関連型学習とは，教科・領域・総合的な学習の時間等での体験を生かして，そこでの具体的な体験を振り返ったり，実践への構えをもたせる道徳学習を行うことである。これにより，子供は，生活現実に照らして道徳的課題をもち，具体的実践を通すことでよさを追究する喜びや大切さを感じ，そのことから積極的に自分の心のあり方や行い方をつくることが可能になる。特に道徳の時間において価値的な生き方との出会いを位置づけることで，子供は，その人を価値追究の対象としたり，援助者・同行者としたりして学んでいきながら，自らの生き方追究に生かしていくことができる。具体的には，①生き方との出会いから自分の道徳的課題を感じる，②生き方に潜む価値を追究し自らのあり方を求める，③生き方との出会いから生まれた追究を自分のよさの広がりや深まりに結びつけて見つめる，といった活動を段階的に設定し，価値への自覚を深めていくようにする。

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　自らの生き方のなかにある問題に気づき，価値ある生き方との出会いから，自分の心や行いのよさを伸ばしたり，不十分さを見つめたりする課題意識をもてる子供　（生活吟味）
○　具体的な体験を通して，その人の生き方に潜む価値を追究し，自分の中にある同質性や異質性と照らしながら，その価値を自分なりに取り込もうとしている子供　（自己追究・内容創造）
○　自らの実践を評価し，見方・考え方・感じ方の広がりや深まりを自己評価するとともに，取り込んだ価値を内面的に自覚し，そのよさを味わいながら，さらに自己の課題の幅を広げたり，課題の質を深めたりしようとする子供　（生活更新）

2．学習の具体的構想

(1) 価値を実現し感動的な生き方を行っている人の教材化

こんな生き方をもつ人を

○「自分のことを必要としてくれる相手（もの・人・こと）のためにこのことを成し遂げよう。」という生き方	例：介護を必要とする人のためにボランティアに取り組む人
○「これはわたしがやるべきことだ，わたしにしかできない。」という使命感をもって取り組んでいる生き方	例：自然の美しさに魅せられ，かかわりをもち続けている人 例：芸術や文化の創造に向けて，真摯に取り組んでいる人 例：記録をめざして練習に励み挑戦し続けている運動選手
○「困難な中でも，こう考えて事態に接してみよう。」という前向きな考えで人生に対処している生き方	例：生来の身体の障害を乗り越えて，自己実現しようとしている人 例：民族や性別の違いによる偏見や差別を克服しようとしている人

このように焦点化し

○ 対話や共働といった直接的な交流を通して，その人の感動的な姿に触れさせる。（純粋性）

○ 成功した結果だけではなく，その人の人間らしい人生の過程に目を向けさせ，弱さや悩みも含めて自分との同質性に気づかせる。（共感性）

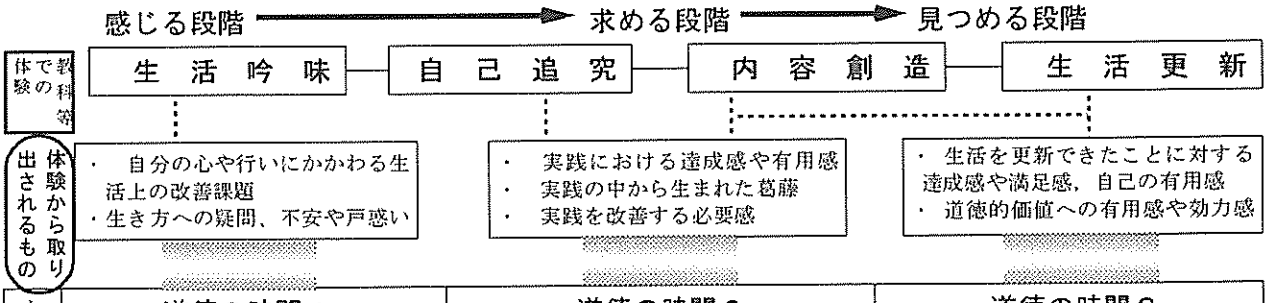
○ 生き方における転機や葛藤状況に着眼させ，ねらいとする価値的な生き方がなぜ生まれたのか，その人が葛藤を克服して価値的な生き方を選んだことをとらえさせる。（超越性）

このようなふれあいを中核にして

人とのふれあいの位置づけ方	追　究　活　動
 その人を価値追究の対象として，直接的に対面する場合	・生き方への疑問や関心をもとにした調査 ・具体的な葛藤状況での心情を推しはかる模倣や製作 ・異質性を同質化する対話，学んだことの第三者への発信
 その人を，価値追究の援助者として同行する場合	・自己の実践課題や悩みについての相談，協力依頼 ・共働の中で実践の価値を味わう製作や奉仕，労働 ・共働の喜びを味わい評価をもらう伝達や対話，会議

(2) 体験関連型学習の構成

各教科・特別活動・総合的な学習の時間等の追究活動（生活吟味・自己追究・内容創造・生活更新）での体験を生かして，感じる・求める・見つめるの３段階で構成し，それぞれの段階に中心となるねらいを焦点化した道徳の時間を以下のように位置づける。



ねらい	道徳の時間１ 自己受容と課題把握	道徳の時間２ 価値理解の深化	道徳の時間３ 道徳的価値の自覚
活動	1　道徳的問題を知る。 2　道徳的問題についての自己の現状のありのままの姿と課題を知る。 3　解決に向けて指針となる人の存在を知る。 4　人物の生き方に感動をもつとともに課題解決への価値の方向性をもつ。 5　生き方の価値を取り込んで実践への意欲をもつ。	1　実践における葛藤をもとに価値についての自己吟味の意欲をもつ。 2　具体的場面での心情や判断をもとに価値を吟味し，価値を実現している人物との対話から深化を図る。 3　解決に向けての視点や情報を得る。 4　交流し，よりよい道徳的実践に向けての心情や判断の見直しを行う。 5　深まった価値をもとに，実践の見直しへの意欲をもつ。	1　繰り返しの実践についての変容と変容をもたらした価値のとらえ方について話し合う。 2　人物との対話や評価から，高まった自己への肯定感を味わう。 3　人物の生き方から実践課題を広げたり継続したりすることの大切さについて考える。 4　自分の今後の課題と大切にしたい心や行いを明らかにする。
支援	※　自己のこれまでの姿を振り返る表現活動や資料活用 ※　人物との出会いによる価値への方向付け	※　実践における葛藤の取り上げ ※　調査・製作・対話などの体験的な価値追究の場の設定	※　人物との対話や評価による自己の高まりの感得の保障 ※　課題の広がりや深まりを意識させる生き方の取り上げ

３．指導の実際と考察

(1)　主題名　　第４学年　おとしよりを大切にする心

［中２－(2)　相手のことを思いやり，親切にする。］　［中２－(4)　生活を支えている人々や高齢者に，尊敬と感謝の気持ちをもって接する。］

(2)　本主題の考え方

本主題は，身体にハンディのあるおとしよりとの交流をもとに，そこでの自分の姿を振り返ることで，相手の身体や気持ちを思いやれるかかわりをつくっていこうとする心情や，そこで必要な心のあり方や行い方といった知恵を育んでいくことをねらいとしている。おとしよりとのふれあいの中で子供は，人間は誰でも老いを迎え，程度の多少はあっても身体の不自由さを抱える可能性があることや，身体の不自由なおとしよりも，人生を精一杯生きてある人格であることに気づく。そして，おとしよりを大切にするということは，ただ保護・介助するということだけでなく，相手の生きる姿に学ぶ気持ちに支えられていなければならないことを知る。また，おとしよりに喜んでいただけるふれあいを自らつくりだし，振り返ることによって，思いやりの価値を実践する喜びを感得することができる。

本主題で，子供たちがお年寄りとのふれあいをつくっていく際に，生き方の指針として取り上げるのは，春日市で医師をされてある伊藤実喜先生である。伊藤先生の生き方には，子供が感動できるとともに，とらえさえたい価値の感得へとつなぐことができる以下のような姿がある。

- おとしよりの喜びを自分の喜びとして，ふれあいをつくってあること。　（体験価値）
- マジックという特技を生かし，「笑い」による高齢者福祉を実践してあること。（創造価値）
- 「老い」を学ぶべきものととらえ，謙虚な気持ちでお年寄りに接してあること。（態度価値）

このような生き方に触れることは，子供にとって，思いやりを実現し続けている人への素朴な共感や憧れ（調和的心情）をもとに，自らの生き方を見直そうという意欲（価値への感性に根ざした向上的心情）をもたせることができ，おとしよりのことを本当に思いやって親切にしていくとはどういうことなのかという価値認識（知恵）を育む上で価値がある。また，他者を思いやることのできる自分に対する自己肯定感を高めることができ，未来を拓く逞しい実践力を育てる上でも意義深い。

本主題の指導にあたっては，以下のように学習構想の具体化を図った。

①　伊藤先生の生き方を教材化するにあたって

- 伊藤先生もまた，日々のおとしよりとのふれあいの中で喜びだけでなく，葛藤や悩みを抱えつつそれを克服しようと努力してあることに着眼させ，自分との同質性から共感させた。
- 伊藤先生が，その実践の根底に「おとしよりの生き方に感動し，学ぶことが大切。」という考えをもってあることに着目させ，真に相手を思いやることの意味について考えさせた。

②　伊藤先生とのかかわりを生かした体験を仕組むにあたって

価値追究の援助者・同行者という立場から，以下のように伊藤先生とのかかわりの機会を設けた。

- ○　伊藤先生との共感的な出会いをさせるための自作資料「ドクターマジック誕生」の活用
- ○　おとしより向けマジックを習い，デイ・ケアセンターで協力してふれあいをもつ活動の設定
- ○　ふれあいの中で感じた葛藤をめぐって論議する場での，助言者・同行者としての位置づけ
- ○　実践を振り返り，さらに実践意欲を高めていく場での評価者・同行者としての位置づけ

③　体験関連型の主題構成を用いて学習過程を組むにあたって

自分が接するお年寄りに応じて，デイ・ケアセンターでのふれあいをつくる実践活動としてのあらつ学習と，そこで得た葛藤や悩み，喜びをもとに，伊藤先生との対話や助言から価値について見つめていく３段階の道徳の時間の学習を，関連・調和的に行っていくなかで，主体的な価値の自覚が図られるよう指導を行った。

(3) 目　標

○　おとしよりに喜んでもらえるふれあいを実践し，そこでの自己の姿を振り返る中で，おとしよりの身体や気持ちを思いやって接していく態度をもつことができるようになる。

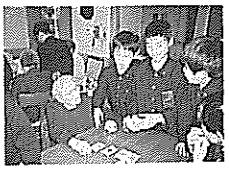
(4) 計　画

あらつ学習「おとしよりと楽しくふれあおう」（１４時間）

	学　習　活　動	配時
見出す	１．介護の必要なお年寄りに関心を持ち，追究意欲をもつ。	あらっ①
	２．ふくふくプラザを訪問し，なぜお年寄りの介護が必要なのか高齢者疑似体験や調査から明らかにする。	あらっ②
	３．センターを訪問し，おとしよりとの直接的な出会いをもつことで，ふれあいをつくっていく上での課題を感じる。	あらっ②
追究する	４．再度ふれあうための方法を考え，計画を立てる。	あらっ①
	５．デイ・ケアセンターでのお年寄りとの２回めの交流をもつ。	あらっ②
	６．　ふれあいのよさや不十分さ，新たにわいてきた疑問や課題を話し合う。	あらっ①
	７．伊藤先生やセンターの指導員から，計画の見直しについての助言を受け，再度ふれあいの仕方を見直し，準備する。	あらっ②
生かす	８．センターのおとしよりと３回めの交流会をもつ。	あらっ②
	９．ポートフォリオをもとにふれあいについての考えをまとめ，変容を振り返り，行いや心の高まりを自己評価する。	あらっ①

【写真１　疑似体験の様子】

【写真２　第１回のふれあい】



【写真３　第２回のふれあい】

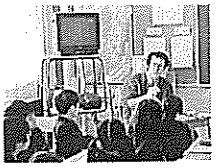
【写真４　情報収集の様子】

【写真５　第３回のふれあい】

道徳の時間（３時間）

感じる段階
１　最初のふれあいを振り返り，ふれあいのよさと不十分さから追究課題を明らかにする。 (1) 写真資料をもとに前回のふれあいの不十分さを見つめる。 (2) 資料「ドクター・マジックのたんじょう」を読んで，話し合う。 (3) ふれあいの中での自分の思いやりの不十分さを見つめる。 (4) ふれあいの見直しにむけて大切にしたい心を話し合う。
求める段階
２．体験時に感じた葛藤をもとに，おとしよりとのふれあいから学ぶことの大切さについて話し合う。 (1) 体験時の葛藤を想起する。 (2) お年寄りを思いやるという立場から判断する。 (3) 伊藤先生の体験を聞き，ふれあい方について考える。 (4)　次回のふれあいに向けて大切にしたい心を明らかにする。
見つめる段階
３．ドクターマジックの新たなちょうせんを聞き，話し合い，実践の広がりや深まりへの意欲をもつ。 (1) ３回のふれあいで得た喜びを想起し，自他の高まりに気づく。 (2) 資料をもとに実践を広げることの大切さを話し合う。 (3)　自分の実践を広げる可能性について考える。

【写真６　伊藤先生との対話】



(5) 指導の実際

① 感じる段階（1～6/17時間）ねらい：ふれあいに向けて，自己の心のあり方や行い方への問題意識をもつ。

あらつ学習（1～5/14）時間

介助用具に触れる体験から，身体の不自由なおとしよりの存在に目を向けさせ，学校の側にあるふくふくプラザでの高齢者疑似体験等を通して，介助を必要とされているおとしよりの心情を推し量らせていった。さらに，何かしらおとしよりの役に立ちたいという願いを芽生えさせた子供たちに，デイ・ケア・センターでのおとしよりとのふれあい体験をもたせたところ資料①のような感想をもち，ふれあいの継続への意欲を高める一方で，「どうすれば，もっとおとしよりに喜んでもらえるふれあいになるのか。」という問題意識が生まれた。

うれしかったこと・よかったこと
・おとしよりが涙を流して喜んでくれた。
・体の不自由なおとしよりが，わたしたちを和ませようとしてくれてうれしかった。
足りなかったところ・心残りなこと
・おとしよりのことが，ずっと気になっていたのに誘うことができなかった。
・遊びに夢中になって自分たちだけで楽しんでしまった。

【資料① ふれあい後の感想の交流内容】

道徳の時間1 ねらい：おとしよりの身体や気持ちを思いやる気持ちが必要であることに気づく。

ふれあいでの問題に潜んでいた自分たちの不十分さに気づかせていくために自作資料を用い，ドクターマジックこと伊藤先生がおとしよりとのふれあいに悩みつつ、相手への思いやりの大切さに気づくことでその葛藤を乗り越えていった心情を共感的に推し量らせていった。子供は，自分の体験をもとに，おとしよりとうまくふれあえない時の伊藤先生の心情や，ふれあえたときの喜びを共感的に推し量ることができた。（資料②）さらに，自分と伊藤先生と自分の似ているところ（同質性）やちがっているところ（異質性）について話し合う中で，伊藤先生も自分もおとしよりを喜ばせたいという願いをもっている点は同じだが，自分たちはおとしよりの体や気持ちを思いやることに不十分だったことに気づかせることができた。（資料③）

ふれあいがまくいかない時

・ せっかく，おとしよりのためにやっているのに…（腹立ち）
・ もしかしたら，嫌われているのかも（不安）
・ どうしてうまく分かりあえないんだろう。（とまどい）

ドクター・マジックとしてふれあえた時

・ うまくふれあえないのはおとしよりのせいじゃない。
・ おとしよりも不安なんだ。
・ こちらから，相手の気持ちを考えよう。
・ 安心させ，元気づけてあげたい。

【資料② 伊藤先生の心情の推し量りの内容】

考察①

学習の最後に，子供に次時のふれあいで大切にしたい心を問うたところ，ほとんどの子供が，相手の気持ちや体のことを考えてふれあいをつくっていくことの必要性に気づくことができていた。（資料④）A児は，この後「次のふれあいでは，おとしよりが子供の頃したことのある遊びをすればふれあいを喜んでもらえるのではないか。」と考え，おはじきを準備していた。このような姿が生まれたのは、あらつ学習でのふれあい体験をもとに，道徳の時間において，自分たちの相手への思いやりの不十分さに気づかせるという学習過程をとったこと，さらに道徳の時間において，自分と似たような願いや弱さをもつ伊藤先生が思いやりの価値に気づいていくまでの同質的な体験を資料化し，自分との違い（価値に照らした異質性）を生み出したものは何であったのかをノート表現と交流で考えさせたことが有効であったからだと考える。

T 伊藤先生とあなたの似ているところ、ちがっているところはどんなところですか。
C 嫌われているのかもと不安になったり、おとしよりのせいにしそうになったりしたこともにている。おとしよりも不安なんだな、もっと相手のことをわからないといけないなと気づけたところがちがう。
C 何よりおとしよりの気持ちを一番大事にしたいと思っている。わたしたちの中にもそういう気持ちがある人もいるけれど、つい、忘れてしまっていることがある。

【資料③ 自分と伊藤先生を比べて】

わたしには、マジックはできないけれども伊藤先生のように、おとしよりの方は、どんなことをされたらうれしいのかなと、相手の気持ちをよく考える心を大切にして、自分たちだけで楽しんだりすることのないようにしていきたいです。そしていっしょに楽しめることを考えたいです。

【資料④ 学習後のA児のノートから】

② 求める段階 （7 ～ 16/17 時間）ねらい：情報収集をもとにふれあいの実践と見直しを連続的に行う。

あらつ学習（6 ～ 13/14 時間）

道徳の時間１を受けて，おとしよりの身体や気持ちを考えたふれあいの仕方を計画，吟味させ第２回のデイケアセンターでのふれあいをもたせた。子供は，お年寄りの好きな歌を調べて歌ったり，カルタを用意したりしてふれあいを行うことができた。また，ここでは子供の求めから，伊藤先生との共働でふれあいを行い，おとしよりとの接し方についても考えさせていった。子供は伊藤先生のふれあい方のよさとして資料⑤にあるようなことに気づくことができた。

学習後の感想から
- うまくふれあえるのは、マジックができるからではなく、おとしよりが楽しめ、自分も楽しめるようなことを考えてきているからだとわかった。
- 伊藤先生は、してみせるだけでなく、おとしよりが自分でもできるようなことを考えている。だからおとしよりはうれしいんだな。

【資料⑤ 伊藤先生のふれあいのよさ】

道徳の時間２ ねらい：おとしよりへの思いやりでは，相手を受け入れ相手に学ぶことが大切であることに気づく。

２回目のふれあい体験では，子供が自分なりにおとしよりを思いやったふれあいを実践し，多くの喜びをもつことができた。しかし，中には期待するような反応が得られないことに不満や焦りを感じる子供の姿も見られた。そこで，子供の生の葛藤体験を作文から資料化し，「うまくふれあえない所についてはグループを変えてもよいか」という問題を伊藤先生や友だち話し合う活動を設定した。子供たちの交流（資料⑥）を受けて，伊藤先生から，「みなさんは何を求めておとしよりとふれあおうとふれあっているのですか。」と問いかけてもらい，患者であるＭさんとの交流体験を語ってもらった。ここではＭさんのリハビリの模擬体験をさせ，その大変さを理解させるとともに，それを見つめていた伊藤先生の心情を推し量らせていった。そして，伊藤先生との対話の中から「相手にしてあげようという意識ばかりでなく，相手に学ぶという姿勢も大切である。」という視点に気づかせ，ふれあいの中で見つけたおとしよりへの感動を想起させ，自己の判断を見直させていった。その結果，ふれあっているおとしよりの素晴らしさを揚げ，全員がふれあいを継続したいという意識をもつようになった。

問題：うまくいかない時は，ふれあう人が変わってもいいのではないだろうか

賛成	反対
C うまくいかない人がかわいそう。	C かえってその人も気まずくなる。
C 今のままだったらおじいさんも楽しくないと思うから。もうしわけない。	C おとしよりは自分嫌われたと思うかもしれない。いままでの信頼がこわれてしまう。
C 別の人だったらこつを知っていてうまくいくかも。	C うまくいかないことで，その時のおとしよりの気持ちを考えることもできたから，変えない方がいい。
C お互いが無理をするようなふれあいをしてもだめなんじゃないだいろうか。	

【資料⑥ グループ変更についての交流】

【写真８ 伊藤先生との対話の様子】

考察②

Ａ児は最初，「みんなが楽しむためには変わってもよい。」と考えていた。しかし，おとしよりから学ぶことの大切さに気づき考えを見直し，次のふれあいへの意欲を高めている。（資料⑦） ３度目のふれあいでは，Ａ児はおとしよりの子供の頃の話に懸命に耳を傾けていた。以上から，子供の生の体験の中から生まれた葛藤を資料化し，子供の価値理解に揺さぶりをかけたこと，援助者・同行者という立場から伊藤先生の体験を聞いたり， 模擬体験を通してその心情を推し量らせたりしたこと，あらつ学習の体験の中で漠然と気づいていたおとしよりの素晴らしい姿への感動を取り上げ，もう一度自己の判断を見直す場を設けたこと等が有効であったと考える。

やっぱりを変えるのはよくないと思います。わたしたちにつごうのいいように考えていると思うからです。○○さんは，言葉が出ないときがあったり，手が不自由だったりするけれど。頑張ることのすごさを教えてくれているような気がします。伊藤先生もいったように，おとしよりから学ぶことがたくさんあると思います。だからわたしは，○○さんとのふれあいを続けたいし，他の人も続けて欲しいです。次のふれあいでは，もっと○○さんのお話を聞きたいと思います。

【資料⑦ 対話後のＡ児の発言】

③ 見つめる段階（17 ～ 18/18 時間）ねらい：高まりを自己評価させ，自分なりの応えを見出す。

あらつ学習（14/14）時間

これまでの追究活動の足跡をポートフォリオにまとめたものや，ふれあいの変容の写真・ビデオ提示をもとに，自己の実践や考えがどのように変容していったのか見つめさせ，おとしよりを大切にするとはどういうことなのか，自分なりのまとめの考えを作らせていった。子供は，①相手の身体や気持ちを考えて接すること，②相手に学ぶという気持ちをもって接することの２点から自分の考えをまとめることができていた。

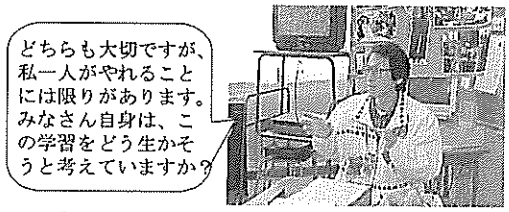
道徳の時間３ ねらい：今後の実践の継続・拡大への意欲をもつ。

子供は自分の実践を振り返り，有用感や満足感を高めている。そこで伊藤先生自身が葛藤していることとして「ふれあいの対象を広げていくことと，今あるふれあいを大切にしていくことのどちらを大切にすべきなのか。」という問いを投げかけてもらい，話し合う場を設定した。子供は自分の体験を振り返りながら，ふれあいの実践を広げることも，これまでのふれあいを大事にすることもどちらも大切であり，自分にできることをやっていくことの大切さを感じていた。（資料⑧）最後に，単元を通しての子供の変容について，伊藤先生からの評価をもらい，実践の継続への願いを投げかけてもらった。子供は，自分の近親者へと実践を広げていくことや，デイ・ケア・センターのおとしよりとのふれあいを継続していくことに対して意欲を高めた。

問題：ふれあいを広げることと，深めることのどちらを大切にしたほうがよいのか。

広げることに賛成	深めることに賛成
C　たくさんの場所に出かけていってふれあえば、ぼくたちが出会ったように喜ぶおとしよりが大勢に増えるのだから。	C　わたしは○○さんだから，大事にしたいと思う。だれにでもできるかどうかわからない。
C　広げていくことで，協力してくれる人も増えるし，そうすればますますおとしよりに喜んでもらえると思う。	C　１回だけのふれあいでは何もわからなかった。今のおとしよりと何度も続けていくことが大切。

【資料⑧　今後の実践についての判断の交流】



【写真９　伊藤先生からの投げかけ】

考察③

どの子も，実践を広げるもしくは続けるという観点から自己の今後の課題を意識することができていた。これは，思いやりの価値をこれからどう発展させるかという視点から，伊藤先生の葛藤を資料化して判断を問い，自分の今後の 課題と重ねさせたことが有効であったからだと考える。

わたしはこれから，これまでふれあっていたデイ・ケア・センターの□□さんに手紙を書きたいです。わたしは，これでふれあいのまくをとじるのは，とても悲しいし，もっと知っていたいことがあるからです。それから，この学習で学んだことを生かして，わたしの近所のおじいさんやおばさんとも，前とは少しちがうふれあいをしたいです。そして，一人一人ちがうおとしよりのすがたを，もっと見ていきたいです。

【資料⑨　A児の実践継続に向けての意欲】

４．全体考察

A児はおとしよりとのふれあいを大切にしようとする伊藤先生の姿への共感（調和的心情）をもとに，相手を思いやることの大切さ（資料④）や，おとしよりの素晴らしさに目を向けることの大切さ（資料⑦）といった価値理解（知恵）を得ることができた。また，単元終了後も，学びの中から得た自己の応えを実践しようとする向上的な心情が育っている。このような姿が生まれたのは，具体的にふれあいをつくっていく実践活動としてのあらつ学習と，そこで感じた感動や疑問を振り返って自己のあり方を見つめる道徳の時間の学習が相互に作用しあい，子供自身に，体験を通した確かな価値理解をもたらすことができたためであると考える。また，伊藤先生という人物を道徳の時間に一貫して取り上げることで，子供が寄り添う指針をもてたことも，子供が体験した葛藤を乗り越える上で指針となり得たと考える。今後，さらなる教材開発と学年間の系統を明らかにしていくことが課題である。

３回目のふれあいの最後に，おばあちゃんが涙を流して，何度も「ありがとう。」といってくれました。わたしは，思わず「また来ます。」と言ってしまいました。このまま，ふれあいをおわってしまってはいけないなという気持ちになりました。学校にもどってからお手紙を書いたけれど，やっぱり，おばあちゃんはどうしているのか気になります。春休みにはもう一度センターに遊びに行こうと思います。このふれあいをできるだけ続けていきたいと思います。

【資料⑩　単元終了後のＡ児の作文】

豊かな仲間意識を育てる特別活動

特別活動部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために特別活動に求められていること

今日は，受験戦争の過熱化，いじめや不登校，学級崩壊の問題，学校外での自然体験や社会体験の不足など，豊かな人間を育む時期の教育にさまざまな課題が生じている。また，少子化や個人中心の生活の進行は，孤独化，集団埋没型の社会性に乏しい人間を生み出していると言える。

特別活動に求められているものは，望ましい集団活動を指導原理とするその特性を生かして，それぞれの個性を伸ばし，よりよい社会を営んでいける力を育成することである。この社会に生きる力を育てるという観点からも，学校生活が集団生活であることの利点を生かして，子供たちが相互に協力し合って生活上の諸問題を解決し，楽しく豊かな学校生活を創造する特別活動を推進する必要があると考える。つまり，特別活動においては，子供たちの自主的な活動を中心として，子供たちが自分たちの手でよりよい学校生活を築いていき，その中で，豊かな仲間意識を育てていくことが大切だと考える。

○　豊かな仲間意識を育てる特別活動とは

子供たちの自主的な活動を通して，集団の成員同士の心理的つながりや集団としてのまとまりを強めていく特別活動のことである。

豊かな仲間意識とは，子供たちの生活の中で，互いに相手を認め合い，自己の責任をきちんと果たし，助けたり助けられたりすることで生まれる，仲間としての心理的つながりや仲間としてまとまっていこうとする意識のことである。

豊かな仲間意識を育てる特別活動とは，特別活動の４つの内容（学級活動，児童会活動，クラブ活動，学校行事）において，子供たちが，自分たちで学級生活や学校生活をよりよくするアイデアを出し合い，吟味し，決定して，協力して実践していく中で，豊かな仲間意識を育てていこうとすることである。そのためには，子供たちが学級や学校生活の中の問題を見つけ出し，それを自分たちで解決してよりよい生活を築いていこうとする心情（向上的心情）や，お互いの考えや特性を認め合い，友達を理解してよりよい関係を築いていこうとする心情（調和的心情）が必要になってくる。また，これらの心情に支えられ，自己の個性を生かしながら，活動の目標や計画を話し合い，協力して実践していく力（知恵）が大切である。これらの心情・知恵を育てるためには，学校生活の基盤である学級生活において，集団で活動する喜びやよさを十分に味わわせることが重要である。そして，学級活動で培った知恵・心情を児童会活動やクラブ活動などに生かしていくことで，学級内の豊かな仲間意識から異学年，さらには学校全体の豊かな仲間意識へと発展していく。

○　豊かな仲間意識をもった子供とは

豊かな仲間意識をもった子供像を，次のように考える。

○　今の生活の様子をみてとり，自分たちの生活をもっとよくしたいという観点から問題を見つけ出し，自主的に活動する子供（向上的な心情）

○　お互いの考えや特性を尊重しながら，友達との望ましい人間関係をつくっていく子供（調和的心情）

○　自己の個性を発揮しながら，問題の解決方法を話し合い，協力して活動する子供（知恵）

○　集団で活動する喜びを感じ，自己有用感をもった子供（知恵）

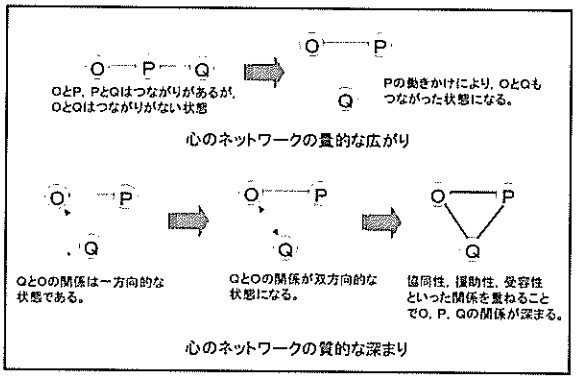
心のネットワークを強める学級活動の展開

特別活動部　　矢　野　俊　次

１．主題の意味

(1) 心のネットワークを強めるとは

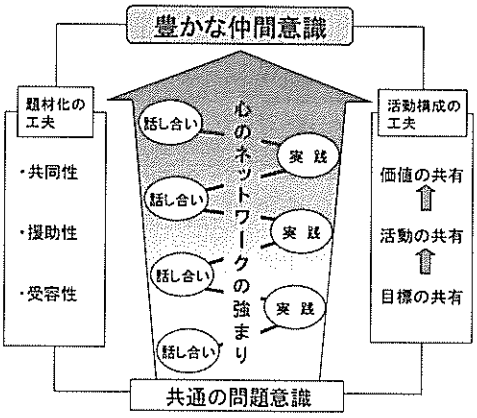
心のネットワークとは，学級集団内の成員同士が，お互いにかかわりながら心理的に結びつき合った愛他的な相互依存関係にあることである。つまり，役割を分担しながら活動できること（協同性），困っている時に助けてくれること（援助性），友達の考え方や行動を認めること（受容性）という３つの要因から仲間をとらえていることである。心のネットワークを強めるとは，子供たちが自主的な活動を通して，子供たちの関係を量的，質的に高めていくことである。つまり，これまで心理的に結びつきのなかった友達とも仲間としての関係をつないだり，一方向的であった関係が双方向的になったり，関係の要因を増やしたりしながら豊かな仲間意識へと高めていくことである。



【心のネットワークの基本的な強まり方】

(2) 心のネットワークが強まる学級活動の展開とは

心のネットワークを強める学級活動の展開とは，心のネットワークを強めるために，目標を共有する活動，活動を共有する活動，価値を共有する活動の３つの大きな活動からなる学級活動を展開していくことである。つまり，子供たちの是非やってみたいという内発的な動機から活動を立ち上げ，学級集団が共通の活動目標をもち，その共通目標の達成に向かって協同で活動を行い，そして，協力して活動したことのよさや役割を果たせたことのよさを味わっていく活動のことである。このような学級活動を展開するために，題材化と活動構成の２点から工夫を行う。題材化の工夫については，大きく次の２点から工夫を行う。①学級の問題を解決，克服していく過程において，必然的に学級成員の心理的つながりや協力が必要となる題材，②学級の外に向かって，自分たちの願いや夢を実現していく過程を通して，協同性，援助性，受容性といった姿があらわれる題材である。また，活動構成については，話し合い活動と実践活動を往復的に取り入れた活動構成を工夫することが必要である。



【基本的な研究構想】

(3) 本研究で期待する子供の姿

心のネットワークを強めている子供の姿は次の通りである。

○　一人一人の対象に対する思いをもとに，共通の活動目標や活動作りの視点を設定している子供（**生活吟味**）

○　活動目標の達成に向けて友達の考えを認め合いながら，活動内容や計画を決め，自分の役割を責任もって果たし，友達と協力しながら活動している子供（**自己追求・内容創造**）

○　自分や自分たちの活動を振り返り，協力して活動したよさや役割を果たせたよさを味わい，次の活動への意欲をもっている子供（**生活更新**）

2．学習の具体的構想

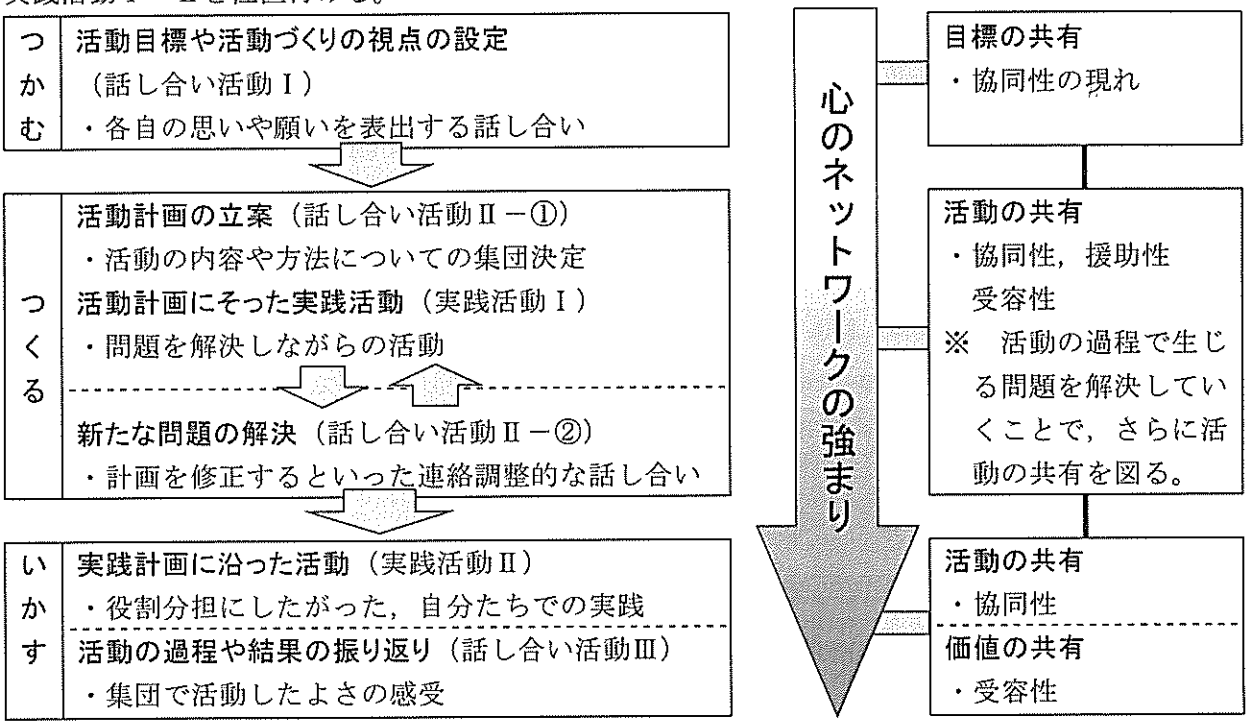
(1) 題材設定の条件について

心のネットワークを強めるという観点から，題材を次のような条件で設定する。

○　是非やってみたいという意欲を生み出し，自主的な活動をうながすもの
○　活動目標を達成するために，必然的に学級全員の協力が生まれるもの
○　活動の過程で目標達成を阻害する問題が生じ，その解決が自分たちでできるもの
○　活動したことを客観的に評価でき，集団で活動したよさが味わえるもの

(2) 活動構成について

本研究における学習過程を，目標の共有を図る「つかむ」段階，活動の共有を図る「つくる」段階，価値の共有を図る「いかす」段階の３段階で構成する。その中に，話し合い活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと実践活動Ⅰ・Ⅱを位置付ける。



(3) 心のネットワークを強める基本的な活動の仕組み

	つかむ（目標の共有）	つくる（活動の共有）	いかす（価値の共有）
主な活動と内容	1．学級の問題を見つけ出し，活動目標を設定する。 (1) 学級問題を見つけ出し議題化する。 ○　学級の問題とすること (2) 活動目標について話し合う。 ○　共通の活動目標を設定すること	2．目標の達成の活動計画について話し合い，実践活動を行う。 (1) 活動づくりの視点から解決の内容や方法を話し合い決定する。 ○　活動の内容と方法を決定すること (2) 計画したことをもとに，実践活動を行う。 ○　協同で活動すること (3) 活動の途中で生じた問題を解決しながら実践活動を進める。 ○　新たな問題を解決すること	3．実践活動を行い，これまでの活動を評価する。 (1) 計画に沿って実践活動を行う。 (2) これまでの活動を振り返り，自分たちのよさについて話し合う。 ○　集団で活動する喜びやよさの感受 ○　次の活動への意欲の喚起
形態	話し合い活動Ⅰ →	話し合い活動Ⅱ-① → 実践活動Ⅰ → 話し合い活動Ⅱ-②	→ 実践活動Ⅱ → 話し合い活動Ⅲ
支援	・対象との出会いの場の設定	・活動目標達成のための資料提示 ・新たな問題を解決するための資料提示や時間確保	・振り返りの資料の提示 ・活動の様子が見とれるＶＴＲ等

３．指導の実際と考察

(1) 題材名　　第３学年　みんなで送ろう！心の金メダル

(2) 本題材の考え方

本題材は，１学期に共通のかかわりをもった車いすランナーの末岡雄一郎さんを応援する活動を企画・実践することで，集団で活動する喜びや有用感を味わわせることをねらいとしている。具体的には，次の通りである。

○　末岡さんを応援しようという共通の目的に向かって，みんなで話し合ってアイディアを出し合いながら末岡さんを応援する活動を企画・実践すること（知恵）
○　自分の役割を責任もって果たし，仲間と協力して末岡さんを応援する活動をつくり上げること（調和的心情）
○　末岡さんを応援する活動を振り返り，学級のよさを再認識し，さらによりよい学級を目指していこうとする意欲をもつこと（向上的心情）

末岡さんを応援する価値としては，次の４点が考えられる。

○　車椅子レースを止めないで続けてほしいという学級全員の思いがあり，活動の目的を共通化できること
○　末岡さんを応援するという活動は，金メダルや横断幕の作成や応援歌など，学級全員の協力が必要であること
○　心の金メダル，応援歌，横断幕の作成し末岡さんを応援する活動を通して，協同性，援助性，受容性といった子供の姿が必然的に現れるということ
○　末岡さんに対する応援活動を末岡さんの言動で評価でき，協力して活動してきたことの価値を実感できること

本題材の指導にあたっては，末岡さんに，シドニー・パラリンピックに出場できなくなっても車いすレースを続けていってほしいという学級みんなの思いをもとに，末岡さんを応援する活動を企画・実践させていった。この活動の成功に向けてアイデアを出し合い，協力して準備や実践活動を行うことで，有用感を味わわせ，集団で活動する喜びやよさを味わわせた。そのために，まず，課外において，末岡さんがシドニー・パラリンピックに出場できなくなったことを知らせ，「末岡さんを励ましたい。末岡さんを応援したい。」という思いを取り出し，議題として提案させた。次に，「つかむ」段階では，これまでの末岡さんとのかかわりを振り返り，末岡さんから学んだことが，今，３の１のよさとして息づいていることをとらえさせ，みんなで末岡さんを応援しようという思いを共通化し，活動目標と活動づくりの視点を設定した。そして，「つくる」段階では，実行委員の原案をもとに，末岡さんにどんな応援をしていくかについて話し合い，集団決定した。応援の内容としては，金メダル（心の金メダル）を作成しそれを送る，応援歌を作成しみんなで心をこめて歌う，横断幕を作成し贈呈するといった活動を決めていった。次に，集団決定した活動を実践していく上で，必要な係を決め，役割を分担させ，実践に向けて活動の準備を行った。その際，子供たち同士のトラブルや応援する会に向けた練習や共通理解事項などについて話し合い，解決しながら活動を進めていった。さらに，「いかす」段階では，末岡さんを学校に招待し，企画した活動を計画に沿って実践した。実践にあたっては，教師はそれぞれの係の責任とリーダー性を援助し，自分たちの力で運営させた。最後に，みんなで応援しているときの末岡さんの様子をもとに，これまでの活動を振り返り，末岡さんを学級集団として応援したことで，集団で活動する喜びや有用感を味わい，さらによりよい学級をつくっていこうとする意欲を高めることである。

(3) 目　標

① 末岡さんに，これからも車いすレースを続けていってほしいという願いをもとに，「みんなで送ろう！心の金メダル」の活動を企画し，実践，評価することができる。

② 「みんなで送ろう！心の金メダル」の計画，準備，実践の活動を通して，協力し合うよさや活動した満足感や有用感を実感することができる。

(4) 計　画（６時間＋課外）

段階	活　動　と　内　容	手　立　て
つかむ	◎ 末岡さんがシドニー・パラリンピックに出場できなくなったことを知り，議題を提案する。	※ 末岡さんからの手紙
	１．これまでの末岡さんとのかかわりを振り返り，末岡さんに対する思いを共通化し，活動目標を設定する。	※ 末岡さんとのふれあい活動時の写真の提示や末岡さんと一緒に行った授業の学習ノート
	(1) 末岡さんから学んだことを振り返り，それが学級のよさとなっていることをとらえる。	
	○ 学級のよさをとらえること	※ 学級のよさをとらえる場の設定
	(2) みんなで末岡さんを応援しようという思いを共通化し，活動目標を設定する。（話し合い活動Ⅰ）	※ 月見学芸会と相撲大会の写真の提示とＶＴＲの視聴
	○ 活動目標を設定すること	
	○ 応援づくりの視点の設定	
／つくる	２．活動の内容について話し合い，実践活動の準備をする。	
	◎ 実行委員は，アンケートをもとに応援の内容について原案を作成する。	
	(1) 実行委員の原案をもとに，末岡さんにどんな応援をしていくかについて話し合い，集団決定する。	※ 話し合う内容の精選 ※ 話し合いの観点を明確にする支援
	○ 応援内容を決めること　（話し合い活動Ⅱ－①）	
	(2) 話し合いで決まったことの実践に向けて，係を分担して，協力して実践活動の準備をする。（実践活動Ⅰ）	※ 準備の時間の確保 ※ 協力している姿の取り上げと賞賛
	○ 役割分担して協力して準備を行うこと	
	(3) 準備の途中で生じた問題については，必要に応じて解決のための話し合いを行う。（話し合い活動Ⅱ－②）	
	○ 新たな問題の解決	
／いかす	３．「みんなで送ろう！心の金メダル」の活動を実践する。	※ 末岡さんの招聘
	(1) 末岡さんを招待し，計画したことに沿って，「みんなで送ろう！心の金メダル」の実践活動を行う。（実践活動Ⅱ）	
	○ 活動計画，役割分担にもとづく自分たちで協力した運営を行うこと	
	(2) 実践活動時の末岡さんの様子をもとに，これまでの活動を振り返り，評価する。（話し合い活動Ⅲ）	※ 実践活動時の末岡さんの様子を映したＶＴＲの視聴
	○ 満足感や有用感を味わうこと	
	○ さらによりよい学級をつくろうという意欲をもつこと	

(5) 指導の実際

１学期題材「車いすランナー末岡さんとふれあおう」とのつながり

６月に行った題材「車いすランナー末岡さんとふれあおう」は，道徳の時間の学習でかかわった車いすランナーの末岡雄一郎さんと，もっとかかわりたいという思いから，「末岡さんとのふれあい会」を企画，運営していった。活動内容を決める話し合いでは，車いすの末岡さんと一緒に楽しめる活動は何かということを視点に話し合い，車いすを使ったリレーを考え出した。写真①はそのときの様子である。この活動を通して，子供たちは末岡さんとのかかわりを深め，末岡さんと一緒に活動することで資料①にあるような感想を書いている。この感想から，末岡さんの障害のことを考えみんなでふれあい会の内容を決めて，実践できたことの満足感や末岡さんとかかわりを深めることができた喜びを感じていることがわかる。

【写真①　ふれあい活動の様子】

末岡さんとふれあい会をして，とても楽しかったです。末岡さんもとても喜んでいました。末岡さんのことを考えて車いすリレーにしたかいがありました。末岡さんともたくさん話すことができたし，末岡さんのすごいところもわかりました。また，末岡さんと一緒に何かしたいです。

【資料①　ふれあい活動後の感想】

２学期題材「みんなで送ろう！心の金メダル」

①　つかむ段階（１／６時間）

ここでのねらいは，末岡さんがシドニー・パラリンピックに出場できなくなったことを知り，「末岡さんを応援したい。」という思いを共通化し，活動目標を設定することである。そのために，まず，課外において末岡さんから届いた葉書を紹介し，末岡さんがシドニー・パラリンピックに出場できなくなったことを知らせた。子供たちの中には，「末岡さんが車いすレースを止めてしまうかもしれない。」「末岡さんを励ましたい。」という思いを日記に綴っていた。そこで，それを取り出し，議題として提案させた。子供たちは，全員一致で末岡さんを励ます活動を行うことを決め話し合いを行っていった。まず，末岡さんとのかかわりをＶＴＲや学習ノートで振り返り，末岡さんから学んだことが，今の３の１のよさとして息づいていることを月見学芸会や相撲大会の活動を通してとらえる場を仕組んだ。そして，３の１としてどのような応援をしていくか話し合い（資料②），「３の１のよさを生かして，みんなで末岡さんを応えんしよう。」という活動目標を設定していった。そして，話し合いで出てきた，「全員で応援しよう」，「３の１の応援を自分たちでつくろう」を応援づくりの視点として設定した。（話し合い活動Ｉ）

T1　末岡さんに，どのような応援をしたらいいですか。
C1　３の１のみんなが，末岡さんにこれからもあきらめないで練習を続けてほしいという気持ちが伝わるような応援をしたらいい。
C2　作るものだったらみんなで真剣に作って，表現するものだったら心を込めて表したりすればいいと思う。
C3　40 人みんなで決めたし，40 人でやらないと心がひとつにできない。
C4　３の１のよさは，末岡さんからもらったものだからそれを今度は末岡さんにみんなで返せばいい。

【資料②　目標を共有化する話し合い】

考察①

活動目標を設定する話し合いにおいては，資料②のように学級集団として応援していかなければいけないという意識があり，目標を共有していることがわかる。これは，学級全員にかかわりのある末岡さんを応援しようとする題材を選定したことにより，みんなで応援しなければ意味がない，自分たちだけでやらなければいけないという意識が生まれたからだと考える（協同性の現れ）。

② つくる段階（２～４／６時間）

ここでのねらいは，実行委員が提案する応援の内容について話し合い，集団決定することと，決まったことの実践に向けて係を分担して協力して準備活動を行うことである。まず，実行委員は，アンケートをもとに，①心の金メダルを作成して送る，②応援歌をつくってみんなで歌う，③横断幕を作成して送る，④応援ビデオを作成して送る，という４つの原案を出した。次に，原案を全員で応援できるものか，自分たちで作れるものかという応援づくりの視点から話し合いを行い，心の金メダル，応援歌，横断幕の３つに集団決定した（写真②，話し合い活動Ⅱ－①）。横断幕作りでは，布に染料で描いていったが思うように描けずにやる気を失いそうになっているＴ児に，「ちょっとぐらい失敗してもいいよ。大事なのは心よ。」と励ましながら作成しているＫ児の姿（援助性）があった（写真③）。これまで自己中心的で自分の分担の仕事に責任をもてていなかったＦ児は，Ｋ児の「Ｆがやらないと，間に合わないよ。一緒にやろう。」という声掛けで，しだいに仕事を積極的に行うようになり，遅れがちなＴ児に「手伝おうか。」という姿も見られた（援助性）。また，学級活動の時間だけでは間に合いそうにない現状を判断し「昼休みも仕事をしたらどうか。」という提案がなされた。「休み時間は遊びたい。」という意見も出されたが，「早く終わったところは，遅れているところを手伝って仕上げよう。」という意見が出され，みんなそれに賛成し，昼休みも活動を行うことに決まった（協同性，話し合い活動Ⅱ－②）。昼休みの活動では，Ｆ児がＫ児を手伝う姿も見られ，お互いの関係を深めていった。

【写真②　話し合いの様子】

【写真③　横断幕を作成しているＫ児】

考察②

つかむ段階において，応援づくりの視点を設定したことで，応援の内容や方法を話し合うときには，その視点から考えを述べ，その後の活動においてもその視点を意識した行動へとつながったと考える。また，応援づくりの過程においては，失敗を繰り返しながらも互いに励まし合ったり，助け合ったりして，活動を共有することができたと考える。これは，末岡さんを励ます応援をするというある程度の困難さををもった題材設定が有効だったと考える。

③ いかす段階（５～６／６時間）

この段階のねらいは，末岡さんを招待して「心の金メダルを送る会」の実践活動（実践活動Ⅱ）を行い，みんなで協力して活動したことの価値を味わうことである。「心の金メダルを送る会」では，実行委員を中心に計画に沿って会を進行していった。末岡さんへの感謝の言葉では，末岡さんから学んだことや，学んだことを生かして月見学芸会や相撲大会にがんばってきたことを話し，心の金メダル

> 僕たちは，一生懸命にしている末岡さんを見て，応援歌，横断幕，心の金メダルを作って送ろうと思いました。応援歌は，歌係の人が最初に作り，話し合いで励ましの言葉を入れようと一生懸命作りました。次に，横断幕は，大きいのでいっぱい時間がかかりました。何回も失敗して大変でした。でも，心を一つにしてやっと作りました。最後に心の金メダルです。どんな絵にするかみんなで話し合って作りました。一生懸命作ったので，これからも車いすレースを続けてください。

【資料③　心の金メダルを渡したときの言葉】

を渡すときには，担当の児童が今までの活動の様子を話した（資料③）。急遽決められた応援団長も，大きな声でエールを送り，そして，写真④のようにみんなで一生懸命応援歌を歌った。末岡さんの「シドニーに出られなくなってあきらめようと思ったこともあったけど，みんなに応援してもらって，もう一度やってみようと思う気持ちになりました。」と涙ながらに話されたことに対して，大きな拍手を送った。その後，写真⑤のように末岡さんを囲んで，どんな気持ちで応援歌を作ったり，横断幕を作っていったのかなどの思いを伝えていった。

【写真④　応援歌を歌っている様子】

【写真⑤　思いを伝えている様子】

心の金メダルを送る活動が終わった後に，末岡さんの心の金メダルを送る会での様子をもとに，活動を振り返る場（話し合い活動Ⅲ）を仕組んだ。子供たちは，末岡さんの涙の訳を，資料④にあるように「みんなで一生懸命作ったり，応援をしたから。」「末岡さんから教えてもらったことを生かして，心を一つにして応援したから。」といった感想を述べている。

T1　どうして末岡さんは涙が出たと思いますか。
C1　末岡さんと会って，末岡さんから学んだことを生かして，３の１みんなが応援したからだと思います。
C2　僕は，途中でT君とケンカしたけど仲直りして，一緒に横断幕をつくりました。そして，「がんばれ」という気持ちで歌を歌ったからだと思います。
C3　横断幕を作るとき，ちょっとはみ出しそうになったときk君が励ましてくれたからだと思います

【資料④　活動の振り返り】

考察③

資料⑤の波線部分から，子供たちは末岡さんを応援するために，みんなで協力して活動したよさを味わい価値を共有できたことがわかる。これは，末岡さんをみんなで応援するという目的意識をもって，話し合ったり，準備したり，実践したりしたからだと考える。また，ＶＴＲを視聴させて活動を振り返る場を設定したことも，具体的な活動の様子を通して振り返らせる上で有効だったと考える。

４．全体考察

「みんなで送ろう！心の金メダル」の活動を通して子供たちは，学級のよさを見つめ直し，資料④からわかるように友だちと協力して活動を進めることができた。また，学習後の児童の感想（資料⑤）からも，協同性，援助性を発揮して活動できたことや，活動の過程において友達の行動を認めるといった態度（受容性）がみられ，それが自分もがんばってつくろうといった態度（協同性）を生んだことがわかる。このように，心のネットワークを強めている姿が現れたのは，末岡さんを応援するという題材を取り上げたこと，話し合い活動と実践活動を往復的に構成した活動構成が有効だったからだと考える。

○　金メダルのグループが横断幕グループを手伝っていたのがいいと思いました（協同性）。また，みんなで一緒につくったりする活動をしたいです。
○　横断幕に絵の具をこぼしたとき，中島さんが，「こぼしたのは仕方がないから，あとを一生懸命ぬろうよ。」と言ってくれたのがうれしかったです（援助性）。
○　□君と△君が昼休みも金メダルをつくっていたのがすごいなと思いました（受容性）。私も，あんまりきれいに塗れなかったけど横断幕をがんばってつくりました（協同性）。

【資料⑤　学習後の児童の感想（抜粋）】

自ら生活を更新する「あらつ学習」

総合部　手島宏樹

１．本校の総合的学習の基本的な考え方

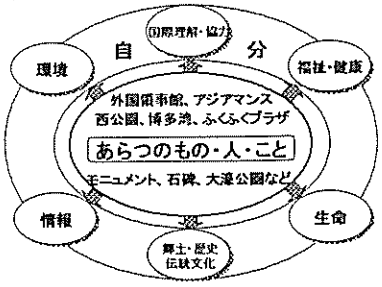
本校は，福岡市のほぼ中央，博多湾に面した所に位置している。昔から「あらつの丘」と呼ばれ，遣唐使船に代表されるように古くから他国との交流が行われてきたところである。学校の周辺には，西公園や大濠公園，博多湾，室見川などの自然環境が豊かで，福祉プラザや領事館，博物館，美術館などの社会的文化施設も建ち並んでいる。また，アジアマンスなどの催しも行われている。この学校周辺「あらつ」の地域性を生かし，子供が主体的に追究する中で生活に生きて働く力を育み，その結果として自分の生活をよりよいものへと高めていく総合的学習を「あらつ学習」とネーミングし，次の２点を基本的な考え方として，総合的な学習を展開していくのである。

(1) 子供の求めに応じる学習であること

子供は，元来，主体的に学び生活する存在であり，「自分が興味をもったものを，自分らしいやり方とペースで学び，その決着は自分の納得を基準とし，自分自身でつけていく（「学ぶ意欲を育てる」奈須正裕著）。」これが学びの本来的な姿であると言える。子供の姿を見ていると「やってみたい。」という活動重視の求めと，「どうしてだろう。なぜかな。」という疑問や矛盾からの求めがあると考える。子供の求めに応じるとは，この２つの求めを基盤に，学習対象を自分で選択したり，追究方法や実践の仕方を自分で決定したりするなど，子供の独自性を大切にする学習を展開することである。このように，子供のもつ独自性を大事に支援したりアドバイスをしたりする学習を大切にしている。そしてこの学習のなかで，生活に生きて働く力が培われると考える。

(2) 身近な地域を出発点とする学習であること

本校の総合的学習は，身近な地域を出発点としているところに大きな特徴があると言える。例えば，環境問題があるから環境についてのグローバルな学習をするのではなく，学校周辺のあらつにある課題から追究を出発させるのである。子供が身近な環境とかかわる中で，その結果として環境保全や環境保護の大切さに気づき，身近な環境をよりよくする行動を起こすことができるのである。これが，現代社会への対応が求められている課題について考え，生活を更新する子供の姿である。この出発点を「あらつ」の地域性に求めているのである。



【あらつから見た学習対象の視点】

＜「あらつ」の地域性から見た学習対象の視点＞

総合的学習では，現代社会課題への対応が強く求められている。その課題を「環境」「生命」「国際理解・協力」「福祉・健康」「情報」「郷土・歴史・伝統文化」という視点から見たとき，あらつのもの・人・ことが位置付くのである。それは，「あらつ」には，自然や社会，文化などに関するもの・人・ことが数多く存在しているからである。それらに子供がかかわり，興味・関心を抱いたり，課題意識をもって主体的に追究したりする活動へと発展していく可能性があると考えられる。

- ○　「あらつ」は，福祉事業や国際交流が盛んに行われている地であり，国際理解・協力，福祉，情報についての活動が期待できる。
- ○　「あらつ」は，博多湾や西公園，大濠公園などの数多くの自然が残り，その自然を守ろうと活動したり，その自然を生かして健康づくりにつとめている人がいたりして，環境や生命，健康についての活動が期待できる。
- ○　「あらつ」には，古くからの石碑が残っていたり，昔の出来事を伝えるモニュメントなどが建てられたりして，郷土や歴史・伝統文化についての考えをもつ活動が期待できる。

そこで，あらつの地域性から「環境」「生命」「国際理解・協力」「福祉・健康」「情報」「郷土・歴史・伝統文化」と活動の主体となる「自分」を合わせた７点を，学習対象の視点としている。

２．主題の意味

(1) 自ら生活を更新する「あらつ学習」とは

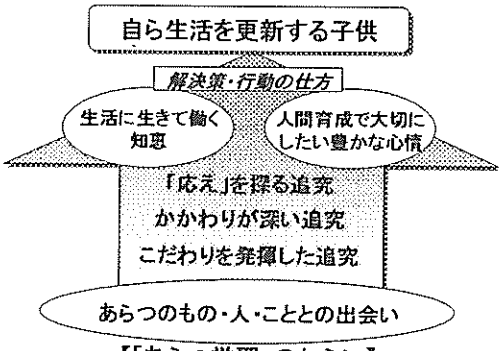
あらつを出発点とし，生活のなかで直面する様々な課題についてこだわりを発揮し（生活吟味），主体的に追究していく体験や活動（自己追究）を通して，その課題に対する自分なりの「応え」を見出し（内容創造），生活を変えていこうとする（生活更新）生活に生きて働く知恵と豊かな心情を育む学習のことである。

本校の学習原理である生活吟味，自己追究，内容創造，生活更新の過程で育まれる知恵と心情を「あらつ学習」においては次のように考える。

○　生活に生きて働く知恵
- 自らの課題を追究していくための情報の集め方や活用の仕方，調べ方，まとめ方，報告や発表討論の仕方などの学び方
- 子供が学習対象とのかかわりの中から見出した実用的な知識，技能，判断，多面的・総合的な見方や考え方

○　人間の育成で大切にしたい豊かな心情
- 自然や他者とよりよく生きようとする調和的心情
- よりよい生活を創り出していこうとする向上的心情

「あらつ学習」では，「こだわり」「応え」「かかわり」という３つのキーワードを大切にしている。「こだわり」とは，かかわる対象を選択したり，追究方法や実践の仕方を決定する際の子供独自の個性的判断のことである。「応え」とは，生活に生きて働く知恵と人間の育成の上で大切にしたい豊かな心情に支えられた解決策や行動の仕方のことである。この知恵と心情に支えられた「応え」が生活の場において，その子なりの具体的な行動となって現れる。これが自ら生活を更新している姿である。また，「かかわり」とは，学習対象との出会いにおける疑問や矛盾，驚きなどから対象に対する価値を意識した主体的な働きかけのことである。かかわりが深いほど，知恵も心情も強まっていくものであると考える。



【「あらつ学習」のねらい】

(2) めざす子供の姿

自ら生活を更新する「あらつ学習」では，次のような子供の学びの姿を考える。

○　学習対象と触れ合うなかでこだわりをもって学ぶ内容を見極め，自分の追究課題を見つける ことができる子供。（生活吟味）
○　見学や調査，聞き取りなどのこだわりを発揮した情報収集を繰り返し，課題追究を進んで行っている子供。（自己追究）
○　課題追究から，自分なりの「応え」を見出すことのできる子供。（内容創造）
○　他者とのかかわりのなかで，自分の生活を見直したり，新しい生活を創り出したりすることができる子供。（生活更新）

このような子供を育てるために，要項２０７～２０８ページに示しているような知恵と心情を育んでいく。

３．「あらつ学習」の具体的構想

(1) 学習対象設定の考え方

「あらつ学習」では，子供一人一人がこだわりを発揮しながら納得のいく「応え」を求めて学び続ける体験や活動そのものが内容になる。そこで，子供の主体的追究の面から次の４点を重視し，学習対象設定の条件と考える。

○　生活（「あらつ」）との結びつきを大切にする。（生活吟味性）

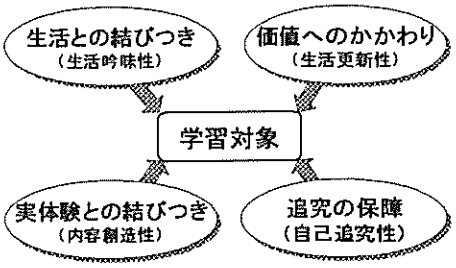
・子供の生活空間である「あらつ」での体験を行い見直すことで，課題をもつことができる。また，あらつを追究の場にして主体的な学習を保障できる。

○　一人一人の追究を大切にする。（自己追究性）

・課題解決に向けての子供のこだわりを保障することで，一人一人の子供の学びを成立させることができる。

○　実体験との結びつきを大切にする。（内容創造性）

・一人一人がこだわりを発揮し，具体的な活動や体験を通すことで，生活に生きて働く知恵と豊かな心情を獲得することができる。



【子供の主体的追究の面からの学習対象設定の条件】

○　価値へのかかわりを大切にする。（生活更新性）

・感動したり，実感したりしながら対象のもつ価値と触れ合う中で育まれた知恵と心情をもとに，自分なりの応えを見出し生活を更新することができる。

(2)　「あらつ学習」の単元設定の手順

① 「学習対象設定の考え方」に基づき，子供がこだわり，主体的追究につながるであろうあらつのもの・人・ことを検討し，育てたい知恵と心情から子供の実態を把握する。

② 検討した学習対象からウェビング法等を用い，子供の中心となるであろう活動と見出すであろう「応え」を想定する。また，子供が見出した「応え」が具体的にどのような解決策や行動の仕方となって現れるのかを想定する。

③ あらつのもの・人・こととの具体的活動や体験を通して生まれるであろう疑問や矛盾，驚きや感動などから，どのような課題意識が生まれるのかを想定する。

④ 子供の課題意識につながるように学習対象と触れ合う魅力的な活動や感動的な体験の場を設定し，出会わせ方を工夫する。

⑤ 子供の課題追究が実現可能な多様な活動や体験を想定し，子供の追究活動を保障するための教師の支援を考える。

(3)　追究課題づくり，学習活動づくりのポイント

子供が生活に生きる知恵と豊かな心情を育むためには，子供一人一人の強い課題意識と課題意識に支えられた具体的活動や体験が大切になる。そのために，追究課題づくりと学習活動づくりを次のように考える。

追究課題づくりにおいては，子供が学習対象とのかかわりのなかで疑問や矛盾，驚きなどを焦点化しながら「これを調べたい」「こんな方法で調べたい」という確かな課題意識と追究の方法を明確にしておくことが大切になる。そして，その方法で子供の追究が実現可能か，目標達成が可能かどうかを教師が十分に把握していくことが大事になる。そこで本校では，追究課題づくり，学習活動づくりのポイントを次のように考える。

＜(7)　追究課題づくりのポイント＞

まず，あらつの街から子供に出会わせたい学習対象を探す。その際，教師自らあらつの街を探索したり，本校の人材マップを活用したりしながら学習対象の選択を行う。学習対象が決定したら次のような手順で課題づくりを行っていく。

① 子供が学習対象と直に触れ合う魅力的な活動や感動的な体験を設定する。

② 活動や体験を通しての疑問や矛盾，驚きなどを引き出す。

③ 疑問や矛盾，驚きなどをもとに，調べたいことややってみたいことを明確にさせる。

④ 表現主題を併せもつ共通課題を設定し，学習計画を立てさせる。

＜(イ) 学習活動づくりのポイント＞

あらつ学習においては，子供の追究は多岐にわたることが多い。そのなかで，子供の追究が実現可能となるように，次のようなことに配慮して学習活動づくりを行う。

○　子供が目的意識や課題意識をもってねばり強く追究していけるように，個別，学習対象別，追究課題別のグループ編成を行う。
○　子供の課題追究の学習形態も多様である。図書資料を活用する子供，インターネットで検索する子供，聞き取り調査に出かける子供など実に多様である。そこで子供の追究が可能になるように あらつガイドを活用させたり，ＴＴや保護者の協力を得たりする。
○　できるだけＧＴの協力を得，子供の具体的活動や体験が可能になるようにする。

(4) 子供の自己追究における教師の支援

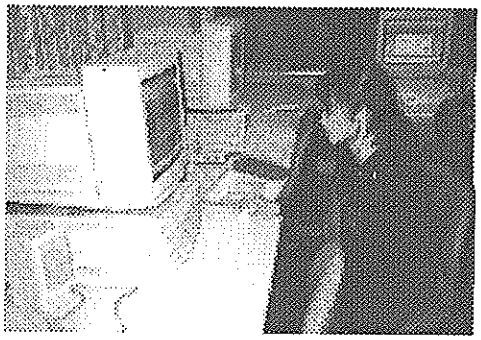
あらつのもの・人・ことを出発点とし，追究活動を活性化するために次のような支援を行う。

① 人材バンクづくり

地域「あらつ」で暮らす様々な人を発掘していくことである。例えば，あらつに住み西公園の生き物にくわしい人であったり，長年伝統を守りものづくりに励んでいる人であったり，健康づくりに取り組んでいる高齢者であったりなど「あらつ」に住み自分なりのこだわりをもった生き方をしている人の発掘に努めることである。そして，「あらつ学習」はもちろんのこ　と，各教科，道徳，特別活動で発掘した人を人材バンクにまとめ，子供の求めに応じて情報を提供したり，協力をお願いしたりする。

② 情報提供

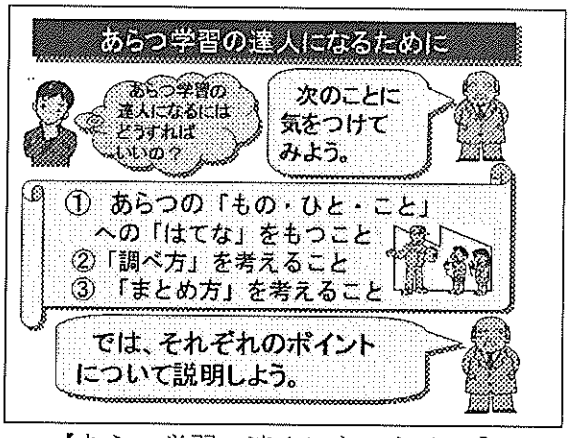
子供の追究が十分に進まないとき，他のグループの追究の過程を紹介したり，人材バンクや機関マップを提供し，Ｇ・Ｔとしての協力をお願いしたりする。情報提供の方法としては，本校のコンピュータネットワークを「あらつ情報ステーション」と名付け，インターネット活用などのリテラシーの習得が可能になるように整備している。



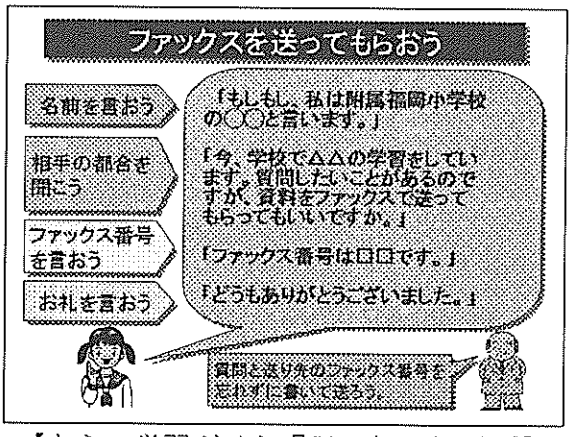
【あらつ情報ステーション】

③ あらつ学習のガイド作成

子供が課題追究のための情報収集の仕方やまとめ方を「あらつ学習ガイド」にまとめ，学び方が身に付くようにしている。具体的には，『もの・人・ことへの「はてな」の達人編』として，追究課題づくりの仕方を，『調べ方の達人編』として，情報収集の仕方を，『まとめ方の達人編』として，まとめ方などをいくつかの観点で示している。このガイドを使って子供が個別追究やグループ追究が可能になり学び方が身に付いていく。



【あらつ学習の達人になるために】



【あらつ学習ガイド『調べ方の達人編』】

④　ティーム・ティーチング

子供の追究の対象が広範囲に及び教師一人では対応できないとき，ＴＴ協力指導体制を行ったり，保護者への協力依頼を行ったりする。

(5) 評価について

子供の主体的な課題追究を通して，生活吟味，自己追究，内容創造，生活更新という過程像での子供の姿を評価していく。評価の観点は以下の４点である。

○　あらつのもの・人・ことに触れ合う中で疑問や矛盾，驚きなどから，子供自らが課題を見つけ，追究課題をもつことができたか。（生活吟味）
○　自己の課題解決に向けて，見学や調査，聞き取りなど情報収集の仕方やまとめ方などの学び方，ものの考え方を身につけることができたか。（自己追究）
○　知恵や心情を働かせ課題解決に取り組む中で，自己の応えを見出すことができたか。（内容創造）
○　知恵や向上的心情・調和的心情に支えられた自己の生き方を生活のなかで実践することにつながったか。（生活更新）

この４つの観点からあらつ学習における子供の姿を次のような内容・方法で評価する。

①　学習過程における随時的・肯定的評価を重視する。

子供は，あらつ学習を行う中で様々なことを体験し学んでいる。課題を見つけ考えたり，課題解決の方法を工夫したり，情報を収集し必要な情報を判断し処理したり，表現し発表したりするなど，その折々に見られる子供のよさや進歩の状況などを積極的に評価していく。つま　り，学習中に見られる子供の行動をその都度その都度，「励ましたり」「ほめたり」「アドバイスをしたり」などの言葉かけを通して随時に，そして肯定的に評価し，子供の学習意欲や態度を高めていく。

②　長期的・累積的な評価を重視する。

あらつ学習においては，子供の課題意識や課題解決の見通し，課題解決に向けて子供が手にした情報や情報の入手の仕方，知恵と心情を働かせて見出した自分なりの「応え」などが学習ノートにぎっしり詰まっている。つまり，一人一人の子供のあらつ学習の過程や結果に関する情報や資料が長期にわたり，目的的・計画的に蓄積され集積されている。その集積物を子供一人一人の長期にわたる累積的な個人データーとし，子供が目立って進歩した点や，工夫したり独自性のある発想，見出した生き方など，その子にとっての変化を大きな流れで把握していけるようにする。

③　プラスの自己評価，相互評価を重視する。

あらつ学習においては，次のような観点から自己評価を行わせる。

○　これから何をしたいか，どのようにしたらよいのかなど。（生活吟味）
○　結果だけでなく，情報収集やまとめ方で工夫したことや気づいたこと，うまくいったこと，努力したこと，失敗したこと，苦労したことなど。（自己追究）
○　これまでの自分と今の自分を比べて変わったこと，よくなったことなど。（内容創造）
○　他者から学んだこと，自分が他者に役立ったと思うことなど。（生活更新）

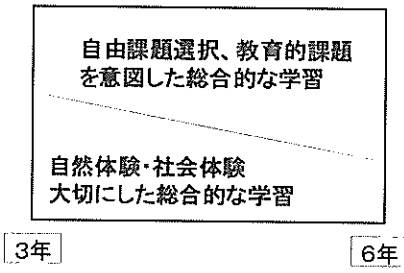
これらの観点からの自己評価を教師の指導だけで行うのではなく，子供たち同士で相互に評価していくことで自己評価力を高めていくことができる。自己評価力を高めることがあらつ学習のねらいを達成する上でも必要になる。

4．年間計画作成の考え方

(1) 単元配列の考え方

① 活動の様相から考える

【活動様相からの単元配列の工夫】



３年生では，生活科との関連を考慮し，自然体験や社会体験などを重視し，子供の興味・関心を大切にした「あらつ学習」の単元を配置し，対象とのかかわりの過程や学習の結果として，社会的課題に触れるようにする。そして，６年生に向かうにつれて自由課題選択や社会的課題を意図した「あらつ学習」の単元を配列する。

② 社会課題の応えの高まりから考える

あらつから生み出される「国際理解・協力」「環境」「生命」「情報」「福祉」「健康」「郷土」など，多様な視点からの応えの高まりを考慮し，単元の位置づけを考える。

○ 環境と自分
- 自然の素晴らしさへの実感から，環境問題の解決に向けてかかわるように配列する。

○ 福祉と自分
- ハンディをもっている方とのふれあいから，福祉的な課題の解決を図るように配列する。

○ 健康と自分
- 生活を基盤とした感覚的な体験から，多面的・科学的な体験へと発展していくように配列する。

○ 国際理解・協力と自分
- 異文化のよさに共感する体験から，世界的な問題を考えるように配列する。

○ 情報と自分
- 多様な情報伝達・表現の活用から，ネットワーク機能を生かした活用へと配列する。

○ 郷土・歴史・伝統文化と自分
- 子供にとって身近な事象を調べる活動から，空間的な広がりを求めて配列する。

○ 生命と自分
- 身近な動植物の興味・関心から，自分自身の命の連関への感受を大切にして配列する。

この単元配列にあたっては，子供の求めを基盤としており，単元に内容選択の視点が複数となり，関連づけられることが多い。また，学習対象の広がりについては，３年生から６年生までの発達段階による課題意識の実態に即した単元配列を工夫する。

③ 情報活用能力の高まりから考える

３年～６年までの全学年に「夏休み自由研究」という自由課題選択単元を位置づける。特に，６年生は，子供のより主体的な追究活動が行えるように「長崎フリータイム学習」「卒業研究発表会」という課題選択単元を位置づける。

④ 学校行事における子供の求めから考える

学校の特色がでるように，また，学級や学年の協同的な学びの育成，学校行事への主体的参加が図れるように３年～６年までの全学年に表現発表に重点を置いた「藤見学習」「月見学習」を位置づける。

(2) 年間計画における単元ごとの配当時数の考え方

年間計画の時間数の配当については，子供の求めが基盤となるものの，一般に一単元の配当時間を２０時間程度として考える。そのため，表現主題を併せもつ追究課題を設定し，学習の終末段階に発表・交流活動を意識させた単元構想を行うことを考える。

＜資料　本校で育てたい知恵と心情＞

下の表は，生活を更新していく過程で育まれる知恵と心情をあらつの地域性からの視点から表したものである。中学年では社会課題に触れる中で育つ知恵と心情，高学年では社会課題にするどく迫る中で育つ知恵と心情と考える。ここに記載した内容は，本校のあらつ学習の実践を通しての現時点での育てたい知恵と心情を示したものである。

学　年	中　学　年		高　学　年	
	知　恵	心　情	知　恵	心　情
環境と自分	・自分は自然とつながり合って生きていると考えることができる。 ・地域の環境をよくするための考えをもつことができる。	・身近な自然に対する素晴らしさを感じ取ることができる。 ・身近な地域の美化に努めようとする。	・環境問題と社会のシステムや生活様式はかかわり合っているという考えをもつことができる。 ・地球規模の環境問題を解決していくための多面的な考えをもつことができる。	・人間は自然の生態系に組み込まれていると感じ取ることができる。 ・地球的な視野に立った環境の創造のために進んで行動しようとすることができる。
福祉と自分	・地域の身体の不自由な方やお年寄りのために役立とうとする考えをもつことができる。 ・身体の不自由な方やお年寄りと真心をもって接しようとすることができる。	・一緒に過ごすことの楽しさを味わったり，他者を敬い真心をもって接したいと思う。 ・かかわり方を互いの気持ちを大切にしながら高めていきたいと感じ取ることができる。	・障害をもつ方やお年寄りがおかれている社会的状況や地域，我が国の福祉的な課題についての考えを深めることができる。 ・障害をもつ方やお年寄りの初歩的な介護などのかかわり方を考えることができる。	・共に生きるために，他者を尊敬したり尊重したりする大切さを感じ取ることができる。 ・自分が高齢者になったときも生き甲斐をもち生き生きと生きていきたいと願う。
健康と自分	・健康な生活や自己の体を高めることについての考えや関心をもつことができる。 ・身体の変化や生活のリズムに応じた生活習慣について考えることができる。	・健康の保持増進を目指して，生活を改善していこうとする。 ・自己の体の発達や生活環境に応じて，生活を調整しようとする。	・健康で安全な生活の仕方や心の発達，不安や悩みの対処の仕方について多面的に考えることができる。 ・心の変化や健康上の課題に応じた生活習慣についての考えを深めることができる。	・健康の保持増進を目指して，よりよい方向へ多面的に生活を改善していこうとする。 ・自己の心身の発達や社会環境に応じて生活を調整していこうとする。

国際理解・協力と自分	・日本文化と異文化のそれぞれのよさを考えることができる。 ・異文化の人と楽しく交流していくことができる。	・異文化を尊重しようとする。 ・異文化の方との交流を深めようとする。	・世界のなかでの日本の役割や立場を多面的に考えることができる。 ・環境や資源等の世界的な問題についての解決の方向を探ることができる。	・異文化を尊重し，外国の人と共に生きようとする。 ・グローバルな視点で問題を解決しようとする。
情報と自分	・自分に必要な情報を選択したり，情報手段を組み合わせて表現したり，他によく分かるように伝えたりすることができる。	・自分が表現し発信する内容に責任をもつ。 ・相手の情報を大切にし取り扱う。	・目的に応じて必要で十分な情報を選択したり，情報手段を選択し組み合わせて表現したり，効果的に双方向的に伝え合ったりすることができる。	・ネットワーク上のルールやネチケットを意識し，相手を思いやった受信・発信をしようとする。
郷土・歴史・伝統文化と自分	・あらつのもの・人・ことから歴史や伝統，人の生き方についての考えをもつことができる。 ・あらつのよさを広めたり深めたりすることができる	・あらつのよさを実感し愛着をもつ。 ・あらつのもの・人・ことを大切にしようとする。	・母校，あらつ，博多などの歴史や伝統についての考えを深めることができる。 ・それぞれのよさを受け継いでいくことができる。	・母校，あらつ，博多の歴史や伝統についての誇りと愛着を感じ，大切に受け継いでいこうとする。
生命と自分	・あらつに見られる動植物の生態や特性，生育環境について考えることができる。 ・動植物に関心をもってかかわることができる。	・生命の素晴らしさを実感する。 ・自然のなかで生きる命の尊さを感じる。	・次の世代につなぐ新たな命の連続に向けて今の自分の命があることを深く考えることができる。	・家族や祖先とのつながりのなかで，育まれてきた命の大切さや尊さを感じる。

第３学年　あらつ学習年間計画

平成１１年度実施

単元例(時間・視点・ねらい)		予想される学習展開の概要
4月	**みんなで表そう!藤見学習** （６時間，伝統と自分） ○　藤の花を祝っての藤見学芸会で春にふさわしいテーマを劇や歌などで学級全員によって表す活動を通して，新しい学級での人間関係をつくる。	(1)　新しい学級で，目指す学級像について話し合う。 (2)　自分たちで表したい内容や方法について話し合い，練習の計画を立てる。 (3)　藤見学芸会でがんばったことを絵や作文でまとめる。 《藤見学芸会については，学校行事にて実施》
5月	**あらつウォークラリー** （１０時間，郷土と自分） ○　学校周辺にある社会施設や自然催しなど探索したり，発見したことやあらつの様子をマップに表したりする活動を通して，地域の環境について概観する。	(1)　港や唐人町，大濠などの各方面を歩き，施設や自然の様子を観察する。 (2)　気に入った様子について再度観察に行き，探検したことを絵カードに表す。 (3)　調べたことを発表し合い，地図に表す。
6月	**西公園こだわりしらべ隊!** （１１時間，環境と自分） ○　西公園の自然や施設，かかわっている人々など自分が興味を抱いたことについて，調査・聞き取りをして，西公園の自然や利用するよさ，地域にある公園のよさを感じたり，西公園の価値を考えたりする。	(1)　西公園にかかわる人々をゲストに西公園を探索する。 (2)　自分が興味をもった課題「自然」「お気に入りスポット」「移り変わり」で観察したり，西公園を訪ねる人に聞き取ったりして調べ，西公園マップをつくる。 (3)　西公園の自然が減少してきている変化の様子に気づき，自分たちで西公園を守る活動を考え，実践する。
7月	**カブト虫牧場をつくろう** （８時間，生命と自分） ○　カブトムシなどの昆虫の卵のふ化や幼虫からの飼育を体験し，生命の不思議さやすばらしさを感じ取り，生命を大切にしようとする心情を養う。	(1)　昨年度カブトムシを育てた４年生からカブトムシの話を聞き，卵を受け継ぐ。 (2)　カブトムシの飼育についてカブトムシ牧場の方などから聞き取る。 (3)　カブトムシの飼育を日記としてまとめる。
9月	**楽しさいっぱい!夏休み自由研究** （９時間，自分） ○　自由研究のテーマ設定や進め方について知り，自分のテーマに応じた内容や研究方法を見通し，１つのことをやり遂げる成就感や達成感を味わう。	(1)　２年生までの自由研究のテーマや３年生１学期の学習を振り返り，自分のテーマをつくる。 (2) テーマ別の調べ方やまとめ方について調べる。 《自由研究は夏休み中に行う》 (3) 自由研究の過程や結果についてまとめる。 《自由研究発表会は学校行事にて実施》

9月	**月までとどけ!みんなの月見学習** （6時間，伝統と自分） ○　学校や学年，学級で決めたテーマをもとに，表現内容や方法を話し合い，内容を劇や音楽などで表していく活動を通して，伝えたいことを豊かに表現する。	(1)　月見学芸会で表したいことを学年や学級で話し合う。 (2)　劇や合奏などの表した方を決めて，練習する。 (3)　月見学芸会に取り組んだ過程や学芸会での感想をまとめる。 《月見学芸会は学校行事にて実施》
10月	**育てよう!附小とよのかいちご** （１０時間，郷土・環境と自分） ○　博多名物の博多とよのかいちごを農家の方と一緒に栽培する活動を通して，土を整える大切さや福岡の特産としてのとよのかいちごをつくる地域の人々の工夫や努力を感じ取る。	(1)　福岡の農家の方がつくった「博多とよのかいちご」を試食し，苗をいただく。 (2)　農家の方を招いて，土の作り方や育て方について調べる。 (3)　育てる過程を記録するとともに，いちごの収穫祭をおこなう。
11月 12月	**ボランティアサークル あらつっ子** （１７時間，福祉と自分） ○　自分の身近にいる体の不自由な人(視覚障害者)とかかわる活動を通して，ハンディキャップをもつ人々とかかわるための知識・技能を身に付けるとともに，一緒に過ごす楽しさを感じる。	(1)　福岡市市民福祉プラザを見学したり，キャップハンディ体験をしたりして，自分の身の回りにいる体の不自由な人とのかかわりを掘り起こす。 (2)　身近な体の不自由な人(視覚障害者)についての情報やかかわり方について調べ，交流の計画を立てる。 (3)　身体の不自由な方との交流会を計画・実践し自分のかかわり方を振り返る。
1月	**なるほど，なっとく 博多の正月・世界の正月** （１２時間，郷土・国際理解と自分） ○　福岡の正月行事や正月に食べる物，世界の正月を紹介してくれる人などと一緒に福岡ならではの正月や世界の正月を体験し，地域から世界へと目を広げる。	(1)　自分の家での正月の様子を話したり世界の正月の様子と比べたりする。 (2)　博多や世界の正月行事や食べ物についてゲストの人と楽しむ。 (3)　正月の様子について調べたことを劇や紙芝居でまとめる。
2月 3月	**伝えよう!わたしたちのまち福岡** （１６時間，郷土・情報と自分） ○　一年間のあらつ学習をもとに，あらつや福岡のよさを他の地域の友達に伝えたり，友達の地域と比べたりして情報活用力を高め，これからの福岡のことを考える。	(1)　一年間のあらつ学習で印象に残ったことを話し合い，自分が伝えたいことや伝える相手を考える。 (2)　伝えたいことを附属小ホームページにのせるためにコンピューターを利用する。 (3)　伝えた相手との交流を図り，それぞれの地域について比べる。

第４学年　あらつ学習年間計画

単元例（時間・視点・ねらい）		予想される学習展開の概要
４月	**みんなで表そう！藤見学習** （６時間，伝統と自分） ○　藤見学芸会で「春」をキーワードにした表現内容を考え，合唱や合奏，劇などの表現方法を工夫する活動を通して，新しい学年の希望や学級の凝集性を高める。	(1) 新しい学年・学級になって，全校に発表していきたいことを話し合い，テーマ（表現内容・方法）を決定する。 (2) 自分たちが設定したテーマが全校児童に伝わるように，表現の仕方を工夫する。 (3) 藤見学芸会で全校児童・保護者に発表する。
５月	**ぼくはわたしはあらつっ子** （１６時間，郷土と自分） ○　あらつの自慢調べに意欲的に取り組むとともに，あらつにあるものについての愛着を深め，あらつのよさを実感することができる。	(1) あらつの街を歩き，あらつにあるもの・ひと・ことにふれ，自慢になるものを話し合い，追究課題を設定する。 ・古いもの　・きれい，面白い　・自然 ・街を思う人々　等 (2) 追究対象グループを編成して調べ，調べたことを交流し合う。 (3) あらつのよさを他に向けて発信する。
６月	**長浜ラーメン紀行** （16時間，郷土・国際理解と自分） ○ 長浜ラーメンをきっかけに，おいしいラーメンの作り方や人気の秘密，ラーメンの起源や歴史などを調べ，郷土の味のすばらしさを感じ取る。	(1) 長浜ラーメン街に出かけ，自分で店を選んで試食したり，食べた経験や知っていることを出し合い，追究していくテーマを設定する。 (2) ラーメンの起源や全国のラーメン，ラーメンの栄養，ラーメンと博多などの個人やグループのテーマに従って，ラーメンを巡る様々なことを実地調査やインターネット，ラーメン店などで調べる。 (3) 学習の成果について，ラーメンを食べるワークショップなどを展開して，報告し合う。
７月 ９月	**楽しさいっぱい！　夏休み自由研究** （９時間，自分） ○　夏休みの自由研究に向けて，テーマ設定や追究の方法，表現方法について計画を立て，研究に取り組み，その成果を相互評価していく中で，研究に挑戦する楽しさを味わう。	(1) １学期学習したことの中から興味をもったことや，生活の中で疑問に思うことを出し合い，研究テーマ・研究方法を決定・計画する。 (2) 自分のテーマに従って，調査・体験をしながら，成果を表現物にまとめる。 (3) 自由研究発表会（学級・全校）を行い，お互いのよいところや学んだところについて交流する。
９月	**おとなりの国　韓国調べ隊！** （１３時間，国際理解と自分） ○　福岡に最も近い外国である大韓民国に興味をもち，自分が調べたいことを課題として設定し，情報収集や体験を通して調べたり，調べたことを表現したりできる。	(1) 身近な人や福岡の韓国とのつながりを話し合ったり調べたりして，課題を設定する。 (2) 自分の課題で韓国のものについて調べ，調べたものを表現物にまとめる。 ・キムチ　・チョゴリ　・名所など (3) 調べ活動にかかわっていただいた方を招き，「韓国の魅力報告会」を開く。

9月	**月までとどけ！みんなの月見学習** （６時間 伝統） ○ 学校や学年で決めたテーマについての，表現内容や方法を考え，自主的な活動によって，相手意識をもって豊かに表現していくができる。	(1) 学校や学年のテーマから，自分たちの学級で表現する内容・方法を話し合う。 (2) 自分たちの決めた表現内容・方法によって，よりよく相手に伝わるように工夫する。 (3) 月見学芸会で発表し，お互いの表現のよさを認め合う。
10月	**守ろう！みんなの室見川** （１２時間，生命・環境と自分） ○ 生活を支える室見川に関心をもち，室見川の様々な様子を調べる活動を通して，水への見方・考え方や室見川を守っていこうとする意識を高める。	(1) 室見川を上流から下流に向かって探検し，それぞれの場所にすむ生き物や川の様子を調べ，自分の学習課題を設定する。 (2) 自分の課題を解決するために，川を再度上流に向かってさかのぼっていったり，聞き取り調査をしたりする。 (3) 川と自分たちの生活とのかかわりを自分なりに見つめ直し，自分にできる実践を決める。
11月 12月	**お年寄りと楽しくかかわろう** （８時間，福祉と自分） ○ デイサービスセンターに通う老人の存在を知り，見学や交流をとおして，一緒に活動したいという願いをもち，お年寄りの方の求めや自分の得意なことでふれあう計画を立て，交流を図り，お年寄りの方と共に過ごす楽しさや年齢のすばらしさを感じ取ることができる。	(1) デイサービスの意味を知り，デイサービスセンターに見学に行く。 (2) デイサービスに通うお年寄りとふれあう計画を立てる。 ・お年寄りの願いを聞き取る。 ・お年寄りや自分の得意なことから，ふれあうための方法を考え，計画を立てる。 (3) デイサービスセンターのお年寄りとの交流会を開く。
12月 1月	**クリスマスコンサートをしよう** （１９時間 郷土・国際理解と自分） ○ 外国の方と交流する活動を通して，日本との違いや人間としての共通性に気付くと共に，異文化をもつ人とふれあう楽しさを味わうことができる。	(1) 外国の方とふれあい，交流を深めていく計画を立てる。 (2) 交流対象や交流方法でグループをつくり，交流計画を立てる。 ・ゲーム　・歌，踊り　・製作活動 (3) 交流会を開き，分かったことや楽しかったことを発表し合う。
2月 3月	**福岡よかもんネットワーク** （16時間，郷土・情報と自分） ○ これまでに追究してきた地域のもの・こと・人のすばらしさや自分なりの思いや考えを，方法を工夫しながら，他地域に発信するなかで，郷土への愛着を深めるとともに，情報活用力を高める。	(1) １年間のあらつ学習の中で，一番気に入った学習や自分の生き方の参考になった学習を出し合い単元別のグループをつくる。 (2) 単元別のグループで伝えたい相手を選び，伝える方法を考え，伝える方法について準備をする。 (3) 伝えたい相手からの返信をもとに，自分たちの１年間のあらつ学習についての感想をまとめていく。

第５学年　あらつ学習年間計画

	単元例（時間・視点・ねらい）	予想される学習展開の概要
4月	**感動表現！藤見学習** （８時間，伝統） ○　藤見学芸会の歴史や願いを調べ，それらをもとに，高学年としてふさわしい内容を話し合い実践する活動を通して，学級の成員や高学年としての自覚を高める。	(1) 藤見学芸会の歴史を調べ，100 年以上も続く理由について話し合い先輩の思いや願いを感じ取る。 (2) 高学年として，その思いや願いを引き継ぐとともに，学級のカラーを伝える表現の場にふさわしい表現内容を出し合い，決定する。 (3) 表現内容に応じて役割分担を行い，よいよい表現を目指して表現づくりを行う。 (4) 藤見学芸会を通して，学級の凝集性を高めるとともに，附属福岡小学校の高学年としての自覚を高める。
5月	**未来に残そう！きらめく博多湾** （１４時間，環境と自分） ○　博多湾と自分の生活とのつながりを調べ，博多湾の生態系や施設についての課題追究を行うことを通して，博多湾への愛着を深めたり，かかわり方を見直したりする。	(1) 博多湾の自然や施設を外観し，自分の生活との関係について話し合い，追究対象や課題を話し合う (2) 港湾施設の機能や役割，湾内の自然の生態系について調べ，調査結果を表現物に表す。 (3) 調査結果を交流し，港湾施設や湾内の自然と自分たちの生活との関係について考え，これからの博多湾と自分とのかかわりを見通す。 (4) これからの博多湾との望ましいかかわり方についてシンポジウムを行い，かかわり方を実践する。
6月	**調べよう** **博多のまち　博多の心** （１３時間，郷土と自分） ○　音楽科で出合った「博多の唄」の歌詞の世界から，むかしの博多や荒津の様子に関心をもって調べる活動を通して，博多の人の気質や伝統に愛着を感じる。	(1) 音楽科の「歌い継ごう!博多の唄」の学習をもとに，博多や荒津のまちなどについて調べたいと思ったことを話し合う。 (2) 博多の唄の歌詞に出てくる地域や言葉などに関心をもって自分の課題を決めて調べる。 (3) 自分の課題で調べたことをポスターセッションで紹介し合い，博多のまちの移り変わりや大切にされていること，博多らしさについて話　し合う。
7月	**個性輝く！夏休み自由研究** (9時間，自分) ○　夏休み自由研究に向けて，研究の対象や課題の設定の仕方を知り，自分の課題に応じた追究内容や方法の見通しをもち，課題解決に取り組むとともに，研究の成就感を味わう。	(1) １学期のあらつ学習のなかから，さらに発展的に追究したい対象を設定し，調査・研究の計画を立てる。 (2) 計画に従い，調査・研究を行うとともに，その経過や結果を表現物にまとめる。 (3) 学級の夏休み自由研究発表会で，自分の追究について発表し，相互評価して，学級の代表者を決定する。 (4) 高学年の夏休み自由研究発表会で，代表者の調査・研究内容や各学級の自由研究を見学する。
9月	**創造発信！月見学習** （８時間，伝統と自分） ○　高学年にふさわしい月見学芸会での表現内容を話し合い，計画立案から実践までの役割分担を決め，自主的に運営する。	(1) 藤見学芸会の経験をもとに，表現内容を出し合い，高学年にふさわしい内容を決定する。 (2) 表現内容に応じて役割分担や練習計画の立案を行い，よりよい表現を目指して自主的に表現を創る。 (3) 月見学芸会での発表を通して，みんなで表現する喜びを味わう。

10月 11月	**守ろう! これからの福岡の水と緑** （１６時間　環境と自分） ○　福岡における環境問題の原因を自分の生活との関係で調べ，これからの水資源や森林資源などを保護するキャンペーンを行うことを通して，地域の環境問題に関心をもち，自分の生活を見直す。	(1) 社会科で学習した環境破壊の原因について，福岡を中心に「まもるーむ福岡」で調べる。 (2) 大気汚染，水質汚濁，酸性雨など，自分で選んだ課題について福岡での現状を調べる。 (3) 福岡の環境保護を進めるために，自分たちの生活を見直し，地域の環境保護に向けたあり方を話し合う。 (4) 環境の保護・創造に向けた実践を行う。 (5) 互いの活動の様子について報告し合う。
12月	**手話で仲良くこんにちは** （１７時間，福祉と自分） ○　聴覚障害をもつ子供たちと手話を通して、聴覚障害をもつ子供たちとのかかわりを深める。	(1) 聴覚障害をもつ子供の存在を知り，一緒に遊ぶ。 (2) 手話ボランティアの方の生き方や願いを知り，自分も手話を通して、聴覚障害の子供とのかかわりをつくる。 (3) 聴覚障害をもつ方を招き，手話を通したゲームや演劇を行い、交流する。
1月 2月	**健康への扉を開こう! ～あらつ健康ウォッチング～** （１５時間，健康・福祉と自分） ○　あらつにおける健康ウォッチングを通して，自分たちの健康について意識し，人々の様々な健康に対する見方・考え方や具体的な行いを調べると共に，自分たちの健康づくりの実践活動をつくり発信していく。	(1) 西公園や大濠公園の健康ウォッチングを交流して，健康に対する思いや願い，行い方を知る。 (2) あいれふ福岡での健康度測定や生活習慣病についての講話をもとに，自己の健康を見つめ，不規則な生活の改善を課題としてとらえる。 (3) 健康を支える３つの視点(運動・栄養・休養)からかかわる対象を選択し，追究グループで自分なりの行い方を実践と相互評価を繰り返してつくりだす。 (4) 生み出した健康法を全校に発信したり地域の健康フェスタなどで発表したりして，健康な生活への実践意欲を高める。
2月 3月	**附属福岡小歴史探訪 ～希望と誇り～** （１２時間，伝統と自分） ○　附属福岡小学校の施設や人などにおける歴史を調べ，附属小学校の歴史と伝統の重みを実感するとともに，これからの時代を担う最上級生への意識をもつ。	(1) 歴史を伝えるものを探す学校探検を行い，それについて調べる。 (2) 自分の追究したいもの・人・ことについて決め，追究の仕方について話し合う。 (3) 追究課題別のグループで，もの・人・ことについて追究し，それらに込められている思いや願いを知る。 (4) 追究したことをポスターセッション形式で交流し，附属小学校への愛着を深める。 (5) 新たな課題について調べたり，全校に向け情報発信したりする。

第６学年　あらつ学習年間計画

	単元例（時間・視点・ねらい）	予想される学習展開の概要
4月	☆　オリエンテーション 「６年のあらつ学習」 ○　あらつ学習を振り返り，卒業を前に小学校生活のまとめとする学習への見通しをもつ。	(1) これまでのあらつ学習や教科学習での経験について話し合う。 (2) ６年でのあらつ学習の年間のスケジュールから，自分のテーマを模索していく見通しをもたせる。
	感動表現！藤見学習 （６時間，伝統と自分） ○　藤見学芸会の表現内容や幕間の出し物の企画・運営について話し合い，自分たちの手で藤見学芸会を創り上げていく活動を通して，最上級生としての意識を高める。	(1)　最上級生としてふさわしい学級や学年像について話し合う。 (2)　自分たちで表したい内容や方法について話し合い，練習の計画・立案，実践をする。 (3)　藤見学芸会での成果を絵や作文でまとめる。 《藤見学芸会については，学校行事にて実施》
5月 6月	ようこそ先輩！開こう，未来の扉を （１３時間，自分） ○　自分の夢を実現された附属福岡小学校の先輩たちと共に，自分の希望や夢について語り合い，先輩の生き方を追体験することで，自分の生き方について考えることができる。	(1)　先輩方や身近な人たちから生き方を追体験したことを振り返り，自分の希望や夢について話し合う。 (2)　夢を実現された先輩方の話を聞き，夢について話し合う。 (3)　先輩たちや身近な人たちと共に夢について考えたり，追体験したりして「希望と誇り」交流会を開く。
7月	地球環境会議を開こう （１５時間，環境・国際と自分） ○　福岡市における身近な環境問題をもとに，地球規模の環境問題について考え，自分にできることを実践したり，福岡市の将来の環境のあり方について市に提案したりする。	(1)　これまでに出会った福岡市や全国，世界の環境問題を出し合いそれらの原因について話し合う。 (2)　環境を守るために取り組まなければならないことについて対策を調べる。 (3)　自分にできることを実践したり，福岡市の将来の環境のあり方について市に提案したりする。
9月	夏休み自由研究 卒業研究中間発表会 （９時間，自分） ○　夏休み自由研究に向けて，テーマ設定や追究の方法，表現の方法について自分なりの計画を立て，研究を積み重ね，互いの成果を認め合い達成感を味わう。	(1)　５年生までの自由研究のテーマや６年生１学期の教科等の学習やあらつ学習を振り返り，自分のテーマを決める。 (2) テーマ別の調べ方やまとめ方について調べる。 《自由研究は夏休み中に行う》 (3) 自由研究の過程や結果についてまとめる。 《自由研究発表会は学校行事にて実施》
	創造発信！月見学習 （６時間，伝統と自分） ○　最上級生としてのラストメッセージを劇や歌などを通して全校に伝えることで，小学校生活最後の学芸会の思い出を創る。	(1)　小学校生活最後となる月見学芸会で表したいことを学級や学年で話し合う。 (2)　劇や合奏などの表した方を決めて，練習する。 (3)　月見学芸会に取り組んだ過程や学芸会での感想を表現物にまとめる。 《月見学芸会は学校行事にて実施》

10月 11月	長崎フリータイム学習 （１８時間，国際・生命と自分） ○　修学旅行における追究課題や行動日程などの計画立案を自分たちの手で行い，その計画に沿って長崎見学をすることで，主体的に追究する楽しさや大きな行事を自分たちの手でやり遂げる喜びを味わう。	(1)　修学旅行の意義を話し合い，長崎市を中心とした追究対象を決め，課題別グループをつくる。 (2)　課題別グループごとに追究の計画を立て，文献や資料による事前調査を行う。 (3)　追究対象についての追究をグループごとに行う。 (4)　フリータイム学習の成果を表現物にまとめ，発表会を行う。 《フリータイム学習は学校行事にて実施》
12月	発進!発信! あらつ情報ステーション （１６時間，情報と自分） ○　これまで学習した荒津のよさや自分たちの思い・考えを発信する活動を通して，情報社会への参画の在り方を考えると共に，情報手段としてのコンピューターの活用についての技能を身に付け，ルールや責任を自覚する。	(1) ウェブサーフィンを楽しむ中で，自分たちの情報発信への思いや願いをもつ。 (2) こだわりグループで「あらつ情報ステーション」づくりに取り組み，課題追究する。 (3) これからの「あらつ情報ステーション」の在り方を考えて，実践する。 (4) 児童集会の中で，自分たちの取り組みやつくったホームページの活用の仕方などについて全校に発表する。
1月 2月	チャレンジ！ホームヘルパー （１２時間，福祉と自分） ○　当仁，荒戸地区に住む独居老人との出合いから，地域の福祉の現状にふれ，自分で独居老人の方の世話をする活動を通して初歩的な介護の技術を身に付けるとともに，現代社会が抱えている福祉の問題について考える	(1) 当仁，荒戸地区の老人会とのふれあい活動を通して，独居老人の存在を知る。 (2) 独居老人の方の家庭を訪問し，状況を調べると共に，願いを聞き取り，自分にできるホームヘルパーとしての技術を身に付ける。 (3) 自分が訪問する独居老人の方へのお手伝いを考え，実践する。
3月	卒業研究発表会をしよう （１６時間，自分） ○　あらつ学習の中で特にこだわりをもった課題についてさらに追究を深め，卒業研究としてまとめ相互交流することで，研究をやり遂げた達成感や満足感を味わい，中学校生活へ期待をふくらませる。	(1)　あらつ学習で印象に残った体験や特にこだわりをもった課題について話し合い，さらに追究したいことや伝える相手を話し合う。 (2)　これまでの学び方を生かして，課題追究を行う。 (3)　追究結果を表現物にまとめ，お世話になった方々を招待して卒業研究発表会を行う。

あらつ学習実践事例（第３学年）

(1) 単　元　　西公園こだわり調べ隊

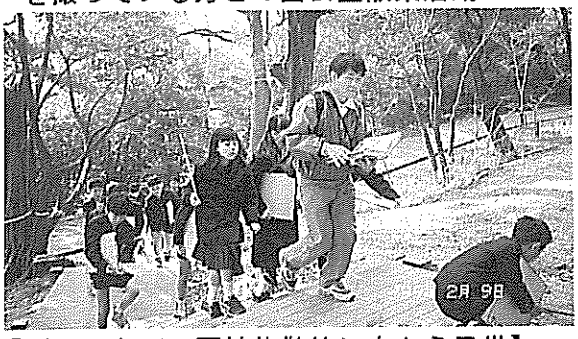
(2) 本単元の考え方

本単元は，西公園の植物や動物，石碑，西公園から見える景観など西公園のもの・人・ことのなかから自分がこだわりをもった学習対象を追究しながら，環境の大切さを考える知恵と西公園のよさを実感し大切にしようとする心情を高めていくことがねらいである。そのために，西公園に愛着をもっている方との散策活動，こだわり調べ隊の編成と調査活動を位置づけ，自分なりの応えを見出す学習を考える。

(3) 学習の実際

西公園近郊に住んでいて，西公園の動植物，景観，昔の西公園に愛着をもっている方との西公園散策活動を行った。子供たちは，珍しい植物や動物，西公園からの眺め，昔の遊びなど，今まで気づかなかった西公園との魅力ある出会いを楽しんだ。そして，次のようなこだわりをもった。(生活吟味)

○　２０年間，毎日西公園に来て，植物の写真を撮っている方との西公園散策活動

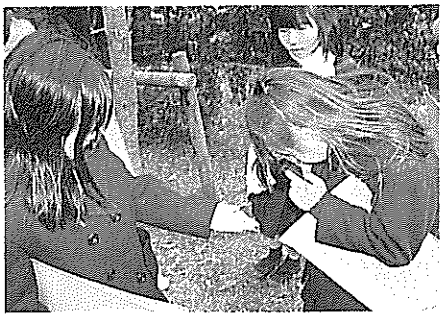


【ゲストと西公園植物散策に向かう子供】

わたしは江口さんと西公園をまわったとき，もうなくなりそうな植物やなくなった植物があると聞いて西公園にどれくらいの植物があるのか興味をもちました。そして，キランソウ，別名医者いらずやオドリコソウなど薬になる大事な花や珍しい花が西公園にあることに驚きました。(中略)
わたしは，西公園にある珍しい花や草を図鑑を使ったり，江口さんと一緒にまわったりして調べたいと思いました。

【散策活動を通しての子供のこだわりの現れ】

子供たちは，西公園の植物，動物，昔の西公園，西公園お気に入りスポットという４つの対象別グループに分かれ計画を立てさせてから追究活動に入った。植物グループに入ったＡ児は，５人でスズラングループをつくり，西公園の植物調査を行った。植物図鑑を手に西公園に出かけては写真を撮ったりスケッチしたりして植物の名前と生息場所を調べていった。分からないものについては，インターネットで検索した。そして，西公園の植物をみんなに知らせるために，写真入りのカードを作り，気づいたことや特徴を図鑑にまとめていった。また，生息場所は拡大マップに表した。そして，「西公園の植物がなくならないように守っていきたい」という応えを見出した。各人が追究したことを紹介し合う交流会を行った。そして，どんな西公園が好きなのかを話し合った。「西公園にはなくなっている花もあるので，わたしが調べた植物を大事にしてもらうようにチラシをつくって配りたいです」など，西公園を大事にしようとする心情に支えられ，今後のかかわり方を決定した。(自己追究・内容創造)



【写真を撮り植物調査を行うＡ児】

子供たちは，自分が調べた植物や昔の西公園のことなどをパンフレットにまとめ配布したり，西公園清掃をしたりした。そして，利用者から賛同の手紙を頂き，自分たちの活動の価値を強化した。(生活更新)

【利用者にパンフレットを配布するＡ児】

あらつ学習実践事例（第３学年）

(1) 単　元　　カブトムシ牧場をつくろう

(2) 本単元の考え方

本単元は，自分のカブトムシという意識をもった飼育活動が主な活動である。子供たちは，カブトムシの育て方についての情報収集やカブトムシに詳しい方への聞き取り調査などを行いながら生き物に関わる力（知恵）を発揮していく。その中で，生命の尊さや素晴らしさを実感し（調和的な心情），元気なカブトムシを育てたいという願いやより多くの人にカブトムシと関わることの素晴らしさを知ってもらいたいという思い（向上的な心情）を働かせながら生き物と自分の関わりについての自分なりの応えを見出していくことをねらいとしている。

(3) 学習の実際

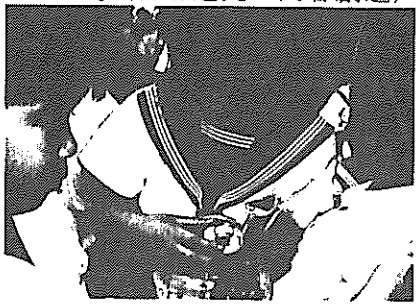
子供たちは，自然の中に生きているカブトムシと関わった経験をあまり持っていなかった。そこで，カブトムシ牧場に行くことにした。ここでは，自然の中に生息するカブトムシの様子に驚いたり，実際に手に触れたりしながらカブトムシに対する関心が高まっていった。そして，自分達の手でカブトムシを育てたいという願いを持つようになっていった。（生活吟味）

【カブトムシ牧場の中田さんとの出会い】

【カブトムシとの出会い】

子供たちは，一人ずつカブトムシを育て，わからないことがでてきたときには，図書資料を活用したり，カブトムシ牧場の中田さんに問い合わせたりといった調査活動が行われていった。この中で，子供たちは自分のカブトムシに対する愛着を強く抱くようになっていった。また，幼虫からさなぎへと姿を変えていく様子に驚きや感動を感じ，生命の力強さを実感していった。（自己追究・内容創造）

【自分が育てる幼虫との出会い】【飼育箱からのさなぎの取り出し】



【飼育容器でのさなぎの観察】

さなぎから羽化できないカブトムシや角や羽が変形しているカブトムシなどと出会い，自分のことのように悲しみを表情に表す子供もいた。しかし，頑張って生きているカブトムシの姿からたくましく生きている力強さや生きることの厳しさを感じ取ることができていた。そして，この素晴らしいカブトムシと自分たちとの関わりを全校のみんなに紹介したいという願いから，校庭に自分たちのカブトムシ牧場をつくり紹介していった。この中で産まれた卵は次の学年に「私たちの育てた命」として引き継ぎ，翌年の月見学芸会では，カブトムシとの関わりを表現する劇をつくり，カブトムシとのかかわりの素晴らしさを紹介していった。（生活更新）

【子供たちのカブトムシ牧場】

あらつ学習実践事例(第３学年)

(1) 単元　　ボランティアサークル　あらつっ子

(2) 本単元の考え方

本単元は，あらつの地域にある福岡市市民福祉プラザなどの障害をもつ方やお年寄りなどに役立つ施設があることや障害を持つ方とのかかわり方に気づく知恵や，障害をもつ方と一緒に過ごすことの楽しさを味わい，相手を敬い真心で接しようとする調和的心情，自分のかかわり方を見直し，高めようとする向上的心情を働かせて，自分なりの応えをつくることがねらいである。そのために，あらつの地域にある福岡市市民福祉プラザ(ふくふくプラザ)での施設見学などで，障害をもつ方の存在を身近に感じ取ったり，アイマスクなどのキャップハンディ体験を通して，障害をもつ方の生活などへの関心をもったりする活動，身体の不自由な方とのふれあいを考える活動，実際のふれあいの活動を中心に位置づけ，自分の応えを学習の流れと考える。

	生活吟味 --------->	自己追究・内容創造 --------->	生活更新
学習活動	１．市民福祉プラザでの施設見学やキャップハンディ体験から，追究課題について話し合う。	２．アイマスク体験から，目の不自由な方の生活などについて知り，ふれあいの活動別のグループで，目の不自由な方とふれあう方法を考える。	３．目の不自由な方とのふれあいを実践し，継続的なかかわりをもつ。

(3) 学習の実際

① 生活吟味(市民福祉プラザでの体験活動から障害をもつ方への関心をもつ)(１～5/１７)

子供たちは，学校近くの市民福祉プラザに，たくさんの人が集まっている様子や写真などから，施設への関心をもち，見学に行くことにした。なかに入るときには，「ピンポン」と音が鳴ることや廊下に点字ブロックがあることなど，他の施設との違いに気付きながら，見学を進めた。施設の中では，主に，福祉図書館や録音室，介護・福祉用品の展示コーナーなどを回り，施設の仕組みなどを職員の方に質問して調べていくなどの活動をおこなった。次に，キャップハンディ体験として，アイマスク体験をおこなった。子供たちは，施設内をアイマスクをして歩いたり，唐人町周辺を歩いたりして，目の不自由な方の生活への関心をもつとともに，自分たちの今までの目が見えることへの気づきをもち始めていた。それらの体験を教室に帰って話し合い，自分のこれからの追究課題について明らかにしていった。

【施設見学の様子】

【アイマスク体験】

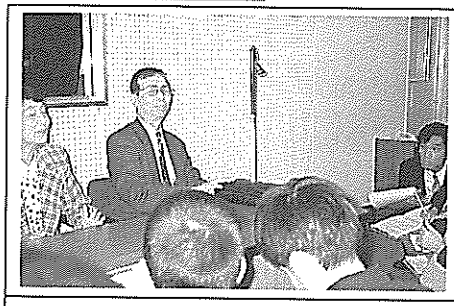
【ふくふくプラザの方の話】

子供たちは，目の不自由な方の生活やふれあってみたいという関心をもつことができ，主に，次のような課題を設定することができた。

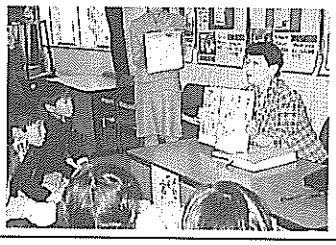
【子供たちの追究課題】○目の不自由な方は，どんな生活をしているのだろう。○目の不自由な方にとっての施設や品物には，どんなものがあるだろう。○目の不自由な方とふれあうためには，どんなことが大切だろうか。○目の不自由な方とふれあうことができるか。

② 自己追究・内容創造(目の不自由な方の生活調べやふれあいの活動を考える)(6～13/17)

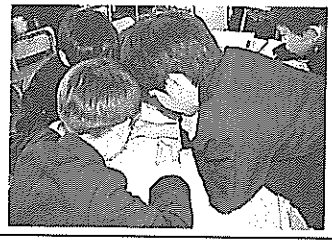
目の不自由な方の生活について調べるために，目の不自由な方をゲストとして，教室へ招き，どんな生活をしているのか聞き取って調べることにした。教室内には，目の不自由な方と一緒にボランティアサークルの方が来られた。子供たちは，目の不自由な方には，どんな生活をしているかについてや，困ったことや不便なことはないか率直に聞き取っていった。子供たちは，そのなかで，目が見えない方と話すときの言葉の使い方などに気を付ける必要性を感じていた。また，どのようにふれあったらよいかについては，ボランティアの方に聞き取り，目の不自由な方とかかわるときのポイントなどを聞くことができた。目の不自由な方とボランティアの方との様子を見ていた子供たちは，もう一度，来ていただいて，ふれあいの会をもつことを約束した。ふれあいの会のなかで，どんなことをしたらよいのか，目の不自由な方とふれあうことを考え，図書室でボランティアの本を探したり，市民福祉プラザの福祉図書室やボランティアセンターで調べたりした。その結果，「朗読劇」や「合奏」「点字でのお手紙」などのグループに分かれて活動することになった。「朗読劇」のグループは，季節を生かしてクリスマスの話を読むことにした。そこでは，絵本の内容が分かるように，ゆっくり，はっきり読むことを心がけた。「合奏」のグループでは，リコーダーや鍵盤ハーモニカなどで，クリスマス曲のメドレーを考えた。「点字のお手紙」グループでは，市民福祉プラザから簡易点字版を借りてきて，五十音表を見ながら一字一字丁寧に打ち込んでいった。



【目の不自由な方からの話】



【ボランティアの方からの話】



【点字グループの活動】

【朗読劇の発表】

【ふれあい会の様子】

③ 生活更新(ふれあい会をする)(15～17/17)

子供たちは，目の不自由な方を招き，ふれあいの会を行っていった。子供たちが司会などを分担して運営し，プログラムの中心は，各グループからの出し物であった。子供たちは，緊張しながらも，自分たちが出し物を選んだわけ(朗読劇，合奏点字のお手紙)について話したり，一生懸命，伝えようと努力している姿が見られた。目の不自由な方も，終始，にこやかな笑顔で接していただき，子供たちとの楽しいひとときを過ごしていただいたように感じられる。最後に，子供たちに，目の不自由な方とボランティアの方からふれあい会の感想をいただいた。そのなかでは，特にボランティアの方から，それぞれの活動グループでの今後の方向について話していただいた。また，目の不自由な方から卓球ができる様子などを見せていただいて，子供たちの驚きを誘った。そして，今後も，一緒にできることをしようとふれあいの継続を約束していた。

ぼくは，目の不自由な立石さんと今日ふれあいました。ぼくたちが考えたのは，「朗読劇」です。立石さんがわかりやすいように，言葉をゆっくりと読んだり，場面がかわるところは少し間を空けたりしました。話を楽しそうに聞いてくれていたのでよかったかなと思いました。立石さんは，卓球もできるそうです。ぼくたちよりも上手だと思います。今度は，音楽や運動に一緒に挑戦したいです。

【ふれあい後のW児の感想】

あらつ学習実践事例(第４学年)

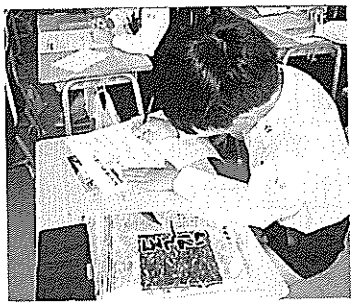
(1) 単　元　　おとなりの国　韓国調べ隊!

(2) 本単元の考え方

本単元は，本校が位置する博多湾沿岸の向こうがおとなりの国，韓国であることを生かし，その独自の文化への理解や韓国の方との交流を深めたり(調和的心情)，日本に共通する考え方を大切に思う心情(向上的心情)を育んだりし，外国のことを調べる関心や外国の方とのかかわり方を身に付け，文化は気候や風土などによって形成されることに気付くこと(知恵)である。そのために，身の回りにある韓国のものやこと調べ，韓国の人との交流を通して，自分がこだわりをもった韓国のキムチや衣服，建物などの学習対象を追究し，それぞれの文化についての自分なりの応えを見いだす学習を考える。

(3) 学習の実際

博多港から韓国へ向かう人や船の写真，韓国に旅行に行く福岡の人の数の推移のグラフなどから，韓国という国の魅力について話し合った。子供たちは，自分や家族の渡航経験などから，「特別な料理がある。」「おもしろい場所があるのでは。」などと口々に言い出した。そこで，家の人や自分の身の回りから，韓国のものやことを集めて，韓国コレクションをしようということになった。子供たちは，自分の身近から，朝鮮人参やチヂミなどの食べ物やチョゴリなどの衣服の実物や写真をもってきた。子供たちは，身の回りにたくさんの韓国に関係するものがあることに改めて驚きをもち，韓国が身近に感じられていた。(生活吟味)そして，それらを紹介し合うときに，教師が準備したコレクションも見て回ることにした。教師が準備したコレクションは，「キムチ」「建物」「チョゴリ」の３コーナーに分け，それぞれにたくさんの種類の実物や写真とともに，それらにふれて感じる疑問などを直接交流できる韓国の方を３人招いた。



【韓国コレクション】

【韓国の方との交流】

【キムチを食べる】

【チョゴリを着てみる】

子供たちは，追究課題をそれぞれ「キムチ」「建物」「チョゴリ」から選択して，対象別のグループで調べることにした。キムチグループのＡ児は，「キムチがどうして韓国の食事に欠かせないのか。」を課題として，キムチをつくっている店を尋ねたり，福岡市総合図書館で，韓国の食文化の本を読んだりして韓国の食事とキムチとのつながりを追究していった。そして，寒い気候や冬の野菜不足から健康を守る食事とすることなどの独自の文化を感じていた。そのなかで，日本人も健康を考えた和食をしていることなどと結びつけていた。(自己追究・内容創造)子供たちは，調べた成果を模造紙やバインダーノートなどにまとめ，他のグループの友達どうしで紹介し合った。夏休み自由研究で外国に関心をもって調べることができた子供も見られた。(生活更新)

【キムチ店での追究】

あらつ学習実践事例（第４学年）

(1) 単　元　　楽しさいっぱい！　夏休み自由研究

(2) 本単元の考え方

本単元は，子供が日頃の学習や生活のなかで興味をもったり疑問を感じていることから課題を設定し，追究方法，表現方法についての計画を立てて自由研究に取り組み，その成果を相互評価していくなかで，研究に挑戦する楽しさを味わうことができることがねらいである。そのために，全校児童への昨年度の夏休み自由研究の内容紹介，１学期のあらつノートに集めたはてなの掘り起こし，夏休みを利用した課題追究の場，夏休み自由研究発表会を位置づけ，自分なりの応えを見出す学習を次のように考える。

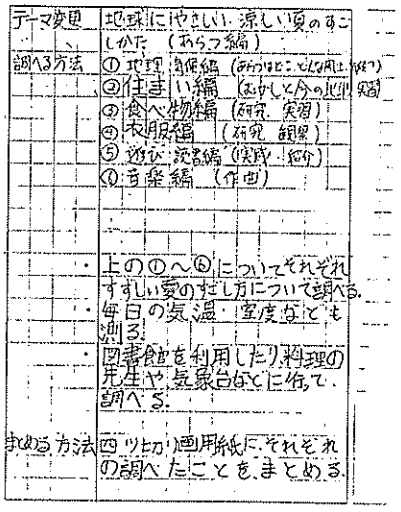
	生活吟味 ---------->	自己追究・内容創造 ---------->	生活更新
学習活動	１．１学期に学習したことや生活のなかで興味をもったり疑問を感じたりしていることを話し合い，研究テーマ・方法を決定計画する。	２．自分の研究計画に沿って調査や体験を繰り返し，研究の成果を表現物にまとめる。	３．夏休み自由研究発表会を行い，学んだことや互いのよいところについて話し合う。

(3) 学習の実際

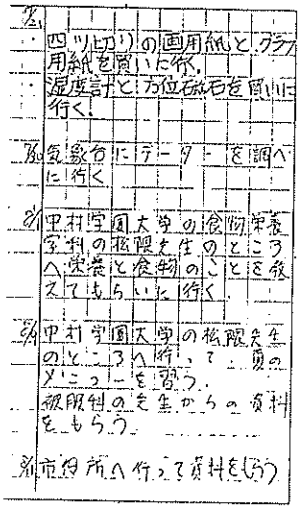
① 生活吟味（日頃の生活から研究のテーマを見つけ，計画を立てる）（１～３／９）

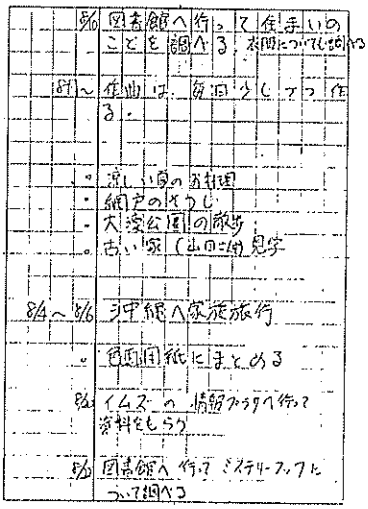
子供たちは，昨年度友達が行った自由研究発表会の内容や研究の方法を聞き，生活のなかからはてなを見つけることの意義や研究計画の大切さを感じた。そして，１学期あらつ学習ノートに集めたはてなや学習で興味をもっていることを話し合い，研究テーマと計画をつくっていった。

Ｎ児は，「６．２９の福岡大水害がなぜ起こったか」「学校の屋上のソーラーシステムはなぜ設置されたか」などの疑問を抱いていたが，最終的には，「毎年，暑い夏休みをクーラーのなかで過ごしているので，今年はなるべく自然のものを利用して涼しく夏を過ごすための工夫を研究したい。」と考え，研究テーマを「地球にやさしい涼しい夏の過ごし方」と設定した。そして，次のような研究計画を立てた。



【Ｎ児のテーマ・方法・まとめ方】





【Ｎ児の研究計画】

② 自己追究・内容創造（研究計画をもとに，夏休み自由研究を行う）（課外）

Ｎ児は，次のような体験や活動を行い，涼しい夏の過ごし方を自己追究していった。

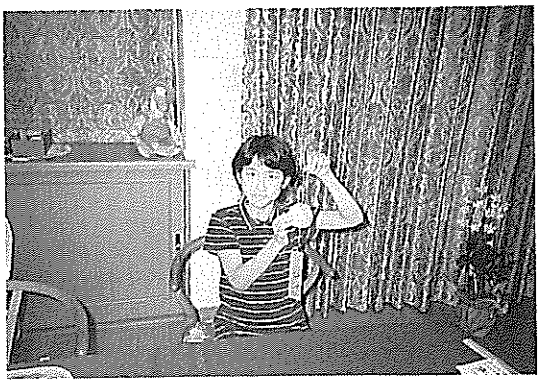
①毎日の気温と室温を図ったり，福岡管区気象台に行ったりしてあらつの地理と気候を調べた。
②祖母の友達のお宅を訪問し夏を涼しく過ごす住まいの工夫を調べた。
③中村学園大学の松隈先生を訪ね，夏野菜の利用の仕方や体への影響を取材した。

④麻や綿などの布地を顕微鏡で調べ織り方の違いを調べた。
⑤市民図書館に行ってミステリーブックや怪談の本を借りて読んだ。
⑥自宅で涼しさを感じる作曲づくりに取り組んだ。

その結果として，次のような夏を涼しくするための工夫を見出し実践していった。

【N児が見出した夏を涼しくするための工夫】

○　昔の家は風通しがよく，風鈴やのれんを使うと涼しく感じる。だから，わたしも風通しをよくするため網戸を掃除したり風鈴をつくったりしました。
○　夏野菜は，わたしが思っていた通り体を冷やす効果がありました。わたしは，夏野菜を使ったサラダを作りました。
○　夕方，近くの大濠公園を散歩したり，海水浴をしたり，怪談やお化けの本，ミステリーなどを読むとゾーッとして涼しくなれるよ。
○　涼しく感じる曲は，ピアノソロや静かなオーケストラの曲です。わたしは，涼しさをイメージした「サマー・ウインド」という曲を作りました。



【夏を涼しく感じさせる風鈴づくり】

【涼しくなる音楽づくり】

そして，N児は自分が見出した夏を涼しくする工夫と追究の過程を「地球にやさしい夏の過ごし方（あらつ編）」と題し，①地理・気候編，②住まい編，③食べ物編，④衣服編，⑤遊び・読書編⑥音楽編の６つにわけ画用紙にまとめていった。そして，「写真や資料を貼ってわかりやすくした。テーマ別に必ず＜めあて＞＜分かったこと＞＜感想＞を書いて，何を調べたのかをわかりやすくした」など，まとめ方も工夫していった。

【N児の追究結果の表現物の一部】

③　生活更新（自分の追究を進んで情報発信する）（４～９／９）

子供たち一人一人が調べたことを，学級で，また，全校で「夏休み自由研究発表会」を行った。子供たち一人一人が調べたことを模造紙や標本，製作物，実物提示，写真や作文などに表し発表した。また，夏休み作品展を行い，それぞれの成果を認め合った。

【体育館で発表しているN児】

調べてみると自然のものを利用して夏を涼しく過ごすための工夫がたくさん見つかりました。まだまだ暑い夏をわたしが見つけた方法で涼しく過ごしたいです。

あらつ学習実践事例（第４学年）

(1) 単　元　　ぼくは，わたしはあらつっ子！　あらつの自慢調べ隊（郷土編）

(2) 本単元の考え方

本単元は，明治初期から作り方を変えずに続けている黒門飴や黒田武士煎餅，港町に新しくできた荒津窯やスクリューモニュメントなどあらつのもの・人・ことへの情報収集や地域の方への聞き取り，現場体験などを行いながら，郷土の歴史や伝統，人の生き方について考える知恵とあらつのよさを実感し大切にしていこうとする心情を高めていくことがねらいである。そのために，あらつにある新旧の学習対象との魅力ある出会いの場とその自慢探しの活動，報告会を主な活動と位置づけ，自分の応えをつくる学習の流れを次のように考える。

	生活吟味	→ 自己追究・内容創造	→ 生活更新
学習活動	１，あらつの街を探索し，出会った対象に対する疑問や驚きなどから追究課題を話し合う。	２，追究課題別グループをつくり，情報収集や聞き取り調査，現場での体験などを行い，各自が見出したあらつのよさについて話し合う。	３，あらつのよさを広めるための活動を行う。

(3) 学習の実際

① 生活吟味（あらつにあるもの・人・ことに出会いこだわりをもつ）（１～６／１６）

子供たちは，黒門飴で飴づくりや荒津窯の陶芸教室の様子を見学したり，大型スクリューに乗ったりとあらつのもの・人・ことに自由に触れる探索活動を行い，自分が追したくなる対象を選択し，追究課題を明らかにした。

【スクリューを発見し喜ぶ子供】

【陶器製作を見入る子供】

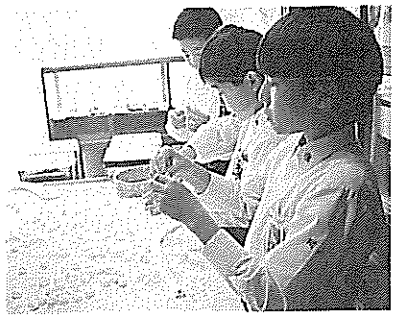
【子供たちの追究課題】○黒門飴が８０年以上も続いている人気のひみつを探ろう。　○黒門飴の歴史や伝統を探ろう。　○黒門飴の材料とスーパーに売られている飴の材料を比べてみよう。○岩永さんが荒津窯を始められた理由を尋ねよう。　○荒津窯で自分だけのお茶碗を作りたい。○スクリューが作られた秘密を探ろう。　○光雲神社と黒田武士煎餅のマークは同じだけどどんな秘密があるのか明らかにしよう。　○光雲神社に昔のお侍がかぶっていた大きなカブトがある秘密を探ろう。

② 自己追究・内容創造（追究課題をもとに，あらつの街の自慢調べを行う）（７～１３／１６）

自己の追究課題解決のため，見学・調査，聞き取りなどの情報収集・整理，飴づくりや陶芸体験などの現場体験を進んで行ったり，互いの追究を交流し合ったりして，あらつの街のもの・人・ことに愛着を深めたり，それを支える人の生き方に共感したりして，あらつのよさを一体的に実感した。

○　Ｂ児の追究・・・追究課題「８０年以上も続いている黒門飴の人気のひみつを探ろう」

Ｂ児は，７人で黒門飴の人気のひみつグループを作り，黒門飴の人気のひみつは，地域の人の黒門飴に対する思いとお店の人の生き方にあるのではないかと考え，２面から追究していった。地域の人の思いについては，唐人町商店街や黒門通りに行き，二手に分かれてインタビューを行った。お店の人の生き方については，飴づくり体験や聞き取りを行った。



【地域の人に聞き取りする子供】【飴づくりを体験する子供】

あらつのじまんの黒門飴を街の人全体が好きで，その好きな人のことを思ってお店の人が続けて，昔からの味をやめないで同じ飴を喜んで買う人がいて・・・人々が支え合って街が一つになっているというのはとてもすてきなことだと思います。

○　Ｙ児の追究・・・追究課題「荒津窯で自分だけのお茶碗を作ろう」

【荒津窯でお茶碗を作る子供】　【茶碗を手にする子供】

あらつがまは去年の３月にできた小さな伝統を黒門飴のように大事に育てていくんだなあと思います。この荒津窯の先生の思いを地域の人にも伝えていきたいです。

③　生活更新（あらつのよさを進んで情報発信する）（１４～１６／１６）

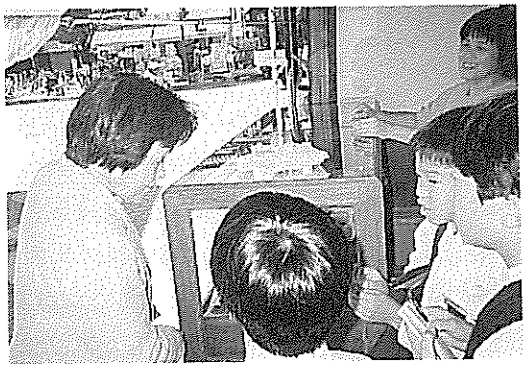
子供たちがこだわりをもって追究してきた内容を，発信相手や方法などにもこだわりあらつのよさを伝えていく活動を行った。自分たちが感じ取ったあらつに対する思いを他に伝えたいと願っている子供たちは情報発信の方法や相手を話し合った。そして，お店の方や光雲神社，港湾事務所の方から発信内容の許可をいただき情報発信を行った。

大正時代につくられました。そして、この機械の役目は、手で回して水飴にしょうがをまぜたものに、粘りをだして、細く長い物にします。この機械はふつうと違い、電気を使用しません。

～お店の人の話～
買う人に健康になってもらいたいという願いを込めてつくってきたことが、長い歴史をつくることになった。だいだい受け継がれていくことは、大変なことだなと思いました。

【パソコンで子供が作った情報発信の内容】

【全校集会で全校児童へ】



【広告を作り地域の方へ】

あらつ学習実践事例（第４学年）

(1) 単　元　　あらつからスタート！ぼく・私の国際交流～国際クリスマスコンサートを開こう～

(2) 本単元の考え方

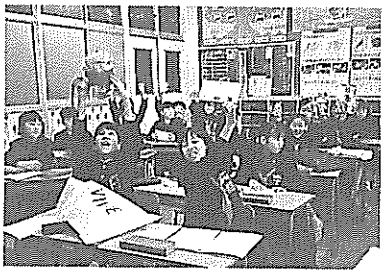
本単元は，外国の方との交流を深めるために「国際クリスマスコンサート」を開き，そのなかで，日本と外国のクリスマスの歌を比べたり，外国のクリスマスの様子を調べたりしながら，日本との共通点や違いを捉えさせ，それぞれの文化のよさや，楽しい生活を創り出していこうとする願いの共通性などに迫らせていく。そこで，それぞれの文化のよさを見出し交流に生かそうとする知恵と，異文化を尊重し交流を深めようとする調和的な心情を育て，異文化の方との交流の在り方について自分なりの応えをつくることがねらいである。そのために，あらつの町で国際交流ボランティアをされている釘宮さんや外国の方との出会い・交流の活動，交流を深めるための追究活動をしながら，自分の応えをつくる学習を次の流れで展開する。

	生活吟味 ---------->	自己追究・内容創造 ---------->	生活更新
学習活動	１．外国の方とふれ合った経験を話し合い釘宮さんや留学生の方と交流する。	２．交流を深めるために「国際クリスマスコンサート」を開くことを計画し，内容別にグループをつくり，日本と外国のクリスマスの様子を比較追究していく。	３．「国際クリスマスコンサート」を開催し，今後の交流の在り方を話し合う。

(3) 学習の実際

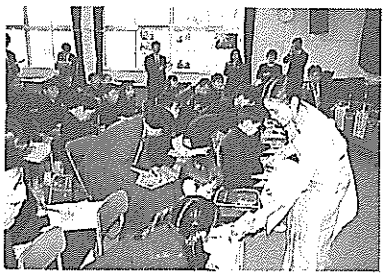
① 生活吟味（釘宮さんや留学生の方と出会って交流への願いをもつ）（１～４／１２）

子供たちは，１学期あらつ学習「おとなりの国・韓国調べ隊」音楽科「日本のふしと韓国のふし」の学習や日常生活から，外国の人とかかわった経験を振り返り，交流への思いを話し合った。そこでは外国の人と楽しく交流したいという求めが出され，あらつの町で国際交流のボランティアに取り組んでおられる釘宮さん（五大陸雄々実行委員会・事務局長）と出会った。そこで，交流の仕方や国際交流で大切なことについての考えを出し合い，助言をいただいた。そして，子供との交流を求めておられる AFS の留学生の方や福岡教育大学の留学生の方をお呼びし，その国の様子を話していただく会を行い（第１回交流会），これからの交流の在り方について話し合った。



【今までの学習を振り返る】

【釘宮さんを迎えて話し合う】



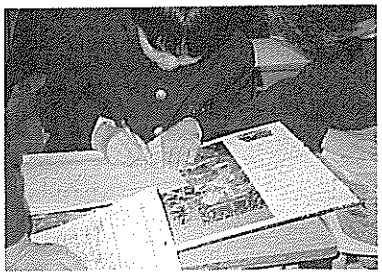
【留学生の方と出会う】

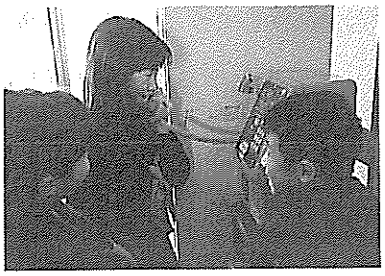
交流への願いを深めた子供たちは，交流方法を話し合った。そこで教師が提示した，日本と外国のクリスマス曲の楽譜や音源，南半球のクリスマスの様子の写真等の資料をもとに，「１学期の音楽で学習したように，音楽なら言葉を超えて楽しめる。」「クリスマスの様子にも日本と同じところや違うところもあるようだから，それを調べてクリスマス会をしたらどうか。」という意見が出され，音楽を中心としてクリスマス会を企画・運営して留学生の方と楽しく交流していくことになった。

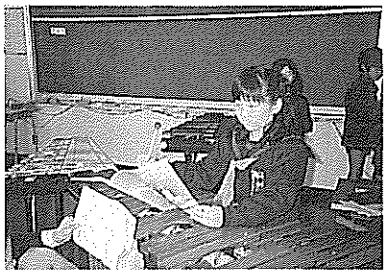
【子供たちの追究課題】学級テーマ『国際クリスマスコンサートを開いて交流を深めよう』
○ 日本と外国（留学生の方の国）のクリスマスの歌を調べて歌ったり，演奏したりしよう。○ 日本と外国のクリスマスの歌で，同じ曲でも歌詞が違うわけを調べよう。○ 日本のクリスマスの様子と違うところを調べて，楽器で表現したり，飾りをつくったりしよう。 ○ 英語の歌に挑戦しよう。

② 自己追究・内容創造（グループごとに外国と日本のクリスマス調べをする）（５～１０／１２）

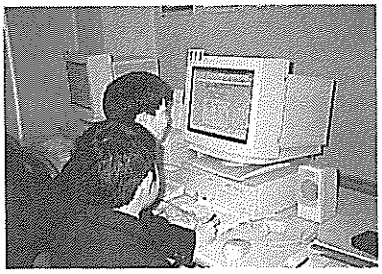
コンサートの実行にむけて，クリスマスの歌を調べ，選曲を行った。日本独自のクリスマスの歌を紹介する観点から「あわてん坊のサンタクロース」などを選曲し，日本でも外国でも歌われているような曲も調べ，「おめでとうクリスマス」などを選曲し，曲ごとにグループをつくった。

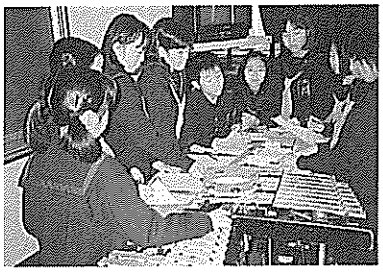

【各国の歌を調べる】

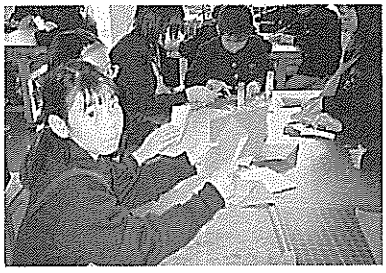

【釘宮さんに電話で尋ねる】


【音を出して確かめてみる】

曲ごとのグループ単位で，調べたいこと・工夫したいことを話し合った。A児のグループは「日本と外国のクリスマスの様子を調べよう。」という課題で，インターネットで，外国のクリスマスの様子・サンタクロースの服装・歌われている歌などを調べた。「夏にクリスマスを迎える国もあるから，クリスマスの様子も国によって違う。」ということが話題となった。「日本では，雪のクリスマスがいいから，暑い国・タイのアーチャリアさんにそれが分かるように，グロッケンなどの楽器を使って雪の音を表すなど演奏を工夫しよう。」「オーストラリアのレラーニさんが喜ぶように飾りに夏のものもいれよう。」など，かかわる対象となる留学生の方と共に楽しめるように活動を広げていった。


【各国のクリスマスの様子をインターネットで調べる】


【雪のクリスマスの様子を伝える音の出し方を工夫する】


【夏のクリスマスの飾りをつくる】

追究が進むなか，「日本と外国では習慣が違うので，違うところがあるのは当然だけど，クリスマスを楽しもうとする気持ちは同じみたいだ。」「いっしょに楽しいクリスマスコンサートをしたい。」「調べたことや研究したことを生かしたコンサートにしたい。」という考えが出された。

そこで，子供たちは，コンサートの実行委員を決め，役割分担を行い，コンサートのリハーサルを行った。そこでは，日本のこととして紹介したいこと，一緒に歌ってみるところ，外国のクリスマスのことを調べて尋ねてみたいことや教えてもらいたいことを確認し合った。

③ 生活更新（国際クリスマスコンサートを行い国際交流の楽しさを味わう）（１１～１２／１２）

釘宮さんから紹介していただいていた AFS の留学生（タイ，オーストラリア）の方と，本校での教育実習経験者を含む福岡教育大学の留学生（中国，韓国）を招待して，国際クリスマスコンサートを開催した（第２回交流会）。合唱奏を発表し，「きよしこの夜」や「ジングルベル」などを一緒に歌ったり，その国における歌詞の意味を説明していただいたりした。「国は違っていても音楽で楽しめた。」「お正月など，他の行事も調べたい。」など，満足感や課題の発展についての発言が出された。

【留学生から韓国の歌を習う】

【みんなでコンサートを楽しむ】

あらつ学習実践事例（第５学年）

(1) 単　元　　未来に残そう！きらめく博多湾

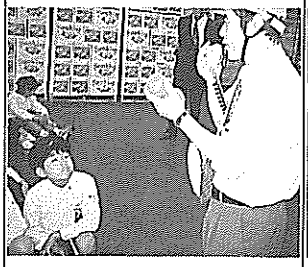
(2) 本単元の考え方

本単元のねらいは，博多湾は，海の幸や自然との触れあいの場，生活の維持・向上の場を提供してくれる役割があることをとらえ，将来にむかって海を生かした生活を行うことの大切さに気付いたり，博多湾における環境問題の解決に向けて自然保護団体や港湾局などの工夫や努力に対する共感をもとに，博多湾への望ましいかかわり方を考えたり，実践したりすることである。

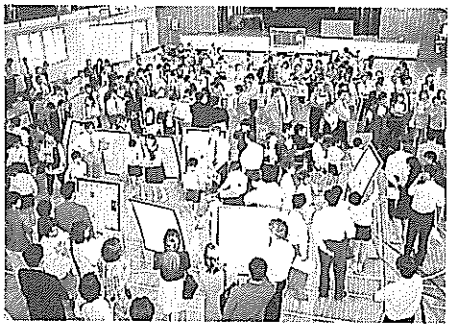
(3) 学習の実際

博多湾の床地図を見て子供たちは，これまでかかわった場所を出し合った。博多湾には生活とかかわりのあるたくさんの自然や施設があることにとらえた子供たちは，あまり行ったことのない場所があることにも気付いた。それは，あらつ北部の港湾施設や博多湾東部の干潟の存在である。そこで子供たちは現地での観察・調査を求めた。大きな車やたくさんの鳥の存在に気付いた子供たちは，博多湾と自分たちの生活の関係についてもっと調べたいという課題をもった（生活吟味）。

子供たちは港湾施設の働きを調べるグループと博多湾の自然を観察するグループに分かれて追究した。

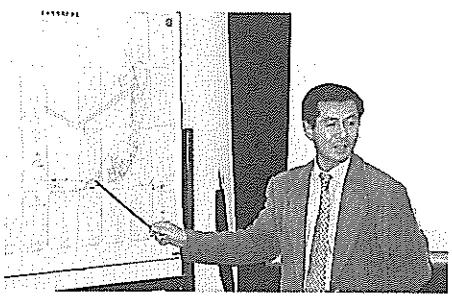
＜港湾施設グループ＞		＜自然観察グループ.＞	
博多港の物資と生活	博多湾の歴史	生息する生物種	生物保護への思い
			
・外国からたくさんの品物が運ばれてくるね。	・博多湾はわたしたちのあらつが中心だったんだね。	・こんなにもたくさんの鳥や生き物はどこから来るの。	・干潟についてどんな思いをもっていますか。

I児は，博多湾に入荷される貨物はどこからきているのかという課題をもった。そして，バナナの生産地と日本の外資系企業との関係の追究にまで発展した。この後，子供たちは追究結果をパワーポイントによるプレゼンテーションやＴＰ，壁新聞など思い思いの方法でまとめ，ポスターセッション形式で交流し，「博多湾の施設は生活にとってどれも欠かせない物」であることや「博多湾の生き物は生活に潤いを与えてくれる」ことなど，博多湾が果たしている自分たちの生活にとっての様々な役割をとらえていった。ここで自然や施設ともに発展してほしいと願う子供たちに新たな課題が生まれた。それは，人工島建設の是非である。「人工島も大事だし，干潟も必要だ。一体どうしたらいいのか」と自然と開発の関係を探り始めた。（自己追究・内容創造）。



【ポスターセッション形式による交流】

その後，これからの博多湾へのかかわり方を話し合い，シンポジウムを開くとともに，かかわり方を実践した（生活更新）。



【博多湾環境シンポジウムの様子】

あらつ学習実践事例（第５学年）

(1) 単　元　　健康のひみつをさぐろう！～あらつ健康調査隊～

(2) 本単元の考え方

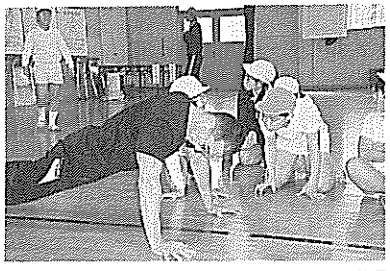
本単元は，健康な生活を目指して様々な取り組みを実践しているあらつ在住の方や市民の健康づくりを啓発するあいれふ健康づくりセンターなどへの情報収集や体験的な活動を通して，健康な生活を実現するための知恵や健康の保持増進を目指して生活を改善していく向上的な心情，自己の体の状態や生活環境に応じた行い方をバランスよく生活に取り入れようとする調和的な心情を働かせて，自己の生活を見直し，よりよいものへと改善していくことがねらいである。そのために，健康なお年寄りと体力年齢を比較する活動やそのお年寄りやあいれふ健康づくりセンター，大濠公園での健康づくりの行い方を体験的に情報収集する活動，そして，実際の生活における健康づくりの行い方を試行する活動を位置づけ，健康に対する自分なりの応えをつくる学習の流れを以下のように考える。

	生活吟味 --------->	自己追究・内容創造 --------->	生活更新
学習活動	１，あらつ在住の健康なお年寄りと体力年齢を比較し，健康への憧れや驚きから追究課題を話し合う。	２，健康づくりの課題毎に健康のひみつについて調べ，実践することを通して，自分なりの健康づくりの行い方を創り出す。	３，健康づくりの行い方の情報発信を行うと共に，継続的に生活実践を行う。

(3) 学習の実際

① 生活吟味（健康なお年寄りと出会い，健康への憧れと視点をもつ）（１～３／１５）

子供たちは，体育の時間の体力測定から自己の体力年齢の高さに驚きをもち，２回目の体力測定を行うことにした。５０歳以上の体力年齢が子供たちに多かったことから，２回目は，あらつ在住の健康なお年寄りをゲストに招き，体力年齢を競い合うことにした。体力テストを行うなかで，子供たちは，ゲストのお年寄りの元気な姿に驚きの声を上げ，自分たちよりも高い記録に思わず拍手をする姿も見られた。テスト後に，自分たちとゲストの体力年齢を比較する場面では，どのお年寄りも実年齢より体力年齢が低いことに驚きや健康への憧れをもった。さらに，自分たちの体力年齢が高いことの原因を自己の日常生活と結びつけて考え，どうすれば，健康になれるのかという素朴な疑問をもった。その後，ゲストの方々へ健康のひみつを尋ね，次のような自分の健康づくりの課題を設定していった。


⇒

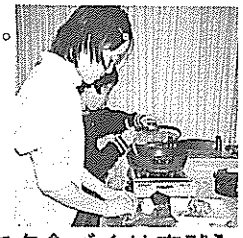
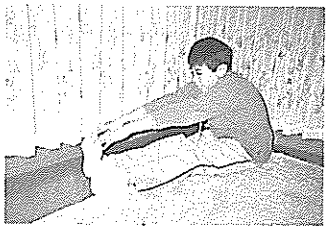
【反復横跳びを競う子供】【腕立て伏せの回数に驚く子供】　【健康のひみつについて尋ねる子供】

【子供たちの追究課題】○どのような運動をどのくらいすれば健康になれるのか。○ゲストの方々の１日の時間の使い方○どんな食生活をすれば健康な体になるのか。○体によい運動と時間○ウォーキングの効果とその行い方。○どんなトレーニングをすればよいのか。○どのような栄養をとれば健康になれるのか。○どのくらい睡眠をとれば健康によいのだろう。

② 自己追究・内容創造（健康づくりの方法について調べ生活試行する）（４～１７／２２＋課外）

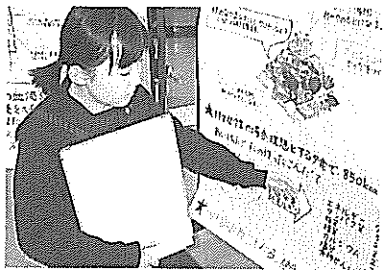
子供たちは，自己の生活に取り入れることを意識しながら，大濠公園でジョギングやウォーキングをしている方々へのインタビューやあいれふ福岡での献立づくり体験，総合図書館やインターネット

へのリサーチ，ゲストの方々への手紙での聞き取りや西公園でのウォーキング体験などを行った。そして，追究内容を中間報告会でまとめ，互いに交流した。具体的には，以下のような追究が見られた。

H児の追究	K児の追究	N児の追究
追究課題 効果的な運動と栄養の取り方 【あいれふでの献立づくり】 中間報告会での発表内容 食べ物に含まれるカロリーや栄養素さらには，運動や日所湯活動１０分あたりの消費カロリーについて発表した。バランス良く栄養やカロリーを取ることや運動でカロリーを消費することの重要性を強調し，夕食の献立づくりを通して，生活を見直すことを決めていった。 生活試行 栄養素やカロリーを計算して夕食の献立を考え，自分で調理する。  【家庭で夕食づくり実践】	追究課題 ゲストの方々の生活習慣 【質問紙によるアンケート】 中間報告会での発表内容 ５人のゲストの生活アンケートをもとに，運動・食事・睡眠の時間を調べ，自分の生活と比べて発表した。たっぷり睡眠をとることや運動自由時間をとることの大切さを発表した。ウォーキングの効果や栄養についての発表を参考に生活のなかで，ウォーキングやお菓子・揚げ物を控えることを決めた。 生活試行 間食のお菓子や揚げ物を控えて生活する。 ３／７　間食はおまんじゅう，夕食は油を使わない瓦そばにした。 ３／ 13　間食はスナック菓子をやめて，きんかん（果物）にした。	追究課題 効果的な運動種目と時間 【インターネットで情報検索】 中間報告会での発表内容 インターネットで運動（ストレッチング）の行い方や効果について情報を検索し，「あいれふ」で行った献立づくりやカロリーバイク体験から栄養のバランスにの大切さに気付き発表した。友達の運動処方の発表から週に３回くらいウォーキングやストレッチングを行うことを決めた。 生活試行 ストレッチングの方法を決め週３回行う。  【家庭でストレッチング実践】

③　生活更新（健康づくりの方法を発信し，生活に取り入れる）（１８～２２／２２＋課外）

これまで追究し，生活でも実践した健康づくりの方法を友達や家族，ゲストの方々などに発表する最終報告会を開いた。そのなかで，友達だけでなく，家族やゲストの方々から発表に対する肯定的な評価をいただき，H児のように，生活への継続的な取り組みを強く意識することができた。また，保護者が子供たちの追究を知り，生活習慣を見直すことを考え，具体的に改善していく姿なも見られた。



【自分の応えを発信するH児】

私は日頃、ちょっとの距離でも車を使ったり間食もよくします。習い事が忙しくて運動する時間もあまりとれません。でも、(中略)学校の行き帰りに、荷物が少ないときは、少し急ぎ足で歩いてみたりする工夫でずいぶんと運動する時間ができると思います。また、家でやってみた夕食の献立づくりと調理は、栄養素やカロリーを自分で確かめることができるし、家族も喜んでくれたのでこれからも続けて、少しでも健康になれるように生活を改善していきたいです。

【最終報告会後のH児の応え】

あらつ学習実践事例　（第５学年）

(1) 単　元　　希望と誇りⅠ　～附属福岡小学校歴史探訪～

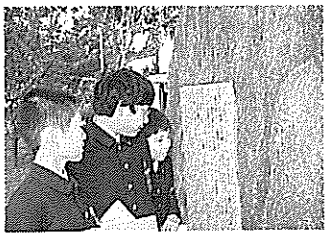
(2) 本単元の考え方

本単元は，附属福岡小学校の歴史についての資料収集をしたり，先輩方や旧職員の方々への聞き取り調査をしたりしながら，福岡小の伝統や先輩方の生き方を自分の生活に生かす工夫をし(知恵)，福岡小への愛着を深めながら附属福岡小学校の一員であることの誇りをもつとともに(調和的な心情)，これからの福岡小を自分たちの手で創っていこうとする意欲やこれからの生活への希望や夢をもつこと(向上的な心情)をねらいとしている。

(3) 学習の実際

附属福岡小学校は，120年にわたる歴史があり，子供たちは歴史や伝統を伝えるもの(藤棚や石碑，銅像など)・人(先輩や旧職員)・こと(藤見学芸会や相撲大会などの伝統行事) に囲まれて生活している。そのため，子供たちの自校の歴史についての興味・関心は高い。

そこで，歴史を伝えるものを探す学校探検や大正11年の卒業生である岡部秀喜さんとの出会いの場を設けることで，子供たちの潜在的な求めを掘り起こし，「百年以上もある福岡小の歴史や伝統は，どのようなものなのだろうか。」という課題を生むことができた。(生活吟味)


【石碑を調べる子供たち】

【岡部さんとの交流】

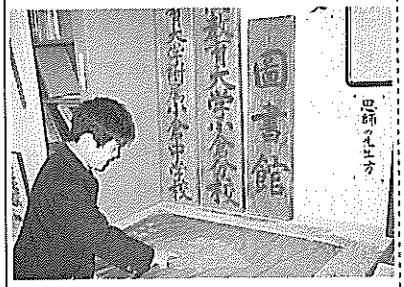
子供たちは，追究内容と追究方法にこだわりを発揮しながら，意欲的に調査・交流を行っていった。

【子供たちの追究活動の例】（自己追究・内容創造）

《附属福岡小と小倉小》

○ 附属小倉小学校見学

〈附属小倉小富陵館見学〉



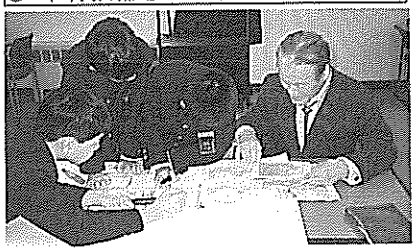
・小倉小の歴史と比べたことで互いの学校のよさが分かりました。自分は福岡小の生徒だという気持ちをもちました。

附属福岡小学校と荒津の町》

○ 総合図書館での情報収集

↓ ・古地図や文献資料探し

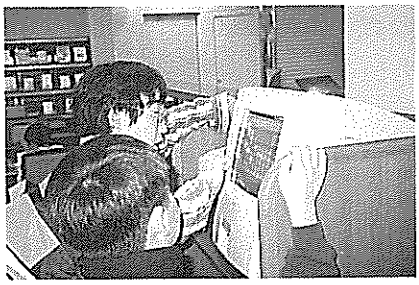
○ 中村強輔さんからの聞き取り調査



・絵地図を描き終わってみると今と昔では緑の大きさが全く違っていることに気が付きました。

《附属小の出来事調べ》

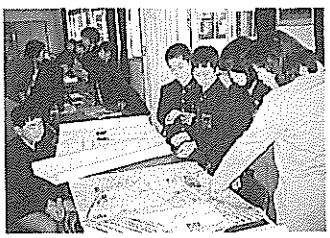
○ 総合図書館での情報収集

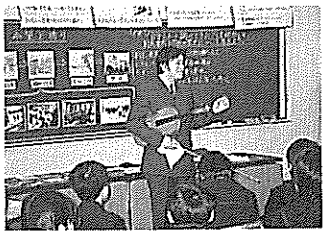


○ 岡部さんへの聞き取り活動

・空襲の被害などいろいろな歴史を積み重ねて今の校舎が建っているんだなと感じました。

このような追究活動を通して，子供たちは，福岡小の歴史や伝統の重みを実感し愛着を深めるとともに，福岡小の伝統の素晴らしさを情報発信したり，福岡小をよりよくする試みを行ったりしていった。(生活更新)また，「先輩調べ」グループの平野真敏さん（音楽家になるという夢を実現された先輩）との出会いを通して，新しい福岡小を自分たちの手で創っていこうとする意欲を高め，６学年でのあらつ学習「希望と誇りⅡ」に学習が連続・発展していった。


【保護者への情報発信】


【平野さんとの出会い】

あらつ学習実践事例（第６学年）

(1) 単　元　　希望と誇りⅡ　～ようこそ先輩！ 開こう，未来への扉を～

(2) 本単元の考え方

本単元は，夢を実現された先輩方や身近な人たちとともに希望や夢について考え実践していくことを通して，自分自身の生き方について考えを深め(知恵)，これからの生活への意欲を高めること（向上的な心情）をねらとしている。

(3) 学習の実際

５年単元「希望と誇りⅠ」における平野真敏さんとの交流において生じた「自分の夢や希望について考えていこう。」という目的意識から学習をスタートさせた。

【平野真敏さんとの交流】

小学校６年生時の藤棚文集に将来，音楽家になるという夢を書き表し，それを実現された先輩。数少ないビオラのソリストとして活躍中。昨年は，クロアチアの大統領が選ぶ12人の音楽家に選ばれた。

【夢を実現した平野さん】

平野真敏さんとの出会いを通しての子供たちの感想　（抜粋）

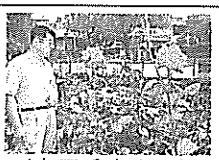
Ｃ１：夢というのは，たった一文字なのにいろいろな勇気を出せるようなすごい言葉です。

Ｃ２：平野さんのように夢を実現させるぞと心や体が燃えてきた感じがしました。

Ｃ３：平野さんと出会ってたくさんのことが分かったのは，附属福岡小学校の歴史を調べていたからです。今度は，私たちが歴史をつくっていく番なので，10年か20年くらいたって，新しい私たちの歴史があればいいなと思いました。

平野さんのように自分の夢を実現された先輩方との出会いを通して，「夢を実現させるとはどういうことだろうか。そのために大切なことは何だろうか。」という課題をもつことができた。（生活吟味）

〈茅野正昌さん〉
（アナウンサー）



〈赤司秀夫さん〉
（園芸家）

〈高松公一さん〉
（航空整備士）

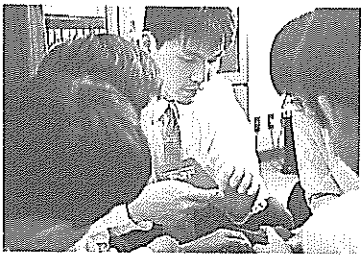
子供たちは，先輩たちや身近な人たちと共に夢について考えたり，追体験したりしていった。そこでは，先輩人材バンクの提供を行ったり，職場体験や聞き取り調査など先輩方の夢実現を追体験する場を設けたりして，子供たちの主体的な追究活動を支援していった。

【子供たちの追究活動の例】　《職場体験や聞き取り調査の様子》（自己追究・内容創造）

［茅野さんの職場体験］
（実況前の取材活動）

［赤司さんの職場体験］
（一日園芸修行）

［高松さんへの聞き取り］



自分の夢についての考えを深めていった子供たちは，お互いの夢を紹介し合う「みんなの『希望や夢』交流会」を開くことを考えた。

子供たちは，お互いの夢を紹介し合ったり，先輩方や保護者の方々と交流したりするなかで，夢を実現させるために大切なこと，必要なことについての考えを深めていった。そして，「これからも夢の実現に向けてがんばっていこう。」という思いを強くしていった。

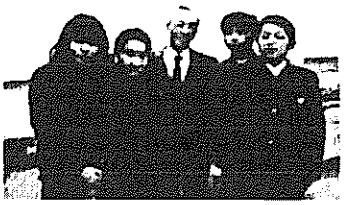
【みんなの『希望や夢』交流会】

あらつ学習実践事例（第６学年）

(1) 単　元　　発信!!あらつネット　－５才の伯父さんとつくろう！わが校のこだわりホームページ－

(2) 本単元の考え方

本単元は，「５才の伯父さん」というハンドルネームで，自らの思いや願いを抱き，よりよい情報通信ネットワーク参画を実践している人／川澄隆さんとかかわりながら，自校のよさを伝えるホームページを子供たち自らの手で工夫しつくり上げる活動を通して，目的をもって情報を活用・実践する知恵と情報社会に参画する心情を高めていくことをねらいとしている。ホームページを作成しながら，情報活用と情報発信のよりよい在り方についての自分なりの応えを創っていく学習を次の流れで展開する。



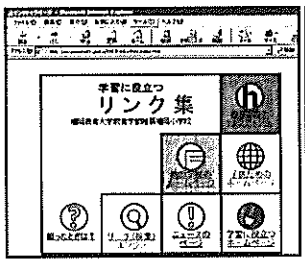
【５才の伯父さん／川澄隆さん】

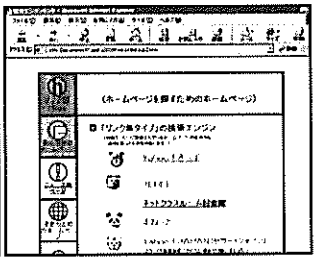
過	生活吟味	自己追究・内容創造	生活更新
学習活動	１．ウェブサーフィンや川澄さんとの出会いから，ホームページ作成の目的課題，計画を話し合う。	２．こだわりグループごとに川澄さんのアドバイスを受けながら，表現内容や表現方法を工夫してページをつくる。	３．出来上がったホームページをネット上に公開して，他校に呼びかけたり今後の更新・発信計画を立てる。

(3) 学習の実際

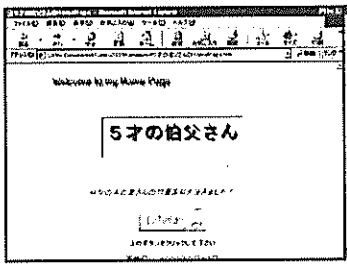
① 生活吟味（自校のホームページを作成する目的・課題をもつ）（１～３／16＋課外）

まずリンク集や子供用の検索エンジンを活用して自由にウェブの閲覧をした。子供たちはブラウザの操作にもすぐに慣れ，自分がみたいホームページを検索できるようになった。特に日本各地の学校のホームページに興味・関心をもって閲覧した子供たちは，自校を紹介するホームページを自分たちの手でつくってみたいという思いや願いをもつようになった。また，高齢者の方によるホームページのリンク集のなかから「５才の伯父さん」のページをみつけた子供たちは，５才の伯父さんがわずか一年間で自分のホームページをつくっていること，ネット上にたくさんの仲間をつくっていることなどに興味をもち実際に会い話し合った。そして，下の感想のように，自分たちのホームページをつくることを通してネット上に仲間の輪を広げるという目的と，そのために，ホームページの表現内容と表現方法をどう工夫していくかという課題をつかむことができた。





【ホームページのリンク集】【子供用の検索エンジン】



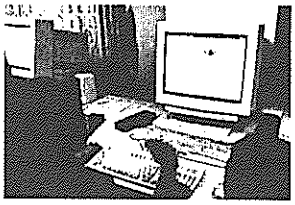
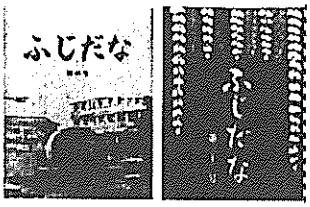
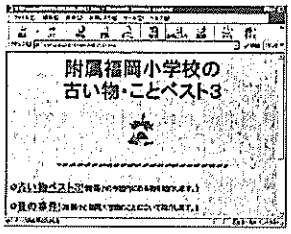
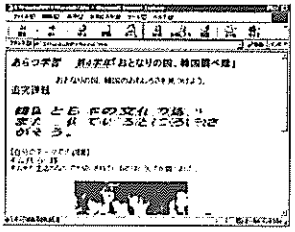
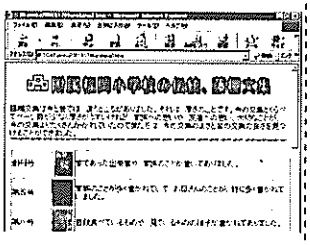
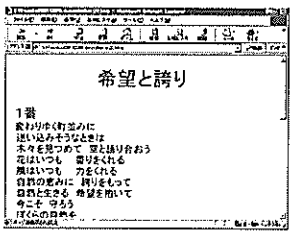
【五才の伯父さんのページと，子供たちと話し合う川澄さん】

【子供たちの追究の目的と課題の例】「ディスプレイの向こうにたくさんの仲間がいた。」という川澄さんのことばに心を打たれました。インターネットを活用しながら第２の人生づくりに挑戦している川澄さんがとても輝いて見えました。ホームページをつくることは，ネット上に仲間を広げていくための第一歩です。たくさんの人がみてくれるホームページをつくるには，まず，自分たちが伝えたい情報についてしっかり話し合ってはっきりさせること，そして出来映えよりも表現する内容を充実させて，それがよくわかるページになるように少しずつ工夫していくことが大切です。私はそのための工夫を，他のホームページを比べたり川澄さんにアドバイスをもらったりして考えたいです。（略）

② 自己追究・内容創造（こだわりグループごとにページをつくりあげる）（４～11／16＋課外）

表現する内容とその表現方法にこだわりをもった子供たちは，意欲的にページを作成していった。

【こだわりグループでのホームページ作成活動】

O児の追究活動	S児の追究活動	H児の追究活動	Y児の追究活動
○ 自分たちが調べた歴史あるもの・ことについてランキング・クイズ形式でまとめよう。	○ あらつ学習は自校の特色だから，他の学年の様子もホームページで知らせよう。	○ ふじだなの歴史をまとめるために，表紙の写真を年表形式でまとめるとわかりやすい。	○ 自校の校歌や記念曲をデジタル化して，音の出るホームページをつくってみよう。
ホームページ作成ソフトを操作する様子	他の学年のあらつ学習の様子を表すS児	H児が画像処理したふじだな文集の表紙	メロディー作成ソフトで音をデジタル化
			
↓	↓	↓	↓
○ ランキング・クイズ形式にするためのリンク処理の工夫	○ 1年から6年までの学習の様子を紹介するページデザインの工夫	○ テーブル(表)処理画像（切り取り・変形など）処理の工夫	○ メロディーサーフを用いた音づくりとテキスト処理の工夫
↓	↓	↓	↓
			
O児のページ「古いもの・ことベスト3」	S児のページ「附属小あらつ学習の紹介」	H児のページ「伝統・ふじだな文集」	Y児のページ「私たちの歌・希望と誇り」

自分なりのこだわりページをつくりたいと願い取り組む子供たちは，上記のように，高度なコンピュータ操作・処理技能も，次々に獲得し自分のページづくりに活用していくことができた。また，出来上がったページを川澄さんのページと比較した子供たちは，川澄さんを招いて話し合いを繰り返した。そして，川澄さんが「みる側のことを思いやってホームページづくりに取り組んでいらっしゃること」に気づき，さらにホームページを仕上げていった。

【川澄さんと検討するS児】

川澄さんの表現は暖かい表現だなあと思いました。「他の人からみてもらってうれしい。」という気持ちを大切にして，写真のファイルの大きさに注意したり（中略）相手のことを考えたページにしていきたいです。

③ 生活更新（情報発信活動をさらに継承・発展させていく）（12～16／16＋課外）

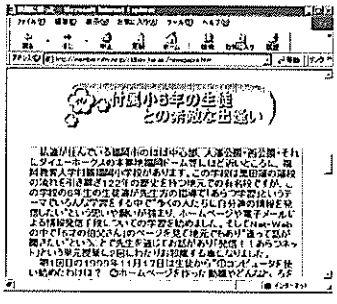
子供たちは，ホームページの公開を他校の友達や川澄さんを通じて知り合った方々に電子メールで知らせたりと，これからのホームページの継承と発展のためのお願いを全校の子供たちにしたりと，これからの計画を立て実践に取り組んでいった。

【子供たちが全校に発表した内容】

S児　あらつ学習は附属小学校の特色ある学習だから，他の学校の友達に伝える価値があると思います。各クラスのあらつ学習についての情報を，ホームページのなかでもっと紹介していきたいです。

M児　ぼくたちのホームページを公開しました。これからたくさんの仲間がネット上にできるようにしていきたいと思います。（略）
ぼくたちがつくったこのページをみなさんに受け継いでほしいと思います。ページをもっとよりよいものにして仲間を増やしてください。卒業まではぼくたちが精一杯がんばります。　（略）

【川澄さんのホームページでの紹介】



あらつ学習実践事例（第６学年）

(1) 単元名　　６の１卒業研究発表会をしよう～未来への序章～

(2) 本単元の考え方

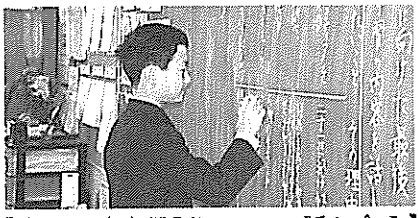
本単元のねらいは，６年１組の最後のあらつ学習としての卒業研究を書きまとめる活動を通して，小学校を卒業する自分がこれから大切にしたい考えを明らかにしたり，将来への期待感を高めたりすることである。自由選択課題における卒業研究として自分の応えを創る学習を次の流れで展開する。

	生活吟味 ------>	自己追究・内容創造 ------>	生活更新
学習活動	１．「卒業」の意味を話し合い，小学校の卒業研究に向けた目的や課題，計画を話し合う。	２．対象に働きかけ，表現内容を工夫したり，方法を付加したりして，課題の「応え」を書きまとめる。	３．大切にしたい「応え」を書きまとめた卒業研究を友達や保護者やお世話になった方々に発表し合う。

(3) 学習の実際

① 生活吟味（卒業研究を書きまとめる目的や課題をつかむ）　（１～２／１６）

まず，これまでのあらつ学習や教科等の学習で出会った方のパネルや学習の流れ図コーナー，ビデオ視聴コーナーを閲覧し，学習の際のエピソードを出し合った。そして，小学校を卒業することの意味を話し合った。「感謝できる人になりたい」「信念をもった人なりたい」と卒業への思いを抱き始めた子供たちは，最後のあらつ学習として，下のＲ児の感想のように，卒業に際してこれから自分が大切にしたい考えを発表し合うという目的と，そのために，自分の将来の夢や希望にかかわる内容を追究するという課題をつかみ，「卒業研究として，自分が大切にしたい考えを書きまとめ，６の１卒業研究発表会をしよう」が設定された。



【自分の追究課題について話し合う】

【活動の計画について話し合う】

○どうしたら剣道の先生になれるのか。どのような心がけがいるのか。○学校の先生は子供のためにどのようなことをしているのか。○音楽家に大切な心構えは，何なのか。○福岡市ではどのようにして市政が行われているのか。○保母さんになるための心構えや子供への接し方はどうすればよいか。○どうすれば獣医になることができるのか。○どうすればおいしい鯛焼き屋を開くことできるのか。○洋服のデザイナーはなぜ，うまくデザインできるのか。○医者はなぜ必要か。ウイルスや免疫にはどのような種類があるのか。

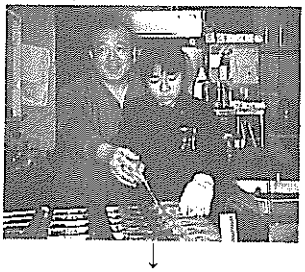
【子供が設定した卒業研究にかかわる追究課題の例】

私は，自分の将来の夢についてとても興味があるので，将来の夢のあこがれのようなものである保母さんについて調べたいと思いました。このことで，将来の夢に自信がついたり，考えが深まったりすると思います。近くのＤ保育園に行って仕事の内容や園の行事やどんな子供に育てたいのか，つらいことや大変なことを聞いてみたいです。あと，一緒に体操したり，給食のお世話をしたりしてみたいです。レポートやパネルにまとめて記念に残るようにしたいです。

【追究課題をつくったＲ児】

② 自己追究・内容創造（課題ごとに卒業研究をかきまとめる）　（３～１３／１６）

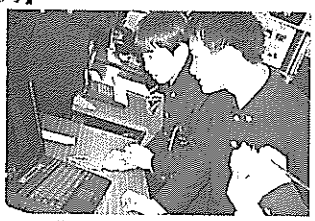
まず，追究対象ごとに分かれ，卒業研究の構想について話し合い，追究対象ごとに分かれて実地調査を行った。Ｄ保育園の保母の補助的な作業等の体験，さくら園やふくふくプラザなどの社会福祉施設への訪問及び介護福祉の補助作業等の体験，Ｙ整形外科やＳクリニックなどのあらつ地区の医療機関での治療見学，通訳になるにふさわしい心構えを考える外国の方との交流体験など様々な活動を工夫し，自らの足で対象に働きかけていった。そして，子供たちは，情報収集をもとに，論構成を明確にしたレポートやホームページなど，主張が明らかになるように，表現を工夫していった。

R児の追究活動	H児の追究活動	N児の追究活動	H児の追究活動
○ 保母さんになるためには，どのようにすればいいのか。 ↓ ○ D保育園の保母さんへのインタビューや給食の配膳体験	○ 多くの人に喜ばれる音楽家としての心構えはどうあればよいのか。 ↓ ○ ピアニストや楽器店主へのインタビューやインターネット検索	○ どうすればおいしい鯛焼き屋を開くことできるのか。 ↓ ○ 唐人町での饅頭づくり体験やインターネット検索	○ 福岡市では，どのようにして市政が行われているのか。 ↓ ○ 唐人町での街頭調査・市議会議員へのインタビューやインターネット
			
↓ ○ 直接体験をしたので，理想ではなく現実を見て感激した。大変なこともたくさんあるけど，うれしいことがそれ以上にたくさんあるという素晴らしい仕事だと気付いた。子供にはたくさんの可能性があってそれを引き出すのが保育士や母であることを知り，感謝の大切さを知った。 ↓ ○ 研究レポート	↓ ○ ピアニストの方々にインタビューしたり，演奏の仕方を習ったりして思ったことは「人に感動を与えることは，とれもすばらしい」ということだ。聞く人の立場になって演奏をすると感動を与えるということだ。いい音を追究するだけでなく，聞く人の立場で演奏していきたいと思う。 ↓ ○ 研究論文	↓ ○ この研究で高まったものは，誰でも優しく思いやりをもつと言うことだ。ムツゴロウ焼きの店長さんは，お客さんを笑わせたり，場を和ませたりすることがうまかった。「真心を込めて作る」ことの大切さも知った。これはその他の仕事をするにも大切な言葉だと思うので大切にしたい。 ↓ ○ 研究レポート	↓ ○ ここまでたどり着くまでにたくさんの過程があったけど，政治家との出会いで自分の信念を貫き通すことの大切さを感じ取ったし，多くの人との出会いで，自分一人で生きているのではない，たくさんの人に支えられて生きているということを学習を通して実感することができた。 ↓ ○ ホームページ

【課題ごとの卒業研究作成における追究・表現活動の例】

子供たちは，卒業研究発表会に向けた準備を行った。まず，子供同士で中間報告会を行う中で，研究の経緯や体験の価値など発表の観点を明らかにした発表内容の付加・修正を行ったり，友達の追究内容や方法のよさを取り出したりした。

【中間報告会の内容の吟味】



【よさの取り出し】

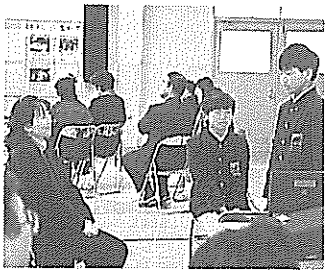
③ 生活更新（卒業研究に書きまとめた「応え」）を発表する （１４～１６／１６）

子供たちは，これまで学習でお世話になったなったゲストティーチャーの方や保護者を招聘し，卒業研究発表会を行った。そして，卒業研究で得た自分がこれから大切にしたい考えを堂々と述べ，ゲストの方から賞賛していただくことにより，学習の成就感や中学校生活や将来の生活に向けての期待感を高めていった。

○ みんなのお母さんが涙を流されていたことは，きっと私たちの成長を感じての喜びの涙だろうと感じました。私たちにたくさんの愛情や環境を下さった方々に感謝の気持ちを忘れることなく，中学校生活を送りたい。（R児）

○ この学習で，医者っていいな，私も人を助けたいなという気持ちを強くした。あるお母さんから，この勉強は自分たちの自信につながるので大切にしてほしいといわれ，たくさんの経験をしていく中で，新たな一歩を踏み出したいと改めて思った。（N児）

【卒業研究発表会後での子供たちの感想】



【卒業研究発表会の様子】

健やかな心を求め続ける子供を育てる保健指導
――心と体で実感しながら身につけるストレスマネジメントスキル――

保健部　今村　由香

1．主題設定の理由

（1）子供をとりまく現代社会の状況から

激増する不登校やいじめなど、子供たちの心の荒廃が大きな社会問題として顕在化している。それら表面に現れた問題行動の背景には、子供たちをとりまく家庭・学校・地域がかかえるストレスがある。そのため子供たちは、日々の生活の中で自分のストレスをコントロールするすべもなく苦しんでいる。しかしストレスをすべて取り除くことはできないし、ストレスがあること自体が問題ではない。子供たちがストレスに耐える力を充分にもたず、たとえむかつきキレれても自分の心をうまくコントロールしていくような自己制御力が育っていないことが問題なのである。子供本来の「生き生きわくわく」を取り戻すには、子供たちが自己の存在を慈しみ、肯定的に見る心を土台として、自分のストレスをコントロールしたり癒したりしながら、健康な心を育んでいくことが大切であると考える。

（2）新・指導要領のねらいから

今回の指導要領の改訂ではこのような社会的要請から、様々な改善がなされている。例えば体育科の保健領域が中学年より開始され、新たに「心の健康」が項目として設けられている。その内容的な特徴として「心の健康問題の生じ方や対処の仕方」を強調するなど、心の健康への対応や健康な生活行動の実践などが重視されている。つまり、心の健康を保つためのスキルを身につけ実践していくことを重視した保健教育が望まれているのである。そこでは、保健学習と運動領域の体ほぐしの運動を関連させ、不安や悩みへ対処する有効な方法として取り入れるなど、実践力を重視した保健指導を充実させなければならない。

（3）本校児童の実態から

保健室に来室する子供の中には、病気ではないが頭痛や腹痛を繰り返す子、ベットでぐっすり眠り込む子、対人関係で悩む子などストレスをためているのではないかと感じさせる気になる子供がいる。

さらにストレスに関するアンケート結果では、いつもいらいらする、何をしても楽しくない、泣きたいような気がするという子供もいた。このような子供たちの心は健康とはいえないのではないだろうか。

＜ストレスのアンケート結果より＞

対象	本校５年生児童
ストレスを毎日感じる	２０．７％
ストレスを時々感じる	２９．４％
精神的なゆとりがないと感じる	３７．０％

本校では心の健康に関連して、生活アンケートの実施や心理テストを活用し、養護教諭による子供たちの心の問題の把握や担任への情報提供、保健室での相談活動などで、個別指導の充実を図ってきた。しかし心の不健康という状態は、いつ誰にでも起こりうるものであり、起こってからの対症療法でなく、子供たちが自分自身で心の健康を保持増進していけるような学級集団への予防的支援が必要ではないかと考えた。また養護教諭として子供たちの心の健康に関連して実態を的確につかんだりその情報を発信したり、専門的な立場からＴ・Ｔとして授業に加わったり、学級活動における保健指導をするなど積極的な支援を行うことの必要性も感じている。

このような考えから、昨年度までに自己肯定感（セルフエスティーム）を高めるための保健指導を実践し、個人差の受容や自信を持って物事に取り組んでいる姿が見られるようになってきている。そこで本年度はストレスをコントロールしたり癒したりするなど、よりよい対処ができる実践力を育むために、子供たちのストレスに視点を当てた保健指導を行ってきた。

２．主題の意味

（１）主題の意味

健やかな心とは、「心の疾病がないだけでなく、ストレスが蓄積されていないこと、甚だしい不安や悩みがないこと、さらに自己肯定感（セルフエスティーム）に支えられた自己実現へのエネルギーを持っていること」と考える。過剰なストレスにさらされていたり、感情の不安定な状態では、「生き生きわくわく」とした生き方は望めない。また自己実現の過程で、困難に遭遇しても現実を直視し、主体的に解決策を考え、自ら意志決定し、その結果に責任をもつ生き方をするためには自己肯定感に支えられていることが大切である。

健やかな心を求め続けるとは、生涯にわたって自分の心身の健康に関心を持ち、自己の精神状態を適切に保つことである。つまり、気持ちのよい生活を送りたいという願いをもとに、生活を見直したり健康に生活する知恵を取り入れたりしながら、自己をとりまく環境にかかわっていくことである。

体の健康を保持増進するために病気を予防したり体を鍛えたりするように、心の健康もまた予防したり適応したりよりよい状態にコントロールしながら生きていくことが大切なのである。

健やかな心を求め続ける子供を育てる保健指導とは、自分の心のあり方や心の状態の変化に気づかせ、心の健康に関する知識や行動変容に必要な経験を与え、日常生活における健康問題に対しての実践力の育成を目指す指導である。このような学習を展開することによって、心身の問題を主体的に解決しながら健康的なライフスタイルを確立していくことができる。

（２）副主題の意味

心と体で実感するとは、心と体の声に耳を傾け、心地よさなど生理的心理的感覚を感じ取ることである。ここでは知識理解にとどまらず経験や体験から生まれた「気持ちいい」「すっきりする」「軽くなった感じがする」などの感覚をとらえさせることが大切であると考える。また、健康とはもともと「健体康心」の略語で、心と体の全体のバランスを強調する言葉であることからもわかるように、心と体を一体としてその調和から健康をとらえさせたい。

ストレスマネジメントスキルとはＷＨＯが提唱するライフスキルの一つで自分自身のストレスによる心と体の影響を知り、ストレスをコントロールしマイナスの影響をできるだけ軽減したり対処したりする技術を身につけることである。

子供たちは成績や友人関係、その他様々な刺激やストレスを受けている。ストレスは適度であれば心身の活動性を高め有益であるが、過度のストレスや慢性的なストレス状態は、病気にかかりやすくなったり、病状を悪化させることが知られている。またストレスに対しての感じ方や対処の仕方には「自分を大切にしたい」「自分なら大丈夫」といった自己肯定感（セルフエスティーム）が関係してくる。そのため、現代社会に生きる子供にとって自己肯定感（セルフエスティーム）を高めつつ、ストレスとうまくつきあい、コントロールしていくことは大切な生きる力であると考える。

すなわち心と体で実感しながら身につけるストレスマネジメントスキルとは、ストレスによる自分の生理的心理的感覚に耳を傾けながら、健康状態を把握し、よりよい状態にコントロールする活動を通して、自分にあった対処を実践していく能力を伸ばしていくことである。

（３）具体的構想

このような指導を行うにあたっては、常に子供の心身の健康状態に関する情報交換を行うなど、担任との連携は欠かせない。そこで今回は、学級活動の中の保健指導という位置づけで授業は養護教諭が進めることとし、担任は「心のノート」による個人への支援や、学級内でのレクリエーションの計画、または「体ほぐし」と関連させた体育科の授業に発展させていくようにしてきた。

授業の構想としては、下記のような体験や活動の場を提供し、その時々の心と体の反応を実感させることによって、自分のストレッサーやストレス反応へ気づき、自分にあった対処方法を選択できるようになり実践的ストレスマネジメントスキルが身につくと考えた。

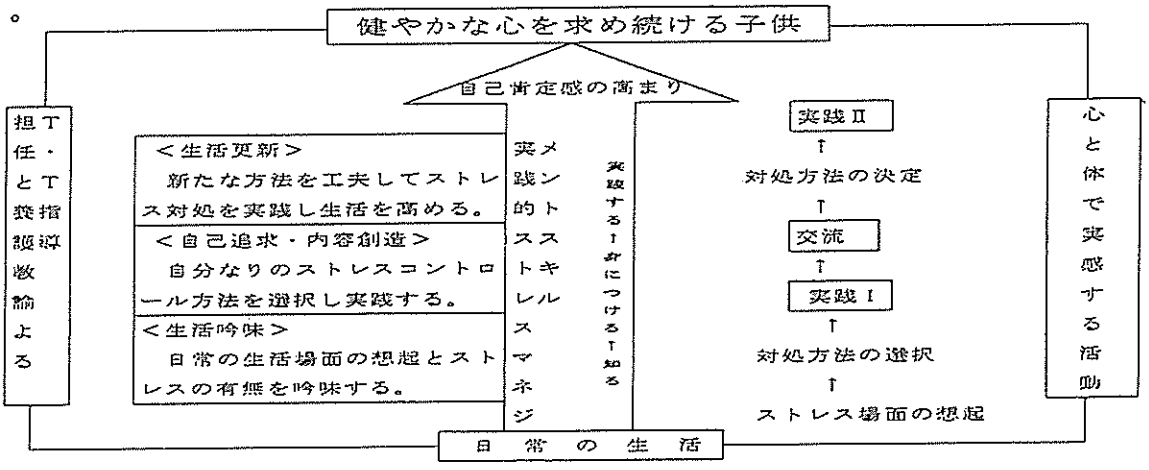
＜心と体で実感する体験や活動＞

体験や活動	実感させたいもの	理解させたい内容
①ストレス場面の想定	自分のストレス反応	ストレスは心や体や行動に影響すること
②リラクゼーション体験 ③実践Ⅰとグループ発表	心と体の心地よさ	心と体の相互効果 ストレスはコントロールできること
④友達の対処方法の試し ⑤実践Ⅱ	快または不快の感情 心と体の心地よさ	解消方法は人によって違うこと 自分にあったストレス解消方法の大切さ

具体的には単元を「生活吟味」「自己追求・内容創造」「生活更新」の３つの段階で構成し、指導や活動を行う。「生活吟味」の段階では、まずストレスについてのアンケート結果やストレス度チェックからストレスについて関心を持たせたあと「ストレスについて知ろう」というめあてをつかませ、自分のストレッサーやストレス反応について理解を深める。ここでは「今から一人ずつ前にでて歌ってもらいたいと思います」というストレス場面を想定し（体験①）、そういわれた瞬間の心と体あるいは行動などの反応を実感させ、その反応を学習ノートに記録させる。次にストレスに対処した経験について発表させたりリラクゼーション（体験②）を行い、ストレスはコントロールできることを理解させる。そして様々な対処法の中から自分で決めた方法を実践してみる。そして各自２週間自分で決めた解消方法を生活の中で実践し（体験③）、「心のノート」に心や体で感じたことを中心に記録させる。そして同じようなストレス解消方法をしている子供でグループを作り、実践をまとめていく。

「自己追求・内容創造」の段階では、ストレス解消ができているか自己評価させた後、できていない理由について考えさせ、自分の生活実態や心地よさなどを考慮し、自分にあった解消方法を選択することの大切さについて理解させ「自分にあったストレス解消方法を見つけよう」というめあてをもたせる。まずグループで心や体の反応を中心に解消方法の効果について発表させ、養護教諭による科学的な根拠や解説で理解を深める。発表時には交流の場を設定し、体験した友達から直接話を聞いたり、子供たちが直接ふれたり試したり実感できるようにした（体験④）。この時も心や体の反応や感覚を記録させ、子供たちは自分にあった解消方法を考えていく。

「生活更新」の段階では、自分の生活実態や自分の心地よさなどを考慮しながら、友達の方法を取り入れたり新たな方法を工夫したりして自分のストレス解消の方法を決定し、それを日常生活の中に生かし、心地よさを感じつつストレスをコントロールしストレスをためない生活を実践（体験⑤）していく。



3．指導の実際と考察

（1）指導単元　いやな気分をふきとばそう　（5年）

（2）指導目標

○ストレスの影響について理解し、自分のストレッサーやストレス反応に気づくことができる。

○不安や悩みやストレスに対処するいろいろな方法とその効果を知ることができる。

○自分の心の健康状態に関心を持ち、自分にあったストレス解消方法を選択し、心の安定のためにそれを日常生活の中で実践しようとする意欲を持つことができる。

（3）略案

ね　ら　い	活　動　と　内　容	手だて	配時
○自分のストレスの状況を知り、心の健康に関心を持つことができる。 ○ストレスの影響について理解し対処の方法を知る。	1．ストレスについてのアンケート結果と自分のストレス度を知る。 ○自分の心の健康状態を把握すること 2．自分のストレスの原因を知り、ストレスが与える影響と対処について話し合う。 ○ストレスは心や体や行動に影響すること ○いろいろな対処の方法を知ること ○ストレスはコントロールできること	・アンケート結果とストレス度チェック表 ・指をかみ切ったゴリラの記事 ①ストレス場面の想定 ②リラクゼーションの体験	1
○ストレス解消の効果を理解する。	1．ストレス解消を実践する。 2．実践をグループごとにまとめる。	・心のノート ③ストレス解消の実践Ⅰ	課外
○自分にあったストレス解消の方法を見つけることができる。	1．ストレス解消ができているか話し合う。 ○ ストレス度が低下していること（成果） ○ストレス解消ができなかった日があること（課題） ○友達の体験を聞いたり試したりして自分にあったストレス解消の方法を知ること	・ストレス度の比較表 ・グループ発表 ④友達の解消方法の聞き取りと試し	2
○心の健康を考えて生活することができる。	1．日常生活の中で自分にあった効果的な方法でストレスをためない生活を実践する。	⑤ストレス解消の実践Ⅱ ・生活記録表	課外

（4）子供の変容

＜生活吟味の段階＞

ストレスの影響について知らず、またストレス度が高いにもかかわらずその対処の方法や対処の必要性も感じていない子供たちであったが、「人前で歌を歌う」というストレス場面の設定で頬が赤くなったり冷や汗がでるなどの反応を実感したことによって、ストレスが体や心や行動にまで影響することや自分にとってのストレッサーまたは自分のストレス反応が理解できたようである（資料1）。

また、目に見えにくいストレスを数字にして表したり、ストレスのメカニズムや心身症などについて説明を行ったことで、子供たちは自分たちのストレスへの対処の必要性がわかり、対処への意欲が

でてきたようである（資料２）。

（資料１） 自分のストレス反応

ス トレスの原因になっていること 1日 でしょう。 塾 ち ちょうを知ろう。 （はや心や行動にどんな反応があるかな） ・まぶたがぴくぴくする ・頭のこう直ぶがいたくなる	ス トレスの原因になっていること 1日 でしょう。 ・毎日 1Fになることが必ずある ・親におこられる。 ち ちょうを知ろう。 （はや心や行動にどんな反応があるかな） ・イライラ ・手に汗をかく ・腹痛。

（資料２） 対処への意欲

＊普段考えない心の健康も生活に大きく関わっていることがわかりました。

＊自分で気づかないうちにストレスがたまっていたのでびっくりしました。これからリラクゼーションを試してみようと思います。

＊今日の学習でストレスが解消されたようで気分がすっきりしてきました。ストレスを消し去り元気になりたいです。

さらに、ストレスの対処方法をあまり知らない子供たちだったが、リラクゼーションの体験で、解消による効果を心と体で感じ取っていたようで「肩が軽くなったようだ」「ほっとする」などの感想を聞くことができた。その結果心や体がすっきりしたりリラックスしたりすることでストレス解消ができることや心と体の相互効果、さらにストレスはコントロールできることが実感できたようである。

（写真１）リラクゼーションの様子

＜自己追求・内容創造の段階＞

この後２週間ほど子供たちは自分がやってみようと思ったストレス解消方法を取り入れて生活した。毎日の様子は「心のノート」（資料３）に記録させ、担任と養護教諭でアドバイスを加えながら観察していった。ほとんどの子供がストレスを感じたときに 解消方法を取り入れており、ストレス度も低下してきた。しかし、わずかではあるが「ストレス解消をする時間がない」という子供や好ましくないストレス解消をしている子供がいた。

（資料３）心のノート

	項 目	月 日 曜
1	夕べねた時刻は	
2	ねつきはよかったですか	
3	起きた時刻は	
4	目覚めは上かったですか	
5	朝食はたべましたか	
6	外遊び（運動）はしましたか	
7	昨日一日の心の状態を温度計であらわすと・・・。	37.5 37 36.5

〈日記〉（昨日のストレスの原因とその解消方法、解消した後の心や体の状態や気持ちを書くこと）

＜ストレスチェック表＞

＊昨日のことを思い出して、当てはまる番号だけを○で囲みましょう。

1 頭が重く感じることがありますか。
2 頭が痛いと感じることがありますか。
3 目がちらちらすることがありますか。
4 イライラすることがありますか。
5 ろ丈がうまくねとはらないことがありますか。
6 すぐに眠れないことがありますか。
7 まぶたがぴくぴくすることがありますか。
8 胃が息苦しく感じることがありますか。
9 食欲がないことがありますか。
10 気が散ることがありますか。
11 他の人と話をすることが目になることがありますか。

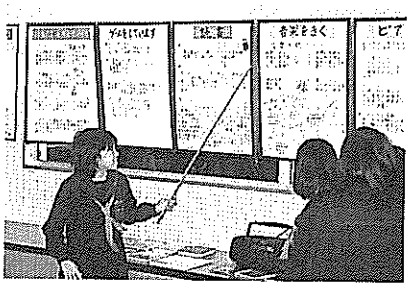
＊点数の出し方
1～4が3点、5～9が2点、10～11が1点で計算します。

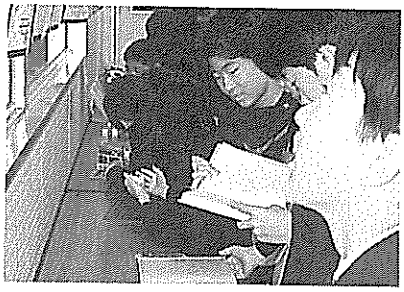
点

先生から

２時間目はまず上記のような課題を知らせ「自分に合うストレス解消を見つけよう」というめあてをつかませた。そしてグループによる体験に基づいた効果などについて発表を行った。子供たちの発表は、具体的な品物を持ってきたり資料を持参したりなど工夫が見られた（写真２）。発表の場にはグループで作成した模造紙の資料とともに体験が出来るコーナーを設けた。発表の後は友達同士たずね合ったり、実際のもので試し心地よさなどを実感する姿が見られた（写真３）。

（写真２）グループ発表の様子　（写真３）試しの体験をしている様子

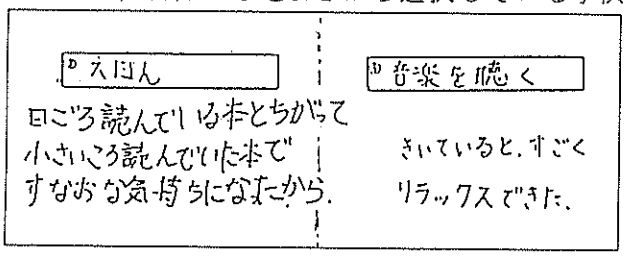




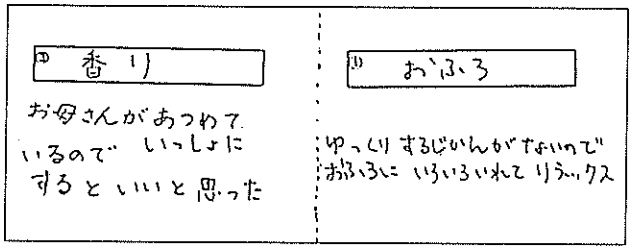
＜生活更新の段階＞

子供たちは、下記のように体験した後の心地よさや自分の生活実態などから自分に合う解消方法を考えていった（資料３）（資料４）。そして、日常の生活の中でストレス解消方法を継続して生かせるよう生活記録表を用い実践化を図っていった。

（資料３）自分の心地よさから選択している子供

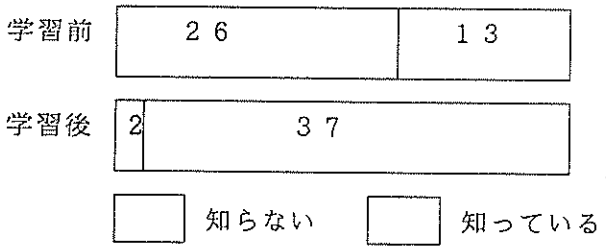


（資料４）自分の生活実態から選択している子供



このような学習を行った結果、子供たちは日常生活の中で自分がストレスを感じたときに活用できるようになってきており、ストレスをためない生活が実践されているようである（資料５・資料６）。

（資料５）　解消方法の獲得



（資料６）　ストレス度の変化

４．成果と課題

子供たちは日常生活の中でストレスを感じた時に解消方法を取り入れて心の安定を図るなど、ストレスに関わる問題を主体的に解決できるようになってきている。これは、ストレスマネジメントスキルを身につける過程で、心と体で実感できるような活動や体験などを位置づけ、その中で常に自分の反応を感じ記録させていったことや、「心のノート」や生活記録表の活用で一人一人に応じた支援をしていったことが有効に働いたものと思われる。また、「体だけではなく心の健康も考えていきたい。」「自分自身で気分を変えることができることがわかった」など子供たちの学習後の感想から、ありのままの自分を認めながら、自分を大切にしたい、きっとできるという自己肯定感（セルフエスティーム）の高まりも感じられるようになってきた。

自己肯定感（セルフエスティーム）を根底にして様々なライフスキルを育てることは、これからの時代を生きる子供たちにとって大変重要であると考える。今回はストレスをどう解消していくかという学習であったが、一方でストレス耐性を高めることやストレスをプラス思考で受け止めることも必要である。また、ストレスの原因は対人関係によるものが多い。そこで今後は、子供たちに人間同士の温かいつながりを感じさせたり、自分の意志を相手にうまく伝えるような学習も取り入れていきたい。さらに体育科における保健学習との関連を考慮し、学年に応じた心の健康教育の充実を図りたい。

豊かな生活をめざす教育課程の編成

～指導の重点化を図った個別の指導計画作成を通して～

障害児教育研究部　舛元俊文　坂田佳美
早川由洋　谷崎和一郎

1．主題設定の理由

(1) 生きる力の育成から

知的障害のある子供たちの教育において「生きる力」の育成は，従来から言われてきたとはいえ，今なお新しい教育課題である。子供たちが，現在及び将来にわたって，学校生活はもとより，地域社会や家庭生活において，豊かな生活を送ることができる力を身につけることが必要であり，可能な限り自立し，社会参加できる人間を育てることが求められている。特に小学校段階では，具体的な生活レベルで現在の生活の充実を図ることが障害のある子供たちにとって最も意味のあることであり，そのことを通して身につける資質や能力こそが，将来，自立し社会参加する生活を可能にするからである。

以上のことから，「生きる力」の育成を行う上で，子供たちの生活の充実に視点をあてた教育課程の編成を個々の障害の状態や発達段階等に応じて行うことが必要だと考える。

(2) 自立し社会参加する面から

「生きる力」の育成を学校教育の今日的課題とした中央教育課程審議会第一次答申の中では，障害等のある子供たちの教育について，「生きる力を育み，可能な限り社会的な自立や参加を実現させる観点に立って，一層の指導内容・指導方法の改善・充実や多様化につとめる」と述べられている。このことは，知的障害のある子供たちの教育においては，社会の一員として，自立した生活を営むことをめざすことであり，そのために現在の生活及び将来の生活において「生きる力」の中心的位置を占める「生活力」を培うことが重要と考える。ここでいう「自立」とは，自分でできることは自分で行い，できないことについては，人とかかわりながら，自分の生活を高めていくことができるようにしていくことである。そのためには，自らの判断と決定により，主体的に取り組む学習体験の積み重ねが重要になると考える。

(3) 生活の質的向上から

近年，障害者が障害をもたない者と同等に生活し，活動する社会をめざす「ノーマライゼイション」の理念の下，ＱＯＬ（Quality Of Life：生活の質）の考え方が時代の主流となってきている。つまり，障害のある人たちを，被援助者ではなく，生活の主体者として見ていこうという考え方に基づき，社会を担う生活の主体者として，自分の生活を自ら決定し，自己実現へ向かっていけるような力を身につけていくことを重要視することである。

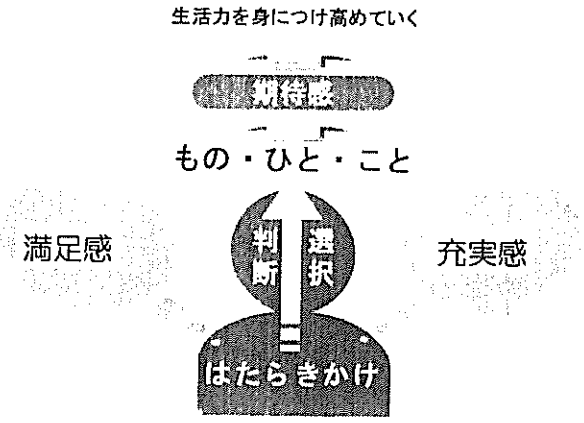
ここでいう「生活の質」とは，生活の主体者として「自分がやりたいことを見つけて(要求)自分の行動を考え(判断)，その中から自分のとるべき行動を選び(選択)，実際に行動してその結果に満足感や充実感を味わう」ことである。この生活の質を向上させるためには，単に満足感や充実感を味わうことができたか否かではなく，どのようなことができて満足感や充実感を味わうことができたのかに視点を当てることが重要と考える。

すなわち，ＡＤＬ（Activity of Daily Living：日常生活動作）を身につけると共に，ＱＯＬの向上をめざす考え方を受けて，知的障害のある子供たちの教育においても，子供自らが自分の要求に基づき自分の行動を判断･選択していく中で，生活への充実感と生活の充実度を高めていけるような学習を求める必要がある。

2．主題についての説明

(1) 豊かな生活とは

【豊かな生活とは】



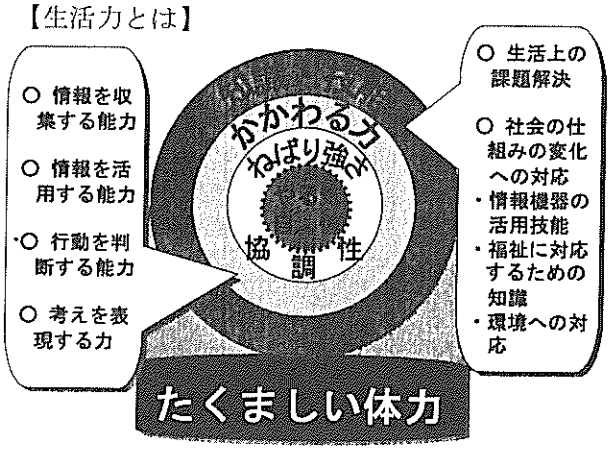
「豊かな生活」とは，子供たちが自分の身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかける中で，自分の活動への満足感や充実感を味わい，生活を広げ深めていくことである。ここでいう積極的な働きかけとは，活動への期待感を抱いて，子供たちが自分の意志で自己決定しながらもの・ひと・ことにかかわる姿である。その中で子供たちは自分がやりたいことを見つけて(要求)自分の行動を考えたり(判断)，自分に合った行動を選んだり(選択)して，実際に行動することで，生活力を身につけ高めていくと考える。

(2) 生活力とは

子供たちに培いたい生活力とは，周りの人と協調的にかかわったり，自分が出会った生活上の課題を解決したり，変化する社会の仕組みに対応したりするなど，子供たちが将来自立し社会参加するための基礎となる資質や能力のことである。具体的には，①日々の生活を健康に過ごすためのたくましい体力，②やる気・自信に支えられたねばり強さや協調性，③生活上の課題を解決するために身の回りの事象にかかわる力，④生活上の課題解決や社会の仕組みの変化に対応するための知識・技能，などの総体である。

子供たちの豊かな生活をめざす上では，たくましい体力（今よりもより良好な状態）を基盤とし，やる気・自信などの肯定的な自己像の形成に配慮しながら，身の回りの事象にかかわる力と，新たな体験や課題場面で必要不可欠となる知識・技能の育成が大切になると考える。具体的には，身の回りの事象にかかわる力として，自分に必要な情報を収集する能力や収集した情報（知識・技能）を活用する能力，自分の行動を判断する力，自分の考えを表現する力，などの生活上の課題を解決する力である。また，自分の生活を営むために必要な事柄に加えて，変化する社会の仕組みに対応するための情報機器の初歩的な活用技能，ボランティアなど福祉に対応するための知識，環境を守るための廃棄物の処理の仕方，なども培うべき生活力に含まれてくる。

【生活力とは】



(3) 教育課程の編成について

知的障害のある子供たちの教育課程は，生活中心と個に応じた指導ということに特色がある。

子供たちが豊かな生活をめざす上で，不可欠な内容として，子供たちが主体的に，かかわっていこうとする意欲や自発性を育てる内容，自立し，地域社会の中で生活していく上で必要な基本的生活習慣を身につけさせる内容，集団生活を行っていく上で，人と協調的にかかわっていくことができるような集団参加につながる基礎的能力を育てる内容があり，このような内容を選択し，重視していくことが必要である。また，子供たちの実態を見てみると，子供たちの興味・関心や，その興味・関心を抱く対象，知的認識活動などに大きな個人差がある。その子供たちに限られた期間で，生活力を身に

つけさせるためには，障害の特性に照らして教育内容を精選していかなければならない。

さらに，このような指導内容を設定した上で，個に応じた指導の視点から子供が友達や教師など自分の身の回りの人と協調的にかかわりながら主体的に活動でき，満足感，充実感をもって学べるような指導計画を実現していく必要がある。

(4) めざす子供の姿

豊かな生活を営む子供の姿を，具体的に次のように考える。

めざす子供の姿

○ 学校の中で，教師や友達と協調的にかかわりながら，日々の活動へ積極的に取り組み，生活への充実感や満足感，期待感をもつ子供
○ 地域社会の中で，生活事象や社会事象のもつ意味や価値を知り，自分の生活向上のためにそれを利用することができる子供
○ 家庭の中で，自分のことは自分で行い，家族の一員としての役割を果たすことができる子供

上述した姿を子供が主体的に取り組む学習場面に置き直してめざす子供の姿を次のように考える。

学習場面でめざす子供の姿

○ 「おもしろそうだな，できるようになりたいな」など学習課題への興味・関心をもつ姿
○ 「～したら～できそうだ，～したら～できるぞ」など課題解決の見通しをもつ姿
○ 「～がわからないから，せんせいにきこう」「～さんといっしょにやると，たのしいな」など人と協調しながら課題解決に取り組む姿
○ 「もういちど，やろう」と繰り返し課題に取り組む姿
○ 「こんどは～をやろう」「～をやったらおもしろかったから，こんどは～をやろう」など自分の行為や働きかける対象を判断・選択しながら，自分の活動を自己決定する姿
○ 「できた，やれた，じぶんでやれた」など自分の活動を振り返り，活動への満足感や充実感を味わう姿
○ 「つぎは，～をやろう」など次の活動への期待感をもつ姿

3．副主題についての説明

(1) 指導の重点化を図った個別の指導計画とは

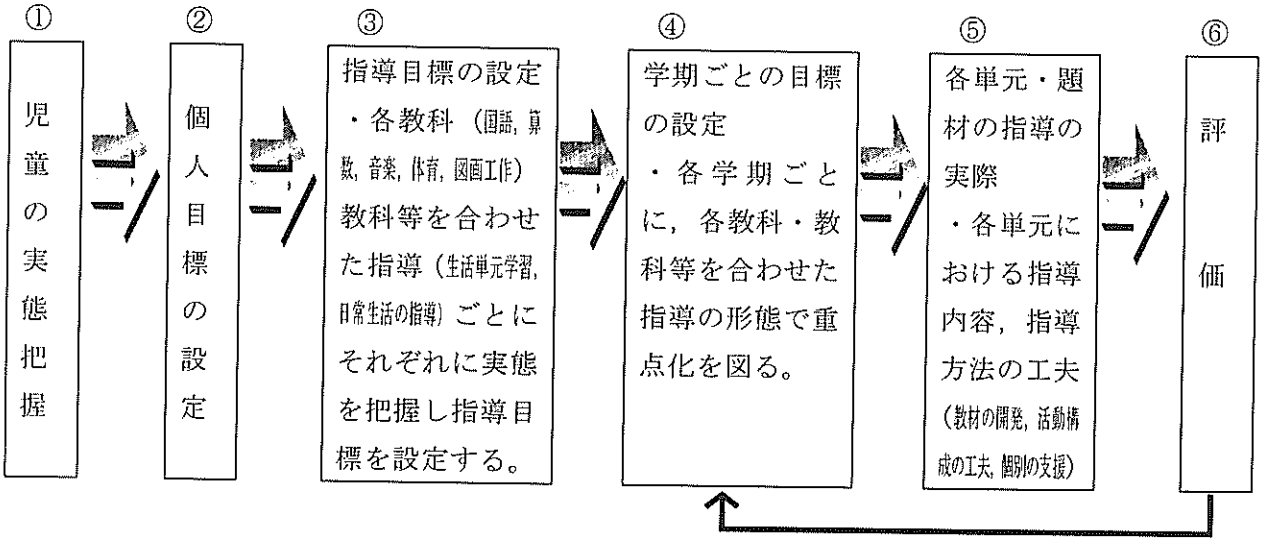
「指導の重点化を図った個別の指導計画」とは，子供たち一人一人の生活力を培うために，子供たちの生活・学習課題に応じて個人の目標を設定し，教育課程の各教科，教科等を合わせた指導の中で，その個人の目標が達成できそうな内容を重点化し，年間指導計画の各単元の中で項目化して個別の指導計画を明らかにしていくことである。

重点化するとは，個人の目標をもとに，それぞれの指導形態において，指導目標および学期ごとの目標を設定し，各単元・題材の内容から指導内容表と照らして個別の指導内容を設定することである。そして，一人一人の子供がその設定した内容を身につけることができるように，各指導形態の単元・題材の指導の中で個に応じた指導方法を工夫していくことである。

<table>
<tr><td colspan="2">個人目標</td><td colspan="4">各教科，教科等を合わせた指導形態の中で重点化していく目標</td></tr>
<tr><td></td><td>4月</td><td>5月</td><td>6月</td><td>7月</td></tr>
<tr><td rowspan="3">(例)
算
数</td><td>指導目標</td><td colspan="4">各教科，教科等を合わせた指導における１年間の目標</td></tr>
<tr><td>学期目標</td><td colspan="4">各学期ごとの各教科，教科等を合わせた指導における目標</td></tr>
<tr><td colspan="5">(例)かぞえっこ１(単元名)
(例)Ｂ－ウ－３　(各教科，教科等を合わせた指導の各指導内容から，子供の実態に応じ，重点化する内容。)</td></tr>
<tr><td>評価</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="5"></td></tr>
</table>

(2) 重点化を図った個別の指導計画作成手順

○　個別の指導計画の作成を次のような手順で行う。



①　子供の実態を把握する。

保護者に依頼して日常生活におけるアンケートを行い，家庭での日常生活の様子（基本的生活習慣・遊び，余暇の利用，言葉・数や量，社会性・地域社会での生活，道具用具の利用）を記入してもらう。また，子供の生活地図として，平日用・休日用のそれぞれに利用する交通機関，行く場所，出会う人などの記入をしてもらい，学校生活における実態や，客観的な検査等と合わせて実態として把握し，教育的課題を知る。

②　個人目標を設定する。

子供の実態をもとに，豊かな生活をめざすうえで，子供たちの現在もてる力，発揮できている力は何か，これから必要で身に付きそうな力は何かを発達段階等を踏まえて明らかにし，個人の目標（１年間で達成したい目標）を設定する。

③　個人目標を達成するための指導目標を各指導形態の中で設定する。

個人目標をもとに，教科等を合わせた指導として，日常生活の指導・生活単元学習，教科別の指導として，国語・算数・音楽・体育・図画工作の各教科毎に実態を把握し，どんなことが学習課題なのかを明らかにし，その課題を達成するための指導目標を設定する。

④　各学期ごとに達成したい目標を設定する。

各指導形態の中で，学期ごとに達成したい目標を立てる。その学期目標を，年間の各単元・題材の内容と照らして，それぞれの学期で達成できそうな内容を指導の重点として項目化する。具体的な指導項目については，各指導形態における指導内容表から，その項目を記号化して，個別の指導計画に記載する。

⑤　各学期の目標を達成するために各単元・題材の指導内容や指導方法を工夫し指導を行う。

各単元・題材において重点化し項目化した内容について，教材の工夫，活動構成，個に応じた指導を行い，子供たちの目標が達成できるようにする。

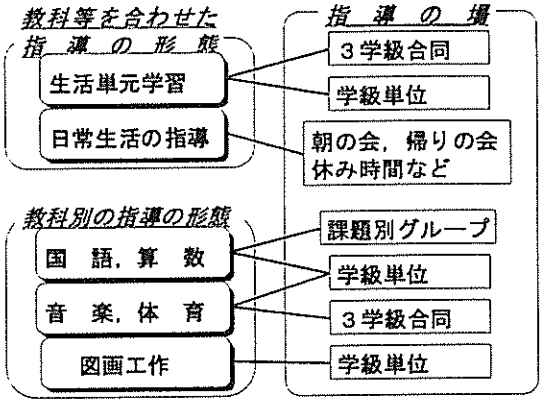
⑥　学期ごとの目標や，個人目標の達成がなされたかの評価を行う。

指導内容や指導方法と併せて，子供一人一人の達成度の評価を行い，次学期・次年度の計画に生かす。

(3)　指導の形態について

上述したことから，指導の形態を右図のように考える。具体的には，教科等を合わせた指導の形態として生活単元学習と日常生活の指導を，教科別の指導として国語・算数・音楽・体育・図画工作を設定する。生活単元学習と教科別の指導の関係は，単元・題材において互いに関連させて指導を行う場合と，それぞれ単独に指導を行う場合がある。また，生活単元学習と教科別の指導の体育と音楽については，学級単独で指導を行う形態と３学級合同で指導を行う形態の２つの場での指導を行う。さらに，国語と算数については，課題別のグループ編成による国語グループ・算数グループを位置づけ，言語，数量に関する基礎的事項の指導の徹底を行う。

【指導の形態及び指導の場】



日常生活の指導については特設の時間は設けないが，学級の朝の会や帰りの会，給食の時間や休み時間において継続的に指導を行う。また，自立活動についても特設の時間は設けないが，全教育活動の中で配慮的に内容を取り上げ指導を行う。

(4) 指導を行う場合の工夫について

①　教材の開発

ア．子供たちの生活経験があり，興味･関心の高いもの

イ．子供たちの実態に応じることのできる多様な活動が内包されているもの

ウ．子供たちが意識しやすい解決の目的があるもの

エ．子供たちに課題解決の必要感を喚起できるもの

②　活動構成

ア．学習対象や学習方法を子供たち自身が判断・選択できること

イ．活動の繰り返しの必然性や繰り返しの中に変化があること

ウ．子供たちの働きかけが可能なもの・ひとが準備されている環境であること

具体的には，動機・熱中・発展という３段階の学習過程で構成する。

○　動機段階：学習課題を意識し，学習への動機をもつ。

○　熱中段階：課題に熱中して取り組み，課題を解決したり，解決達成した成果を実感したりする。繰り返しの活動の中で，学習対象や学習方法を知り，それを使う中で，活動の判断選択を行っていく。

○　発展段階：学習してきた成果を日常の生活に近い場面で生かしたり，日常生活に生かしたりする。

③　個に応じた教具，教師の個に応じた支援の工夫

ア．子供たちの力で操作ができるもの

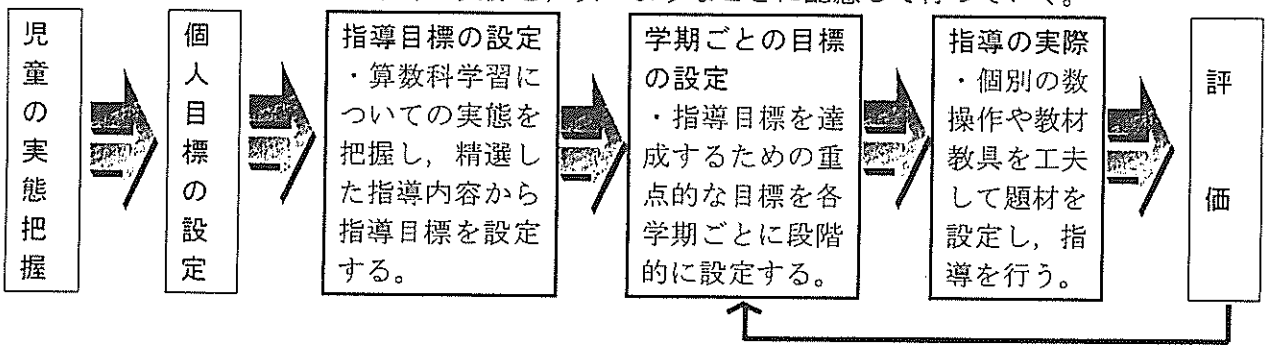
イ．操作をした結果や成果が子供たちに意識できるもの

ウ．子供たちに自己評価ができるとともに，子供たち自身でフィードバックが可能なもの

エ．個に応じたモデル演示や声かけ，動作補助など

＜個別の指導計画作成手順例（算数科学習について）＞

算数科学習における個別の指導計画を次のような手順で作成し実施する。このとき，指導目標の設定・学期ごとの目標の設定・指導の実際を，次のようなことに配慮して行っていく。



(1) 指導目標の設定

個別の指導計画に基づいて個人目標を達成するために，算数科においての課題を明らかにし，次のような点に留意しながら年間の指導目標を設定する。

○ 保護者の願いや思いをもとに，子供の生活にかかわる内容を取り上げること

- 生活に必要なものの数や数え方
- 生活上の長さや広さとその測り方
- 生活場面での時刻や時間の読み方や利用の仕方
- 生活場面での金銭の利用の仕方

○ 発達段階に応じた適切な内容を系統的に取り上げること

- 「３まで，５まで，１０まで…」などの系統的な数の概念形成
- 具体的な数対象（実物，模型など）の操作を通した抽象的な数字・数式の理解

また，これらの指導目標を設定するにあたって，算数科における実態把握および学習指導内容設定を次のように行っていく。

算数科学習についての実態の把握

子供たちの生活力の把握から，算数科学習における個別の教育的課題を次のような実態調査をもとにさらに明らかにしていく。

○ 各種知能検査・発達診断等における算数的課題の調査（知能指数・発達段階の把握）

○ 日常生活・学習場面における算数的課題についての行動観察記録（学習内容習得状況の把握）

○ 医療的診断等による障害特性の調査（認知面・操作面の傾向性の把握）

○ 保護者のニーズにおける算数的課題の調査（生活上の算数的課題の把握）

算数科学習指導内容のとらえ方

生活力の育成という視点から，子供たちの生活に生きる数量の力を獲得させるために，本校特殊学級における算数科学習の指導内容を，次のような５領域と下位項目に精選し設定する。さらに，各項目を５段階に細分化し，学習への取り組み方を①教師と一緒に，②部分的に補助されて，③一人で，の３段階のスモールステップで設定する。（指導内容表の詳細は別途資料参照）

領　　域	下　位　項　目
A　数の基礎概念	ア 認識，イ 分類，ウ １対１対応
B　数と計算	ア 数唱，イ 数字，ウ １つずつ数える，エ 直感的に数える，オ まとまりで数える，カ 順序数，キ 大小比較，ク 数の合成，ケ 数の分解，コ 加法，サ 減法，シ 乗法，ス 除法
C　量と測定	ア 長さ，イ 重さ，ウ かさ，エ 広さ，オ 時刻・時間，カ 暦
D　図形	ア 形，イ 方向
E　数量関係・実務	ア 表とグラフ，イ 金銭処理

(2) 学期ごとの目標の設定

上述した指導目標を各学期ごとに段階的に細分化して設定し，数範囲や操作の仕方がスモールステップで高まっていくようにする。このとき，指導目標達成のために必要となる指導内容を重点化して，各月の題材に位置づけ配列していく。指導内容を個に応じて重点化するにあたっては，次のような点に留意する。

○　各個人の指導目標達成のために必要となる指導内容を精選すること

○　概念の深化・定着を図るために，年間を通じて同じ領域の内容の配列に系統性をもたせること

○　内容の高まりと操作技能の高まりが一致するよう配慮すること

個人目標から指導目標までの設定例（第５学年Ｅ児）

個別の指導計画個人目標
○　排泄や衣服の着脱などの身辺処理の能力を身に付ける。 ○　成功体験を増やし，自信をもって落ち着いて行動する。 ○　積極的に物事にかかわる。 ○　要点を考えて表現する力や簡単な計算・金銭処理の力を身に付ける。

保護者のニーズ	学習内容習得状況	重点化する指導内容
・簡単なたし算程度はできるが，もっと計算力をつけてひき算ができるようになってほしい。 ・自動販売機のジュースは買うことができるが，金銭のつり銭がわかるようになってほしい。 ・時刻の分がわかるようになってほしい。	・100 までの数の数唱，数字の読み書きができる。 ・１つずつ 50 までの数を数えることができる。 ・５までの数の合成を数えたしでることができる。 ・金種の違いがわかり少額の買い物ができる。 ・○時の時刻を読み取ることができる。	B　数と計算 オ．まとまりで数える ク．数の合成　ケ．数の分解 コ．加法　サ．減法 C　量と測定 オ．時刻と時間 E　数量関係・実務 イ．金銭処理

算数科学習指導目標		
○　身近な 100 までの数を数えたりたし算・ひき算をしたりする。 ○　５０円までの等価関係を使って，１００円程度の金銭処理をする。		
１学期目標	２学期目標	３学期目標
○　５０までの数の具体物や半具体物を１０でまとめて数えたり，５までの数の合成分解をして数式に対応付けたりする。	○　100 までの数の具体物や半具体物を１０でまとめて数えたり，１０までの数の合成分解をして数式に対応付けたりする。	○　10 円・50 円・100 円の等価関係を理解して，金額を取り出して数える。 ○　たし算･ひき算の計算をする。

(3) 指導の実際

次のような点に留意して題材を設定し，生活の中の数量にかかわらせながら個別の学習内容に取り組ませていく。

○　おたんじょう会や校外学習など，子供の興味・関心や必要性に基づいた具体的な生活事象の中から学習素材を取り上げ，数の知識・技能を生かして生活目的が達成されるような活動を構成する。

○　生活事象の準備や実施のために，実際に必要な具体物を数対象に用いて，個別の学習内容に応じて具体から抽象，抽象から具体の繰り返しの数操作を仕組む。

生活にいきることばを豊かにする国語科学習

障害児教育研究部　早　川　　由　洋

１．主題設定の理由

(1) 生活実態より

子供たちの言語獲得の段階には個人差があるが，生活を自立させていくにあたって，自分のことを伝えたり，他者のことを理解したりすることは大変重要なことであり，それを支える言語獲得の必要性は非常に高い。その観点から，学校生活における子供の様子を見てみると，自分のことを要求する場面で，「してください。」とだけ言うことが多い。場面の状況で通じるものの，身近な生活場面における的確な意思伝達や要求としては不十分といえる。また，自分の行動の為に他者に尋ねたりすることも不十分である。保護者の願いは「自分のことは相手にはっきり伝えて欲しい。」「自分の意思表示はきちんとできるようになって欲しい。」などのようにコミュニケーション力の育成に向いているが，現在の段階では，そのコミュニケーションの基礎となる語彙の獲得や話形の拡充を図っていくことが重要といえる。子供が生活にいきることばを豊かにし，自分の意志や要求を伝えられるようにしていくことは，将来の生活を豊かなものにしていく上で必要があると考える。

(2) 国語科において培いたい資質や力

生活にいきることばを豊にしていくため，特殊教育国語科において培う力を次のように考える。

① 自分の意志を伝達したり，要求をしていくために必要となる事物名称や行為を表すことばを，文や語句を読むことで，場面や状況の中から的確に理解していく力

② ことばを活用して目的を達成することで，ことばのもっているおもしろさや有用さに気づき，生活を豊かにしていくことばを大切にしていこうとする心

２．主題の意味

(1) 生活にいきることばを豊かにする国語科学習とは

<u>生活にいきることばを豊かにするとは，</u>

子供が主体的に生活を送っていく上で必要となる一語でも意思伝達を行っていくことのできる事物名称や行為を表すことばが増え，一つのことばを様々な場面や状況の中で正しく使えるようになることである。子供たちが生活の中でいきたことばを使えるようになることは，誰にでも自分の意志を伝えることができ，理解してもらえるとともに，他者との関わりの中で，より望ましい社会的なことばへと発展していく。それは，自分の世界を広げたり，他との関わりを深めたりしながら，生活を生き甲斐のある豊かな生活へ広げていくことにつながると考える。ＱＯＬの向上という視点からも発達的な課題を整理して，意思伝達や要求を行っていくための生活にいきることばを増やしていくことが重要と考えられる。

<u>生活にいきることばを豊かにする国語科学習とは</u>

子供の生活が豊かになり，生活力を高めるために，コミュニケーションを形成していくことばを豊かにしていくことをねらいとしている。子供に身につけさせたい意思伝達や要求に関わる語彙を学習の段階や生活環境等の実態から設定し，そのことばの意味をとらえさせていくようにする。現時点で子供は，語彙の獲得や話形の拡充の段階でつまづいているという実態がある。しかし，語彙や話形は，概念的なとらえとなる単なる教え込みの指導では身に付かない。文脈や脈絡の中でいきてはたらくものとして身につけさせていかなければならない。ことばを，単に読むだけでなく意味や目的をもった経験単元的に物語のストーリーの中から文のつながりを通して理解したり，ある状況の中で行動するために必要なことばとして理解したりすることで，ことばを生活にいきるものとして獲得していくと

いえる。それとともに，ことばに対する興味・関心を高め，ことばを読めた喜びを感じ取らせることも必要である。そのために，本研究においては読みに重点を置き，具体物を操作して品物を作ったり，劇や絵本作りをしたりといった楽しい活動を行う。目的を達成していくために読むことが必要であり，ことばが役に立っていることを意識していけるようにする。つまり，子供が意思伝達や要求をしていく上で必要となることばを，物語等の中から意識し，行為に変えたり形に変えたりさせていくなかで，読む必然から生じた結果にいきつき，そのことばの意味が理解できるようにすることである。これまでの読みの指導では，例えば，している行為そのものにことばを意味づけることでことばを理解させてきたが，それでは，獲得したことばを特定の場面でしか活用することができない。ことばを読んで意識し，行動化したり形象化したりする活動構成や教材化を行うことで，意味を多様にとらえ生活の場面で的確に活用できること，すなわち受け身的な読みではなく主体的に読んでことばを獲得していくことにつながると考える。

(2) めざす子供の姿

具体的に，読むことによって生活にいきることば豊かにする子供の姿を次のように考える。

○「このおはなしのげきがしたい」とか「じぶんもしてみたい，つくってみたい」と活動目的に興味・関心をもつ姿
○「このことばはどうするんだろう」とことばの意味をヒントカードなどからとらえようとする姿
○「このことばはまえにもでてきたからしっている。」と繰り返しの活動の中で既習内容をいかして読む姿
○「あれ　自分のしていることはちがうぞ」などとことば振り返りを場の中の読みでする姿
○「げきができた。」「絵本ができた。」「ものが作れた」と読むことで活動が達成できたことへの効力感を味わい，表現活動に意欲をもつ姿

3．活動づくりの具体的方途

(1) 児童の実態の把握について

生活にいきることばを豊にしていくため個別の指導計画を作成するが，その際の実態把握を以下のような方途で行う。

○　各種知能検査・発達診断等による意思伝達や要求に関わることばの獲得状況の把握
○　学習場面や生活場面における意思伝達や要求に関わることばの活用状況の把握
○　保護者のニーズにおけることばに関わる課題の調査

(2) 学習内容の設定

実態から設定された指導目標を各学期ごとに学習内容表の段階にそって細分化して設定し，語彙の獲得や話形の拡充がスモールステップで高まっていくようにする。さらに，指導目標達成のために必要となる指導内容を次のようなことに留意して配列していく。

○　生活にいきる意思伝達や要求のために獲得させたいことばを含んでいること
○　段階に応じたことばの獲得，定着を図るため，個別の指導計画をもとに内容を設定すること

文字を獲得しながら生活にいきることばを理解する段階にある子供	読めない文字を含んだ二音節から三音節の語句を通して，聴覚的に読みをとらえたり，絵図との整合でイメージをもたせたりする。
生活にいきることばの意味を理解する語彙獲得段階にある子供	文脈や脈絡の中における語句のイメージを，絵図との整合を図ることで，ことばとしてとらえさせていく。
語彙並びに話形を理解して活用していく段階にある子供	文脈や脈絡の中から読むことで意味を理解した語句を活用して，話したり書いたりすることで表現していく。

(3) 教材化の視点

個別の指導計画をもとにして，生活にいきることばを獲得していくために個に応じた学習内容を，子供たちの生活場面に即して配列し，意識したことばを行動や形におきかえることで意味を理解する学習が成立するように，次のような点に留意して教材化を行う。

教材文の選定について	教材化の工夫について
○　子供の興味・関心を高めるとともに，子供にとって，内容が理解しやすくかつ生活に身近で獲得したことばが生活にいきて活用できる価値のあるものを選定する。【価値性】	○　個別の指導計画をもとに日常生活から必要性に基づいて獲得させたいことばを，学習内容として個別に設定し，そのことばを意識して，ことばの意味が理解できるように教材を構成する。
○　話の筋からイメージを豊かに膨らませることができる教材文を選定し，読みを通してことばの意味を理解したり会話文から話形をとらえたりするなど生活にいきることばの獲得を図る。【表現性】	○　語彙の獲得は単なる教え込みでできるものではないので，文脈や脈絡の中から行動化したり，形象化したりして目的が達成できることでことばを獲得させ，一つのことばが様々な場面で，多様に活用できるようにする。
○　同じことばを何度も読んで，とらえた意味を確かなものにしていくとともに，違いを読みとり既習の内容をいかしながら，ことばの意味を理解していけるように繰り返しの中に変化のあるものを設定する。【構造性】	○　既習経験をいかしながら学習内容を確かなものにしていくとともに，場における読みを通して自己評価や相互評価で振り返りをするなどの繰り返しを仕組む。 ○　繰り返し活動する中で，支援を徐々に減らしていくことでことばの意味をとらえられる。

(4) 活動構成の工夫

生活にいきることばを豊かにする読みの単元を，以下のような点から構成する。

○　子供が読むことに必然を感じる活動目的をもち，音声化することでことばに着目することができる活動であること

○　学習内容となることばを，行動化や形象化することから出る結果と意味づけていく活動であり，その言語活動に即した教材があること

○　活動目的を達成することで，ことばのおもしろさや有用さを感じる活動であること

具体的には次の通りである。

<table>
<tr><th colspan="3"></th><th>つかむ段階</th><th>ふかめる段階</th><th>いかす段階</th></tr>
<tr><td colspan="2">活動と内容</td><td></td><td>1．教材文をもとにした読みとりの活動について話し合う。

○ 活動への目的意識をもち，手順や方法等を理解すること</td><td>2．行動化又は絵本作りを通してことばの意味をとらえ，話形を広げることに繰り返し取り組む。
音声化
↓
形象化・行動化
ことばの意味を理解する → ことばを活用する
ヒントカードの活用で音声化されたことばをイメージ化し具体物につなぐ活動
繰り返し活動し，支援を徐々に減らすことで，既習経験をいかし意味を確かなものにする活動
場の中で読むことで振り返りを行う活動
○ 個に応じてことばを広げ，身につけること</td><td>3．読み取ったことをもとにした活動を紹介する。

○ 活動に対する達成感や成就感を味わうこと</td></tr>
<tr><td colspan="2">支援</td><td></td><td>・　活動目的を明確にするとともに，イメージをふくらませるペープサート劇や読み聞かせ
・　活動の手順をつかむモデル演示</td><td>・　個に応じた教材文の提示
・　文字記号を音声化するための聴覚機器の活用
・　ことばを具体物につなぐ絵図を用いたヒントカードの活用
・　繰り返し活動する中で，支援を徐々に減らしていくヒントカードの提示
・　振り返りを行うための場の中での読み</td><td>・　一人一人の発達段階に応じた意思伝達や要求をするためのことばが読むことによって獲得できたことを発表しあう場の設定
・　ことばの楽しさや有用性について出し合う場の設定</td></tr>
<tr><td rowspan="2">個別化の例示</td><td>B児</td><td>ペープサートから活動目的と手順をつかむ。</td><td rowspan="2"></td><td>① 今まで学習した行為を表す語句を含んだカードの文を読んで，読んだ通りに具体物を作成する。
② 行動化したことを書き表す。</td><td rowspan="2">文から意味を読み取ったことを振り返る。</td></tr>
<tr><td>D児</td><td>ペープサートとモデル演示で活動目的と手順をつかむ。</td><td>① カードの短文を絵図によるヒントカードを使って読んで，読んだ通りに具体物を作成する。
② 出来上がりカードによる自己評価を行う。</td></tr>
</table>

4．指導の実際と考察

(1) 題材名　ヨットをつくろう～「とらたのヨット」より～　（第３・４学年さくら組）

(2) 本題材の考え方

○　題材について

本題材は，教材文「とらたのヨット」にもとづいてみんなでヨットをつくろうという目的意識をもち，簡単な語句や文を読んで，動作化したりすることで，語句の意味をとらえたり，語句のつながりとしての文から場面の様子をとらえたりすることをねらいとしている。本単元で取り上げる「とらたのヨット」の価値としては，生活に身近な事物名称とあまり日常生活では頻繁に使わないものの広げたい語彙である事物名称とが共に含まれていること。生活に身近な動きを表す語彙が含まれていること。それらの語句の組み合わせによって，説明文として話形をとらえさせることができること。事物名称と動きの組み合わせによって繰り返し語句や文の意味をとらえさせることができることなどがあげられる。具体的な学習内容としては，①挿絵や読み聞かせをもとに場面の大体の様子をとらえること，②簡単な語句や文を読んで語句や文の意味をとらえること，③動作化を通してとらえた語句や文の意味を確かめながら活動目的にむかうこと，④各場面の様子をつないで話のおもしろさをとらえること，などである。このような学習内容について，児童の実態をもとに指導内容表に照らして重点化することで次のような個別の学習内容を設定する。

○　児童の実態について

本題材の指導内容に関わる児童の実態は次の通りである。

	文　字	語　彙	文形・話形	学習へのとりくみ
B児	ひらがな，かたかなの清音・濁音・半濁音の全文字と2年生段階の漢字が読める。	生活に身近な事物名の語彙を多く獲得しており，様子を表す語彙等の獲得段階である。	３語文程度で表現することができ，詳しくする語句を活用する段階にある。	どの領域にも意欲をもって取り組み，学習の手順なども把握できる。現在は，特に書くことに対する意欲は高い。
D児	ひらがなの清音・濁音・半濁音の全文字とかたかなの清音４２文字が読める。	自分のイメージしている事柄と語彙が一致してきて生活に身近な語彙が増やす段階である。	２語文程度は理解でき，促音や長音が含まれた語句，文を読む段階である。	活動目的は比較的もちやすく意欲も高い，手順の把握を支援すれば，自分で活動することができる。
C児	ひらがなの清音３８文字と濁音１０文字半濁音２文字が読める。	日常の生活に必要な事物名称を表す語彙を増やす段階にある。	２語文程度で話すことはできるが，読むでは，名称の１語文の段階である。	学習手順などは理解しずらい，。読むことについて語彙が増えつつあるので語句を意欲的に読もうとする。

○　個の学習内容について

個に応じた学習内容を設定し，それぞれの課題に取り組んでいくことで，個の学習段階に応じたア．文字力・語彙力・文法力などの言語の基礎的な力の育成，イ．言語をもとにした表現力の育成，ウ．読むことに対する興味・関心の向上，などの子供たちの日常的な言語生活における基礎を培い，コミュニケーション力の育成につながっていくと考える。

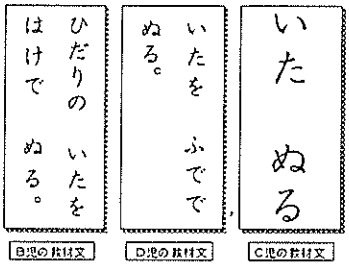
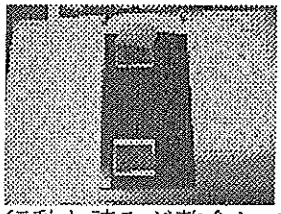
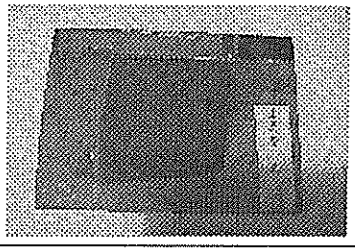
学　習　内　容		
B　児	D　児	C　児
①　かたかなを含んだ多語文を読み取る。 ②　既習内容を含んだ多語文のなかでようす（形状）や位置を表す言葉を適切に読む。 ③　読み取ったことをもとに動作化したり話したりして読み物を楽しむ。	①　２語文から３語文を読む。 ②　「前」や「後ろ」などの位置をあらわすことばを適切に読む。 ③　読み取ったことをもとに行動化したり話したりして簡単な読み物を楽しむ。	①　２音節から３音節の語句をランゲージカードを活用して読む。 ②　ヒントカードを活用して語句の意味をとらえる。 ③　読み取ったことをもとに動作化したり話したりし，易しい読み物に興味をもつ。。

(3) 目　標

1．ヨットのおもちゃを作るために説明カードを読み，ヒントカードや出来上がりカードを使って，語句（C児・F児）や短文（A児・D児・E児）文（B児）の意味をとらえることができる。

2．語句や文を読んで，おもちゃを作ることに興味・関心をもって取り組み，読むことによって目的が達成できた達成感を味わうことができる。

(4) 計　画（6時間）

段階	ねらい	活　動　と　内　容	手　だ　て	配時
つかむ	○　説明カードを読んでヨットのおもちゃを作るという目的意識をもたせる。	1．物語「とらたのヨット」を読み，本単元のめあてについて話し合う。 ○　大まかな話の筋から，ヨットづくりをするという目的意識をもつこと ○　ヨットのつくりかたの手順を知ること	・　全体の話を知るためのペープサート劇のビデオ ・　活動の手順図の提示	1
ふかめる	○　説明カードの語句や文の意味をとらえて，動作化する。 ○　動作したことを話したり，書いて読んだりする。	2．説明カードを読んで，ヨットのおもちゃを作る。 (1) 説明カードを読んで，材料を切る。 ○　語句や文から，動きを読みとって，切る行動をすることで「切る」の意味を理解すること (2) 説明カードを読んで，組み立てる。① ○　語句や文を読みとって，付け合わせる行動をすることで「つける」の意味を理解すること (3) 説明カードを読んで，組み立てる。② ○　語句や文を読みとって，ひもを結ぶ行動をすることで「結ぶ」の意味を理解すること (4) 説明カードを読んで色を付ける。 ○　語句や文を読みとって，色を塗る行動をすることで「ぬる」の意味を理解すること	・　個に応じた教材文の活用  ・　語句の意味をとらえさせるためのヒントカードやランゲージカードの活用  ・　行動と読みが整合していたかを確かめるための出来上がりカードの活用 	4 ① ① ① ①
いかす	○　ことばを読んで作ったことに対する満足感と成就感を味わわせる	3．ヨットのつくりかたを説明カードをもとに話をする。 ○　活動したことの発表をし，達成感を得ること	・　説明書の紹介をする場の設定と賞賛	1

(5) 指導の実際

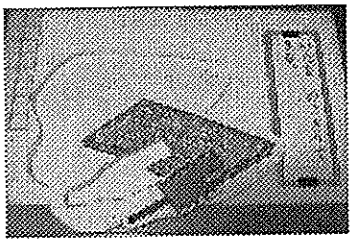
① つかむ段階（1／6時）…題材文に出会い，ヨット作りの目的や活動の手順を話し合う。

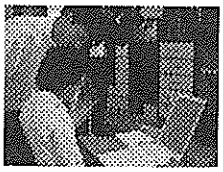
支　援	子供の活動の姿
○ 題材文の提示 ○ 活動内容の確認のための絵図の提示 ○ 活動目的を具体化するための玩具の見本の提示 ○ 個に応じた教材・教具の準備 ○ 手順図及びモデル演示の提示	「とらたのヨット」のペープサート劇の映像から，主人公のとらたとお父さんがヨットを作るようすを見て，「楽しそう。ヨットができてよかったね。」と発言した。カードを読んで組み立てるヨットの玩具の見本を提示すると，うれしそうに手にとり「ぼくも作りたい。」と発言した。作るためにはカードを読まなくてはならないことを伝えると「カードを読んで作る。」と意欲を示すことができ，活動の目的と活動のおよその手順を把握していた。 【資料①見本をもって喜ぶD児】

考察①

題材文に「切る」「つける」「結ぶ」「ぬる」といった生活に必要な行為を表すことばを位置づけ，ペープサートの映像で提示したことにより，主人公のとらたの言動を具体的にとらえることができ，ヨットを作ることに対して関心を示した。さらに，完成したヨットの見本を実際に手にすることで，「自分も作りたい。」といった活動に対する目的をもつことができた。そのために，カードに書いてある作り方を読んで行動することを手順図やモデル演示で提示したことで，読む必然を感じ，生活の中のことばの意味をとらえることでヨットを作ることができるといったおよその見通しをもつことができたと考える。

② ふかめる段階（2／6～3／6時）…読んでことばの意味をとらえ形象化・行動化する。

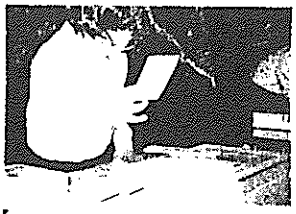
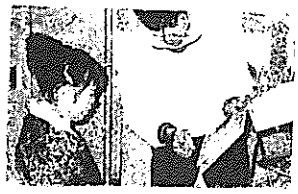
子供の活動の姿		
B児の活動の姿	D児の活動の姿	C児の活動の姿
B１　3語文の読みとりと絵本づくり 教材文を読み，2つの事物を組み合わせることで，動きをあらわすことになる絵図をつくり絵本に貼付した。  【資料②B児が操作する絵本】 B２　行動化したことの表現 作成した絵本をもとに，材料・道具置き場から，名札を読んで板とのこぎりを選んだ。「こうして。」とつぶやきながら模	D１　2語文の読みとりと絵本づくり ヒントカードを見て，必要な材料を判断しながら「いた　を　きる。」と読んだ。1試行目は「のこぎり」の絵図をヒントカードで見て板の絵図と組み合わせて「きる」行為をつかんで行動化したが，2試行目では，「きる」のヒントカードがなくても，「ぼう」と「のこぎり」の絵図を選んで組み合わせて絵本に貼付した。 D２　行動化における評価 「いたといたを」「つける」のカードを読んで，板とぬのを選んで組み立てようとしたが，	C１　語句のよみとりと絵本づくり ヒントカードの絵図を見ながら，「いた」「ぼう」などと読んだ。「きる」は最初ヒントカードを見て「のこぎり」を選んだが，2試行目では，ヒントカードの絵図がなくても「ぼうきる」と読んでのこぎりと棒の組み合わせの絵図を選んで絵本に貼付した。 C２　場の中で読む行動化 場の中にある材料置き場の名札を自分の教材文と見比べながら「いた。」と読んで，「あったー。」と言いながらその材料を選択した。

擬的に板を切断して「できたー。」と喜んだ。その後，ノートに「いたを　のこぎりで　きりました。」と書いて読んだ。	玩具の構造上組み立てられないことから，「ちがう」とつぶやいてもう一度教材文を読み，材料を選択し直して組み立てた。	 【資料③ 材料の名札を読むC児】

考察②－ア

D児は，１試行目に学習ノートを操作することで動作を表すことばの意味をとらえていたが，２試行目以降については，行動する内容をつかむことができてたので，学習ノートの操作をしなくても行動することができたと考えられる。C児については，場の中で読むことによってカードの事物名称をとらえ行動することができた。

② ふかめる段階（２／６～５／６時）…個に応じた読みでことばの意味ととらえ行動する。

子供の活動の姿		
B児の活動の姿	D児の活動の姿	C児の活動の姿
B１　既習内容を含んだ３語文以上の読みとり 行為を表す文章の構成として動詞と位置を表す語句の組み合わせに，既習の方向を表す語句を交えた教材文を読み取る。既習内容である「みぎのいたをぬる。」を読んで，ヒントカードなしで，「こっちをぬる。」と正しく意味をとらえ，具体物からカードを選択した。	**D１　３語文の読みとり** ヒントカードの絵図とことばを整合させることによって語句の意味をとらえ，語句と語句のつながりを考えて文としての行為を読み取る。初めに音声化するときは，「まえ　いた　ぬる。」と語句の羅列読みであったが，意味をとらえ行動化した後の音声化では「まえのいたをぬる。」と文として意識して読んだ。	**C１　語句の読みとり** 教材文のカードをとってきて音声化を図る。「ぬる」を「める」と読んでいたが，ランゲージマスターを活用して，「ぬる」を聴覚的にとらえ「ぬる，ぬる。」と繰り返し読んだ。その上で，絵図と照合し，語句の意味を理解した。
B２　教師の尋ねによる評価 行動化後，教師に「どこをどうしたの。」と尋ねられ，「ひだりのいたをはけでぬった。」などと答える。	**D２　場の中で読むことによる振り返りの活動** 語句の意味をヒントカードなどから正しく読みとれているかといった振り返りを行う。「したのいたをぬる。」を読んで，具体物にある「なか」というカードを選んだが，「ちがう。」とつぶやいて，下がどこかを探し，「した」のカードを見つけて意味をとらえ行動化した。	 【写真⑥ 聴覚機器を使うC児】 **C２　繰り返しの読みと行動化** 読み取った事物名称をもとに実際に行動するために必要な事物を選択する。最初の教材文では板の絵図によるヒントを見て「あった。」と具体物を選択していたが，読んで行動することを繰り返し行う中で，ヒントの絵図がなくても，「いた」と読んでその事物を選択した。
 【写真④ 教師の問いに答えるB児】	【写真⑤ 場からことばを読むD児】	**C３　支援をうけながらの行動化と評価** 読み取った事物名称と簡単な行為を表すことばを組み合わせ
B３　行動したことの表現 自分がカードを読んで行動したことを，教師の尋ねによって音声表現しているが，その中から，ことばを選んで２～３語文で表現する。本時の学習内容が入るように「どこをどうしたの		

かな。」と書く視点を与える。そのことで，「まえを　ぬりました。」などの文章でことばの確かめを行った。	D３　教師の尋ねによる評価 行動化後，教師に「何したの。」と尋ねられ，「まえのいたをぬった。」などと答える。	実際に行動化する中で，教師と一緒に板に色を塗りながら「これはなに。」と尋ねられ，「いた」「ふで」などと答える。

考察②－イ

D児は，「むすぶ」「ぬる」といった動詞に事物名称や位置・方向を表すことばを組み合わせて教材文として提示し，ヒントカードや出来上がりカードなどを用いて行動化する活動構成を行ったことで，語句の意味をとらえることができた。B児は，読んで行動したことを文章で書き表すことにより，とらえたことばの確かめを行うことができていた。個別の指導計画による読みの学習に書くことを位置づけたことが有効であったと考える。C児については，事物名称を学習内容の中心に位置づけたが，自分の読める文字に関してはカードを読もうとする意欲が見られるようになり，ランゲージカードによって読めない文字の読みをとらえたりすることができた。また，行動したことを個に応じた学習内容にそって問いかけることにより，読んで行動したことの振り返りを行ったことは，とらえさせたいことばを意識させ確かめる上で有効であったと考える。

③　いかす段階（６／６時）

支　援	子　供　の　活　動　の　姿
○　ヨットを作成したことを発表しあう場の設定	子供たちは，自分たちが作成したヨットをそれぞれ見せ合い，色のぬりかたや帆などについて「じょうずにできているね。」と讃え合った。 学習で活用したノートやカードを見返して，自分の読んだ行動をふりかえり，C児は，教師の問いかけに「いた」「ぼう」「ふで」などの事物名称を答えた。D児は，「いたといたをつける。」といったようにもう一度カードを読みながら，自分の行動を発表した。B児は，カードに自分で記入したを言葉や文を一通り見た後で自分がしたことを「最初にいたを切りました。つぎに…。」と順序を意識しながら発表した。

考察③

自分たちが組み立てたヨットの発表会を行い，活動したことを発表するために，子供たちは学習で活用したカードの読み返しを行っていた。このことは，自分たちの活動がカードを読むことでできたことを子供が意識したと考える。B児においては，読んで行動したことをもとにして，自分なりに話をしようとした。この姿から，ことばの意味をとらえることができたという様子もうかがわれる。子供たちは，互いの活動や作品を賞賛しあうことで大変よろこび，活動の成就感やことばのもつ有用さを味わうとともに，「次はなにを作ろうか。」と新たな活動に対する意欲を見せていた。

６．全体考察

説明文を読んで，実際に具体物を組み立ておもちゃを作る本題材では，動詞に事物名称や位置・方向を表すことばを組み合わせて教材文として提示し，読み取ったことを行動化で評価するよう教材化を行った。個別の学習内容に基づき，文（B児）や短文（D児），語句（C児）といったように個に応じた教材文を活用したこと，活動を繰り返し行う中で，既習経験をいかしたり，ヒントカードや出来上がりカードなどを活用したことによって，C児は事物名を理解でき，D児は位置や動きを表すことばを理解でき，B児は位置や動きを表すことばを理解し短文で行為を書く事ができた。読んだことを行動化し，場の中での読みによって評価できるような活動構成によって語彙の獲得させたことは、場や状況に応じた生きたことばの活用をさせていく上で効果的であったと考える。

資料１　国語科学習指導内容表

			1	2	3	4	5
A 聞く	音の認識	ア　歌あそび	歌い手の声を聞く	歌に合わせて体をゆする	簡単な歌のリズムを楽しむ	歌に合わせて似た動作をする	歌に合わせた手遊びをする
		イ　音あて（何の音）	身近な動物の鳴き声をあてる	何の鳴き声かをあてる	ごく身近な人の声をあてる	身近な人の声をあてる	生活場面の何の音かあてる
		ウ　音あて（方向・大小）	室内で音の方向をあてる	屋外で音の方向をあてる	音の大きい・小さいをあてる	音の近い・遠いをあてる	音の高い・低いをあてる
	音節分解	エ　名前の聞き分け	自分の名を呼ばれ分かる	自分の姓を呼ばれ分かる	自分の姓名をよばれ分かる	自分の姓名を呼ばれて反応する	他の姓名を聞き分ける
		オ　指示・行動	簡単な指示を聞く	簡単な指示を聞いて行動する	言われていることの大体が分かる	できるだけ言われた通り行動する	言われた通り行動する
		カ　単語の聞き分け	２音節の似たことばを聞き分ける	３音節の似たことばを聞き分ける	多音節の似たことばを聞き分ける	音節の違うことばを聞き分ける	日常会話の早さで聞き分ける
		キ　音節の分解	２音節のはっきりしたことばを分解する	２音節のことばを分解する	３音節のはっきりしたことばを分解する	３音節のことばを分解する	１音節のことばを分解する
	ク　音節抽出		２音節のことばから抽出する	２音節のことば２語から抽出する	３音節のことばから抽出する	３音節のことば２語から抽出する	多音節のことばから抽出する
	ケ　テレビや絵本の聞き取り		絵本やテレビを見る	絵本やテレビを見て楽しむ	知っているものに反応する	簡単な放送や録音を聞く	放送や録音を聞いて楽しむ
	コ　話の聞き取り		話しかけにおうじる	相手の話を最後まで聞く	相手の話を注意して聞く	話を聞いて内容の大体がわかる	話の分からない所が分かる
B 話す	一語文	ア　一語文前	動作のよってはたらきかける	喃語を発する	空間を意識する	ものを認識する	運動や知覚を認識する
		イ　名づけの１語文（擬声語・擬態語）	生活用語を擬声語で発する	動物名を擬声語で発する	乗り物名を擬声語で発する	楽器名を擬声語で発する	生活用語を擬態語で発する
		ウ　名づけの１語文（性質様子）	擬声語で言えないもの	動作を表すことばを話す	状態を表すことばを話す	性質を表すことばを話す	様子を表すことばを話す
	エ　２語文		１語文と１語文	連体かざりと名詞	対象的かざりと動詞	２語文の分解名詞と動詞	２語文の組立名詞と動詞
	オ　単語・文の形式整備		動詞を要求的に変える	動詞を協調的に変える	動詞を他者的に変える	動詞を時間軸で変える	動詞にあわせ名詞を変える
	カ　自分のことを話す（発語）		簡単なごっこ遊びで話す	要求を身振り表情で伝える	要求を声に出して伝える	幼児語を使わないで話す	なるべく正しい発音で話す
	キ　自分のことを話す		簡単な言葉で依頼要求する	経験したことを話す	見聞きしたことを話す	尋ねられたことに応答する	考えを交えて話す
	ク　伝言・電話		簡単な伝言をする	電話の応答になれる	身近な人に簡単な伝言をする	要件を落とさずに伝言する	電話で適切な応答をする
C 読む	文字の読み	一音一字　ア　清音	音節のつくりの単純なもの	発音の容易なもの	音節のつくりの複雑なもの	発音の難しいもの	その他の清音
		一音一字　イ　濁音・半濁音	撥音を読む	音節のつくりの単純な濁音	音節のつくりの単純な半濁音	音節のつくりの複雑な濁音	音節のつくりの複雑な半濁音
		ウ　一音二文字	促音を読む	長音を読む	拗音を読む	拗長音を読む	拗促音を読む
		エ　平仮名以外	簡単な記号	簡単な標識	片仮名	簡単な漢字	ローマ字
	ことばの読み	オ　事物名称	生活に身近な二音節の語句	生活に身近な三音節の語句	生活に身近な四音節以上の語句	社会生活上の三音節までの語句	社会生活上の四音節以上の語句
		カ　動作を表すことば	狭義的な二音節のことば	狭義的な三音節のことば	狭義的な四音節以上のことば	広義的なことば	２つの動詞の組み合わせ
		キ　状態を表すことば	形を表すことば	位置を表すことば	方向を表すのことば	順番を表すことば	機能を表すことば
		ク　性質を表すことば	形状をあらわす三音節のことば	形状を表すの四音節のことば	狭義的な三音節までのことば	狭義的な四音節以上のことば	広義的なことば
		ケ　様子を表すことば	量を表すことば	時間的なことを表すことば	情動を表すことば	広義的な三音節までのことば	広義的な四音節以上のことば
	文の読み	コ　二語文	名詞と名詞	名詞と動詞	促音や長音を含んだ名詞と名詞	促音や長音を含んだ名詞と動詞	動詞と副詞
		サ　三語文	名詞と名詞と動詞	名詞と動詞と動詞	名詞と副詞と動詞	副詞と動詞と動詞	副詞と副詞と動詞
		シ　多語文	名詞と動詞による多語文	名詞と動詞と副詞による多語文	副詞と動詞による多語文	促音や長音のある名詞と動詞と副詞	促音や長音のある動詞と副詞
		ス　物語	読んでもらって楽しむ	易しい読み物を読む	内容の大体を読み取る	場面を想像しながら読む	順序を考えながら読む
D 書く	ア　実物・絵の認識		実物と実物の分類	絵と実物の一致	写実的な絵の分類	単純な絵の分類	欠けた所の補足
	イ　線の認識		棒の長短の見分け	高い・低いの見分け	１本線かき	らせんや丸かき	ぎざぎざ線かき
	ウ　形の認識		同じ形の見分け	図形の大小の見分け	図形の違いの見分け	手本のかき写し	欠けた部分の完成
	エ　一音一文字		容易な音節の清音の書き	難しい音節の清音の書き	撥音の書き	濁音の書き	半濁音の書き
	オ　一音二文字以上		促音の書き	長音の書き	拗音の書き	拗長音の書き	拗促音の書き
	カ　文字・語句		文字の書きの興味をもつ	ひらがなの語句を書き写す	自分の名前を書く	進んで文字を書こうとする	ひらがなで語句を書く
	キ　短文・文		簡単な短文を書く	助詞を的確に使って書く	見聞きしたことを書く	できるだけ順序だてて書く	自分の考えを入れて書く
	ク　文の活用		簡単な絵日記を書く	簡単な手紙を書く	日記を書く	手紙を書く	簡単なメモをとる
	ケ　表記記号ひらがな以外の文字		句点に注意して書く	読点に注意して書く	かたかなを書く	自分の名前を漢字で書く	よく使われる漢字を書く

資料２　国語科学習における個別の指導計画例

個人目標・国語科の指導目標（年間目標のみ掲載）・各月の重点化した学習内容（表１国語科学習指導内容表参照）・各月の題材例を具備した指導計画例として，次のようなものがあげられる。

		C　児	D　児	B　児
個人目標		○ 排泄や衣服の着脱など基本的な身辺処理の能力を身につける。 ○ 自分のしたいことに意欲的に取り組む。 ○ 進んで物事にかかわる。 ○ 自分の意志をはっきりと伝える。	○ 持ち物の整理など自分のことは自分でできるようになる。 ○ 成功体験を増やして自信をもつ。 ○ 積極的に物事にかかわる。 ○ 自分の意志を正しく伝える。	○ 生活に必要な公共機関の利用をひろげていく。 ○ 成功体験を増やし自信をもって行動できる。 ○ 見通しをもって物事にかかわる。 ○ 分かりやすいように自分の意志を伝える。
指導目標		ことばを理解する意欲とひらがなに対する関心をもつことができる。	ことばの意味を的確にとらえたり，助詞を使って短文が書ける。	相手に分かるようにことばを理解し，自分の思いを入れて文が書ける。
年間指導題材と指導時数			国語科学習指導内容表における指導内容	
4	「たのしいがっきゅう」 ⑤	B－ウ－１	B－エ－５	B－カ－５
	「ともだちえほんをつくろう」 ⑦	D－カ－２	D－カ－４	D－キ－１
月	グループ別学習 ⑥	C－ア－２ D－エ－１	C－ウ－１ D－ケ－１	C－カ－２ D－ケ－３
5	「げきあそびをしよう」 ⑨	B－ウ－１ C－オ－１	C－オ－２	C－オ－３
	「あてっこあそびをしよう」 ③	B－ウ－１	B－エ－５	B－カ－５
月	グループ別学習 ⑥	C－ア－２ D－エ－１	C－ウ－２ D－ケ－１	C－カ－２ D－ケ－３
6	「でんわではなそう」 ⑧	A－コ－１	A－コ－２	A－コ－３
	「おつかいにいこう」 ⑨	C－オ－１	C－オ－３	C－オ－４
月	グループ別学習 ⑧	C－ア－２ D－エ－１	C－ウ－３ D－ケ－２	C－カ－３ D－ケ－３
7	「おはなしえほんをつくろう」 ⑧	C－オ－１	C－オ－３	C－オ－４
月	グループ別学習 ④	C－ア－２ D－エ－１	C－ウ－４ D－ケ－２	C－カ－３ D－ケ－３
9	「やまの　ピクニック」 ⑧	B－ウ－２ B－キ－２	B－ウ－５ B－キ－２	B－キ－２ D－キ－２
	「げきあそびをしよう」 ⑧	B－カ－１ C－オ－１	C－オ－３	C－オ－５
月	グループ別学習 ⑧	C－ア－３ D－エ－１	C－ウ－５ D－ケ－３	C－カ－３ D－ケ－４
10	「ともだちによんであげよう」 ⑦	C－ク－１	C－ク－２	C－ク－３
	「しおりをつくろう」 ⑨	D－カ－２	D－カ－４	D－キ－１
月	グループ別学習 ⑧	C－ア－３ D－エ－１	C－エ－１ D－ケ－３	C－カ－３ D－ケ－４
11	「ごっこあそびをしよう」 ⑩	B－キ－２	B－キ－２	B－キ－２ D－キ－３
	「とらたとよっと」 ⑥	C－オ－１ C－ク－１	C－オ－３ C－ク－２	C－オ－５ C－ク－３
月	グループ別学習 ⑧	C－ア－３ D－エ－２	C－エ－２ D－ケ－３	C－カ－３ D－ケ－５
12	「ねんがじょうをつくろう」 ⑩	D－カ－３	D－キ－１	D－キ－２
月	グループ別学習 ⑧	C－ア－３ D－エ－２	C－エ－３ D－ケ－４	C－カ－３ D－ケ－５
1	「インタビュウをしよう」 ⑥	A－コ－１ B－キ－３	A－コ－３ B－キ－３	A－コ－４ B－キ－４
	さくらぐみシアター ⑥	C－カ－２ C－ス－２	C－キ－１ C－ス－３	C－ク－４ D－キ－４
月	グループ別学習 ⑥	C－ア－３ D－エ－２	C－エ－４ D－ケ－３	C－カ－３ D－ケ－５
2	「げきあそびをしよう」 ⑧	B－カ－１ C－オ－２	C－オ－４	C－オ－５
	「パンフレットをつくろう」 ④	D－カ－４	D－キ－１	D－キ－２
月	グループ別学習 ⑥	C－ア－４ D－エ－２	C－エ－４ D－ケ－４	C－カ－３ D－ケ－５
3	「げきあそびをしよう」 ⑧	B－カ－１ C－オ－３	C－オ－５	B－カ－５
月	グループ別学習 ④	C－ア－４ D－エ－２	C－エ－５ D－ケ－４	C－カ－３ D－ケ－５

数量にかかわり生活を広げる算数科学習

障害児教育研究部　　坂　田　佳　美

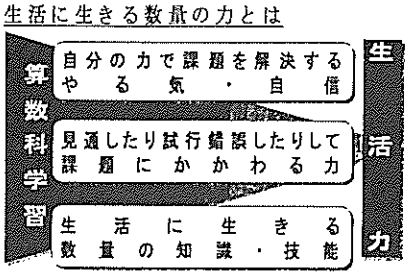
1．主題設定の理由

(1) 子供たちの実態について

知的障害のある子供たちは，一般的に抽象的思考力や論理的思考力を要する学習が苦手であり，具体的な経験を通しての生活に即した学習が必要かつ有効であるとされている。実際，子供たちの生活上には，ゲームの得点，給食の配膳，順番，時刻，金銭といった様々な数量的内容が含まれており，子供たちはこれらの生活上の数量を段階に応じて理解し適応しながら生活してきている。これらの生活に適応するための数量の力が，子供たちが自立に向かうために必要な能力であることはいうまでもないが，これらの能力が生活の中での体験のみで身に付くことはまれであり，子供たち自らが生活上の数量に課題意識をもって取り組んでいくことは難しい。このため，これまでに子供たちは数の系統性に即した緻密な学習指導を通して数概念を身に付けながら，遊びなどの生活場面への適用を行ってきた。しかし，一般化が困難である子供たちの特性から，子供自らが学習した知識や技能を，新しい状況や場面に応じて使いこなすなど，応用力を身に付けるまでには至っておらず，学習したことが必ずしも生活場面へ効果的に適用され真に生活に役立つ能力となって身に付いてきたとは言い難い。

(2) 算数科で培いたい力について

生活に生きる数量の力とは

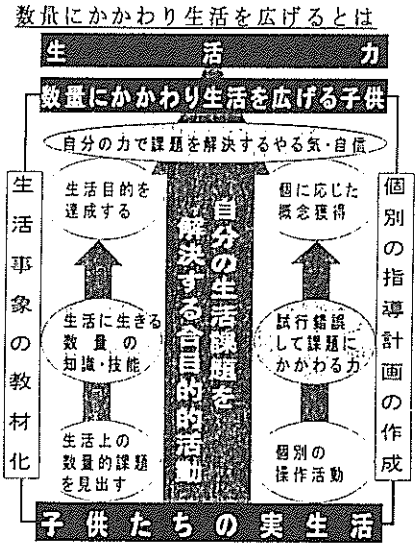


算数科学習では，上述したような生活上の数量的課題に適応して豊かな生活を送れるように，系統性のある知識・技能を身に付けながら生活場面への一般化を図り，生活力に結び付く数量の力を培っていくことをめざしている。この生活力に到達する生活に生きる数量の力とは，①自分の力で操作に取り組み課題を解決することで感じるやる気・自信，②活動の手順や操作の方法を見通したり，間違いに気付いて試行錯誤したりして課題に取り組んでいくかかわる力，③日常で必要なものの数を数える・品物の金額に応じてお金を支払う・暦を利用して計画的に過ごす，などの生活に生きる数量の知識・技能であると考える。

2．主題の意味

(1) 数量にかかわり生活を広げるとは

数量にかかわり生活を広げるとは



数量にかかわり生活を広げるとは，身近な生活経験を通して数量の概念を確かに身に付け，これら獲得した知識や技能を再度生活場面に生かしていくことで，生活上の数量的課題を処理する力や態度を培っていくことである。

子供たちが日常何気なく行っている行為や工夫の中には，素晴らしい数理を含んでいることがたくさんある。無意識に行っているこれらの行為を学習活動の中に位置づけ，数量の概念を獲得していけるように，計画的な活動を行っていくことが重要であると考える。このような身近な生活経験を通して学習を行っていくには，玩具や食べ物の個数，事柄の順番，ものの形や大きさ，品物の値段など，子供たちが日常的に取り扱うものや経験する事柄である実生活の事象そのものを数対象に取り上げ，生活目的を達成していく合目的的な算数の学習を行っていくことが

必要となる。また，ここでいう子供たちの生活事象とは，身近な家庭生活，学校生活，地域生活から取り上げたもので，学習したことが日常の場面へと応用しやすいものでなければならない。

このような生活経験を通して数量の概念を確かに身に付けるためには，個別の指導計画に基づき，一人一人の学習課題に応じた内容を含む数対象を生活事象から取り上げ，具体物から様々な属性を捨象しながら抽象化したり，数から具体物を取り出して具体化したりするなど，操作を通して抽象化・具体化の活動を往復的に繰り返していくことが必要となる。

さらに，このようにして身に付けた数量の概念を，直接的に生活場面で用いたり，異なる場面で応用したりする経験を通して，算数の学習で身に付けた数量のよさを実感させていくことができ，学習したことを進んで生活に生かそうとする態度が培われていくものと考える。

このように，子供たち一人一人が数量にかかわり生活を広げていくことを通して，自分の力で課題を解決するやる気・自信，試行錯誤して課題にかかわる力，生活に生きる数量の知識・技能，といった生活に生きる数量の力が培われ，生活力が身に付いていくものと考える。

(2) めざす子供の姿

以上のような，数量にかかわり生活を広げている子供の姿を，具体的に次のように考える。

○ 「～するためには～を数えればいいのかな。」，「～はいくつあるのかな。」などと生活の中の数量に気付き興味・関心をもつ姿
○ 「～の準備のためにぴったり数えよう。」と操作活動を通して生活目的を達成していこうとする姿
○ 「20 個用意するためには 10 個入りの袋が二つあるぞ。10 と 10 で 20 なんだ。」と生活目的を達成しながら数量の概念を身に付けていく姿
○ 「数えたことでこんなことができた。」「合わせたり分けたりすると便利だな。」などと生活に数量の知識・技能が生きたことを実感する姿

3．活動づくりの具体的な方法

(1) 実態把握と指導内容について

個別の指導計画に基づき，子供たち一人一人の生活上のニーズに応じるために，算数科学習における学習課題や生活の中の数とのかかわりを，次のような実態調査をもとに明らかにしていく。

○ 学習場面における算数科学習内容の習得状況についての行動観察（指導内容表：資料１参照）
○ 日常場面における生活上の数量的課題への気付き方・取り組み方・生活への生かし方についての行動観察

また，本校特殊学級における算数科学習の指導内容を，実生活に必要でかつ生かしやすい内容として，数の基礎概念，数と計算，量と測定，図形，数量関係・実務の５領域に精選する。そして，個別の指導内容を設定し，系統的に年間の題材に配列していく。（個別の指導計画の作成：資料２参照）

(2) 教材化の視点

子供たちの身近な生活経験を通して，個別の課題に応じた学習が成立するように，次のような点に留意して教材化を行う。

○ おたのしみ会や校外学習など，子供の興味・関心や必要性に基づいた具体的な生活事象の中から学習素材を取り上げ，数量の知識・技能を生かして生活目的が達成されるような合目的的な活動を構成する。（自分の力で課題を解決することで感じるやる気や自信の育成）
○ 生活目的を達成するための事象の準備や実施のために，実際に必要な具体物を数対象に用いて，個別の学習内容に応じて具体から抽象，抽象から具体の繰り返しの操作活動を仕組む。（見通したり試行錯誤したりして課題に取り組んでいくかかわる力の育成）

○　生活目的を達成しながら，一人一人の発達段階に応じて数量の概念を獲得し，学んだことを再度生活場面で直接的に生かしたり，応用したりするような活動を設定する。（生活に生きる数の知識・技能の獲得）

さらに，取り上げる数量的課題をもつ生活事象としては，数対象・学習内容・生活経験という観点から次のような条件のあるものを，身近な生活場面から学習内容に応じて取り上げる。

生活事象の条件

数対象	数えたり合わせたりするなど，実際の操作が繰り返し設定できるもの
学習内容	個数，順序，量，形などがあり個別の課題に適応できる様々な学習内容を含むもの
生活経験	季節や時期に応じた身近な体験であり，子供たちの生活として価値のあるもの

具体的な生活事象と学習内容の例

家庭生活	食品や食器の配膳（１対１対応・数える），遊具の片付け・衣類の整理整頓（形・分類・順序数・方向），遊びの得点（数える・合成分解・加法・減法・数量関係），カレンダーや時計の利用（暦・時刻・時間）
学校生活	学用品の整理（分類・数える），給食の配膳（１対１対応・数える），植物栽培の記録（数える・数量関係・長さ），ゲームの得点（数える・合成分解・加法・減法・数量関係），材料を集めてのプレゼント作り（数える・加法・減法・乗法・除法）
地域生活	お店での買い物（金銭処理・数える・加法・減法），電話番号・住所などの利用（数唱・数字・順序数），バス・電車などの交通機関の利用（数唱・数字・時刻・時間），地図の利用（方向・順序数・数字）

(3) 個に応じた教材・教具の工夫

子供たちの個別の課題に応じた学習内容が達成され，子供たち自身の力で試行錯誤しながら操作活動に取り組めるように，次の点に留意して教材・教具を工夫する。

○　子供一人一人の興味・関心に基づいた学習素材を生活事象から取り上げ，実物を取り扱いながら生活目的を達成していく実感を感得させること（興味・関心）

○　子供一人一人の学習内容に応じて数対象の大きさ・まとまり・数え方などを個別化し，個に応じた数操作の過程を設定すること（内容）

○　操作の正誤に気付いて，子供自身が自分でやり直したり確認したりしていけるように，評価と支援の機能を備えた教具を作成すること（方法）

(4) 活動構成の工夫

「であう」，「つくる」，「いかす」の３段階で構成し，身近な生活事象に出会い数量的な課題を解決しながら操作活動に取り組み，生活目的を達成していく合目的的な活動に取り組ませる。

段階	であう	つくる	いかす
	生活目的や数量的課題にであう。	操作活動を通して，生活目的達成のための準備をする。	生活場面に数量の力を生かす。
活動と内容	１．生活目的を達成する活動に出会い，計画や準備の手順について話し合う。 ○　活動への目的意識，興味・関心，見通しをもつこと	２．実際の事象を数対象に取り上げ，操作活動を通して活動の準備に取り組む。 (1) 小さい数範囲での数操作で準備に取り組む。 (2) 大きい数範囲での数操作で準備に取り組む。 (3) 全ての数範囲での数操作で準備に取り組む。 具体物の操作→半具体物の操作→数・数式での表現 数・数式の読取り→半具体物の操作→具体物の操作 ○　個に応じて操作活動に取り組むこと ○　個に応じて数量の概念を身に付けること	３．活動を実施して，準備してきたことを生活場面に生かす。 ○　活動を達成した成就感や数量の有用性を味わうこと
支援	・生活目的のある活動の設定 ・計画表の提示	・生活目的達成のための準備の場の設定 ・個別の学習内容と操作活動の設定 ・個別の教材・教具の準備	・実際に生活上の目的を達成する場の設定

4．指導の実際

(1) 題材名　　第５・６学年梅組　「かいものをしよう」

(2) 本題材の考え方

① 児童の実態について（抽出児）

本学級の子供たちの学習への取り組み方・数の学習段階・生活上の数とのかかわり方についての実態は下表の通りである。（学習段階は資料１算数科学習指導内容表参照）

	学習への取り組み方	学習段階	生活上の数量とのかかわり方
B児	活動への興味・関心は比較的もちやすく，手順や操作方法をつかむと，自分から課題に取り組んでいく。学習内容の定着は遅いが，自分なりに操作の意味を理解していく。	数唱：４－②　数字：４－② まとまりで数える：３－② 数の合成：４－③ 金銭処理：１－③	「全部で○個」などの生活上のものの数に気付いて表現したり日付けや順番などを活用したりして，具体的な数を意識して活動する。
E児	活動への興味・関心は高く，自分なりの見通しをもって課題に取り組んでいく。操作の意味をとらえ，正誤を自分なりに確認しながら活動していく。	数唱：５－③　数字：５－③ まとまりで数える：３－② 数の合成：５－②数の分解：５－① 金銭処理：２－②	友達の人数に応じて，配るものの数を数えて過不足を判断するなど，生活をより良くしていくために数を利用していく。
F児	活動への興味・関心は高く，解決の見通しをもって課題に取り組んでいく。操作の意味をとらえ，正誤を確認し自己評価・自己修正をしながら活動してく。	数唱：５－③　数字：５－③ まとまりで数える：５－③ 乗法：５－②　除法：４－② 金銭処理：４－①	週の日程や時刻を判断して自分の生活を規則的に過ごすなど，生活上の数をとらえて有効に利用しながら生活していく。

また，これらの実態に加えて次のような子供たちの保護者のニーズがあり，個別の指導計画ではそれらを考慮して個人目標・指導目標を設定している。

	B　　児	E　　児	F　　児
保護者のニーズ（アンケートより抜粋）	・２０程度の数の理解なので，今後もっと広げていってほしい。 ・近くの店で，簡単な買い物を自分でできるようになってほしい。	・もっと計算力をつけて引算ができるようになってほしい。 ・金銭のつり銭がわかるようになってほしい。	・足算や引算ができるので掛算・割算もできるようになってほしい。 ・過不足のある金銭の処理を理解できるようになってほしい。
個人目標（一部抜粋）	○ 見通しをもって物事にかかわる。 ○ 正確に意思を伝達する能力や，簡単な金銭処理の力を身に付ける。	○ 成功体験を増やし，自信をもって落ち着いて行動する。 ○ 要点を考えて表現する力や簡単な計算・金銭処理の力を身に付ける。	○ 成功体験を増やし自信をもって行動する。 ○ 基礎的なことばや数の力を日常生活の中で利用する。
指導目標（算数科）	○ 身近な３０までの数を数えたり簡単な足算・引算をしたりする。 ○ 金種の違いがわかり簡単な買い物をする。	○ 身近な 100 までの数を数えたり足算・引算をしたりする。 ○ 等価関係を理解して，100 円程度の金銭処理をする。	○ 100 以上の数を数えたり乗法や除法の計算を利用したりする。 ○ 等価関係を理解して，1000 円程度の金銭処理をする。

② 生活上の数量へのかかわりついて

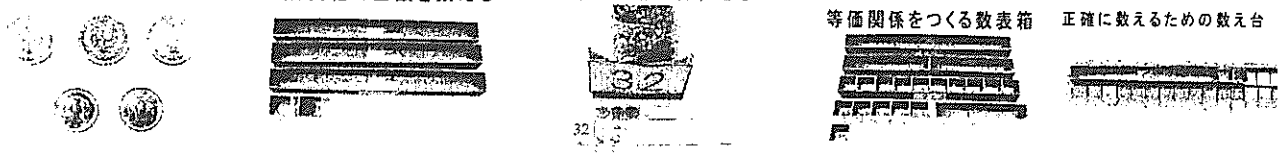
本題材は，「かいものをしよう」の活動を通して個に応じた数範囲や数え方で５０円までの金額を数えたり（A児・B児・C児），１００円までの金額を取り出したり（D児・E児），１０００円までの金額の計算をしたり（F児）する活動に繰り返し取り組み，金銭の概念を身に付けていくものである。つまり，買い物に必要な品物の代金を個に応じた数え方で数えて準備していき，豆まき会のおやつを買いに行くという生活目的を達成する過程で，生活体験を通した合目的的な操作活動に取り組み金銭処理の力を高めていくものである。ふじ・さくら・梅組の友達のおやつの買い物のため，代金を準備するという生活目的達成の過程が学習活動そのものであり，様々な金額の大勢の友達のおやつの準備の過程に「繰り返しお金を数える」という金銭処理の定着をねらった操作を取り入れることで，個に応じて金銭という数量にかかわらせ，生活を広げていくことができると考える。

③　個別の学習内容と数操作について

このような実態にある子供たちを本題材に取り組ませるにあたって，次のような学習内容と操作活動を設定した。

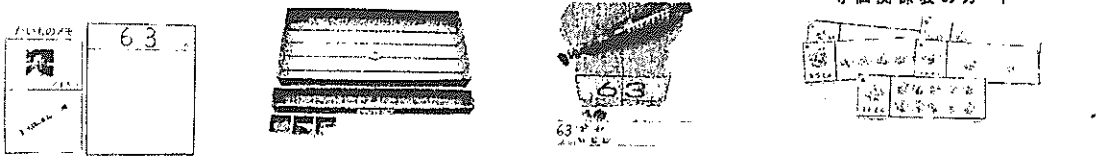
B児　５０円までの金額を数えて品物の値段の数字と対応付ける。

1．金銭を取り出す　2．数表箱で金額を数える　3．品物の値段と合わせる　等価関係をつくる数表箱　正確に数えるための数え台



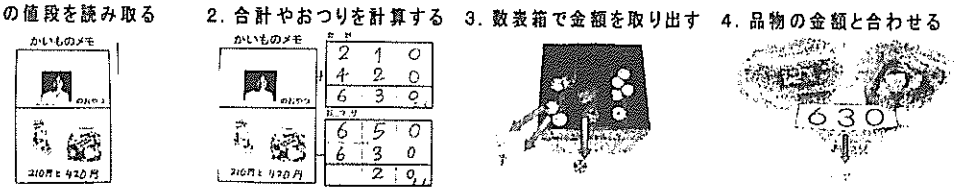
E児　品物の値段を読み取り，１００円までの金額を数えて取り出す。

1．金額を読み取る　2．数表箱で金額を取り出す　3．品物の値段と合わせる　等価関係表のカード



F児　複数の品物の合計金額やおつりを計算して，１０００円までの金額を取り出す。

1．品物の値段を読み取る　2．合計やおつりを計算する　3．数表箱で金額を取り出す　4．品物の金額と合わせる



(3) 目　標

1．「かいものをしよう」の活動に目的をもって取り組み，金銭を数えたことを生活（おやつの買い物）に生かすことができる。

2．「かいものをしよう」の活動を通して，金額を数えて数字で表したり（A・B・C児），金額を数字から数えて取り出したり（D・E児），簡単な金銭の計算をしたり（F児）することができる。

(4) 計　画（８時間）

段階	活　動　と　内　容	手　だ　て	配時
であう	1．豆まき会のおやつの買い物と，買い物の準備の仕方について話し合う。 ○　活動への目的意識・興味・関心・見通しをもつこと ○　自己の課題を明確にすること	・　計画表の提示 ・　数対象（硬貨各種）と買い物するお菓子の提示 ・　個に応じた教材・教具・手順表の提示	1
つくる	2．豆まき会に必要なおやつの品物の代金を数えて，買い物の準備をする。 (1)　ふじ組の友達のおやつの買い物の準備をする。 ○　小さい数の数範囲で数えること (2)　さくら組の友達のおやつの買い物の準備をする。 ○　大きい数の数範囲で数えること (3)　梅組の友達のおやつの買い物の準備をする。 ○　全ての数の数範囲で数えること	・　買い物の準備の場の設定 ・　個に応じた教材・教具の準備 ・　手順表やモデル演示の提示 ・　個に応じた声かけ・補助	5 ② ② ①
いかす	3．数えたお金でおやつの買い物をする。 ○　準備した金銭での品物購入を体験すること ○　数えたことが生活に役立つことを感じること	・　お店での実際の買い物の場の設定 ・　店内での活動補助	2

(5) 指導の実際

① であう段階（１／８時間）…豆まき会のおやつの買い物と準備の仕方について話し合う。

支　援	子　供　の　活　動　の　姿
○　計画表の提示 ○　数対象（硬貨各種）とおやつの見本の提示 ○　個に応じた教材・教具の準備 ○　手順表やモデル演示の提示	豆まき会のおやつについて計画表を提示して話し合ったところ，子供たちは口々に「お店に買いに行く。」と発言した。さらに，値段表示のあるお菓子といろいろな硬貨を提示すると，「ガムは 65 円だ。10 円がいるっちゃない？」という発言があり，お菓子の見本を手に取り「○○君にはこれを買ってあげよう。」と嬉しそうに話し合っていた。また，準備の仕方についてＥ児は，「ふじ組とさくら組のみんなのを頑張って用意しないと，梅組の分が間に合わなくなるよ。」と発言した。 【写真①　買い物するおやつを選ぶ姿】

考察①

数対象や買い物の対象と出会った子供たちの発言からは，買い物や金額に応じた金銭の準備の必要性や友達に買ってあげるという目的意識を感じていることがうかがわれる。これらのことから，豆まき会のおやつ準備という生活事象に出会わせ，計画表を通して活動全体に見通しをもたせたり硬貨やお菓子の具体物を提示したりしたことは，子供たちに生活の中の金銭という数量的課題に気付かせ，順番にお金を用意していこうという次の操作活動への意欲をもたせる上で効果的であったと考える。

② つくる段階（２～６／８時間）…個に応じた数え方で金銭を数えて買い物の準備をする。

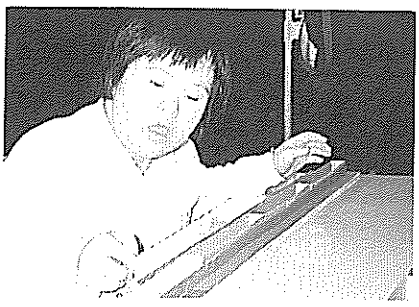
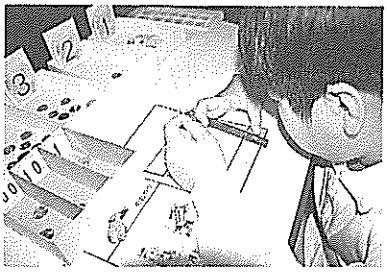
ア．個に応じた数え方で金銭を数えてふじ組のおやつの買い物の準備をする。（小さい数）

子　供　の　活　動　の　姿		
Ｂ児の活動の姿	Ｅ児の活動の姿	Ｆ児の活動の姿
Ｂ１　21円（10円2枚と1円1枚） 10 円２枚と１円１枚を見て，10 円１枚用の数表箱を２箱と１円の数表箱１箱を取り出す。10 円２枚を 10 円の２箱に，１円１枚を１円の箱に入れて数え台にセットする。10 円２箱を手で押さえながら「20,21。」と数える。数字をめくってみて 21 であることを確認し，「やった！21。」と嬉しそうにつぶやく。	Ｅ１　32円（1円32枚） 32 円の値段を読み，箱の中を見て「32 円か。10 円がないよ。」とつぶやく。10 円＝１円 10 枚の等価関係表を見て「1 円が 10 枚で 10 円だから…」と言って１円を 10 枚ずつ数えて 10 円の数表箱に３箱入れていく。次に１円の数表箱に２箱分入れて「できた。」と言って嬉しそうにお店に持っていく。	Ｆ１　105円と85円 買い物メモの計算欄に「105 ＋ 85 ＝ 190」と筆算で計算式を記入する。お金の箱から 100 円１枚と 10 円８枚まで取り出し「180 円しかない。」と教師を呼ぶ。教師が数表箱に入れることを指示し，「隣の位から借りてみよう。」と促すと 100 円を取り出し 200 円にしておつりを計算する。

考察②－ア

Ｂ児は 10 円と１円の金種を区別して 10 円を 10 のまとまりとして数えながら，数え台の補助を使って正誤を確かめていた。Ｅ児は１円で 10 円をつくるということに等価関係表を使って気付くことができた。Ｆ児は合計を計算で求めることができたがぴったり支払えないことでつまずき，教師の促しで数表箱を使って多めに支払うことを理解し始めた。これらの姿から，数え台や等価関係表，数表箱といった教具は，子供たちの自発的な数操作を促す上で効果的であったと考える。

イ．個に応じた数え方でさくら組のおやつの買い物の準備をする。（大きい数）

子供の活動の姿		
B児の活動の姿	E児の活動の姿	F児の活動の姿
B１　32円(1円32枚) 1円32枚を見て，1円10枚用の10円の数表箱を1つ取り出し，1つずつ1円を入れながら「1･2･3･4･5･6･7･8･9･10」と数唱していく。同じように1円10枚を数えて10円の数表箱に入れていき，3箱つくる。次に残りの2円を1円の数表箱2つに入れ，数え台にセットして，「10･20･30,31,32。」と数えて32の数字カードをめくって確かめる。お金をお店に持っていき「30円」と教師に答えるが，30円の品物がないのでもう一度数え直し，「10･20･30,31,32。32円。」と言い32円のチョコをもらう。	**E１　50円（10円5枚）** 50円の値段を読み，「50円のチョコ。○○君。」とつぶやく。お金の箱から直接10円を5枚取り出していき「10･20･30･40･50,50円。○○君にチョコレート！わくわく！」と言ってお店に10円5枚を持っていく。「これが50円。10円が5個。」と言ってチョコレートをもらう。	**F１　292円と368円** 買い物メモの計算欄に「292＋368＝660」と筆算で計算式を記入する。お金の箱から100円を6枚10円を5枚取り出す。「足りない。そういうときはおつり。」と言いながら数表箱に位ごとにお金を入れて，100円を1枚取り出し700円にする。おつりの計算欄に「700－660＝40」と計算式を記入し，700円をお店に持っていく。料金箱のおつりの中から40円を取り出し「やった。成功だ。」とつぶやく。
B２　32円(10円3枚と1円2枚) 10円3枚と1円2枚を見て，10円1枚用の10円の数表箱を取り出して，1箱に10円1枚ずつをいれていき計3箱つくる。残り2円を1円の数表箱2つに入れて，10円3箱と1円2箱を数え台にセットする。32の数字カードをめくって確認し，「10･20･30,31,32。」と数える。お店に持っていき，教師に「10･20･30,32。32円。」と言い，32円のキャンディをもらう。	**E２　50円（50円1枚）** 「また，50円だ。」とお金の箱から10円を4枚取り出していき「足りないよ。がーん。」とつぶやく。教師が50円＝10円5枚の等価関係表と50円の数表箱を使うことを促すと，50円の数表箱に50円1枚を入れて「あ，これで50円ね，じゃあ10円たちはいらないんだ。これだけ1つ。50円てたった1つ。50円が自分で50をつくったんだね。」とつぶやく。	**F２　210円と420円** 買い物メモの計算欄に「210＋420＝630」と筆算で計算式を記入して，500円1枚と100円2枚で700円を取り出す。お店にお金を持っていくが，おつりが20円しかないのでもう一度数表箱に戻す。教師が「他に借りるものはないかな。」と言うと，「50円だ。」と言って50円1枚を取り出し「650－630＝20」と書き直し，おつり20円をもらってお菓子を買う。
 【写真②　数え台で数えるB児】	 【写真③　10円4枚で悩むE児】 **E３　50円（50円1枚）** 50円の値段を読んで「お，50円！」と言いながら直接お金の箱から50円1枚を取り出し，「これでもう50円だから，ほかはいりません！」とつぶやき50円1枚をお店に持っていく。	 【写真④　数表箱で取り出すF児】

考察②－イ

B児は32円を1円や10円を使って正しく数えることができ，後半では数表箱から出して10円玉3枚を10ずつ数えていくことができた。E児は50円の取り出しにおいて，10円では定着していたものの50円玉の価値に気付けなかったのが，数表箱を使って50円の等価関係を理解できるようになっていった。F児は10円が不足しているときの支払い方で，前時学習した100円を使って多めに支払うことに加え，50円玉を使うことに気付いていった。これらの姿から，同じ金額の品物の設定や金銭を数量に置き換える数表箱などの教具は，金銭の等価関係に気付かせたり（B・E児）合理的な金銭処理を促したり（F児）することに効果的であったと考える。

③　**いかす段階**（7～8／8時間）…準備した金銭を使って実際におやつの買い物をする。

子供の活動の姿		
B児の活動の姿	E児の活動の姿	F児の活動の姿
B１　32円のクッキーの購入 10円3枚と1円2枚をカウンターに並べ，10円を1枚ずつ集めながら「10･20･30，31，32。」と数えて店員さんに支払う。「ちょうどですね。」と言われてクッキーをもらい，小声で「やったー。」とガッツポーズをつくって喜ぶ。	**E１　50円のチョコの購入** 財布からお金を出して10円玉を「10･20･30･40 …」と数えていき，「あら，足りない。」とつぶやく。50円玉を見つけて「あら，あった。」と50円玉1枚を店員さんに支払う。「ちょうどですね。」と店員さんに言われてチョコをもらい微笑む。	**F１　合計630円のクッキーとこんぺいとうの購入** 店員さんに「合計630円ですね。」と言われて財布の中を探す。500円と100円を取り出し10円を探すが見つからず「あ，そうだ！50円だ。」とつぶやいて50円玉を取り出して650円を支払う。 **F２　合計315円のガムとキャンディーの購入** 合計315円を聞いて，「300 … 15円？」とつぶやきながら財布から320円を取り出して支払い，おつりをもらう。
 【写真⑤　買い物をして喜ぶB児】	 【写真⑥　お店でお金を数えるE児】	

考察③

学校の近くの商店街に豆まき会のおやつを実際に買いに出かけたところ，子供たちはこれまでの学習を生かしてお菓子を購入し，「ちょうどですね。」という店員さんの言葉に喜び自信をもった。B児は10円3枚を1円と分けて10ずつ数えながら32円を正確に数え，E児は50円玉1枚で50円を支払うことができた。F児においては，50円玉で多めに支払うだけでなく10円を使って合理的に支払う姿も見られた。これらの姿から，生活目的を達成していく過程に操作活動を位置付けた一連の活動は，子供たちに生活場面に応用できる確かな数を身に付ける上で効果的であったと考える。

６．全体考察

豆まき会のおやつの買い物という生活事象を取り上げ，準備の過程に金銭処理の数操作を位置付けたことで，生活の一場面を通して金銭という数量にかかわり，生活を広げていく姿が得られた。今後は，さらに個別の学習課題に適当な生活事象の教材化を行いながら，学習したことを他の生活場面にも生かしていけるように，家庭と連携した実践活動の場を設けていきたい。

～以前は買い物に行こうと誘っても「僕はお留守番する。」と言ってたのに，この頃は喜んでついてくるようになりました。自分で財布から考えてお金を出しておつりをもらえるようになり嬉しいです。

【資料１　F児の保護者の連絡帳から】

資料１　算数科学習指導内容表（①教師と一緒に・②部分的に補助されて・③一人でに細分化する）

領域＼段階		1	2	3	4	5
A 数の基礎概念	ア 認識	ものに注意を向ける。	ものの「ある」「なし」がわかる。	目の前に提示されたものを目で追う。	目の前で隠されたものを探す。	ものの名前を聞いてそのものを指さす。
	イ 分類	全く同じものどうしを分ける。	同じ色のものを分ける。	同じ形のものを分ける。	同じ大きさのものを分ける	用途や種類の同じものを分ける。
	ウ 1対1対応	同じものどうしを対応させる。	関係のあるものどうしを対応させる。	異なるものどうしを対応させる。	1対1対応させて過が分かる。	1対1対応させて不足が分かる。
B 数と計算	ア 数唱	1～3の数詞を唱える。	1～5の数詞を唱える。	1～10の数詞を唱える。	1～50の数詞を唱える。	1～100の数詞を唱える。
	イ 数字	1～3の数字を読み書きする。	1～5の数字を読み書きする。	1～10の数字を読み書きする。	1～50の数字を読み書きする。	1～100の数字を読み書きする。
	ウ 1つずつ数える	1～3の個数を数える。	1～5の個数を数える。	1～10の個数を数える。	1～50の個数を数える。	1～100の個数を数える。
	エ 直観的に数える	1を見取って数える。	2までの数を見取って数える。	3までの数を見取って数える。	4までの数を見取って数える。	5までの数を見取って数える。
	オ まとまりで数える	3といくつで4・5を数える。	5といくつで6～10を数える。	10ずつまとめて数える。	20ずつ・50ずつまとめて数える。	100ずつまとめて数える。
	カ 順序数	3までの数で順序が分かる。	5までの数で順序が分かる。	10までの数で順序が分かる。	50までの数で順序が分かる。	100までの数で順序が分かる。
	キ 大小比較	1～3の数の大小関係が分かる。	1～5の数の大小関係が分かる。	1～10の数の大小関係が分かる。	1～50の数の大小関係が分かる。	1～100の数の大小関係が分かる。
	ク 数の合成	1～3の具体物を合わせる。	1～3の数字を合わせる。	1～5の具体物を合わせる。	1～5の数字を合わせる。	1～10の具体物や数字を合わせる。
	ケ 数の分解	1～3の具体物を分ける。	1～3の数字を分ける。	1～5の具体物を分ける。	1～5の数字を分ける。	1～10の具体物や数字を分ける。
	コ 加法	操作を通して「たす」の意味が分かる。	繰り上がりのない1桁のたし算をする。	繰り上がりのない2桁の筆算をする。	繰り上がりのある筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
	サ 減法	操作を通して「ひく」の意味が分かる。	繰り下がりのない1桁のひき算をする。	繰り下がりのない2桁の筆算をする。	繰り下がりのある筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
	シ 乗法	2ずつ，5ずつまとめて数える。	「○のいくつ分，「何倍」が分かる。	かけ算の意味が分かり立式する。	九九を覚えて計算する。	九九の筆算をする。
	ス 除法	ある数量を同じ数ずつ分ける。	わり算の意味が分かり立式する。	2桁程度のわり算の計算をする。	わり算の筆算をする。	桁数の多い筆算に習熟する。
C 量の測定	ア 長さ	並べたり重ねたりして長さを比べる。	「長い」「短い」の意味が分かる。	媒介物を用いて長さを比べる。	任意の単位で「いくつ分」か調べる。	cm，mなどの客観単位が分かる。
	イ 重さ	手に持って重さを比べる。	「重い」「軽い」の意味が分かる。	天秤ばかりを使って重さを比べる。	計りを使って重さを比べる。	g，kgなどの客観単位が分かる。
	ウ かさ	同じ容器の2つの量のかさを比べる。	「多い」「少ない」の意味が分かる。	異なる容器の2つの量のかさを比べる。	計量器を使ってかさを比べる。	Œ，□などの客観単位が分かる。
	エ 広さ	重ねて広さを比べる。	「広い」「狭い」の意味が分かる。	媒介物を用いて広さを比べる。	かけ算で面積を計算して広さを比べる。	‡，㎡などの客観単位が分かる。
	オ 時刻・時間	朝・昼・晩の違いが分かる。	時計の数字や針の長さが分かる。	「○時」の時刻がよめる。	「○分」の時刻がよめる。	「○時間」「○分間」の時間がわかる。
	カ 暦	「今日」「明日」「昨日」の区別ができる。	日付や曜日が分かる。	七曜表の意味が分かる。	日数を数えて何日間か分かる。	簡単な日数計算ができる。
D 図形	ア 形	丸，三角，四角の名称が分かる。	丸，三角，四角の仲間集めをする。	ましかく・ながしかくの違いが分かる。	「へり」や「かど」の数の違いが分かる。	形を構成したり描いたりする。
	イ 方向	上・下が分かる。	中・外が分かる。	前・後ろが分かる。	右・左が分かる。	順序数を組み合わせた方向が分かる。
E 数量関係実務	ア 表とグラフ	○・×の簡単な記号の意味が分かる。	ゲームなどの結果を記号に置き換えて表に表す。	表を見て「○より多い，少ない」が分かる。	表から棒グラフなどのグラフを作る。	グラフを見て「○より多い，少ない」が分かる。
	イ 金銭処理	金種の違いが分かり買い物に必要なことが分かる。	10円までの等価関係が分かり少額の金額を数える。	100円までの等価関係が分かり金額を取り出す。	1000円までの等価関係が分かり金額を取り出す。	料金の計算をして過不足をとらえる。

資料２　算数科学習における個別の指導計画例

個人目標・算数科の指導目標（年間目標のみ記載）・各月の重点化した学習内容（資料１：算数科学習指導内容表参照・斜体は除く）・各月の題材計画と時数を具備した個別の指導計画例として，次のようなものがあげられる。（例：５・６学年梅組）

	B　児	E　児	F　児
個人目標	○ 簡単な洗濯，掃除など日常生活に必要な技能を身に付ける。 ○ 自分のしたいことに意欲的に取り組む。 ○ 見通しをもって物事にかかわる。 ○ 正確に意思を伝達する能力や，簡単な金銭処理の力を身に付ける。	○ 排泄や衣服の着脱などの身辺処理の能力を身に付ける。 ○ 成功体験を増やし，自信をもって落ち着いて行動する。 ○ 積極的に物事にかかわる。 ○ 要点を考えて表現する力や簡単な計算・金銭処理の力を身に付ける。	○ 電話や交通機関の利用を自分一人で行う。 ○ 成功体験を増やし自信をもって行動する。 ○ 積極的に物事にかかわる。 ○ 基礎的なことばや数の力を日常生活の中で利用する。
算数科学習指導目標	○ 身近な３０までの数を数えたり，簡単な足算・引算をしたりする。 ○ 金種の違いがわかり簡単な買い物をする。	○ 身近な 100 までの数を数えたり足算・引算をしたりする。 ○ 等価関係を理解して，100 円程度の金銭処理をする。	○ 生活上で 100 以上の数を数えたり乗法や除法の計算を利用したりする。 ○ 等価関係を理解して，1000 円程度の金銭処理をする。

年間指導題材と指導時数			算数科学習指導内容表における指導内容		
4月	「おもちゃはいくつ」	④	B－ウ－３	B－ウ－４	B－オ－３
	「すごろくあそび」	⑤	B－ア－４　B－イ－４	*B－カ－３*	*B－ク－５*
	グループ別学習	⑥	B－ウ－３　B－エ－３	B－エ－５　B－オ－２	B－コ－４
5月	「さかなつりゲーム」	④	B－カ－３	B－カ－４	*B－カ－５*
	「かたちであそぼう」	⑤	*D－ア－２*	*D－ア－３*	*D－ア－４　D－ア－５*
	グループ別学習	⑥	B－ウ－３　B－エ－３	B－エ－５　B－オ－２	B－サ－２
6月	「あわせていくつ」	⑥	B－ク－３	B－ク－４	B－コ－５
	「てれびひょうづくり」	⑥	*C－オ－３*	C－オ－４	C－オ－５
	グループ別学習	⑧	B－ウ－４　B－エ－４	C－コ－２	C－オ－４
7月	「おみせやさんごっこ」	⑥	B－オ－２	B－エ－５　B－オ－２	B－オ－３
	グループ別学習	④	B－ウ－４　B－エ－４	C－オ－３	B－サ－３
9月	「おかしパーティーをしよう」	⑦	B－オ－３	B－ク－５	B－シ－３
	「のこりはいくつ」	⑤	B－サ－１	B－サ－２	*B－サ－４　B－サ－５*
	グループ別学習	⑧	B－ク－３　B－ク－４	B－コ－１　B－コ－２	B－シ－３
10月	「ながさのくらべっこ」	⑥	*C－ア－３*	*C－ア－４*	C－ア－５
	「ころころゲーム」	⑥	B－キ－３	B－キ－４	B－キ－５
	グループ別学習	⑧	*C－ア－３*	*C－ア－４*	C－ア－５
11月	「あきのプレゼント」	⑦	B－ク－５	B－ケ－５	B－ス－３
	「たまいれゲーム」	⑤	*B－オ－３*	B－オ－３	B－オ－４
	グループ別学習	⑧	B－コ－１	C－オ－４	B－ス－３
12月	「めいろあそび」	⑦	*D－イ－１*	D－イ－３　D－イ－４	D－イ－５
	グループ別学習	⑧	*D－イ－２*	D－イ－３　D－イ－４	D－イ－５
1月	「かいものにいこう」	⑦	E－イ－３	E－イ－４	E－イ－５
	「カレンダーづくり」	④	*C－カ－３*	C－カ－４	C－カ－５
	グループ別学習	④	E－イ－３	E－イ－４	E－イ－５
2月	「おもさのくらべっこ」	⑥	*C－イ－３*	*C－イ－４*	C－イ－５
	「ボーリングゲーム」	⑤	*E－ア－３*	E－ア－４	E－ア－５
	グループ別学習	④	B－カ－４	E－ア－３	E－ア－５
3月	「ひろさのくらべっこ」	⑥	*C－エ－２*	*C－エ－３*	C－エ－４
	グループ別学習	④	B－キ－４	E－イ－４	E－イ－５

人とかかわりながらよりよい生活を創り出す生活単元学習

障害児教育研究部　谷　崎　和一郎

1．主題設定の理由

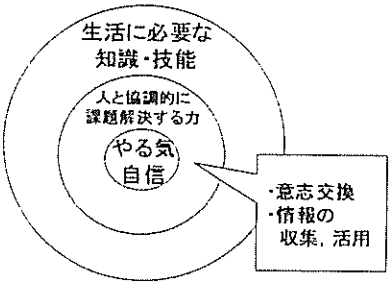
(1) 生活実態より

今ある生活環境に働きかけ，進んで生活を楽しいものにしていくことは主体的な生活の営みといえる。生活環境の中には，もの・人・ことがあり，それらとのかかわりが促進されることで，生活は更新されていく。子供たちは，身の回りの生活事象にかかわろうとする意欲をもっているが，かかわり方を十分に身につけておらず，思いや願いを生かしながら，生活をより楽しいものにしていくまでには至っていない。子供たちを取り巻く生活環境と子供たちとのかかわりを見てみると，特に自然のなかでの体験や人とかかわる体験が不足している。また，保護者のニーズにも，「困ったときに自分から人に尋ねて解決してほしい」「身近な自然や社会に進んでかかわってほしい」など，子供たちが現在の生活空間を広げて，身近な生活環境に主体的にかかわってほしいという願いが感じられる。そこで，子供たちが人や自然と触れ合いながら，自分たちにとって楽しい生活を創り出していく生活単元学習をめざしたい。

(2) 生活単元学習において培いたい力から

生活単元学習で取り組む活動とは，子供たちが共通の目的意識をもって，生活上の課題を成就するための活動を仲間と協働しながら進めていくことである。そこで，特殊教育生活単元学習においては，①目的や課題を意識し，人と協調しながら課題解決に取り組む力，②生活に必要な知識・技能，③目的や課題を達成することで感じるやる気や自信といった力を培うことを大切にしていく。特に，「人と協調しながら課題解決に取り組む力」の育成は，将来における子供たちの生活の質の向上につながっていく大切な力であると考えている。具体的には，自分にとって必要な情報を意識する力や必要な情報を収集する手段として人を求める力，その人から必要な情報を収集する力，収集した情報を活用する力，出会った人とよりよい人間関係をつくる力などを育成することが大切であると考える。

生活単元学習で培いたい力



2．主題の意味

(1) 人とかかわりながらよりよい生活を創り出すとは

自然や人とかかわりながら生活を更新していくことが十分にできていない子供たちの生活実態と人と協調しながら課題を解決する力を培うことの重要性から，子供たちが人とかかわりながら，身近な自然などの環境に主体的にかかわり，自分たちの生活を更新し，継続的によりよい生活を創り出していくことができるような学習をめざす必要があると考える。

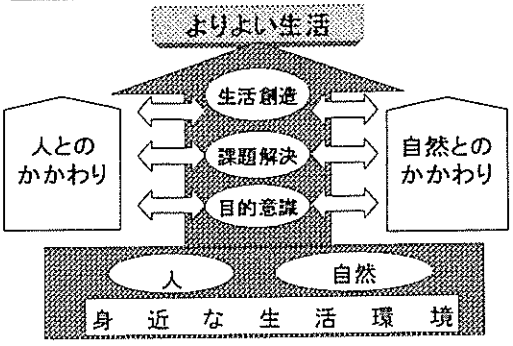
よりよい生活とは，身近な生活環境の中にある，もの・人・ことに主体的に働きかけながら，楽しく活動することである。特に，本年度は，自然や人とかかわりながら楽しく活動することに重点を置く。そのなかで，植物や動物などの自然界に生きる生き物と触れ合ったり，それらを生かした新たな活動が派生したりするなどの多様なかかわり方が生まれていき，子供たちにとって心情的，空間的に身近な生活環境が創り出されていく。子供たちは，そこで体全体を使って活動し，生命の息吹を感じて感動したり感激したりしながら生き生きと過ごしていく。

そのようなよりよい生活を実現させていくために，子供たちがかかわる生活上の領域や具体的な生活に必要な知識・技能ついては，次のように考える。

領　域	よりよい生活に必要な知識・技能
交　際	挨拶の仕方，コミュニケーションの取り方，手紙や礼状の書き方など
役　割	部分的な役割，中心的な役割，係活動，日直，当番，臨時の作業，行事など
栽　培	種や苗の植え方，世話の仕方，収穫の仕方，植物の成長に関する知識など
飼　育	動物の飼い方，世話の仕方，動物とのかかわり方，動物の成長についての知識など
調　理	調理技能，材料の選定，調理器具の使い方，安全への意識，栄養に関する知識など
製　作	道具の扱い方，道具の選び方，接着剤の使い方，ものの用途についての理解など

よりよい生活を創り出すとは，目的意識をもって子供たち一人一人が課題を解決し，子供たち自身が新たに環境を創り出していったり，その中にある人・もの・ことを生かしながら新たな活動を展開していくことである。具体的な生活課題については，目的の達成に向かって必要な活動に取り組む中で，子供たち一人一人が首尾よくできるために乗り越えなければならないこととしてとらえる。例えば，栽培の領域においては，子供たちがきれいな花を咲かせようという目的意識をもったときに，花の苗を植える位置や深さについてとらえることなどが課題となって生じ，それを解決していくことで苗の植え方にかかわる知識・技能を身につけていくことができると考える。人とかかわりながらとは，課題の解決に取り組む際に，人と助け合ったり，分からないことを尋ねたりしながら，ともに活動していくことである。本研究における人とは，子供たちにとって身近な存在である家族や友達，先生，地域の方である。課題解決の過程で人にかかわり，触れ合いながらよりよい生活をつくり出していくことがこれからの自立的な生活を考えたときに価値が高いものである。そこで，人とかかわりながら，よりよい生活を創り出すとは，身近な身の回りにいる人たちとともに目的をもって一緒に活動し，目的の達成に必要な事柄を身につけながら，生活環境を自分たちにとって楽しいものに変え，そこで楽しく過ごすことである。

人とかかわりながらよりよい生活を創り出すとは



(2) めざす子供の姿

以上のような人とかかわりながらよりよい生活を創り出す子供の姿を，次のように考える。

○　「○○を作ろう。」「○○をやってみよう」など，身近な生活環境へのかかわりを通して，目的意識をもつ姿
○　「～が分からないから○○さんにきこう。」「○○さんと一緒にやると楽しいな。」など人と協調しながら課題解決に取り組む姿
○　「できた。」「みんなとやれた。」など，新しい生活を創り出すことができたことへの満足感や充実感を活動した人とともに味わう姿

3．活動づくりの具体的な方途

(1) 児童の実態把握の進め方

人とかかわりながらよりよい生活を創り出していくために，次のような視点で一人一人の生活課題や人とのかかわり方をとらえ，一人一人に応じた適切な学習内容を設定していく。

○　日常生活や学習場面における様子を生活単元学習指導内容（資料１参照）に照らし合わせ，指導内容の習得状況を把握すること
○　日常生活や学習場面における人とのかかわり方の様子や求められる力の観点から実態をとらえること

(2) 学習内容の設定について

実態から設定された指導目標を各学期ごとに細分化して設定する。さらに，指導目標の達成のために必要な指導内容を生活単元学習指導内容表（資料１）の中から選定し，各学期の単元に含まれる指導内容と照らし合わせることで，個に応じた指導内容を設定していく。指導内容の設定については次のようなことに留意する。

○　指導内容が年間を通してスモールステップで高まっていくようにすること

○　よりよい生活を創り出していくために必要な知識・技能を含んでいること

(3) 教材化について

人とかかわりながらよりよい生活を創り出していくために，前述した６つの生活上の領域の中から，子供たちの実態や生活体験を考慮し，中心に学習させたい体験と具体的な活動内容を次のような視点をもとにして設定する。

《学習対象の設定条件について》

○　一人一人の生活課題に応じたものであり，課題を達成することで身につく知識・技能が，生活に役立つようなものを含んでいること（価値性）

○　子供たちの生活から派生した興味・関心をもとに，子供たち自身が活動を自由に考え出していく余地があるもの（自由性）

○　課題を解決する過程で人とのかかわりの広がりや高まりが期待されるもの（協働性）

(4) 活動構成について

自然や人とかかわりながらよりよい生活を創り出していく生活単元学習においては，特に自然や人との直接体験を重視し，常に実際の場で活動することができるようにする。また，必要に応じて，生活に必要な知識・技能を獲得するための模擬活動も取り入れ，実際の場での活動に生かすことができるようにする。具体的には，次のようなねらいをもった活動を構成する。

であう段階	身近な生活における対象に対して，具体的な活動や体験を通して人とかかわることで，人のよさに気づいたり，活動への目的意識や見通しをもつことをねらう活動
ふかめる段階	人とかかわりながら目的達成に必要な活動に取り組み，必要な知識・技能を身につけ，それらを活用しながら課題解決を繰り返すことをねらう活動
いかす段階	身につけた知識・技能を生かして目的を達成し，自分たちのよりよい生活を創り出すことをねらう活動

具体的には次の通りである。

	であう	ふかめる	いかす
活動と内容	１．具体的な活動や直接体験を通して，魅力あるもの・人・ことに出会う。 ○　出会ったもの・人・ことのもつよさをとらえること ○　ともに活動する人を意識すること	２．人とかかわりながら課題解決のための活動に繰り返し取り組む。 ○　目的達成に必要な活動を意識すること ○　必要な知識・技能を身につけること ○　人とのかかわりを通して，必要な情報を収集したり，活用したりすること ○　人とのかかわりを深めること	３．身につけた知識・技能を生かしてよりよい生活を創り出す。 ○　身につけた知識・技能を発揮すること ○　目的達成や課題解決の満足感・成就感を人とともに味わうこと
支援	・人とともに具体的な活動や直接体験をする場の設定 ・もの・人・ことの感動的な出会いの場の設定	・人とともに具体的な活動や直接体験をする場の設定 ・個に応じた教材・教具・声かけ・補助 ・個に応じた学習内容の位置づけ ・人との協調的な課題解決の場の設定	・学んだことを生かすことのできる直接体験の場の設定 ・人と共に目的達成の喜びを味わう場の設定
	（個に応じた手だて） ・子供たち一人一人が学習内容を習得できるように，次のような個に応じた手だてを工夫する。具体的には，活動のもとになる情報を言葉や写真などで示した手順表を提示する，使い方がとらえやすく操作しやすい補助具を提示する，などの教具の工夫と，子供たちへの賞賛・励ましなどの共感的な声かけやモデル演示，問いかけなどの個別の働きかけをする。		

4．指導の実際と考察

(1) 小単元名　第５・６学年梅組　おいもパーティーをしよう

(2) 本小単元の考え方

①　小単元について

本小単元は大単元「みんなのおいもを育てよう」のもと，子供たちが自分たちの手で苗を植え，水やりや草取りなどの世話をして育ててきたさつまいもの収穫にかかわる内容を含んでいる。さつまいもを収穫するにあたっての子供の興味・関心は高く，「おいしく食べたい。」という強い思いや願いをもっている。そのような思いや願いをもってさつまいもにかかわっていくことは，①交際や調理，役割などの生活に生きる内容を身につけることができる，②子供たち自身が楽しい活動を考え出すことができる，③子供たちがかかわる人の範囲を広げることができるなどの価値があると考える。子供たちがかかわっていく人については，具体的には当仁公民館のゆうゆうクラブの方を取り上げる。当仁公民館は本校が所属する地域であり，空間的に身近な社会教育団体である。そこで文化的な活動を行っておられる方々は，地域に住んである人であり，子供たちにとって身近な存在である。このような地域の方々とかかわりながら身近な生活の中の課題に取り組んでいくことができるようにしたい。そして，育てたさつまいもで料理を作り，学級の友達やおいも名人さんと一緒に，楽しくおいもパーティーをすることができるようにしたい。このことは，身近な生活環境に主体的にかかわり，よりよい生活を創り出していく姿であると考える。

②　調理にかかわる児童の実態について

上述した指導内容にかかわる児童の実態は次の通りである。

	学習への取り組み方	生活に生きる力
B児	活動への目的意識をもち，ある程度見通しをもって課題に取り組んでいく。既習経験を生かしながら課題解決に向けて取り組む。	包丁や皮むき器を使って野菜を切ったり，ホットプレートやフライパンを使って目玉焼きなども作っている。
E児	活動への目的意識をもち，課題についてもある程度意識する。自分なりの見通しをもって，課題解決に取り組む。	家庭での調理の経験はほとんどなく，調理器具の扱いに慣れていない。最後まで一人で作る経験がない。
F児	活動への目的意識や課題意識をもって，課題解決に取り組んでいく。手順の理解が早く，見通しをもって目的的に課題解決に取り組む。	家庭での調理経験が少なく，調理器具の扱いに慣れていない。手順通りに一人で料理を作る経験がない。

③　個の学習内容について

本単元の学習内容は次のようなことである。①さつまいもに興味・関心をもち，進んで収穫や調理，パーティーに取り組むこと，②友達やおいも名人さんとかかわりながら，さつまいもの収穫や調理，パーティーに取り組むこと，③さつまいもの調理やパーティーにかかわる知識・技能を身につけること，などである。

上述した学習内容と実態をもとに，次のような個に応じた学習内容を設定することができる。

学習内容		
B児	E児	F児
○　皮むき器や包丁などの調理器具の扱いに慣れる。 ○　友達と協力して調理や飾り付けをする。 ○　自分から進んで後片づけをする。	○　簡単な調理手順を一人で行う。 ○　おいも名人さんや友達に分からないことを尋ねる。 ○　自分の役割を意識しておいもパーティーに参加する。	○　手順表をもとに一人で調理をする。 ○　友達に教えながら調理や飾り付けをする。 ○　おいもパーティーで中心的な役割を果たす。

これらの学習内容を身につけることにより，①目的的に人にかかわるという課題解決の力，②身近な生活の中の課題に積極的に働きかけようとするやる気，③分からないときに人に尋ねるときの尋ね方や調理器具の扱い方などの生活に生きる知識・技能，などの生活力を培うことができると考える。以上のことは，子供の現在及び将来における自立的な生活を考える上でも意義深いと考える。

(3) 目　標

1. みんなでおいもパーティーをしようという目的意識をもって調理や飾り作りなどに取り組み，おいも名人さんに分からないことを尋ねたり，補助を求めたりしながらさつまいも料理を作って，パーティーをすることができた満足感や達成感を味わうことができる。
2. さつまいもの調理や飾り作り，パーティーを通して，調理や製作にかかわる知識・技能，集団内での役割，人とのかかわりなど，個に応じた課題を解決することができる。

(4) 計　画（7時間）

段階	ねらい	活　動　と　内　容	手だて	配時
であう	○ おいもをほり，おいもパーティーに対する目的意識や興味・関心見通しをもたせる。	1．おいもパーティーの計画について話し合う。 (1) おいも名人さんに教えてもらいながらいもを掘る。 ○ おいも名人さんとかかわりながら掘ること ○ おいもパーティーに対する目的意識をもつこと (2) どんなパーティーにしたいか話し合う。 ○ どんなことをしたいか決めること ○ パーティーの具体的な内容を考え，計画図に位置づけること	・ サツマイモを掘る直接体験の設定 ・ おいも名人さん（地域のお年寄り）の招聘 ・ サツマイモを使った料理の写真の提示	2 ① ① ①
ふかめる	○ おいもパーティーをするにあたっての課題を解決する。	2．おいもパーティーの準備をする。 (1) 試しに作ってみる。 ○ 個に応じた作り方で調理をすること ○ 自分の作る料理の仕方をとらえること ○ 繰り返し課題に取り組むこと ○ 安全面に気をつけて調理をすること (2) 飾りづくりをする。 ○ おいもパーティー会場のかざりを工夫すること ○ プログラムを工夫して作ること (3) 招待状を作る。 ○ 招待状を出す相手を決め，書くための手順や方法を知ること ○ 友達と協力して作ること	・ おいも名人さんの招聘 ・ 個に応じた手順表の提示 ・ いろいろな材料の提示 ・ 例文や飾り枠などの提示	3 ① ① ①
いかす	○ パーティーを開いたことへの満足感と達成感を味わわせる。	3．おいもパーティーをする。 ○ 身につけた知識・技能を生かしてさつまいもの調理をすること ・ 包丁の使い方 ・ いものすくい方 ○ おいもパーティーをしたことに達成感や満足感を味わうこと ○ お互いの活動のよさを認め合うこと	・ おいも名人さんと調理や会食をする場の設定	2

(5) 指導の実際

① であう段階 （1／7時間）・・おいも名人さんと一緒にいもほりをする。

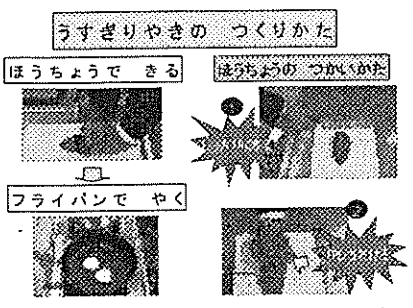
支援	子供の活動の姿
○ さつまいもを掘る直接体験の場の設定 ○ おいも名人さん（地域のお年寄り）の招聘	まず，おいも名人さんにさつまいものツルを取り除いてもらった。鎌を使って次々にツルを切っていく様子を見て子供たちは「おいも名人さんすごいね。」と驚きの声を上げた。その後，子供たちはうねの両脇をおいも名人さんに鍬で取り除いてもらい，さつまいもを見つけて夢中で掘っていった。E児は，「おいも名人さんおいもはどこにあるんですか。」など，おいも名人さんに進んで尋ねていった。その後E児は，おいも名人さんから土を掘りおこしてもらっていもを見つけ，「おいもだ。やったー。」と喜びの声をあげた。E児は，いもほりの感想で，「おいも名人さんのおかげでおいもがとれました。」などと発表し，おいも名人さんに進んで握手を求めた。そして，おいも名人さんの顔を見つめながら「いもほり楽しかったです。」と話しかけた。 【写真①名人さんと一緒にいもを見つけるE児】 【写真②名人さんにお礼を言うE児】

考察①

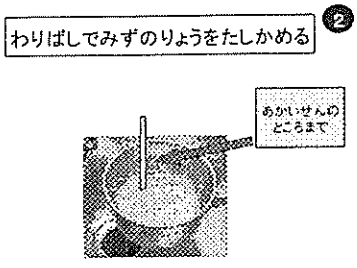
さつまいもを掘りたいという意欲をもっている子供たちに，「おいもの掘り方や料理が上手な人」ということでおいも名人さんを紹介し，一緒にいもほりをする場を設定した。子供たちはおいも名人さんがさつまいものつるを切っていく様子を見て，驚きの声を上げる姿から，おいも名人さんのすばらしさをとらえることができたと考える。また，E児のおいも名人さんに「おいもはどこにあるんですか。」と進んで尋ねる姿やいもほりの感想を発表する際に，おいも名人さんへの感謝の気持ちを伝える姿，さらに，おいも名人さんに近寄り，握手をしながら，自分の気持ちを進んで伝える姿から，おいも名人さんとかかわりながら，実際的な活動に取り組むことができたと考える。このように，おいも名人さんにかかわりながら活動する姿が見られたのは，子供たちに「おいもの掘り方を教えてほしいな」という意識をもたせて，おいものことに詳しい人ということでおいも名人さんと出会わせたことや，ともに直接体験をする場の設定をしたことが，有効であったと考える。

② ふかめる段階 （3～5／7時間）・・おいも名人さんとおいも料理をためしに作る。

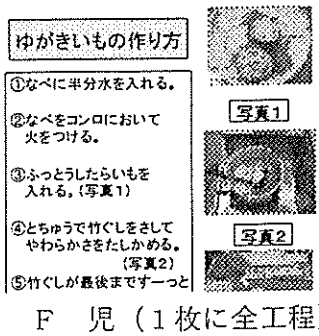
子供たちは，次のような個に応じた手順表をもとに，調理に取り組んでいった。



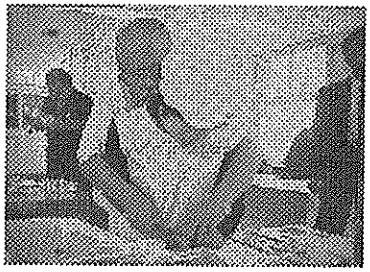
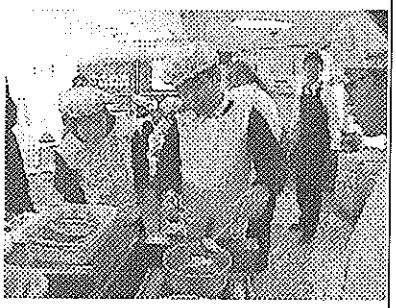
B 児（部分的な情報の提示）



E 児（1ページに1工程）



F 児（1枚に全工程）

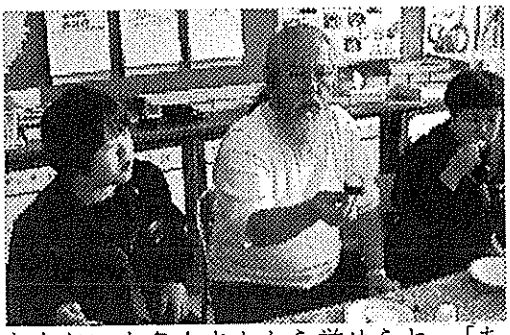
子　供　の　活　動　の　姿		
B　　児	E　　児	F　　児
薄切り焼き作り B1　5㎜間隔の切り込みが3つあるさつまいも 名人さんに右手を補助されながら一つずつ包丁で切り始める。６つ目は自分で両手で切る。７つ目，８つ目は左手で押さえてできるようになる。  【写真③名人さんの補助を受けて包丁を使うB児】 B２　５㎜間隔の切り込みが２つあるさつまいも 自分から②をとる。１～３回目までは教師に補助されてやる。しっかりと左手いぶじょうずになったね。」に対して「はい。どうもありがとう。」と答える。８回目からはきれいに切れるようになっている。切り終わってＧＴに「ほら見て。」と話しかける。ＧＴ「上手になったね。」と誉められる。うれしそうに微笑む。 【写真④自分で包丁を使うB児】	ゆがきいも作り Ｅ１　鍋に水を入れる 手順表を見て，鍋に水を入れてくる。割りばしを使って鍋に半分の水の量を確かめる。隣で活動しているＦ児に「これでいいかな。」と尋ねるが，まだ足りないことを知り，「よし，もう１回入れてこよう。」といって再度水を入れてくる。 【写真⑤割りばしで確かめるＦ児】 Ｅ２　竹ぐしで柔らかさを確かめる 竹ぐしでいもの柔らかさを確かめているＦ児の様子をじっと見る。自分も竹ぐしをとって柔らかさを確かめる。柔らかくなったことをおいも名人さんに教えてもらい，一つずつ自分でいもを取り出していく。３個めのいもを取り出すときにお玉を使っていもを竹ぐしからはずす。 【写真⑥おいも名人さんに尋ねるＥ児】	ゆがきいも作り Ｆ１　鍋に水を入れる テーブルの手順表を一通り最後まで読む。「これが半分くらいかな。」といって，鍋に水を入れる。コンロに戻って「半分はどうやったら分かるのかな」とつぶやく。教師の説明で割りばしで確かめることをとらえ，鍋の中に割りばしを入れて水の量を確かめながら水を入れていく。 Ｅ２　竹ぐしで柔らかさを確かめる 手順表を見て「途中で竹ぐしをさして」とつぶやく。「柔らかさを確かめよう。」と言ってお玉でいもをすくい，竹ぐしでさしてみる。「まだ堅いみたい。」とつぶやく。教師の「どうなったらいいのかな。」という投げかけに対して，手順表を見て「最後まですーっと通ったら出来上がり。」と答える。竹ぐしを通し，いもの裏側を見て「通ったあ。」と言う。  【写真⑦柔らかさを確かめるＦ児】

考察②

包丁を使って切ることを重点内容としていたＢ児は，おいも名人さんから補助を受けながら，目印

のついたさつまいもを切る活動を繰り返すことで，左手でいもをしっかりと押さえて切ることができるようになった。また，おいも名人さんからの包丁の使い方のアドバイスに応じて切ったり，自分が切ったさつまいもを自分から見せたりする姿が見られた。E児は，鍋に半分の水を入れるために赤いテープの印のついた割りばしを水を入れた鍋に入れ，水の量を何度も確かめるといった，手順表をもとにして繰り返し課題に取り組む姿が見られた。また，隣で調理をするF児に「火を弱くした方がいいよ。」などとアドバイスする姿も見られた。また，教師と一緒に１個目のいもの柔らかさを確かめたが，活動を繰り返すことで自分で確かめるようになり，「もういいんじゃないかな。」など自分で判断して，名人さんに確かめてもらう姿も見られた。F児は，鍋の半分やいもが柔らかくなった状態について戸惑ったが，手順表をもとに自分なりに調理を進めていくことができた。また，水の量を確かめているE児に対して「割りばしが逆さまだよ。」や「もう少し足りないみたいだね。」などとアドバイスする姿が見られた。このように繰り返し自分の課題に取り組む姿が見られたのは，個に応じた手順表の提示によって子供たちが手順に見通しをもって調理に取り組むことができたからだと考える。また，友達同士で教え合う姿が見られたことは，おいもパーティーをしようという共通の目的を意識させるための計画表や同じような調理を行う子供同士を同じテーブルにしたことで相互作用が生まれやすい状況が作られたためだと考える。さらに，おいも名人さんとかかわる姿が見られたのは，調理という直接体験をともにする場の設定を設定したことが有効であったと考える。

③　**いかす段階**（６，７／７時間）・・おいも名人さんと一緒においもパーティーをする。

支　援	子　供　の　活　動　の　姿
○　おいも名人さんの招待 ○　個に応じた役割分担	おいもパーティーでは，歌や劇，自分たちが作った料理の会食をおいも名人さん達と行った。会食の場面においては，「だれが作ったの。」「おいしいね。」などの言葉を友達どうしでかけ合いながら食べる姿が見られた。また，B児はさつまいもを薄く切ることに取り組んだことや薄く切ることができたことをおいも名人さんから誉められ，「ありがとう」とお礼を述べた。  【写真⑧おいも名人さんと喜び合う様子】

考察③

会食の場面において，友達の活動を認め合う姿は，共通の目的意識をもち，一人一人が調理についての課題を解決しながら，料理を作ることができた満足感や達成感に支えられたものであると考える。また，おいも名人さんから活動の過程や結果についての賞賛をもらい，名人さんに感謝の気持ちを伝えるB児の姿は，おいも名人さんと協調しながら課題解決に取り組んでいくことができたためだと考える。

５．全体考察

子供たちはおいも名人さんとかかわりながらさつまいもの収穫や調理に取り組み，楽しくパーティーをすることができた。このことは，身近な生活環境であるさつまいもの教材化や，友達やおいも名人さんとともに直接体験を繰り返す活動構成，個に応じた学習内容の設定と具体的な支援が有効であったと考える。

今後の課題は，相互に関連し合う６つの生活上の領域に子供たちがかかわることができる大単元構想の究明をしていくことが必要であると考える。

資料１　生活単元学習指導内容表(①教師と一緒に・②部分的に補助されて・③一人でに細分化する)

領域	段階	1	2	3	4	5
A 交際	ア 身近な人との交際	「おはよう」「さようなら」等の挨拶をする。	「ありがとう」等のお礼を言う。	「ごめんなさい」等の詫びを言う。	簡単な日常の挨拶をする。	日常の挨拶や会話をする。
	イ コミュニケーション	相手の投げかけに応える。	相手の指示に従って従って行動する。	分からないことを尋ねる。	話題をもちかけて会話をする。	一緒に行事や会で活動する。
	ウ 年賀状や手紙等	年賀状を出す。	招待状を出す。	お礼状を出す。	手紙を出す。	定期的に手紙のやりとりをする。
B 役割	ア 集団参加や集団内での役割	誕生会や遠足，運動会などに参加する。	誕生会や学級会等で，簡単な役割をする。	誕生会や学級会などで司会などの役割をする。	運動会や学芸会などで，自分の係の簡単な仕事をする。	運動会や学芸会などで，自分の係の仕事を責任をもってやり遂げる。
	イ 係活動に関すること	挨拶の号令かけなどの当番の仕事をする。	黒板ふきなどの学級の係活動をする。	教材配りや給食運びをする。	日直，給食当番，掃除当番などをする。	簡単な作業をみんなでする。
C 手伝い仕事	ア 掃除道具や運動用具の整理整頓	教室や廊下のごみを拾う。	気づいたらごみを拾ったり，捨てたりする。	決められた場所の簡単な掃除をする。	決められた場所の掃除をする。	担当場所以外の掃除を手伝う。
	イ 道具などの片付け	自分の学習用具の片付けをする。	みんなで使った学習用具の片付けをする。	遊具の後片づけをする。	仕事道具の後片づけをする。	仕事が終わったことを報告する。
	ウ 調理	調理器具を知っている。	簡単な押す調理器具を使える。	押したり引いたりする調理器具を使う。	必要な調理器具を選んで使う。	電化製品を使って調理をする。
	エ 裁縫	裁縫道具を知っている。	目印に沿っていろんなものを通す。	目印に沿って直線をぬう。	目印に沿って直線や曲線をぬう。	自分で目印を決めてぬう。
D 金銭	ア 金銭の扱い方	お金が大切なものであることが分かり，粗末に扱わない。	もらったお年玉や小遣いを大切にする。	生活にお金が必要なことを知り，無駄使いをしない。	小遣いを自分で考えて使う。	今すぐに必ずいるお金は貯金したり，預金したりする。
	イ 買い物の仕方	買うものをレジにもっていく。	買い物に必要な簡単な言葉を使う。	小額で決まった額の買い物をする。	簡単なおつりのある買い物をする。	小額をおつりのないように支払う。
	ウ 硬貨や紙幣の種類	お金にはいろいろな種類があることが分かる。	1円，5円，10 円が分かり，区別できる。	50 円，100 円，500 円が分かり，区別できる。	1円，5円，10 円の価値の大きさが分かる。	50 円 100 円 500 円の価値の大きさが分かる。
	エ 自動販売機の利用	自動販売機を利用しようとする。	お金を入れて自動販売機を利用する。	自分で選んで自動販売機を利用する。	どんな自動販売機でも利用する。	必要な特殊な自動販売機を探して利用する。
E 自然	ア 自然との触れ合い	公園，野山，川，海などで遊ぶ。	草花み，木の実拾い，落ち葉拾いなどをして遊ぶ。	草花木の実，落葉など，拾ったものを使って遊ぶ。	ありやちょうなどを探したり，見たりして遊ぶ。	身近にいる昆虫などを見たり，とったりする。
	イ 身近な植物の栽培	草花に関心をもつ。	草花の種や球根などを植えて育てる。	野菜の種や苗を植えて育てる。	草花や野菜などの世話を継続的に行う。	草花や野菜などの成長の様子を観察する。
	ウ 身近な遊びや道具の制作	シャボン玉，風車などの遊びをする。	紙飛行機，舟，こまなどを作って遊ぶ。	水鉄砲，糸電話，たこなどを作って遊ぶ。	銃や虫めがねを使って遊ぶ。	磁石や乾電池を使って遊ぶ。
F 社会の仕組み	ア 公共機関	お巡りさん，郵便屋やさんに関心をもつ。	学校や家の近くの交番や 停留所 駅のあるところが言える。	救急車や消防車の名前が言える。	救急車や消防車の仕事が言える。	警察 消防 郵便局 病院 市役所 町・村役場 などのおよその仕事の様子が話せる。
	イ 社会の行事	身近な社会の行事に関心をもち 教師と一緒に参加する。	身近な社会の行事に関心をもち，参加する。	社会の行事，祝日のおよその意味が分かり，話し合う。	テレビや新聞などを通じて 身近な社会の行事を知る。	テレビや新聞などを通じて 身近な社会の大きな出来事に関心をもつ。
G 公共の施設	ア 交通機関の利用	電車やバスの乗り降りの時は 定期券を見せる。	電車やバスの切符カードを改札で出す。	電車やバスの切符やカードを自動券売機で買う。	目的の駅や停留所で降りる。	目的の電車やバスに乗る。
	イ 電話の利用	公衆電話の扱いに慣れる。	電話の取り次ぎをする。	留守番電話に用件を伝える。	メモを取りながら電話を受ける。	電話帳で番号を調べる。
	ウ 郵便の利用	ポストに手紙を投函する。	はがきや切手の種類が分かり，利用する。	宛先や宛名などの必要事項を自分で書く。	いろいろな重さや大きさの封筒を出す。	目的に応じて郵便のサービスを利用する。
	エ 交番の利用	学校の近くの交番の場所が分かる。	学校の近くの交番で道を尋ねる。	家の近くの交番の場所が分かる。	家の近くの交番で道を尋ねる。	家や学校の近く以外の交番で道を尋ねる。
	オ 公園や遊園地の利用	学校の近くの公園に関心をもつ。	学校の近くの公園の遊具や設備を利用する。	自宅近くの公園に関心をもつ。	自宅近くの公園の遊具や設備を利用する。	遊園地でのりものに乗って遊ぶ。
H 運輸通信	ア 宅配便	宅配便を知る。	宅配便を利用しようとする。	宅配便を利用する。	宅配便のサービスに関心をもつ。	目的に応じてサービスを選ぶ。
	イ インターネット	インターネットを知る。	インターネットを利用しようとする。	インターネットから情報を収集する。	電子メールを送る。	電子メールでやりとりをする。
I 社会の変化	ア ごみの分別収集	ごみを分別する。	ごみの分別をして袋に入れる。	指定された日にごみを出す。	リサイクルに関心をもつ。	自分にできるリサイクル活動をする。
	イ ボランティア	ボランティア活動を知る。	身近な社会でのボランティア活動に友達と一緒に参加する。	身近な社会でのボランティア活動に一人で参加する。	ボランティア活動に関する情報を収集する。	国際規模のボランティア活動に参加する。

資料２　生活単元学習における個別の指導計画例

個人目標・生活単元の指導目標（年間目標のみ記載）・各月の重点化した学習内容（資料：生活単元学習指導内容表参照）・各月の単元計画を具備した個別の指導計画例として，次のようなものがあげられる（例：５・６学年梅組）

	B　児	E　児	F　児
個人目標	○ 簡単な家事・手伝いなど日常生活に必要な技能を身につける。 ○ 自分のしたいことに意欲的に取り組む。 ○ 見通しをもって物事にかかわる。 ○ 正確な意思伝達の能力や簡単な金銭処理の力を身につける。	○ 排泄や衣服の着脱などの身辺処理の能力を身につける。 ○ 成功体験を増やし自信をもって落ち着いて行動できる。 ○ 積極的に物事にかかわる。 ○ 要点を考えて表現する力や簡単な計算・金銭処理の力を身につける。	○ 電話や交通機関の利用を自分一人で行う。 ○ 成功体験を増やし自信をもって行動する。 ○ 積極的に物事にかかわる。 ○ 基礎的なことばや数の力を日常生活の中で利用する。
生活単元学習指導目標	○ 目的意識をもって粘り強く活動に取り組む。 ○ 自分の意思を伝えたり相手の投げかけに応えたりして一緒に活動し，人とかかわる。 ○ 簡単な調理器具や道具の扱い方，調理の仕方を身につける。	○ 目的意識や課題意識をもって活動に取り組む。 ○ 自分の気持ちを進んで伝えたり相手の様子に関心をもって人とかかわる。 ○ 行事や催しで人と一緒に楽しく活動したり，簡単な仕事をしたりする。	○ 課題意識や見通しをもって活動に取り組む。 ○ 自分に必要な情報を尋ねたり，自分から話題を持ちかけたりして人とかかわる。 ○ 交通機関の利用の仕方を身につける。

年間指導単元と指導時数		生活単元学習指導内容表における指導内容		
4月	「かんげいえんそくにいこう」⑥	A－イ－4	A－ア－4	B－ア－3
	「ふじみがくげいかいをしよう」⑫	B－ア－3	B－ア－3	B－ア－4
5月	「おはなさんをおおきくそだてよう」④	E－イ－4	E－イ－5	E－イ－5
	「はぜねになったせんせいがたにてがみをだそう」⑫	G－ウ－1	A－イ－3	D－イ－3
	「さつまいもをうえよう」②	E－イ－4	E－イ－5	E－イ－5
6月	「スーパーマーケットでかいものをしておこのみやきパーティーをしよう」⑫	D－イ－4 C－ウ－2	D－イ－4 A－イ－3	D－イ－3
	「バスにのってふくおかタワーにいこう」⑫	G－ア－2	G－ア－4	G－イ－3
7月	「やまがさけんがくにいこう」⑩	G－ア－2	G－ア－4	G－ア－3
	「たなばたかいをしよう」⑧	B－ア－3	F－イ－2	B－ア－3
9月	「つきみがくげいかいをしよう」⑫	B－ア－3	B－ア－3	B－ア－4
	「大好きなあの人に月見学芸会のことを伝えよう」⑫	G－ウ－3 A－イ－4	G－ウ－3	A－ウ－4 G－ウ－4
10月	「うんどうかいをがんばろう」④	B－イ－4	B－ア－1	B－イ－5
	「スケッチかいにいこう」②	G－オ－2	G－ア－5	G－ア－4
	「きょうせいせんせいとのおたのしみかいをしよう」⑨	A－イ－4	A－イ－4	D－イ－4
	「にしこうえんをたんけんしよう」⑨	E－ア－2	E－ア－2	E－ア－3
11月	「すもう大会をしよう」⑬	B－ア－1	B－ア－1	B－ア－4
	「おいもパーティーをしよう」⑦	C－ウ－3	A－イ－4	B－ア－4
12月	「もちつきかいをしよう」⑦	C－イ－4	F－イ－2	D－イ－4
	「えんこうかいにいこう」②	G－ア－2	G－ア－5	G－ア－4
	「クリスマス会をしよう」⑨	C－エ－4	A－イ－4	B－ア－4
1月	「だざいふにいこう」⑩	G－ア－2	G－ア－5	G－ア－5
	「これからもがんばろう」⑧	A－イ－4	F－イ－2	B－ア－5
2月	「冬の遊びをしよう」⑥	E－ウ－3	A－イ－5	E－ウ－3
	「がくしゅうはっぴょうかいをしよう」⑩	A－イ－4	B－ア－3	B－ア－5
3月	「おわかれえんそくにいこう」②	G－ア－2	A－イ－5	D－イ－5
	「おわかれかいをしよう」⑩	C－ウ－3	D－イ－4	D－イ－5

◇　メ　モ

お　わ　り　に

平成１０年の新学習指導要領の告示を受けて，新しい教育課程の編成とその実践が求められています。今回の改訂のポイントは，平成１４年度からの完全学校週五日制の下で，「ゆとり」ある，しかも「特色ある教育」を展開し，子供たちが自ら学び自ら考える「生きる力」を育成するということであります。そのために，授業時間の削減，教育課程の編成や運用の弾力化，総合的な学習の時間の新設などが示されました。その中でも，総合的な学習の時間の新設は，特色ある学校づくりの鍵を握っているといえます。

まさに，各学校においては，「総合」という言葉が学校教育の質的な改善のキーワードとなっているといっても過言ではありません。総合的な学習は教科学習と両輪をなし相互に補完し合ってこそ，その理念や指導の効果を発揮できるものであります。つまり，教科と総合的な学習のそれぞれの特質と共存のあり方を探ることがこれからの学校教育の大きな課題ではないでしょうか。

さて，本校では，今日の教育課題に対応すべきこれからの教育の在り方を求めて「文化を拡充し，生活を更新する近未来教育に向けて！」というメインスローガンを掲げ，「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」の研究主題のもと，教育実践をつみ重ねて参りました。特に，本年度は，総合的な学習の時間を見据えて本校独自の総合的学習「あらつ学習」の推進充実に向けて実践してきました。本校の研究は，「豊かな人間の育成」をめざすために，―知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開―という研究の視点を明確にしながら，教科学習と総合的な学習についての調和ある教育課程と子供主体の学習のよりよいあり方を希求するものです。本年度の実践を通して，子供の求めから出発し，子供にとって意味のある活動を展開するなかで，結果的に教師から見ても価値ある内容が学びとられるよう単元を構成するというわたしたちが考える学習方法原理も定着を見つつあり，成果と考えています。

また，本校では，帰国子女学級及び特殊学級を併設しています。一人一人の子供が学習や生活への適応を図ると同時に，特性としての良さを生かすべく，個に応じたカリキュラムを作成し，その実践に取り組んでいます。

最後になりましたが，本校研究の推進に際しまして，直接あるいは間接にご指導いただいた大学および先輩をはじめ，各方面の先生方に深く感謝申し上げます。さらに，これからのわたしたちの研究に厳しいご指導をたまわりますようお願いいたします。

平成１２年６月

副校長　　久門　隆

平成１２年度
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人

	＜大学教官＞		＜附小教官＞	
全　　体	奈須　正裕（国立教育研究所 教育方法研究室 室長） 寺尾　慎一	舁地　勝人	藏　源一郎（校　　長） 久門　　隆（副 校 長） 伊藤　啓二（教　　頭） 小 森　　晃（研究主任）	
国　語　科	前田　眞證 中谷　雅彦	山元　悦子	伊藤　啓二 松藤　秀子	吉田　正樹 日向ゆう子
社　会　科	小川亜弥子		猿樂　隆司 山田　耕司	髙野　誠一
算　数　科	山下　　昭 山口　武志	飯田　慎司 清水　紀宏	加藤　英也 野田　真功	小森　　晃 古野晴彦
理　　科	中村　重太 田中　浩朗	宮脇　亮介 森藤　義孝	手島　宏樹 杉原賢太郎	野口　信介 大辻　祥二
生　活　科	寺尾　慎一	寺岡　聖豪	石田　耕一	松田　伸治
音　楽　科	平井　建二 木村　次宏	岩﨑　洋一	豊村　雅義	原　　クミ
図画工作科	吉井　　宏		北田尚雄	
家　庭　科	柳　　昌子	甲斐　純子	篠原　裕子	
体　育　科	池田　　修		稲津一徳	岩城　一麿
道　　徳	林　忠幸	堺　正之	石硯　昭雄	
特別活動	高田　　清		矢野　俊次	
総合的学習	寺尾　慎一		吉田　正樹 手島　宏樹 猿樂　隆司 豊村　雅義	石田　耕一 稲津　一徳 髙野　誠一
保　　健	照屋　博行	筑紫　咏子	森田　常子	
障害児教育研究部	舁地　勝人	藤金　倫徳	舛元　俊文 早川　由洋 牛島　　玲	坂田　佳美 谷崎和一郎

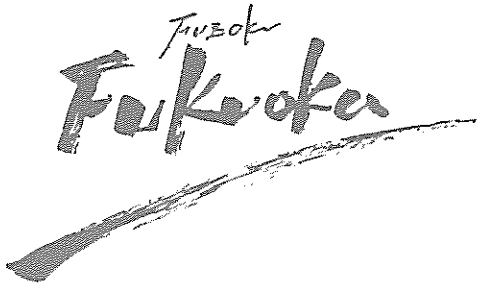
平成１１年度　附属福岡小学校転出教官

倉吉志米男（副校長・社会）	山下浩徳（教頭・理科）	津本　修一（音楽科）
樺島　　稜（図画工作科）	笠　宏照（体育科）	今村　由香（養　　護）
柿添　泰利（算数科）	舟倉れい子（図画工作科）	堤　　一浩（道　　徳）
園田　洋一（障害児教育・生活単元）	塚本　斉（算数科）	八尋　真弓（養　　護）

平成12年６月　　印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No.31

発行者　福岡教育大学教育学部
附属福岡小学校
〒810-0061　福岡市中央区西公園12番１号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所　㈱ネオ・プリンティング
TEL 092(511)8941(代)


Fukuoka